山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第183集

二本柳遺跡

一般国道52号（甲西道路）改築工事・中部横断
自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000．3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事業所
日本道路公団東京建設局

二本柳遺跡

一般国道52号（甲西道路）改築工事・中部横断
自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000. 3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事業所
日本道路公団東京建設局

二本柳遺跡上空航空写真

図版２

１号・２号木棺は、２区の最上層面で確認された戦国時代の寺院跡の寺域から発見されました。

木棺には、梵字や真言の偈文が墨で書かれ、当時の葬送の手順を書いた元興寺極楽坊所蔵の『入棺作法』と一致した内容を持つもので、全国的にも注目されています。

１号木棺出土状況

１号木棺内部状況

１号木棺蓋板

１号木棺の蓋板は、「南無大日如来」の意味を表す梵字が書かれ、北側板外面には「八葉白蓮一肘間、炳現阿字索光色、禅智倶入金剛縛、召入如来寂静智」が、南側板外面には「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」の文字の一部が読みとられます。

１号木棺側板墨書

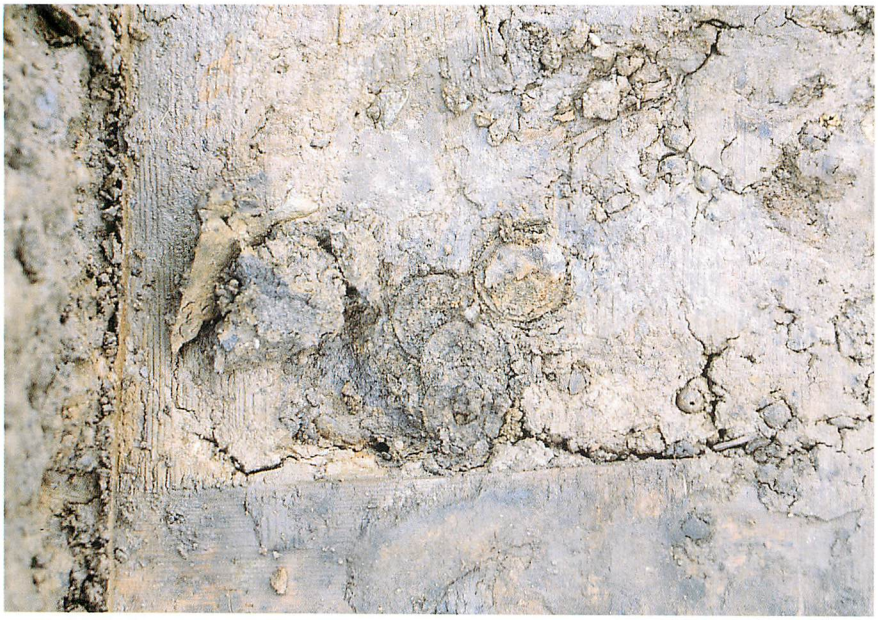
１号木棺の内部からは、灰の他に２枚の素焼きのかわらけ、数珠、六道銭が出土しました。かわらけの皿の上には稲穂が載せられ、葬送段階の儀式に伴うものと考えられます。

骨が発見されず、灰が出土していることから、火葬した骨を埋葬したと思われます。

１号木棺内遺物出土状況

１号木棺内遺物出土状況

図版 4



1 号木棺内
六道銭出土状況

2 号木棺に伴う呪符木簡出土状況

2 号木棺に伴って発見された 4 枚の木簡には、「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」の文字が読みとれます。

2 号木棺出土呪符木簡

1号井戸

2区からは、8基の井戸が発見されました。井戸の深さは、旧地表面から数十～80センチと浅く、地下水位が高かったと考えられます。

1号井戸の内部からは、兜の前立と推定される金銅製の飾り金具が出土しました。

この飾り金具は、長野県下伊那郡阿智村の長岳寺に残されている伝武田信玄所用の兜の前立てと極めて類似しています。

1号井戸内遺物出土状況

1号井戸出土兜飾り金具

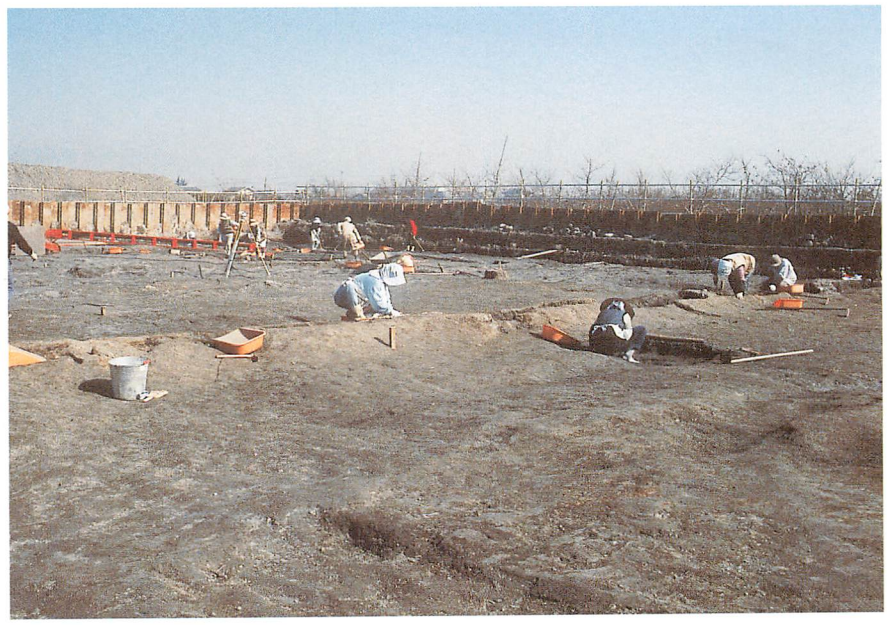
図版 6

２区の上層水田では、大きさや形が地形に応じて不整形のものが目立ちます。大畦畔は、表層条里の方向に沿ったものが多く、自然地形の複雑な扇状地の条里型土地割りの実体を示しているようです。

２Ｂ区上層水田遠景

２区上層水田遠景

2区2号溝発掘の様子



2区上層水田面発掘の様子

2区5号畦畔と6号溝

図版 8

水田面からは、裸足で人が歩いた痕跡や鋤跡がよく残されています。

２Ｂ区上層水田

２Ｂ区上層水田足跡

２Ｂ区15号・16号水口

水田近くの畦畔には、畦畔木が植えられ、その根本には馬の下顎骨が残されていました。水口祭りの痕跡と考えられます。

2区8号水口

2B区下層水田面

畦畔木列は、幹線的な機能を持つ大畦畔に見られる施設で、一定の間隔で植えられています。

樹種はヤナギ属、モモ、ウツギ属が確認されています。

2B区下層水田の杭列と畦畔木

図版10

３区上層水田は、地形に沿って多角形の水田などが発見されています。

３区上層水田

３区上層水田

３区上層水田の
調査の様子

3区上層水田3号溝

3区上層水田に残されたこれらの溝は、畦畔に沿って掘り込まれたヌルメの施設と考えられ、鋤による工具痕が明瞭に残されています。

3区上層水田5号溝鋤痕

3区上層水田5号溝

図版12

３区上層の７号水田には、格子状の作業動線を示す足跡が発見されました。

３区上層７号水田

３区上層水田の調査の様子

３区上層水田２号溝

3区下層水田畦畔木列

3区上層水田面動物骨出土状況

この斎串状木製品は、水田面に突き刺すような状態で発見され、水口祭りなどの水田祭祀に使用されたと考えられます。

3区上層水田斎串状木製品出土状況

図版14

4区上層水田

4区上層水田

4区西側土層断面

４区１号溝とした水路は、南側に堅固な大畦畔を設け、杭列で補強されていました。

４区下層水田面と１号溝

４区１号溝内動物骨出土状況

４区１号溝内動物骨出土状況

図版16

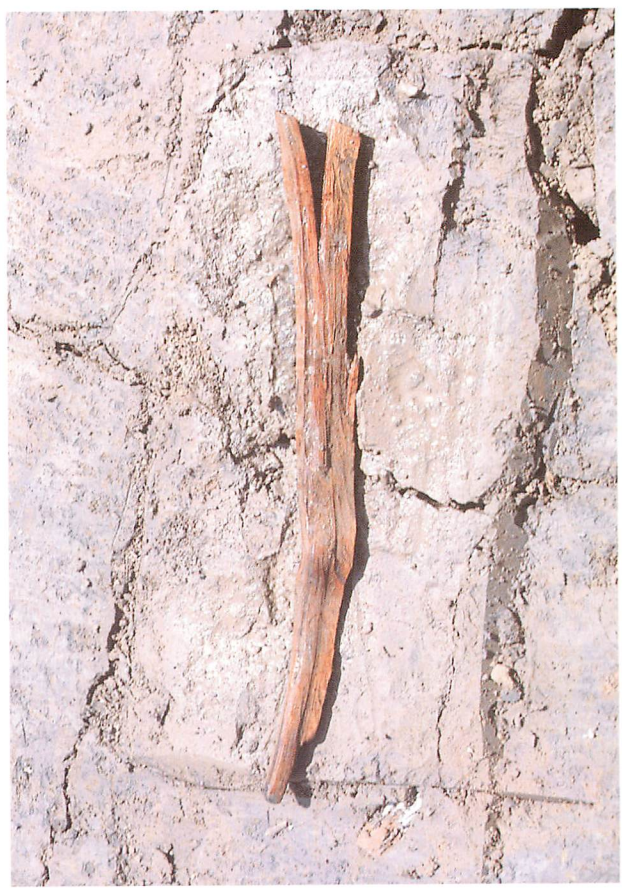
4区下層水田の調査の様子

4区下層水田
1号2号水口

4区上層水田鎌出土状況

4区下層水田
鏃形木製品出土状況

4区下層水田斎串状木製品



4区下層水田斎串状木製品

図版18

4区下層水田遠景

4区の堆積状況から弥生時代中期から現代まで4m近い土砂が堆積している様子が観察されました。

こうした堆積から、洪水などの災害に何回もみまわれた人々が自然に立ち向かいながら生活していたことがわかります。

4区下層水田の調査の様子

4区西側土層断面

序

二本柳遺跡は、甲府盆地西部の釜無川右岸に位置し、我が国屈指の規模をもつ御勅使川扇状地と、滝沢川によって形成された小扇状地の接点に立地しております。

本遺跡の発掘調査は、一般国道52号（甲西道路）改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴い、平成3年度から平成4年度の2年間にわたって実施されました。調査の結果、戦国時代の寺院関係施設や、古代末から中・近世の水田跡が発見されました。

付近は加賀美遠光の居館跡とされる法善寺が存在し、当寺院に関連の深い福寿院が16世紀段階には本遺跡まで寺域を拡大していたものと考えられます。寺域は溝によって区画され、その内部空間からは井戸跡8基、火葬骨を埋葬したと思われる木棺が2基発見されました。この木棺には、梵字や真言密教系の偈文が墨書され、『入棺作法』にもとづく埋葬例としては全国的にも極めて類例の少ない、中世の葬送様式を知る上で貴重な発見となりました。

遺跡全体にわたって検出された水田は、古代末から中世前半のものが54面、中世後半のものが44面、近世のものが9面が検出され、畦畔や水口、水路、杭列、畦畔木列などの水田施設もあわせて確認されております。また、水田面からは斎串形木製品や動物骨などが多数発見され、それぞれの時代の水田経営や祭祀の実体を解明する具体的資料が蓄積されたと考えます。

この報告書が多くの方々の研究の一助になれば幸甚であります。末筆ながら種々の御協力を賜りました関係機関各位、並びに直接に調査整理に従事していただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

例　　言

1．本書は、山梨県中巨摩郡若草町十日市場字二本柳地内に所在する二本柳（にほんやなぎ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴って、建設省から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

3．本報告書の編集・作成は、山梨県教育委員会学術文化財課　中山誠二と山梨県埋蔵文化財センター　保坂和博、大木丈夫が行った。

4．本文の執筆は中山が担当した。関連科学については、動物遺体分析を西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）に、プラント・オパール分析および火山灰分析を帝京大学山梨文化財研究所に、大型植物遺体同定分析を株式会社パレオ・ラボに、植物微化石および樹種同定分析をパリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ依頼した。各章および各節の執筆者は以下のとおりである。

第１章第１節～第３節、第２章～第３章、第４章第５節・第６節　中山誠二

第１章第５節、第４章第４節　小林健二（山梨県埋蔵文化財センター）

第４章第１節　河西　学（帝京大学山梨文化財研究所）

第２節　吉川純子（株式会社パレオ・ラボ）

第３節　パリノ・サーヴェイ株式会社

第７節　西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

第８節　外山秀一（元帝京大学山梨文化財研究所、現皇学館大学）

5．発掘調査および整理作業において次の調査・業務を下記機関に委託および依頼した。

航空写真測量……株式会社シン技術コンサル

木製品保存処理……帝京大学山梨文化財研究所、吉田生物研究所

6．遺構のトレースは中山、遺物の実測およびトレースは、小林健二、望月厚子、垣内律子が行った。

7．本報告書にかかわる出土品および記録図面、写真などは一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

8．発掘調査から報告書作成に至るまで次の諸氏、諸機関から多大なるご教示、ご協力を賜わった。記して心より感謝申し上げたい。（順不同、敬称略）

今村文匡、水野正好、笹本正治、金子裕之、西本豊弘、谷口一夫、萩原三雄、外山秀一、河西学、平野修、畑大介、鈴木稔、高橋学

若草町教育委員会、帝京大学山梨文化財研究所、コンピュータ・システム株式会社、株式会社シン技術コンサル

凡　　例

1．遺構および遺物の挿図縮尺は原則として次のとおりである。

《遺構》

◆各地区全体図　1/400　　◆井戸跡　1/40

◆水田面詳細図　1/100　　◆水田エレベーション　縦方向1/20、横方向1/200

◆セクション　1/80、1/40　◆その他の遺構　1/40

《遺物》

◆土器・陶磁器　1/3　　◆石製品　1/3、1/6

◆金属製品　1/2、2/3　　◆木製品　1/3、1/6、1/1

2．図版中のスクリーン・トーンは以下のような内容を示す。

《遺構》　谷部、セクション図水田土壌　砂目

《遺物》　陶磁器断面　ドット　、須恵器断面　黒　、木製椀断面　網目、漆部　ドット

金属器断面　黒、石製品断面　細かい網目、炭化部分　砂目

3．遺物出土状況図版の記号は以下の遺物を示す。

●：杭、■：土器・陶磁器、▲：木製品、□：石製品、★：金属製品、○：植物遺体、

☆：動物遺体

4．挿図第２図には、国土地理院発行の1/25,000甲府、小笠原、市川大門、鰍沢を使用している。

5．本報告書の土色については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖ー1990年版』を使用した。

6．表、図中および本文中使用の方位の北（N）はすべて真北を表わし、磁北はこれより６°西に傾く。

7．遺構図版中の標高は海抜高を示す。

8．水田面積の計測には、プラニメーターを使用し、３回の計測を行ってその平均地を面積とした。使用機器はタマヤPLANIX5000である。

9．表内の計測値においてカッコ内の数値は残存値を表わす。水田および畦畔にかかわる数値は、検出された数値より明らかに大きいと判断された部分については残存値+αで表わした。

本　文　目　次

巻頭図版
序文
例言
凡例
目次
第１章　遺跡の概要と調査経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
第３章　遺構と遺物 …… 13
　第１節　第１区の遺構と遺物
　　１．江戸時代の遺構と遺物 …… 13
　　２．平安時代の遺物 …… 16
　　３．古墳時代の遺構と遺物 …… 16
　第２節　第２区の遺構と遺物
　　１．戦国時代の遺構と遺物 …… 32
　　２．室町時代の遺構と遺物 …… 36
　　３．平安～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 40
　第３節　第３区の遺構と遺物
　　１．室町～戦国時代の遺構と遺物 …… 113
　　２．平安～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 115
　第４節　第４区の遺構と遺物
　　１．近世の遺構と遺物 …… 156
　　２．室町～戦国時代の遺構と遺物 …… 156
　　３．平安～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 157
　　４．古墳時代の遺物 …… 158
　　５．弥生時代の遺物 …… 159
第４章　分析・考察
　第１節　二本柳遺跡のテフラ …… 213
　第２節　山梨県二本柳遺跡の大型植物化石 …… 219
　第３節　二本柳遺跡の古環境と木製品の樹種 …… 234
　第４節　木棺・呪符木簡について …… 257
　第５節　二本柳遺跡と甲府盆地の埋没条理 …… 258
　第６節　二本柳遺跡にみる中世水田の景観 …… 273
　第７節　二本柳遺跡出土の動物遺体 …… 281
　第８節　二本柳遺跡のプラント・オパール分析 …… 288

挿　図　目　次

第１図　二本柳遺跡位置図
第２図　周辺の遺跡と二本柳遺跡
第３図　若草町内の時代別遺跡分布
第４図　１区全体図
第５図　１区遺物出土分布図
第６図　１区セクション図
第７図　１区土壌サンプリング地点セクションおよび水田面エレベーション図
第８図　１区１・２杭列
第９図　１区水田面等高線図（全体）
第10図　１区水田面詳細図（１）
第11図　１区水田面詳細図（２）
第12図　１区水田面詳細図（３）
第13図　１区水田面詳細図（４）
第14図　１区水田面詳細図（５）
第15図　１区水田面詳細図（６）
第16図　１区水田面詳細図（７）
第17図　１区出土遺物
第18図　２区寺院址関係遺構配置図
第19図　２区寺院址面等高線図（全体）
第20図　１号・５号井戸
第21図　２号・４号井戸
第22図　３号井戸
第23図　６号～８号井戸
第24図　２号溝セクション
第25図　３号・４号溝セクション図
第26図　１号・２号木棺出土
第27図　２区・２Ｂ区上層水田面等高線図（全体）
第28図　２区・２Ｂ区上層水田
第29図　２区セクション図および土壌サンプリング地点セクション図
第30図　２区セクション図
第31図　２Ｂ区セクション図
第32図　２区上層水田面エレベーション図（１）
第33図　２区・２Ｂ区上層水田面エレベーション図（２）
第34図　２区２６号畦畔馬骨出土状況
第35図　２区上層水田面詳細図（１）
第36図　２区上層水田面詳細図（２）
第37図　２区上層水田面詳細図（３）
第38図　２区上層水田面詳細図（４）
第39図　２区上層水田面詳細図（５）
第40図　２区上層水田面詳細図（６）
第41図　２区上層水田面詳細図（７）
第42図　２区上層水田面詳細図（８）
第43図　２Ｂ区上層水田面詳細図（１）
第44図　２Ｂ区上層水田面詳細図（２）
第45図　２Ｂ区上層水田面詳細図（３）
第46図　２Ｂ区上層水田面詳細図（４）
第47図　２Ｂ区上層水田面詳細図（５）
第48図　２Ｂ区上層水田面詳細図（６）
第49図　２区・２Ｂ区下層水田面等高線図（全体）
第50図　２区・２Ｂ区下層水田面
第51図　２区・２Ｂ区下層水田面エレベーション図（１）
第52図　２区・２Ｂ区下層水田面エレベーション図（２）
第53図　２区38号水田内炭化物集中地点
第54図　２区下層水田面詳細図（１）
第55図　２区下層水田面詳細図（２）
第56図　２区下層水田面詳細図（３）
第57図　２区下層水田面詳細図（４）
第58図　２区下層水田面詳細図（５）
第59図　２区下層水田面詳細図（６）
第60図　２区下層水田面詳細図（７）
第61図　２区下層水田面詳細図（８）
第62図　２Ｂ区下層水田面詳細図（１）
第63図　２Ｂ区下層水田面詳細図（２）
第64図　２Ｂ区下層水田面詳細図（３）
第65図　２Ｂ区下層水田面詳細図（４）
第66図　２Ｂ区下層水田面詳細図（５）
第67図　２Ｂ区下層水田面詳細図（６）
第68図　１号木棺（１）
第69図　１号木棺（２）
第70図　１号木棺および出土遺物（３）
第71図　２号木棺出土遺物
第72図　古銭
第73図　２号溝内出土遺物（１）
第74図　２号溝内出土遺物（２）
第75図　２号溝内出土遺物（３）
第76図　２号溝内出土遺物（４）
第77図　２号溝および井戸内出土遺物
第78図　２区井戸内出土遺物（１）
第79図　２区井戸内出土遺物（２）
第80図　２区井戸内出土遺物（３）
第81図　２区下層水田出土遺物
第82図　２区出土遺物および下層水田杭
第83図　２Ｂ区下層水田杭
第84図　２区出土遺物
第85図　３区上層水田面等高線図（全体）
第86図　３区上層水田
第87図　３区上層水田遺物分布図
第88図　３区セクション図
第89図　３区上層水田面エレベーション図（１）
第90図　３区上層水田面エレベーション図（２）
第91図　３区上層水田面詳細図（１）
第92図　３区上層水田面詳細図（２）
第93図　３区上層水田面詳細図（３）
第94図　３区上層水田面詳細図（４）
第95図　３区上層水田面詳細図（５）
第96図　３区上層水田面詳細図（６）
第97図　３区上層水田面詳細図（７）
第98図　３区上層水田面詳細図（８）
第99図　３区上層水田面詳細図（９）
第100図　３区上層水田面詳細図（10）

第101図　３区下層水田面等高線図（全体）
第102図　３区下層水田
第103図　３区下層水田面遺物分布図
第104図　３区下層水田面エレベーション図（１）
第105図　３区下層水田面エレベーション図（２）
第106図　３区下層水田面詳細図（１）
第107図　３区下層水田面詳細図（２）
第108図　３区下層水田面詳細図（３）
第109図　３区下層水田面詳細図（４）
第110図　３区下層水田面詳細図（５）
第111図　３区下層水田面詳細図（６）
第112図　３区下層水田面詳細図（７）
第113図　３区下層水田面詳細図（８）
第114図　３区下層水田面詳細図（９）
第115図　３区下層水田面詳細図（10）
第116図　３区上層水田出土遺物（１）
第117図　３区上層水田出土遺物（２）
第118図　３区上層および下層水田出土遺物
第119図　３区下層水田出土遺物（１）
第120図　３区下層水田出土遺物（２）
第121図　３区下層水田出土遺物（３）
第122図　４区上層水田等高線図（全体）
第123図　４区上層水田
第124図　４区セクション図（１）
第125図　４区セクション図（２）
第126図　４区上層水田面エレベーション図（１）
第127図　４区上層水田面エレベーション図（２）
第128図　４区上層水田面詳細図（１）
第129図　４区上層水田面詳細図（２）
第130図　４区上層水田面詳細図（３）
第131図　４区上層水田面詳細図（４）
第132図　４区上層水田面詳細図（５）
第133図　４区上層水田面詳細図（６）
第134図　４区上層水田面詳細図（７）
第135図　４区上層水田面詳細図（８）
第136図　４区下層水田面等高線図（全体）
第137図　４区下層水田面
第138図　４区下層水田面遺物分布図
第139図　４区下層水田面エレベーション図（１）
第140図　４区下層水田面エレベーション図（２）
第141図　４区下層水田面エレベーション図（３）
第142図　４区下層水田面詳細図（１）
第143図　４区下層水田面詳細図（２）
第144図　４区下層水田面詳細図（３）
第145図　４区下層水田面詳細図（４）
第146図　４区下層水田面詳細図（５）
第147図　４区下層水田面詳細図（６）
第148図　４区下層水田面詳細図（７）
第149図　４区下層水田面詳細図（８）
第150図　４区下層水田面詳細図（９）
第151図　４区下層水田面詳細図（10）
第152図　４区下層水田面詳細図（11）
第153図　４区下層水田面詳細図（12）
第154図　４区52層遺物分布図
第155図　４区上層および下層水田出土遺物
第156図　４区下層水田出土遺物
第157図　４区出土遺物
第158図　４区下部礫層内出土遺物
第159図　試料採取地点
第160図　二本柳遺跡１区Ｇ地点のテフラ
第161図　二本柳遺跡２区Ｂ地点のテフラ
第162図　甲西バイパス試掘第54トレンチのテフラ
第163図　Ａ・Ｂ・Ｃ地点の主要花粉群集
第164図　Ａ・Ｂ地点の植物珪酸体群集
第165図　２Ｂ区下層水田畦畔杭列の樹種
第166図　３区下層水田の畦畔立木の樹種
第167図　２Ｂ区上層水田畦畔立木の樹種
第168図　甲府盆地の条里の分布（１）
第169図　甲府盆地の条里の分布（２）
第170図　甲府盆地の10世紀の条里復元図
第171図　甲西バイパス沿線遺跡群の時代別深度分布
第172図　甲西バイパス沿線遺跡群
第173図　盆地西部地域の地形と条里型土地割
第174図　二本柳遺跡下層水田と周辺の微起伏
第175図　二本柳遺跡水田（１）
第176図　二本柳遺跡水田（２）
第177図　二本柳遺跡水田畦畔方位
第178図　大師東丹保遺跡の水田と方形土地割
第179図　宮ノ前遺跡の埋没条里
第180図　桜井畑遺跡の埋没条里
第181図　京戸川扇状地の埋没条里
第182図　中世絵巻に見る水田景観（１）
第183図　中世絵巻に見る水田景観（２）
第184図　中世絵巻に見る水田景観（３）
第185図　粥かき棒と牛王杖
第186図　地形分類図
第187図　遺跡周辺の微起伏
第188図　サンプリング地点と断面―１区Ｇ地点
第189図　サンプリング地点と断面―２区Ａ地点
第190図　プラント・オパール分析結果―１区Ｇ地点
第191図　プラント・オパール分析結果―２区Ａ地点

図　版　目　次

図版１　二本柳遺跡上空写真
図版２　１号木棺出土状況、１号木棺内部状況、１号木棺蓋板
図版３　１号木棺側板墨書、１号木棺内遺物出土状況、１号木棺内遺物出土状況
図版４　１号木棺内六道銭出土状況、２号木棺に伴う呪符木簡出土状況、２号木棺出土呪符木簡
図版５　１号井戸、１号井戸内遺物出土状況、１号井戸出土兜飾り金具
図版６　２Ｂ区上層水田遠景、２区上層水田遠景
図版７　２区２号溝発掘の様子、２区上層水田面発掘の様子、２区５号畦畔と６号溝
図版８　２Ｂ区上層水田、２Ｂ区上層水田足跡、２Ｂ区15号・16号水口
図版９　２区８号水口、２Ｂ区下層水田面、２Ｂ区下層水田の杭列と畦畔木
図版10　３区上層水田、３区上層水田、３区上層水田の調査の様子
図版11　３区上層水田３号溝、３区上層水田５号溝鋤痕、３区上層水田５号溝
図版12　３区上層７号水田、３区上層水田の調査の様子、３区上層水田２号溝
図版13　３区下層水田畦畔木列、３区上層水田面動物骨出土状況、３区上層水田斎串状木製品出土状況
図版14　４区上層水田、４区上層水田、４区西側土層断面
図版15　４区下層水田面と１号溝、４区１号溝内動物骨出土状況、４区１号溝内動物骨出土状況
図版16　４区下層水田の調査の様子、４区下層水田１号２号水口、４区上層水田鎌出土状況
図版17　４区下層水田鏃形木製品出土状況、４区下層水田斎串状木製品、４区下層水田斎串状木製品
図版18　４区下層水田遠景、４区下層水田の調査の様子、４区西側土層断面
図版19　二本柳遺跡の大型植物化石１
図版20　二本柳遺跡の大型植物化石２
図版21　二本柳遺跡の大型植物化石３
図版22　二本柳遺跡の大型植物化石４
図版23　二本柳遺跡の大型植物化石５
図版24　花粉化石（１）
図版25　花粉化石（２）・材の組織片
図版26　植物珪酸体
図版27　木材（１）
図版28　木材（２）
図版29　木材（３）
図版30　木材（４）
図版31　動物遺体
図版32　プラント・オパール　その他
図版33　１区全景
図版34　２Ｂ区上層水田全景、２Ｂ区下層水田全景、２区上層水田全景、２区下層水田全景
図版35　３区上層水田全景、３区下層水田全景、４区上層水田全景、４区下層水田全景
図版36　１区水田址
図版37　１区２号杭列、１区遺物出土状況
図版38　２Ｂ区１号木棺検出状況、１号木棺蓋、１号木棺内遺物出状況、２号木棺出土呪符木簡
図版39　１号井戸検出状況、２号井戸検出状況、３号井戸検出状況、５号井戸検出状況、６号井戸検出状況、７号井戸検出状況
図版40　２区２号溝検出状況（東側より）、２区２号溝検出状況（右側より）
図版41　２区２号溝Ｃ－Ｃ'セクション、２区２号溝Ｄ－Ｄ'セクション、２区２号溝五輪塔出土状況、２区２号溝遺物出土状況、２区上層木製品出土状況、２区上層漆椀出土状況
図版42　２Ｂ区水田、２Ｂ区調査風景、２Ｂ区畦畔セクション、２Ｂ区14号水口、２区８号水口・馬の下顎検出状況、２区下層水田遺物出土状況、２区北側炭化物集中区検出状況、２区下層木製品出土状況
図版43　３区上層水田、３区下層水田畦畔木列
図版44　３区２号溝、３区６号溝、３区５号溝、３区３号溝
図版45　４区上層水田、４区下層水田
図版46　４区下層26号水田、４区下層水田水口１・２、４区下層水田鏃形木製品、４区下層水田動物骨、４区作業風景、４区下層１号溝検出状況、４区下層水田火きり臼、４区下層水田漆椀
図版47　出土遺物（１）
図版48　出土遺物（２）
図版49　出土遺物（３）
図版50　出土遺物（４）
図版51　出土遺物（５）
図版52　出土遺物（６）
図版53　出土遺物（７）
図版54　出土遺物（８）
図版55　法善寺境内図、発掘調査スタッフ

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧
第２表　１区水田一覧
第３表　１区水田畦畔一覧
第４表　２区上層水田一覧
第５表　２区下層水田一覧
第６表　２区上層水田畦畔一覧
第７表　２区下層水田畦畔一覧
第８表　３区上層水田一覧
第９表　３区下層水田一覧
第10表　３区上層水田畦畔一覧
第11表　３区下層水田畦畔一覧
第12表　４区上層水田一覧
第13表　４区下層水田一覧
第14表　４区上層水田畦畔一覧
第15表　４区下層水田畦畔一覧
第16表　土器類観察表
第17表　木製品観察表
第18表　金属製品観察表
第19表　石製品観察表
第20表　出土銭観察表
第21表　二本柳遺跡試料計数火山ガラス粒数
第22表　甲西バイパス試掘第54トレンチ地点計数火山ガラス粒数
第23表　火山ガラス屈折率測定値
第24表　二本柳遺跡弥生時代中期の大型植物化石、４区52層
第25表　二本柳遺跡3区下層水田層（平安時代から鎌倉時代）の大型植物化石
第26表　２区下層水田面炭化物集中層（平安時代末）の大型植物化石
第27表　二本柳遺跡上層水田（室町～戦国時代）の大型植物化石
第28表　二本柳遺跡戦国時代井戸内大型植物化石
第29表　二本柳遺跡戦国時代２号溝、木棺ほか大型植物化石
第30表　Ａ・Ｂ・Ｃ地点の花粉分析結果
第31表　各地点のイネ属比率
第32表　Ａ・Ｂ地点の植物珪酸体分析結果
第33表　樹種同定結果
第34表　時代別・用途別樹種構成
第35表　二本柳遺跡出土動物遺体

第１章　遺跡の概要と調査経過

第１章　遺跡の概要と調査経過

第１節　調査に至る経過

一般国道52号（甲西道路）改築工事と中部横断自動車道建設工事に伴って、平成元（1989）年から平成３（1991）年にかけて中巨摩郡白根町から甲西町までの総長６㎞の試掘調査が行われ、10ケ所の遺跡が確認された。二本柳遺跡の試掘調査は平成２年（1990）年に行われ、その結果、延長300m程の地域が遺跡の範囲として認定され、本調査が行われることとなった。

二本柳遺跡の本調査は、山梨県教育委員会が建設省の委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施することとなり、平成３年9月から12月に１区・２区、平成４年４月から12月に２ｂ区・３区・４区の現地調査が行われた。

第２節　調査組織

１．調査主体

山梨県教育委員会

２．調査機関

山梨県埋蔵文化財センター

３．調査担当者　中山誠二・丸山哲也（平成３年度）

中山誠二・小林健二（平成４年度）

４．調　査　員　小林健二（平成３年度）

５．発掘調査作業員（順不同）

（平成３年度）

井上ことじ　望月和佳子　平重蔵　伊藤順子　矢崎正美　西川真人　名執秀明　依田智子　小川良子　品川桂子　嶋津志すゑ　深沢真由美　海野かね子　末木みづほ　石川いく子　深沢初美　乙黒さつき　小野節子　西川澄子　大木つや子　石原京子　土井みさほ　河野静夫　海野長雄　塚原美子　塚原亮子　原　秀禎　河野なみ江　小堀昭子　樋口美由紀　小沢みち子　河西涼子　佐久間てる　田中富子　鈴木福子　佐塚トラヨ　佐塚金作　大森喜美子　芦沢八千子　芦沢ひろ江　黒田美江子　深沢朋治郎　鮫田進　佐藤春雄　川住ふさ子　鈴木うた子　細川初三　桜田みさ江　桜田定子　桜田和子　石川武　上田重喜　野沢友彦　古屋まさ江　川崎しげみ　河野和子　河野きみ江　川込光貴　鮫田博重　小清水清隆　渡辺きよ　立川なつじ　井上文一　望月政子　渡辺貞子

（平成４年度）

斎藤利男　斎藤直江　鮫田博重　鮫田進　深沢朋治郎　秋山長平　秋山とみ　安原敏夫　芦沢ひろ江　芦沢八千子　折井きく　河野静夫　西川真人　野沢友彦　功刀四郎　石原京子　小野節子　上田重喜　内田修一　深沢貢　植田忠愛　保坂静夫　保坂よしみ　深沢はつ江　堀内婦志江　秋山悦子　秋山よし子　斎藤いつ子　深沢はる子　秋山昭二　井上正子　深沢常晴　山本文子　村松道浩　斎藤仙平　渡辺実三　五味範弥　加西武子　志村キヨ　杉田一雄　佐久間てる　中村寿人　斎藤昌雄　手塚君恵　秋山博　保坂壮彦　深沢総司　若菜永子　飯室菊美　細川初三　深沢照明　浜辺きみ子　石川茂子　大森玲子　樋口しげ子　仙洞田しづえ　望月里子　佐久間篤子　名取律子　石川洋子　松野充延　松野なを美　望月厚子　渡辺洋子　石原京子　小野節子　土屋ふじ子

（平成８年度）望月厚子、垣内律子
（平成11年度）佐野眞雪、平川涼子、石原清子

第３節　発掘区の設定と調査の方法

今回の本調査にあたっては、平成２年の試掘調査に基づいて、１区から４区の発掘区の設定を行った。調査対象面積は１区で1,400㎡、２区で2,700㎡、３区で1,700㎡、４区で2,700㎡で、各地区において２～３面の文化層の調査を行った。

この発掘区全体をカバーする形で、国家座標第Ⅷ系のX＝－43,890.00～X＝－44,220.00、Y＝－1,380.00～Y＝－1,470.00の範囲に５m四方を基本とするメッシュをかけて、Y軸の東西方向をアルファベット、X軸の南北方向をアラビア数字によって、グリッド表示した。X軸は真北を指し、本遺跡基点杭（A-1）の座標は、X＝－44,215.00、Y＝－1,395.00を示す。東西軸はこの基点より西側をB、C、D…O、東側をZ、Y、X…Vとし、南北軸は基点より北側へ向かって２、３、４…65とした。したがって、グリッドの各基点は、グリッド番号の南東杭を表わす。

発掘調査は、まず調査対象地域を各区毎に長さ７mのシートパイルを打ち込んで囲み、その内側に排水用の溝を掘り、24時間体制で排水処理を行える施設を確保した後に実施した。この時の排水溝は、調査時の断面観察用にも利用した。第２に発掘区内の表土および現耕作土を重機によって除去し、その後人力によって遺構確認を行った。

遺構番号については、現地で随時名称をつけていったが、整理・報告書作成段階で全面的に番号の変更を行った。遺構番号は各区毎に更新し、複数の文化層が存在する場合には各区の通し番号となっている。また、２区および２ｂ区は調査年度が異なるために便宜的に区名を分けたが、遺構番号は２区と２ｂ区通して付けている。

遺構の調査は、確認時の遺構が溝の様に掘込まれたものか、畦畔の様に地面に突出したものかを判断するために、各区に幅30㎝程のサブトレンチを東西南北方向に入れて、随時遺構の性格を確認しながら全体的な掘り下げを行った。

遺物は極力原位置を保つことを原則とし、コンピューター・システム「SITE」を使用して光波測量機とハンドヘルドコンピュータでその座標と標高を記録した。原位置が調査中に移動した遺物については、グリッド番号で取り上げを行っている。

第４節　層　序

本遺跡は、滝沢川が作り出した２次扇状地の埋没微高地（旧中州）上に立地しているため、その微地形の形成過程において度重なる洪水等の影響が認められる。それらは各地区においてほぼ共通して認められる洪水堆積層と、ある地点に限定して局地的に確認できる堆積層が存在する。さらに、堆積物の粒形や方向性からも起源地の異なる洪水も観察される。また、１区と２区の間には時代のことなる埋没旧河道（１６世紀以前及び近世）が存在していることも明らかになった。

したがって、全区を通した堆積層の対応関係を明らかにすることは困難であったため、各地区での層序番号とその地層観察の結果を表として各区のセクション図に付した。各地区の遺構面とされる安定した土壌層を鍵層として、その前後の堆積対応関係と地形の形成過程をある程度復元することは可能であると考える。

第５節　調査経過

平成３年度

第１次調査では、１区を平成３年８月中旬から下旬、２区を９月上旬から中旬にかけてシートパイル架設工事を行い、架設工事の終了した地点から順次発掘調査を行った。１区では、９月～10月中旬に江戸時代の水田面の調査を行い、10月下旬～11月中旬にかけて古墳時代前期の包含層と弥生時代中期の遺構面の調査を実施した。２区では、10月初旬から表土剥ぎの作業に入り、11月に最上層の寺院址関係の遺構面（16世紀）、11月下旬～12月下旬にかけて上層水田面（14～15世紀）、下層水田面（10～13世紀）の調査を行った。両地区の調査は12月27日に完了し、完了地点より順次埋め戻し作業を行った。

平成４年度

第２次調査は廃土置き場を考慮して２ｂ区、４区、３区の順に行った。平成４年４月上旬から第１次調査同様まず２ｂ区の架設工事を行い、中旬から表土剥ぎ、下旬から２区から続く寺院址関係の遺構面、５月中旬～６月下旬にかけて上層水田面、下層水田面の調査を実施した。この間４区は５月下旬に架設工事、６月上旬から表土剥ぎ、同月下旬から10月上旬にかけて上層水田面、下層水田面、さらに弥生時代中期の遺物包含層を調査し、11月上旬で完了した。３区は８月中旬に架設工事、下旬から表土剥ぎ、９月下旬から12月中旬にかけて上層水田面、下層水田面の調査を行った。各調査区の完了後に埋め戻し作業を行い、12月24日にすべての調査が完了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

二本柳遺跡は、山梨県中巨摩郡若草町十日市場字二本柳地内に所在する。

遺跡の所在する若草町は、甲府盆地の西部、甲府市の南西約12kmに位置し、御勅使川扇状地の南端部と滝沢川扇状地、釜無川の氾濫原によって形成された比較的平坦な地形を持つ。それらの扇状地の西側にある市之瀬台地は、上位から上野山面、伝嗣院面、市之瀬川面に分けられる。３面のうち上野山面は信州ロームの中期と新期ロームに相当する上野山ロームと伝嗣院ロームに、伝嗣院面は伝嗣院ロームによってそれぞれ覆われているとされる（甲府盆地第四紀研究グループ1969「甲府盆地の第四系」）。

一方、御勅使川、釜無川扇状地の地形については、高木勇夫、中山正民両氏の精力的な研究成果がある（高木・中山1983「甲府盆地西部地域の地形」、中山・高木1987「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」）。以下両氏の地形分類に基づいて遺跡周辺の地理的環境について概観したい。

御勅使川は櫛形山・大崖頭山・千頭星山などの２千メートル級の山々を源流とし、駒場付近から八田村高砂付近まで東流し、釜無川に合流する。この扇状地は釜無川河床との比高差12～14mをはかり、扇端部の一部が開析されていることから更新世に形成された旧期扇状地と考えられてきた。しかし、扇頂付近で御勅使川河床と扇状地面の高低差が少なく、その扇状地面が完新世になってもしばしば洪水を受けることから、中山・高木らはこれを新期扇状地としている。このことは甲西道路関連の一連の発掘調査においても、各時期の文化層とそれを覆う洪水堆積物が互層となって堆積する状況やカワゴ平軽石Kgの降下状況からも肯首される。

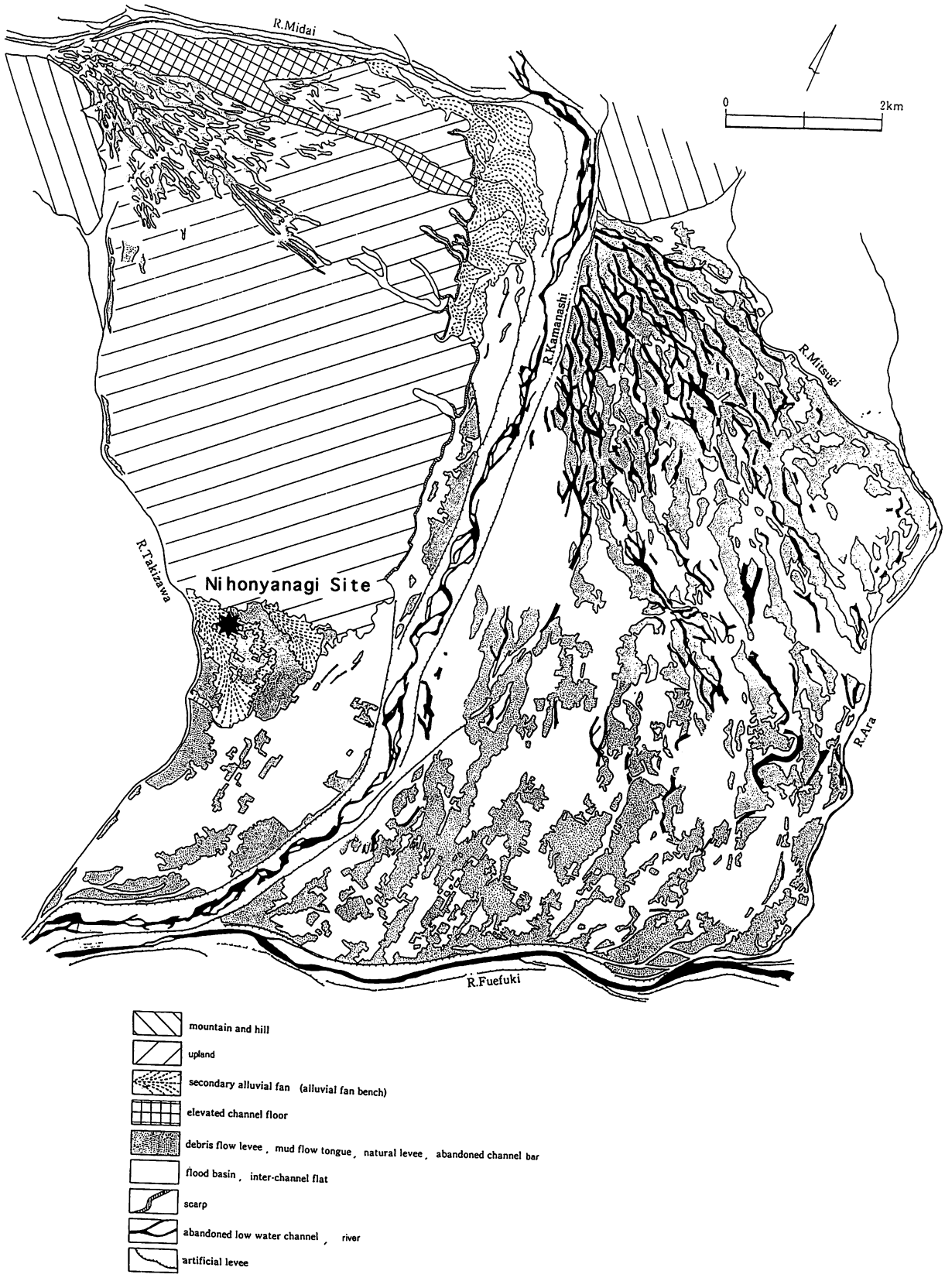
本遺跡の立地する滝沢川は、御勅使川扇状地を切って流れ、櫛形町小笠原付近を扇頂として小扇状地を形成している。交差点（intersection point）ともよばれるこの様な地点では河川の流れが岸をのり越えるのに十分な深さになると河岸に向けて突出部が分岐し、広い突出部が交差点より下流側に形成されて、小規模な扇状地を作り出す。この２次扇状地には、滝沢川に平行して土石流が堆積した微高地と埋没旧河道による微凹地が発達している。

本遺跡は、御勅使川の扇端部と滝沢川の２次扇状地が接する地点にあたり、全体的には北西から南東に向かって緩やかに傾斜する緩傾斜扇状地に存在している。遺跡周辺をさらに細かく見ると、上記の滝沢川が作り出した埋没微高地（旧中州）とその周囲の微凹地（埋没旧河道）によっていくつかの微起伏が存在している様子が観察できる。これらの微地形がどのような経過で形成されたのかは、詳細にはまだ不明な点が多いが、本遺跡に限っていえば、地表下3.5mに弥生時代中期の面が確認されており、この２千年間においても洪水による砂礫層と安定した土壌層の互層によって地域一帯が厚く覆われ、現地形が作出されていることが明らかになった。

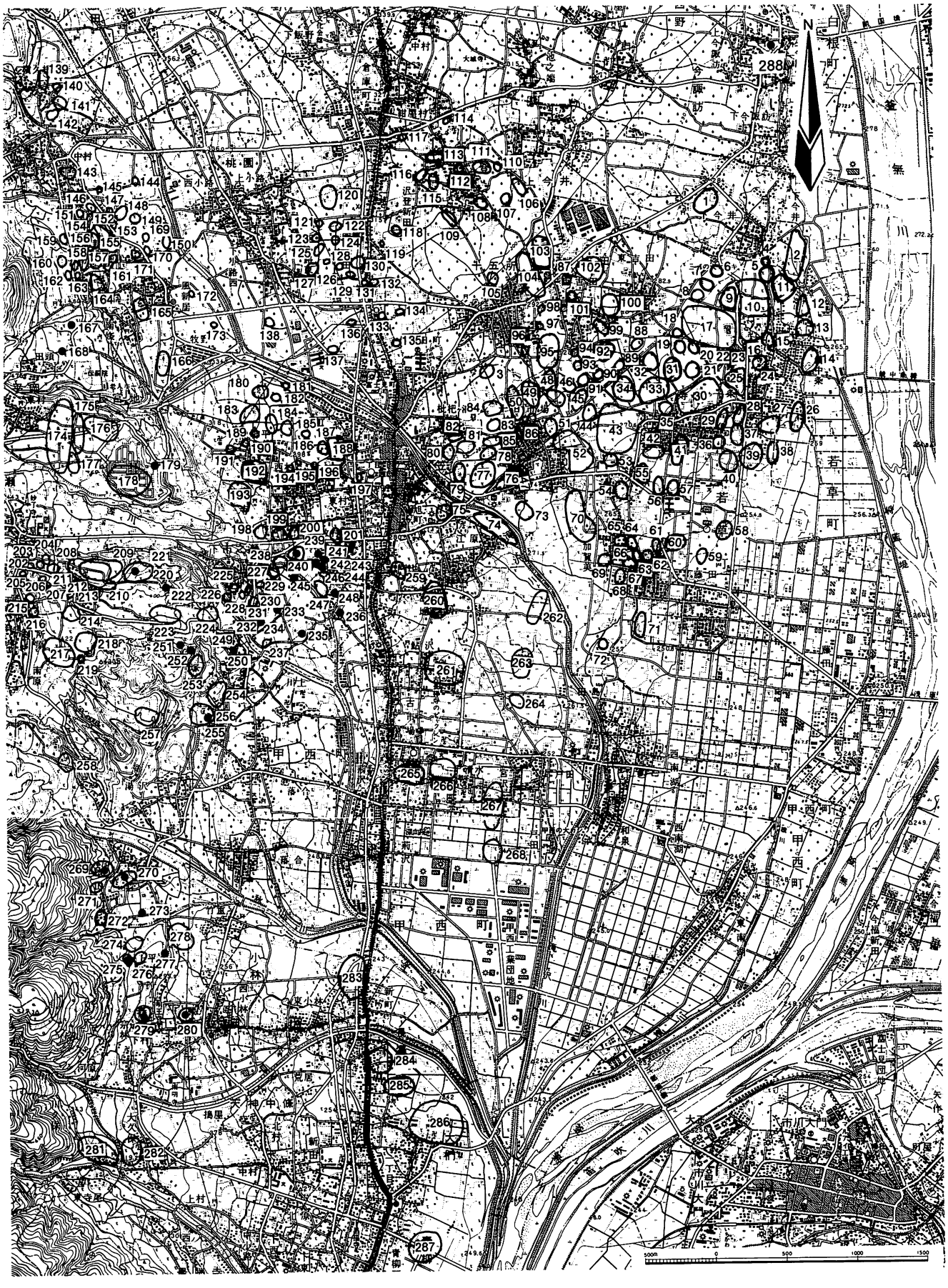
現在この地域には、南北の軸が真北から６度東偏する条里型地割が広く認められ、遺跡東側には一町（109m）を基本とした碁盤目上の土地区画がよく残されている。

第２節　歴史的環境

若草町の遺跡は、町誌編纂に先立って行われた1986年の分布調査で、86ケ所が明らかにされた。また、隣接する櫛形町においても1989年に遺跡詳細分布調査が行われており、239ケ所の遺跡が周知の遺跡として登録されている。これらの調査を通して、釜無川右岸の峡西地方における遺跡の分布状況がかなり詳細に捉えられるようになった。また、保坂康夫氏はこれらを基に、この地域の遺跡の立地と動態について詳細な検討を行っている（第３図、保坂1990「原始・古代の遺跡」『若草町誌』）。



第１図　二本柳遺跡位置図
（高木・中山1983に加筆・修正）



第２図　周辺の遺跡と二本柳遺跡

第1表　周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	時　　代
1	古屋敷	平安
2	八幡第1	古墳後～平安
3	北林第1	古墳後期
4	八幡第2	平安
5	村北第1	古墳、平安
6	今井前第1	平安
7	今井前第2	平安
8	今井前第3	平安
9	今井前第5	古墳前、平安
10	村井第2	(弥生)、古墳～平安
11	村北第3	古墳～平安
12	八幡下	古墳、(奈良)、平安
13	上ノ切第1	
14	村東	
15	上ノ切第2	(古墳、奈良)、平安
16	上ノ切第3	古墳、平安
17	今井前第4	弥生～平安
18	今井前第6	(弥生)、古墳
19	寺部村附第3	平安
20	寺部村附第2	(弥生～古墳)
21	寺部村附第7	平安
22	寺部村附第1	弥生～古墳
23	下ノ切第1	(古墳、奈良)、平安
24	中ノ切	(弥生、古墳、奈良)、平安
25	中西第1	弥生、(古墳、奈良)、平安
26	下ノ切第2	(古墳)、奈良、平安
27	反田第1	平安
28	中西第2	弥生、古墳、平安
29	村附第9	平安
30	村附第6	(弥生)、古墳、平安
31	村附第5	(弥生)、古墳
32	村附第4	(弥生)、古墳、(奈良)
33	村附第12	弥生、古墳
34	村附第11	弥生、古墳
35	村附第13	古墳
36	村附第8	平安
37	中西第3	(弥生)、古墳、平安
38	反田第2	平安
39	反田第3	平安
40	御崎	平安
41	南前第1	平安
42	南前第5	平安
43	寺部村附第10	弥生、古墳、(奈良)、平安

番号	遺　跡　名	時　　代
44	角力場第1	平安
45	角力場第2	古墳、平安
46	角力場第3	平安
47	角力場第4	弥生、古墳、平安
48	林間第1	古墳、平安
49	林間第2	古墳、平安
50	林間第3	弥生、古墳
51	新居道上	(古墳)、平安
52	新居道下	弥生～平安
53	宮前	平安
54	伊勢前	平安
55	南前第2	古墳、平安
56	南前第3	弥生
57	南前第4	古墳前期
58	八丁第1	平安
59	八丁第2	平安
60	古河原	平安
61	大津麦第1	平安
62	舎中第1	(弥生、古墳)、平安
63	大津麦第2	平安
64	大津麦第3	平安
65	舎中第2	平安
66	舎中第3	平安
67	舎中第4 ¥	(弥生、古墳)、平安
68	蔵ノ西	平安
69	鎮守	平安
70	二本柳	弥生、古墳、平安、中近世
71	西前田	平安
72	流間	平安
73	前田道下	平安
74	向　第1	平安
75	向　第2	平安
76	清住	(弥生、古墳)
77	溝呂木道下	平安
78	溝呂木道上第4	平安
79	河原添	平安
80	溝呂木道上第2	平安
81	溝呂木道上第3	平安
82	溝呂木道上第5	平安
83	北林第3	平安
84	北林第2	平安
85	溝呂木道上第7	古墳
86	新田	古墳

縄文時代にまで遡る遺跡は、これまでのところ若草町内には発見されていない。この時期の遺跡は、南アルプスの山塊から東側に迫り出す市之瀬台地上やそれらの台地と扇状地の境界にある緩斜面に多く分布し、わずかながら御勅使川の扇状地の崖線上にも分布が認められる。また、市之瀬台地下の坪川扇状地に存在する鋳物師屋遺跡（235）では、中期中葉の環状集落が調査されている。したがって、この時期の遺跡は主に山麓や台地、扇状地扇頂部などのそれ以前に形成された比較的安定した地域に集中し、現在の扇状地扇央部から沖積低地への進出傾向はきわめて弱い。遺跡立地の上でのこの傾向は、縄文時代の狩猟や植物採集・加工を主体とする生業形態と表裏の関係をなしているものと思われる。

これに対し弥生時代以降、若草町内の遺跡数は急増し、人々の活動が扇状地帯から氾濫原へ積極的に進出している様子が第３図からも理解される。地表面の分布調査によると弥生時代の遺跡は、確実なもので11ケ所、その可能性のあるもの12ケ所ほどが知れられている。その後の発掘調査では、二本柳遺跡において弥生時代中期初頭の土器が出土したほか、油田遺跡で中期中葉～後葉、大師東丹保遺跡で中期後葉、十五所遺跡で中期前葉、新居道下遺跡においても後期初頭の資料が発見されている。

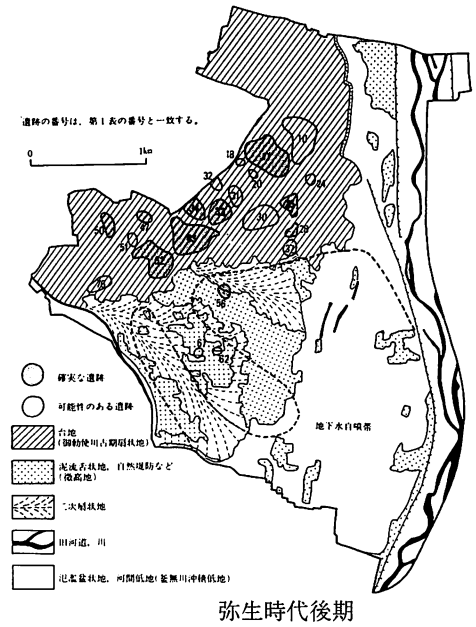
これらの多くの遺跡は、御勅使川扇状地上にのる鏡中条西部、寺部北部、十日市場東部の地域に集中しているが、本遺跡の発見例を考慮すると滝沢川の２次扇状地にもまだ地中深く該期の遺跡が存在していると考えられる。現地形は前２者において地下水位が深く乾燥した台地型の土地環境を示し、後者の地域において地下水位が高く低湿な環境を持つことから、前者に集落、後者に水田などの生産域が広がるものと推定される。保坂は、遺跡分布と現在の地下水自噴帯の関係に注目し、飲料水の確保と湿田経営に適した地域に当時の人々が進出したとしている。これらの考えは巨視的にはほぼ正鵠を得ていると思うが、実際の調査結果では当時の地下水位や河道、微高地の位置は、必ずしも現地形に反映されていない場合もあり、今後の発掘調査などにおいて各時期の微地形復元と遺跡分布の相関をきめ細かく再検討していく必要があろう。

古墳時代の遺跡は、若草町内では30遺跡が知られ、可能性のあるものを含めると42遺跡存在する。前期段階の遺跡は、ほとんどが御勅使川扇状地上に立地し、滝沢川の小扇状地の微高地にも分布する。この傾向はすでに弥生時代後期に認められるが、それまで遺跡の少なかった下今井南東部や十日市場北東部・西部にも分布の範囲が広がり、遺跡数も格段に増加することが指摘されている。該期の遺跡としては、櫛形町村前東A遺跡（95）において住居址140軒を超える集落が確認されており、東海系土器群を主体とする集団が弥生時代末にこの地を一つの拠点として集落展開を行い、やがてそれらの集団がこの地域で物見塚古墳などの前期古墳を作り出すまでの勢力になって行ったことが窺える。

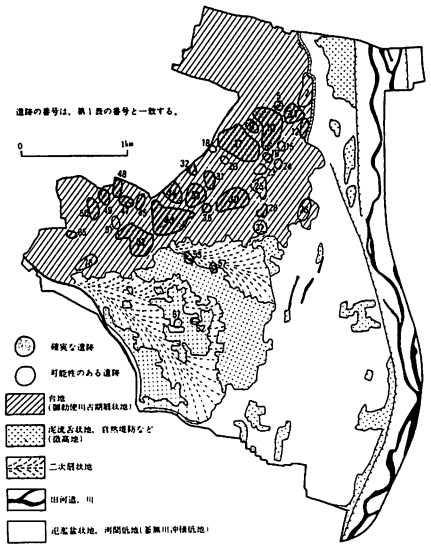
後期段階では21遺跡がすべて御勅使川扇状地上に分布し、滝沢川扇状地の微高地にはほとんど遺跡が見られなくなる。この現象は、時代が新しくなるにつれて扇状地扇端部や沖積低地へむかう峡西地方の遺跡全体の在り方とは逆行した内容を示している。

一方、古墳の分布はどうであろうか。遺跡の所在する若草町には寺部地区に塚が３基残されているが、周囲の状況からいずれも古墳ではなく中世以降に作られた十三塚や富士塚と推定されている。しかし、釜無川右岸の峡西地域にはこれまで白根町で２基、甲西町で１４基、櫛形町で１０基、増穂町で９基の古墳の存在が明らかにされている。また、本調査と同じく甲西バイパス関連の調査では、甲西町大師東丹保遺跡で沖積地に埋没した円形の低墳丘墓が新たに発見された（保坂和博1995『大師東丹保遺跡Ⅲ』）。

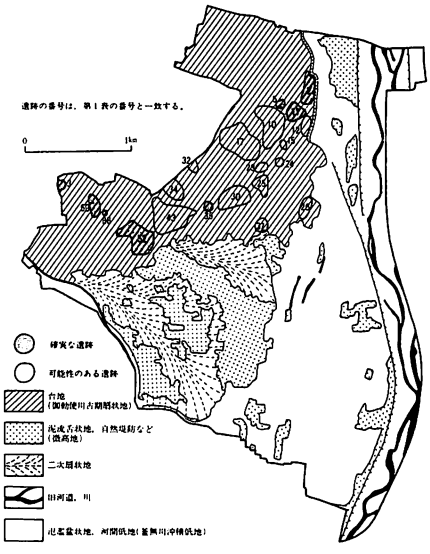
これらの内、前期古墳としては大師東丹保遺跡の古墳（267）が４世紀末～５世紀初頭、櫛形町物見塚古墳（222）が５世紀初頭、増穂町法華塚古墳（277）が５世紀中頃、櫛形町六科丘古墳（179）が５世紀末に比定されている。前期段階にこれだけの古墳が分布する地域は甲府盆地南の曽根丘陵に次ぐ規模で、当時の生産力の拡大と政治的な権力の高揚がこの峡西地域でも比較的早い段階で行われていると見られる。



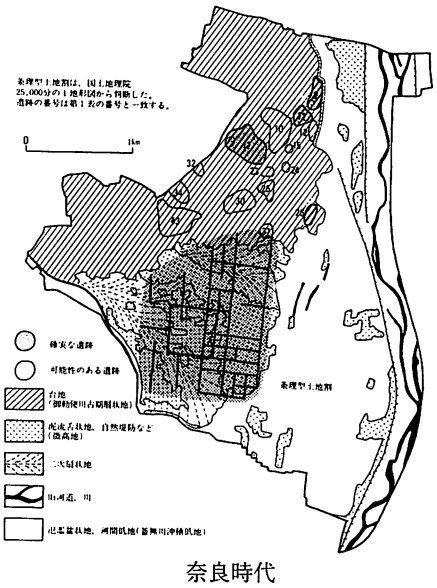
弥生時代後期



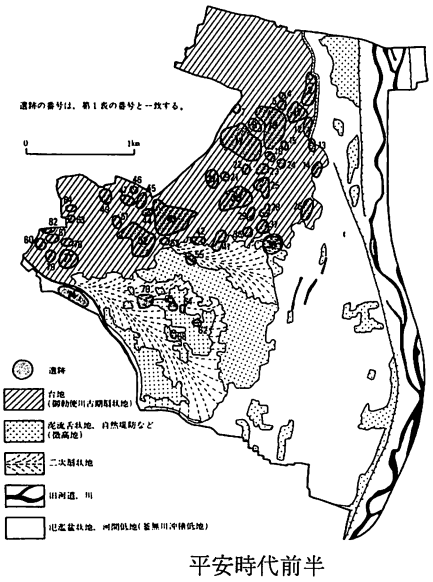
古墳時代前期



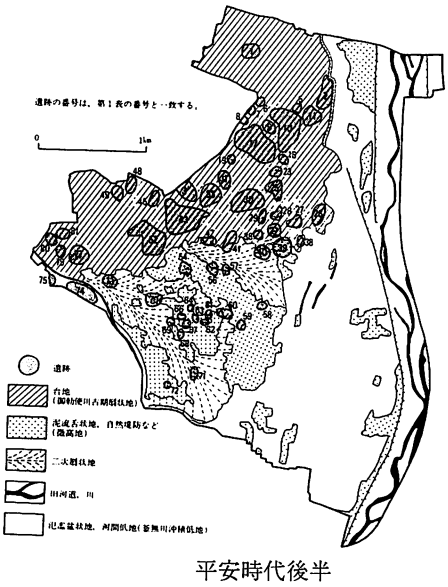
古墳時代後期



奈良時代



平安時代前半



平安時代後半

第3図　若草町内の時代別遺跡分布（保坂1990「原始・古代の遺跡」『若草町誌』より）

後期古墳では、甲西町熊野神社古墳（270）が6世紀前半、白根町おつき穴古墳（288）が6世紀後半とされるほか、甲西町塚原（235～255周辺）や増穂町春米（273～280周辺）などに集中する古墳群が後期のものと推定されている。

奈良時代の遺跡は、新居道下遺跡（52）、八幡遺跡（2）、今井前遺跡第4遺跡（17）、下ノ切第2遺跡（26）、村北第3遺跡（11）の他、12遺跡ほどでその可能性が示唆されている。いずれも御勅使川扇状地扇端部を中心とする鏡中条地域に集中する。

平安時代の遺跡はその前半期に51遺跡、後半期に56遺跡が知られるが、御勅使川扇状地上の遺跡に加え、滝沢川の小扇状地の微高地上に遺跡が増加する点がそれ以前と大きな違いとなっている。該期の集落様相は、新居道下遺跡に見るように住居が数十軒単位で集中した集落をなす場合と、村前東A遺跡の様に数軒単位の住居が分散する閑村型の集落の両者が存在し、当時の村落形態を知る上でも非常に興味深い。

ところで、この時期にかかわる重要な遺構として条里型土地割の問題がある。この地の条里型地割が真北より6度東偏する事実は、すでに須藤賢・谷岡武雄氏の「甲斐条里の諸問題」（1951年）で指摘されているが、この地割がいつから施行されているかについては不明な点が多い。保坂は若草町誌の中で、遺跡分布が滝沢川扇状地に減少する奈良時代にその起源を遡らせ、古墳時代後期以後の水田開発との延長で条里の出現を考えているが、それを積極的に裏付ける資料はない。むしろ、甲西バイパス関連の一連の調査では、条里型水田の景観は10世紀以後のもので、平安時代後期以降の荘園経営と密接にかかわって登場した可能性が高いことが判明しつつある（中山誠二1996「甲府盆地の埋没条里－条里の施工時期をめぐって－」『条里制研究』12）。

古代律令期において大井郷とされていたこの地域は、平安末期以降、加々美荘、奈胡荘、小笠原荘、大井荘に分割支配されたとされ、加賀美遠光をはじめとする甲斐源氏の土着化の基盤となった地域でもある。この時期の遺跡の本格的な調査はこれまでなかったが、大師東丹保遺跡において13世紀を中心とする方形の溝区画や建物址が確認され、その周囲に広がる条里型水田の存在を含めて、当時の景観復元が可能となってきている（新津健1994『大師東丹保遺跡Ⅰ』）。

また、中世後半期の室町～戦国期の寺院址に関係した資料が二本柳遺跡から得られている（新津・五味1992『二本柳遺跡－農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査－』）。これらの資料は、法善寺の子院の一つである福寿院にかかわる遺構、遺物で、当寺が江戸時代末に消滅するまでの状況を知るうえで極めて重要な内容を持つ。今回の調査においても、この寺院に関連する16世紀代の遺構が発見されている。

これまで峡西地域では、櫛形町を中心とする市之瀬台地上や富士川にそそぎ込むいくつかの小河川の扇状地扇頂部を除いては、ほとんど遺跡の実態が不明な地域であった。しかし、中部自動車道関連の一連の調査によって御勅使川や滝沢川の扇状地扇央部から沖積低地にかけての地形の形成過程や歴史的変容が徐々に解明されようとしている。

第３章　遺構と遺物

第３章　遺構と遺物

第１節　第１区の遺構と遺物

第１区では、11a層で近世の水田が確認され、それに北側へ連続する層位で埋没旧河道が検出されている。さらに、その下部では16a層で平安時代の遺物、18b層～21a層前後で古墳時代前期の遺物、遺構が検出された。

１．江戸時代の遺構と遺物（第４図～第17図）

１）水田（第２表）

この面の水田址は、畦畔、水田面、水口、杭列、溝などで構成されている。水田は、G～N－1～6グリッドの東西約30m、南北約30mの地点に展開し、総面積約900㎡である。その北側は谷によって途切れているが、東西および南方向にさらに水田は広がるものと予想される。

各水田は北西から南東に緩やかに傾斜する微地形にそって区画されるため、不整形を呈する。

これらの水田で5号水田が最も標高が高く、264.20m前後をはかる。また、１号水田の東側と８号水田は標高263.80m前後で、１区水田の中でももっとも低い値を示している。各水田面の落差は約10㎝程で、同一水田内でも南東部分が最も低くなっている。

水田施設は、畦畔、杭列、水口、ヌルメの溝などがあり、１号・２号・５号水田面北側には人間の足跡や稲株状の痕跡が検出された。

２）畦畔（第３表）

畦畔は、12本確認されている。これらの水田畦畔は北西から南東に向かって緩やかに傾斜し、水田面の等高線に沿って設定されている。

１～11号畦畔は、水田を区画する中畦畔である。12号畦畔は、北側の谷部と水田域を分割する主要な大畦畔で、谷に沿ってN－70～80°－Wの方向に設定されている。この畦畔は調査区中央より東側では２本に分岐しているが、断面観察により当初12b畦畔であったものが、洪水によって新たに12a畦畔に改修されたことが判明した。また、12号畦畔には杭列が設けられ、堅固な作りとなっている。調査では、谷部から流れ込んだ砂礫がこの畦畔によってくい止められ、南側の水田面への進入を防いでいる様子が観察された。したがって、１号～11号畦畔は水田区画、12号畦畔は谷部との境界および出水時の護岸と、畦畔の機能差が認められる。

３）杭列

１号杭列、２号杭列が12号畦畔に沿って打ち込まれ、３号杭列が調査区南東部の１号水田と８号水田の境に存在する。

１号、２号杭列は総数155本の杭が打ち込まれている（第８図）。杭列は12号畦畔から12b畦畔に連続しており、改修後の12a畦畔にはほとんど杭が打ち込まれていない。

杭は細い幹の部分を材として使用し、その先端部のみを削って尖らせている。このうち杭No.2、No.10、No.20、No.30、No.40、No.53、No.56、No.57、No.58、No.62、No.63の樹種同定を行った結果、マツ属、クリ、ヒノキ属が使用されていることがわかった（詳細は第４章第３節参照）。

３号杭列は１号と８号水田の境界を東西方向に走るが、その西側は４号畦畔を越えてさらに連続している（第11図）。杭列に沿って畦畔等が認められないことから、上層水田とした近世の水田面よりさらに上部から打

ち込まれた可能性が高い。

4）水口

水口は畦畔が25～40㎝程途切れた形で、4ケ所確認された。これらはいずれも水田間に設けられた水口で、水路からの取水口は確認されなかった。

1水口は2号水田から1号水田へ、2水口は3号水田から8号水田へ、3水口は4号水田から3号水田へ、4水口は3号水田から1号水田へそれぞれ水を流し込むために設置されている。

したがって、この地区の取排水の構造は、水田面の全体的な傾斜に沿って北西から南東方向に順次水を流す仕組となっており、12号畦畔の西側で水路からの水を取り入れ、最終的には調査区南東に予想される排水路に向かって流れていた可能性が高い。

1水口

（位　　置）H－4グリッドに位置し、2号水田と1号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）1号畦畔と2号畦畔の途切れ部の幅は25㎝を測り、水口の2号水田側と1号水田側では、6㎝程の落差が認められる。配水方向は2号水田から1号水田である。

2水口

（位　　置）J－1グリッドに位置し、3号水田と8号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）3号畦畔と4号畦畔の途切れ部の幅は25㎝を測り、水口の3号水田側と8号水田側では、6㎝程の落差が認められる。また、3号水田側では水口に向かって浅い凹地が認められる。配水方向は3号水田から8号水田である。

3水口

（位　　置）L－1グリッドに位置し、4号水田と3号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）7号畦畔と8号畦畔の途切れ部の幅は20㎝を測り、水口を境に4号水田側と3号水田側では、10㎝程の落差が認められる。配水方向は4号水田から3号水田である。

4水口

（位　　置）I－2グリッドに位置し、3号水田と1号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）2号畦畔と3号畦畔の途切れ部の幅は25㎝を測り、水口を境に2号水田側と3号水田側では、8㎝程の落差が認められる。配水方向は3号水田から1号水田に向かうが、この地点は3号水田の中でも比較的高い地点にあり、2号水田から3号水田に取水された水の一部を分岐して、1号水田に流すための水口と推定される。

5）溝状遺構

1号～4号溝は、埋没旧河道とした谷部底面に認められる。この谷地形は、旧河道の痕跡であるが、凹地となった時点では常に水が流れる流路ではなく、出水時にのみ周囲の水が集中する地点と考えられる。1号から3号溝はそうした水が流れた自然流路の可能性が高い。しかし、4号溝は同じ谷部にありながら調査区北部からの溝が東方向へ屈曲し、人為的な水路遺構と判断される。

5号溝は、2号水田と3号水田の境を東西方向に走る。長さ5m40㎝、幅40㎝、深さ10㎝を測る。この地点には、本来は2号畦畔と6号畦畔を連結する畦畔が存在したと推定され、2号水田から3号水田に入った水を一時的にこの溝に溜め、水温をあげるヌルメの役割を果たしていたと思われる。

1号溝

（位　　置）調査区北側のH～K－７・８グリッドに位置し、谷部底面に検出された。

（形状・規模）長さ17m、上端幅0.5～1.2m、下端幅0.25～0.6m、深さ0.1～0.2mを測り、E－30°－Sの方向にやや蛇行して走る。溝の東端部は２号溝へ向かって途切れるが、流水方向としては連続すると思われる。

（出 土 遺 物）なし。

2号溝

（位　　置）調査区北東側のG－６グリッドに位置し、谷部底面に検出された。

（形状・規模）長さ2m、上端幅0.7～1.2m、下端幅0.3～0.8mを測り、その西端部が広がる。溝の西端部が途切れるが、付近の等高線から判断して、１号溝から連続する溝と考えられる。

（出 土 遺 物）なし。

3号溝

（位　　置）調査区北側のH～K－７グリッドに位置し、谷部底面に検出された。

（形状・規模）長さ13.5m、上端幅0.4～1.3m、下端幅0.2～0.6m、深さ0.2mを測り、ほぼ西から東方向に走る。溝東端部で１号溝と接する。

（出 土 遺 物）なし。

4号溝

（位　　置）調査区北側のF～H－８・９グリッドに位置し、谷部北側の緩斜面に検出された。

（形状・規模）長さ11m、上端幅0.65～2.1mm、下端幅0.3～1.7m、深さ0.4mを測る。本溝は、調査区の北からE－80°—Sの方向に走り、H－８杭付近で東西方向に変化する。検出状況から人為的な水路と考えられる。

（出 土 遺 物）なし。

5号溝

（位　　置）２号水田と３号水田の境界部のI・J－３グリッドに位置する。

（形状・規模）長さ5.5m、上端幅0.5m、下端幅0.3m、深さ0.1mを測る。E－15°－S方向に走り、両端部が途切れる。

（出 土 遺 物）なし。

６）出土遺物とその出土状況（第５図・第17図）

上層水田に伴う遺物は、陶磁器、木製品などがある。014、015は１号・２号杭列、その他の遺物は水田直上層から検出されている。

陶磁器（014～018）　いずれも染付の破片で、014・016は碗口縁部、017は碗胴部、015は碗底部、018は皿の底部である。016は両面に文様が描かれ、外面に平行線文、内面に菱形文が連続して見られる。014、017、018は植物と推定される曲線的な文様が描かれるが、小破片のため文様の種類は不明である。これらの染付は、18世紀頃の所産である。

木製品（019～021、025）　水田面から４点出土している。019は長さ15.4㎝、幅5.8㎝、厚さ0.5㎝の板状木製品である。図中の右側端部には切り込み面が見られ、他の部材と組み合わせて使用したものと考えられる。020・021は棒状木製品としたもので、いずれも先端部を削って尖らせている。長さは020が19㎝、021が25㎝で、樹種はヒノキ属の一種を使用している。025は錘具（ツチノコ）とみられる木製品で、長さ12.3㎝、幅4.3㎝の完形品である。細い丸太材を使用し、上端付近に切り込みを巡らし、紐掛けとしている。また、底部端部もカット面が良く残されている。４号水田直上から出土している。

2．平安時代の遺物（第17図）

16a層とした土層より平安時代の遺物のみが検出された。

1）出土遺物

土師器（011～013）　011は口径14cmの坏で、外面側面にはロクロ整形痕が認められる。その形状から高台付坏と推定され、9世紀前葉に位置付けられる。012は玉縁状の口縁をもつ皿破片で、推定口径14cmを測る。10世紀代の甲斐型皿と推定される。013は口径11cmの坏で、胴下半部にヘラケズリ痕を残す。

3．古墳時代の遺構と遺物（第17図）

18a層～21a層にかけて古墳時代前期の溝状遺構1基が検出され、同一層位に土器、木製品が出土した。

1）溝状遺構

1区南西部に6号溝が検出された。

6号溝（第5図・第6図）

（位　　置）1区南西端のM・N－2・3グリッドに位置する。

（形状・規模）本溝は21a層を切り込んで掘込まれ、その底部は26a層にまで及ぶ。溝の長さは5.5m、上端幅2m、下端幅1.8m、深さ0.64cmを測り、断面形態はU字型を呈する。本溝はやや湾曲して北西方向から南東方向に走り、さらに調査区の西側および南側に連続していると推定される。

（出土遺物）溝覆土上部の18b層から動物骨が数点出土している。動物の種類については、第4章第7節参照。

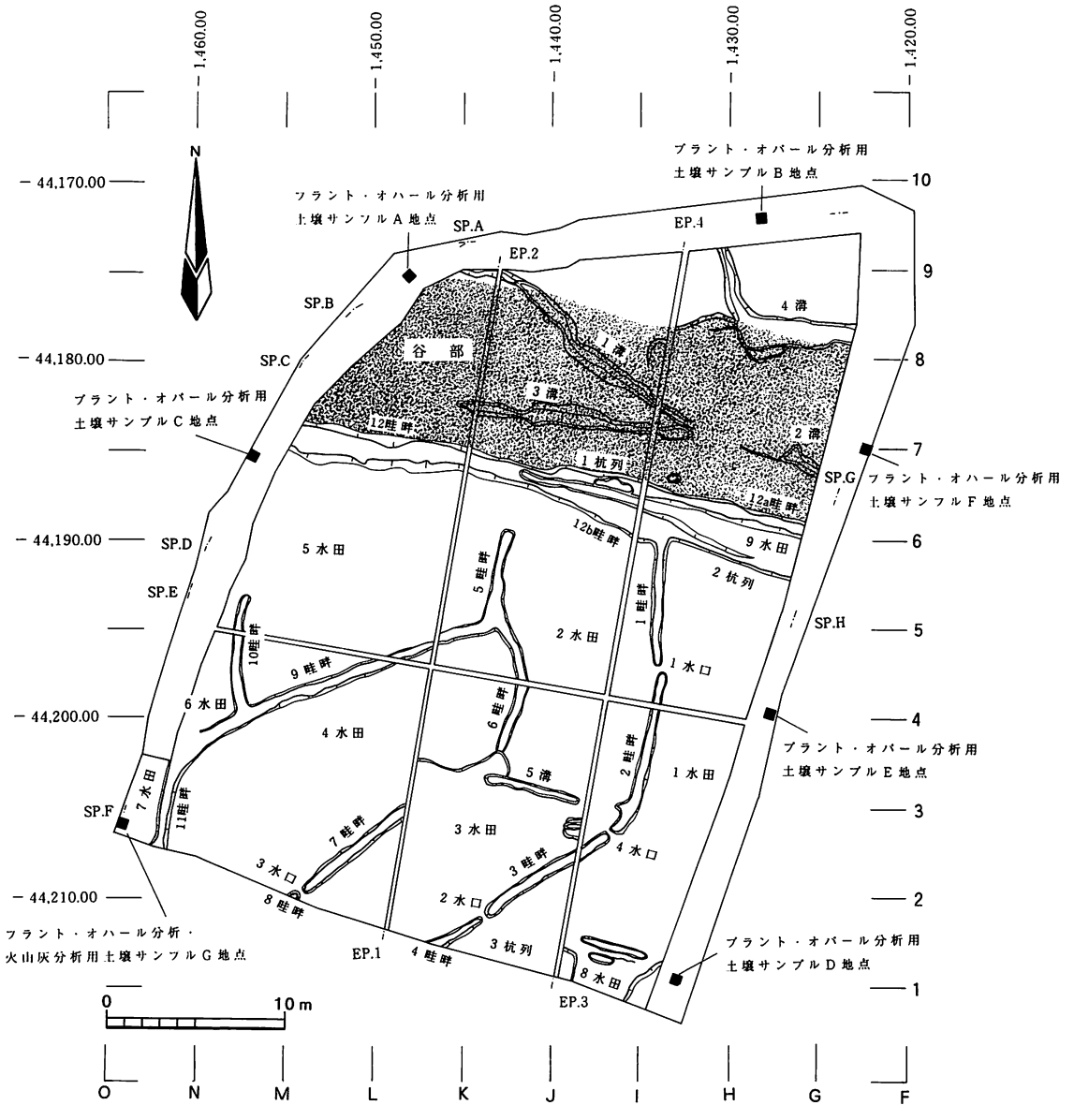
2）出土遺物とその出土状況（第5・17図、第16・17表）

21a層から21点、24a層から12点の遺物が出土している。この内、21a層中の土器13点、木製品2点、24a層中の木製品1点（022）を図示した。

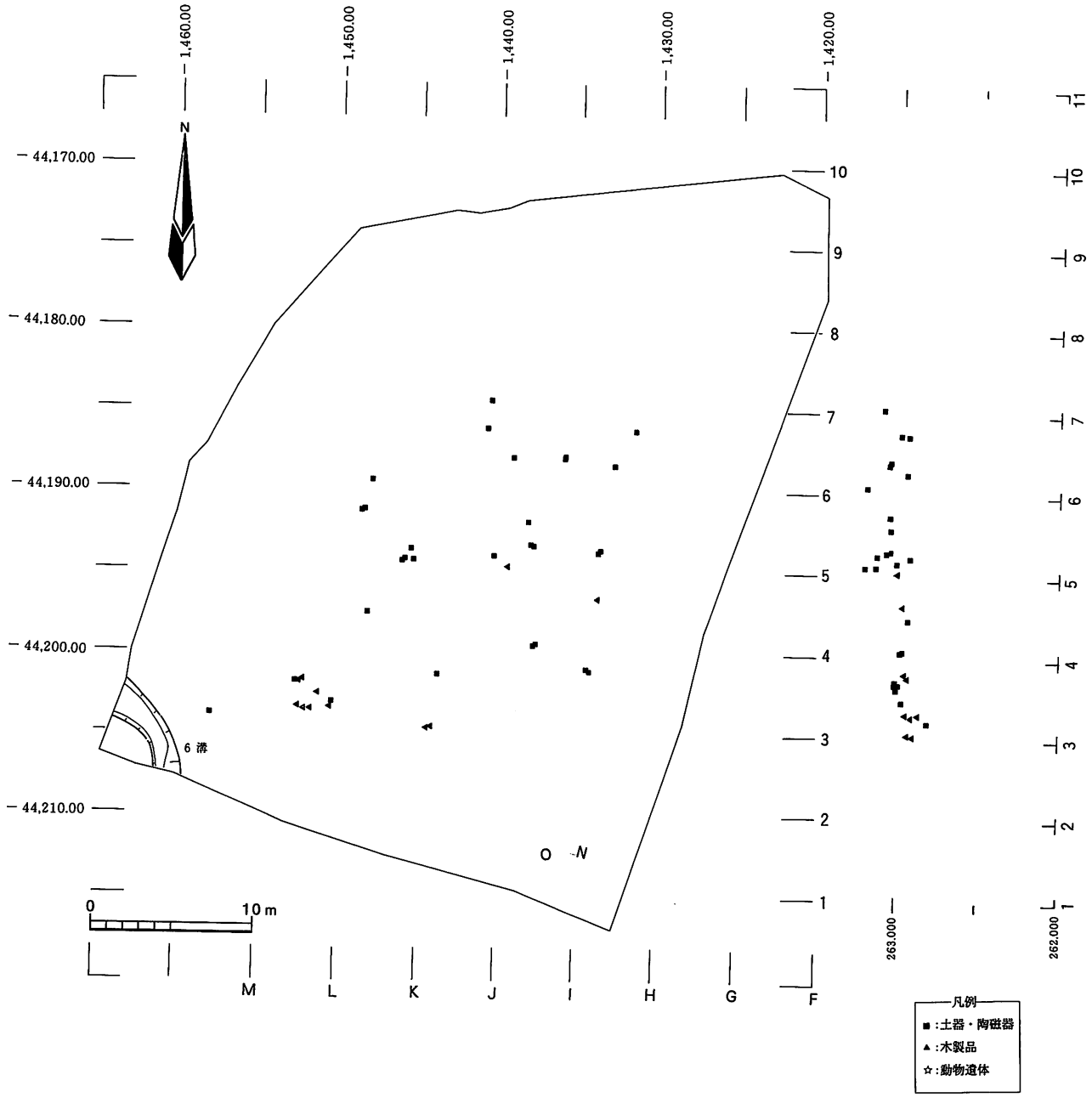
土師器（001～010）　001～004は、S字状口縁台付甕（以下S字甕）の口縁部である。口縁の上端部が比較的よく発達し、外反する特徴を持つ。001～003は小破片のため肩部下の調整が不明な点が多いが、S字甕のC類～D類に比定される。他方、004は肩部に横走するハケ目が見られない特徴から、D類のS字甕と思われる。005はヒサゴ壷に系譜を持つ長頸壷の口縁部である。006は高坏の坏部の破片で、推定口径21cmを測る。007・008は高坏脚部破片で、円形の透かし孔部分が認められる。009・010は単純口縁台付甕の胴上部で、肩部は屈曲し、外面にハケ目調整、内面にヘラケズリが認められる。

これらの土器は、いずれも4世紀後半の古式土師器の特徴を示している。

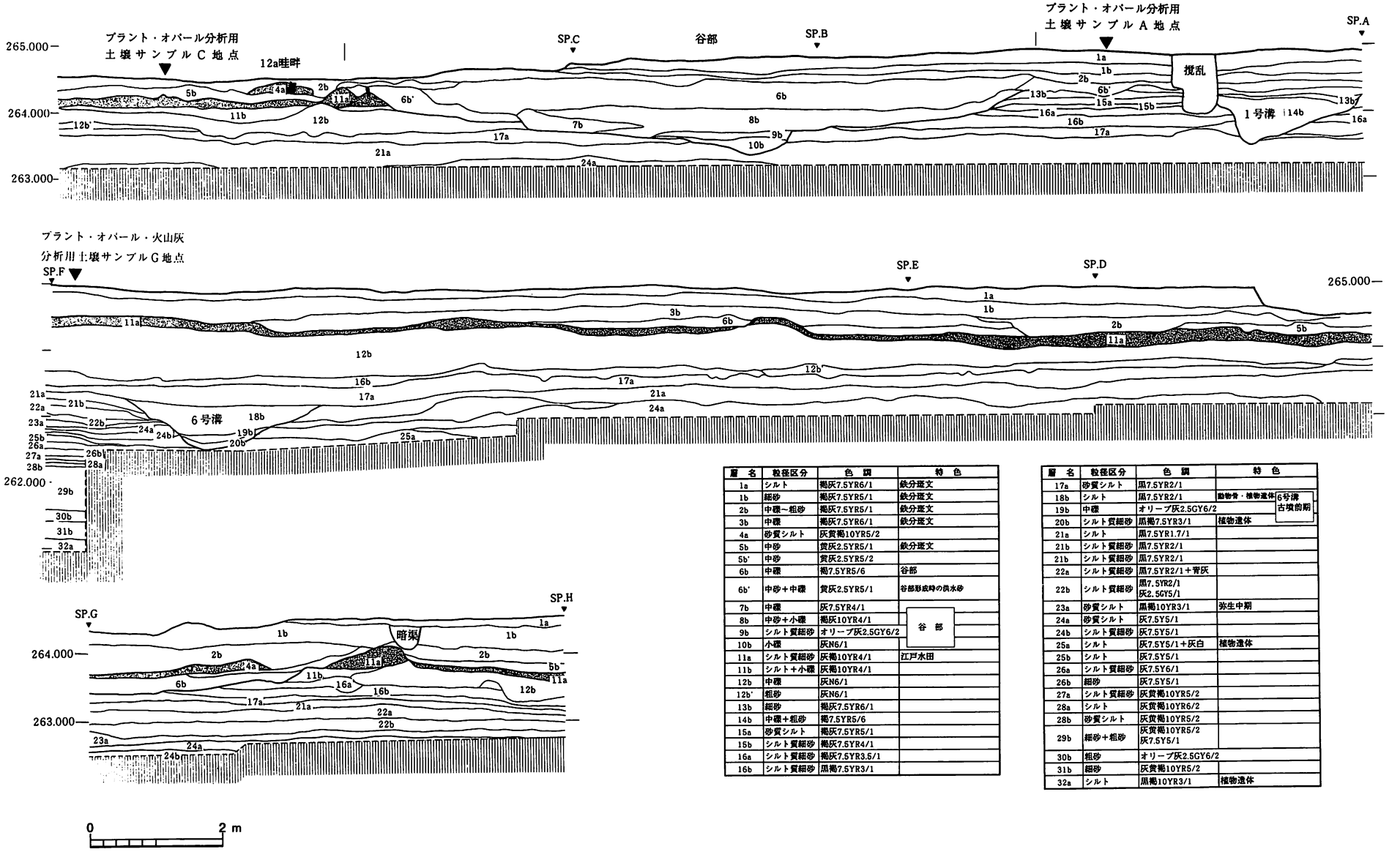
木製品（022～024）　022は現存長21.4cm、最大幅5.5cm、厚さ0.5cmの杓子状木製品である。柄の上端部が欠損しているが、柄から杓子部にかけて括れ、先端部が丸く仕上げられている。使用樹種は、ヒノキ属の一種と推定される。023は長さ34.9cm、幅3.6cm、厚さ2.2cmの棒状木製品である。端部側面にV字型の浅い抉りが認められる。樹種は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種とされる。024は長さ16.7cm、最大幅6cm、厚さ1.2cmの組み合せ木製品の部材と考えられるが、製品の名称は不明である。本体中央に円形の貫通孔があり、その周囲は両端部より一段下がった切り込み面をなす。両端部はほぞを削り出し、側面に他の部材との連結に使った小孔が認められる。樹種は、ヒノキ属の一種を使用している。


プラント・オパール分析用
土壌サンプルB地点
プラント・オパール分析用
土壌サンプルA地点
プラント・オパール分析用
土壌サンプルC地点
プラント・オパール分析用
土壌サンプルF地点
プラント・オパール分析用
土壌サンプルE地点
プラント・オパール分析用
土壌サンプルD地点
プラント・オパール分析・
火山灰分析用土壌サンプルG地点
谷部
SP.A
SP.B
SP.C
SP.D
SP.E
SP.F
SP.G
SP.H
EP.1
EP.2
EP.3
EP.4
1溝
2溝
3溝
4溝
5溝
1杭列
2杭列
3杭列
1水田
2水田
3水田
4水田
5水田
6水田
7水田
8水田
9水田
1水口
2水口
3水口
4水口
1畦畔
2畦畔
3畦畔
4畦畔
5畦畔
6畦畔
7畦畔
8畦畔
9畦畔
10畦畔
11畦畔
12畦畔
12a畦畔
12b畦畔
0
10m
N
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
－44,170.00
－44,180.00
－44,190.00
－44,200.00
－44,210.00
－1,460.00
－1,450.00
－1,440.00
－1,430.00
－1,420.00

第4図　1区全体図



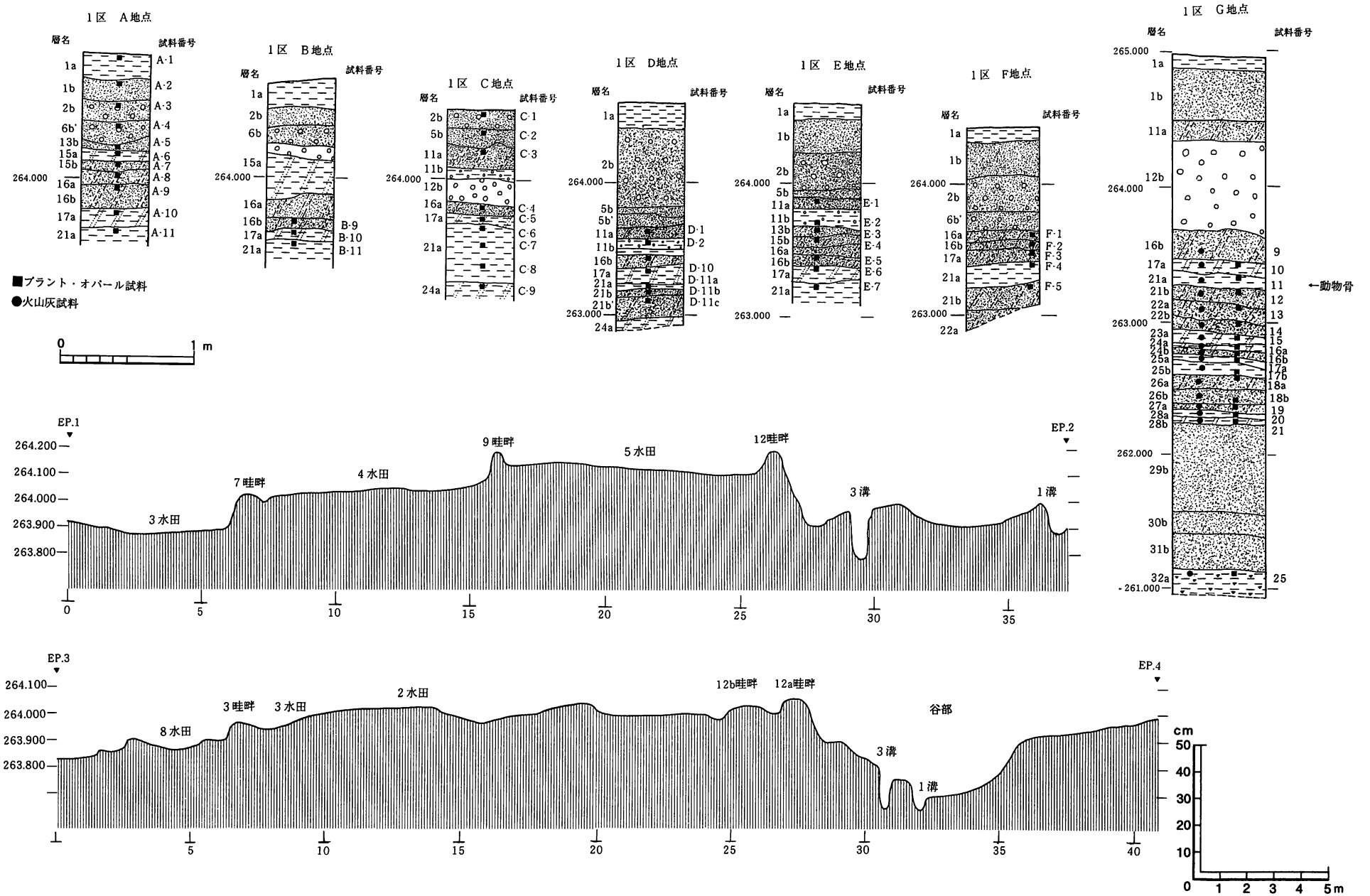
第５図　１区遺物出土分布図



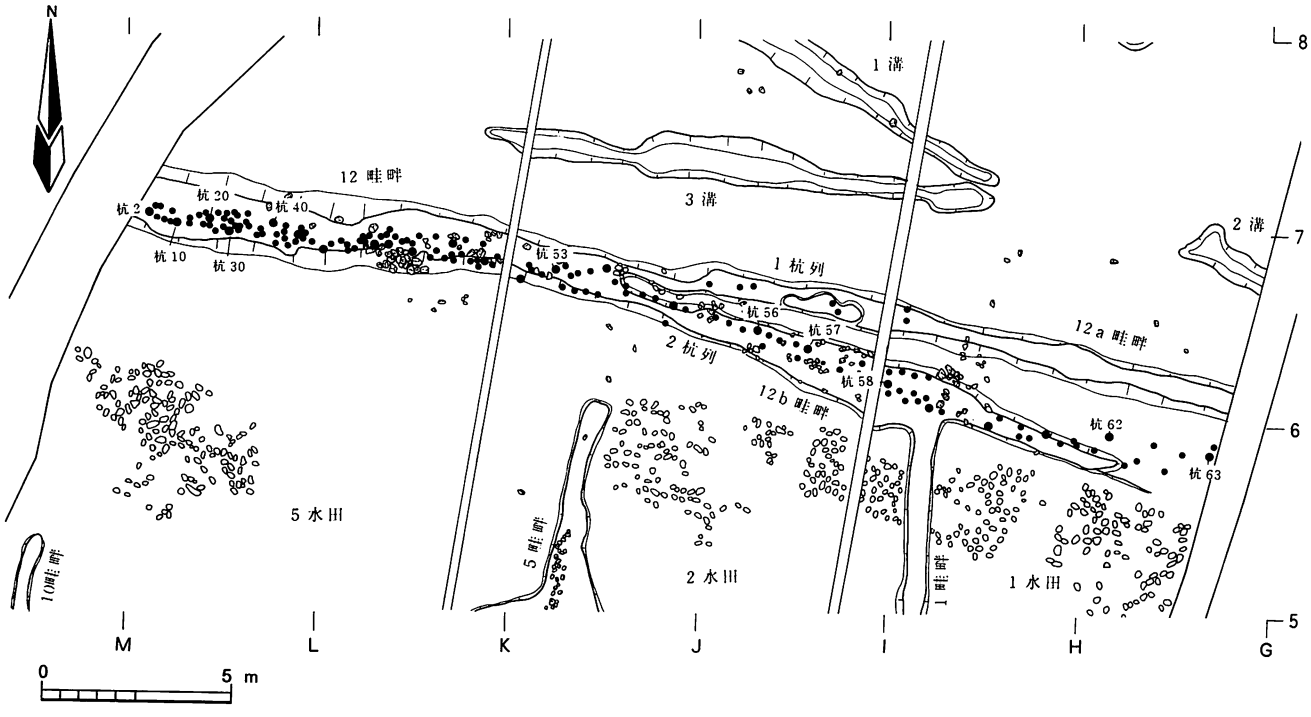
層名	粒径区分	色調	特色
1a	シルト	褐灰7.5YR6/1	鉄分斑文
1b	細砂	褐灰7.5YR5/1	鉄分斑文
2b	中礫～粗砂	褐灰7.5YR5/1	鉄分斑文
3b	中礫	褐灰7.5YR6/1	鉄分斑文
4a	砂質シルト	灰黄褐10YR5/2	
5b	中砂	黄灰2.5YR5/1	鉄分斑文
5b'	中砂	黄灰2.5YR5/2	
6b	中礫	褐7.5YR5/6	谷部
6b'	中砂＋中礫	黄灰2.5YR5/1	谷部形成時の洪水砂
7b	中礫	灰7.5YR4/1	谷部
8b	中砂＋小礫	褐灰10YR4/1	
9b	シルト質細砂	オリーブ灰2.5GY6/2	
10b	小礫	灰N6/1	
11a	シルト質細砂	灰褐10YR4/1	江戸水田
11b	シルト＋小礫	灰褐10YR4/1	
12b	中礫	灰N6/1	
12b'	粗砂	灰N6/1	
13b	細砂	褐灰7.5YR6/1	
14b	中礫＋粗砂	褐7.5YR5/6	
15a	砂質シルト	褐灰7.5YR5/1	
15b	シルト質細砂	褐灰7.5YR4/1	
16a	シルト質細砂	褐灰7.5YR3.5/1	
16b	シルト質細砂	黒褐7.5YR3/1	

層名	粒径区分	色調	特色
17a	砂質シルト	黒7.5YR2/1	
18b	シルト	黒7.5YR2/1	動物骨・植物遺体 6号溝古墳前期
19b	中礫	オリーブ灰2.5GY6/2	
20b	シルト質細砂	黒褐7.5YR3/1	植物遺体
21a	シルト	黒7.5YR1.7/1	
21b	シルト質細砂	黒7.5YR2/1	
21b	シルト質細砂	黒7.5YR2/1	
22a	シルト質細砂	黒7.5YR2/1＋青灰	
22b	シルト質細砂	黒7.5YR2/1 灰2.5GY5/1	
23a	砂質シルト	黒褐10YR3/1	弥生中期
24a	砂質シルト	灰7.5Y5/1	
24b	シルト質細砂	灰7.5Y5/1	
25a	シルト	灰7.5Y5/1＋灰白	植物遺体
25b	シルト	灰7.5Y5/1	
26a	シルト質細砂	灰7.5Y6/1	
26b	細砂	灰7.5Y5/1	
27a	シルト質細砂	灰黄褐10YR5/2	
28a	シルト	灰黄褐10YR6/2	
28b	砂質シルト	灰黄褐10YR5/2	
29b	細砂＋粗砂	灰黄褐10YR5/2 灰7.5Y5/1	
30b	粗砂	オリーブ灰2.5GY6/2	
31b	細砂	灰黄褐10YR5/2	
32a	シルト	黒褐10YR3/1	植物遺体

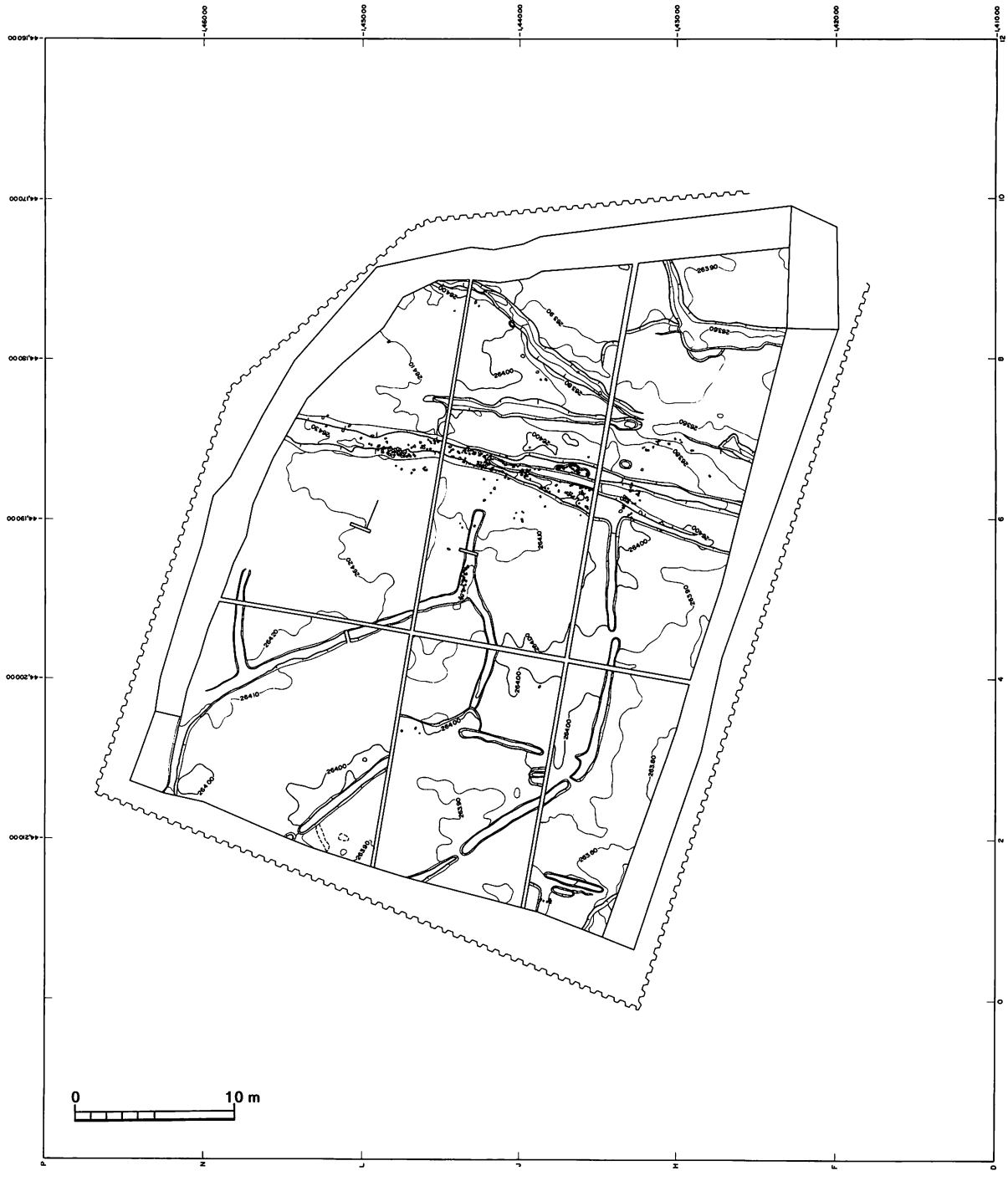
第6図　1区セクション図



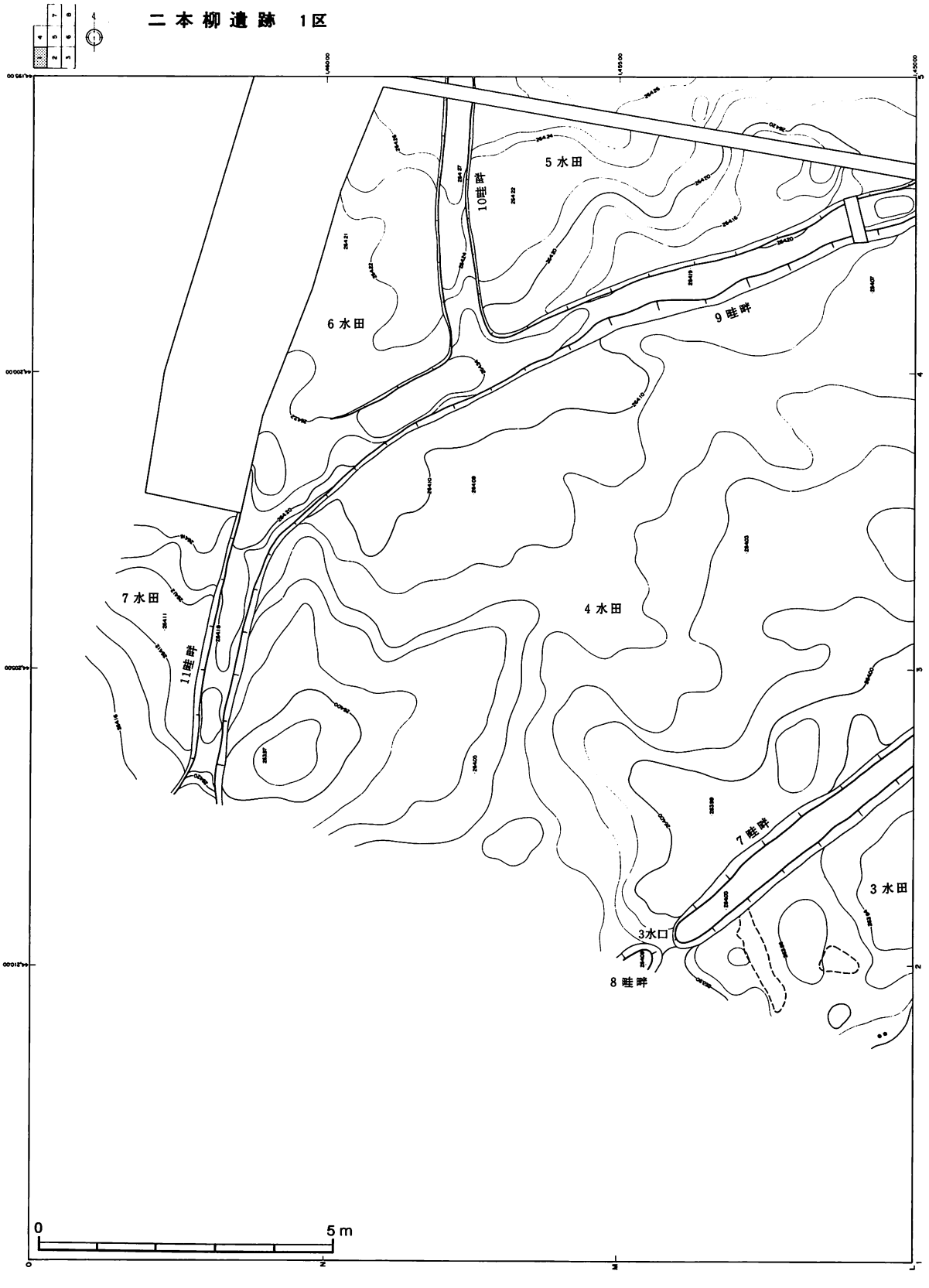
第7図　1区土壌サンプリング地点セクションおよび水田面エレベーション図


N
1 溝
12 畦畔
杭 2
杭 20
杭 40
杭 10
杭 30
3 溝
杭 53
1 杭列
杭 56
杭 57
2 杭列
杭 58
12a 畦畔
12b 畦畔
2 溝
杭 62
杭 63
5 水田
10畦畔
5 畦畔
2 水田
1 畦畔
1 水田
8
7
6
5
M
L
K
J
I
H
G
0
5 m

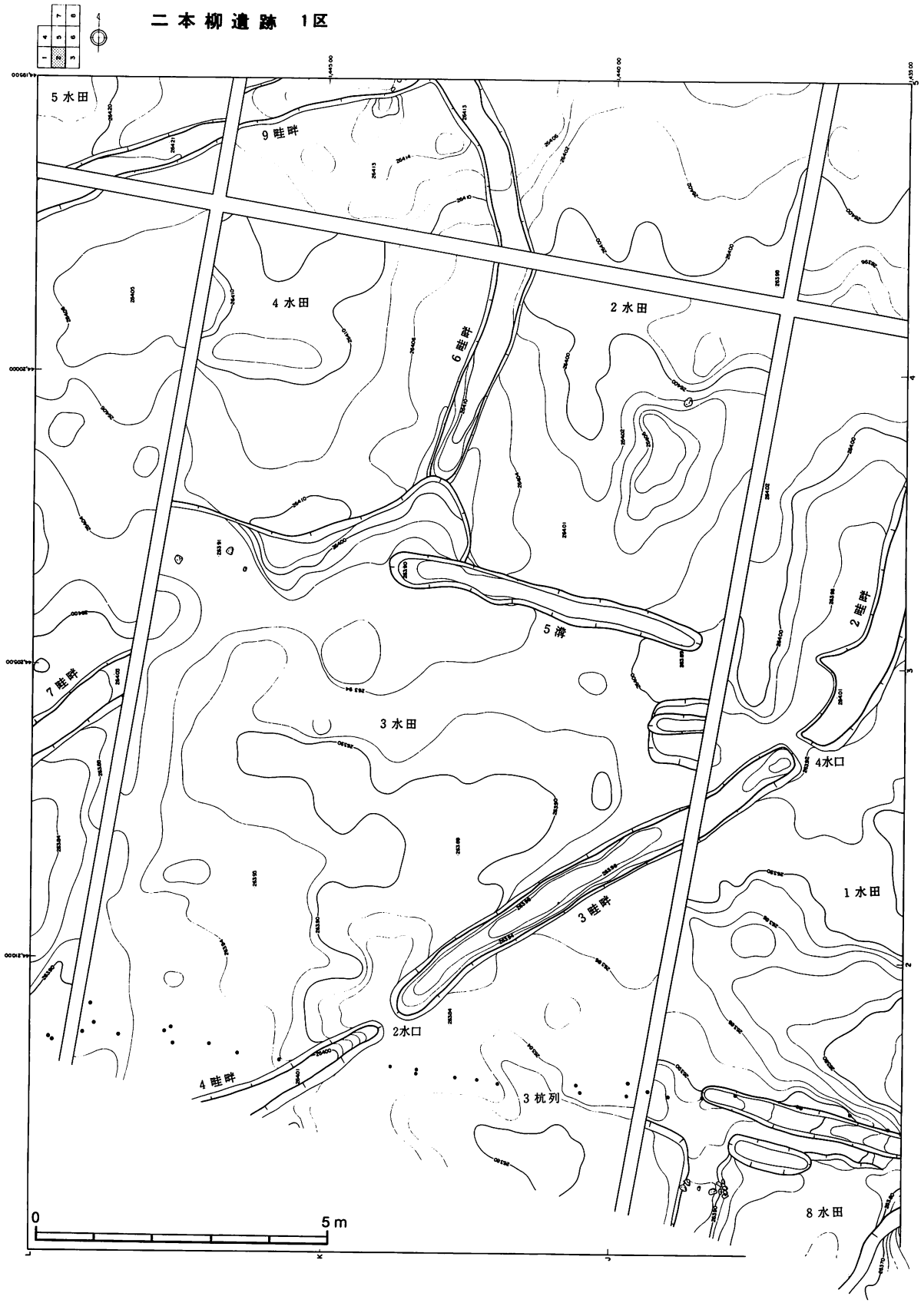
第8図　1区1・2杭列



第９図　１区水田面等高線図（全体）

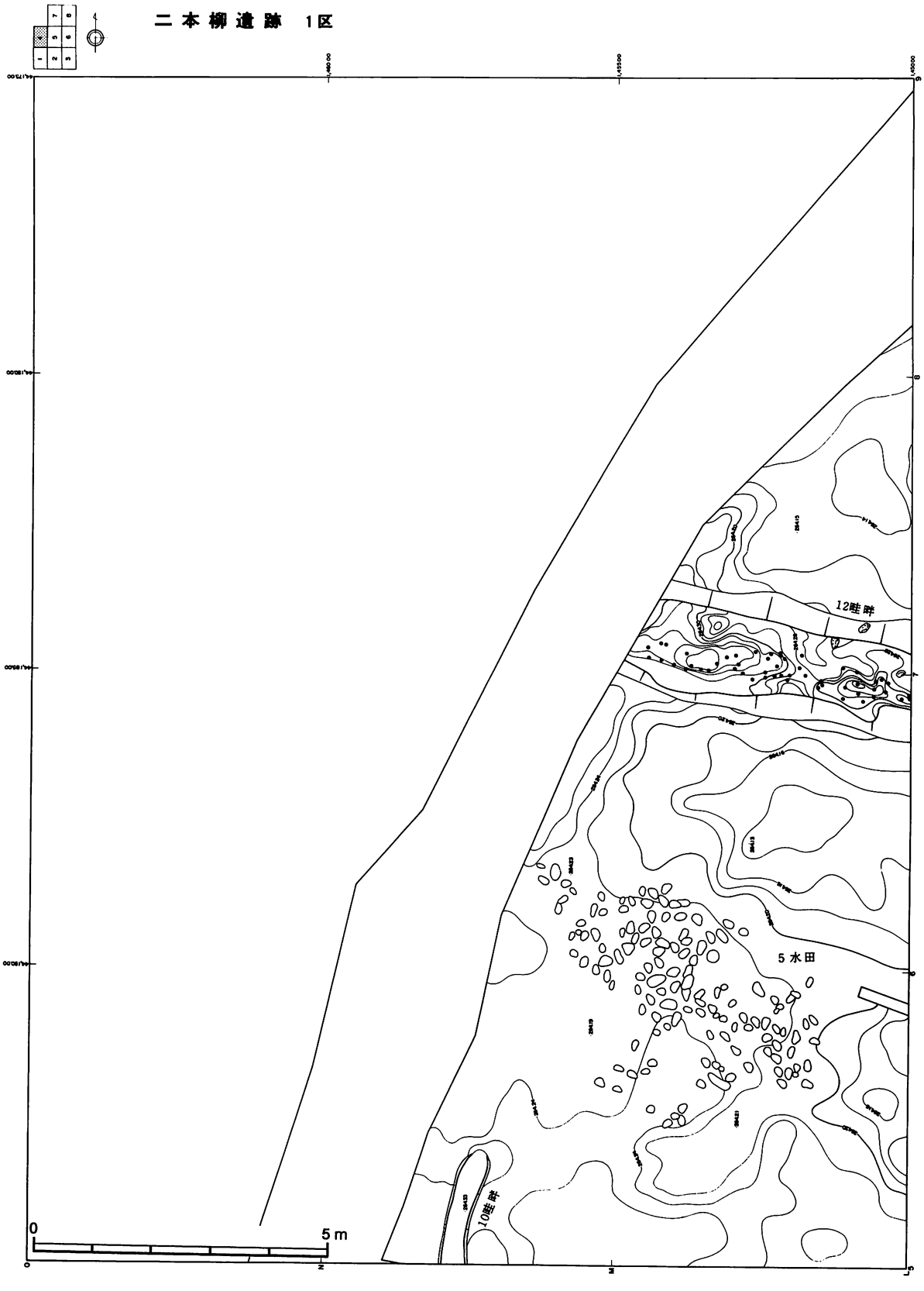


第10図　1区水田面詳細図（1）

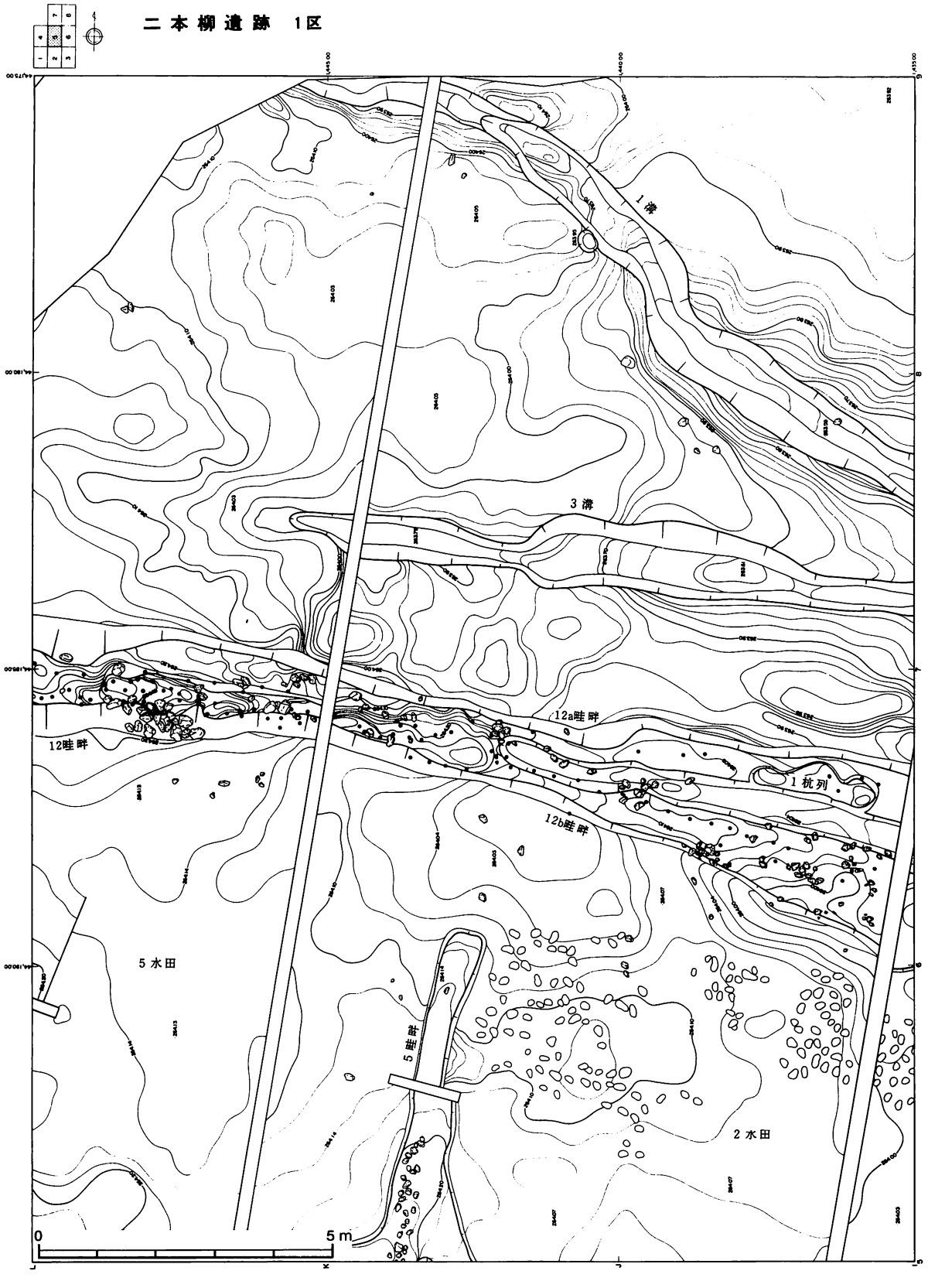


第11図　1区水田面詳細図（2）

第12図　1区水田面詳細図（3）

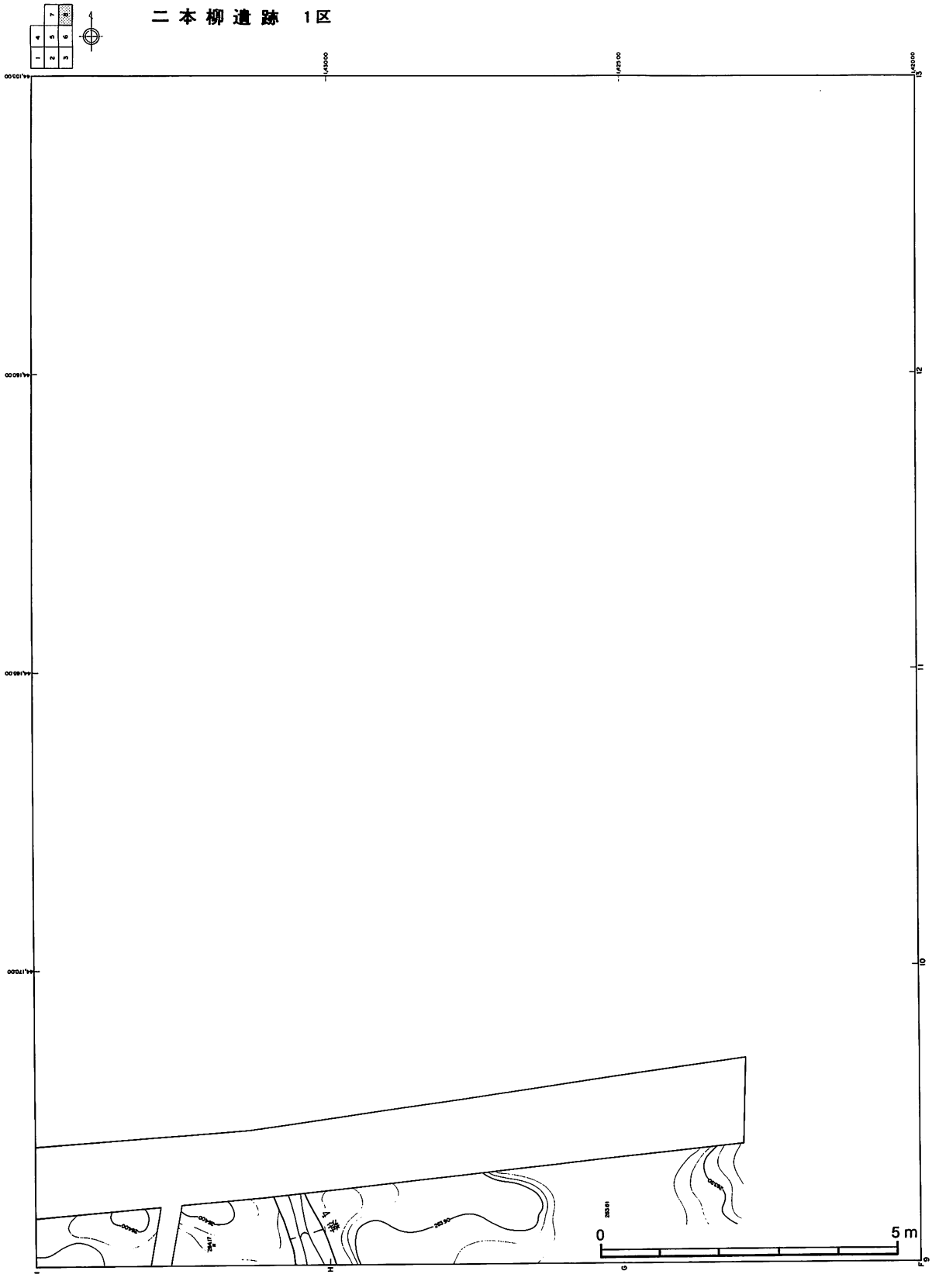


第13図　1区水田面詳細図（4）

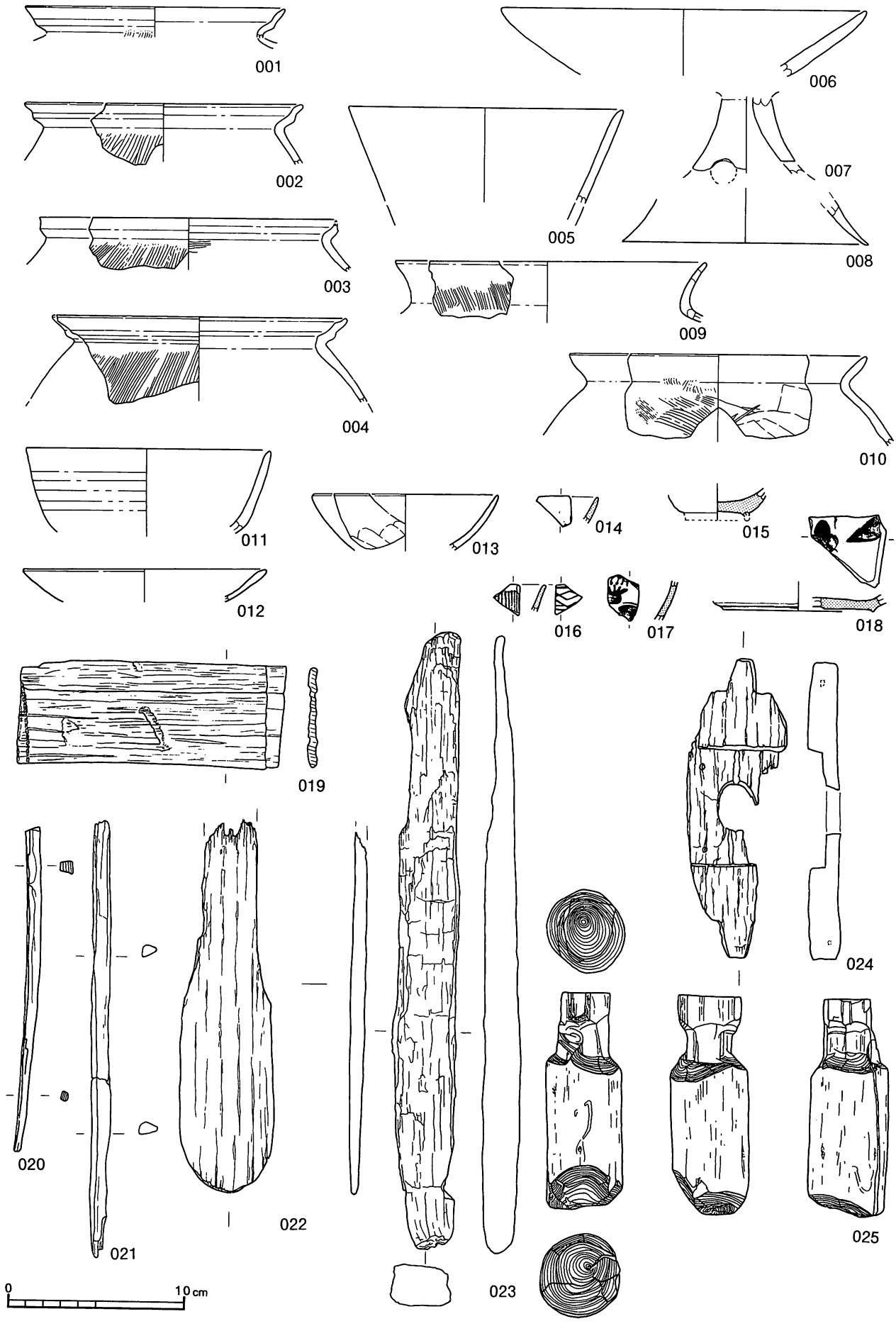


第14図　1区水田面詳細図（5）

第15図　1区水田面詳細図（6）



第16図　1区水田面詳細図（7）


001
002
003
004
005
006
007
008
009
010
011
012
013
014
015
016
017
018
019
020
021
022
023
024
025
0
10cm

第17図　1区出土遺物

第２表　１区水田一覧

水田番号	面　積 (m²)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　設	備考
1	?	264.02	263.70	1．2	1水口．2杭列	
2	119.92	264.12	263.96	1．2．5．6．12b	5溝	
3	88.03＋α	264.02	263.84	2．3．5．7．8	2・3・4水口、5溝	
4	147.76＋α	264.14	263.97	6．7．8．9．11	3水口	
5	149.62＋α	264.26	264.02	5．9．10．12		
6	14.22＋α	264.26	264.21	10．11		
7		264.16	264.11	11		
8		263.90	263.78			
9	13.88＋α	264.00	263.84	12a．12b	1・2杭列	

第３表　１区水田畦畔一覧

番号	長さ (m)	方　位	方向性	上端幅 (cm)		下端幅 (cm)		備　考
				最大	最小	最大	最小	
1	7.2	N－2°－E	直	46	36	71	52	
2	9.4	N－17°－E	直	54	28	79	51	
3	8.2	N－57°－E	直	51	36	75	61	
4	3＋α	N－60°－E	直	42	21	71	47	
5	5.2	N－12°－E N－23°－E	直	112	36	141	59	
6	7.6	N－23°－W	曲	56	41	74	63	
7	7.6	N－53°－E	直	51	37	84	63	
8	?			36		69		3水口の付近のみ幅
9	15	N－69°－E	直	60	25	83	44	
10	6.8	N－4°－E N－11°－E	直	59	25	76	49	
11	9.6	N－52°－E	曲	48	32	116	71	
12	13	N－80°－W	直	143	70	230	141	
12a	16＋α	N－76°－W	直	77	28	110	46	
12b	14	N－70°－W	直	137	16	156	50	

第２節　第２区の遺構と遺物

第２区では、７a・７ｂ層上面において戦国期の寺院跡、９a層で上層水田、11a層で下層水田が検出された。

１　戦国時代の遺構と遺物

該期の旧地表面には、溝状遺構３条、井戸跡８基、木棺２基、掘立柱建物跡１基が確認されている。

１）溝状遺構

１号溝状遺構は２区の北東に存在し、東西８m程で途切れている。２号溝は調査区西側に沿って南北に85m程のび、その北西でほぼ直角に折れ曲がり、東側に向かって延びる。この溝は調査区北側に１ヵ所途切れた部分が認められ、その東側で鍵の手状に折れ曲がった溝となっている。おそらく溝の切れ目が小規模な出入り口となっていたと思われる。また、２号溝は埋没後竹林となっていたと判断され、土地の境界としての機能は、近世まで残っていたと推定される。遺構、遺物の出土状況から、かつての福寿院の寺域が16世紀代にはこの地点まで広がっており、２号溝がその境界を表わす溝であったと考えられる。３号溝は、１号溝南側に存在し、３号井戸と重複するようにL字状に延びた浅い溝で、両端部が連続せずに途切れている。

１号溝

（位　　置）B・C－23グリッドに位置する。

（規模・形状）遺構の北側は未調査区に延びるため全体の形状・規模は不明であるが、東西８m程で南側中央部に張り出しをもつ。

（出 土 遺 物）なし。

２号溝

（位　　置）調査区西側に沿うように南北に溝が走り、２区北西コーナーで90度方向を変え、東方向に調査区外へ向かってのびる。

（規模・形状）幅１～２m、深さ40～110cm程の溝である。南北方向は長さ85mを測るが、この溝は１区では確認できないことから、２区の南側で途切れるか、あるいは東側に直角に屈曲して現在の町道に沿って延びていた可能性がある。G－26グリッドおよびC－28グリッドで土橋状の切れ目が存在し、完全な水路とはならない。したがって、溝の機能は境界溝である可能性が高い。C－27～28グリッドでは、幅１m程の土橋を挟んで溝が鍵の手状に屈曲し、出入り口状の施設となっている。

また、覆土上層部は竹の根が非常に多く含まれており、近世期には溝は埋没し、帯状の竹林となっていたことがわかる。

（出 土 遺 物）溝内出土資料には、素焼土器、陶器（No.065～085）、石製品（No.086～104）、木製品（No.106～109）、鉄製品（No.105）などがある。

素焼土器の内、No.65～072、074は、土師質の皿で直径９cm程の小型品から、直径13cm程の中型品が認められる。底部が残存する個体の観察では、いずれも回転糸切り痕が認められる。No.073は土師器の蓋摘み部である。No.075は、高台付坏底部破片で、底部に回転糸切り痕が残る。陶磁器ではNo.076が天目茶碗、NO.077が染付碗、No.079が瓦質の脚付き土器、No.078、080は土師質のすり鉢である。No.081～No.085は、常滑口縁部破片で、口縁部形態により分類される。

石製品には、砥石、ひで鉢、石臼、五輪塔などがある。砥石（No.086）は長さ11.5cm、幅5.8cm、厚さ3.3cmの柱状砥石で、全面に研ぎ痕である線状痕が認められる。087は、直径約6cm程の球形の用途不明石器で、上下にやや窪みをもつ。088および090～098は、ひで鉢としたもので、直径11cm程の小型品から24cm程の大型品

まで見られるが、最も数が多いものは20cm前後のものである。いずれも深い窪みが認められる。089は、石皿状の製品で、下部に脚が認められる。100は安山岩製茶臼の下臼で、中央部に軸孔が穿たれ、受皿をもち、底面には粗いノミ痕が認められる。101は石臼の下臼で受皿を持たない。中央部に軸孔が認められ、底面にはノミ痕が残される。102は石臼の上臼片で、側面には挽き木を固定するほぞ孔が認められ、横打込み式のタイプである。供給口、底面には粗い目が刻まれている。103・104は五輪塔の風輪部で、104では固定用の孔が開けられている。

105は、鉄鏃と見られ、茎部断面は円形、先端部断面が長方形となる。

3号溝

（位　　置）B～D－20～22グリッドに存在し、3号溝と重複する。

（形状・規模）溝はL字状の形状をなし、東西10m、南北11mを測る。

（出 土 遺 物）なし。

2）井戸

2区のC～G－15～24グリッドにかけて、8基の井戸が確認されている。これらの井戸は調査区の西から北側を巡る2号溝によって囲まれた空間内に認められ、井戸間の距離は8～10mほどの間隔で散在するように存在する。井戸の構造は、石組井戸3基、素堀井戸4基、木組井戸1基があり、深さは20～100cm程の浅い井戸である。井戸の最下面は、不透水層の直上面となっており、使用された当時においても地下水が相当高い位置にあり、浅い井戸で十分機能したことが理解される。

1号井戸

（位　　置）2区南側のE－15グリッドに位置する。

（規模・形状）直径180cm、内壁径90cm前後の円形井戸で、側部に4～5段の石を積んだ石組構造をとる。

深さは旧地表面より80cmと浅いが、最下面のシルト層が不透水層となり、その上部の砂層を伏流した地下水が集まり、集水性に富んでいる。

（出 土 遺 物）1号井戸からは、114～122が出土している。114～116は、推定口径8.0～10cm、高さ2.0～2.5cmの土師質の小型皿で、胴部に横ナデの整形痕を明瞭に残す。115・116は胴部下半部で屈曲する。119は、灰釉壺の肩部破片で、肩部に平行する横線文が認められる。120は、漆塗りの木製椀で胴部が残存する。121は現存長11cm程の、先端部をとがらせた棒状木製品である。122は、長さ5.4cm、幅5.0cm程の湾曲した金銅製の飾り金具で、表面に細い文様が毛彫りされている。中央部上下に貫通孔が認められ、上部に腕状の突起部が認められるが、右側は欠損している。本資料は兜の前立の一部と判断され、長野県下伊那郡阿智村長岳寺に信玄愛用の兜前立として伝来されているものと類似する。

2号井戸

（位　　置）2区東側のD－18グリッドに位置する。

（規模・形状）直径120cm、内壁径70cm前後の円形井戸で、側部に4段の石を積んだ石組構造をとる。深さは旧地表面より45cmと浅い。井戸上面に石が充填され、井戸の廃棄時における行為とも推定される。

（出 土 遺 物）123のみが検出された。先端部に削り痕をもつ長さ17.7cmの箸状木製品である。

3号井戸

（位　　置）2区東側のC・D－20グリッドに位置し、3号溝と重複する。

（規模・形状）直径200cm、内壁径110cm前後の円形井戸で、側部に4～5段の石を積んだ石組構造をとる。深さは旧地表面より60cmと浅い。2号井戸同様に井戸上面に石が充填され、井戸の廃棄時における行為とも

推定される。

（出 土 遺 物）124・125が検出された。124は漆椀の高台部で、内面に赤漆、外面に黒漆を施している。125は、鉢形の土師質土器破片で、推定径24cm程を測る。

4号井戸

（位　　置）２区中央部のやや南側のF－17グリッドに位置する。

（規模・形状）直径150cmの円形の素堀井戸で、すでに上部が削平されていたため深さは確認面から15cmほどを測る。底部には鋤などによる掘削時の工具痕が認められる。

（出 土 遺 物）なし。

5号井戸

（位　　置）２区中央部のやや西側のF－19・20グリッドに位置する。

（規模・形状）長径175cm、短径160cmの楕円形の井戸で、深さは確認面から70cm前後を測る。井戸枠部は、樽状木枠でその外側を石で固定している。

（出 土 遺 物）樽に使われた枠は23本で、長さ48.5～50cm、上端幅６～８cm、下端幅５～6.5cmを測る。木枠部に縦方向の手斧による削り痕、３ヵ所に竹による絞め痕が認められる。木材の観察から、126－①、③、④、⑥、⑪、⑮、⑲、⑳、㉒、㉓は板目とり、126－⑤、⑦、⑧、⑩、⑬、⑭、⑯、⑰、㉑は柾目とりの材であり、樽を作製する際に１本の材から効果的に材を切り出し、加工していることが解る。

6号井戸

（位　　置）２区中央部のやや東側のD・E－19グリッドに位置する。

（規模・形状）長径220cm、短径180cmの不整楕円形の素堀井戸で、深さは確認面から55cmほどを測る。井戸内部から礫や木材が検出されている。

（出 土 遺 物）127～156が出土している。出土品には、土師質小型皿（128～134）、土師質皿（127・132～134）、土師質鉢（136～138、142）、瓦質すり鉢（139）、瓦質内耳土器（140・141）、瓦質鉢（143）などの土器類と、箸（144・145）、棒状木製品（146）、板状木製品（147～150、153～155）、曲げ物底板（151）、曲げ物（152）、組合せ木製品（156）など木製品がある。

7号井戸

（位　　置）２区西側のF・G－22グリッドに位置し、２号溝と重複する。

（規模・形状）短軸140cm、長軸160cmの楕円形の素堀井戸で、深さは確認面から20cm程を測る。すでに上部が削平されていたため掘込みは非常に浅い。

（出 土 遺 物）なし。

8号井戸

（位　　置）２B区東側のC－24グリッドに位置する。

（規模・形状）直径100cm程の円形の素堀井戸で、深さは確認面から45cm程を測る。底部南側に直径25cm程の小ピットをもつ。

（出 土 遺 物）漆椀１点（No.157）が出土している。推定口径は22.0cm、現状の器高5.8cmを測る。内面に黒色、外面に赤色の漆が残る。

３）木棺

２区では２基の木棺が発見されている。いずれの木棺にも、真言の偈文が棺または木簡に記されている。これらの木棺は、元興寺極楽坊所蔵の『入棺作法』に記載された内容と共通点が多く、中世の葬送儀礼を知る上

でも極めて重要な資料である。

1号木棺（第26図・写真68～70）

（位　　置）E－25グリッドに位置する。

（形状・規模・出土状況）縦80cm、横55cm、高さ20cmの組み合わせ式の木棺である。木棺周囲には、当時の地表面を木棺埋納のために浅く掘込んでいる。木棺の部材には相互に連結するための孔があけられているが、釘などが残されていないことから、孔同士を紐等によって結び、組み合わせて固定していたと推定される。確認時には上部の砂礫層の土圧によって蓋板が崩れ落ち、側板が曲がった状態で検出された。

底板は、長さ58cm、幅6cm前後、厚さ1～1.5cmの細長い板を4枚等間隔に並べて敷いている。側板は長軸方向では、長さ80cm、幅20cm、厚さ1cm前後、小口となる短軸方向では長さ55cm、幅20cm、厚さ1～1.5cmの板材を組み合わせている。上部の蓋は長さ81cm、幅22cm、厚さ1cm程の板材を2枚並べ、その上に2枚の細長い板材を載せて、蓋板のおさえとしている。

棺内北側には灰跡が確認され、稲穂を載せたかわらけ2点、古銭6枚、数珠と考えられる植物種子などが同時に出土していることから、遺体は火葬の後、副葬品と共に埋納された判断される。

（出土遺物）

蓋板026－④には、中央部に南無大日如来を示す梵字（オンアビラウンケン）と書かれ、蓋板③との合わせ部分には梵字の（ア）が墨書されている。③の蓋板にも文字が書かれており、赤外線観察等も行ったが判読不能である。小口板⑤には真言種子「（八葉）白蓮一肘間、（炳現阿）字素光色、（禅智倶入金剛）縛、（召入如来寂静）智」（括弧内は判読不能）と書かれ、小口板⑥には「（迷）故三界城、（悟）故十方空、（本来）無東西、（何）処有南北」と書かれている。側板cmには梵字で種子が墨書されているが判読不能である。また、026－⑪の底板には、梵字の（バン）が書かれている。

027は口径11.6cm、底径6.6cm、高さ2.0cmのかわらけの皿で、底部には回転糸きり痕が認められる。また、028は口径10.0cm、底径5.0cm、高さ2.2cmの皿で、底部調整は027と同様に回転糸きりによって切り離しが行われている。2枚のかわらけは重ねて配置されており、稲穂が皿に載せられていた。

数珠玉（029～039）は、ボダイジュの果実に孔を開け紐で連結したと推定される。ほとんどがすでに割れているが、11点のみは完全の姿で残っていた。種子は直径0.7cm程の大きさで、貫通する孔が穿たれている。

古銭（047～052）は、永楽通寶2枚、景徳元寶1枚、祥符元寶1枚、元豊通寶1枚、熙寧元寶1枚で、いずれも明～北宋時代の中国銭である。

2号木棺（第26・71図）

（位　　置）E－21グリッドに位置する。

（形状・規模・出土状況）1991年の試掘調査時に発見され、断面観察のみで平面形態は不明であるが、木棺構造は1号木棺と同じく4枚の底板を敷き、側板を組み合わせたものである。側板の長さ90cm、幅20cmを測り、1号木棺よりやや大きい。断面観察では、木棺埋設に伴う土坑が確認されている。棺にともなって、古銭3枚、木簡4枚、かわらけ皿1枚、土師質の鉢2点が出土している。

（出土遺物）

木簡は、長さ38～39cm、幅3.4～3.8cm、厚さ0.2cmほどの先端を尖らせた木札で、上端部を塔婆状に仕上げている。040には「（梵字）何処有南北」、041には「（梵字）本来無東西」、042には「（梵字）悟故十方空」と書かれており、043は判読不能である。

かわらけは、口径9cm、底径5cm、高さ1.7cmの皿で、底部には回転糸きり痕が認められる。045は、土師質の鉢で口径29cmを測る。046は口径33cmの鉢で、口縁部が内屈する。

古銭（053～055）は、天聖元寶、皇宋元寶などである。

2．室町時代の遺構と遺物（上層水田）

2区堆積層の9a層とした層上面に水田面及び水田遺構が検出された。確認された遺構は、水田26面、畦畔44本、水口24ヶ所、溝5条があり、室町時代前半の14世紀～15世紀のものと判断された。この時期の遺構は調査区南側では河道によって削り取られ谷が形成されているが、この谷は上面の戦国期の2号溝が切り込んでおり、短期間に埋没したと推定される。

1）水田（第28図、第4表）

水田面は2区全体に渡って展開し、扇状地扇端部に位置する地形に沿って、北西から南東に向かって傾斜している。水田の最高地点は24号水田で標高264.35m、最低地点は14号水田で標高263.52mあり、東西方向で20mの間に約80cm傾斜していることになる。平均4％にも上るこうした急斜度は、水田造作においても整然とした方形区画を阻み、地形制約の大きい水田を作り出している。水田面積は、最大の25号水田で139.61㎡、最小の7号水田で5.66㎡+αと1区画の水田規模の差異が非常に大きい。

各水田内の落差は10～28cmで、同一水田内でも南東側が低くなっている。したがって、水田内の水配りは北ないし西側の水田から供給され、南または東側の水田に排水されるシステムとなっている。

上層水田は、後述する下層水田の区画を原則として踏襲し、大畦畔で囲まれた内部をさらに細かく分割している。したがって、下層水田が洪水砂で埋没し、あまり時間をおかずに上層水田が復旧され、その際に若干の区画変更があったものと判断される。

水田施設は、畦畔、水口、溝などがあり、8号、9号、11号、12号、15号、16号、21号、22号、25号水田では人間の足跡が検出された。

特殊な遺構としては、15号水田北西隅の26号畦畔上部から馬の下顎骨が検出されている（第34図）。近接して木根が確認されたことから、26号畦畔端部の木の下で馬下顎骨を使った水口祭りが行われた痕跡と推定される。

2）畦畔（第28図、第6表）

畦畔は44本確認されている。1～3号、5号、8号、11～19号、21～25号、27号、31号、32号、34号、35号、38号、44号畦畔は、下層水田の中～大畦畔をほぼトレースする形で作られており、洪水層によって下層水田が覆われ、ほぼ同地点に畦畔を復旧したものと思われる。この際、いくつかの畦畔は地点の変更が行われ、大畦畔で囲まれた水田内部はいくつかの地点でさらに分割されている。

また、1号、2号畦畔では復旧の際に明確な畦畔を設けず、水田段差のみとなっている。5号畦畔は下層水田の48～50号畦畔を踏襲するものであるが、上層の5号畦畔では畦畔中央部に溝が作られ、畎畝状の施設となっている。

畦畔の規模は、5号畦畔が最大で、下端幅3.67m、高さ40cmを測る。また、3号、8号、38号、43号畦畔も下端幅が1mを超える大畦畔で、下層水田の畦畔とも一致していることから、土地区画の主要な畦畔として機能していたと考えられる。これらの主要畦畔の南北軸は、真北から2～10度ほど東偏して作られている。

3）水口（第28図）

水口24ヶ所確認された。これらの多くは、東西方向と南北方向の畦畔が接する水田のコーナー部分に設置され、わずかに畦畔中央部を切断する例も見られる。これらの水口は、自然地形を反映し、西から東、または北から南へ向かって水が流れるように配置されている。

1水口

（位　　置）G－19グリッドに位置し、7号水田と8号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）10号畦畔と6号畦畔の途切れ部の幅は約1mを測り、7号水田から8号水田、9号水田へは10cm程落差が認められる。配水方向は、7号水田から8号及び9号水田である。

2水口

（位　　置）G－20グリッドに位置し、6号水田と8号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）10号畦畔と11号畦畔の途切れ部幅は約60cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、6号水田から8号水田である。

3水口

（位　　置）F－20グリッドに位置し、11号水田と8号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）11b号畦畔と12号畦畔の途切れ部幅は約60cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、11号水田から8号水田である。

4水口

（位　　置）E－20グリッドに位置し、11号水田と12号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）16号畦畔と12号畦畔の途切れ部幅は約30cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、11号水田から12号水田である。

5水口

（位　　置）E－20グリッドに位置し、12号水田と13号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）17号畦畔と12号畦畔の途切れ部幅は約640cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、12号水田から13号水田である。

6水口

（位　　置）C－19グリッドに位置し、13号水田と14号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）18号畦畔と13号畦畔の途切れ部幅は約50cmで、水口を挟む水田間の落差は約18cmほどで、水の落ち際がやや深い窪みとなる。配水方向は、13号水田から14号水田である。

7水口

（位　　置）C－19グリッドに位置し、14号水田と10号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）13号畦畔と14号畦畔の途切れ部幅は約70cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、14号水田から10号水田である。

8水口

（位　　置）G－24グリッドに位置し、18号水田と15号水田の西側境に位置する。

（規模・配水方向）26号畦畔と24号畦畔の途切れ部幅は約40cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、18号水田から15号水田である。

（その他）8水口に接する26号畦畔端部上面には、馬の下顎骨が検出され、近接して木が植えられていた。これらの遺構は、8号水口の水口まつりの痕跡と推定される。

9水口

（位　　置）D－22グリッドに位置し、16号水田と17号水田の南側の境に位置する。

（規模・配水方向）25号畦畔と22号畦畔の途切れ部幅は約30cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、16号水田から17号水田である。

10水口

（位　　置）C－21グリッドに位置し、13号水田と14号水田の北側境に位置する。

（規模・配水方向）22号畦畔と18号畦畔の途切れ部幅は約40cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、13号水田から14号水田である。

11水口

（位　　置）C－22グリッドに位置し、17号水田と14号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）22号畦畔と23号畦畔の途切れ部幅は約40cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、17号水田から14号水田である。

12水口

（位　　置）D－23グリッドに位置し、16号水田と17号水田の北側の境に位置する。

（規模・配水方向）25号畦畔と28号畦畔の途切れ部幅は約80cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、16号水田から17号水田である。

13水口

（位　　置）G－26グリッドに位置し、21号水田と18号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）34号畦畔の途切れ部幅は上層の2号溝によって切られており不明である。水口を挟む水田間の落差は約8cmである。配水方向は、21号水田から18号水田である。

14水口

（位　　置）F－24グリッドに位置し、18号水田と19号水田の南側の境に位置する。

（規模・配水方向）27号畦畔と26号畦畔の途切れ部幅は約30cmで、水口を挟む水田間の落差は約50cmで、19号水田側の水落ち際が深く窪んでいる。配水方向は、18号水田から19号水田である。

15水口

（位　　置）C－25グリッドに位置し、19号水田と20号水田の北側境に位置する。

（規模・配水方向）32号畦畔と33号畦畔の途切れ部幅は約70cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、19号水田から20号水田である。

16水口

（位　　置）C－25グリッドに位置し、25号水田の南東隅に位置する。

（規模・配水方向）38号畦畔と32号畦畔の途切れ部幅は約20cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、25号水田から20号水田である。

17水口

（位　　置）F－26グリッドに位置し、21号水田と22号水田の、南側境に位置する。

（規模・配水方向）35号畦畔と31号畦畔の途切れ部幅は約60cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、21号水田から22号水田である。

18水口

（位　　置）E－26グリッドに位置し、23号水田と25号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）37号畦畔と32号畦畔の途切れ部幅は約80cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、23号水田から25号水田である。

19水口

（位　　置）E－27グリッドに位置し、22号水田と25号水田の境に位置する。20水口と連結している。

（規模・配水方向）40号畦畔と37号畦畔の途切れ部幅は約50cm、41号畦畔と37号畦畔の途切れ部幅約160cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、22号水田から25号水田である。

20水口

（位　　置）E－28グリッドに位置し、24号水田と25号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）41号畦畔と40号畦畔の途切れ部幅は約100cmで、水口を挟む水田間の落差は約20cmである。配水方向は、24号水田から25号水田である。

21水口

（位　　置）B－27グリッドに位置し、25号水田と26号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）43号畦畔と38号畦畔の途切れ部幅は約20cmで、水口を挟む水田間の落差は約15cmである。配水方向は、25号水田から26号水田である。

22水口

（位　　置）B－27グリッドに位置し、26号水田と20号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）38号畦畔と44号畦畔の途切れ部幅は約20cmで、水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、26号水田から20号水田である。

23水口

（位　　置）B－28グリッドに位置し、24号水田と26号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）調査区がこの地点で切れるため、水口幅は不明である。水口を挟む水田間の落差は約10cmで、配水方向は24号水田から26号水田である。

24水口

（位　　置）G－17グリッドに位置し、2号水田と3号水田の境に位置する。

（規模・配水方向）2号畦畔は土盛をほとんどもたず、若干の段差をなし、それに接して24号水口が設けられている。本水口は直径100cmほどの不整形の落ち込みとなっており、これが水落ち際の窪みと考えられる。水口を挟む水田間の落差は約10cmである。配水方向は、２号水田から３号水田である。

４）溝（第28図）

溝は５条確認された。４号、５号溝は１～３号水田の南側を画するように東西に流路をとり、それらの排水路として機能していたと思われる。また、７・８号溝は24号水田の北側にあり、その取水またはヌルメの役割をもっていた可能性がある。６号溝は５号畦畔の中央部に切り込まれており、畎畝状の施設と考えられる。

４号溝

（位　　置）E～I－14～16グリッドに位置し、２区の南端部を西から東へ向かって流れる。東側で５号溝と連結し、１～３号水田に接する。

（形状・規模）確認部分は幅1.2～1.4m、長さ24m、深さ0.4mほどの溝で、東端部は５号溝と連結する。１～３号水田の南側に位置しており、それらの水田の排水路と考えられる。

５号溝

（位　　置）E～I－14・15グリッドに位置し、２区の南端部を西から東へ向かって流れる。東側で４号溝と連結する。

（形状・規模）確認部分は幅1.0m、長さ22m、深さ0.4mほどの溝で、東端部は4号溝と連結する。

６号溝

（位　　置）C～G－17・18グリッドに位置し、５号畦畔に中央部に沿って西から東へ向かって流れる。

（形状・規模）確認部分は幅0.4～0.8m、長さ22m、深さ0.3mほどの溝で、西端部は２号水田の北側で途切れる。２・３・５号水田の北側に位置しており、それらの水田の取水路として機能した畎畝と考えられる。

7号溝

（位　　置）D～J－29グリッドに位置し、2区の北端部を西から東へ向かって流れる。東側で8号溝と交差し、24号水田の北側を区画する。

（形状・規模）確認部分は幅0.3～1.0m、長さ8m、深さ0.1mほどの浅い溝で、24号水田の取水路と考えられる。

8号溝

（位　　置）D～E－29グリッドに位置し、2区の北端部を西から東へ向かって流れる。7号溝と交差し、24号水田の北側を区画する。

（形状・規模）確認部分は幅1.0～1.5m、長さ11m、深さ0.2mほどの浅い溝で、24号水田の取水路と考えられる。

5）畦畔木

2区上層水田の38～43号畦畔上には、植栽された立ち木列（以下、畦畔木列）が検出されている。畦畔木の間隔は0.3m～3mほどで、ヤナギ属が最も多く認められる。また、針葉樹やキブシ、ウツギ属などの樹種も認められる。これらの詳細な内容は、第4章第3節を参照していただきたい。

3．平安～鎌倉時代の遺構と遺物（下層水田）

2区堆積層の11a層とした層上面に水田面及び水田遺構が検出された。この面は、上層水田下にある厚さ10～20cmのシルト質細砂層の直下に存在する。確認された遺構は、水田19面、畦畔29本、水口5ヶ所があり、出土遺物から平安時代後半～鎌倉時代（10世紀～13世紀）の時期のものと判断された。

1）水田（第50図、第5表）

水田面は2区全体に渡って展開し、上層水田と同じく、地形に沿って北西から南東に向かって傾斜している。水田の最高地点は44号水田で標高264.36m、最低地点は30号水田で標高263.18mあり、東西方向で20mの間に約40cm、南北方向64mの間に約100cm傾斜している。水田面積は、最大の43号水田で320.44㎡、最小の35号水田で32.23㎡と1区画の水田規模の差異が非常に大きい。

各水田内の落差は10～20cm程度で、同一水田内でも南東側が低くなっている。したがって、水田内の水配りは上層水田と同様に北ないし西側の水田から供給され、南または東側の水田に排水されるシステムとなっている。

水田施設は、畦畔、水口などがある。

特殊な遺構としては、38号水田東側の63号畦畔に近接して、オオムギ、コムギの炭化物集中地区が認められ、内部から棒状竹製品と動物骨が出土している（第53図）。この時期の水田祭祀の一端を知る重要な資料である。

2）畦畔（第50図、第7表）

畦畔は29本確認されている。

畦畔の規模は、49・50号畦畔が最大で、下端幅1.8m、高さ20cmを測る。また、47号、48号、52号、53号～56号、59号、60号、63号～65号、67～69号、71号畦畔も下端幅が1mを超える大畦畔で、上層水田と比較して規模の大きい畦畔が多く認められる。これらの主要畦畔の南北軸は、真北から2～10度ほど東偏して作られている。

3）水口（第50図）

水口は5ヶ所確認された。この内、28号、30号水口は水田隅に設けられたコーナー型で、26号、27号水口は畦畔の中央部切断型である。これらの水口は上層水田と同じく、自然地形を反映し、西から東、または北から南へ向かって水が流れるように配置されている。

26水口

（位　　置）H－16グリッドに位置し、27号水田と28号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）45号畦畔の中央部を切断するように、幅約1m、深さ0.3m、長さ4.8mの溝状の窪みとなる。27号水田から28号水田へは10cm程落差が認められ、配水方向は27号水田から28号である。

27水口

（位　　置）G－16グリッドに位置し、28号水田と29号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）46号畦畔の中央部を切断するように、幅約0.7m、深さ0.2m、長さ3mの溝状の窪みとなる。28号水田から29号水田へは10cm程落差が認められ、配水方向は28号水田から29号である。

28水口

（位　　置）D－17グリッドに位置し、33号水田と30号水田の西側隅の境界に存在する。

（規模・配水方向）49号畦畔と50号畦畔を切断するように設けられた、幅約0.7m程の水口である。33号水田から30号水田へは10～20cm程の落差が認められ、配水方向は33号水田から30号である。

29水口

（位　　置）E－25グリッドに位置し、40号水田と41号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）64号畦畔を切断するように設けられた、幅約1.0m程の水口である。40号水田から41号水田へは10～15cm程落差が認められ、配水方向は40号水田から41号である。本水口からは、水のコントロールするための板が発見された。

（出土遺物）第81図174は、水口部に設置された水の制御板で、曲げ物の底板が転用されている。長さは32.3cm、幅9.3cm、厚さ1.2cmの板で、側面に目釘用の小穴が認めれれる。

30水口

（位　　置）B－27グリッドに位置し、45号水田と41号水田の西側隅の境界に存在する。

（規模・配水方向）72号畦畔と69号畦畔を切断するように設けられた、幅約0.6m程の水口である。45号水田から41号水田へは10～15cm程の落差が認められ、配水方向は45号水田から41号である。

4）炭化物集中地点（第53図）

（位　　置）D－23グリッドに位置する。63号畦畔から2.5mほど西側の38号水田内に存在する。

（規模・形状）直径60cm程の不整円形の浅い掘込みに、コムギはい乳とオオムギ穎果、イネ穎の炭化物が集中し、内部から先端部が焼けたタケ亜科の木材片が出土している。また、近接して動物上腕骨が出土している。

5）杭列（第65～67図、第82～83図189～219）

2区下層水田の中で、幹線的な役割をもったと考えられる69号畦畔、67号畦畔には畦畔を杭補強した痕跡が確認されている。第4章第3節の第165図ように、杭列は69号畦畔の北側端部に集中し、67号畦畔ではほぼ一列に打ち込まれている。これらの杭は、水田上部に出た頭部が洪水等で欠損しており使用当時の長さが明らかではないが、短いもので長さ17cm、長いもので77cmを測る。太さは4～5cmで、先端部を尖らせて打ち込まれてい

る。杭の断面を観察すると母材をみかん割りに分割したものと考えられる。

樹種同定の結果、杭に使用された材は、ヒノキ属が多く、スギ、クリ、トウヒ属、カラマツなども用いられている。

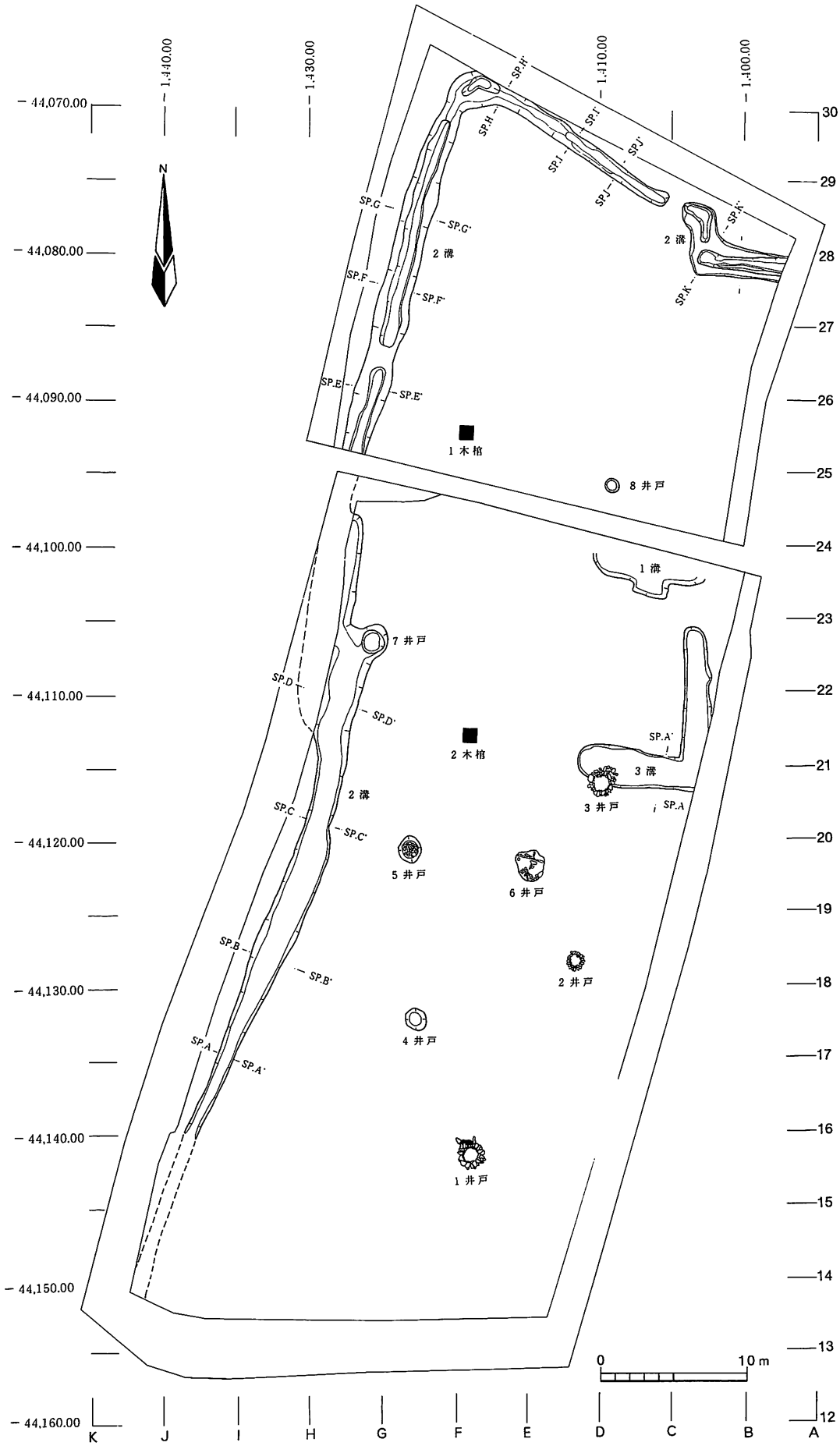
6）出土遺物とその出土状況（第81～84図）

2区下層水田に伴う遺物は、土師器、土師質土器、陶磁器、木製品などがある。

土師器（161）　D－17グリッド下層水田から出土した土師器坏の口縁部破片である。口縁部は玉縁状の口縁となり、甲斐型土器Ⅻ期に比定され、下層水田の上限が平安時代後期の10世紀とする根拠としている。

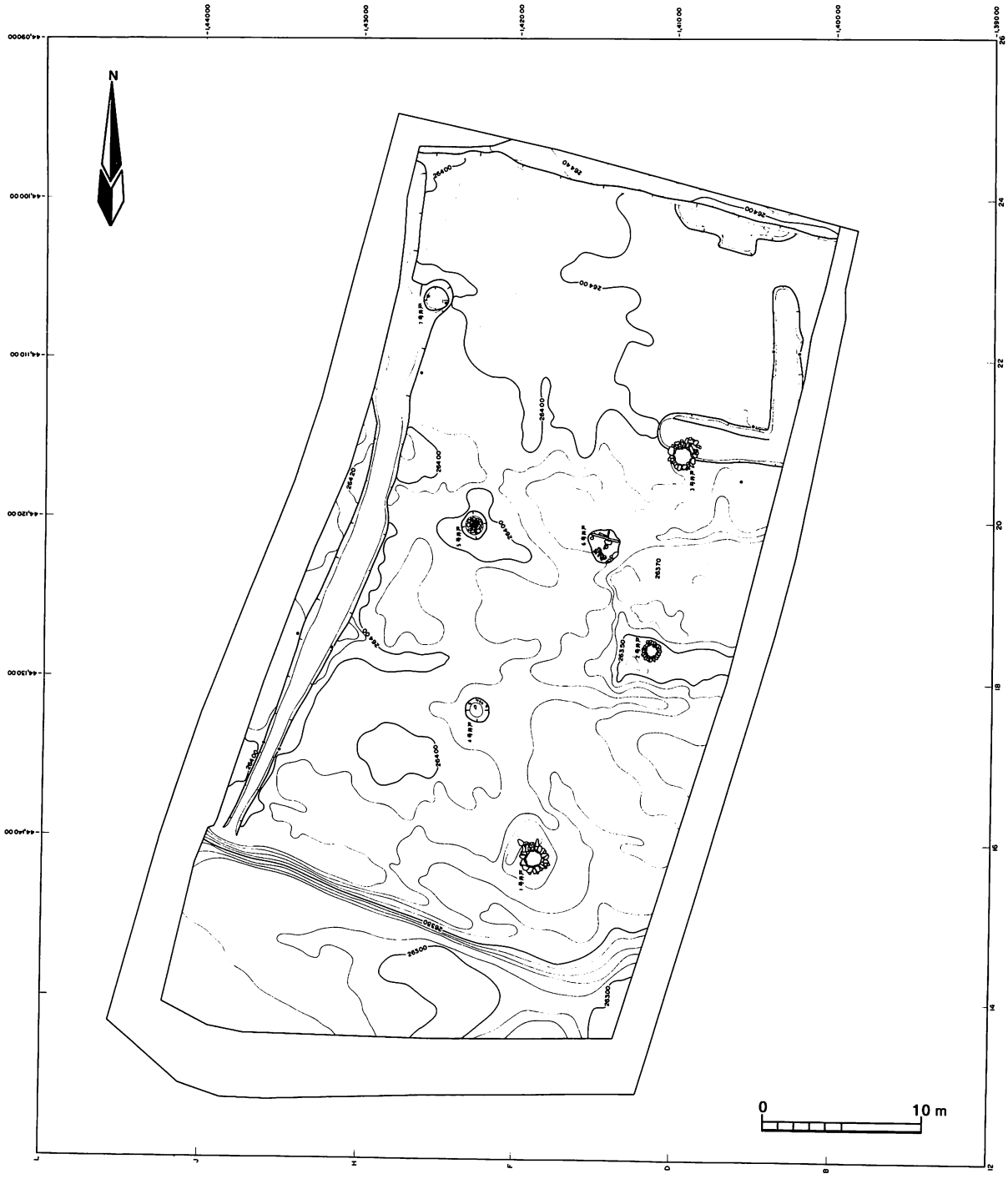
土師質土器（159・160）　いずれも口縁部で、159は口縁端部が尖る坏、160は胴部がやや内湾した皿である。

木製品（162～174、189～219）　162は内外面に黒色の漆を塗った椀である。163は41号水田の中のD－24グリッドから出土した木製笛で、長さ5.1㎝、直径1.4㎝の円筒形の中心部に孔を貫通させ、上部に吹口を削り出している。164～172は、棒状の木製品である。この内、170は両端部を尖らせた、断面円形の形状を示し、箸状の木製品と判断される。171・172は先端部を尖らせた斎串状の木製品で、171では頭頂部を2つに割いている。また、172では両端部が焼けて炭化している。173・174は曲物の底板で、いずれも破損品を転用して、水口の板などに使用していたと考えられる。173では固定のための桜の皮が残されており、174では側面に目釘穴が見られる。

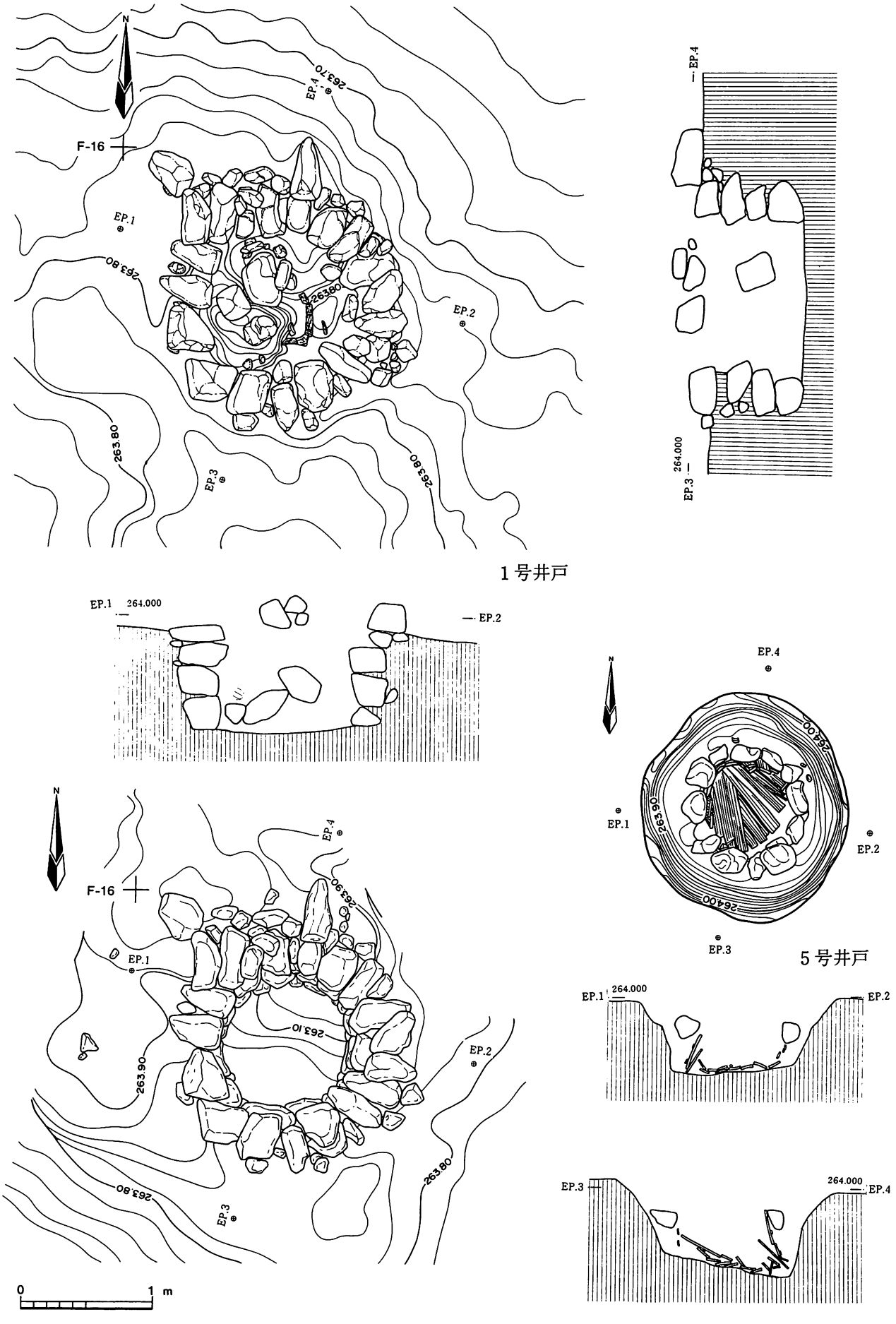


第18図　2区寺院址関係遺構配置図

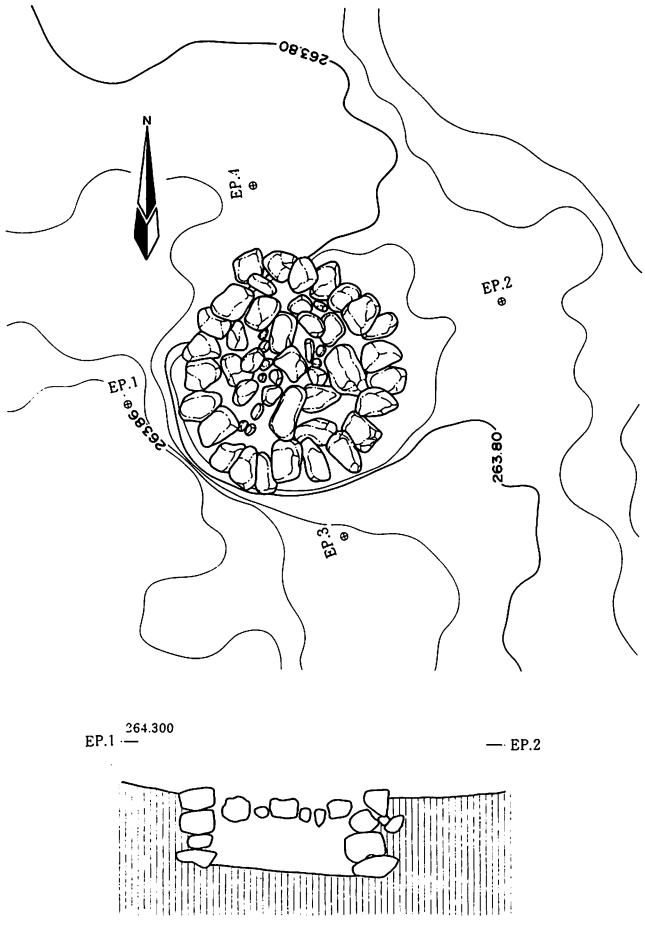
二本柳遺跡　2区(上層)

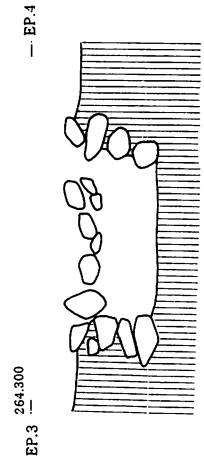


第19図　2区寺院址面等高線図（全体）

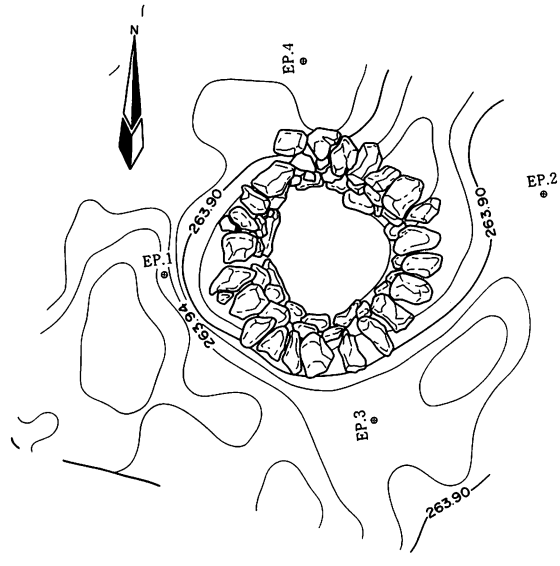

N
F-16
EP.1
EP.2
EP.3
EP.4
263.70
263.80
264.000
1号井戸
5号井戸
264.00
265.90
263.90
263.10
0
1 m

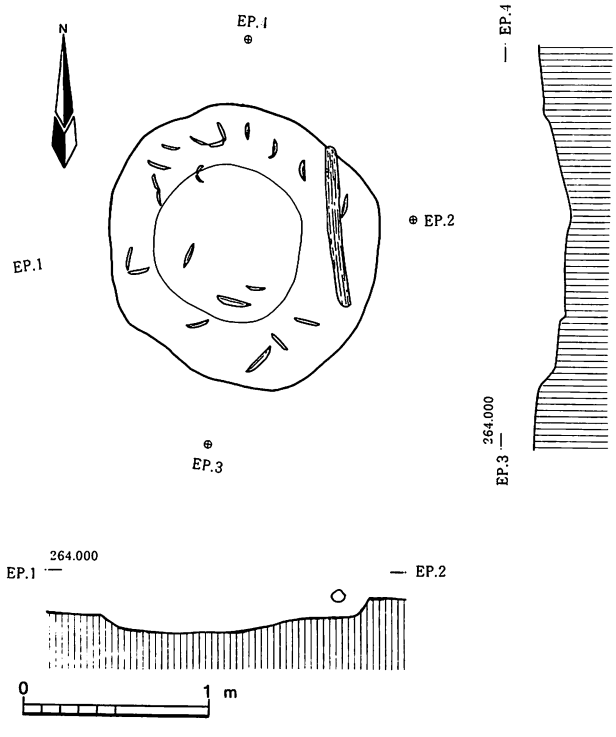
第20図　1号・5号井戸



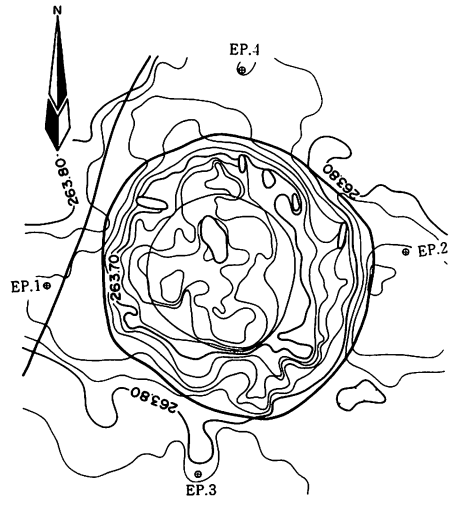


2号井戸

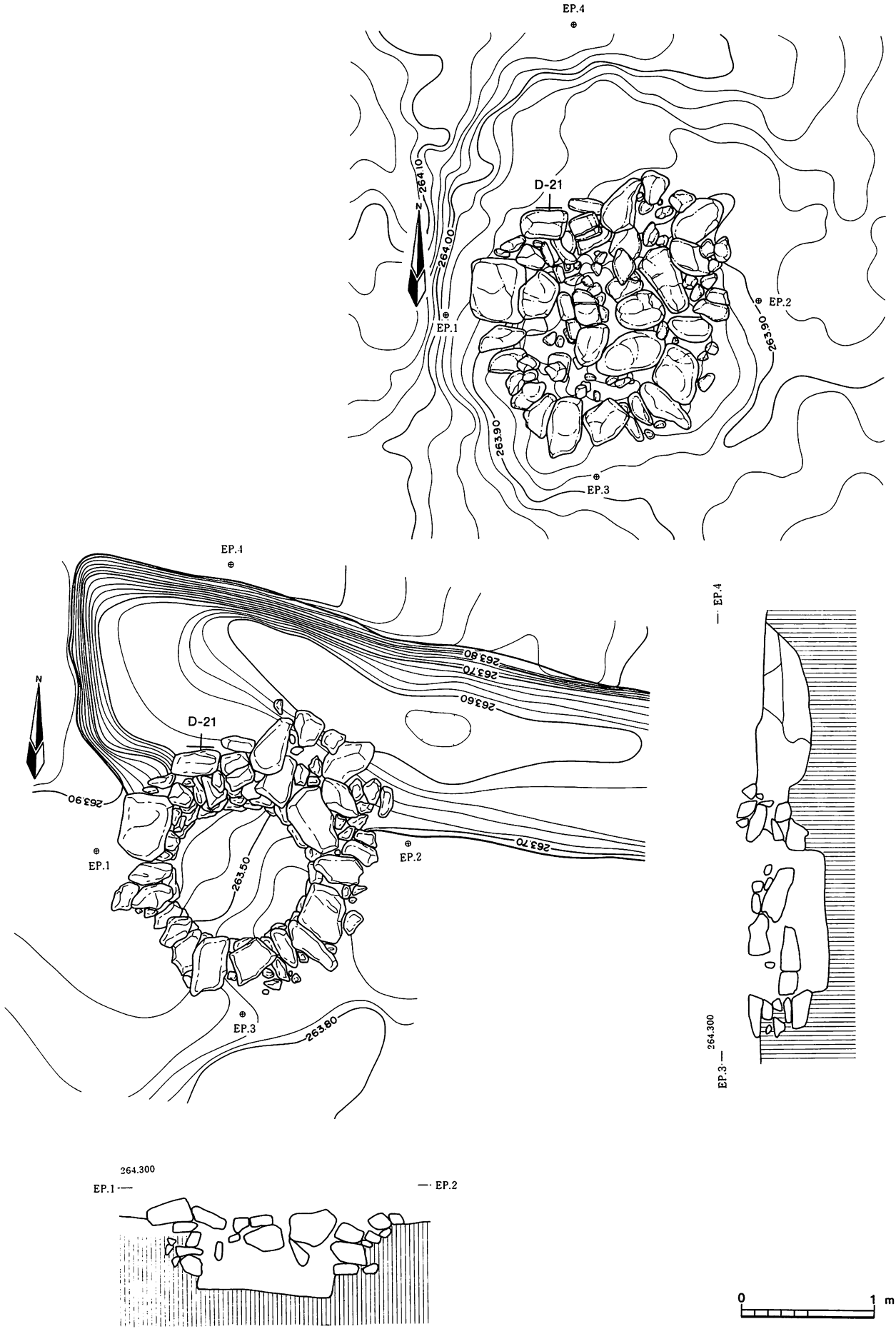




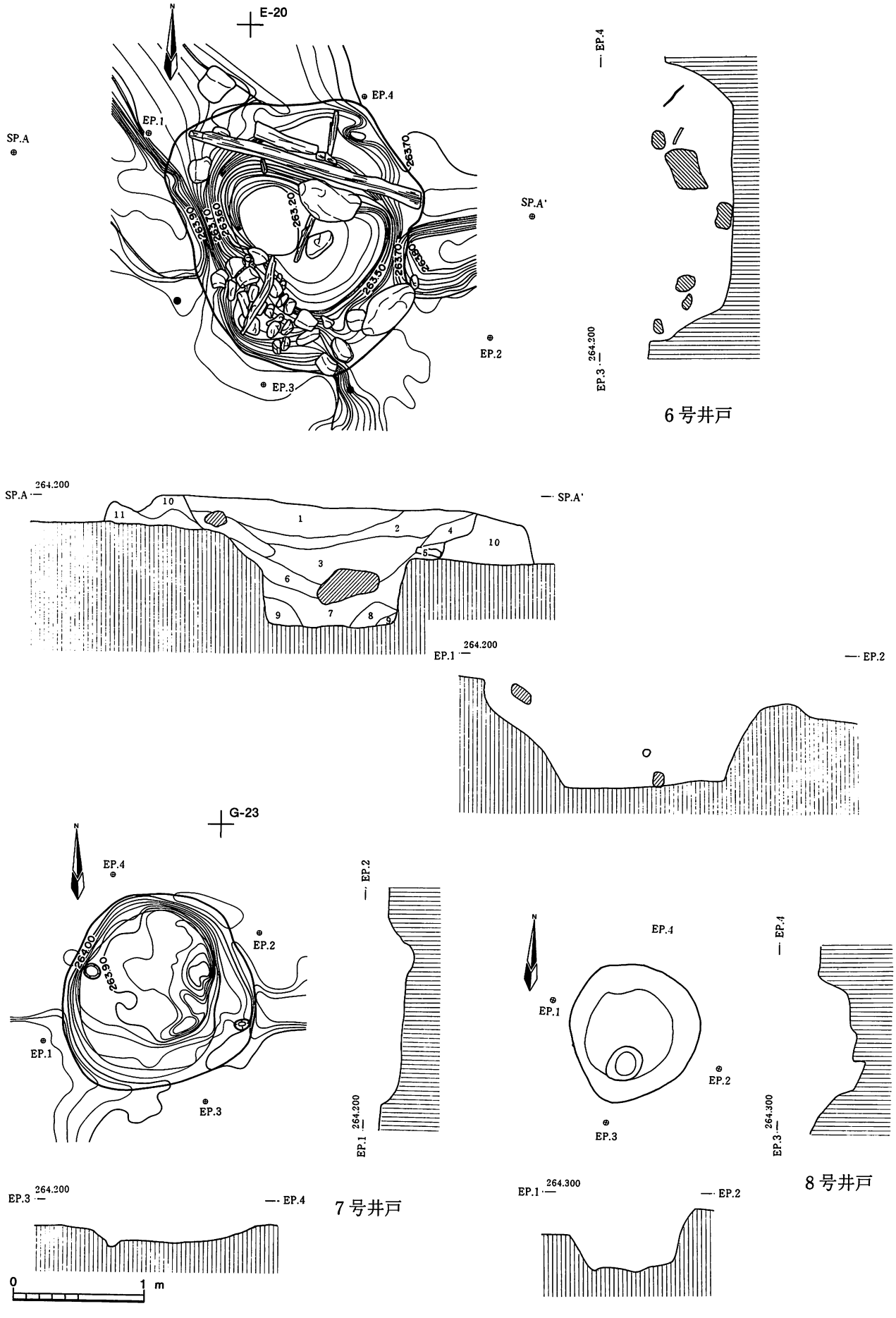
4号井戸



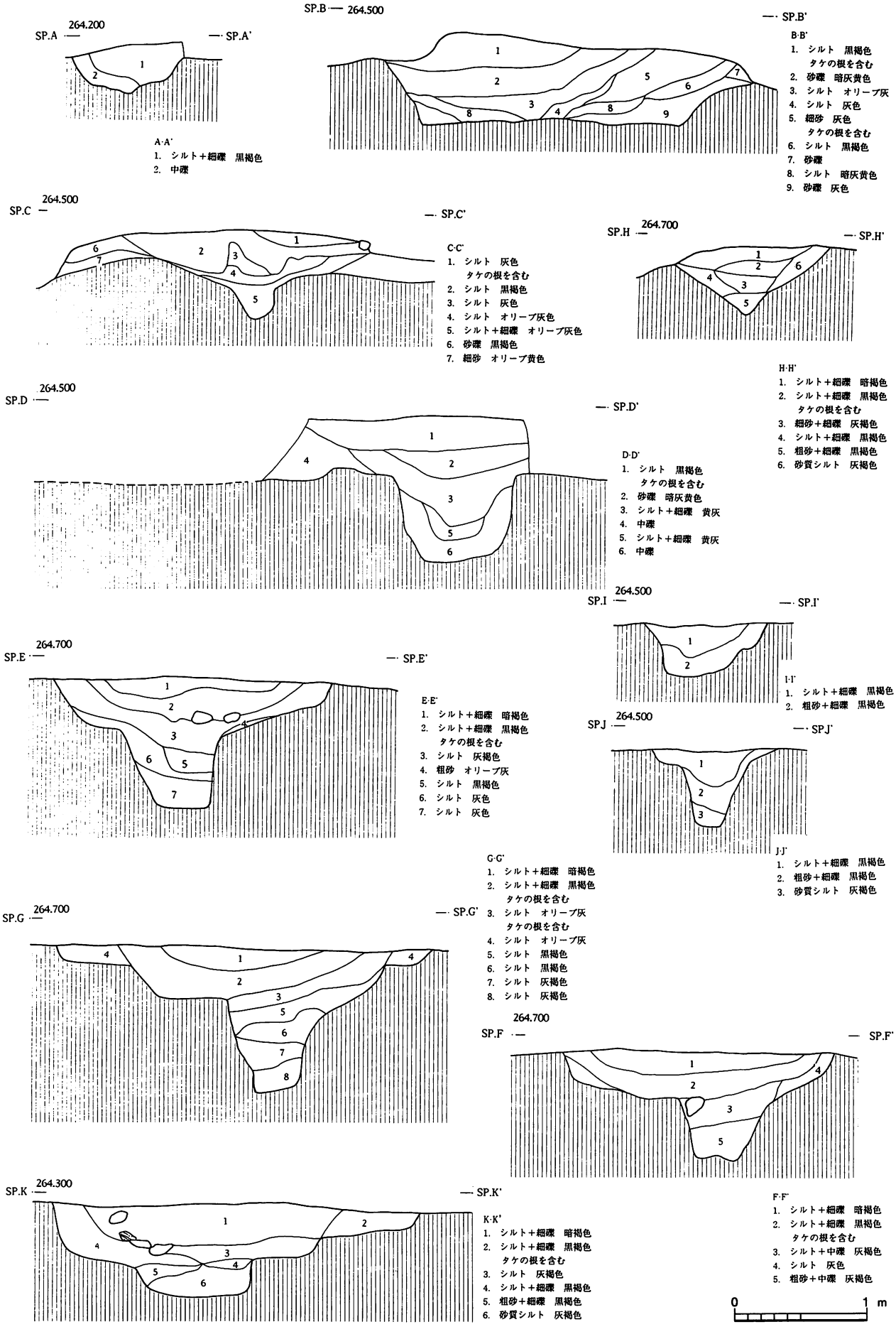
第21図　2号・4号井戸


EP.4
D-21
264.10
264.00
N
EP.1
EP.2
263.90
263.90
EP.3
EP.4
N
263.80
263.70
263.60
D-21
263.90
EP.1
263.50
EP.2
263.70
EP.3
263.80
EP.4
264.300
EP.3
264.300
EP.1
EP.2
0
1 m

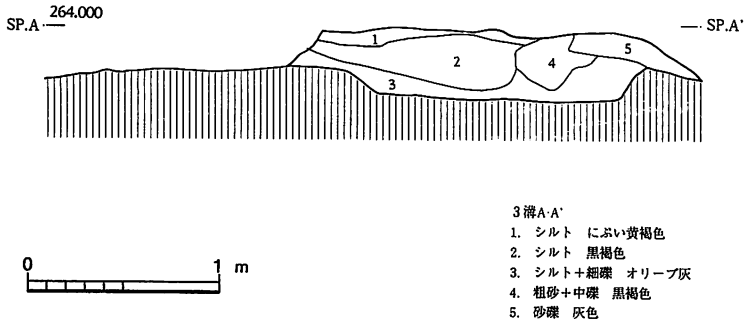
第22図　3号井戸

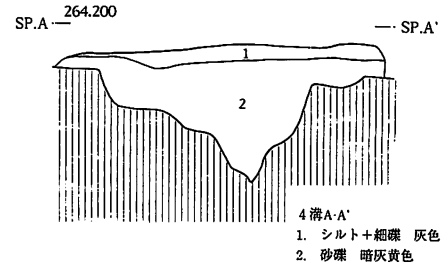

E-20
N
EP.1
EP.2
EP.3
EP.4
SP.A
SP.A'
263.70
263.20
263.90
263.50
264.200
264.300
6号井戸
G-23
264.00
7号井戸
8号井戸
0
1 m

第23図　6号～8号井戸

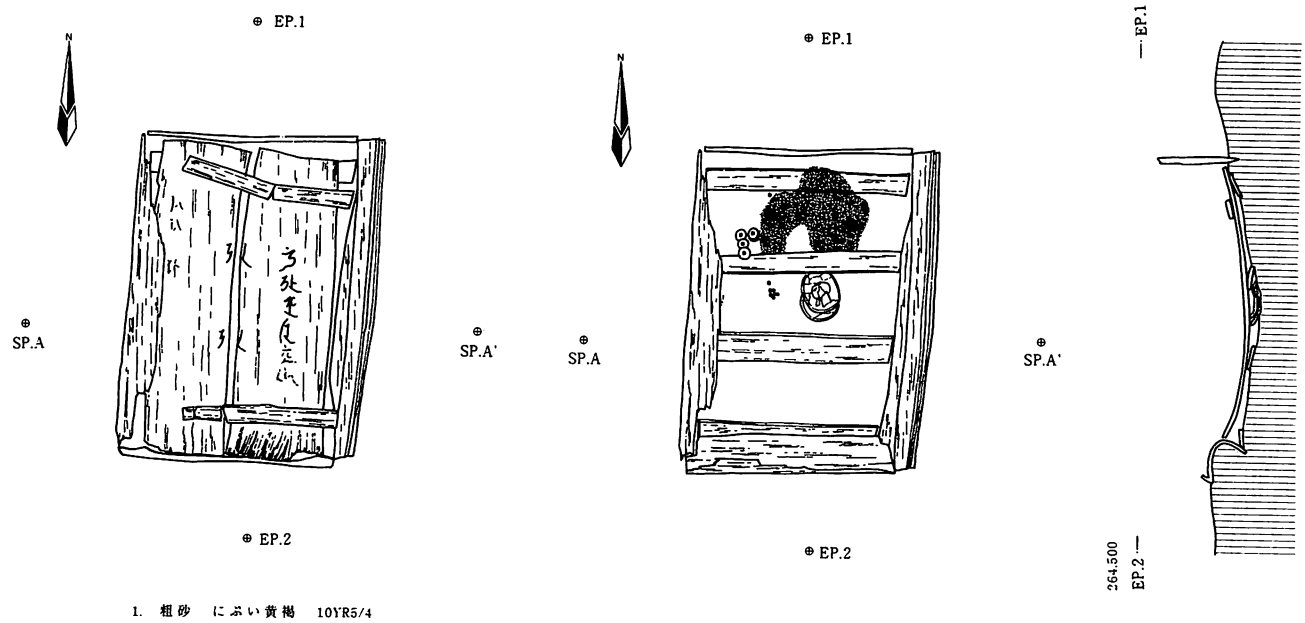


第24図　2号溝セクション



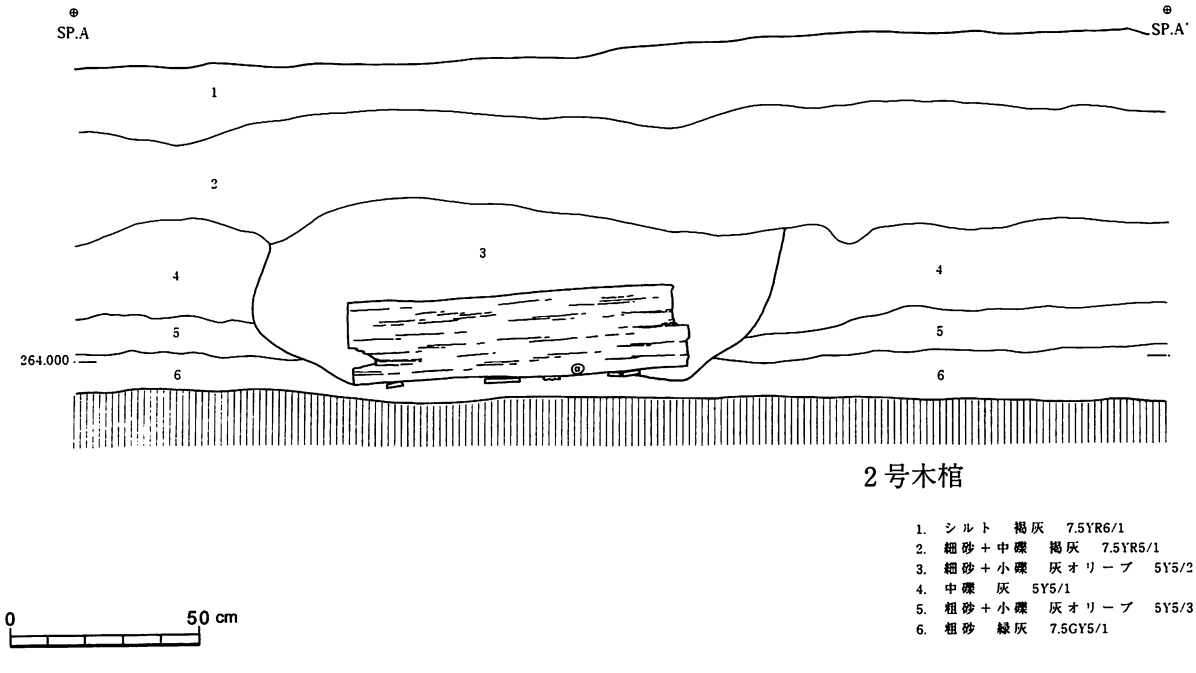


第25図　3号・4号溝セクション図



1. 粗砂　にぶい黄褐　10YR5/4
2. 粗砂　灰黄褐　10YR4/2
3. 中砂　灰黄褐　10YR5/2
4. 細砂　灰　5Y5/1
5. シルト　黒　10YR2/1
6. シルト　黒褐　10YR3/1
7. シルト＋小礫　黒褐　10YR2/2
8. シルト　にぶい黄褐　10YR5/4
9. 細砂　灰黄褐　10YR5/2
10. 中砂　黄灰　2.5Y4/1

1号木棺

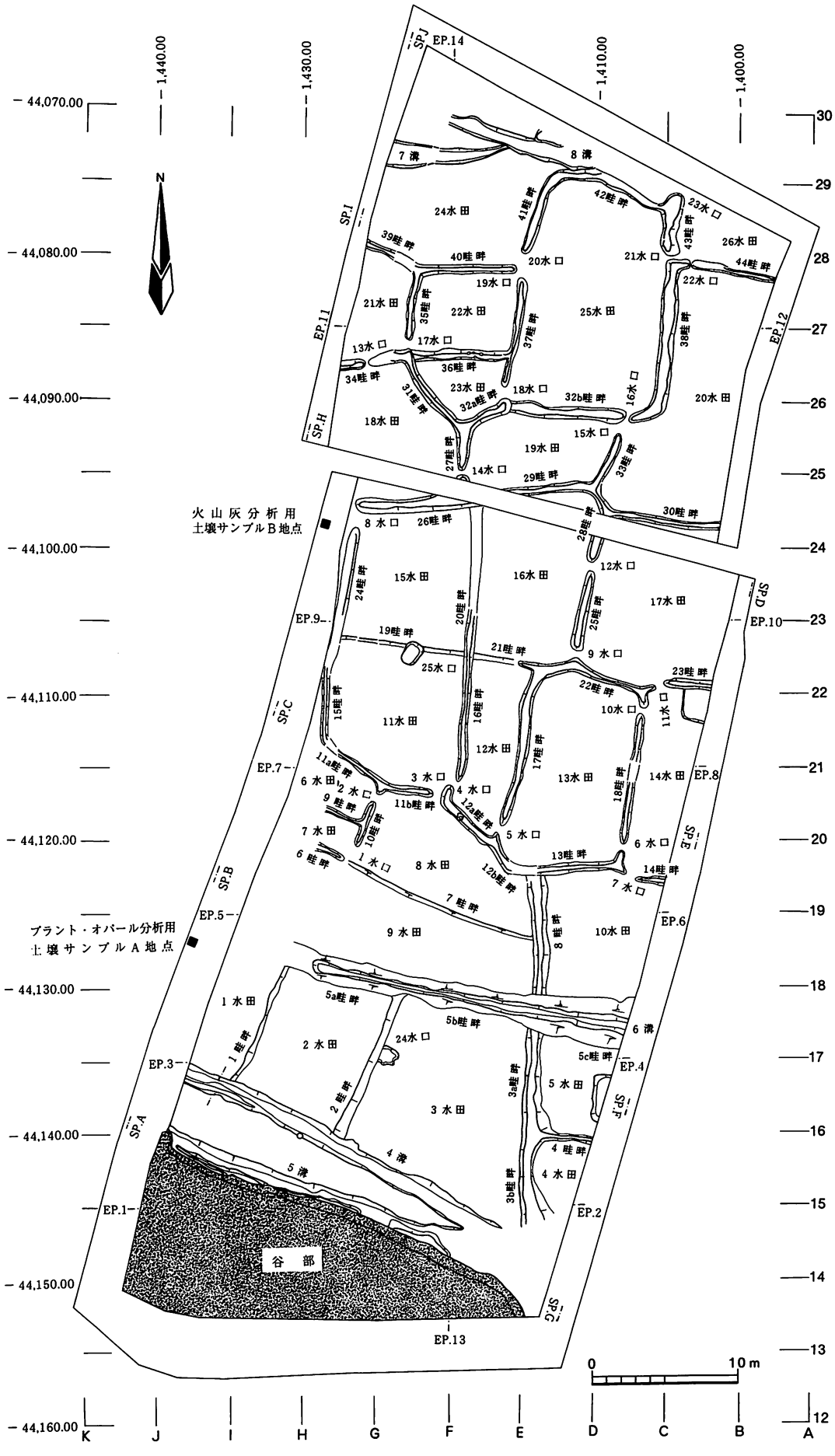


2号木棺

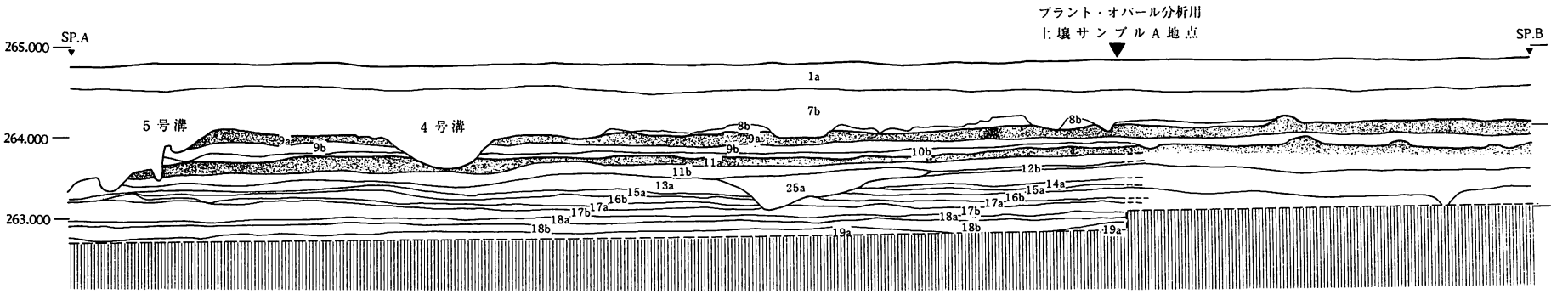
1. シルト　褐灰　7.5YR6/1
2. 細砂＋中礫　褐灰　7.5YR5/1
3. 細砂＋小礫　灰オリーブ　5Y5/2
4. 中礫　灰　5Y5/1
5. 粗砂＋小礫　灰オリーブ　5Y5/3
6. 粗砂　緑灰　7.5GY5/1

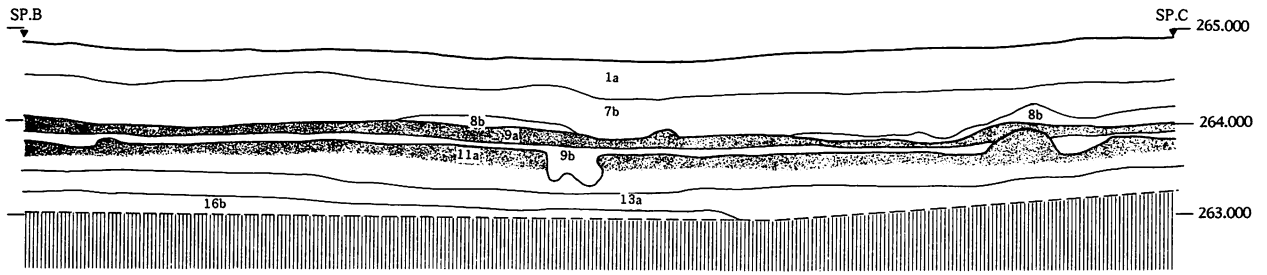
第26図　1号・2号木棺出土

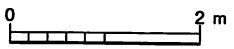
第27図　2区・2B区上層水田面等高線図（全体）



第28図　2区・2B区上層水田

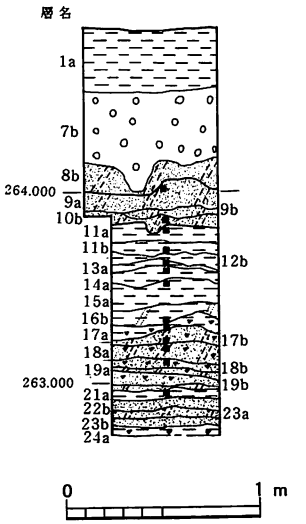


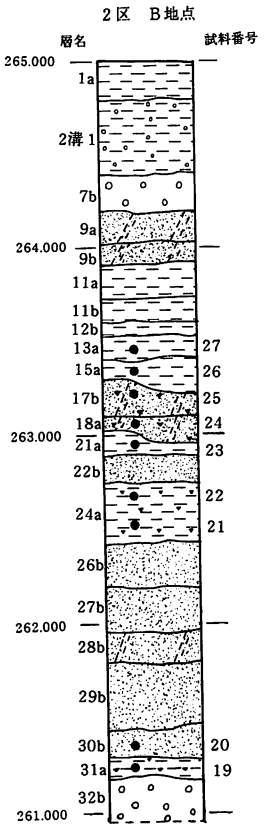




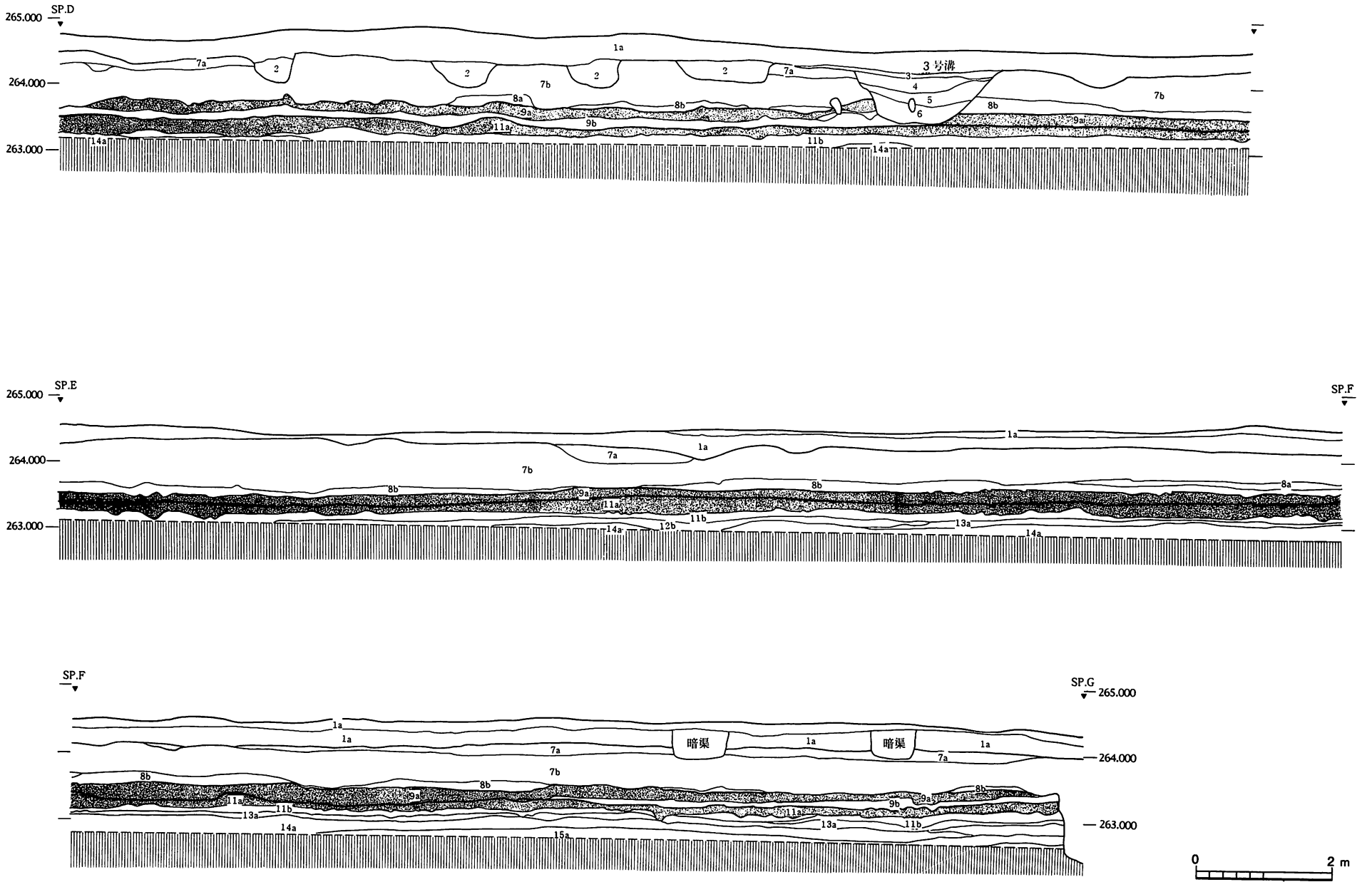
層名	粒径区分	色調	特色
1a	シルト	褐灰7.5YR6/1	鉄分斑文
1a'	中砂	褐灰7.5YR5/1	鉄分斑文
2	シルト質細砂	褐灰7.5YR5/1	鉄分斑文
3	中礫	褐灰7.5YR6/1	3溝
4	シルト	黒褐7.5YR3/1	
5	砂礫	褐7.5YR5/6	
6	砂礫	灰7.5YR4/1	
7a	中礫	灰7.5YR4/1	
7b	中礫	褐灰7.5YR5/1	鉄分斑文
8a	粗砂	黄灰2.5Y5/1	
8b	細砂	暗灰黄2.5Y5/2	
9a	シルト質細砂	暗灰黄2.5Y4/2	上層水田面（中世後半）
9b	シルト質細砂	暗灰黄2.5Y4/2	
10b	シルト質細砂	灰N6/1	
11a	シルト	黒2.5Y2/1	下層水田面（古代末～中世前半）
11b	シルト	黒褐2.5Y3/1	
12b	シルト	灰N6/1	
13a	シルト	暗灰黄2.5Y5/2	
14a	シルト	黒2.5Y2/1	植物遺体を含む
15a	シルト	黒褐2.5Y3/1	1ミリ大の白色砂を含む
16b	シルト＋粗砂	黒褐2.5Y3/1 灰N6/1	

層名	粒径区分	色調	特色
17a	シルト	黒褐2.5Y3/1	植物遺体
17b	シルト質細砂	灰N6/1	植物遺体
18a	シルト質細砂	オリーブ褐2.5Y4/3	植物遺体
18b	細砂	灰黄褐10YR6/2	植物遺体
19a	シルト質細砂	灰N6/1	植物遺体
19b	細砂	黄灰2.5Y6/1	植物遺体
20a	シルト質細砂	灰N6/1	
21a	シルト	黒褐10YR3/1	
22b	細砂	暗灰黄2.5Y5/2	
23a	シルト質細砂	暗灰黄2.5Y5/2	
23b	細砂	暗灰黄2.5Y5/2	
24a	シルト	黒褐10YR3/1	
25a	シルト	黒褐10YR3/1	植物遺体
26b	粗砂	灰N6/1	
27b	細砂	灰N6/1	
28b	シルト質細砂	灰N6/1	
29b	粗砂	灰N6/1	
30b	粗砂	灰N6/1	
31a	粗砂	灰N6/1	植物遺体
32b	中礫	オリーブ灰2.5GY5/1	

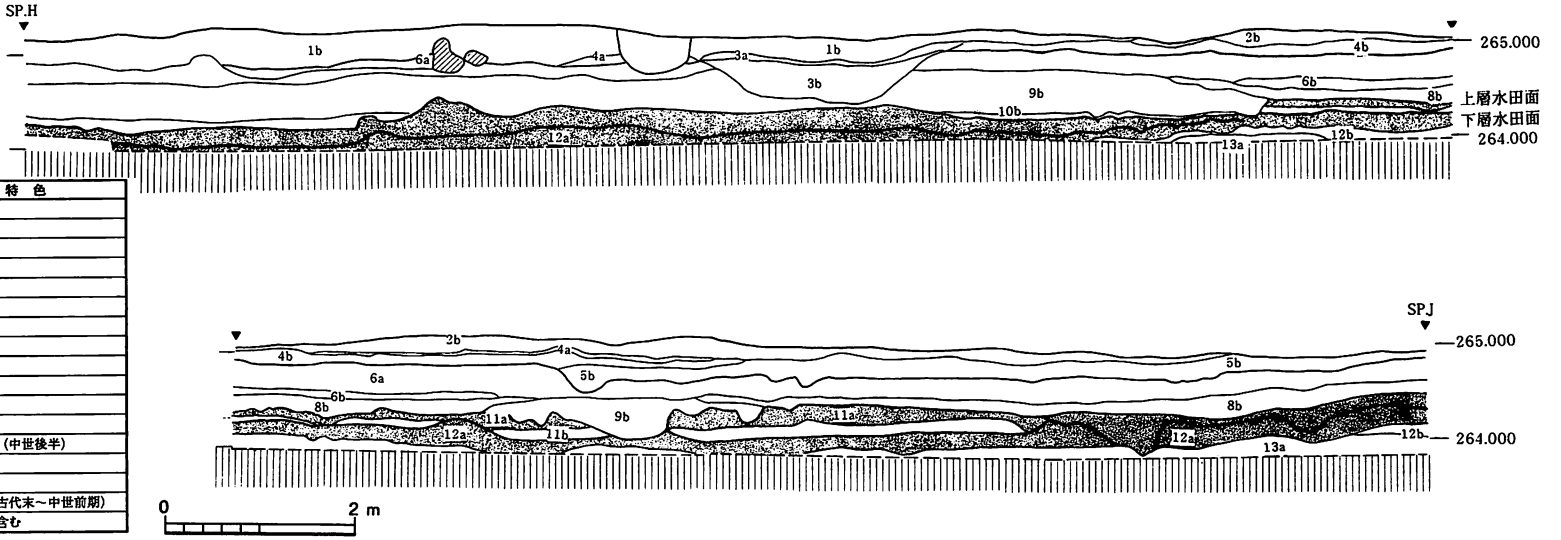




第29図　2区セクション図および土壌サンプリング地点セクション図

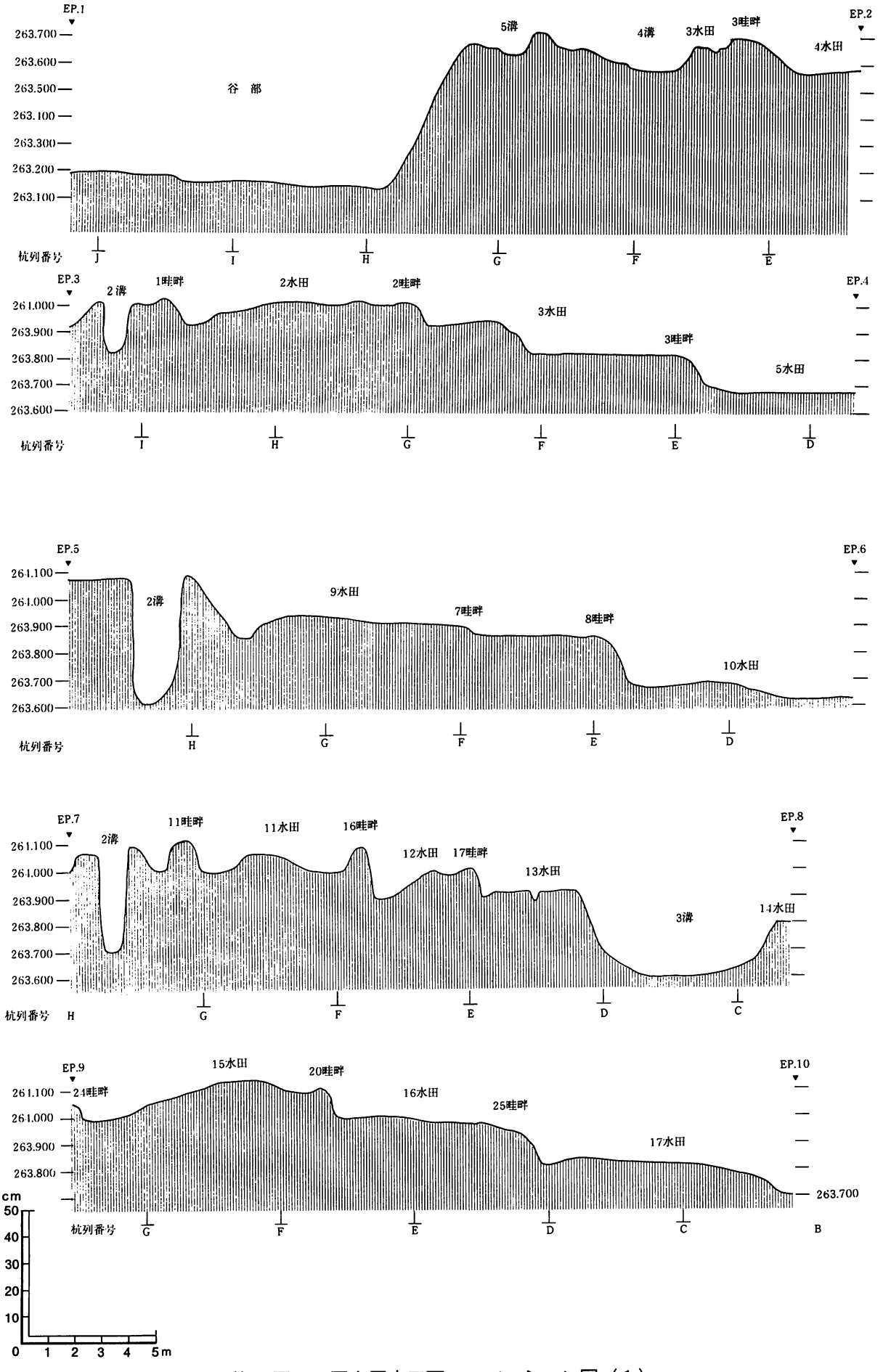


第30図　2区セクション図

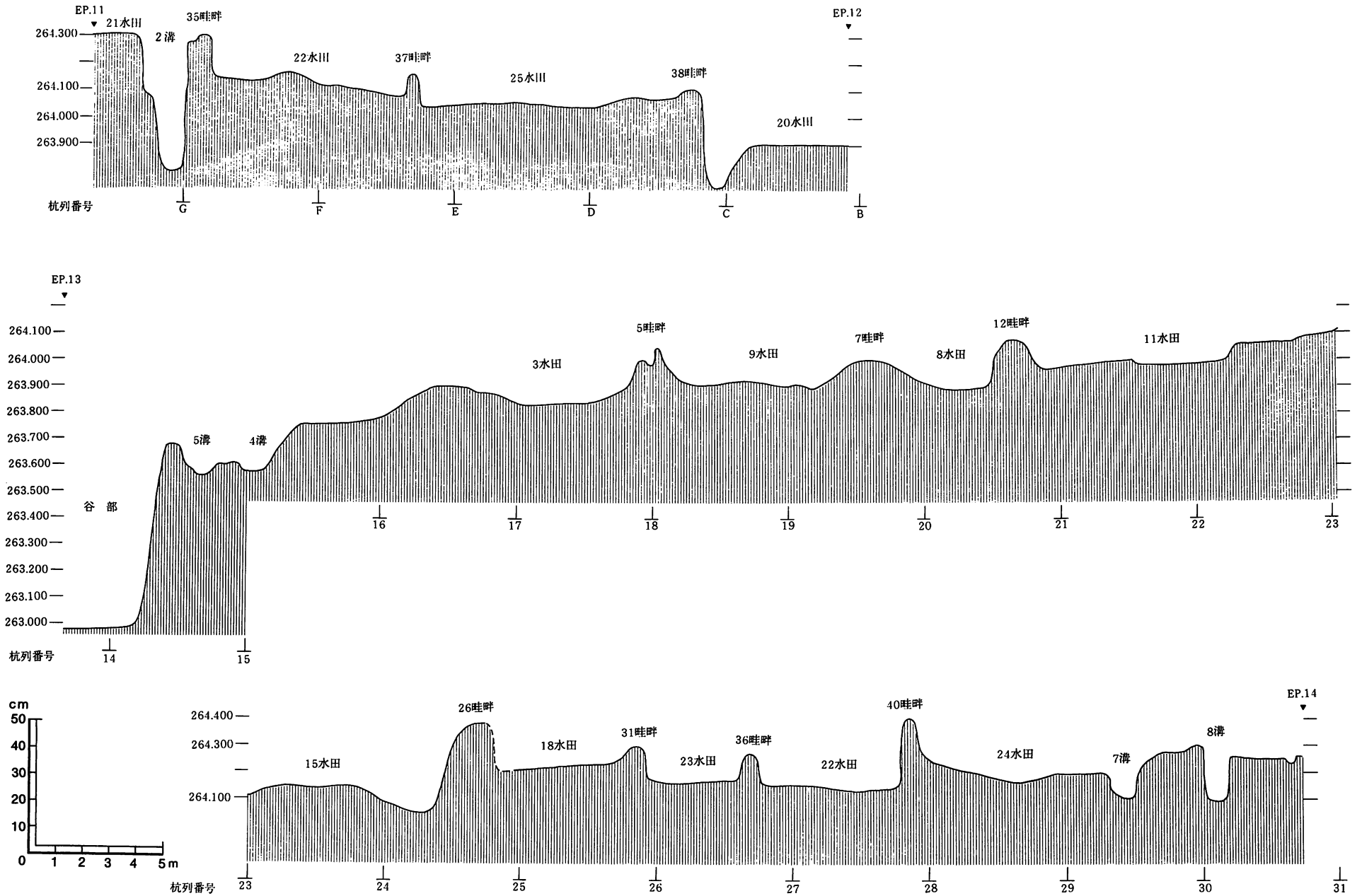


層　名	粒径区分	色　調	特　色
1b	細砂+中礫	灰7.5YR7/1+4/6	
2b	粗砂	にぶい黄褐10YR5/4	
3a	シルト	黒褐7.5YR3/2	植物遺体
3b	細砂	褐灰7.5YR5/1	
4a	シルト	灰黄褐10YR6/2	
5b	中礫	にぶい黄橙10YR6/3	
6a	砂質シルト	褐灰7.5YR4/1	近世水田か？
6b	粗砂	灰7.5YR5.5/1	
7a	シルト	黒褐7.5YR3/2	植物遺体
8b	シルト	褐灰10YR4/1	砂など混入
9b	中礫	にぶい黄橙10YR6/3	
10b	シルト質細砂	褐灰7.5YR4/1	
11a	シルト	褐灰10YR4/1	上層水田面（中世後半）
11b	シルト	黒10YR2/1	
12a	シルト	黒7.5YR1.7/1	
12b	シルト	褐灰10YR6/1	下層水田（古代末～中世前期）
13a	シルト	黒褐7.5YR3/1	植物遺体を含む

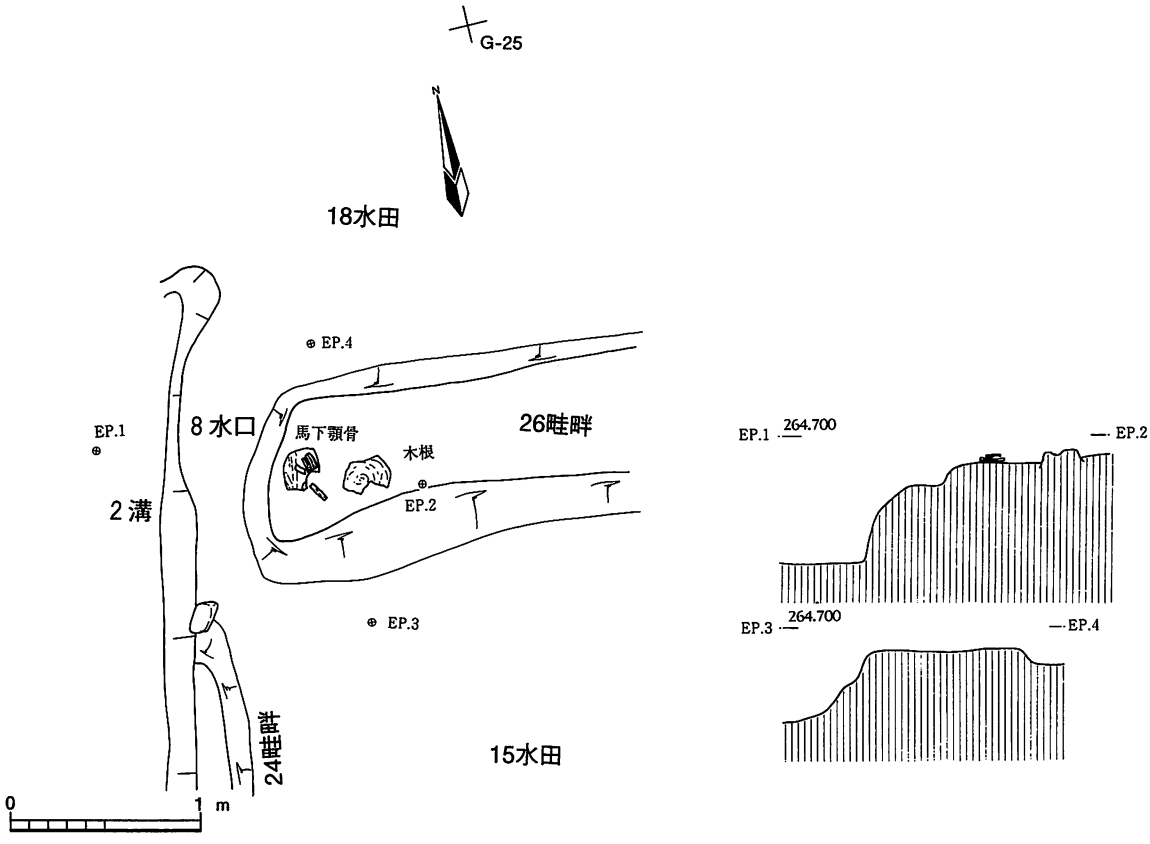
第31図　２B区セクション図



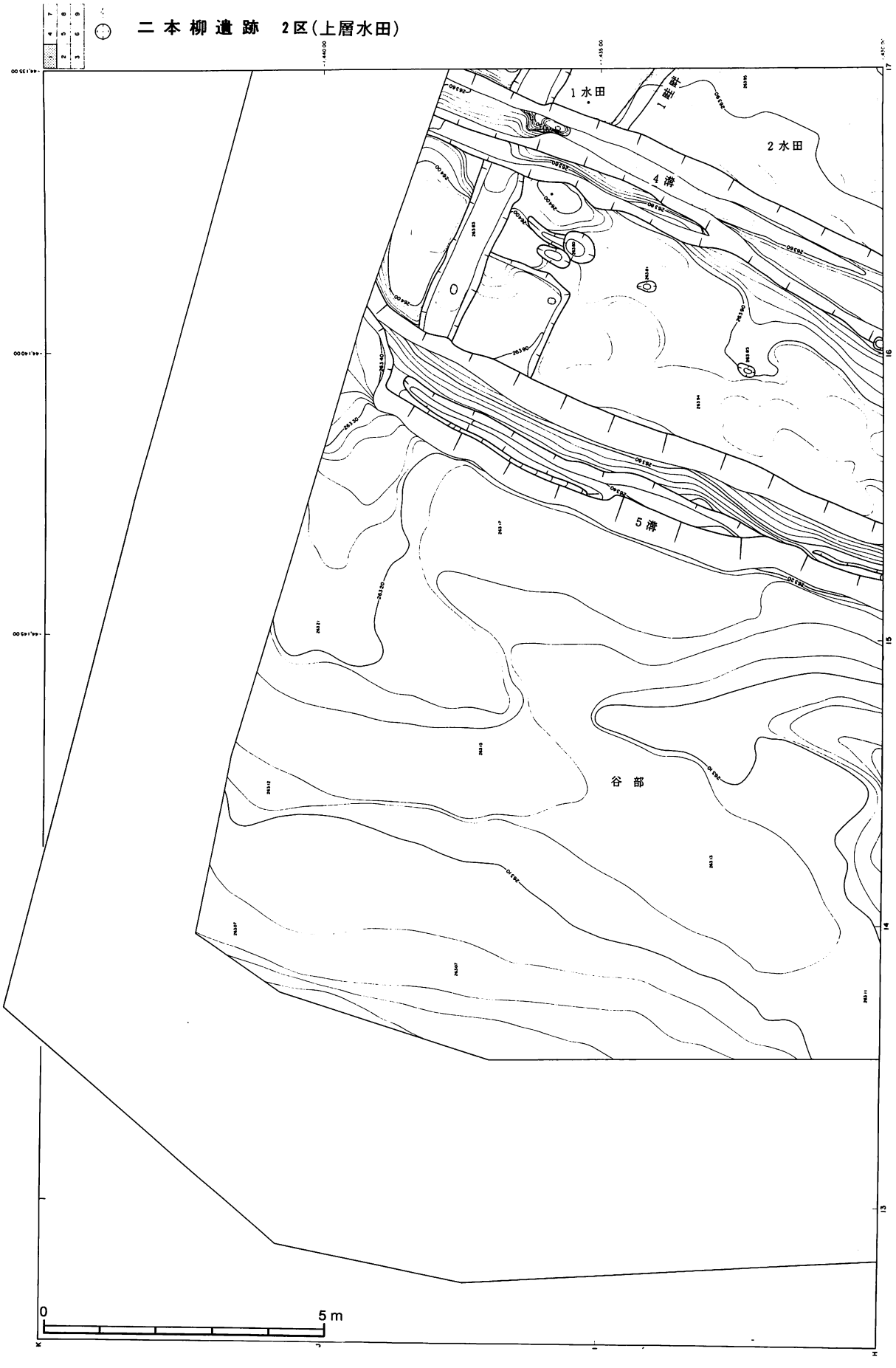
第32図　２区上層水田面エレベーション図（１）



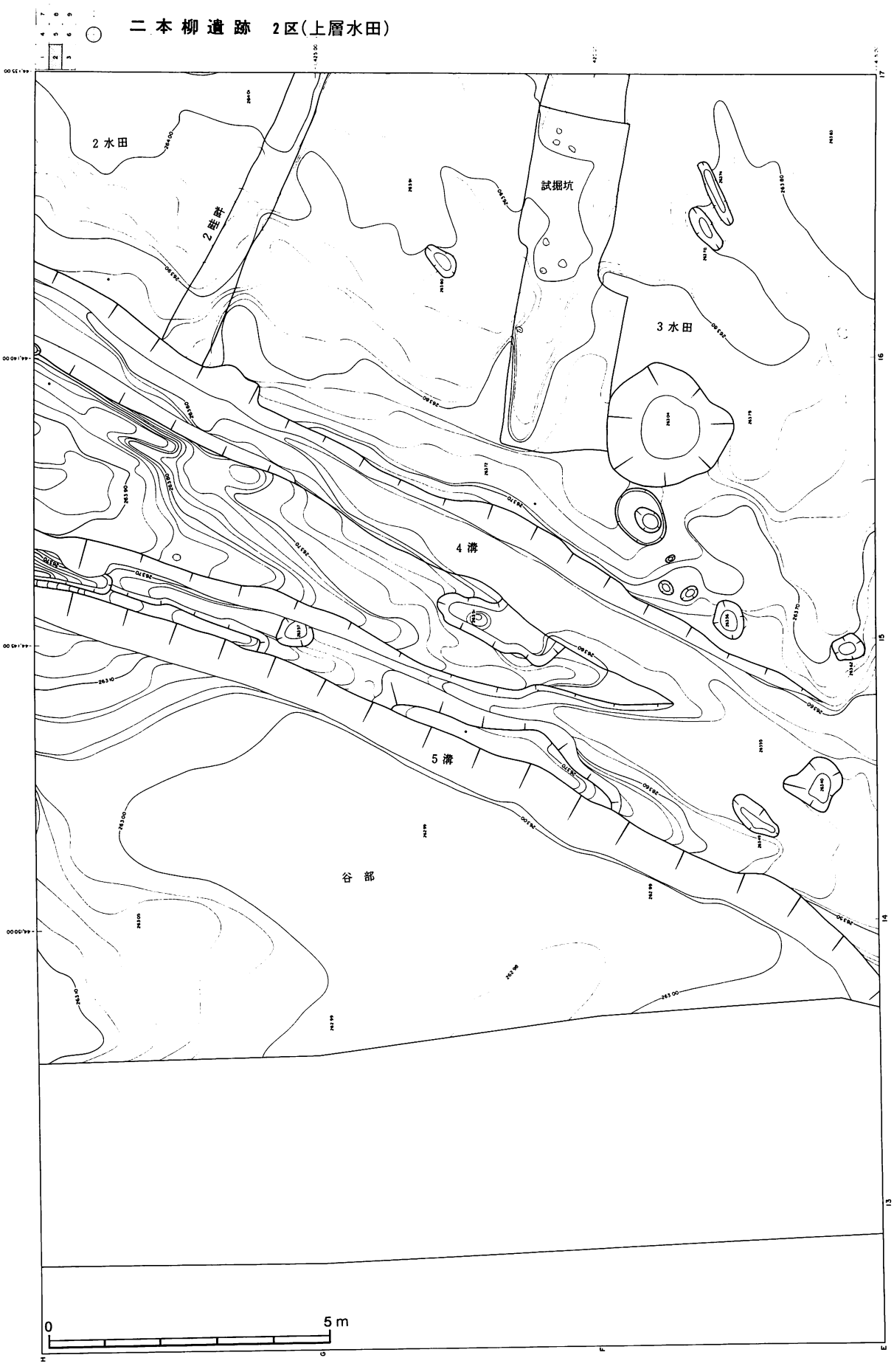
第33図　２区・２B区上層水田面エレベーション図（２）



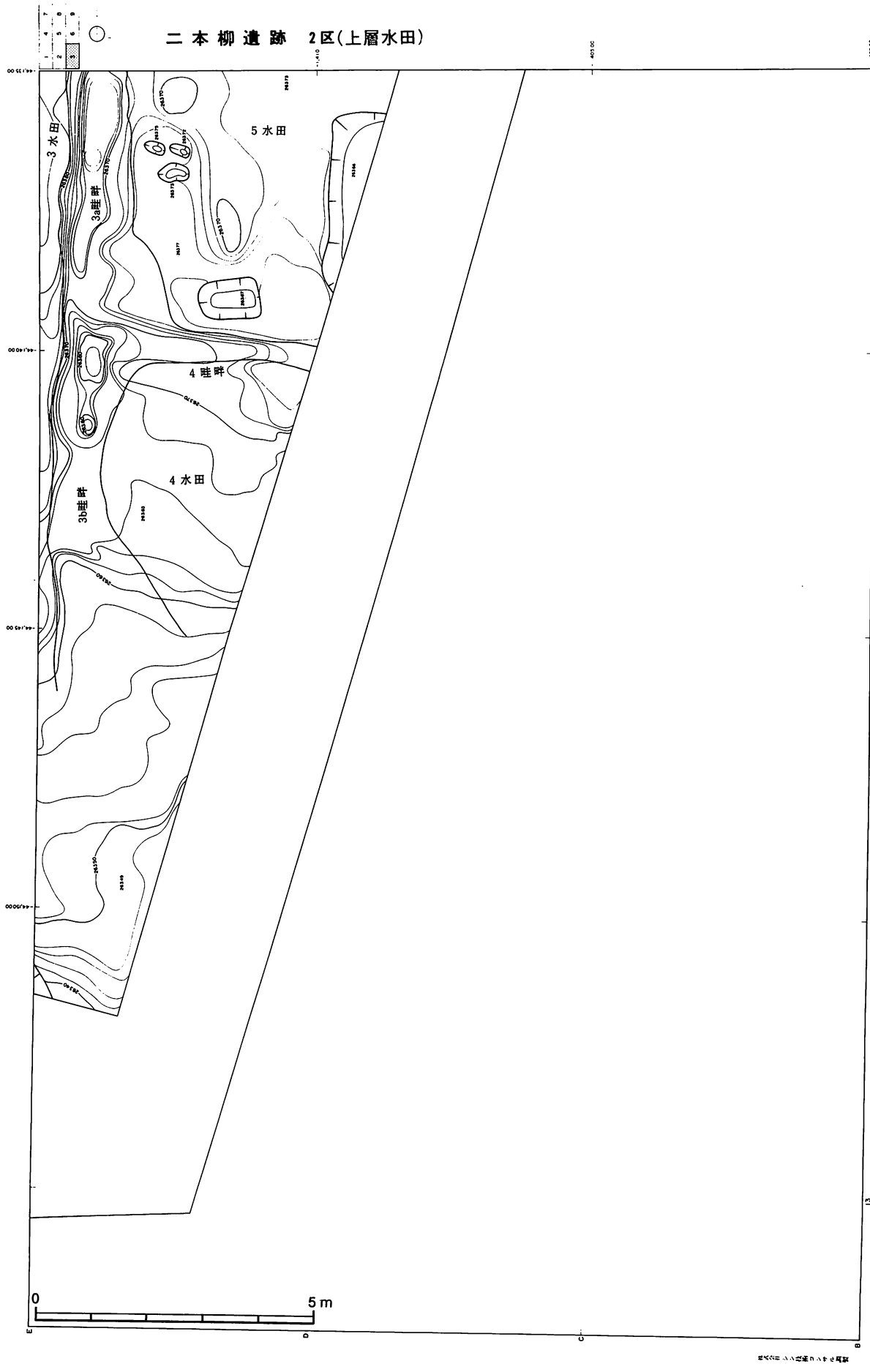
第34図　2区26号畦畔馬骨出土状況



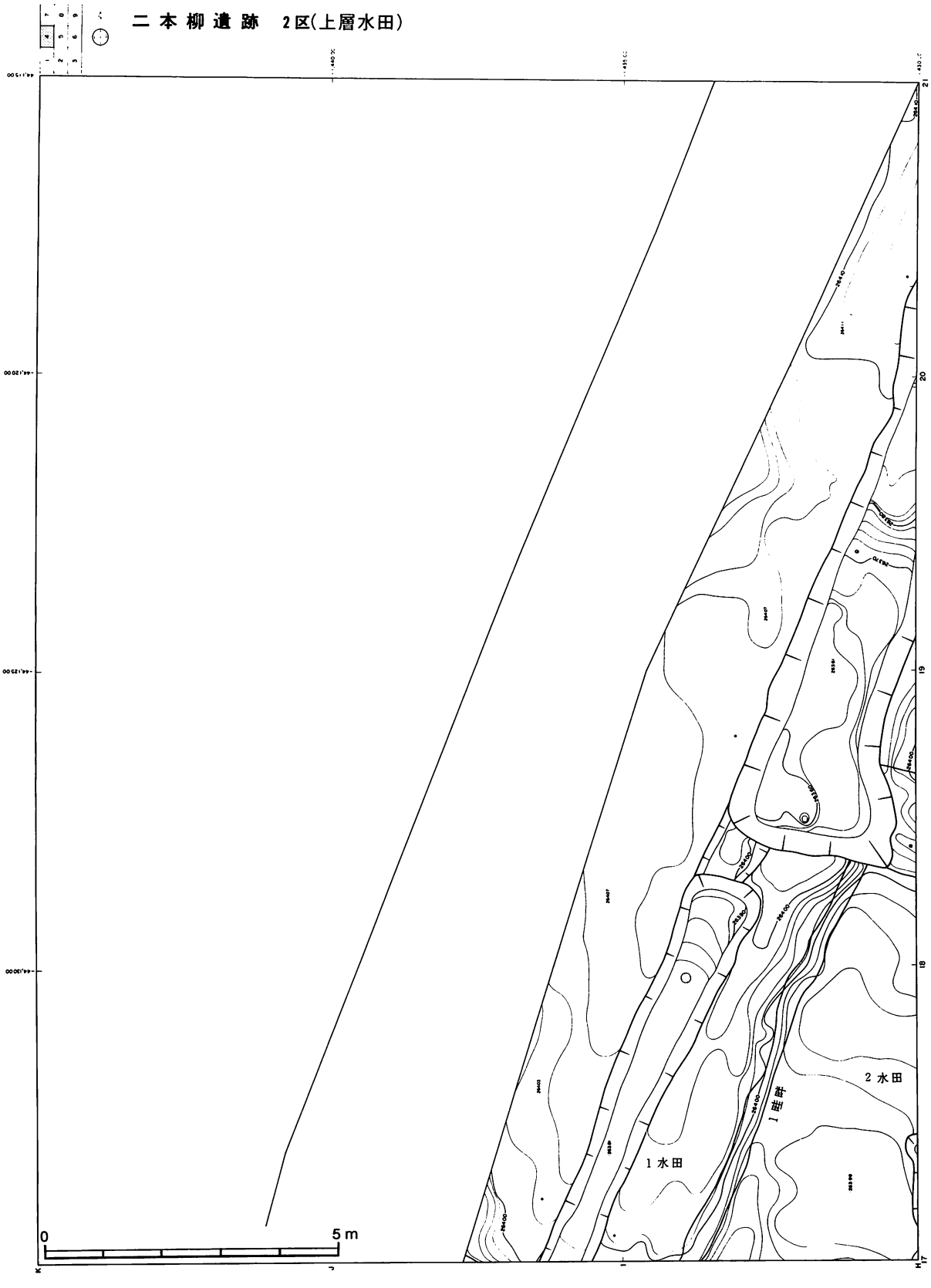
第35図　2区上層水田面詳細図（1）



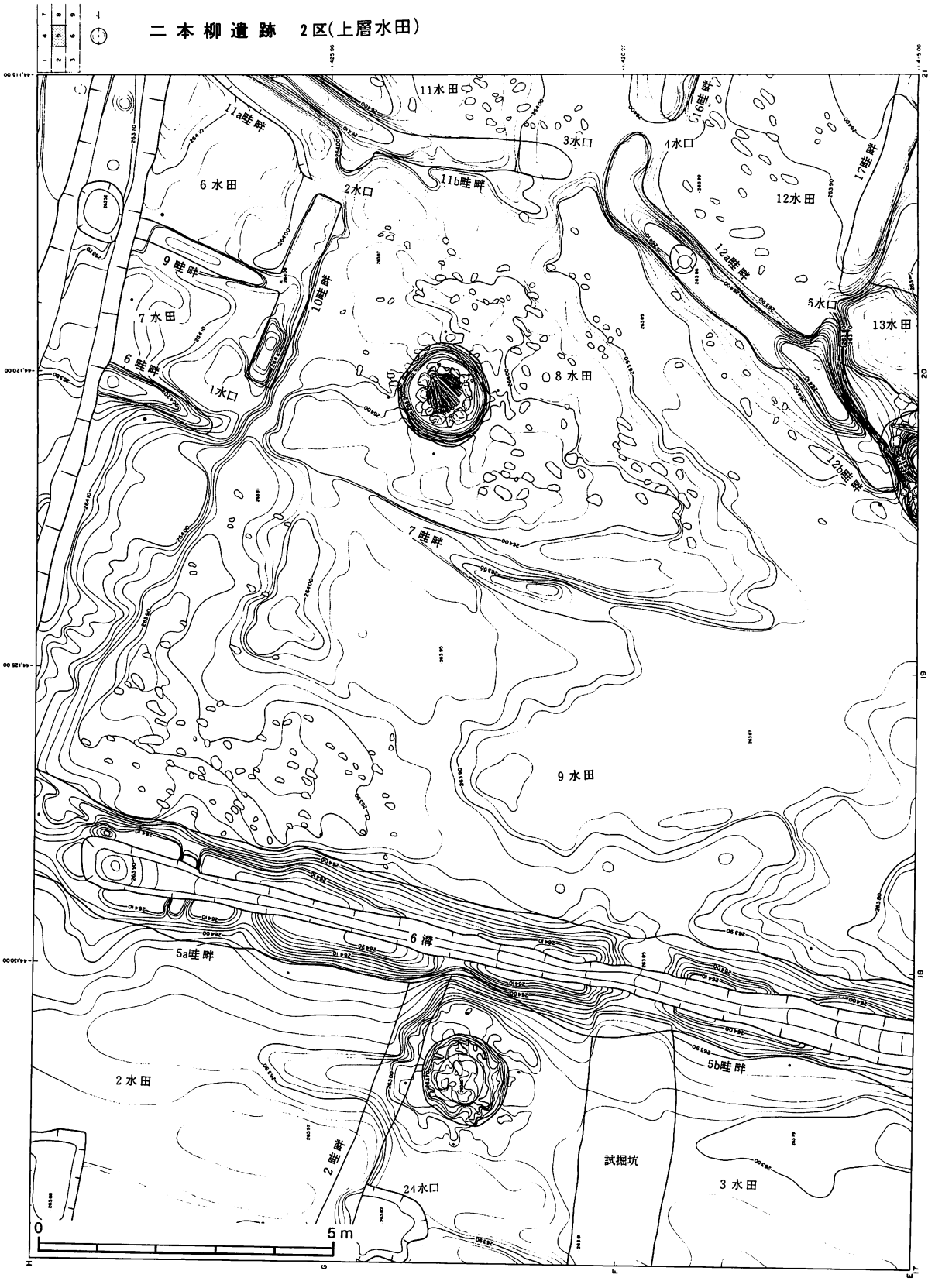
第36図　2区上層水田面詳細図（2）



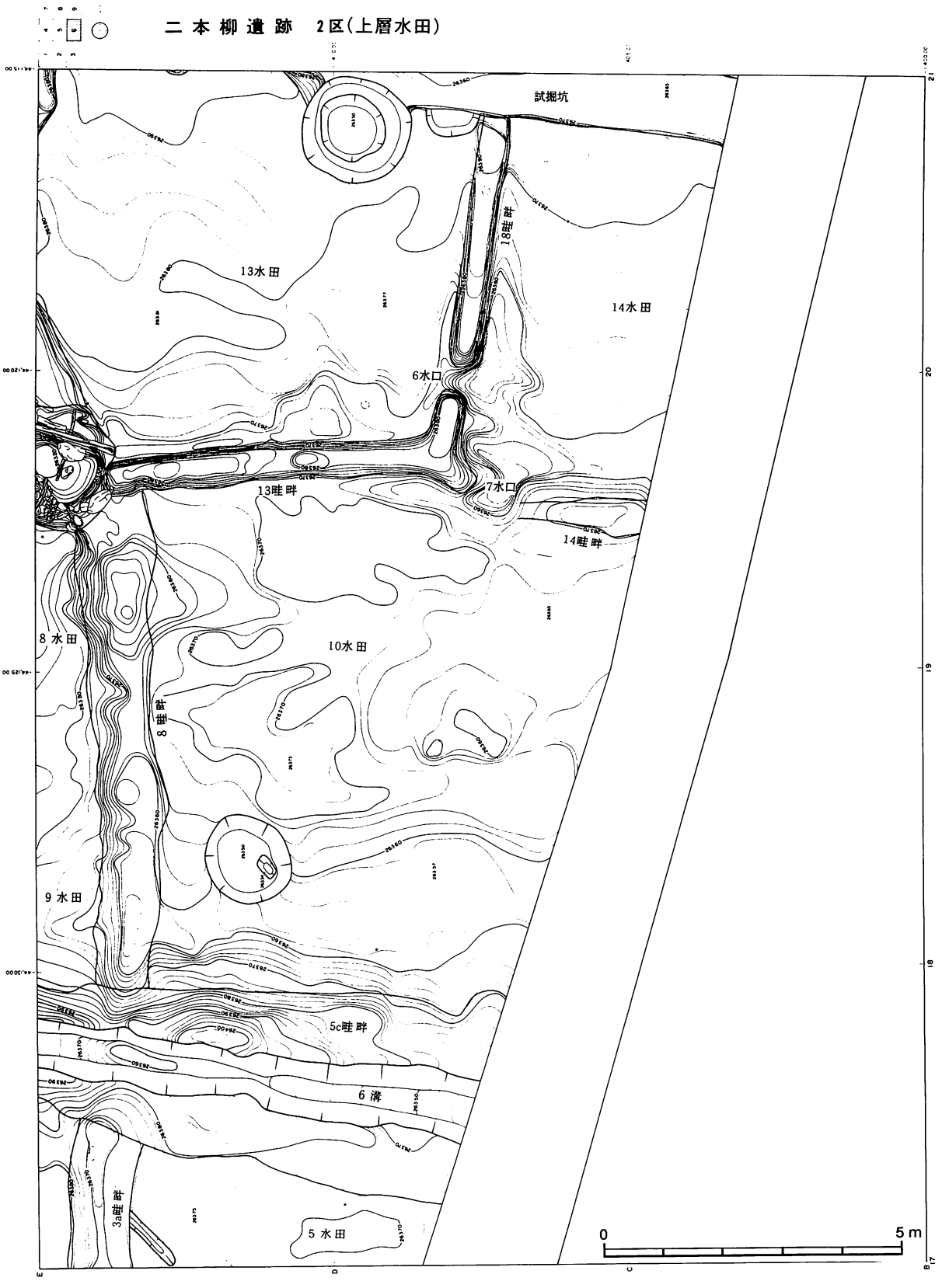
第37図　2区上層水田面詳細図（3）



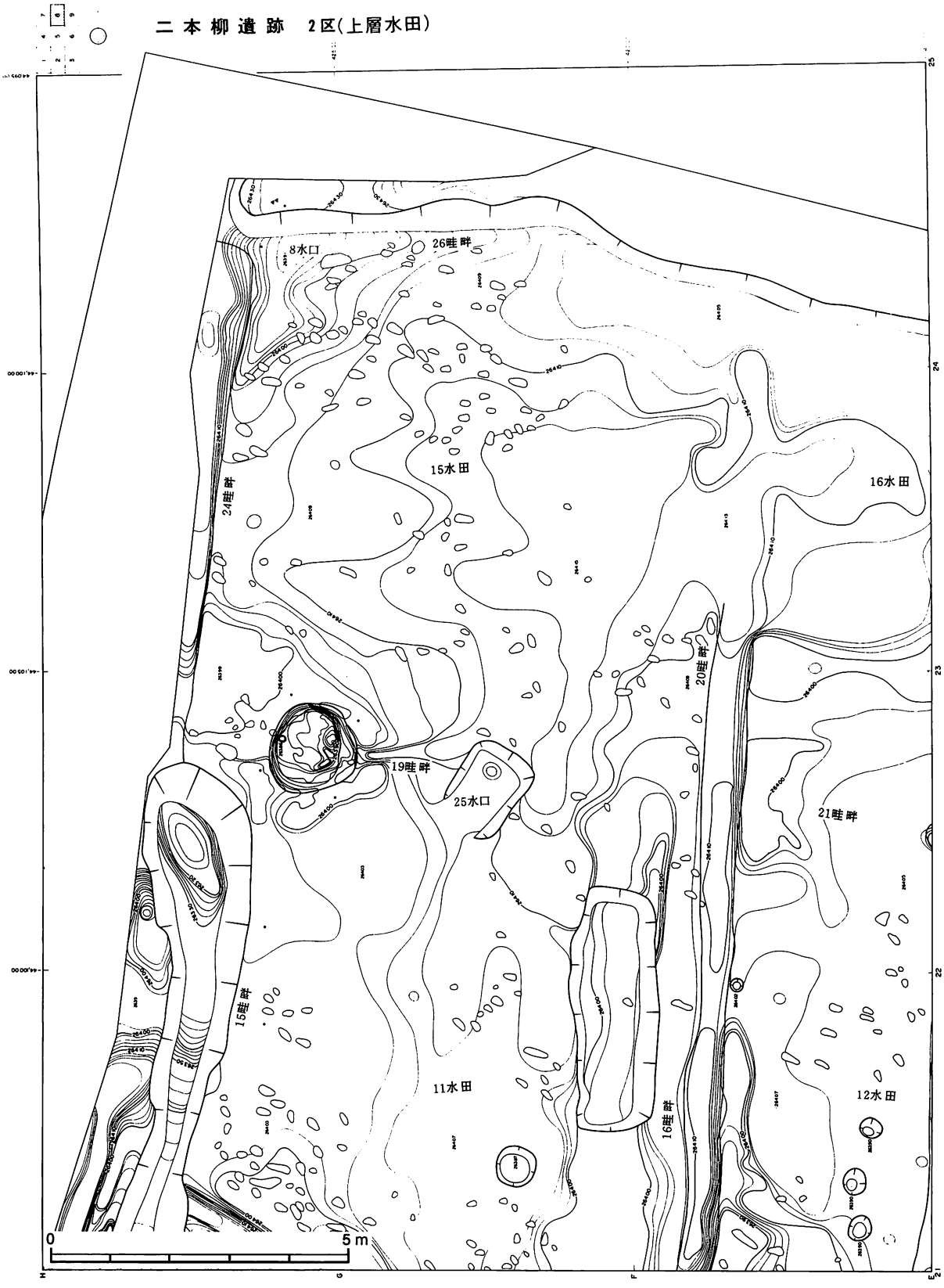
第38図　2区上層水田面詳細図（4）



第39図　2区上層水田面詳細図（5）

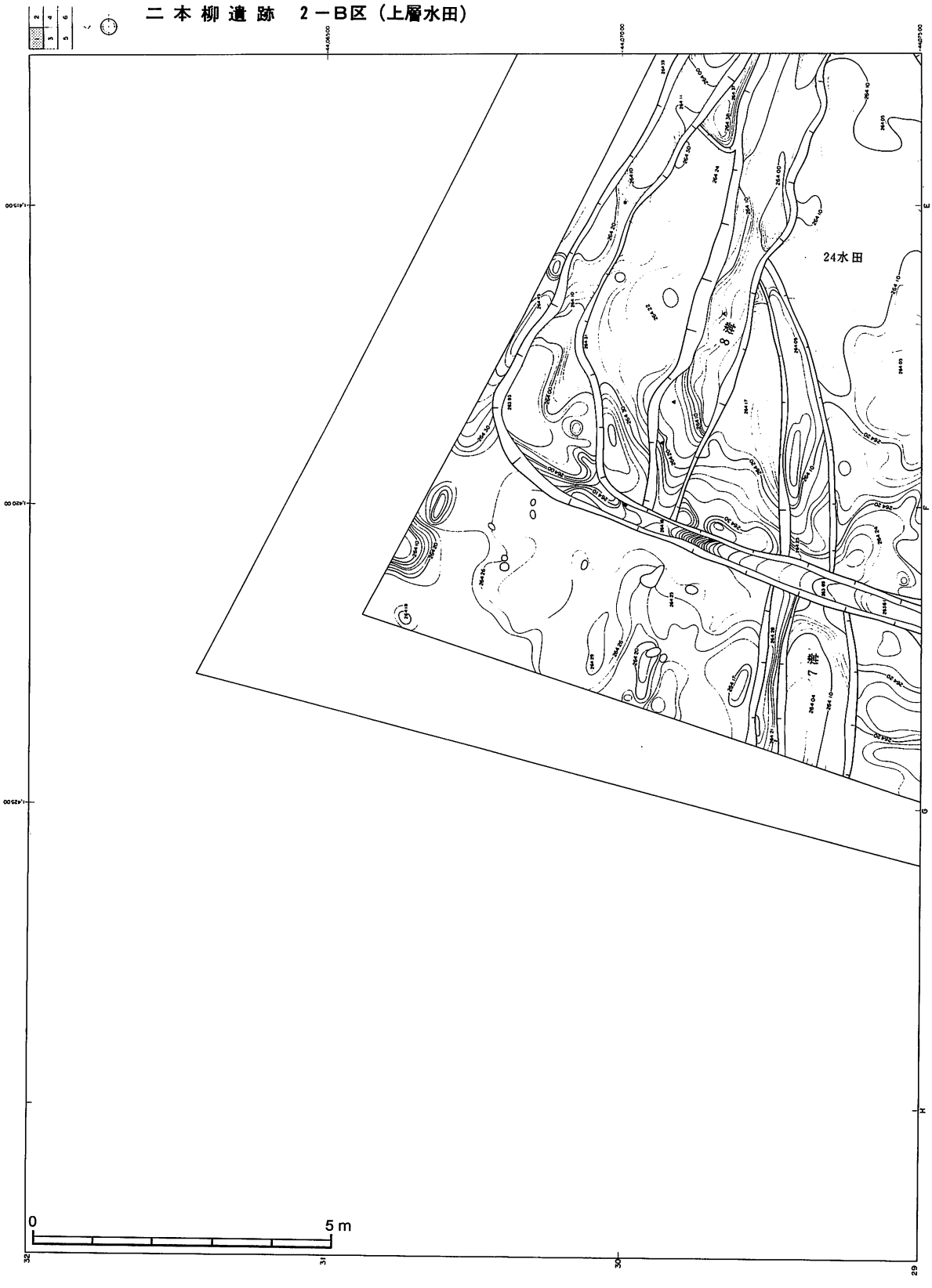


第40図　2区上層水田面詳細図（6）

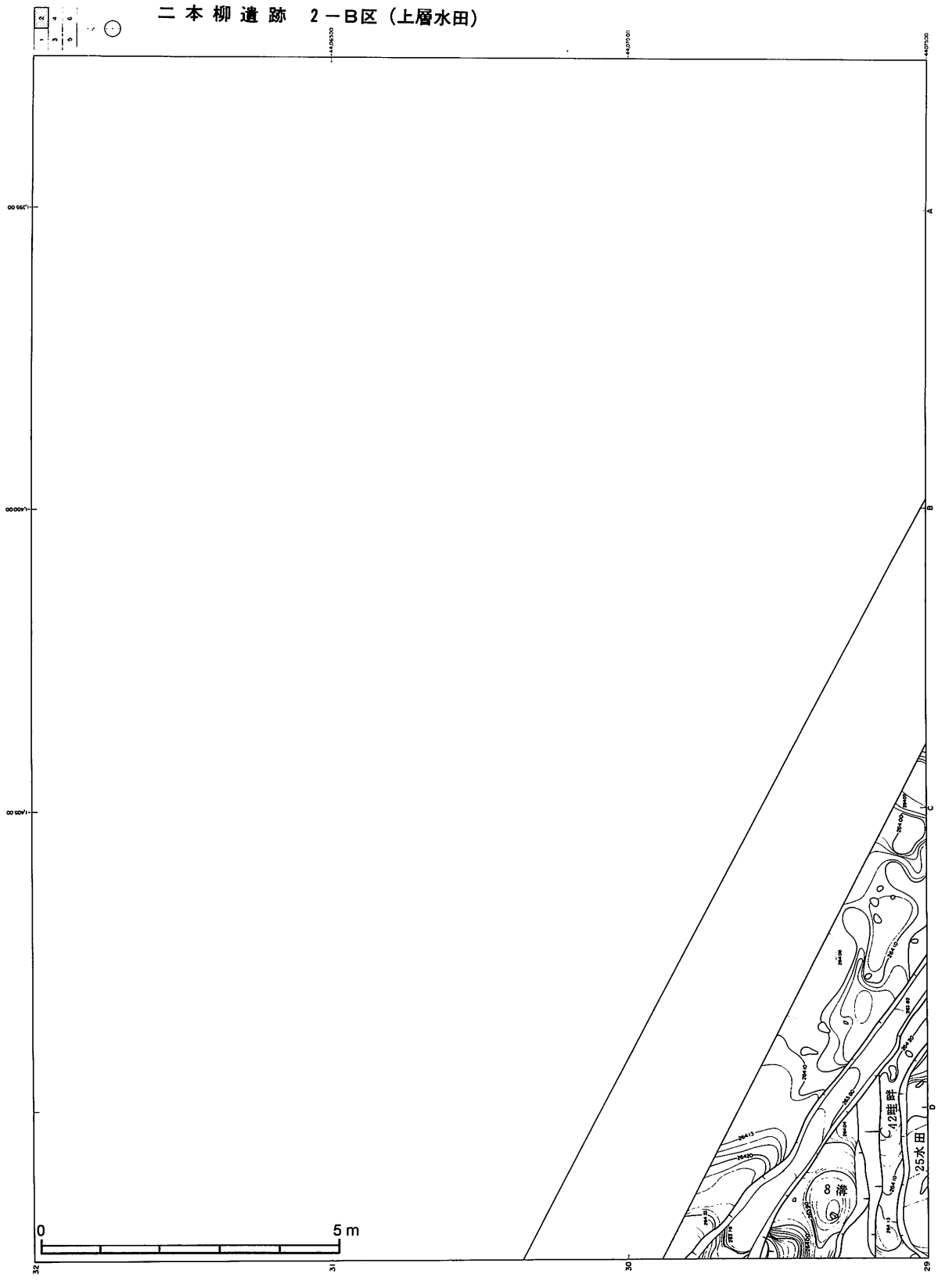


第41図　2区上層水田面詳細図（7）

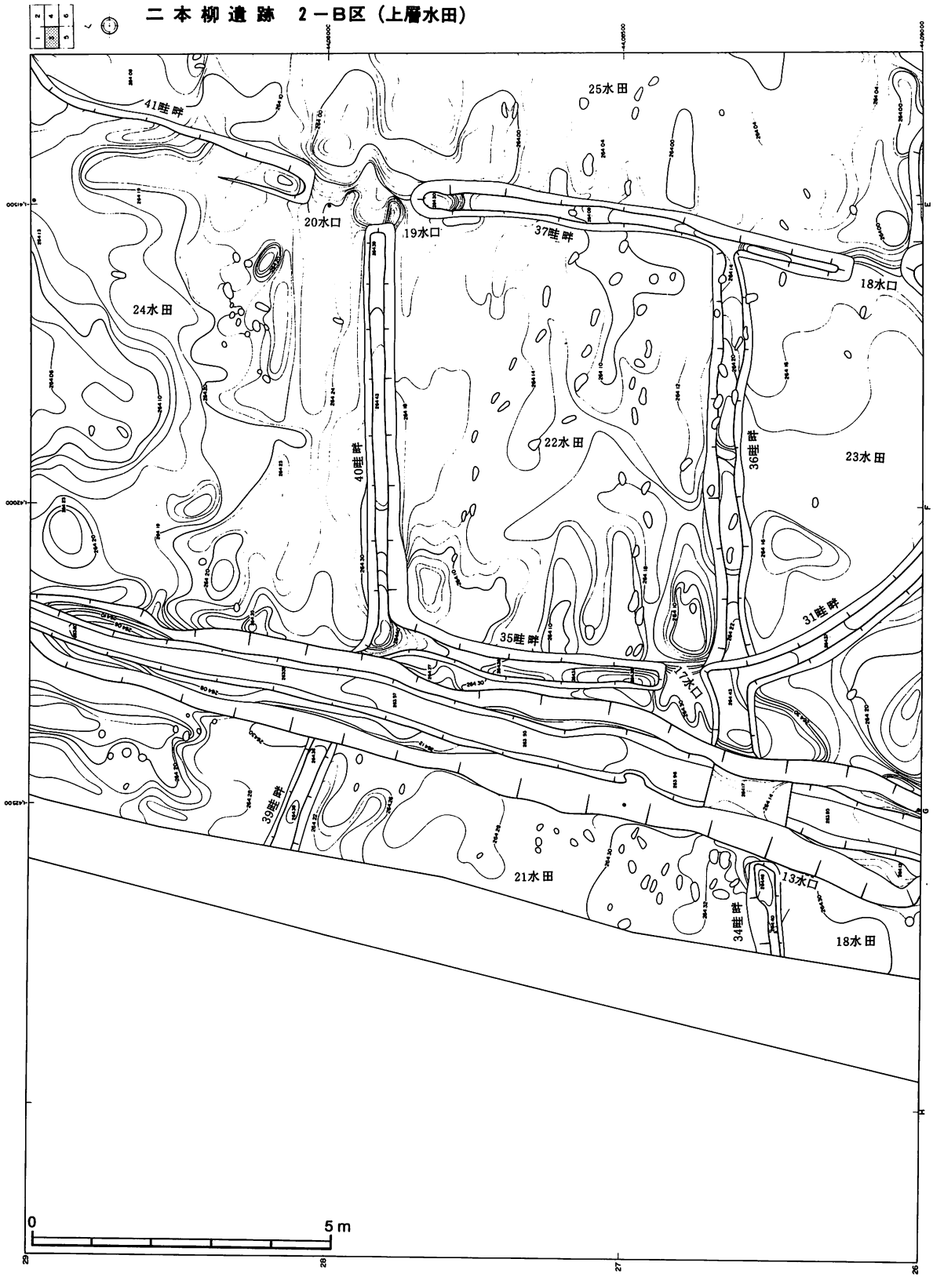
第42図　2区上層水田面詳細図（8）



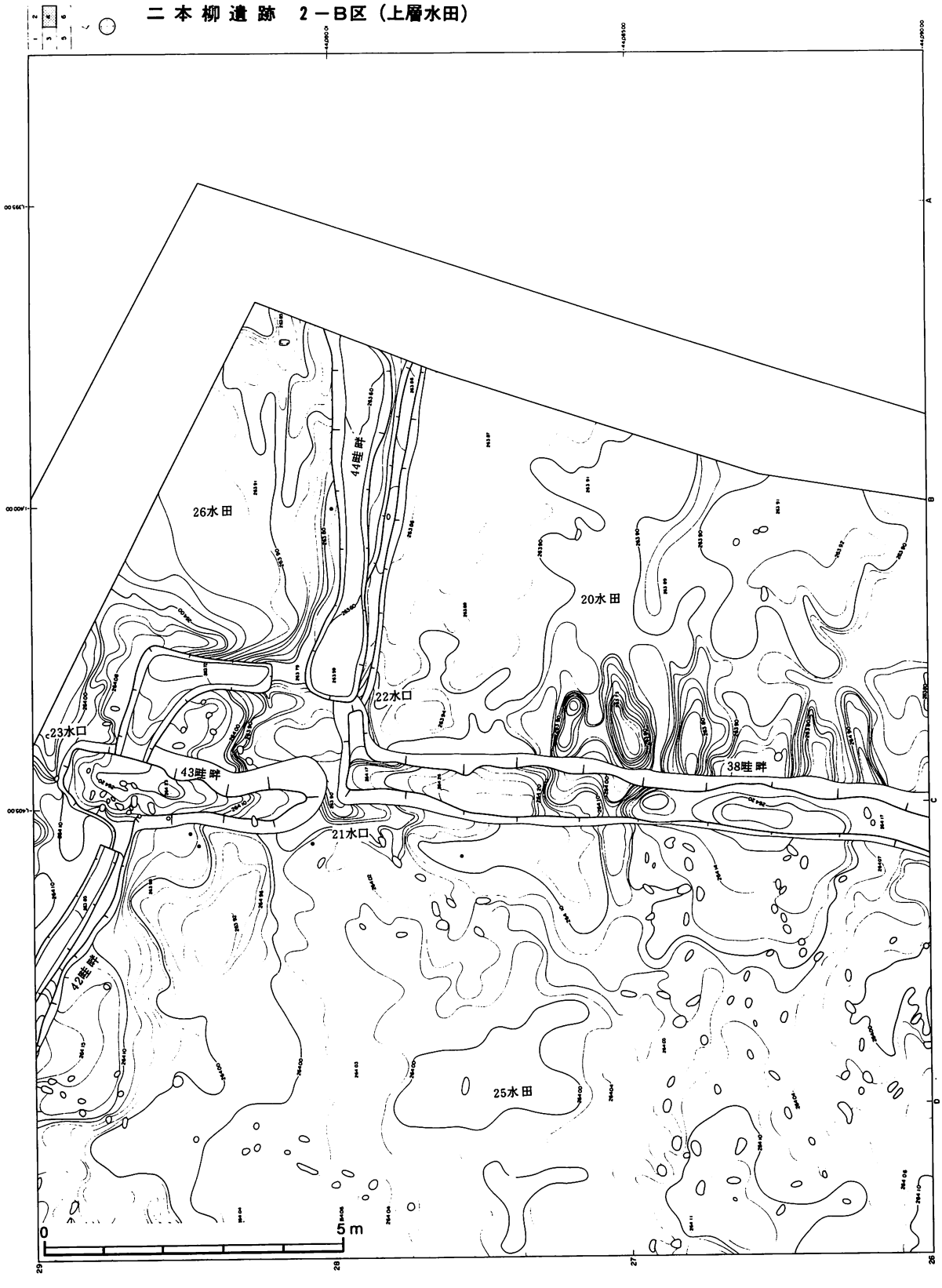
第43図　2B区上層水田面詳細図（1）



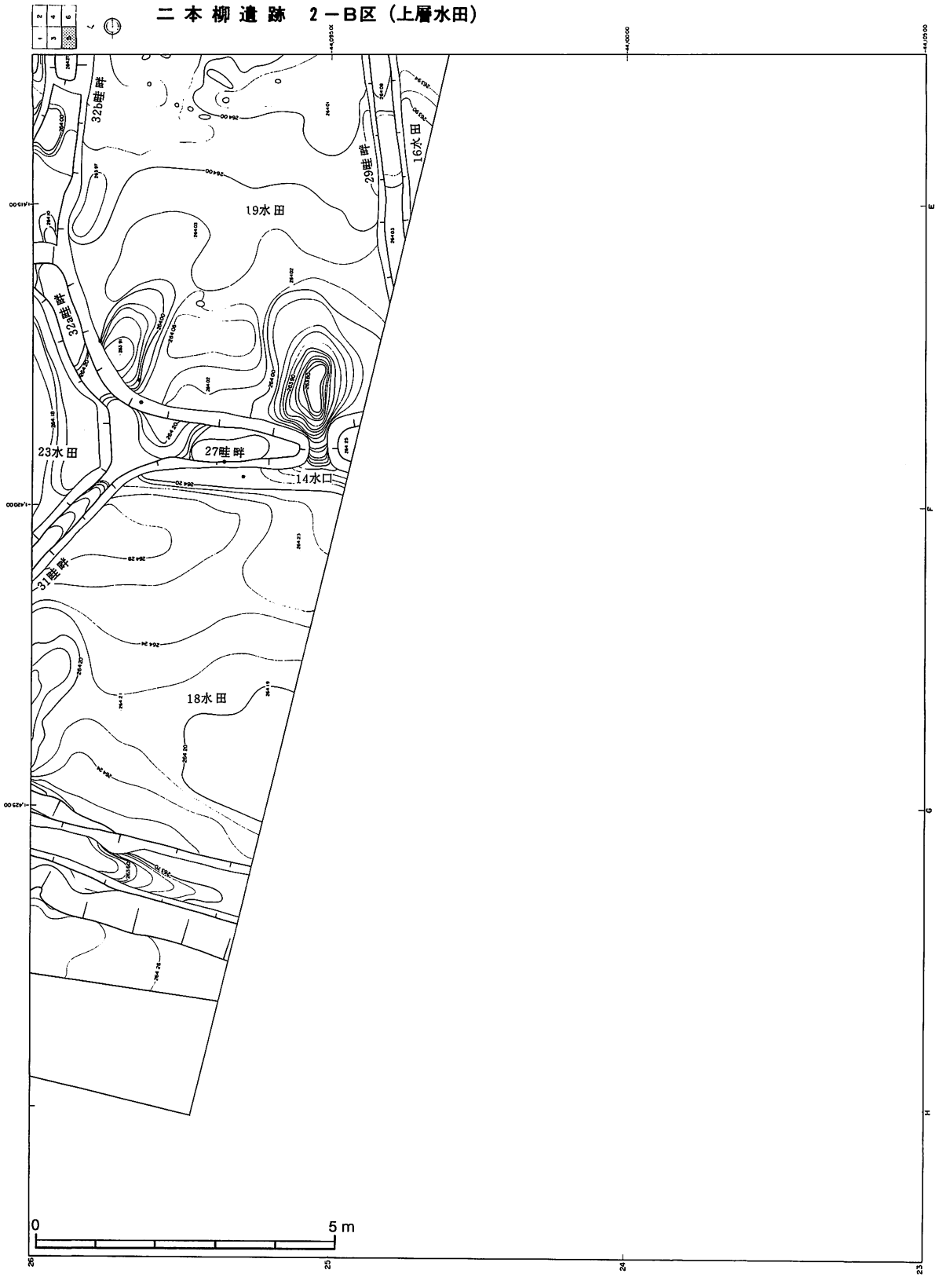
第44図　2B区上層水田面詳細図（2）



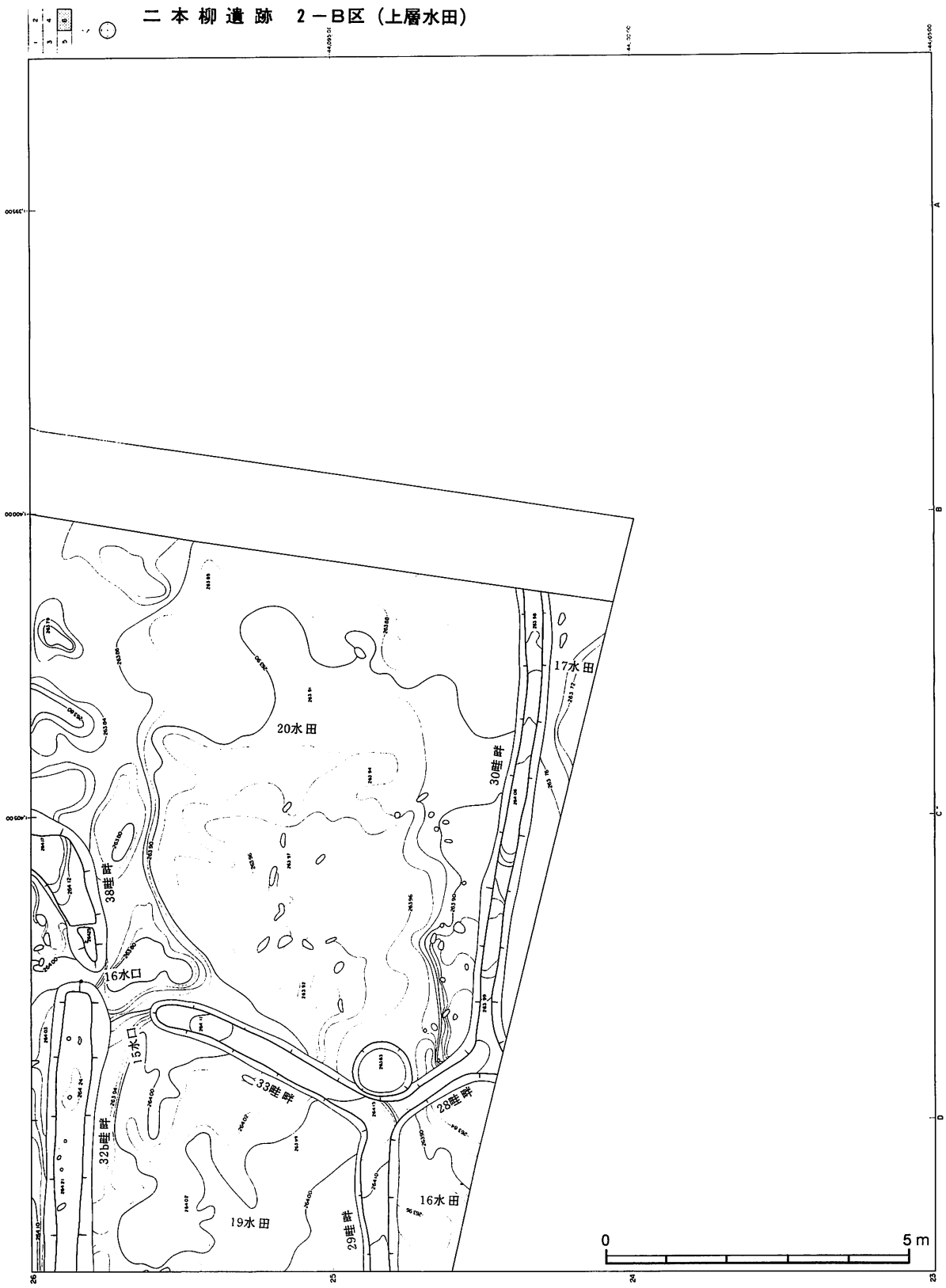
第45図　2B区上層水田面詳細図（3）



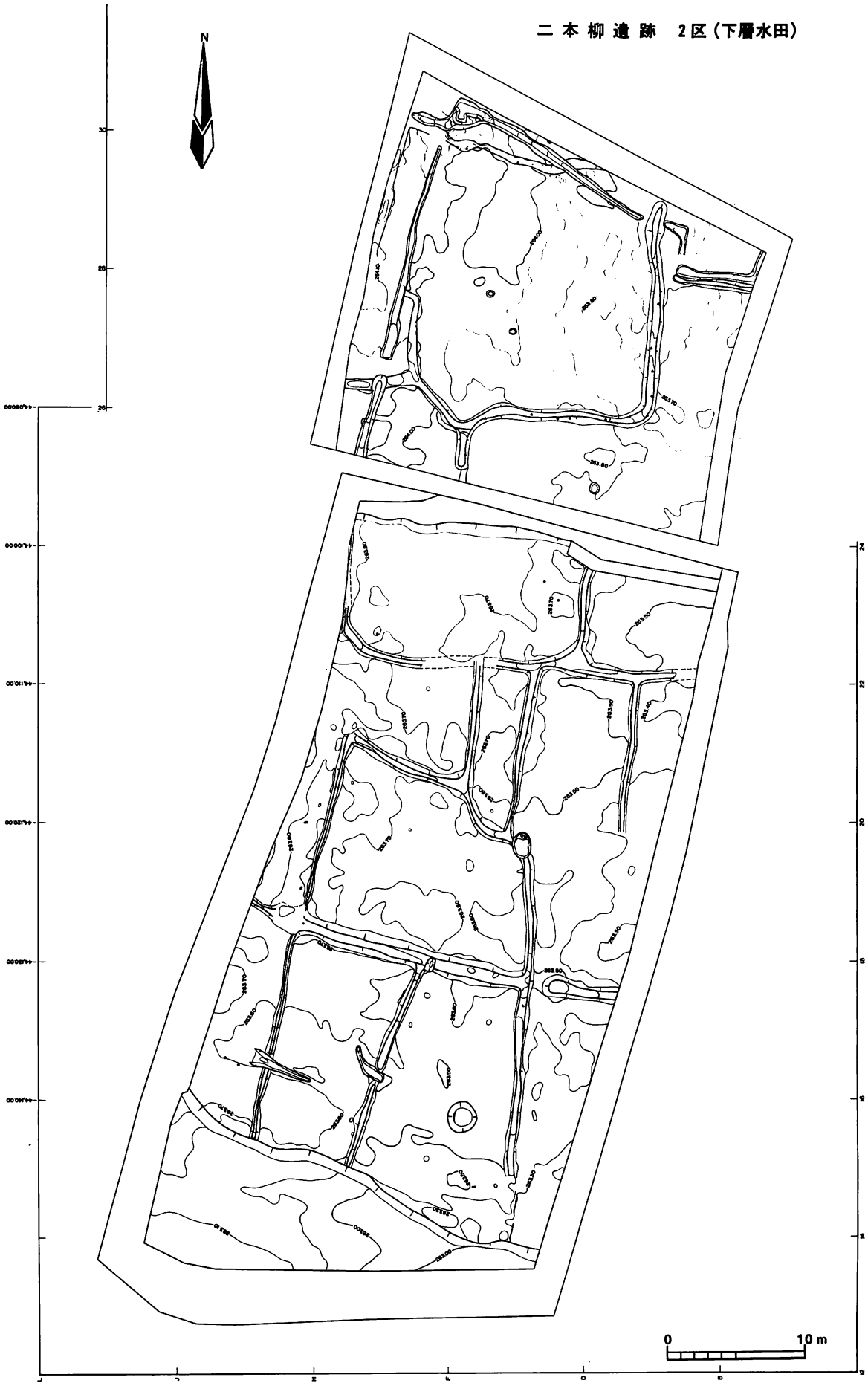
第46図　2B区上層水田面詳細図（4）



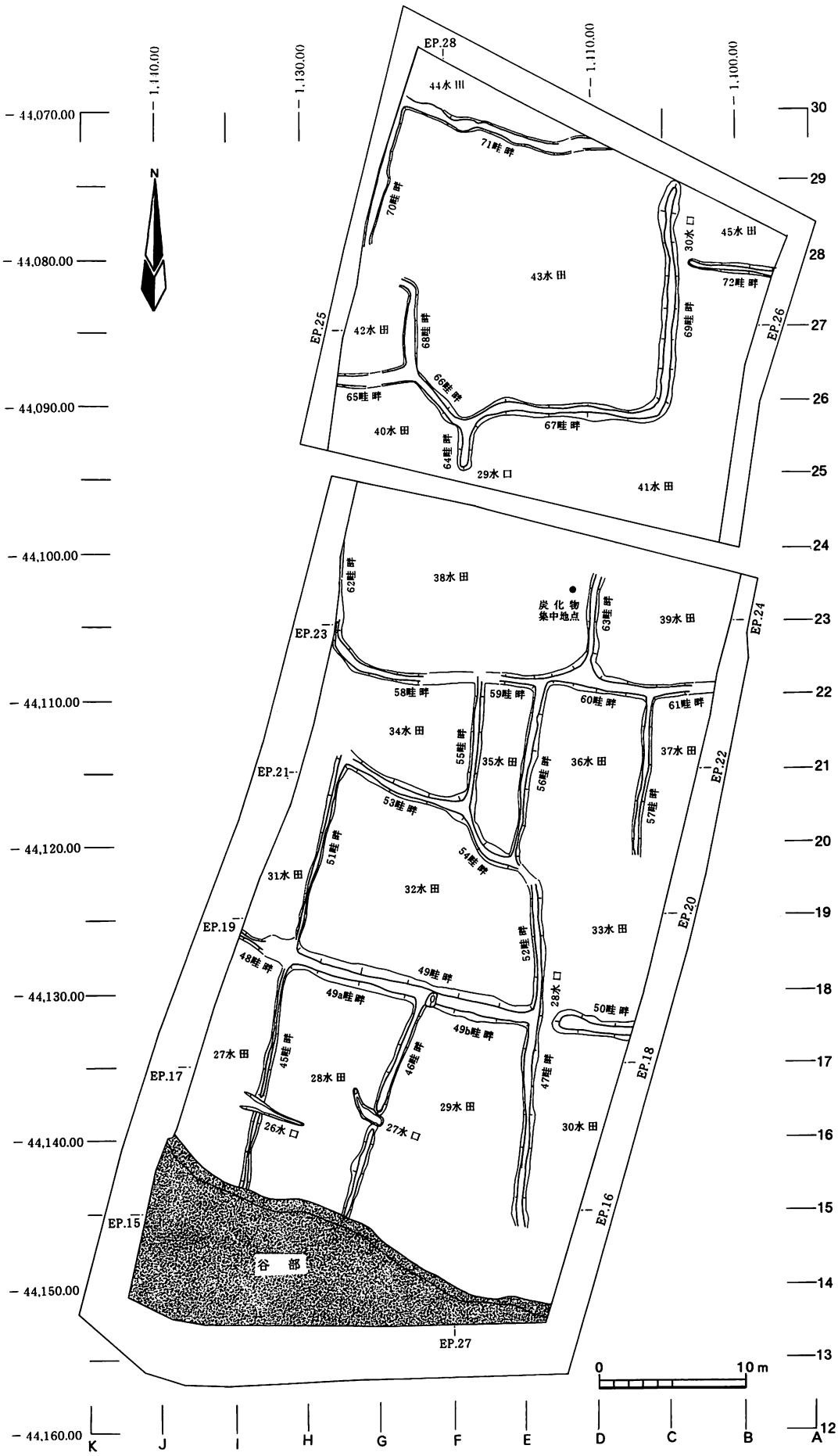
第47図　2B区上層水田面詳細図（5）



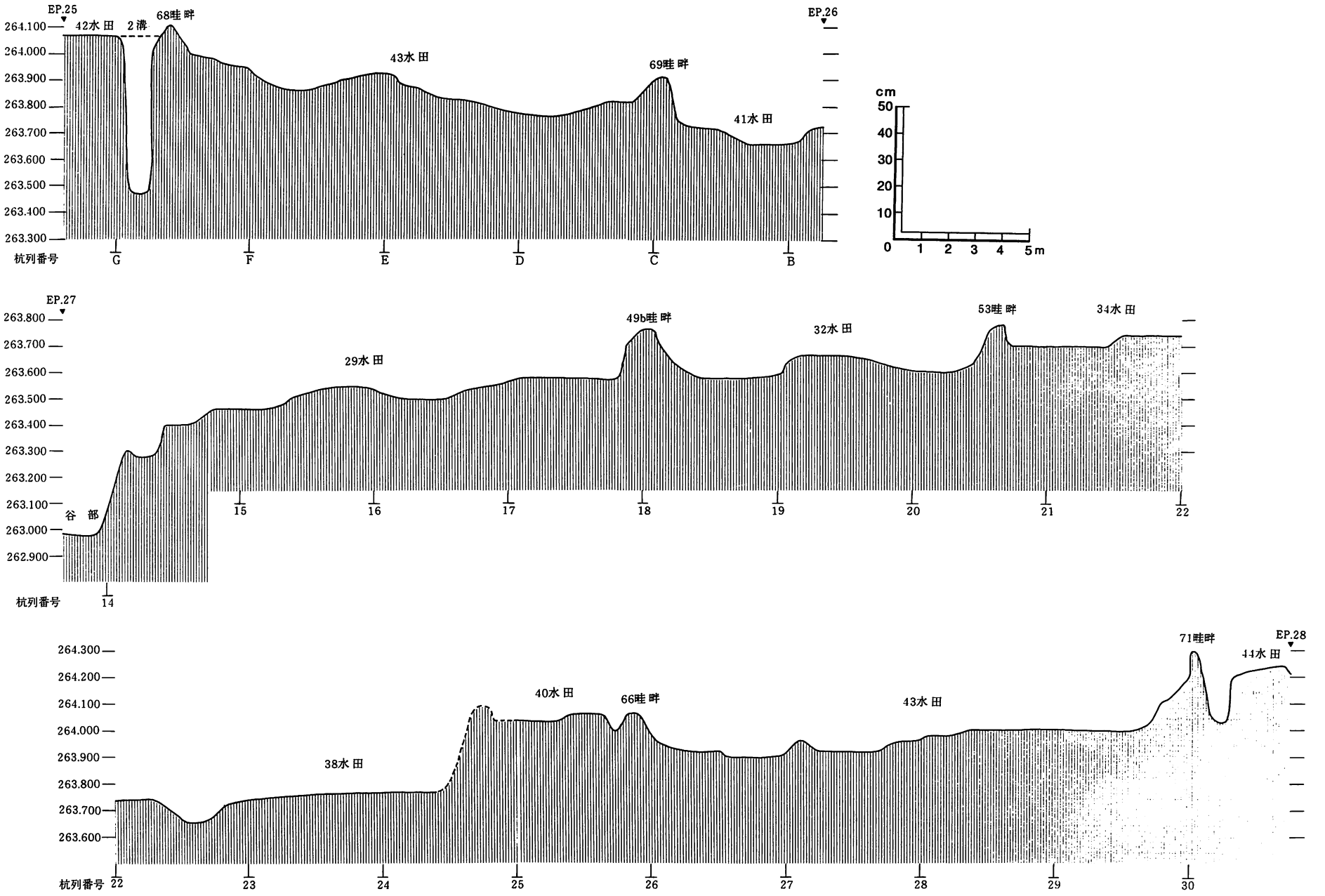
第48図　2B区上層水田面詳細図（6）



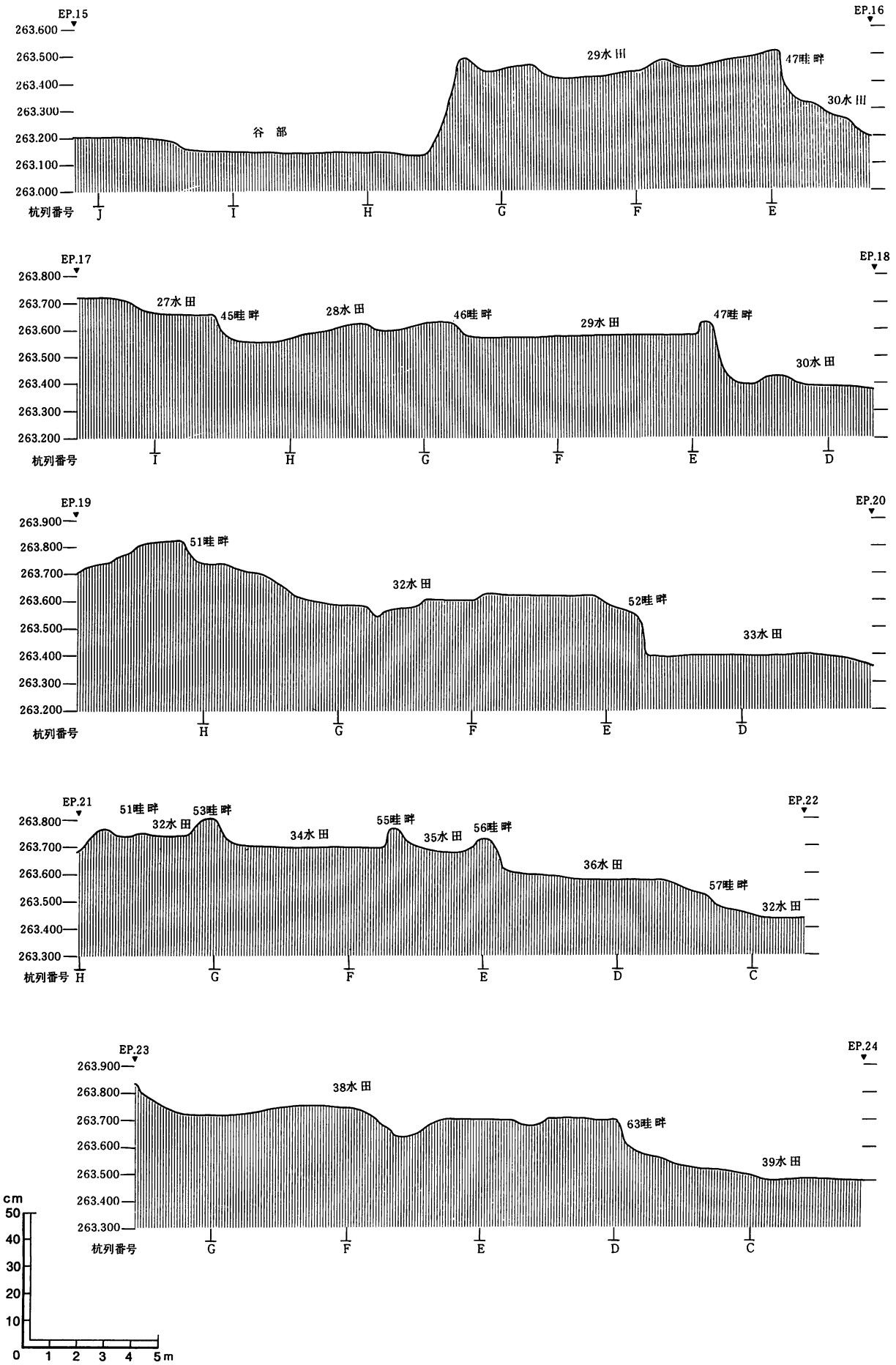
第49図　2区・2B区下層水田面等高線図（全体）



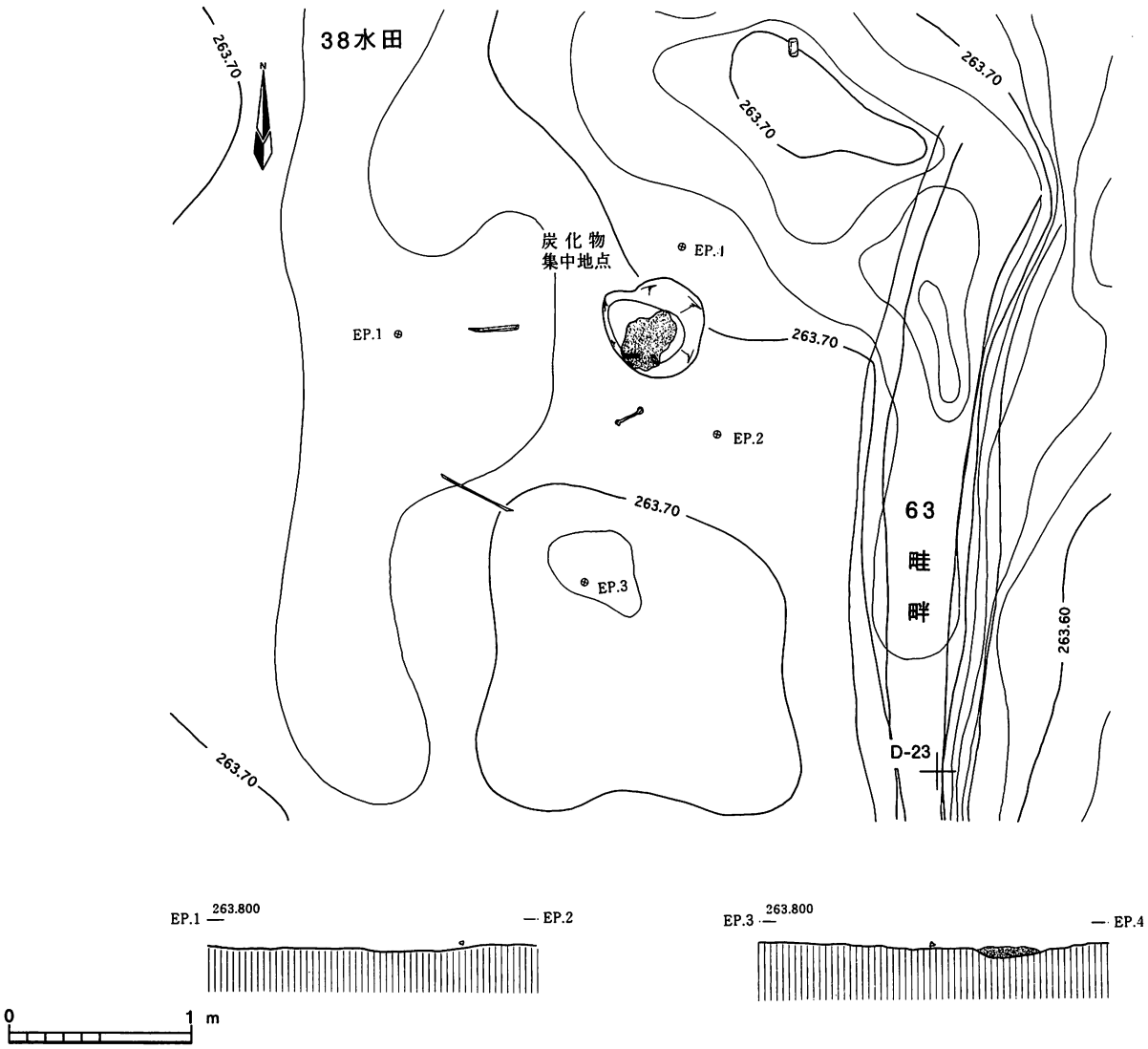
第50図　2区・2B区下層水田面



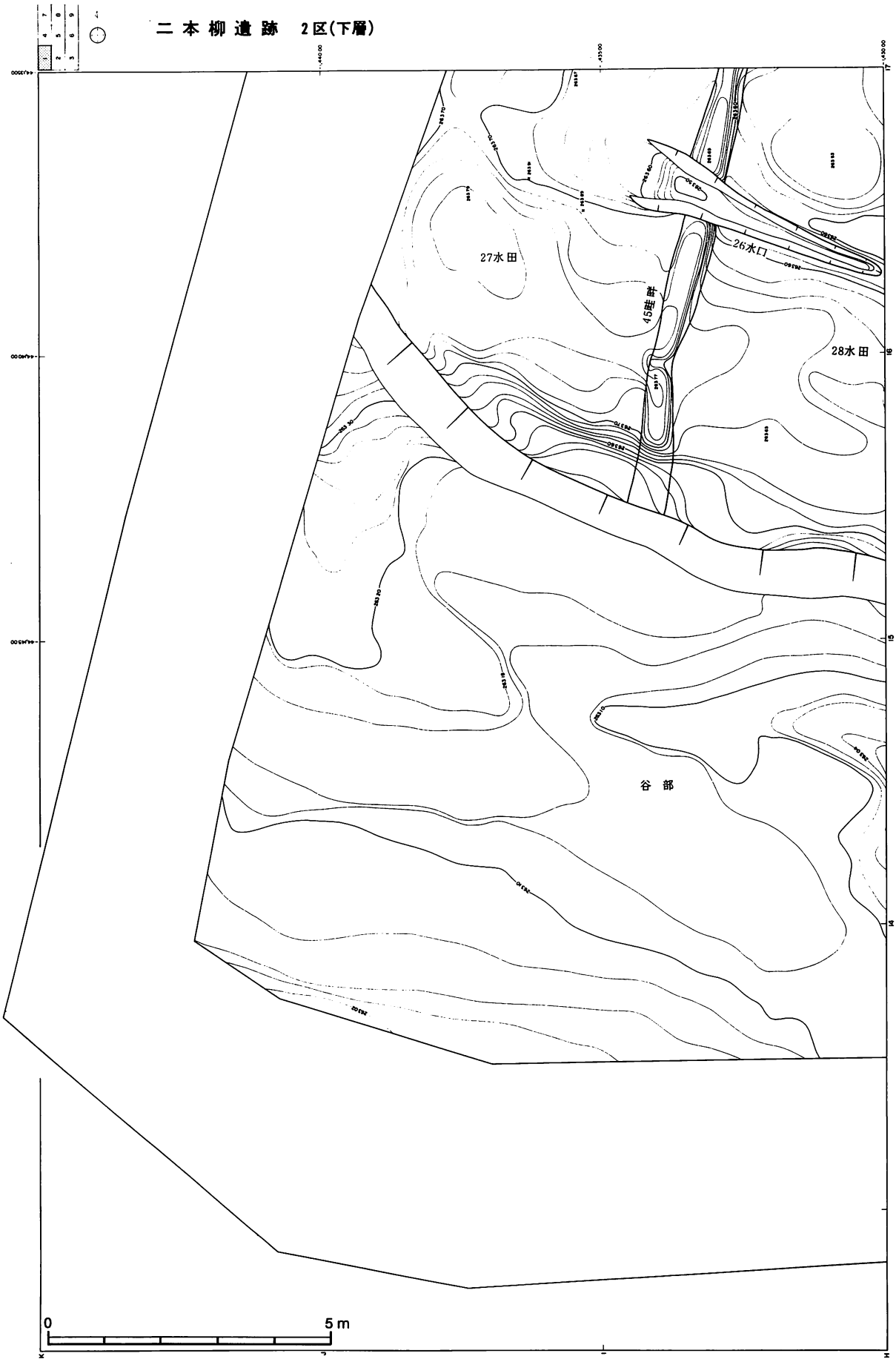
第51図　２区・２B区下層水田面エレベーション図（１）



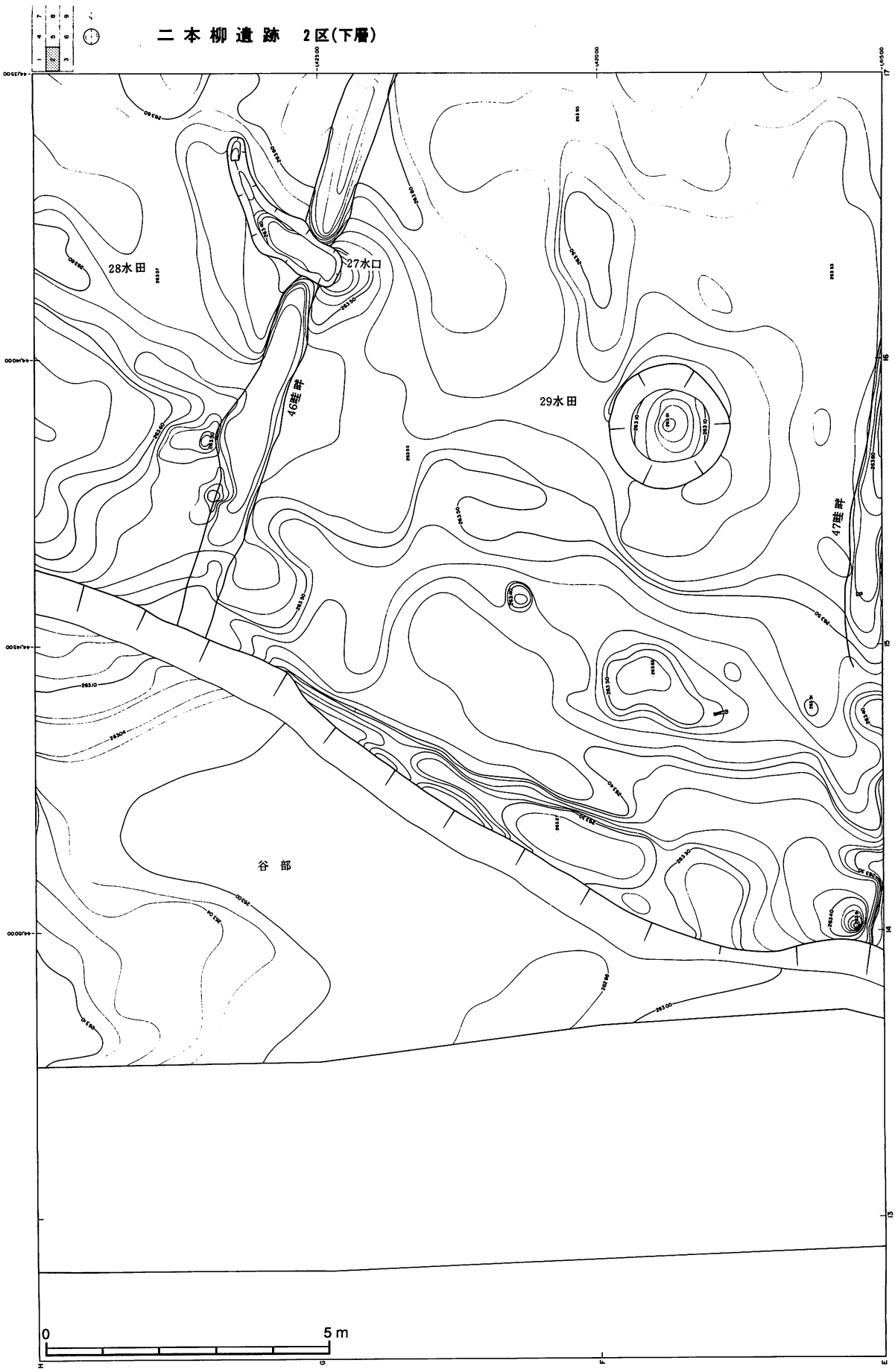
第52図　２区・２B区下層水田面エレベーション図（２）



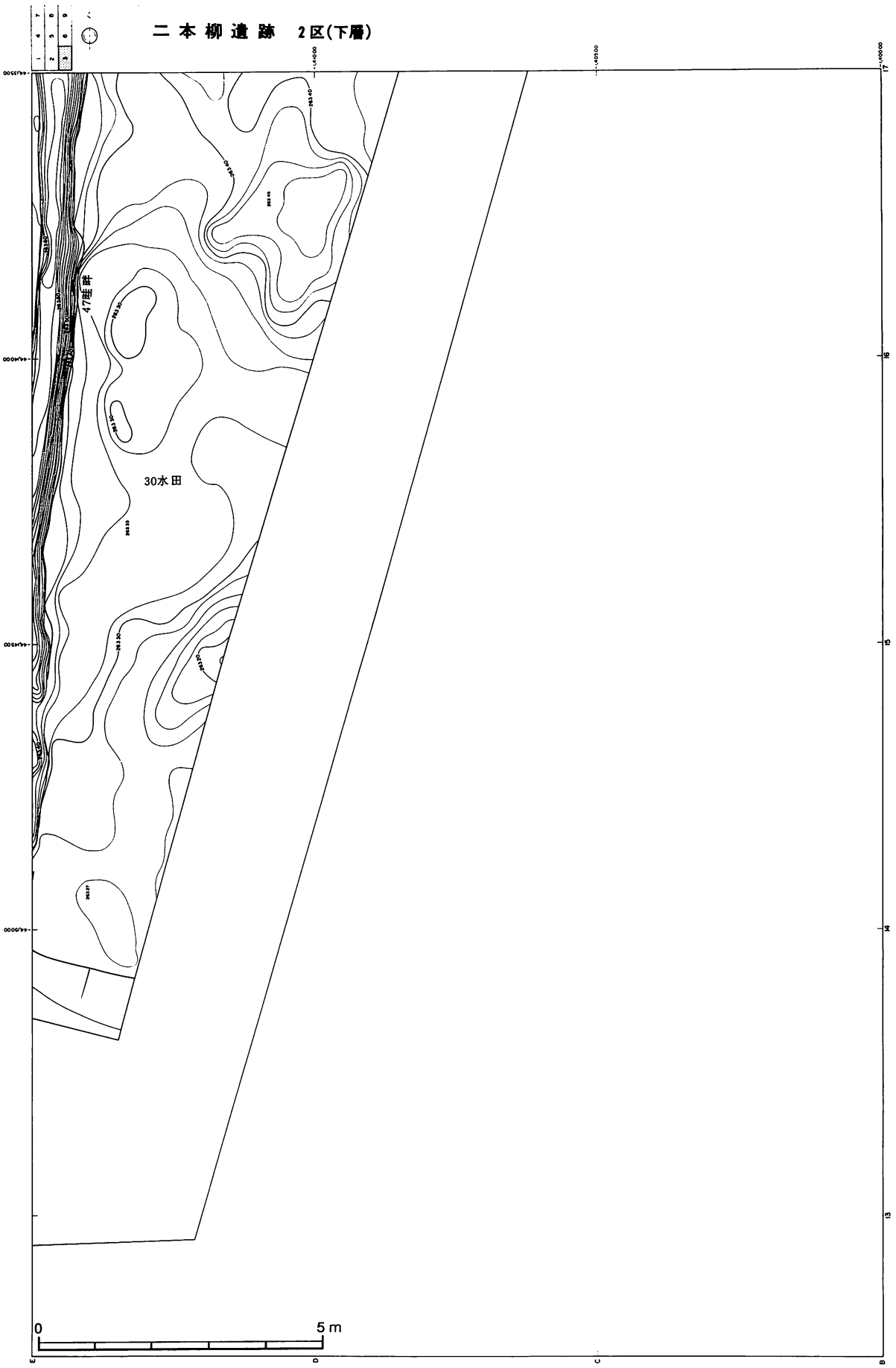
第53図　2区38号水田内炭化物集中地点



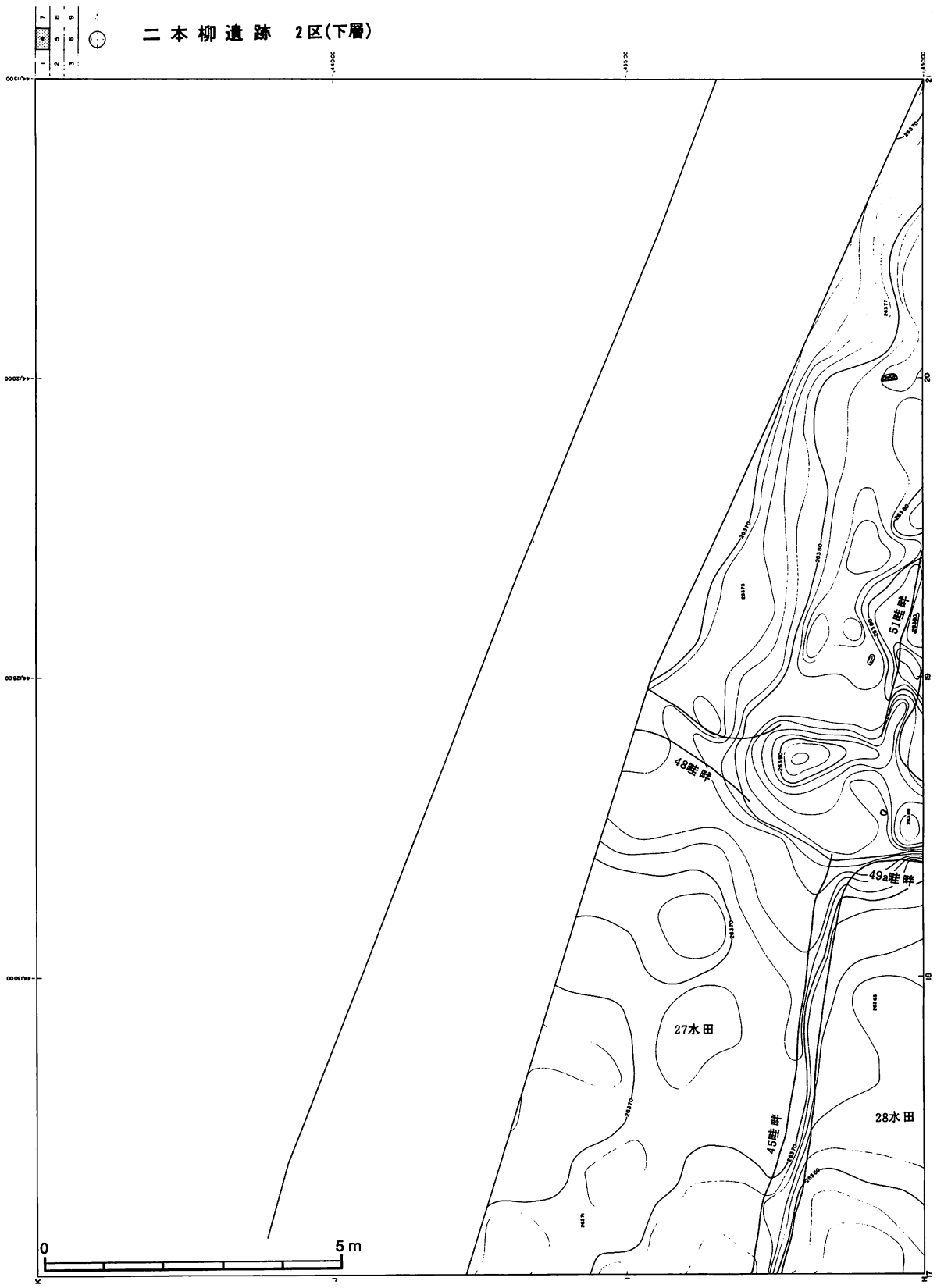
第54図　2区下層水田面詳細図（1）



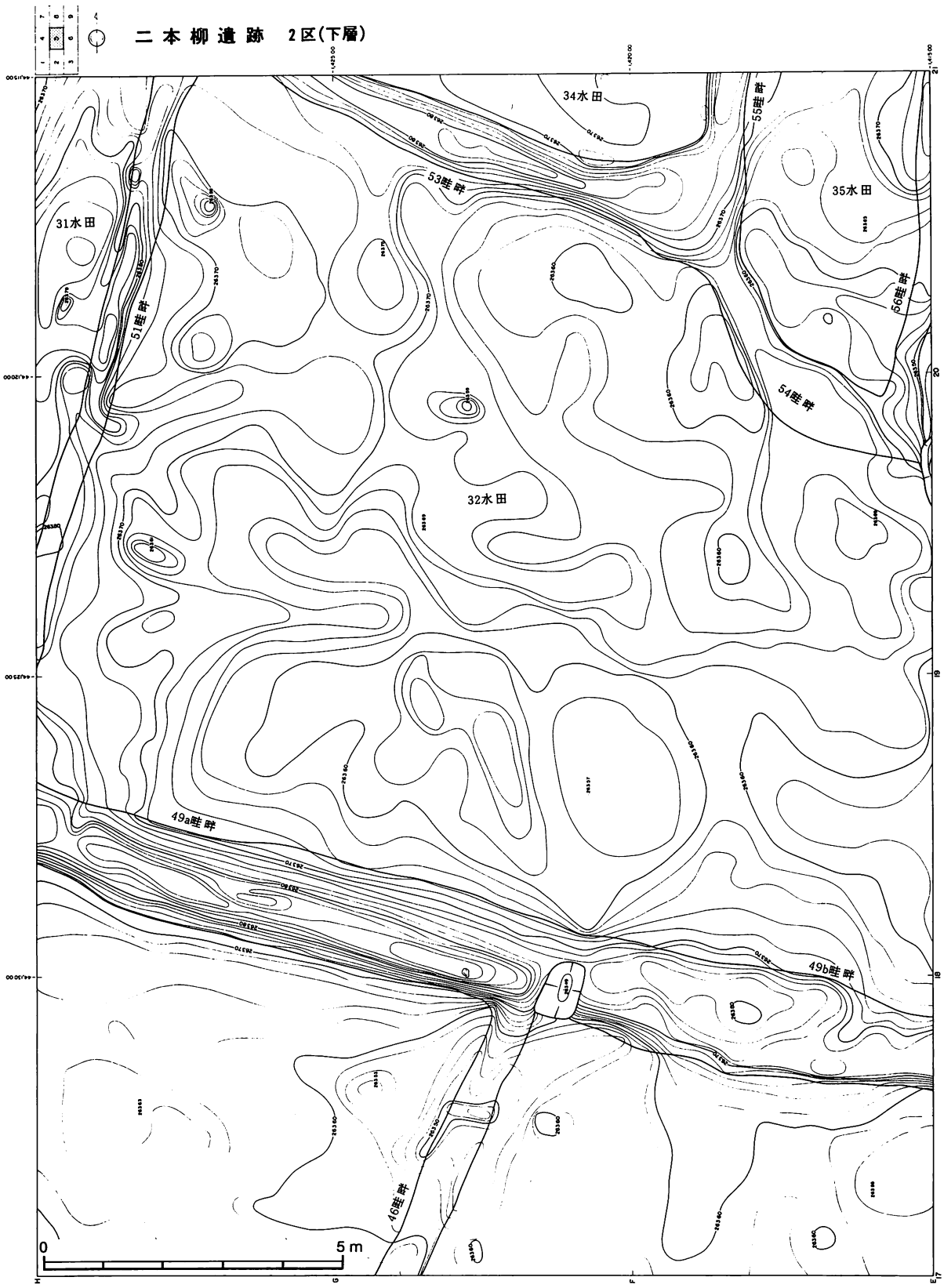
第55図　2区下層水田面詳細図（2）



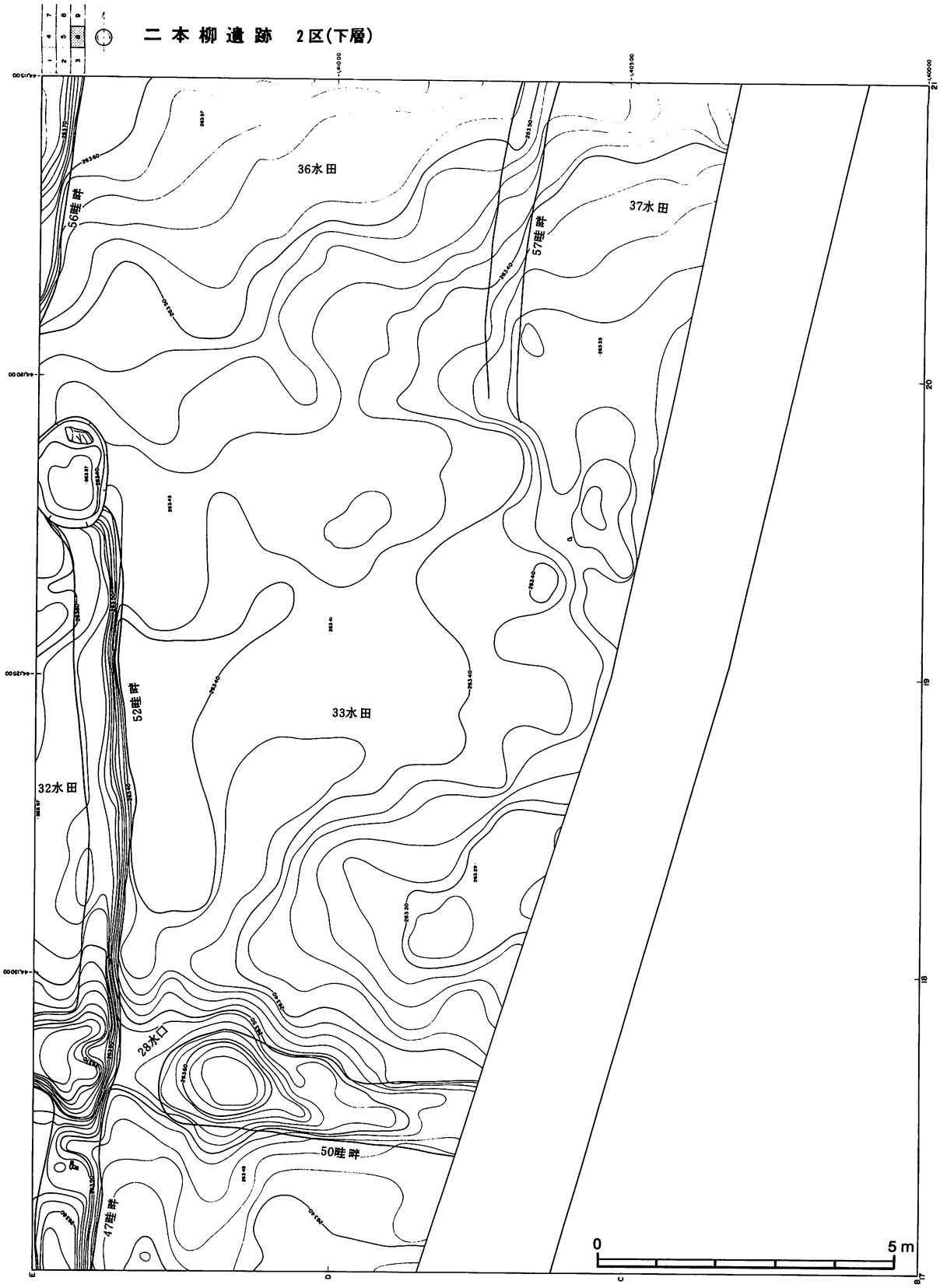
第56図　2区下層水田面詳細図（3）



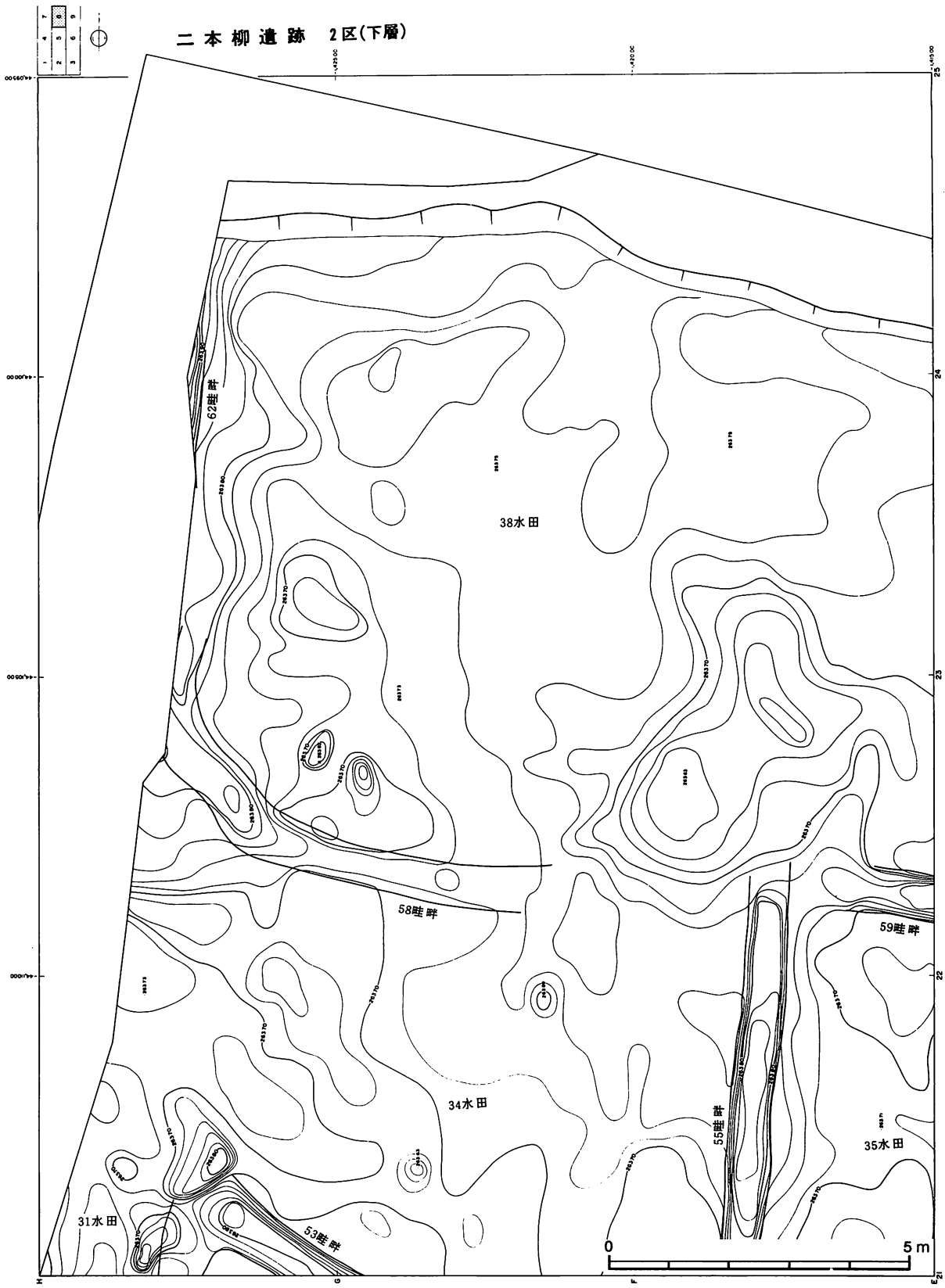
第57図　2区下層水田面詳細図（4）



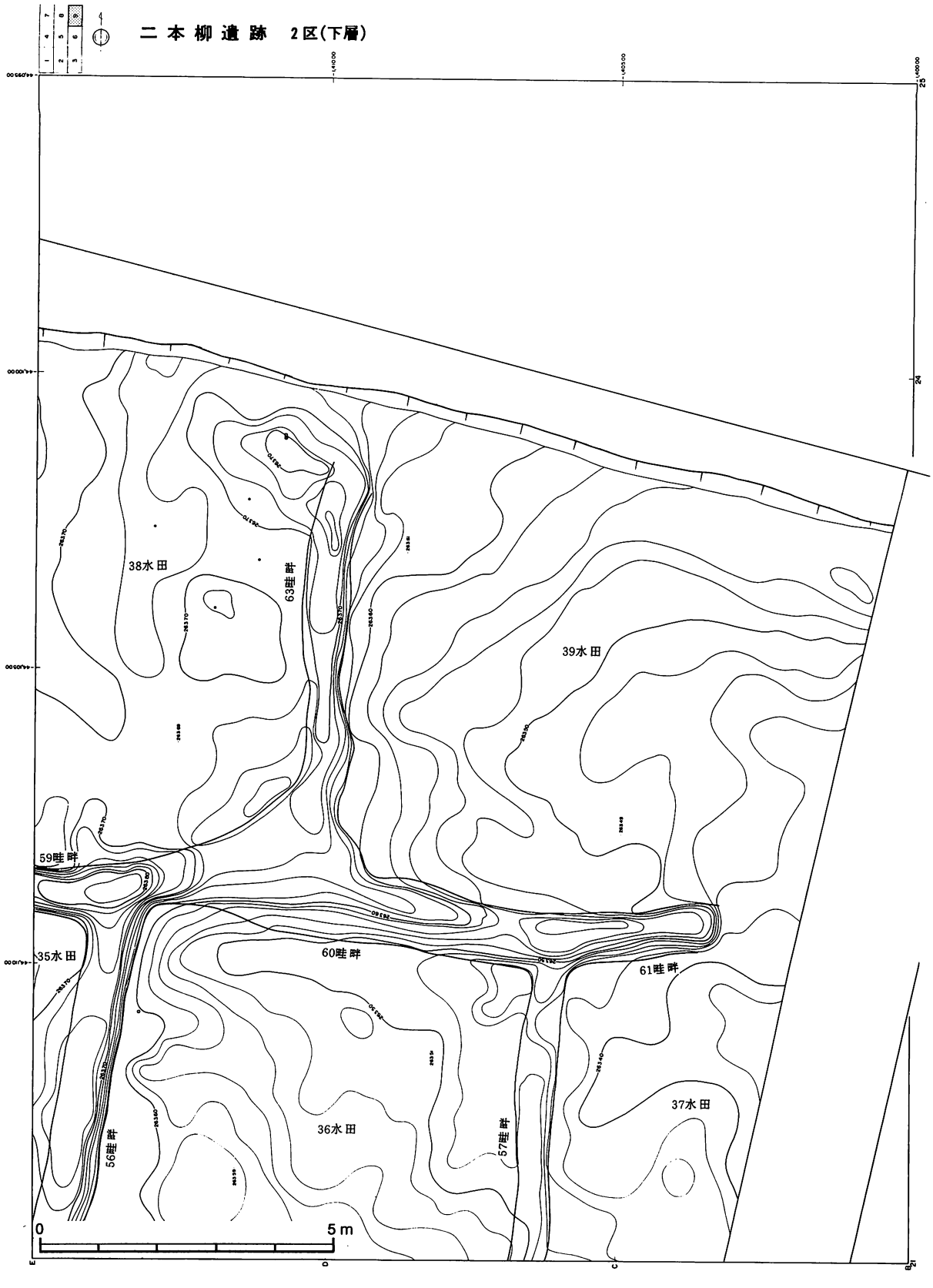
第58図　2区下層水田面詳細図（5）



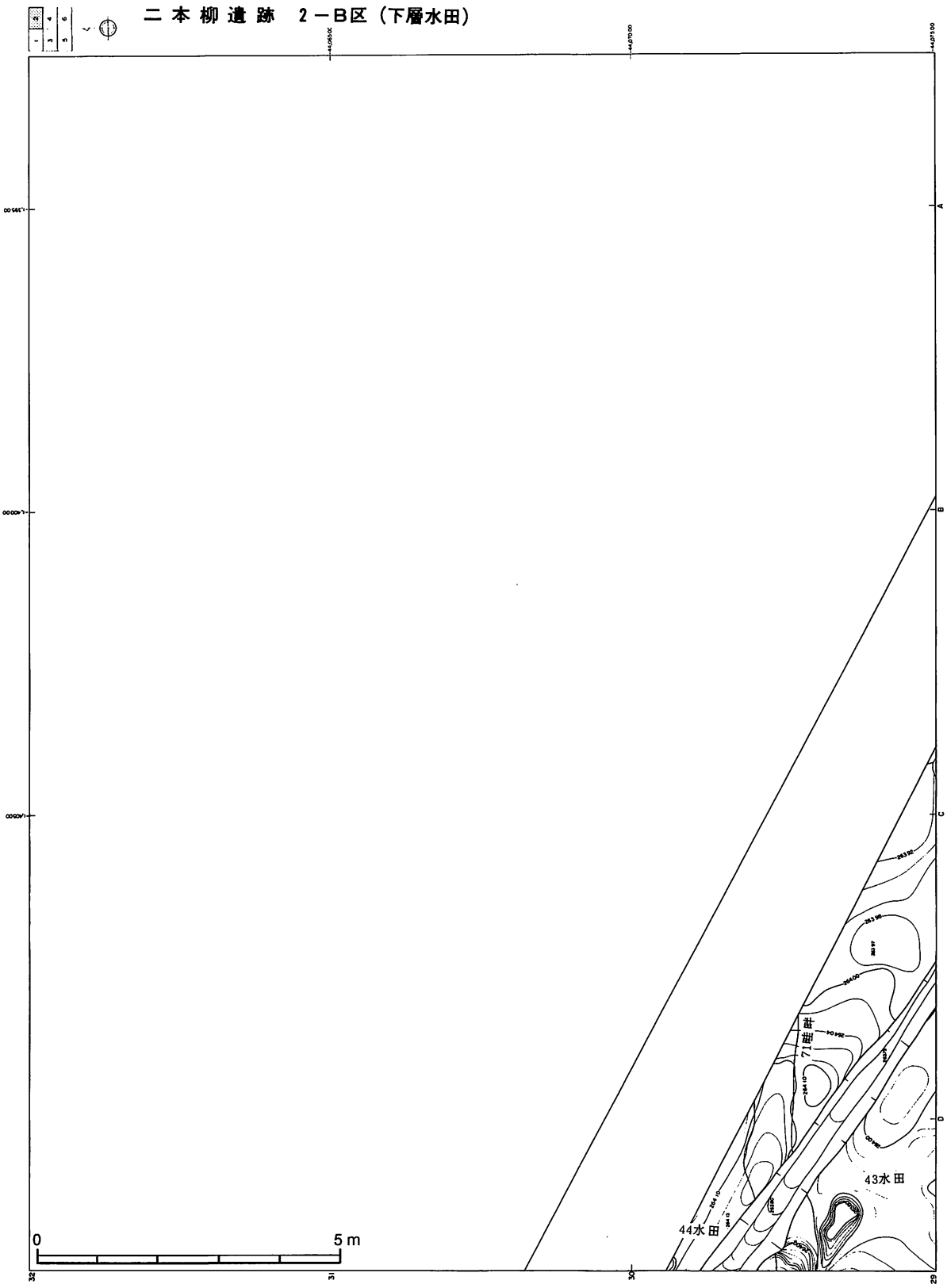
第59図　2区下層水田面詳細図（6）



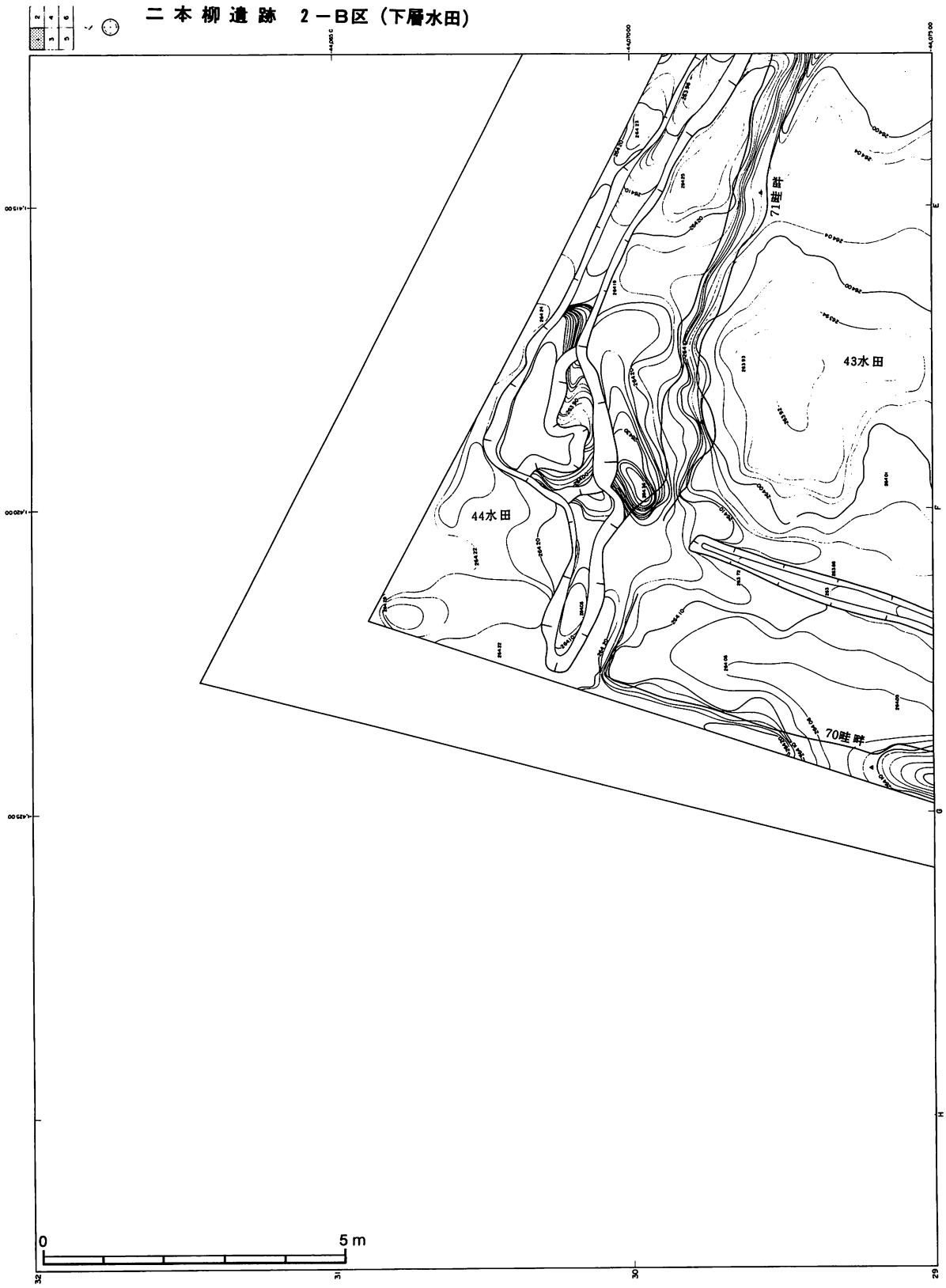
第60図　2区下層水田面詳細図（7）



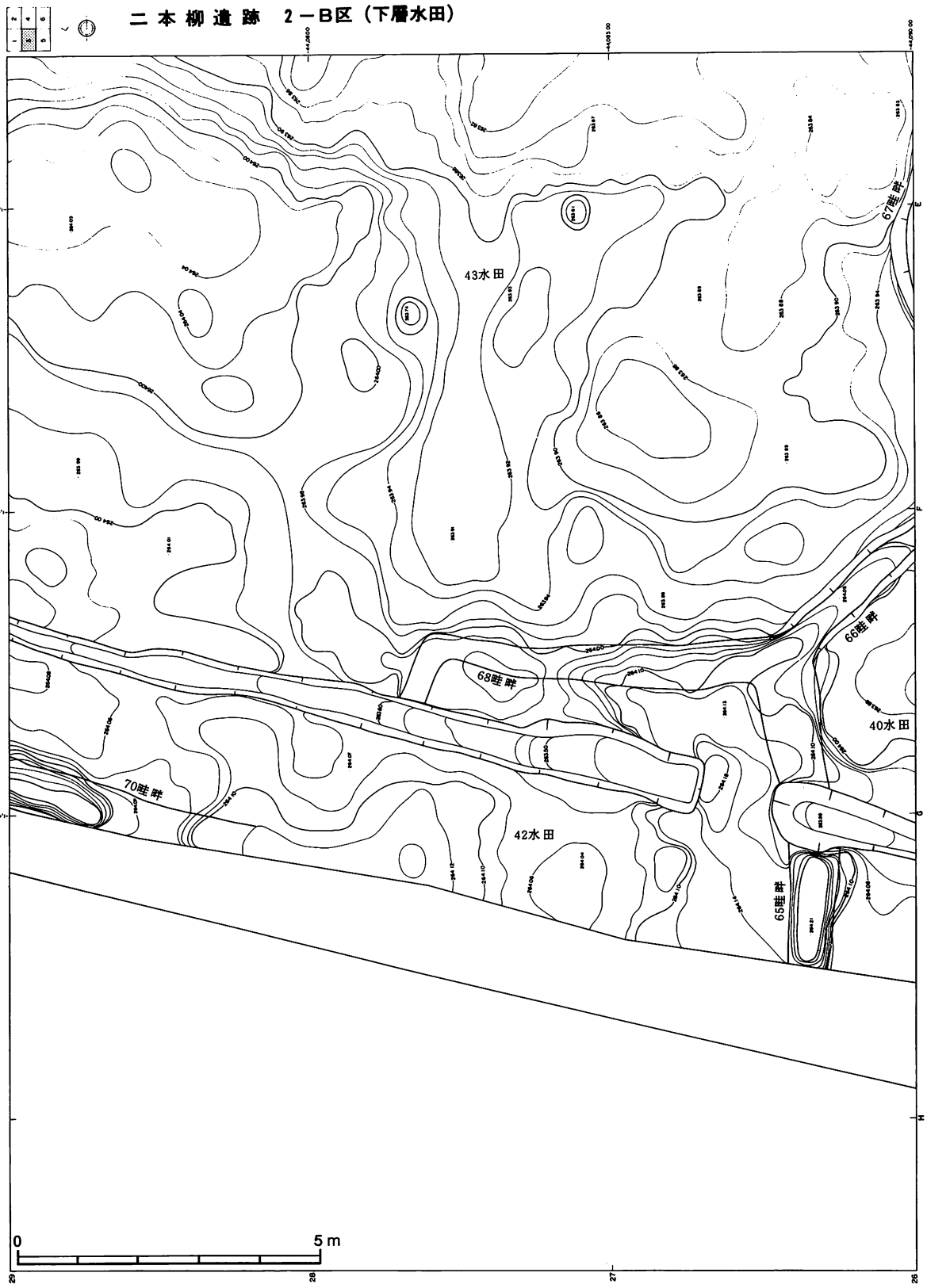
第61図　2区下層水田面詳細図（8）



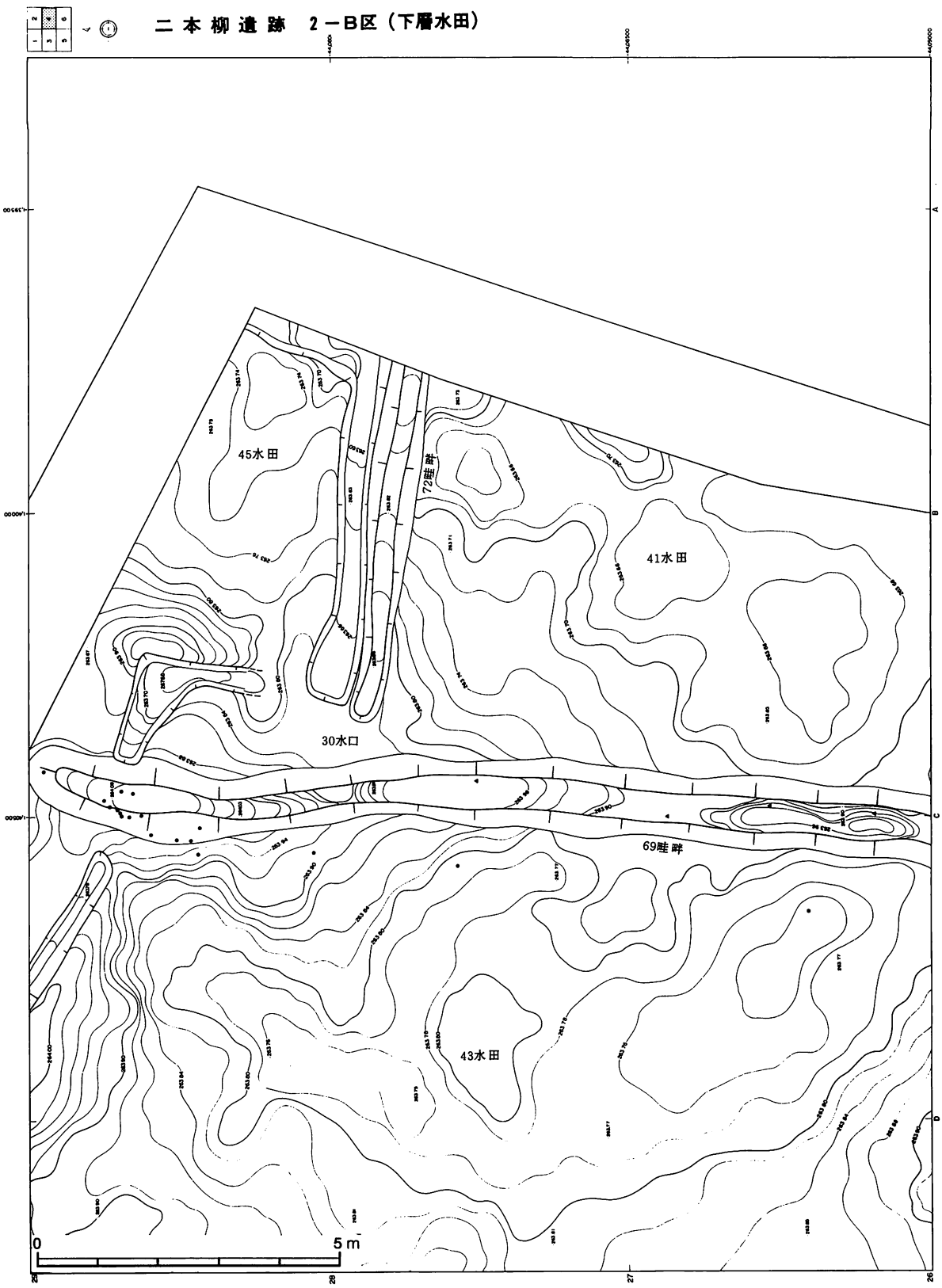
第62図　2B区下層水田面詳細図（1）



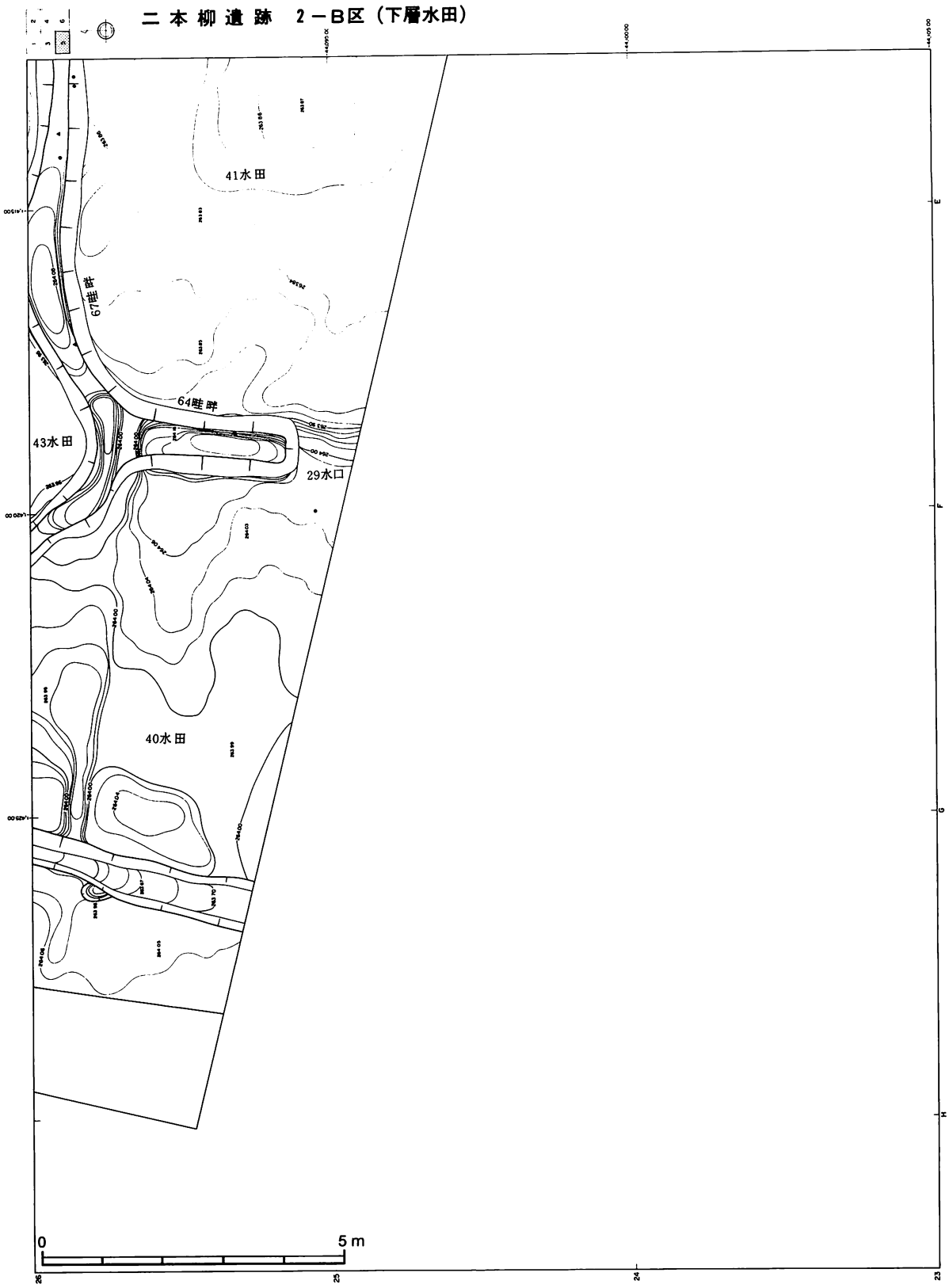
第63図　2B区下層水田面詳細図（2）



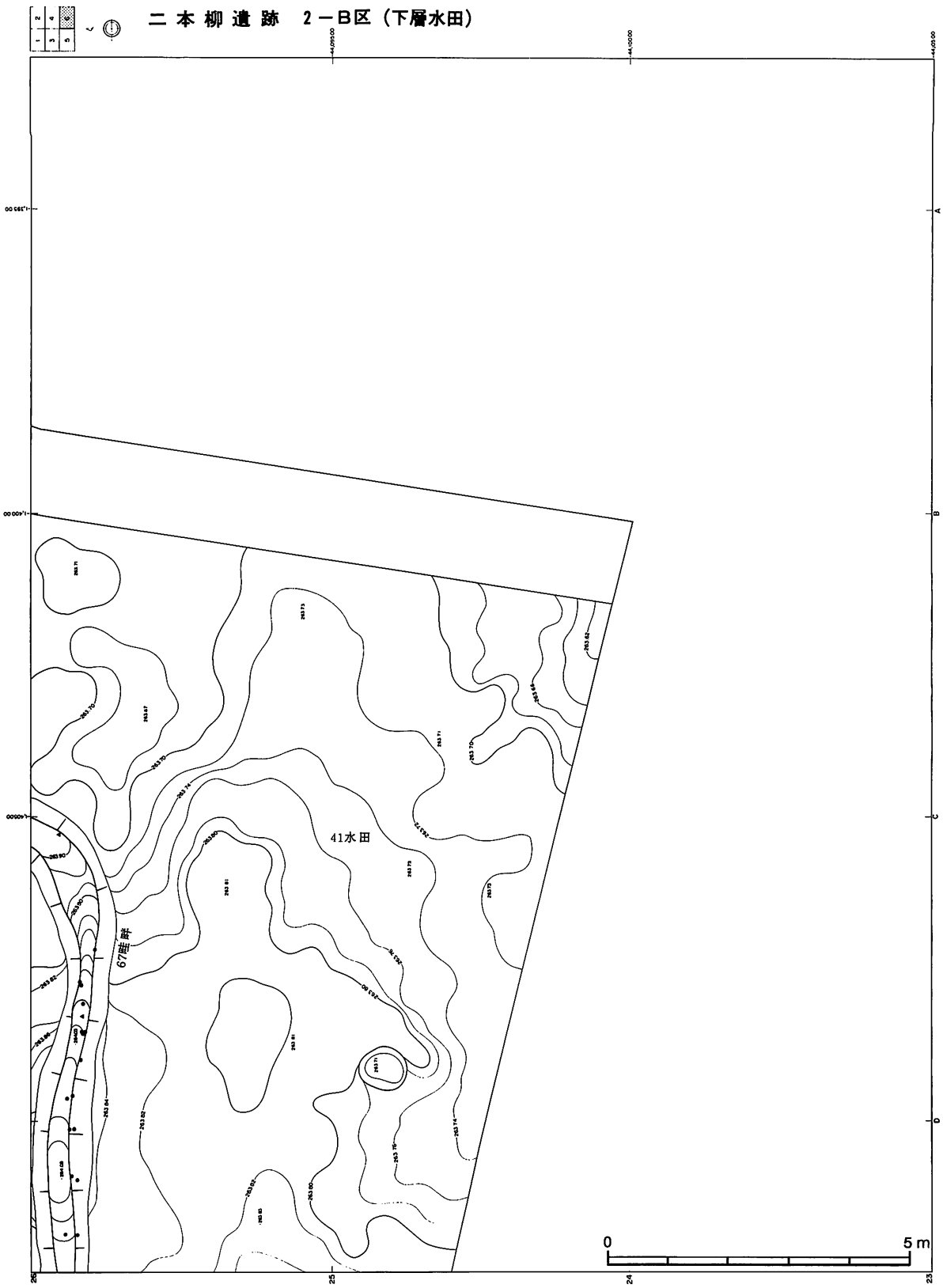
第64図　2B区下層水田面詳細図（3）



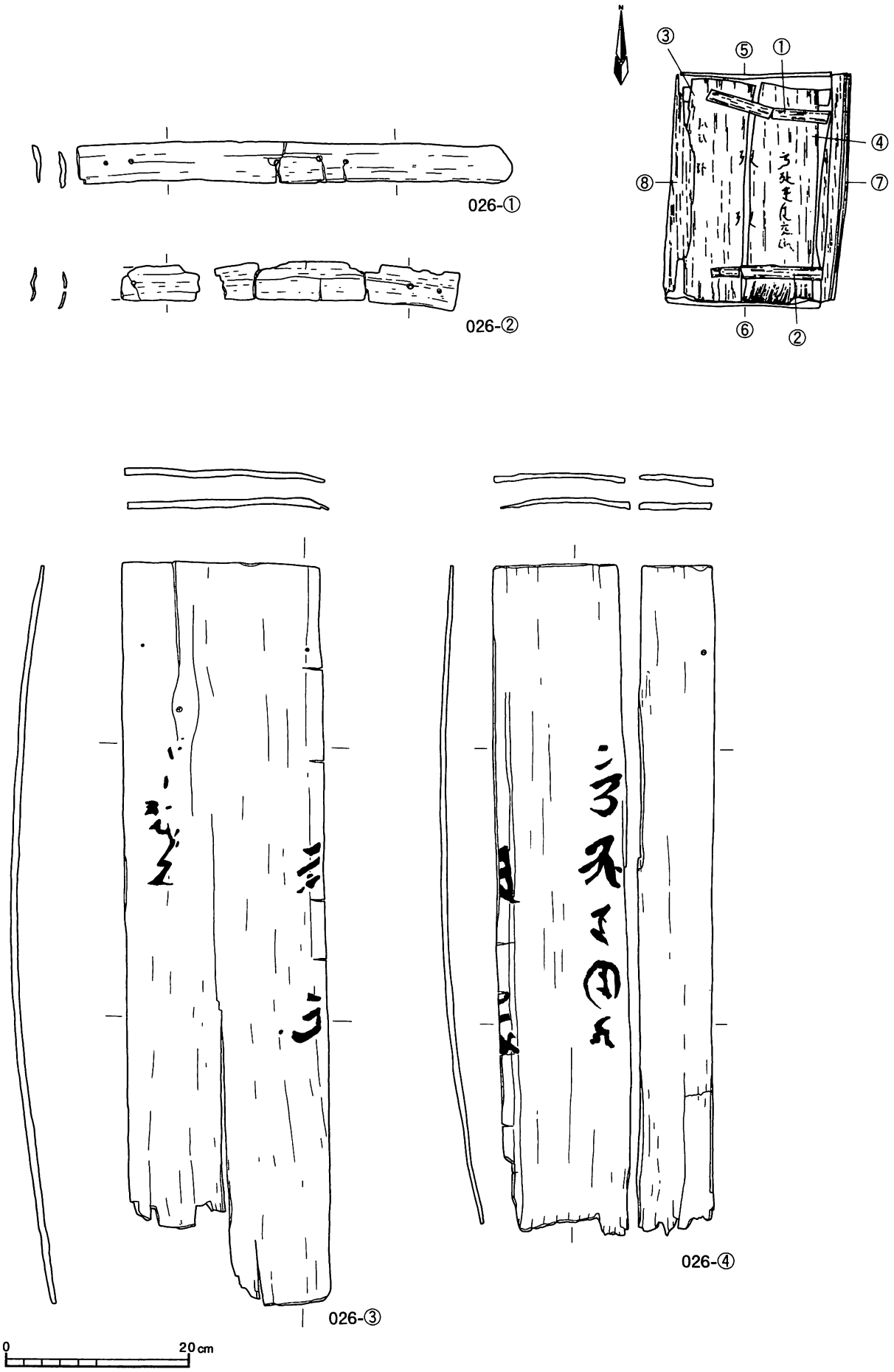
第65図　2B区下層水田面詳細図（4）



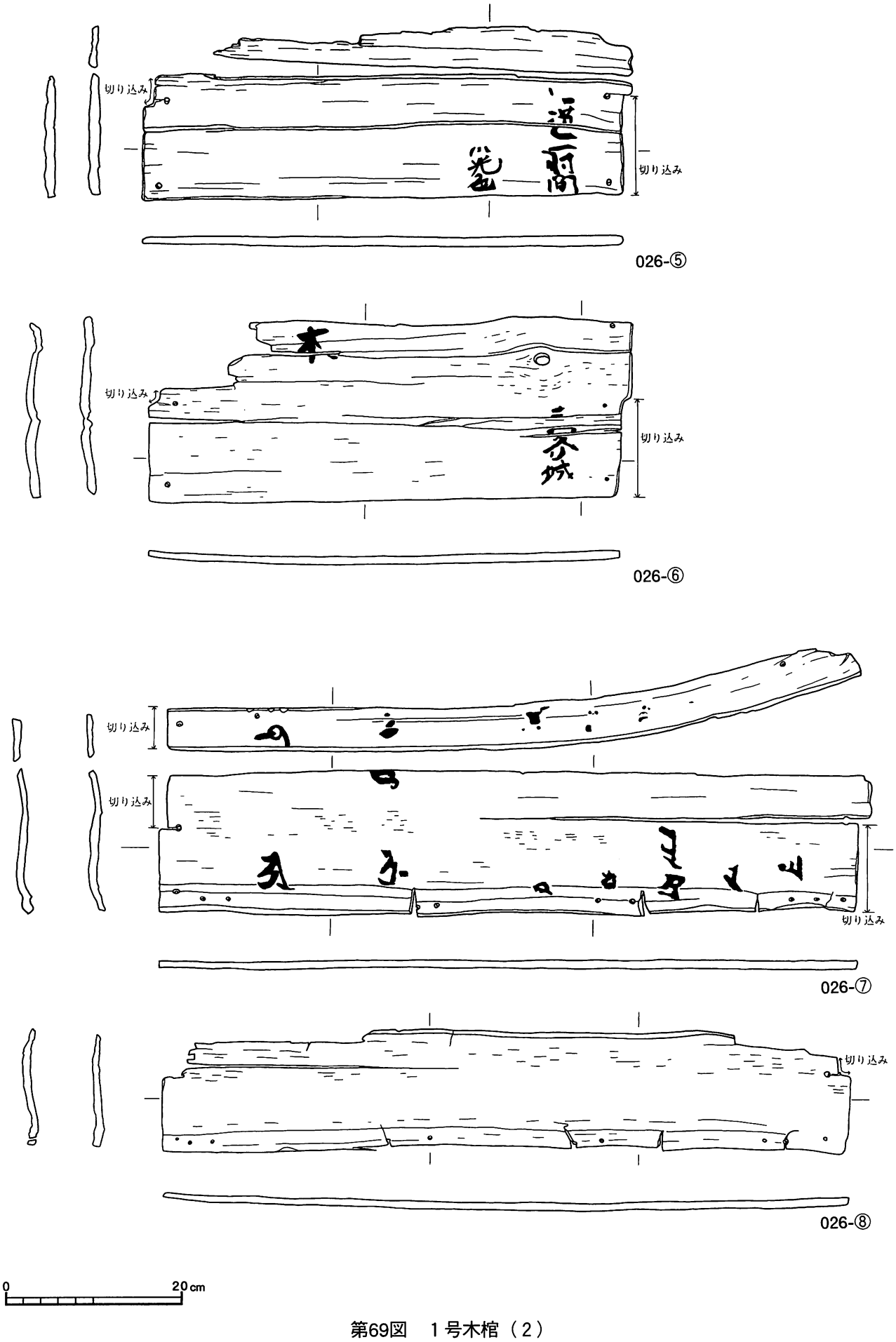
第66図　2B区下層水田面詳細図（5）



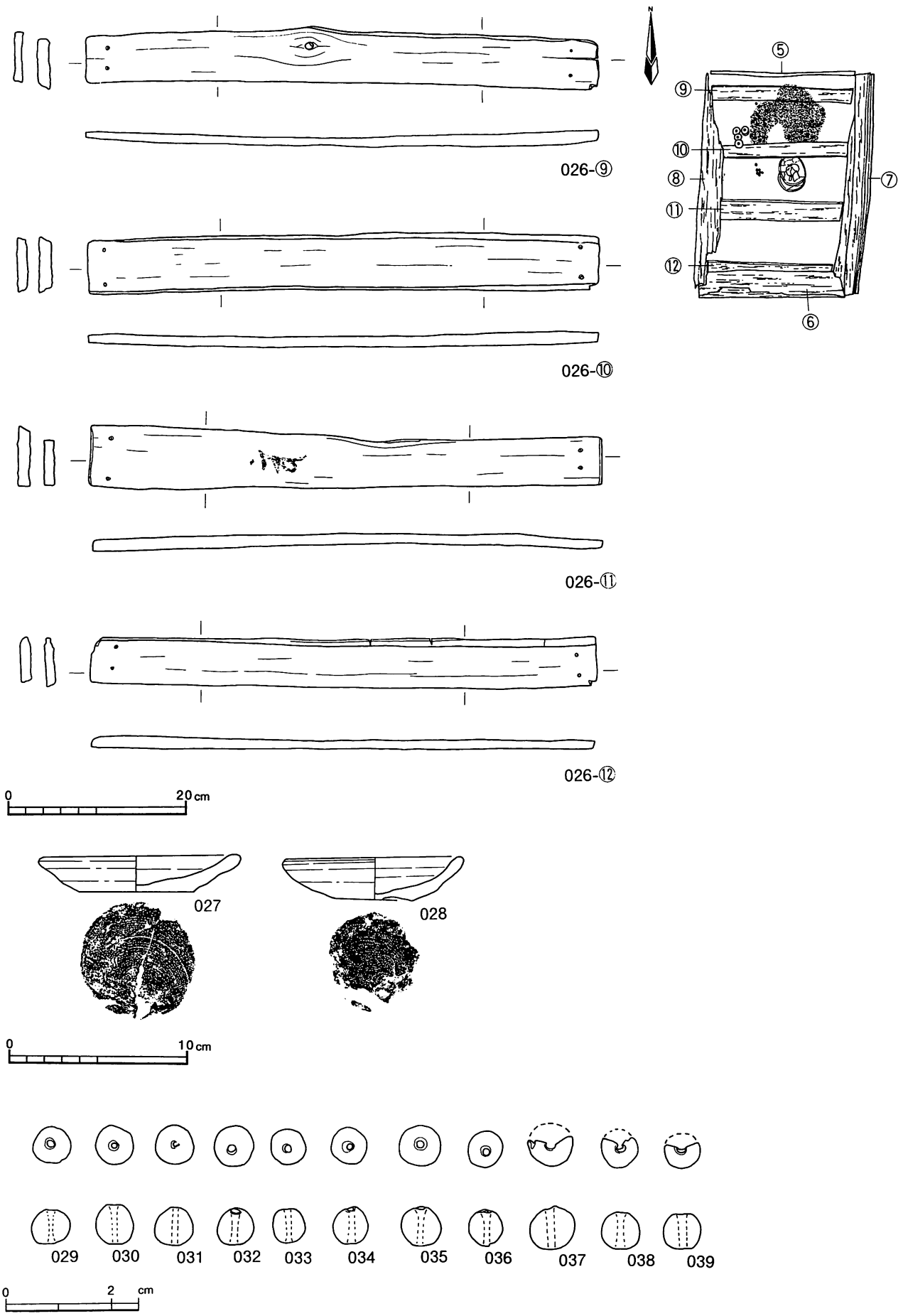
第67図　2B区下層水田面詳細図（6）



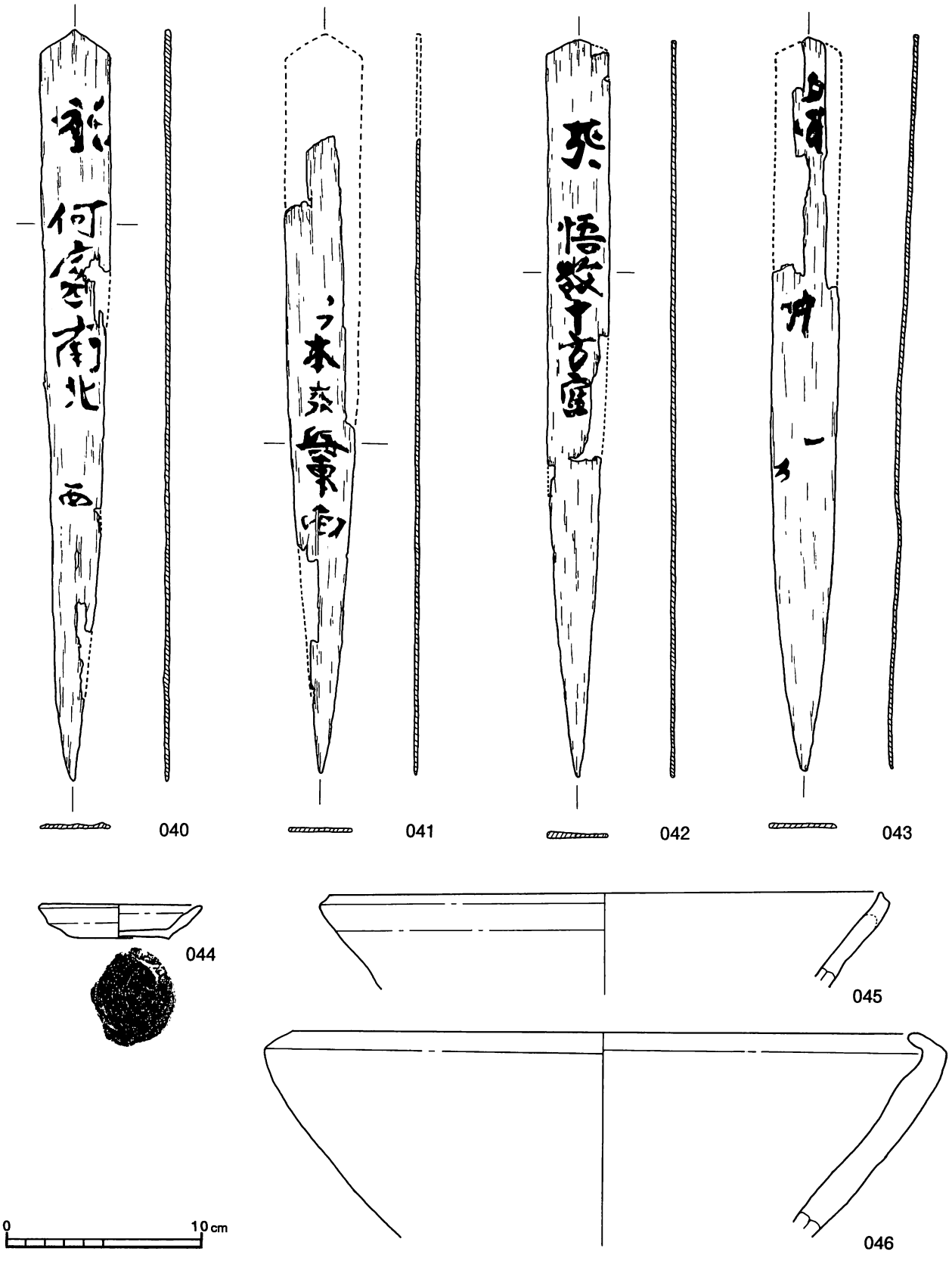
第68図　1号木棺（1）


切り込み
切り込み
026-⑤
切り込み
切り込み
026-⑥
切り込み
切り込み
切り込み
026-⑦
切り込み
026-⑧
0
20cm

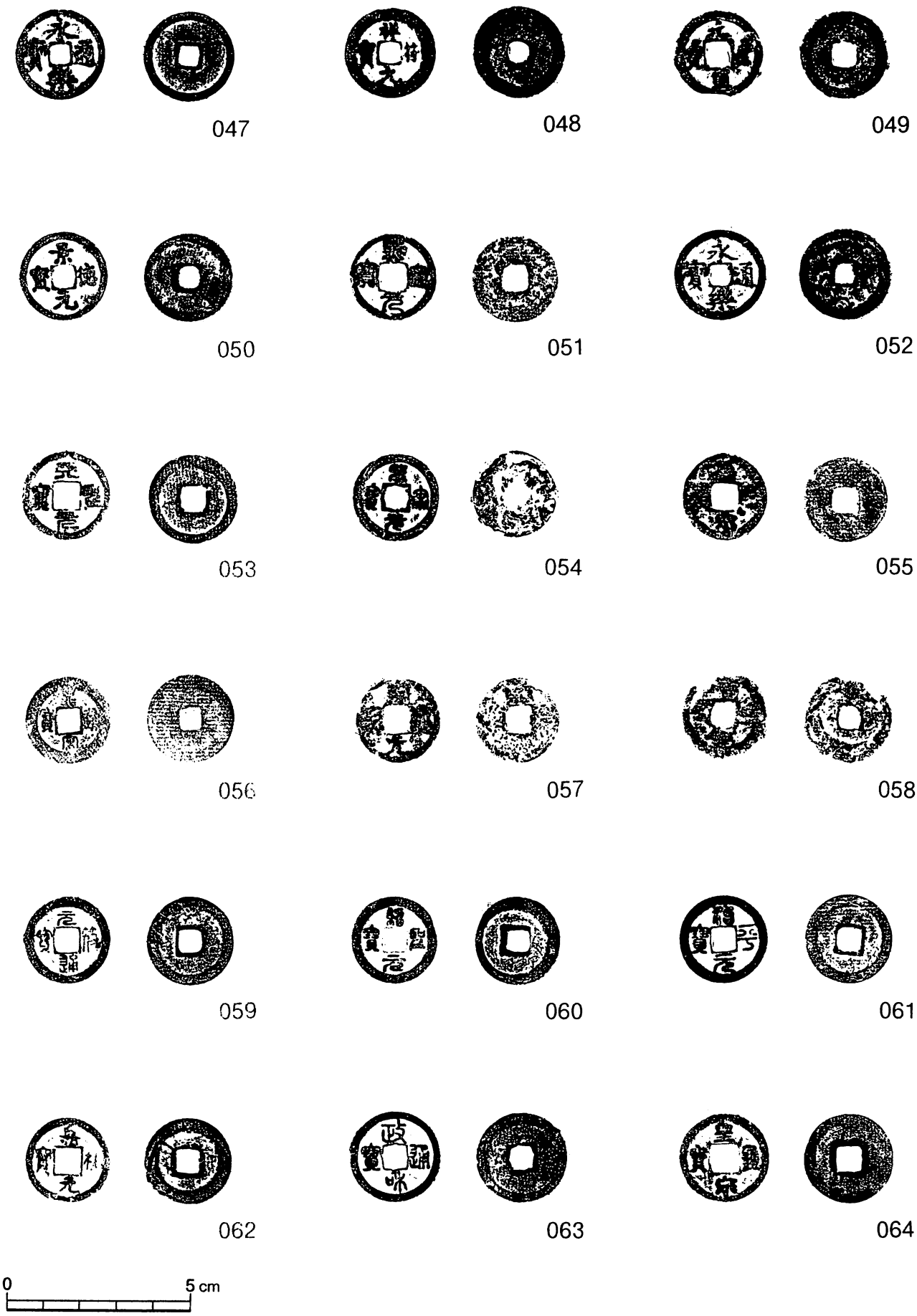
第69図　1号木棺（2）



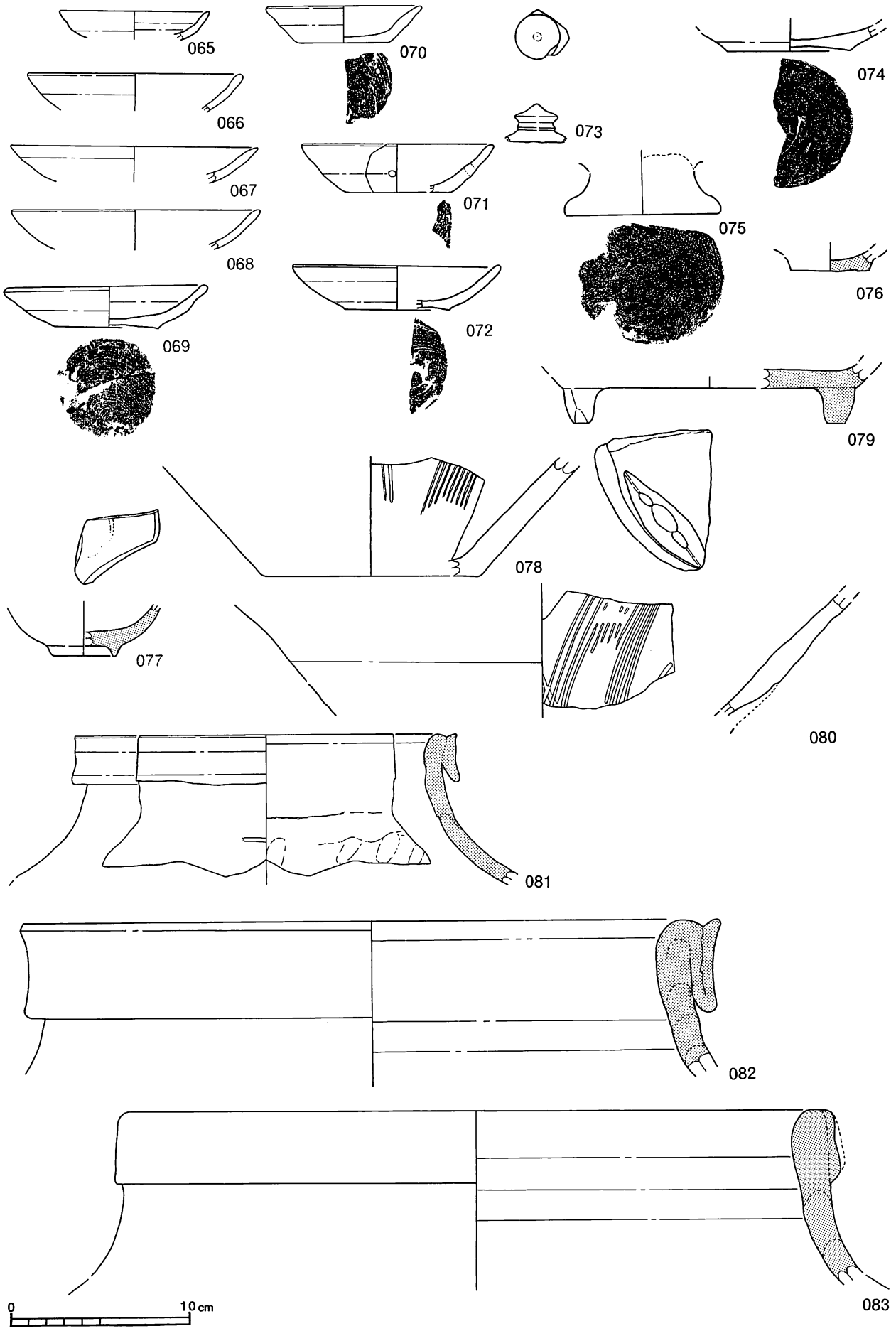
第70図　１号木棺および出土遺物（３）



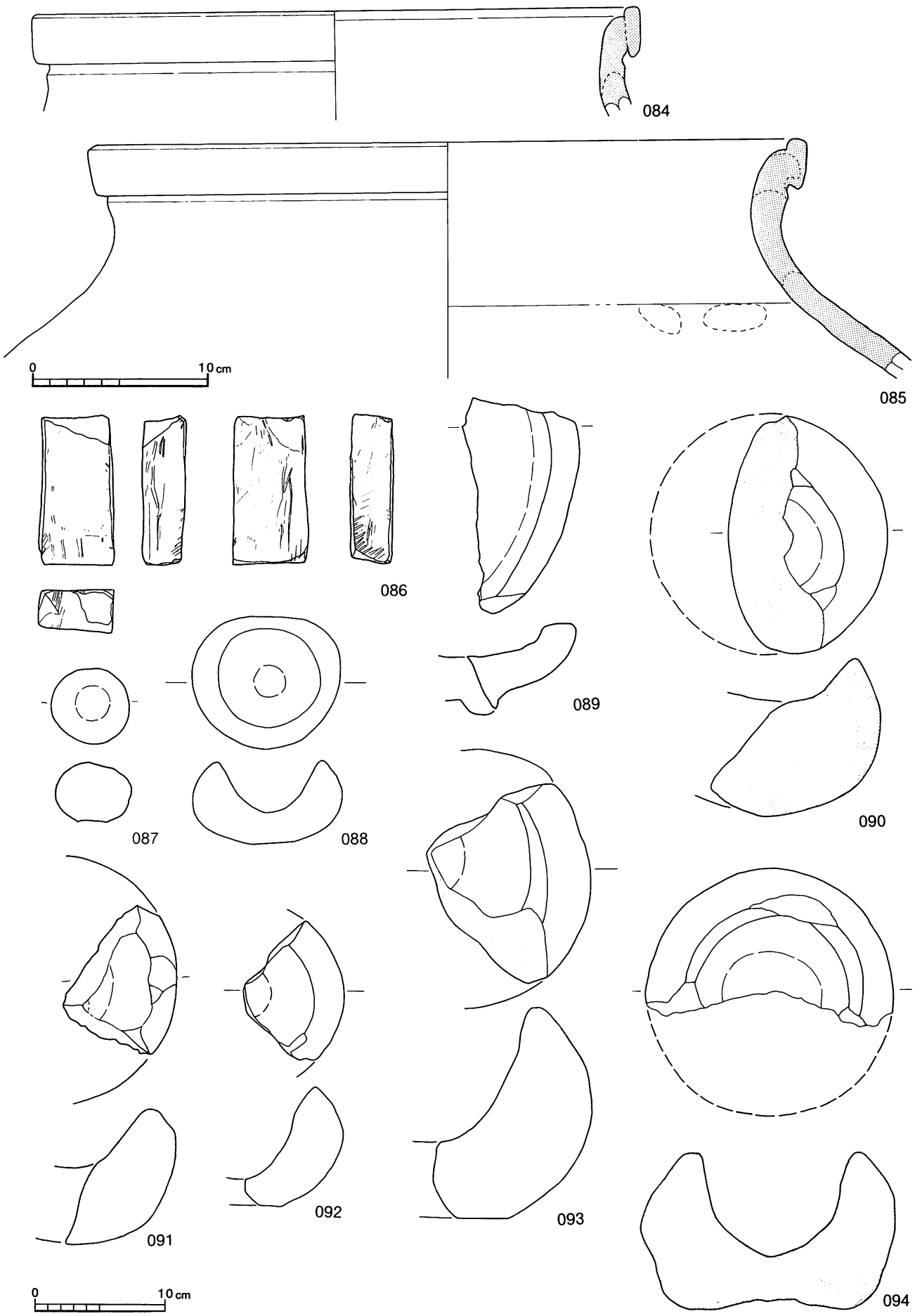
第71図　2号木棺出土遺物


047
048
049
050
051
052
053
054
055
056
057
058
059
060
061
062
063
064
0
5 cm

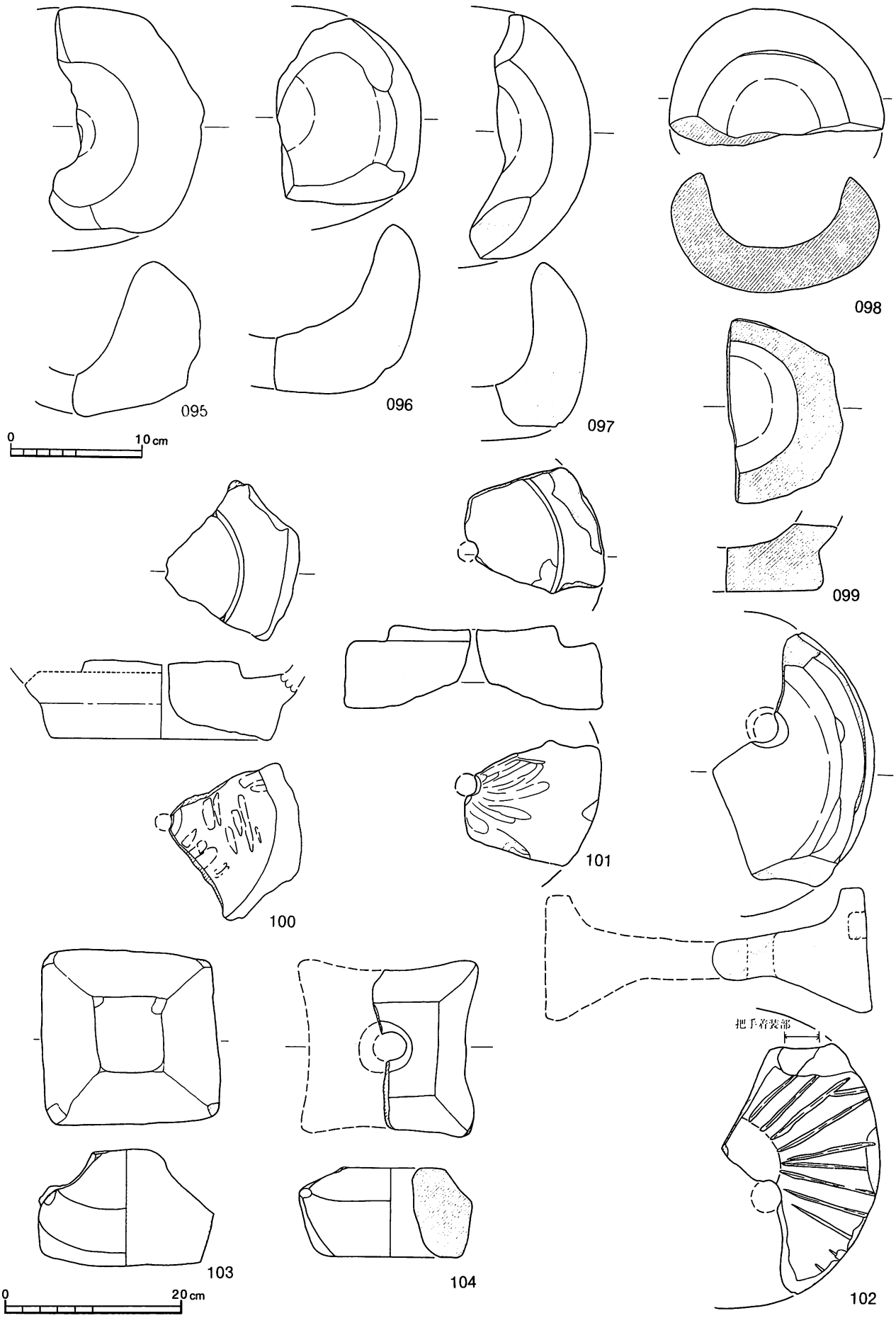
第72図　古銭



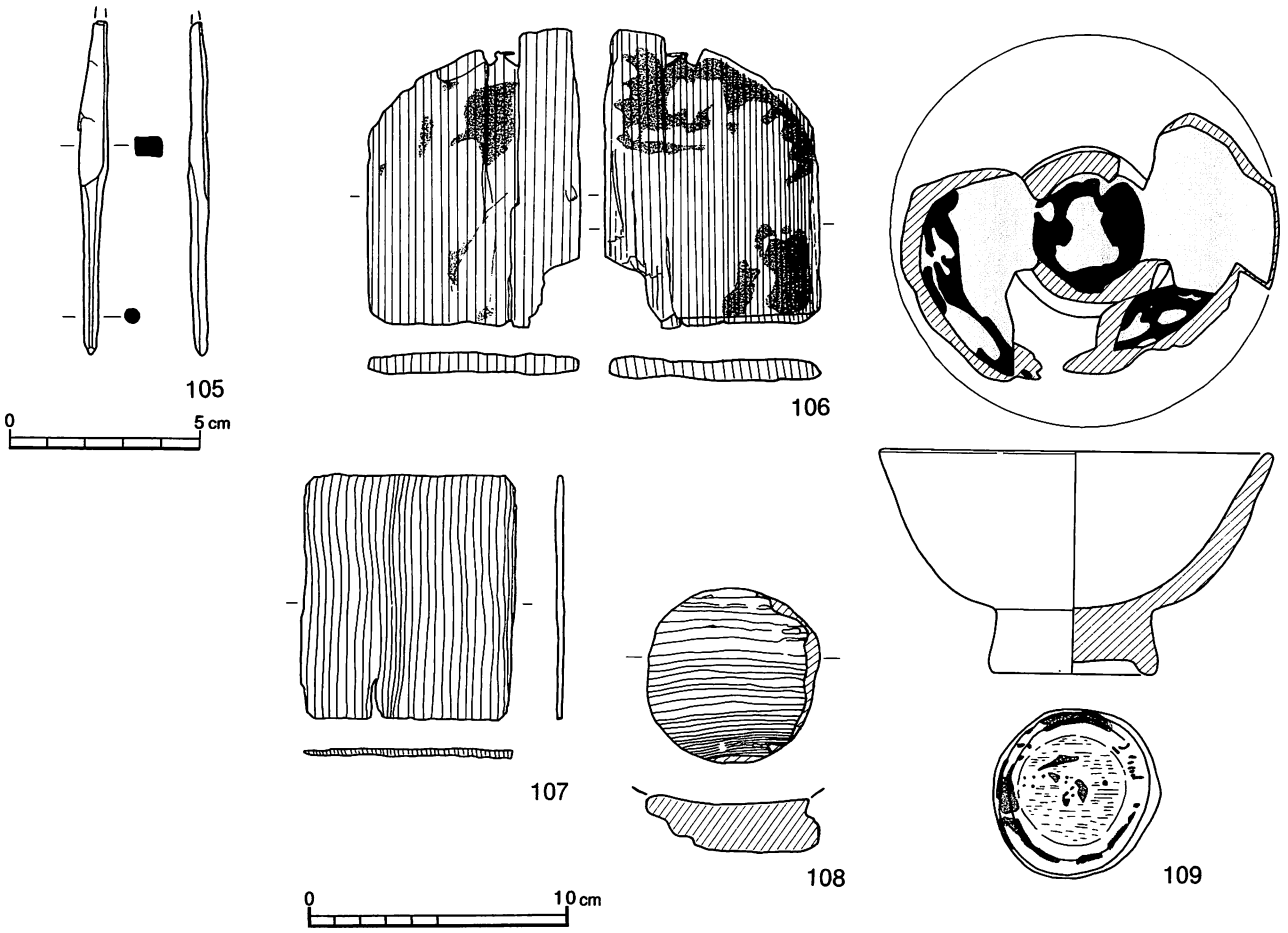
第73図　2号溝内出土遺物（1）



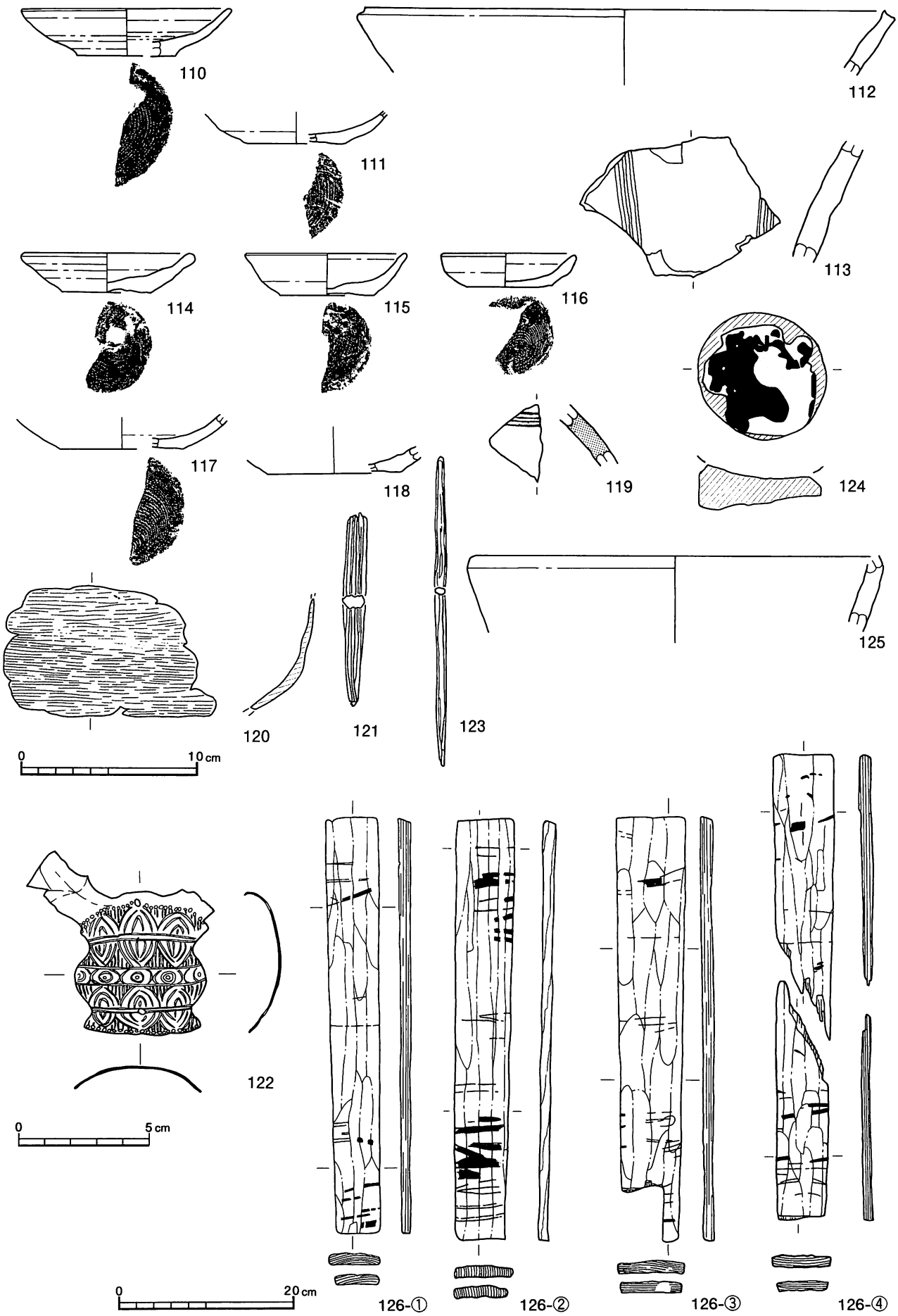
第74図　２号溝内出土遺物（２）



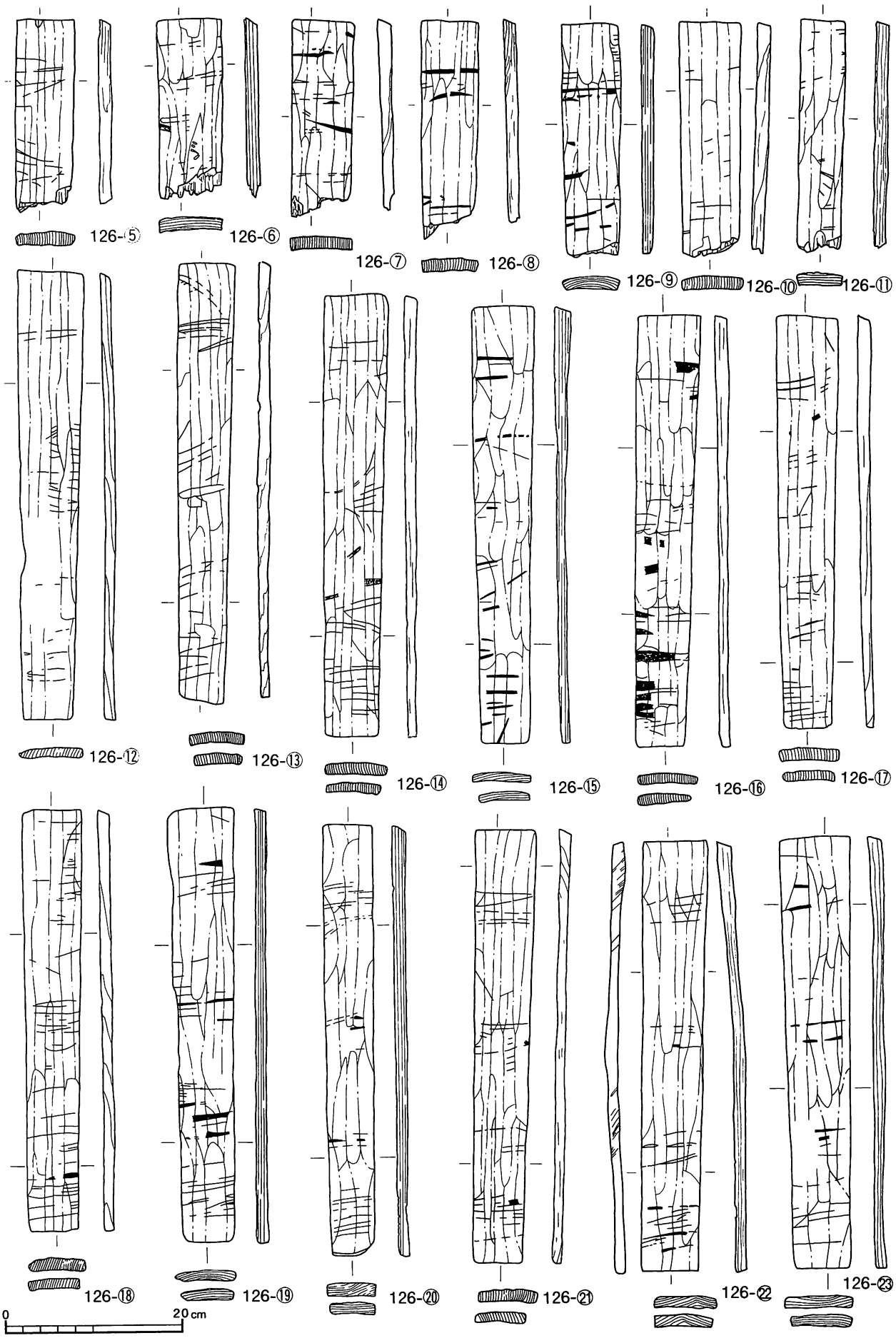
第75図　2号溝内出土遺物（3）



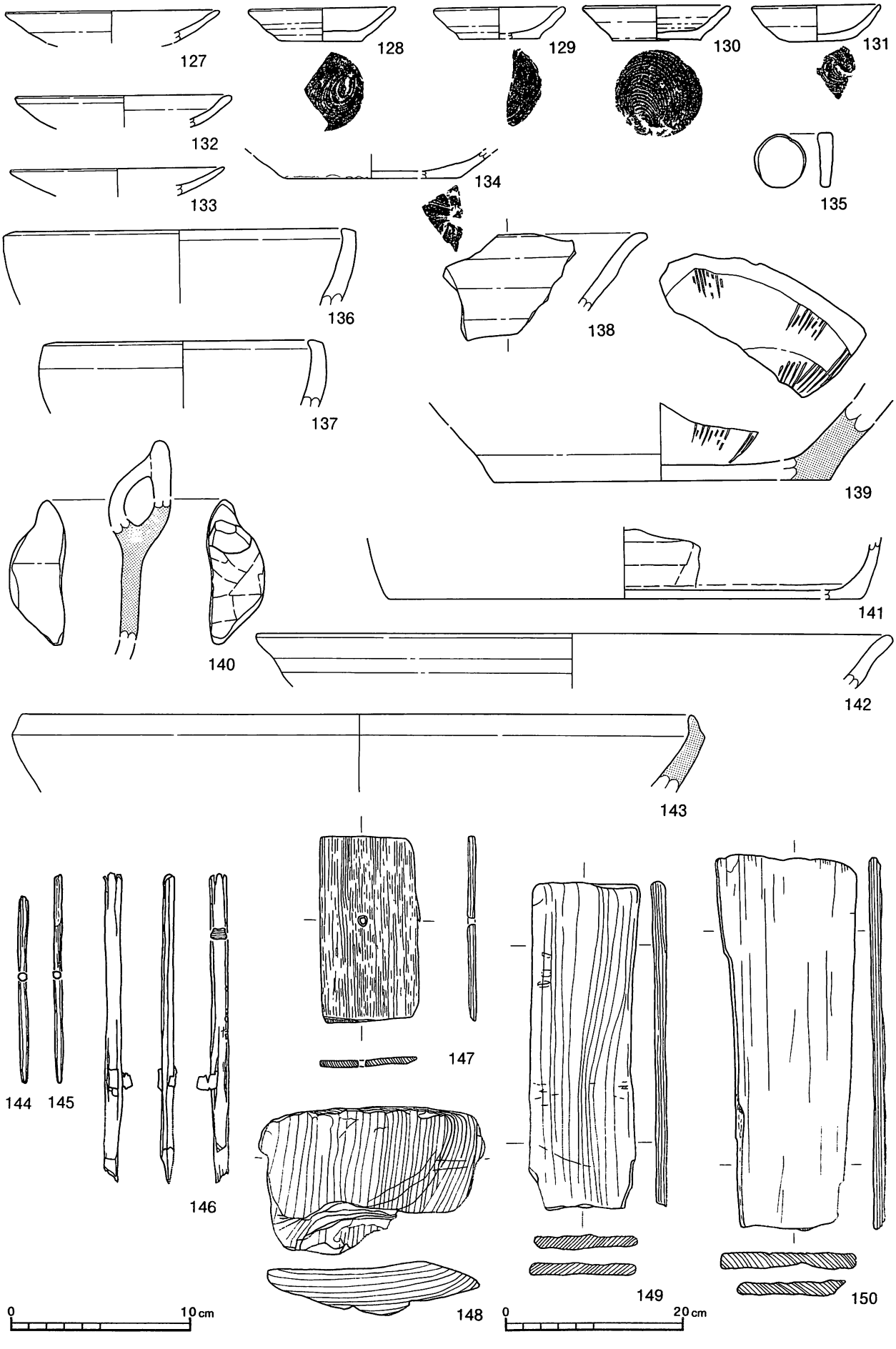
第76図　2号溝内出土遺物（4）



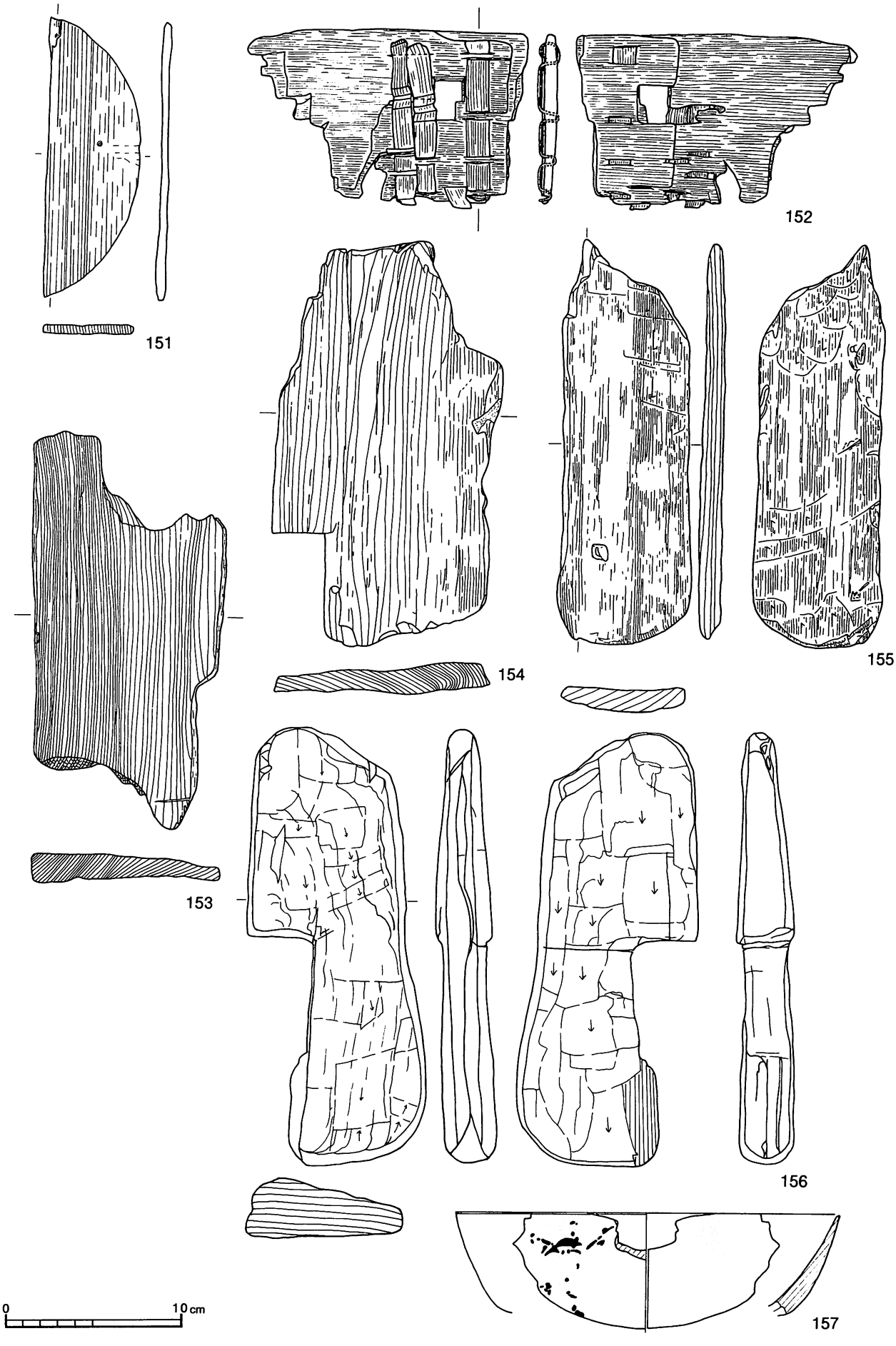
第77図　2号溝および井戸内出土遺物



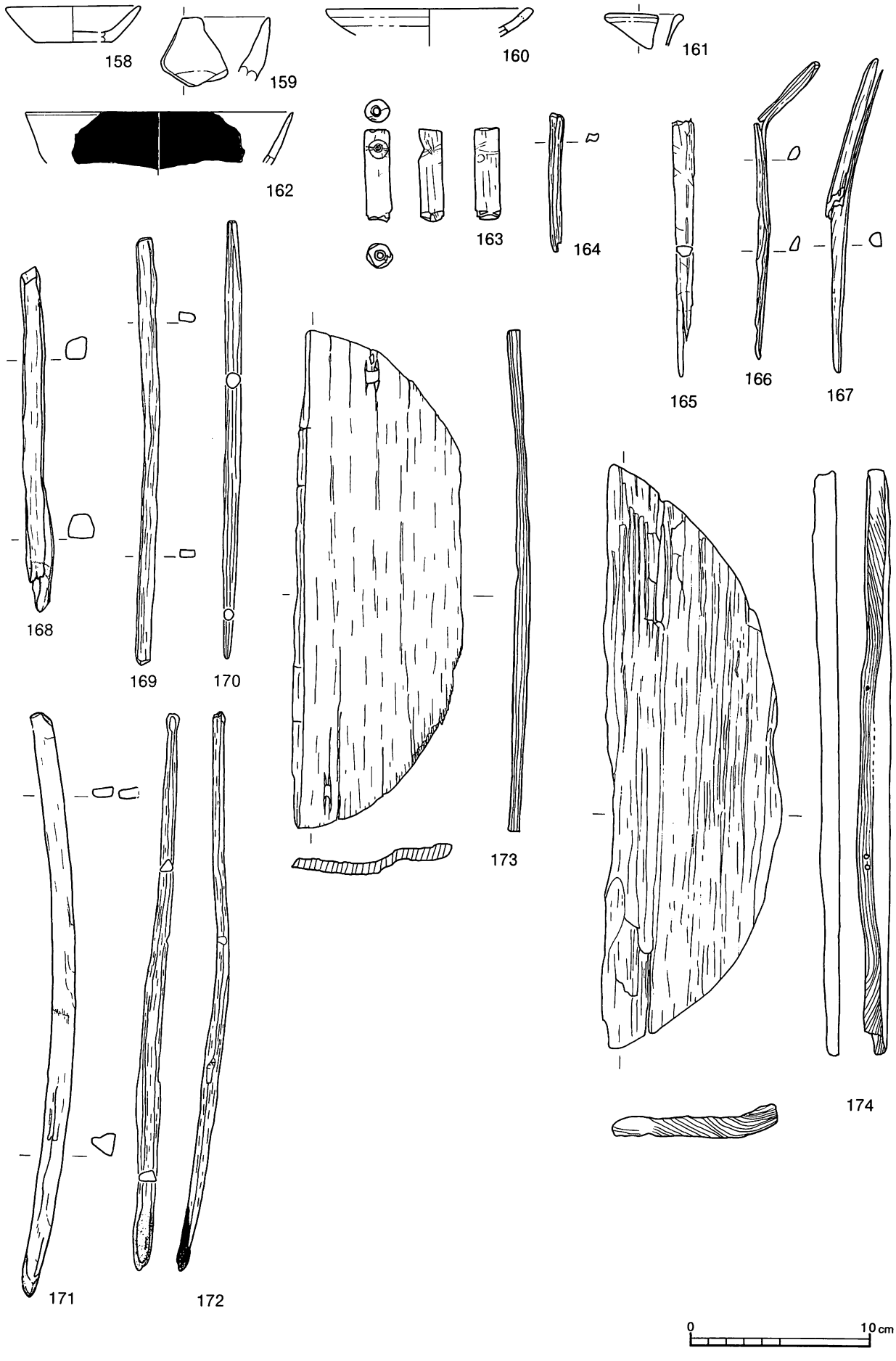
第78図　２区井戸内出土遺物（１）



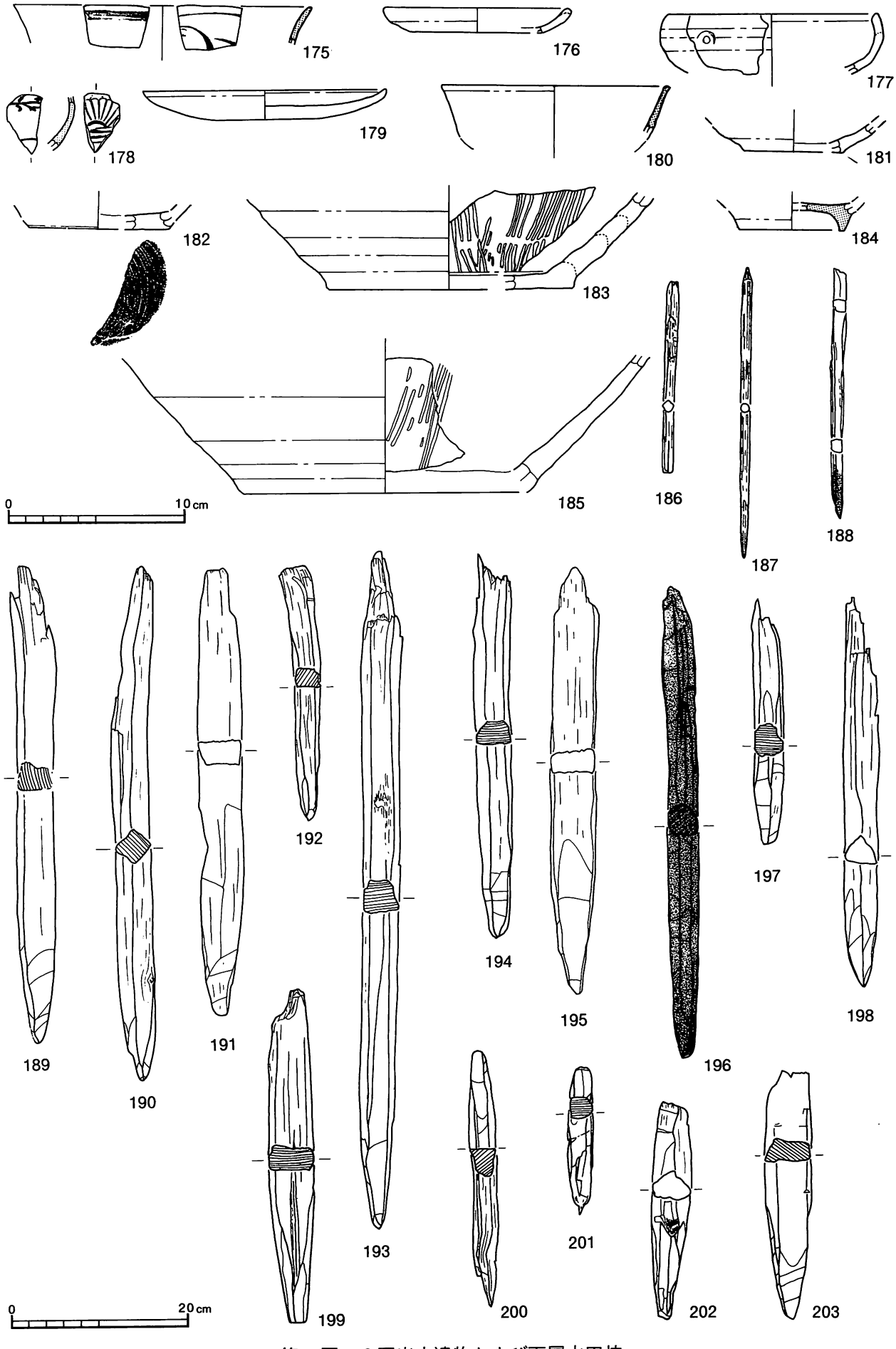
第79図　２区井戸内出土遺物（２）



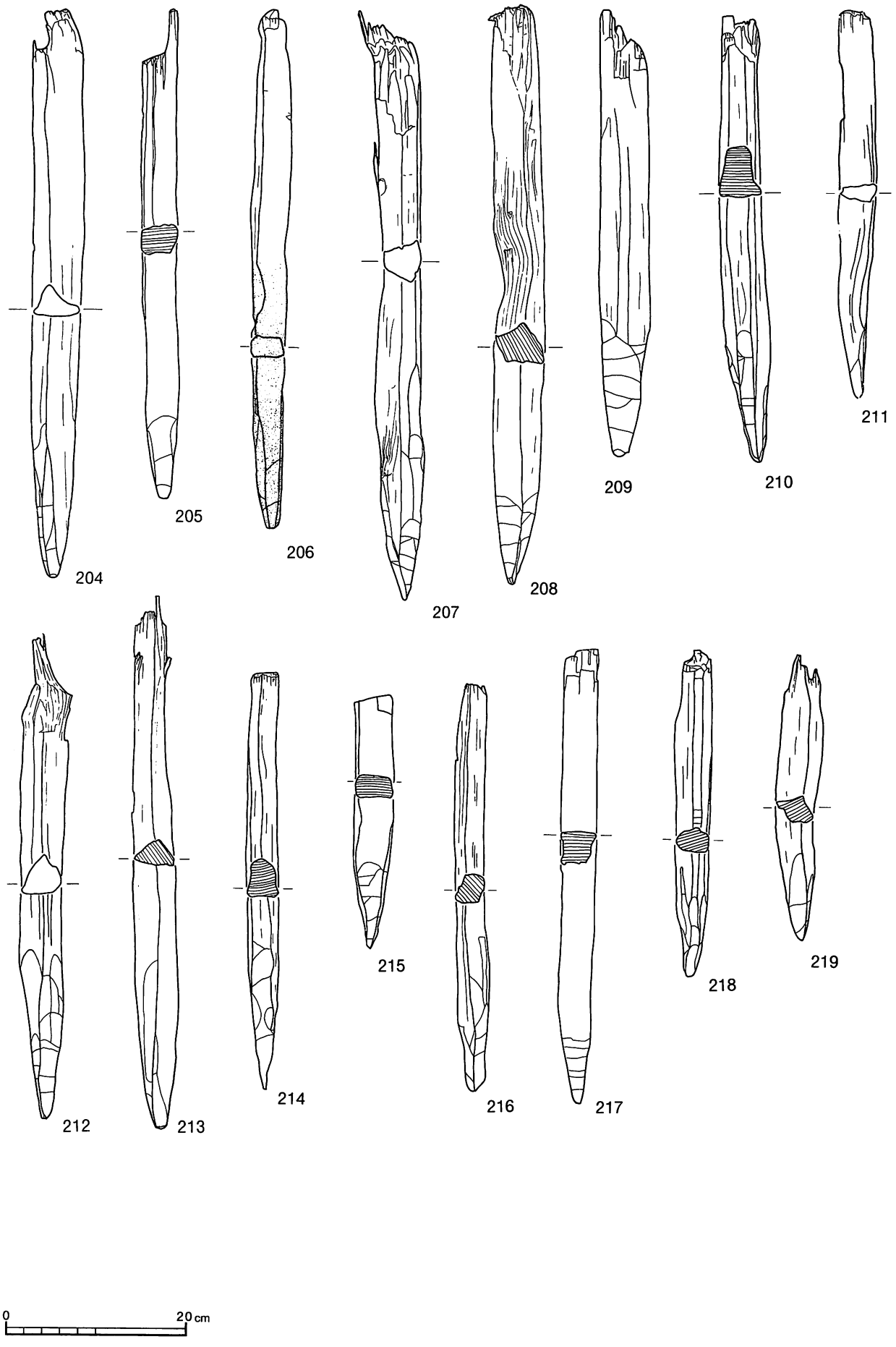
第80図　２区井戸内出土遺物（３）



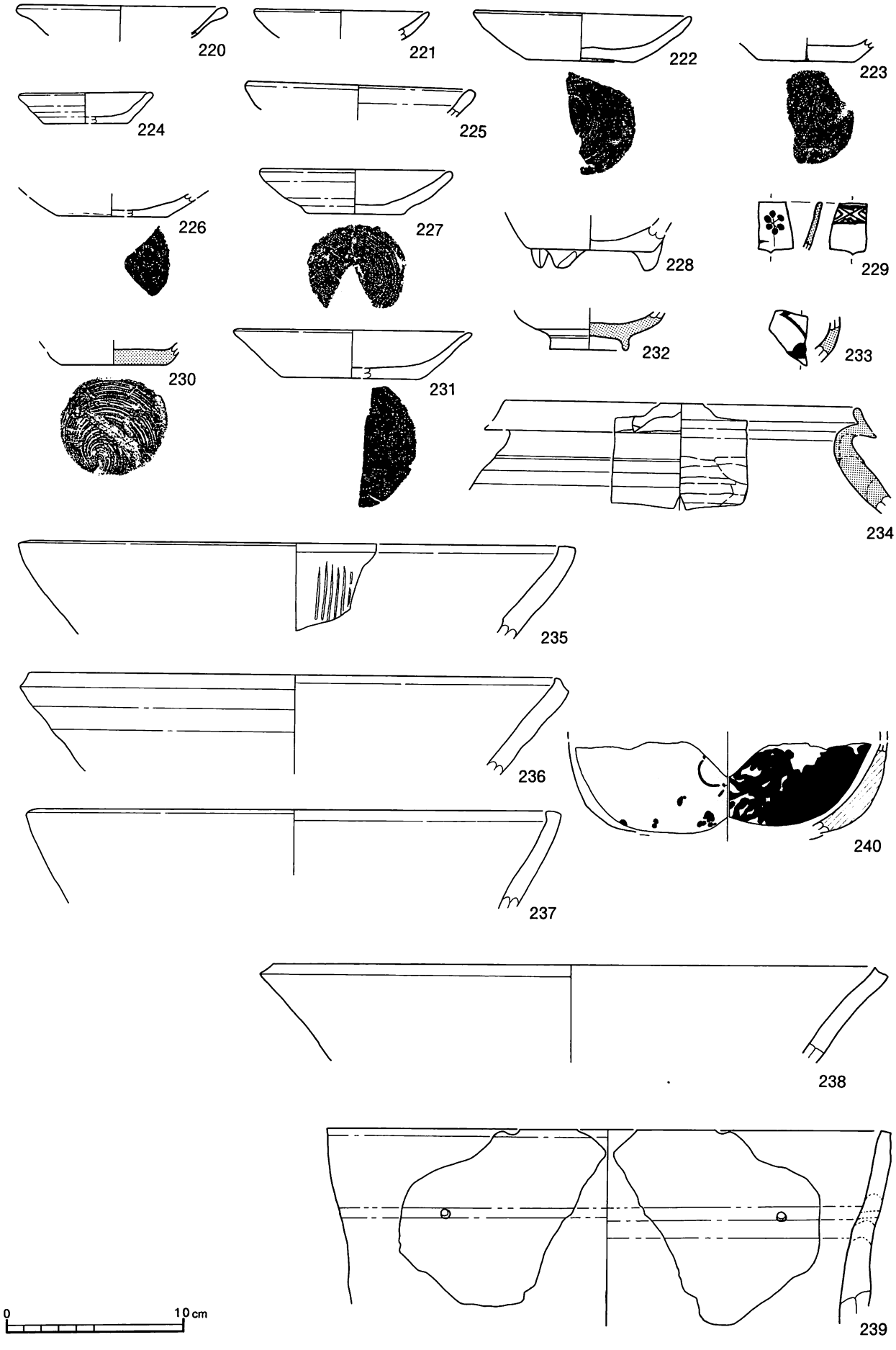
第81図　2区下層水田出土遺物



第82図　2区出土遺物および下層水田杭



第83図　2B区下層水田杭


220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
0
10cm

第84図　2区出土遺物

第4表　2区上層水田

水田番号	面　積 (m²)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
1	31.69+α	264.08	263.92	1		
2	68.68	264.01	263.84	1．2．5a	6溝	
3	136.43	263.94	263.66	2．3a．3b．5b	24水口．6溝	
4	14.65+α	263.76	263.58	3b．4		
5	28.41+α	263.78	263.66	3a．4．5c	6溝	
6	9.12+α	264.14	264	9．10．11a	2水口	
7	5.66+α	264.16	264.04	6．9．10	1水口	
8	65.8	264.06	263.7	7．8．10．11b．12a．12b	1・2・3水口	
9	76.68+α	264.2	263.7	5a．5b．6．7．8	1水口．6溝	
10	58.99+α	263.76	263.57	5c．8．13．14	7水口．6溝	
11	80.22	264.14	263.98	11a．11b．15．16．19	3・25水口	
12	39.12	264.07	263.89	12a．16．17．21	4・5水口	
13	93.13	263.98	263.64	12b．13．17．18．22	5・6・10水口	
14	47.10+α	263.9	263.52	14．18．23	6・7・10・11水口	
15	74.22	264.15	263.91	19．20．24．26	8・25水口	
16	82.72	264.12	263.92	20．21．22．25．28．29	9・12水口	
17	99.91+α	263.9	263.68	22．23．25．28．30	9・11・12水口	
18	64.17+α	264.38	264.1	26．27．31．34	13・14水口	
19	44.05	264.06	263.8	27．29．32a．32b．33	14・15水口	
20	108.67+α	263.97	263.73	30．33．38．44．28	15・16・22水口	
21	25.87+α	264.32	264.22	34．35．39	13・17水口	
22	36.22	264.18	264.04	35．36．37．40	17・19水口	
23	18.09	264.18	264.14	31．32a．36．37	18水口	
24	77.09+α	264.35	264.05	39．40．41	20水口．7・8溝	
25	139.61	264.14	263.9	32b．37．38．41．42．43	16・18・19・20・21水口	
26	28.52+α	264.08	263.76	43．44	21・22・23水口	

第5表　2区下層水田

水田番号	面　積 (m²)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
27	64.81+α	263.91	263.52	45．48	26水口	
28	116.73	263.7	263.5	45．46．49a	27水口	
29	171.51	263.66	263.27	46．47．49b	27水口	
30	76.29+α	263.54	263.18	47．5	28水口	
31	52.25+α	263.86	263.7	48．51．58		
32	167.98	263.78	263.54	49a．49b．51．52．53．54		
33	80.14+α	263.54	263.28	50．52	28水口	
34	57.67	263.73	263.63	53．55．58		
35	32.23	263.76	263.56	54．55．56．59		
36	84.48	263.6	263.44	56．57．60		
37	37.02+α	263.46	263.33	57．61		
38	190.76+α	263.88	263.63	58．59．62．60．63		
39	75.59+α	263.88	263.44	60．61．63		
40	43.82+α	264.08	263.84	64．65．66	29水口	
41	(165.90)	263.84	263.62	64．67．69．72		
42	26.25	264.18	264.04	65．68		
43	(320.44)	264.01	263.82	66．67．68．69．70．71		
44	28.92+α	264.36	264.08	71		
45	26.99+α	263.94	263.7	69．72	30水口	

第６表　２区上層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
1	8.67	N－25°－W	直			53	20	
2	10.95	N－24°－E	直			87	50	
3 a	7.39	N－４°－E	直	92	35	198	91	
3 b	6.15＋α	N－３°－E	直	130	55	229	84	
4	4.04＋α	N－83°－W	直	56	24	284	39	
5 a	8	N－72°－W	直	90	27	184	158	
5 b	9.5	N－78°－W	直	90	29	220	117	
5 c	6.24＋α	N－80°－W	直	114	67	367	270	
6	2.11＋α	N－61°－W	直	28	17	59	41	
7	13.85	N－68°－W	直			37	21	
8	8.33	N－２°－W	直	67	21	141	89	
9	2.77＋α	N－66°－W	直	14	8	41	24	
10	3.27	N－20°－W	直	38	17	60	45	
11a	4.77	N－53°－W	曲	61	11	103	31	
11b	3.62	N－82°－W	曲	62	15	100	50	
12a	5.4	N－48°－W N－18°－E	曲	50	30	112	57	
		N－90°－W						
12b	3.92	N－38°－W	曲	65	24	107	60	
13	6.09	N－86°－E	直	28	16	77	53	
14	2.04＋α	N－85°－W	直	28	13	60	35	
15	7.53	N－５°－E	直	22	15	50	43	
16	8.83	N－５°－E	直	34	15	65	50	
17	11.09	N－14°－E	直	96	29	116	50	
18	8.94	N－８°－E	直	34	24	70	48	
19	9.2	N－81°－W	直			31	20	
20	10.2	N－３°－E	直	37	23	81	56	
21	4.86	N－81°－W	直	28	12	51	32	
22	8.5	N－80°－E N－69°－W	曲	53	13	97	37	
23	3.31＋α	N－80°－W	直	26	15	66	62	
24	7.65	N－11°－E	直			72	62	
25	5.6	N－11°－E	直	39	25	86	65	
26	8.74＋α	N－87°－E	直	68	27	107	88	
27	2.88	N－３°－E	直	85	30	138	50	
28	5.56	N－18°－E N－30°－W	曲	54	18	90	44	
29	6.27	N－85°－E	直	43	19	70	46	
30	7.81＋α	N－81°－E	直	27	16	53	47	
31	6.99	N－40°－W	直	67	15	102	55	
32a	3.72	N－66°－E	直	77	18	105	65	
32b	7.96	N－84°－W	直	76	34	105	74	
33	4.13	N－26°－E	直	35	27	60	51	
34	1.81＋α	N－77°－E	直	33	14	65	64	
35	4.79	N－７°－E	直	33	23	55	50	
36	7.25	N－88°－E	直	40	13	71	59	
37	7.57	N－10°－E	直	36	11	75	47	

38	12.36	N−8° −E N−67° −E	曲	85	39	115	83	
39	4.17＋α	N−65° −W	直	28	14	71	40	
40	6.8	N−88° −E	直	31	18	64	54	
41	6.39	N−19° −E	直	48	29	74	64	
42	7.73	N−90° −W N−60° −W	曲	41	24	80	42	
43	4.34	N−10° −E	直	110	80	135	96	
44	5.86＋α	N−81° −W	直	22	11	56	35	

第７表　２区下層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
45	15.94	N−11° −E	直	27	7	71	37	
46	15.75	N−20° −E	直	54	23	100	57	
47	14.08＋α	N−4° −E	直	53	20	114	62	
48	3.56＋α	N−62° −W	直	58	17	167	51	
49a	9.85	N−75° −W	直	80	42	173	124	
49b	7.77	N−75° −W	直	84	65	190	119	
50	5.50＋α	N−79° −W	直	97	49	163	96	
51	13.89	N−17° −E	直	54	9	96	29	
52	11.34	N−44° −W N−2° −W	曲	45	24	156	56	
53	9.23	N−68° −W	直	83	31	198	74	
54	3.34	N−2° −W	直	61	26	146	63	
55	8.73	N−7° −E	直	56	22	187	62	
56	12.32	N−10° −E	直	65	12	112	45	
57	11.03＋α	N−6° −E	直	40	26	69	46	
58	10.77	N−40° −W N−86° −W	曲	58	26	97	60	
59	4.06	N−85° −W	直	47	34	102	73	
60	7.78	N−81° −W	直	66	25	114	87	
61	4.40＋α	N−85° −E	直	65	44	91	73	
62	6.87＋α	N−3° −E	直					
63	6.97＋α	N−7° −E	直	78	29	205	68	
64	3.17	N−3° −E	直	82	46	134	94	
65	5.09	N−85° −E	直	90	60	123	86	
66	5.13	N−47° −W	直	51	35	94	70	
67	13.5	N−67° −E N−88° −W	曲	65	28	124	71	
68	6.43	N−3° −E	直	77	41	104	67	
69	15.53	N−5° −E	直	56	27	143	80	
70	10.16＋α	N−15° −E	直	70	30	96	56	
71	14.05＋α	N−72° −W N−80° −E	曲	77	25	105	70	
72	5.83＋α	N−82° −W	直	30	18	72	49	

第３節　第３区の遺構と遺物

第３区では、5a層上面において室町～戦国期の上層水田、6a層で平安～鎌倉期の下層水田が検出された。

１．室町～戦国時代の遺構と遺物

３区堆積層の5a層とした層上面に水田面及び水田遺構が検出された。確認された遺構は、水田17面、畦畔29本、水口4ヶ所、溝5条があり、室町時代前半～戦国期の14世紀～16世紀のものと判断された。

１）水田（第86～100図、第８表）

水田面は３区全体に渡って展開し、地形に沿って北西から南東に向かって傾斜している。水田の最高地点は16号水田で標高265.84m、最低地点は４号水田で標高264.58mあり、東西方向で20mの間に約20㎝、南北方向60mの間に約110㎝下降傾斜している。

水田の形状は、長方形を基本とするが、２号、３号、８号、９号水田のように不整の５～６角形となる水田もみられ、この時期においても地形制約に順応した水田経営が行われていることが理解できる。

水田面積は、最大の２号水田で126.98㎡以上、最小の5号水田で28.18㎡以上と１区画の水田規模の差異が非常に大きい。

各水田内の落差は10～20㎝程度で、同一水田内でも南東側が低くなっている。したがって、水田内の水配りは北ないし西側の水田から供給され、南または東側の水田に排水されるシステムとなっている。

水田施設には、畦畔、水口、水路、ヌルメと考えられる溝状の遺構などがある。また、全水田において人の足跡が砂に覆われて確認されている。特に７号水田においては、東西方向および南北方向にジグザクに歩行した作業痕と考えられる足跡も認められる。

２）畦畔（第86～100図、第10表）

畦畔は29本確認されている。

畦畔の規模は、いずれも下端幅で50～90㎝前後の中型のもので、１mを超える様な大畦畔は見られない。畦畔の高さは、10～20㎝であるが、26号畦畔のように土盛をもたずに水田段差だけのものも存在する。これらの畦畔の南北軸は、真北から5～10度ほど東偏して作られているが、地形傾斜によって規則性が損なわれている。

３）水口（第86～100図）

水口4ヶ所確認された。この内、３号、４号水口は水田隅に設けられたコーナー型で、１号、２号水口は畦畔の中央部切断型である。これらの水口は自然地形を反映し、西から東、または北から南へ向かって水が流れるように配置されている。

１水口

（位　　置）E－34グリッドに位置し、１号水田と２号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）１号畦畔と２号畦畔を70㎝程切断する水口である。１号水田から２号水田へは10㎝程落差が認められ、配水方向は１号から２号水田である。

２水口

（位　　置）C－37グリッドに位置し、７号水田と８号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）12号畦畔と13号畦畔を30㎝程切断する水口である。７号水田から８号水田へは10㎝程落

差が認められ、配水方向は７号から８号水田である。

３水口

（位　　置）C－42グリッドに位置し、13号水田と11号水田の東側境界に存在する。

（規模・配水方向）24号畦畔と25号畦畔を90㎝程切断する水口である。本水口は、２号溝に接しており、13号水田の水が２号溝へと流れ込むように設置されている。

４水口

（位　　置）B－44グリッドに位置し、16号水田と13号水田の東側隅に存在する。

（規模・配水方向）28号畦畔と25号畦畔を切断する水口であるが、確認時においては完全に途切れておらず、一部水口をふさいでいる。16号水田から13号水田へは10㎝程落差が認められ、配水方向は16号から13号水田である。

４）溝（第86～100図）

水路と、ヌルメと考えられる溝状の遺構などがある。

１号溝

（位　　置）Z・A－33グリッドに位置し、４号水田の北側の5号畦畔に沿って存在する。

（形状・規模）長さ５m以上、幅50㎝、深さ10㎝程の溝状の遺構で、西側は途切れ、東側は調査区外へ延びている。位置や形状から、水路ではなく取水された水を一度ためて暖めるヌルメと判断される。

２号溝

（位　　置）B－40～43グリッドに位置し、11号、13号水田の東側の23号、25号畦畔に沿って南北に走る。

（形状・規模）長さ19m、幅50～70㎝、深さ20㎝程の水路状の遺構で、北側で排水された水を15号、14号、12号水田を経由し、９号水田に引き込む施設である。したがって、水量が多い場合には、15号、14号、12号水田の取水も可能となる。

３号溝

（位　　置）Z～B－41グリッドに位置し、12号水田の北側の26号畦畔に沿って東西に存在する。

（形状・規模）長さ14m以上、幅60㎝、深さ10㎝程の溝状の遺構で、西側は途切れ、東側は調査区外へ延びている。位置や形状から、１号溝同様にヌルメと判断される。

４号溝

（位　　置）Z～B－42グリッドに位置し、14号水田の北側の27号畦畔に沿って東西に存在する。

（形状・規模）長さ９m、幅60㎝、深さ５㎝程の浅い溝状の遺構で、東西両端部がは途切れている。位置や形状から、1号溝同様にヌルメと判断される。

５号溝

（位　　置）Y～A－44グリッドに位置し、15号水田の北側の29号畦畔に沿って東西に存在する。

（形状・規模）長さ11m以上、幅70㎝、深さ10㎝程の溝状の遺構で、西側は途切れ、東側は調査区外へ延びている。位置や形状から、１号溝同様にヌルメと判断される。溝西側で掘削時の鋤痕が良好に確認された。

５）出土遺物とその出土状況（第87・116～118図241～319、第16・17表）

３区上層水田に伴う遺物は、土器、陶磁器、瓦、木製品、骨角器などがある。

土器（241～243・246・252） 241は土師質の鍋で、口縁下に紐かけの孔が開けられ、その直下に耳状の突起が見られ、外耳鍋と考えられる。242は鉢形の土師質土器である。243は須恵質の椀の底部で、高台が付けられ

る。246は土師質の坏口縁部破片である。252は土師質の小型皿で、底部に回転糸きり痕を明瞭に残す。みこみ部にはヘラ状工具による刻みが認められる。

陶磁器（244・247～251、253）244は磁器の碗で、外面にクシ状の文様が描かれる。247・248は青磁の皿破片で、わずかに文様が認められる。249は天目の碗である。251は壷の胴上部から肩部破片で、外面に沈線がめぐる。

瓦（245）B－43グリッドから出土した軒丸瓦で、直径約8cmを測る。瓦面には外区に列点文、内区に三巴文を施している。

木製品（254～319）254は草履の芯材で、頭部に２つの孔が穿たれている。長さ24.2cm、幅9.8cm、厚さ0.2cmを測る。256は先端部にほぞを持つ木製品である。259～319は棒または板状木製品である。この内、259～292は先端部を尖らせ、焼けて炭化しているものが多い。288、291、292では、頭部に裂け目をいれている。こうした特徴は、古代から見られる斎串状木製品と類似しており、頭部の裂け目は牛王宝印のようにそこに紙などを差し込んだ痕跡と考えられる。

骨角製品（258）258は動物の角を加工した笄（こうがい）で、先端部がやや尖り、胴部は扁平で中央部が窪む。長さ11.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。

２．平安～鎌倉時代の遺構と遺物

３区堆積層の6a層とした層上面に水田面及び水田遺構が検出された。確認された遺構は、水田９面、畦畔13本、水口２ヶ所、溝１条があり、平安時代前半～鎌倉期の10世紀～13世紀のものと判断された。

１）水田（第101～115図、第９表）

下層水田面は３区南側に偏って展開し、地形に沿って北西から南東に向かって傾斜している。水田の最高地点は25号水田で標高264.82m、最低地点は21号水田で標高264.24mあり、東西方向で20mの間に約15cm、南北方向30mで約40cm下降傾斜している。

水田の形状は、方形を基本とするようであるが、ほとんどの水田が調査区外に延びているため、全体の形態がわかる水田がない。

水田面積は、23号水田が最大であるが、36号畦畔が途切れているため、正確な面積が計測できない。

各水田内の落差は10～20cm程度で、同一水田内でも南東側が低くなっている。したがって、水田内の水配りは北ないし西側の水田から供給され、南または東側の水田に排水されるシステムとなっている。

水田施設には、畦畔、水口、畦畔木列、水路、ヌルメと考えられる溝状の遺構などがある。

２）畦畔（第101～115図、第11表）

畦畔は13本確認されている。

畦畔の規模は、最大の38号畦畔で下端幅237cm、最小の30号畦畔で下端幅82cmを測り、中型から大型の畦畔が多い。畦畔の高さは、10～20cmであるが、31号畦畔のようにほとんど土盛をもたずに水田段差のみのものも存在する。これらの畦畔の南北軸は真北から5度前後ほど東偏し、東西軸はそれとほぼ直交する。38号畦畔では方形に大きくえぐれた部分が認められ。水口をふさいだ可能性もある。

３）水口（第101～115図）

水口２ヶ所確認された。

5水口

（位　　置）C－38グリッドに位置し、26号水田と23号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）39号畦畔と40号畦畔を20㎝程切断する水口で、26号水田の水が23号水田へと流れ込むように設置されている。

6水口

（位　　置）B－38グリッドに位置し、5号水口の東側4m付近に存在する。

（規模・配水方向）40号畦畔と41号畦畔を50㎝程切断する水口で、26号水田の水が23号水田へと流れ込むように設置されている。

4）溝（第101～115図）

水路と、ヌルメと考えられる溝状の遺構などがある。

6号溝

（位　　置）C～E－34グリッドに位置し、18号水田の北側の31号畦畔に沿って東西に存在する。

（形状・規模）長さ8m、幅60㎝、深さ10～20㎝程の溝状の遺構で、西側は途切れ、東側は19号水田へ延びている。したがって、18号水田のヌルメと19号水田の取水路を兼ねていたと判断される。

7号溝

（位　　置）B－44グリッドに位置し、3区調査区の北端に存在する。

（形状・規模）長さ5m以上、幅30～40㎝、深さ20㎝程の溝状遺構で、北側は調査区外へ延び、東側は途切れている。

5）畦畔木

3区下層水田の39・40号畦畔上に、植栽された畦畔木列が検出されている。畦畔木の間隔は3m～4.5mほどで、ヤナギ属が列をなし、40号畦畔上に単独でモモの木が見られる。詳細な内容は、第4章第3節を参照。

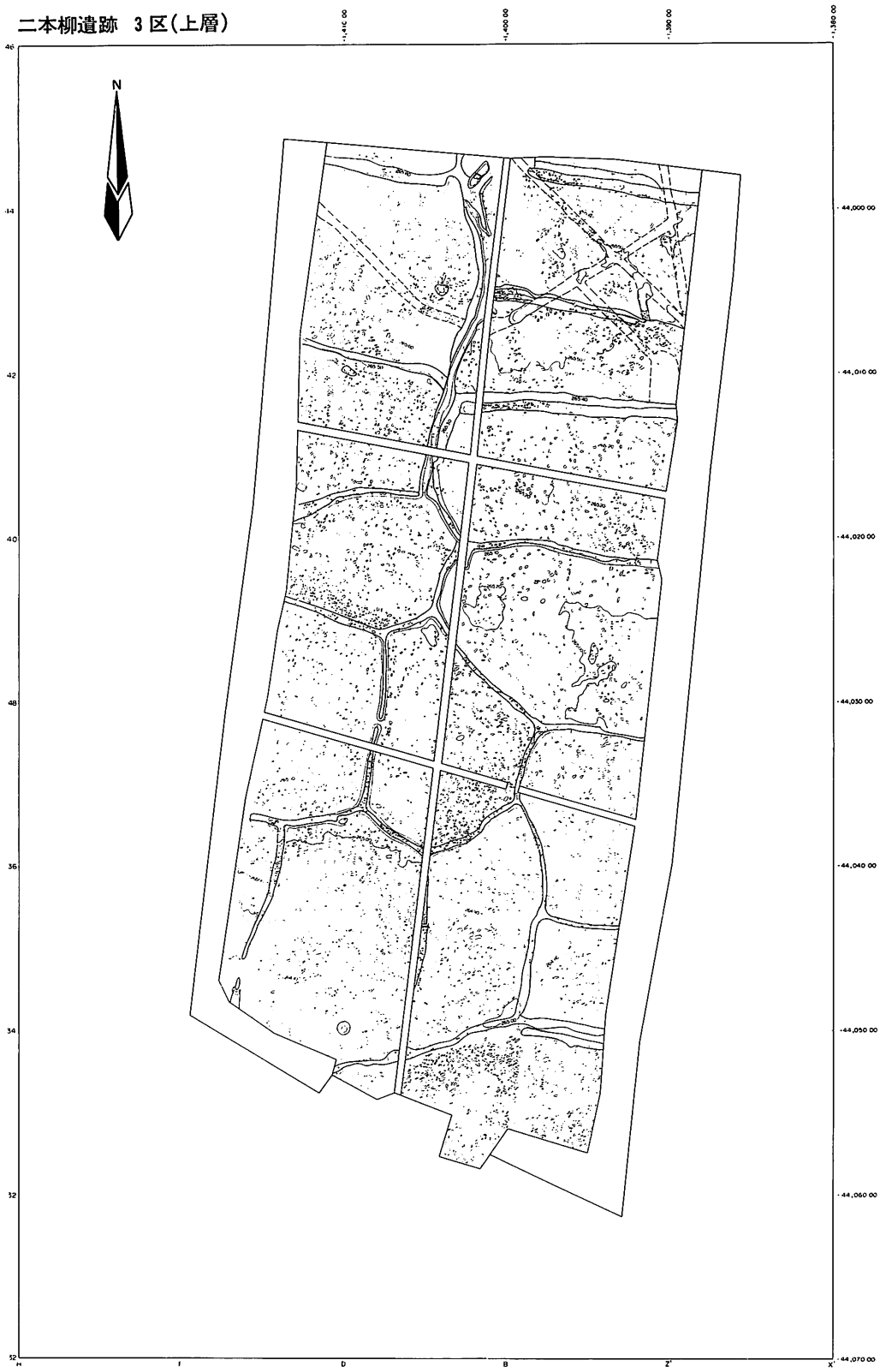
6）出土遺物とその出土状況（第103・118～121図320～398、第16・17表）

3区下層水田に伴う遺物は、土器、陶磁器、木製品などがある。

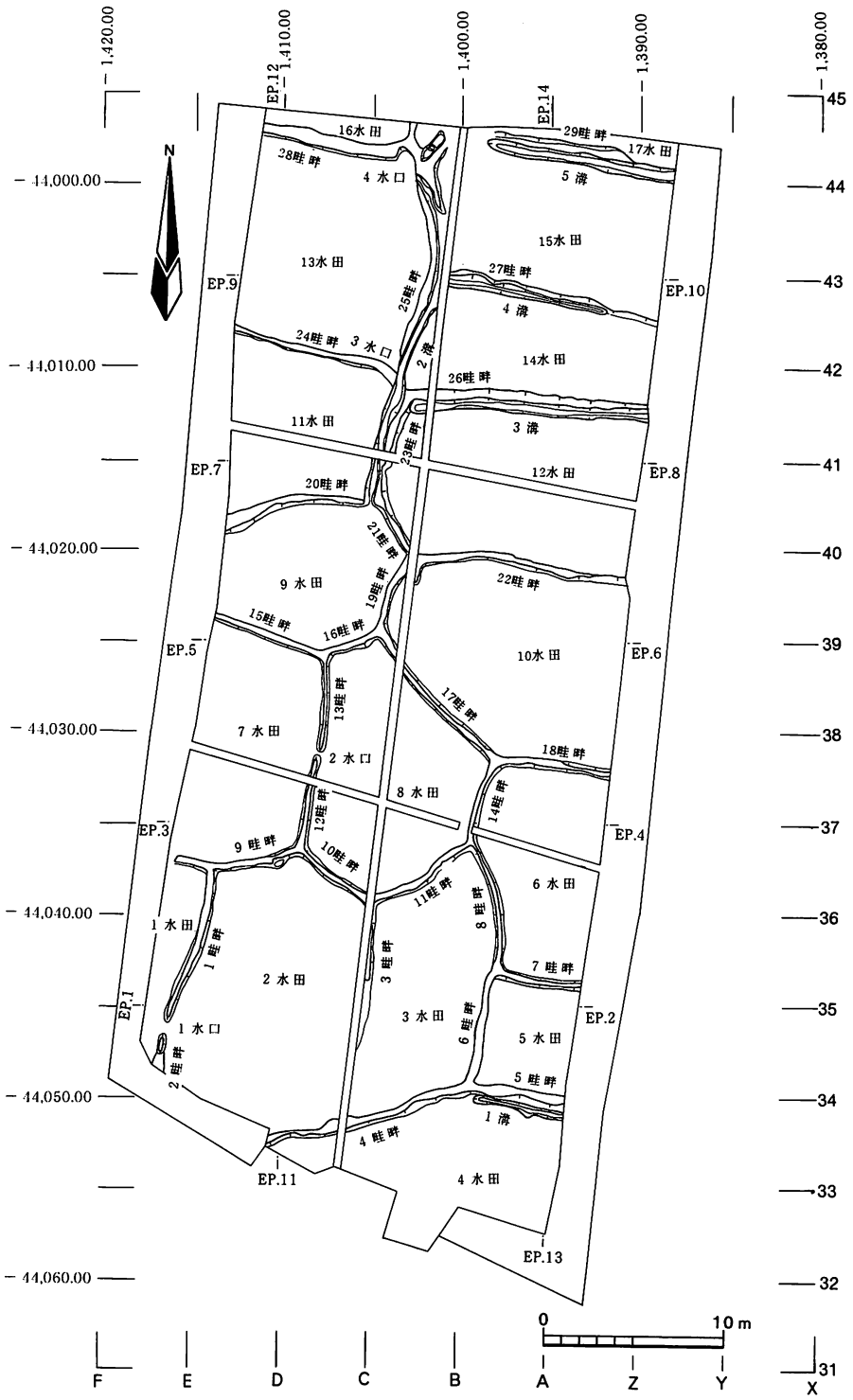
土器（320～322） 320は土師器皿の口縁部で、直径約14㎝を測る。胴部中段でやや屈折し、稜が認められる。321・322は土師器坏の底部破片で、321では胴部外面にヘラケズリ、322では底部に回転糸きり痕が残されている。小破片で正確な時期は判断できないが、平安時代後半の所産と考えられる。

陶磁器（323～327） 323～325は青磁碗の破片である。内外面に文様が見られるが、全体意匠は不明である。326・327は灰釉陶器で、口縁部がわずかに外反する。

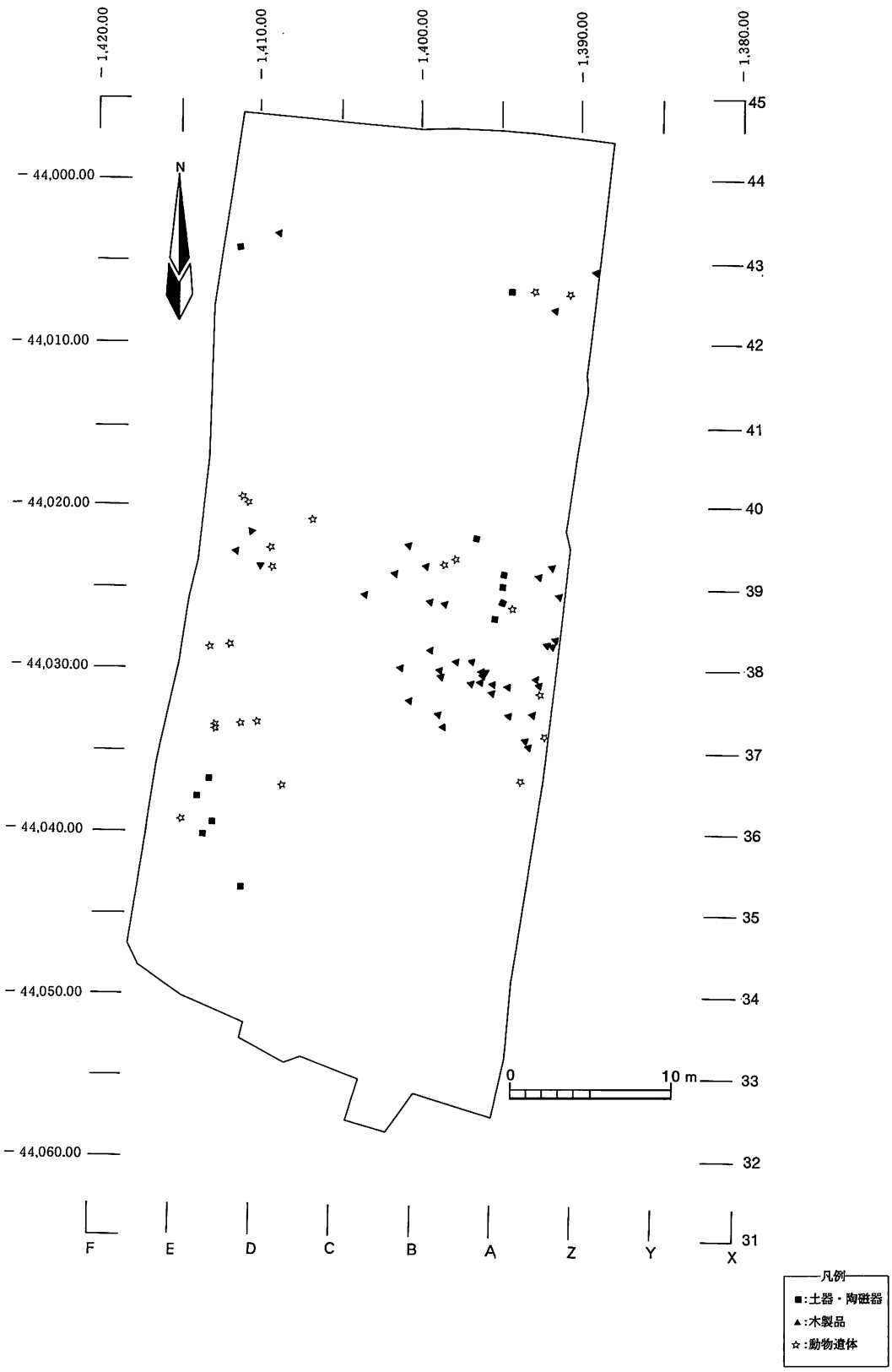
木製品（328～398） 328は漆椀の破片で、内外面とも黒漆の上に、赤漆で絵付けした痕跡が認められる。329・330は曲物底板である。329では目釘孔や桜皮などが見られ、表面に刃物の痕跡が残ることから曲物からまな板状の用途に転用された材と考えられる。335から340は箸状の木製品で、断面を円形ないし方形に削り、端部を尖らせている。341から390は斎串状の棒状木製品で、ほとんどが先端部を削り、焼けて炭化しているという共通点が認められる。355・359・362・363・382などは頭部に裂け目をもつ。その他の木製品には、板材または杭先端部などがある。



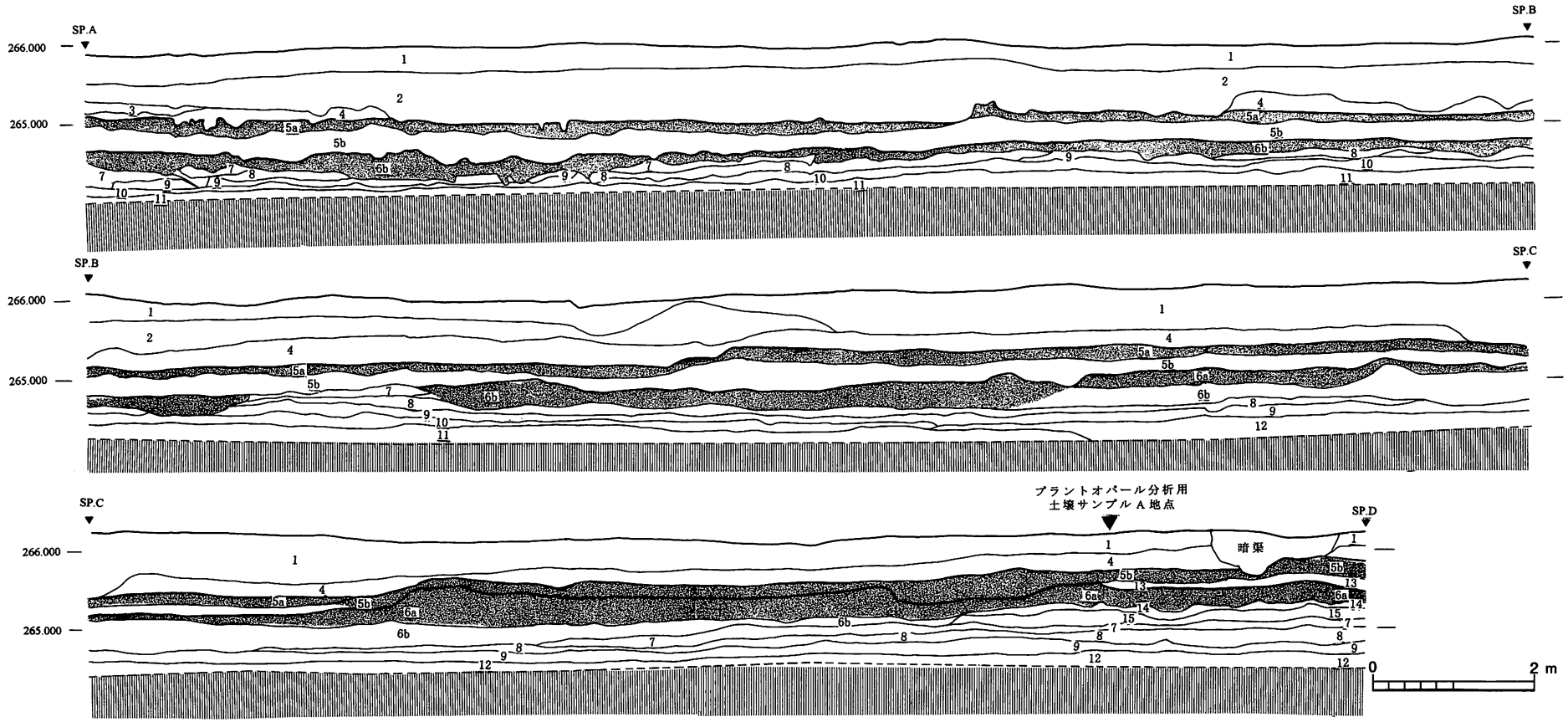
第85図　3区上層水田面等高線図（全体）


1,420.00
1,410.00
1,400.00
1,390.00
1,380.00
EP.12
EP.14
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
N
−44,000.00
−44,010.00
−44,020.00
−44,030.00
−44,040.00
−44,050.00
−44,060.00
16水田
28畦畔
4水口
29畦畔
17水田
5溝
15水田
13水田
27畦畔
4溝
EP.9
EP.10
25畦畔
24畦畔
3水口
2溝
14水田
26畦畔
11水田
3溝
23畦畔
12水田
EP.7
EP.8
20畦畔
21畦畔
9水田
19畦畔
22畦畔
15畦畔
16畦畔
10水田
EP.5
EP.6
13畦畔
17畦畔
7水田
18畦畔
2水口
8水田
12畦畔
14畦畔
EP.3
EP.4
9畦畔
10畦畔
6水田
11畦畔
8畦畔
1水田
1畦畔
7畦畔
2水田
3畦畔
EP.1
EP.2
1水口
3水田
6畦畔
5水田
2畦畔
5畦畔
1溝
4畦畔
EP.11
4水田
EP.13
0
10m
F
E
D
C
B
A
Z
Y
X

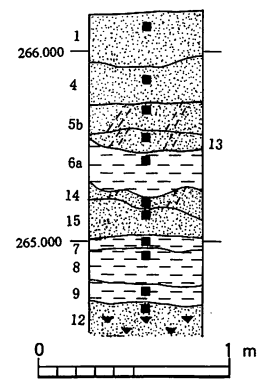
第86図　3区上層水田



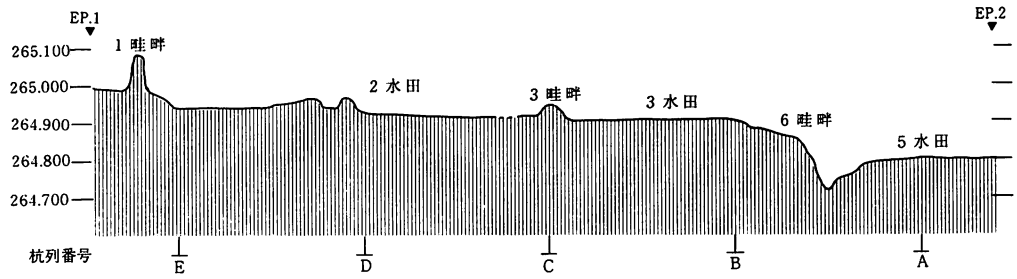
第87図　3区上層水田遺物分布図

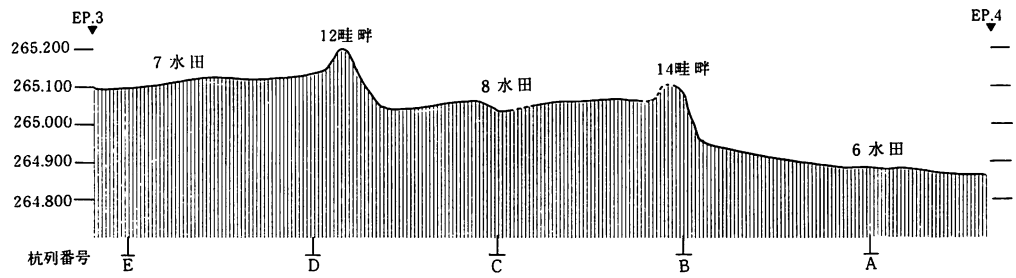


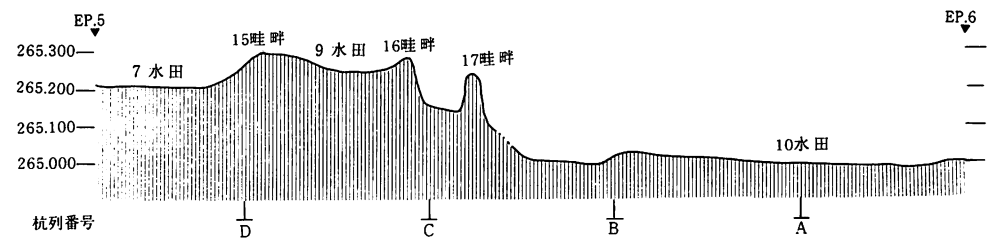
層名	粒径区分	色調	特色
1	粗砂	にぶい黄褐10YR5/3	耕作土
2	礫	にぶい黄橙10YR6/4～N6/1	
3	砂礫	灰	
4	中砂	灰N5/1	
5a	シルト＋中砂	褐灰7.5YR5/1＋灰N5/1	上層水田面
5b	シルト質細砂	褐灰7.5YR5/1	
6a	粘土	黒7.5YR2/1	下層水田面
6b	粘土	黒7.5YR2/1	灰色シルト混在
7	粘土	褐灰10YR6/1	黒色粘土混在
8	粘土	黒7.5YR1.7/1	白色粒子を含む。4区20層と対応
9	シルト	黒7.5YR1.7/1	植物遺体
10	シルト	褐灰10YR4/1	植物遺体
11	礫	にぶい黄橙10YR6/4	4区51層に対応
12	粗砂	灰	植物遺体
13	シルト質細砂	灰黄褐10YR5/3	
14	シルト質細砂	灰白10YR7/1	
15	細砂	褐灰10YR6/1	

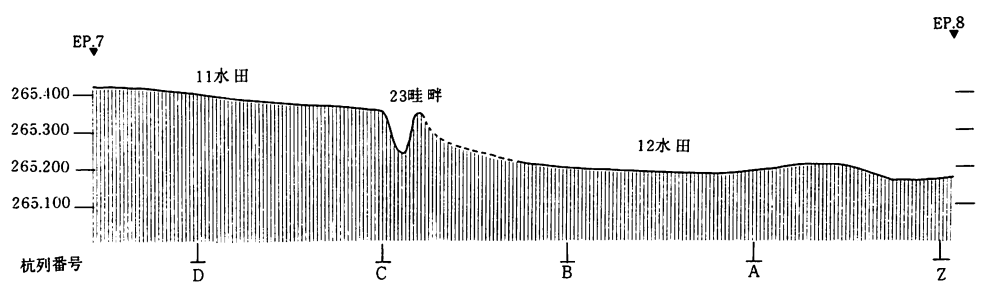


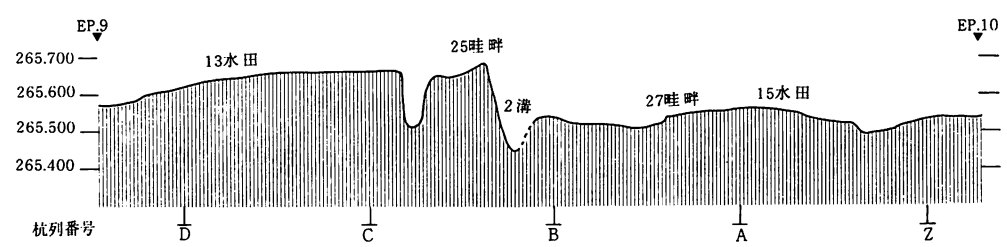
第88図　3区セクション図

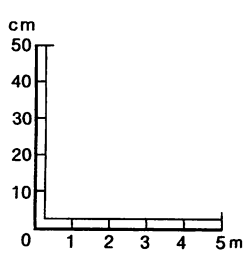




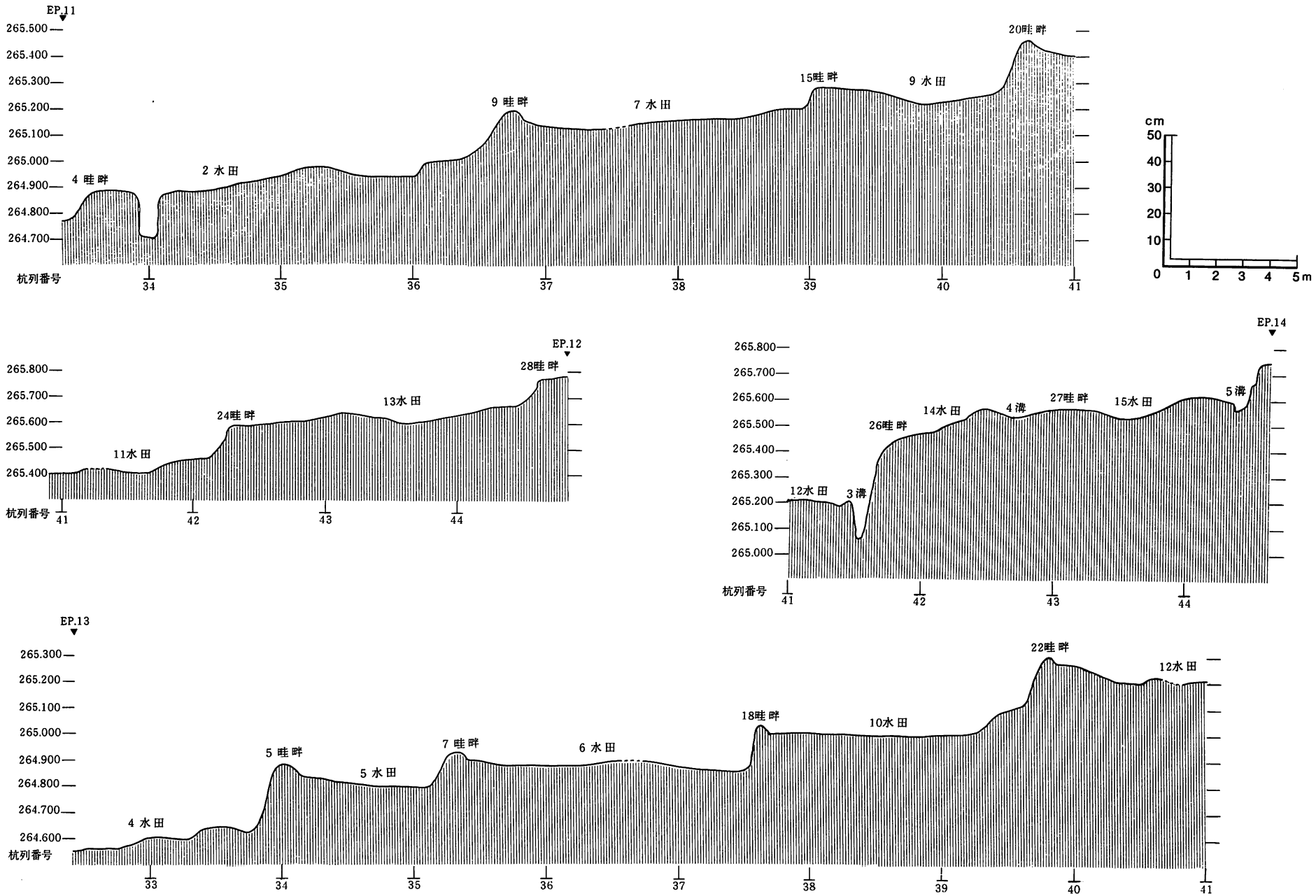






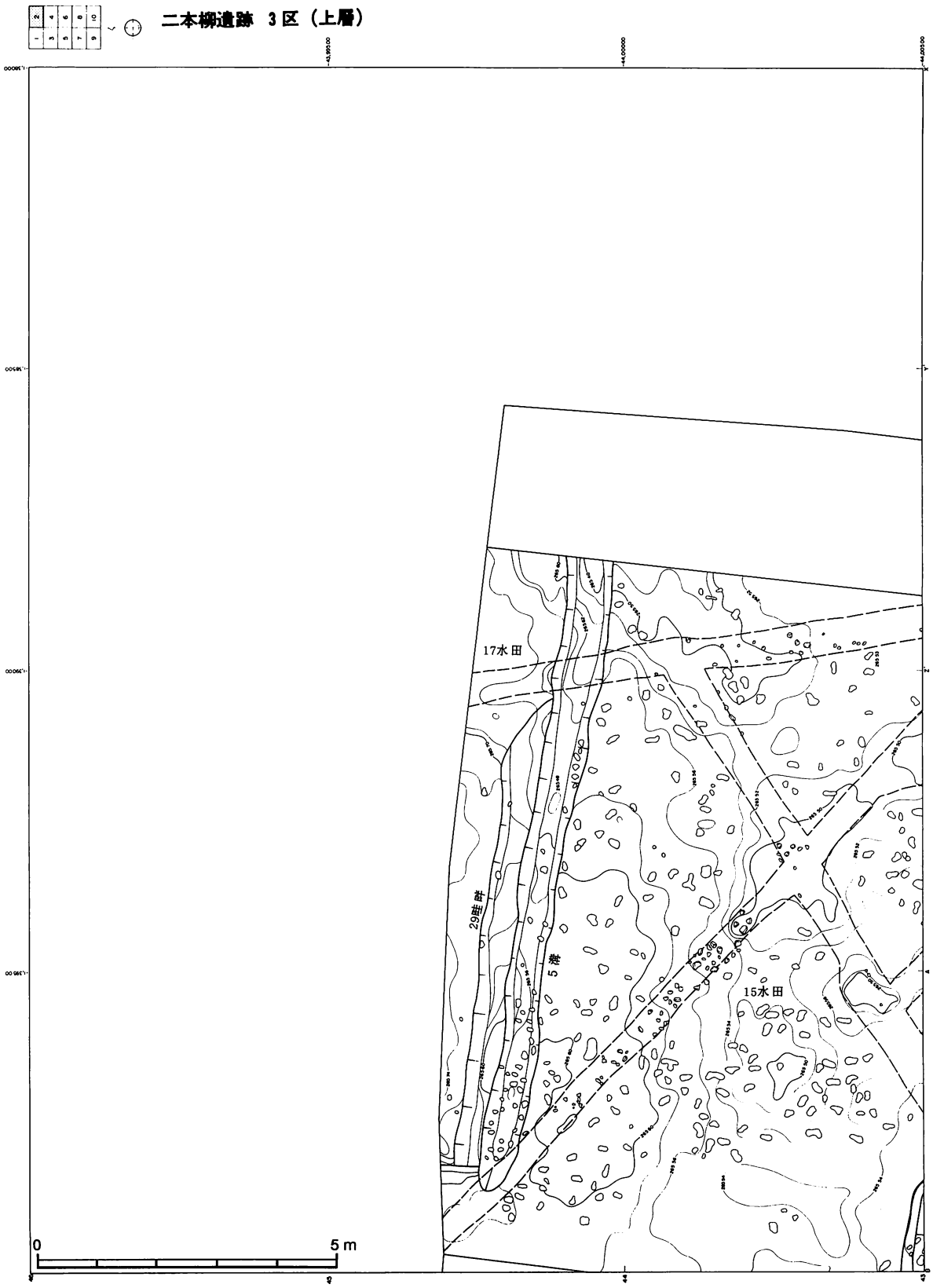


第89図　3区上層水田面エレベーション図（1）

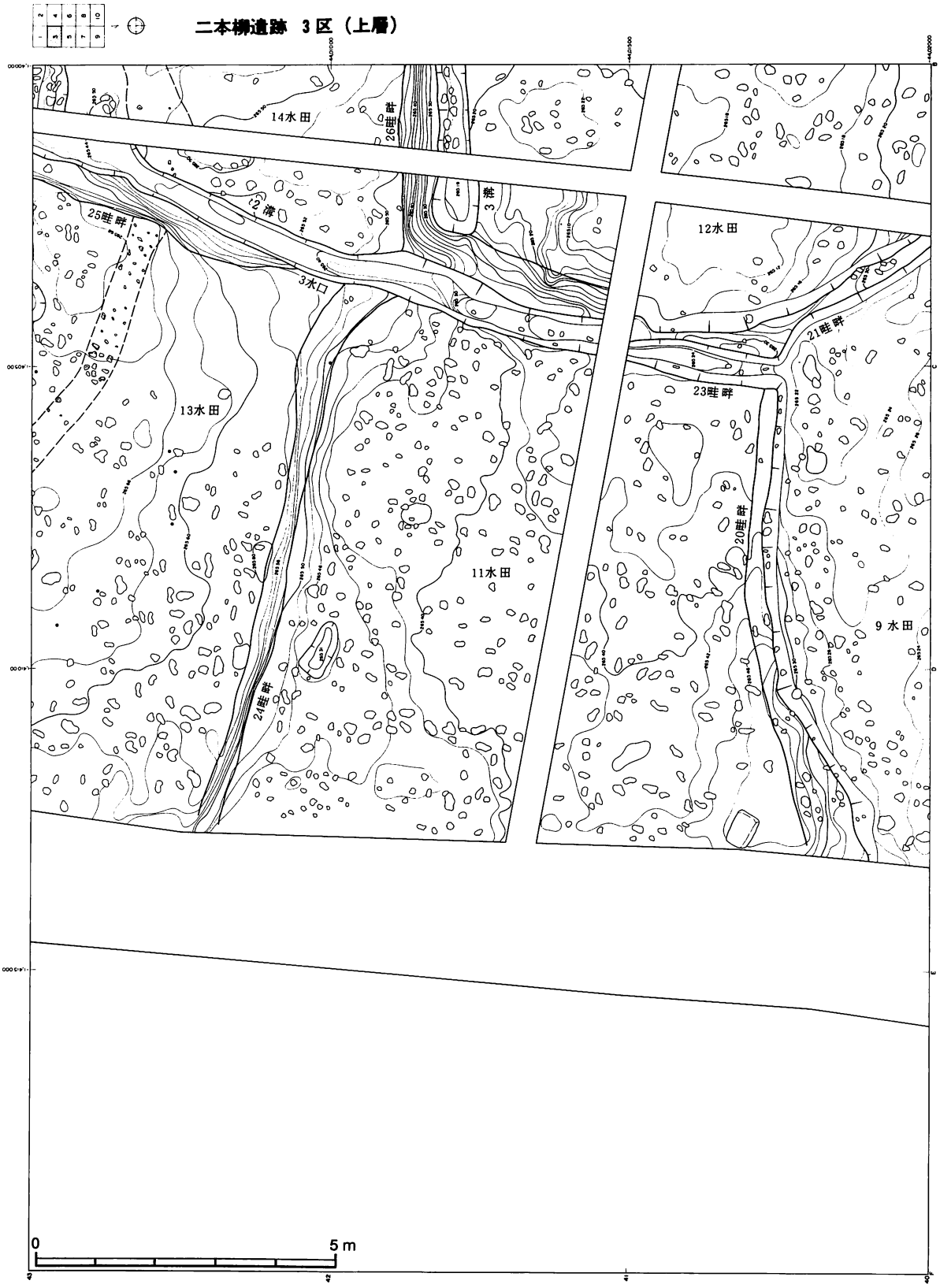


第90図　3区上層水田面エレベーション図（2）

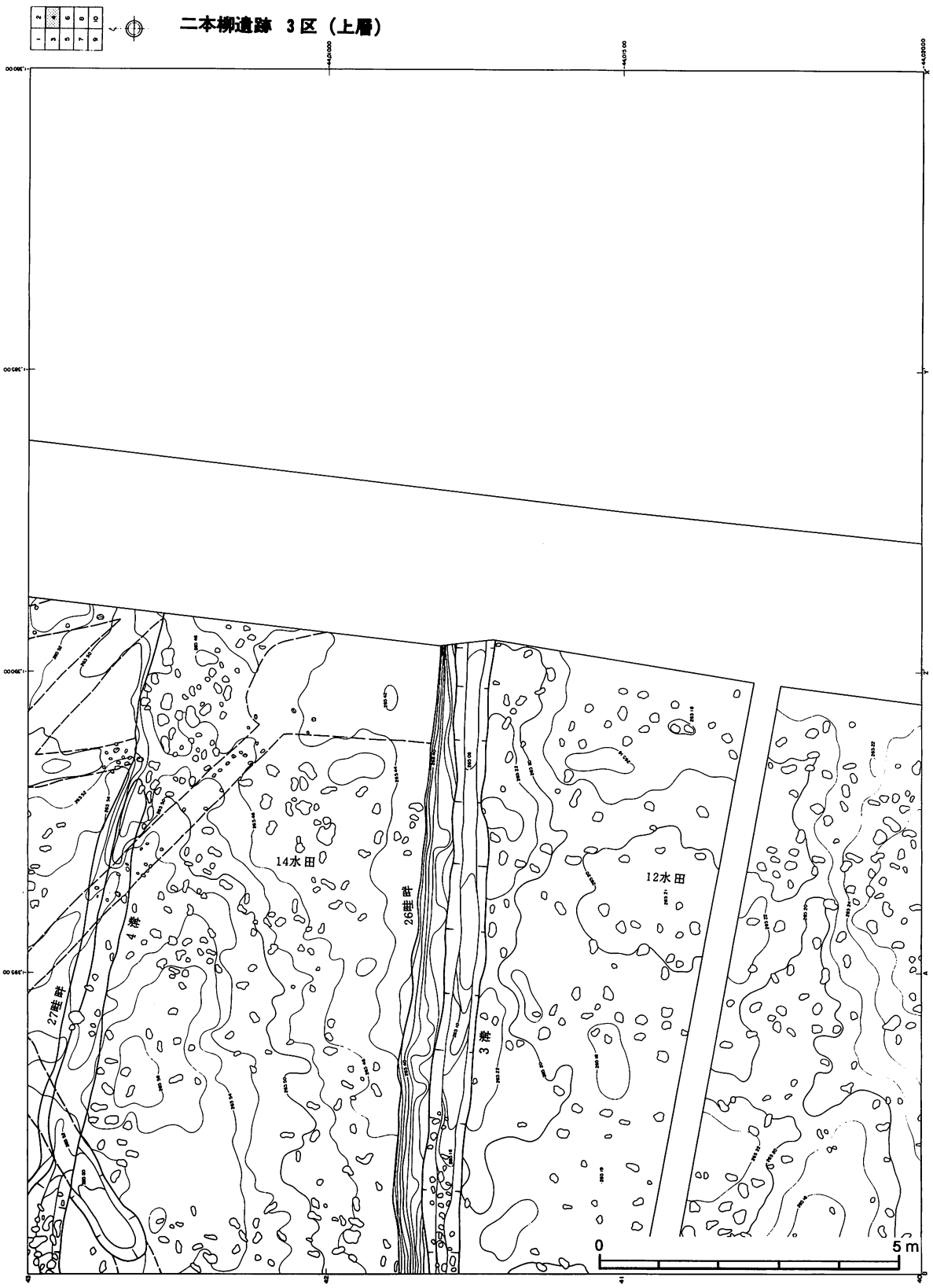
第91図　3区上層水田面詳細図（1）



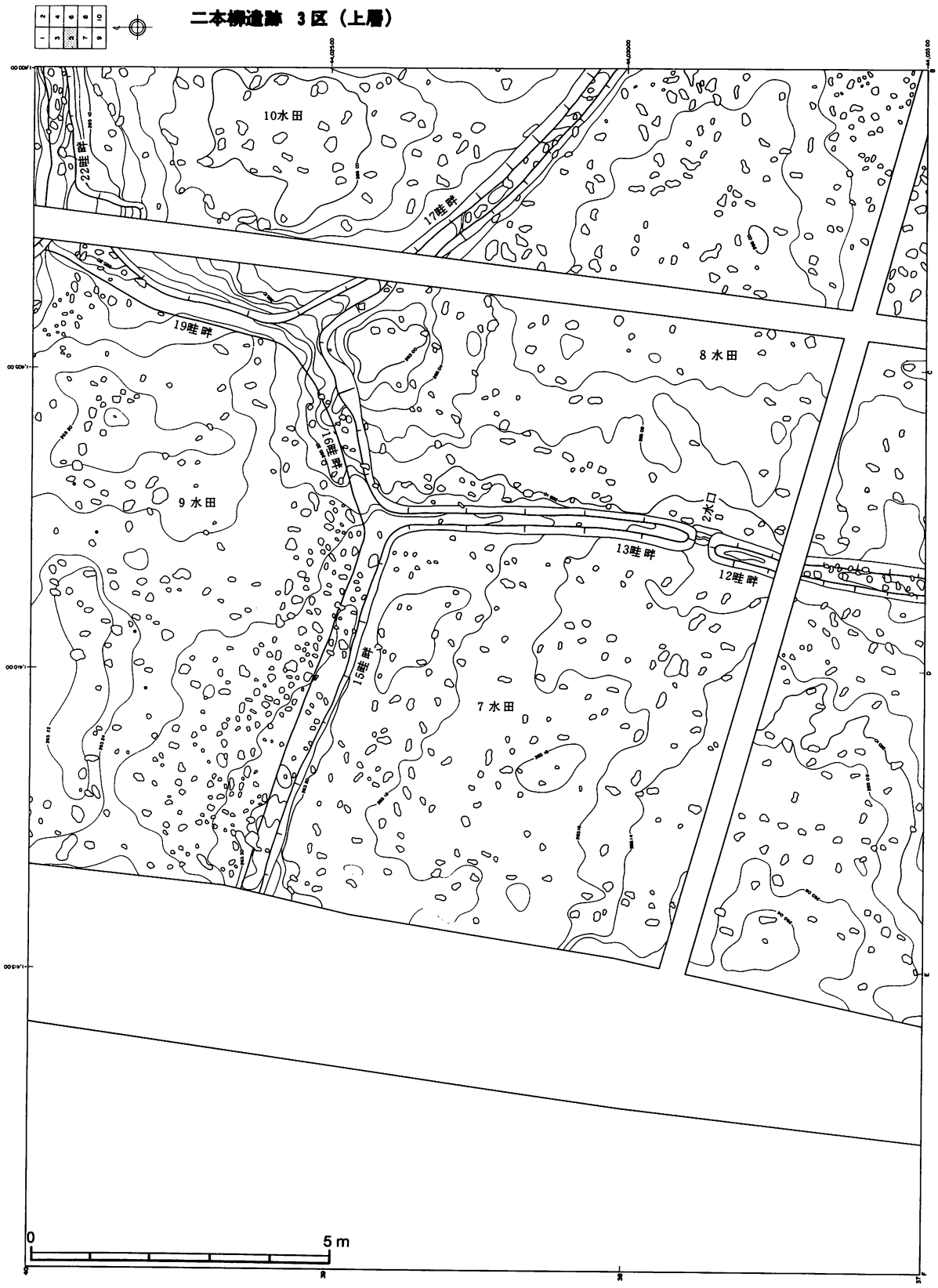
第92図　3区上層水田面詳細図（2）



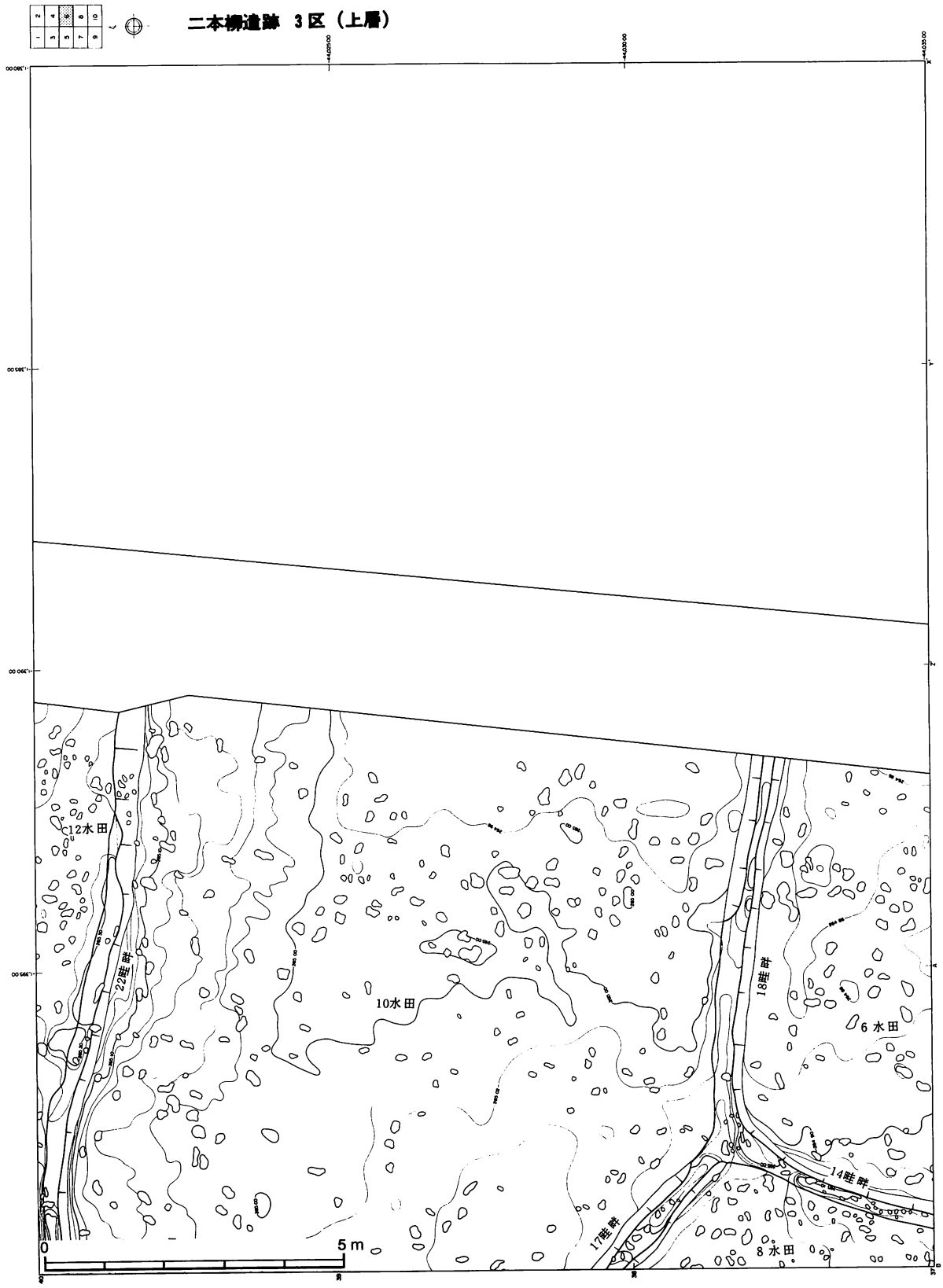
第93図　3区上層水田面詳細図（3）



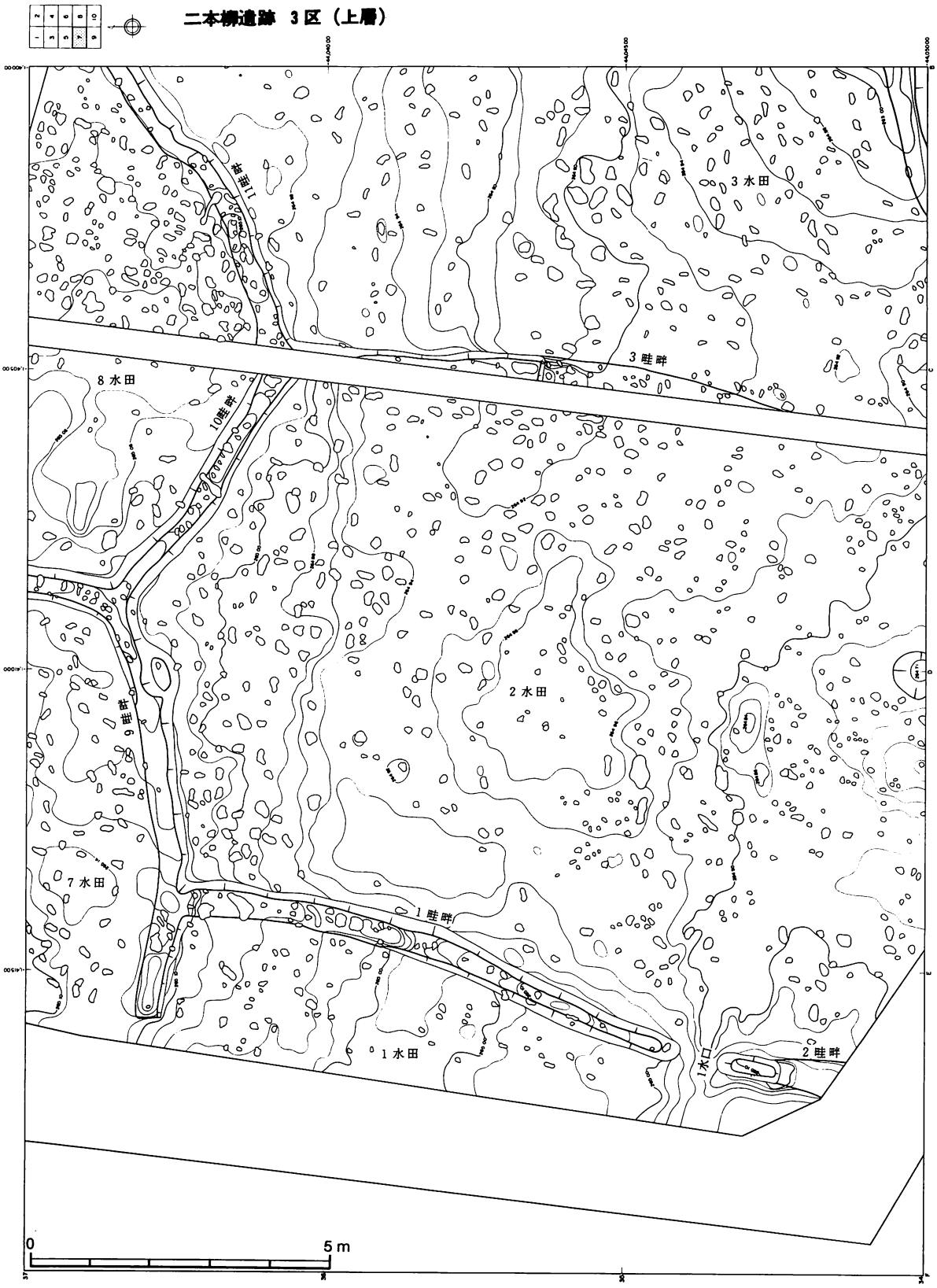
第94図　3区上層水田面詳細図（4）



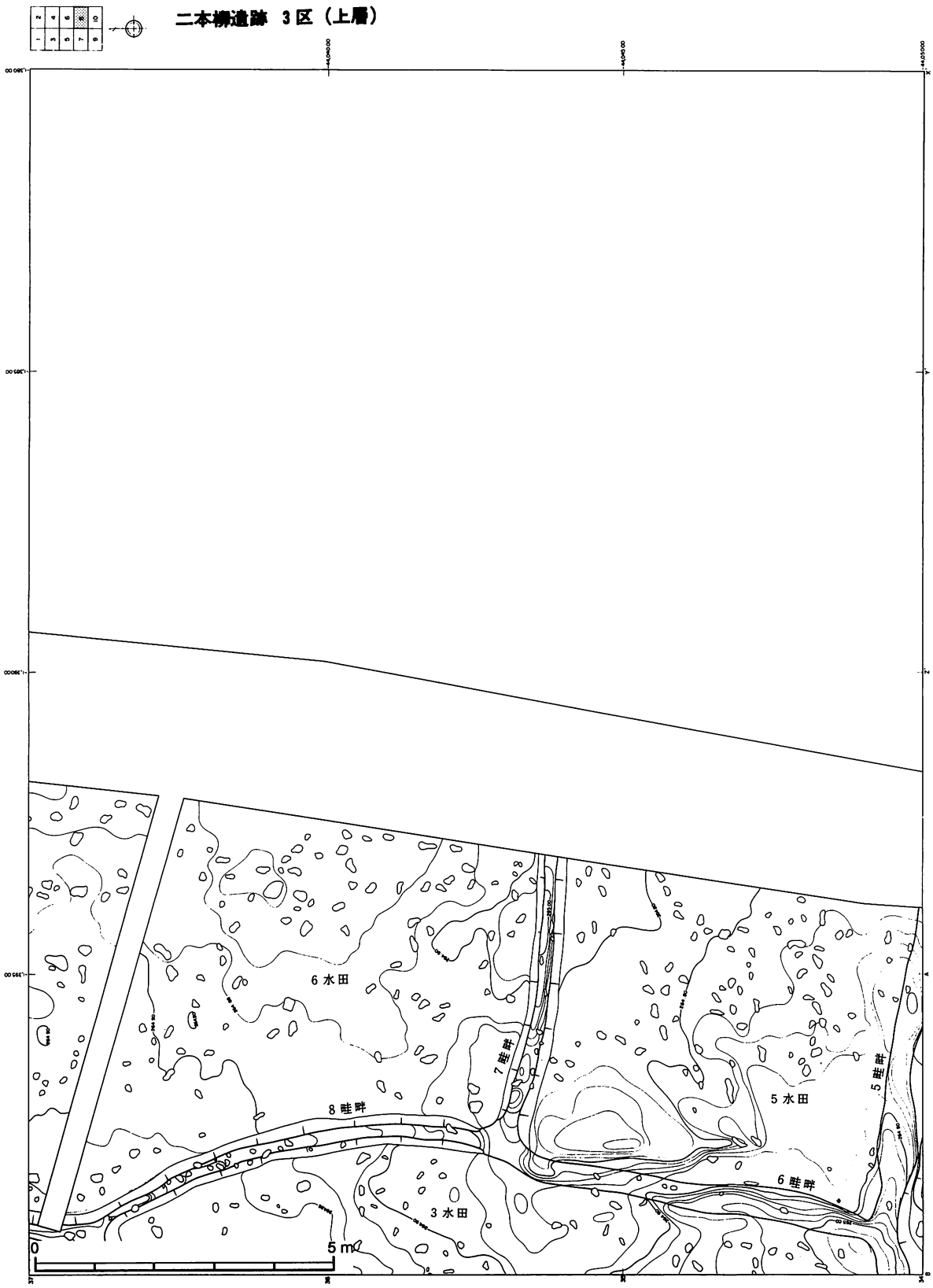
第95図　3区上層水田面詳細図（5）



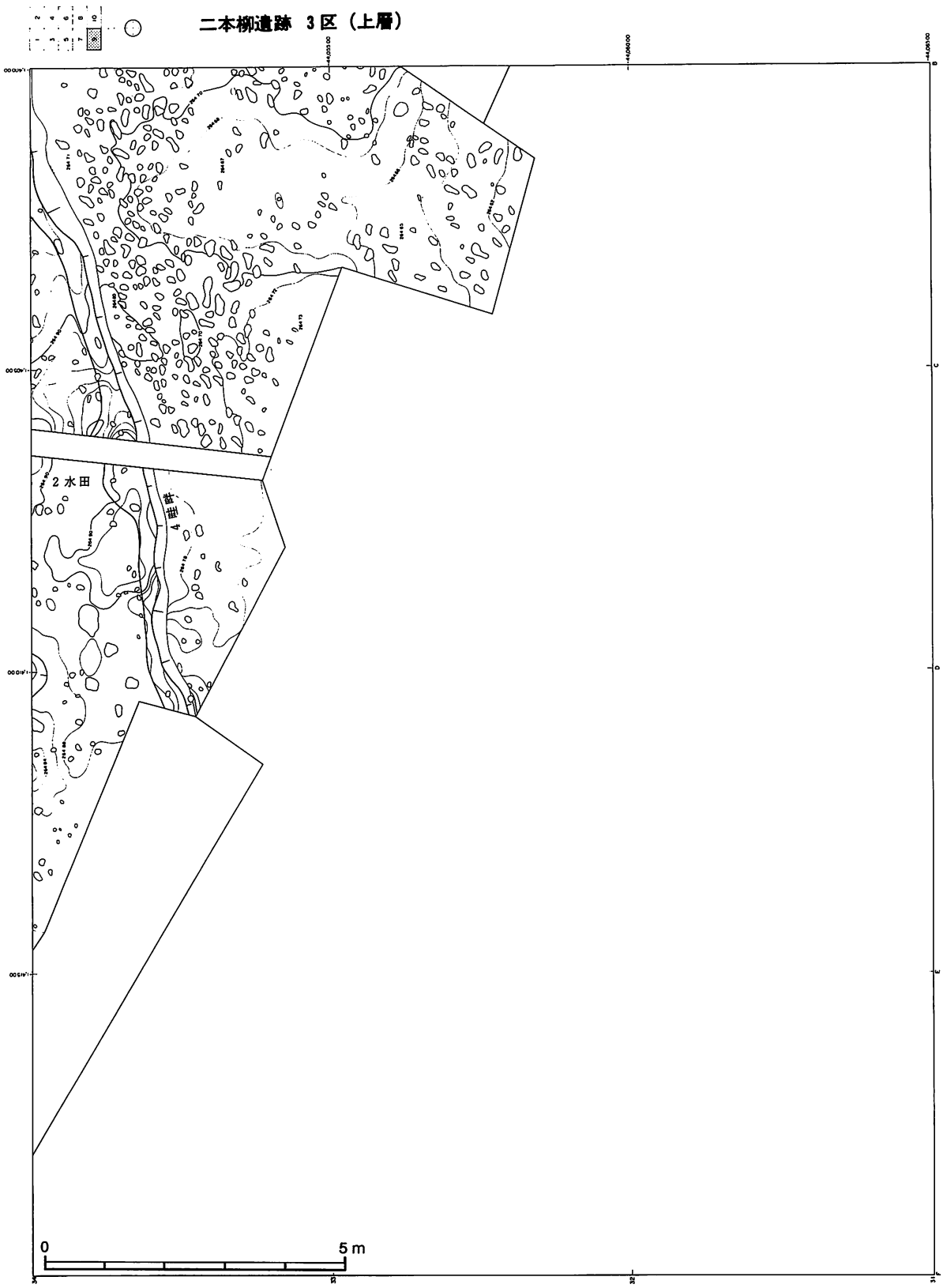
第96図　3区上層水田面詳細図（6）



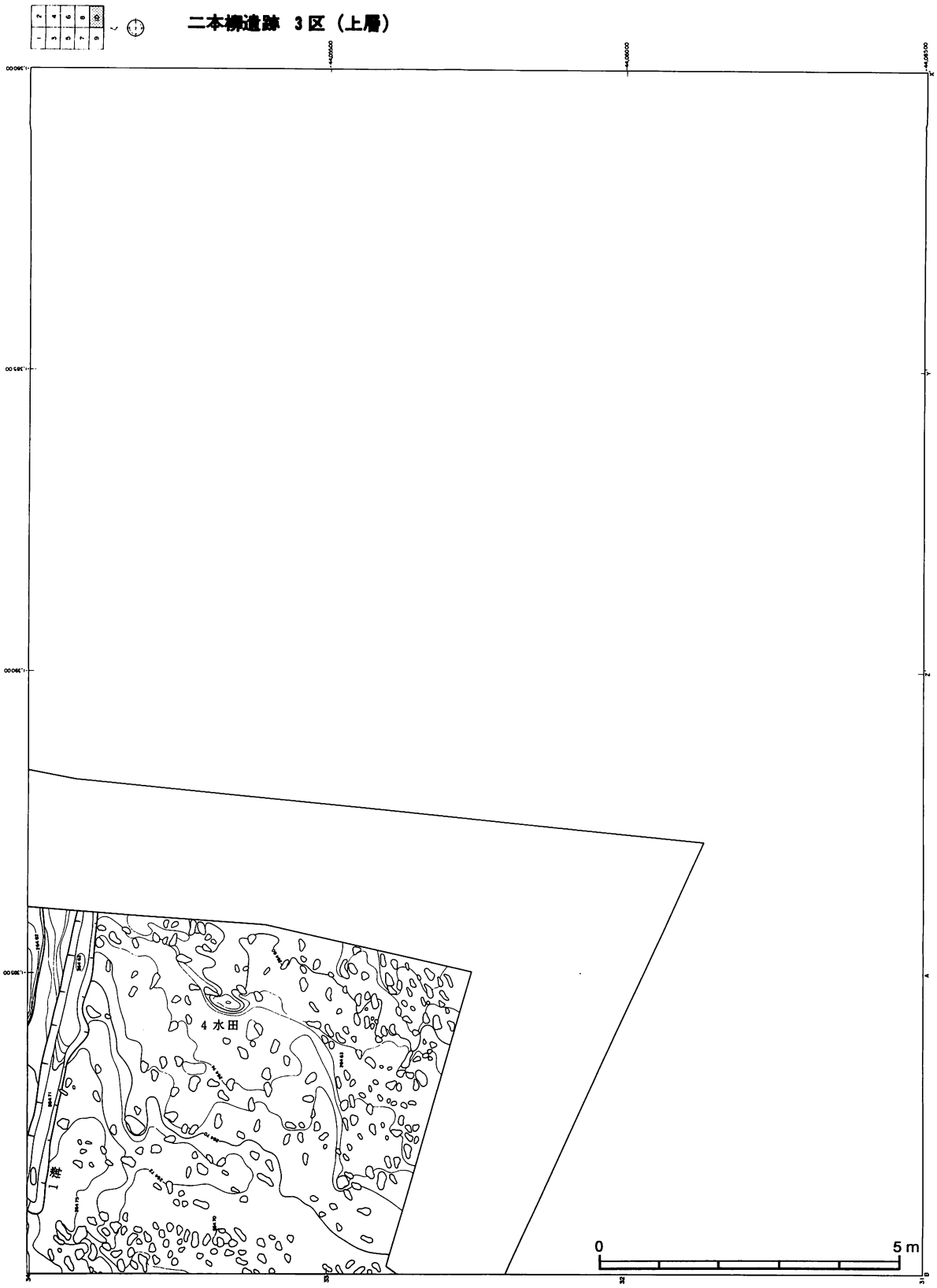
第97図　3区上層水田面詳細図（7）



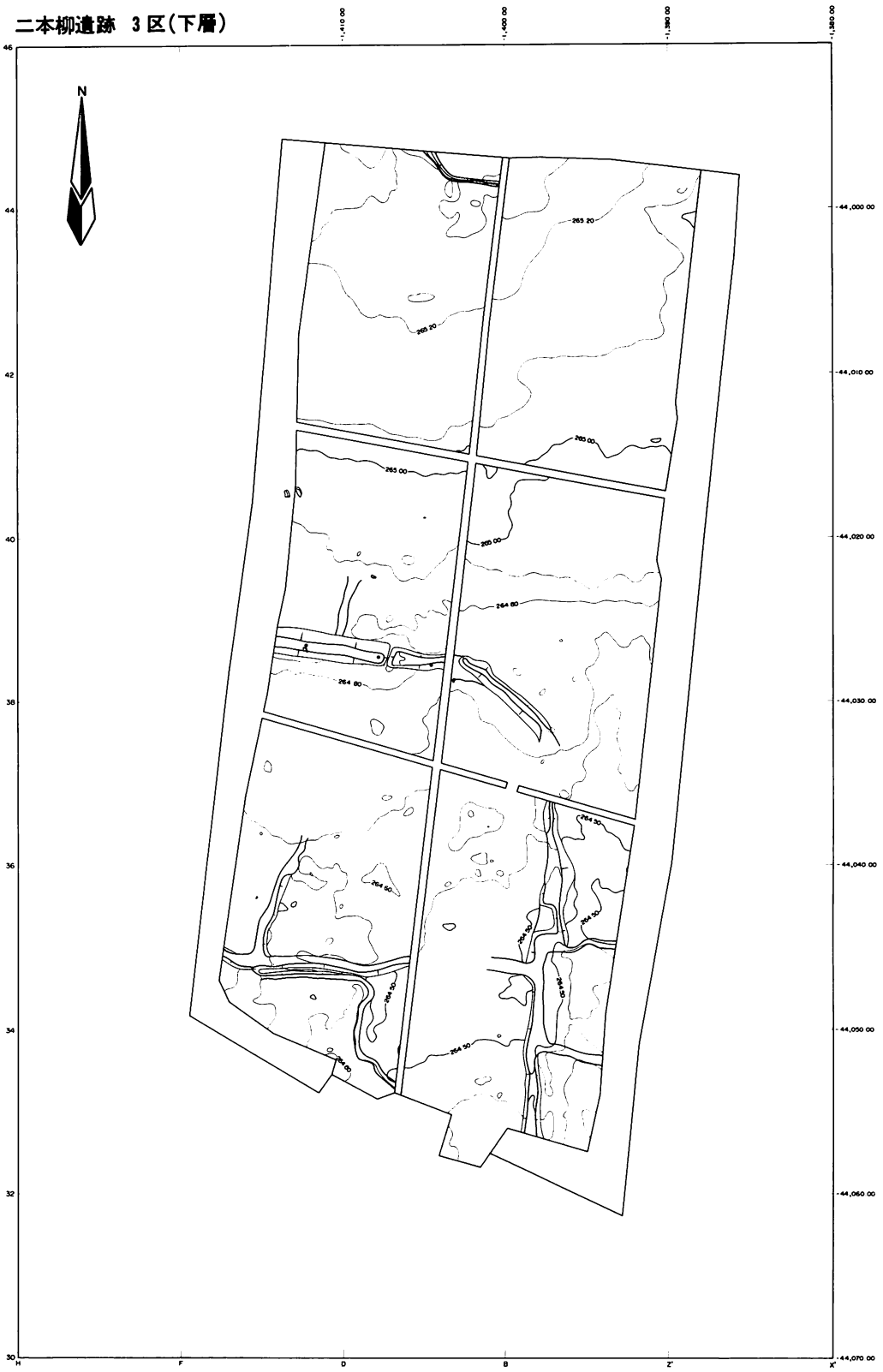
第98図　3区上層水田面詳細図（8）



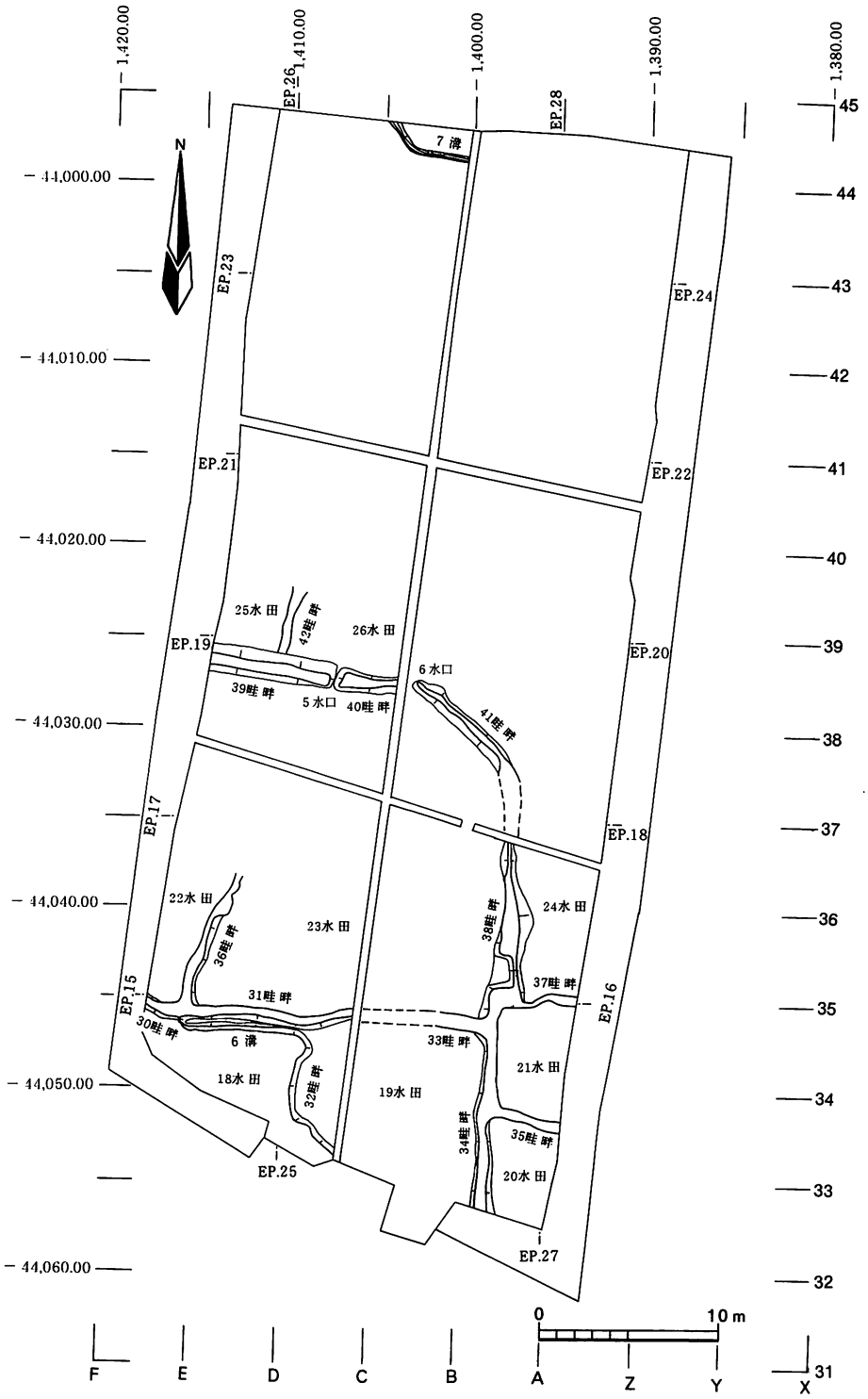
第99図　3区上層水田面詳細図（9）



第100図　3区上層水田面詳細図（10）

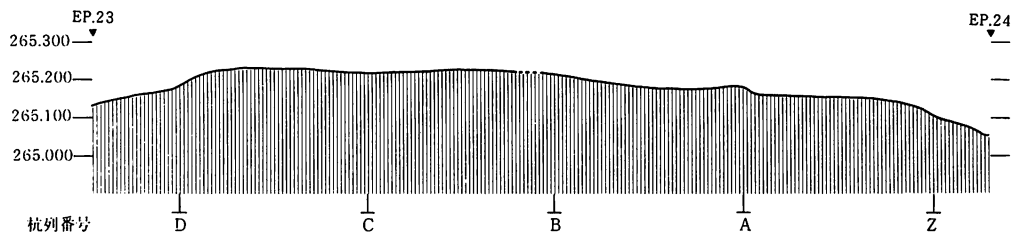


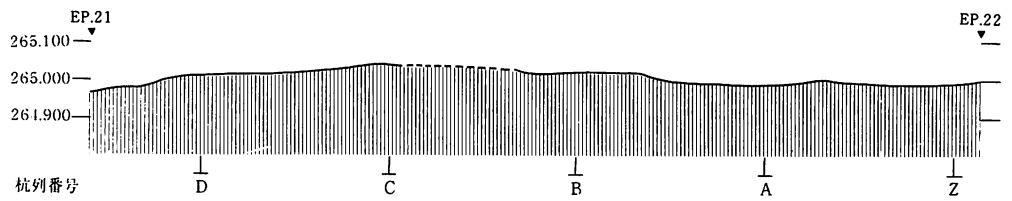
第101図　3区下層水田面等高線図（全体）

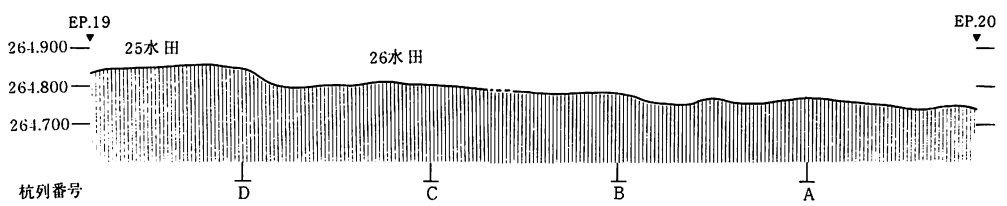


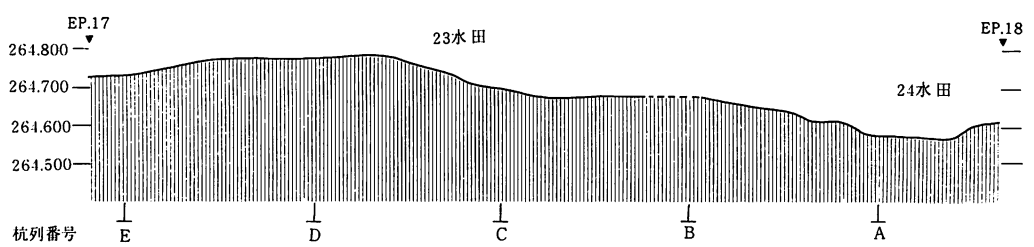
第102図　3区下層水田

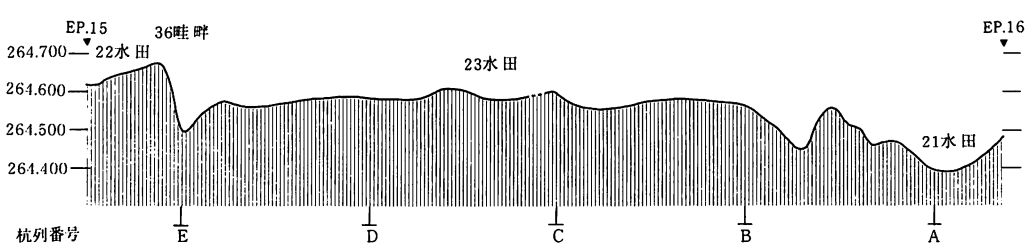
第103図　3区下層水田面遺物分布図

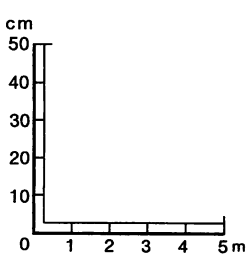




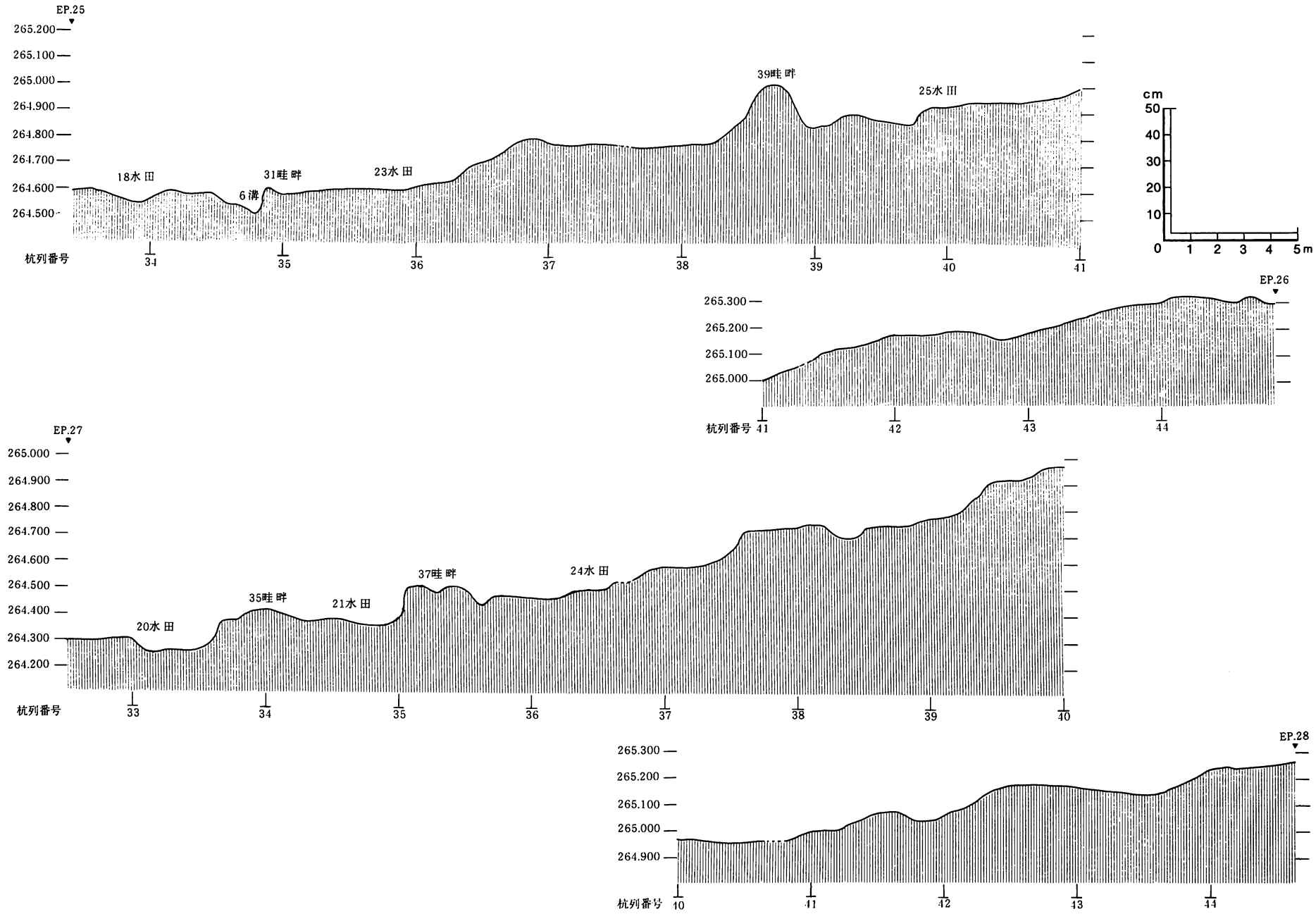




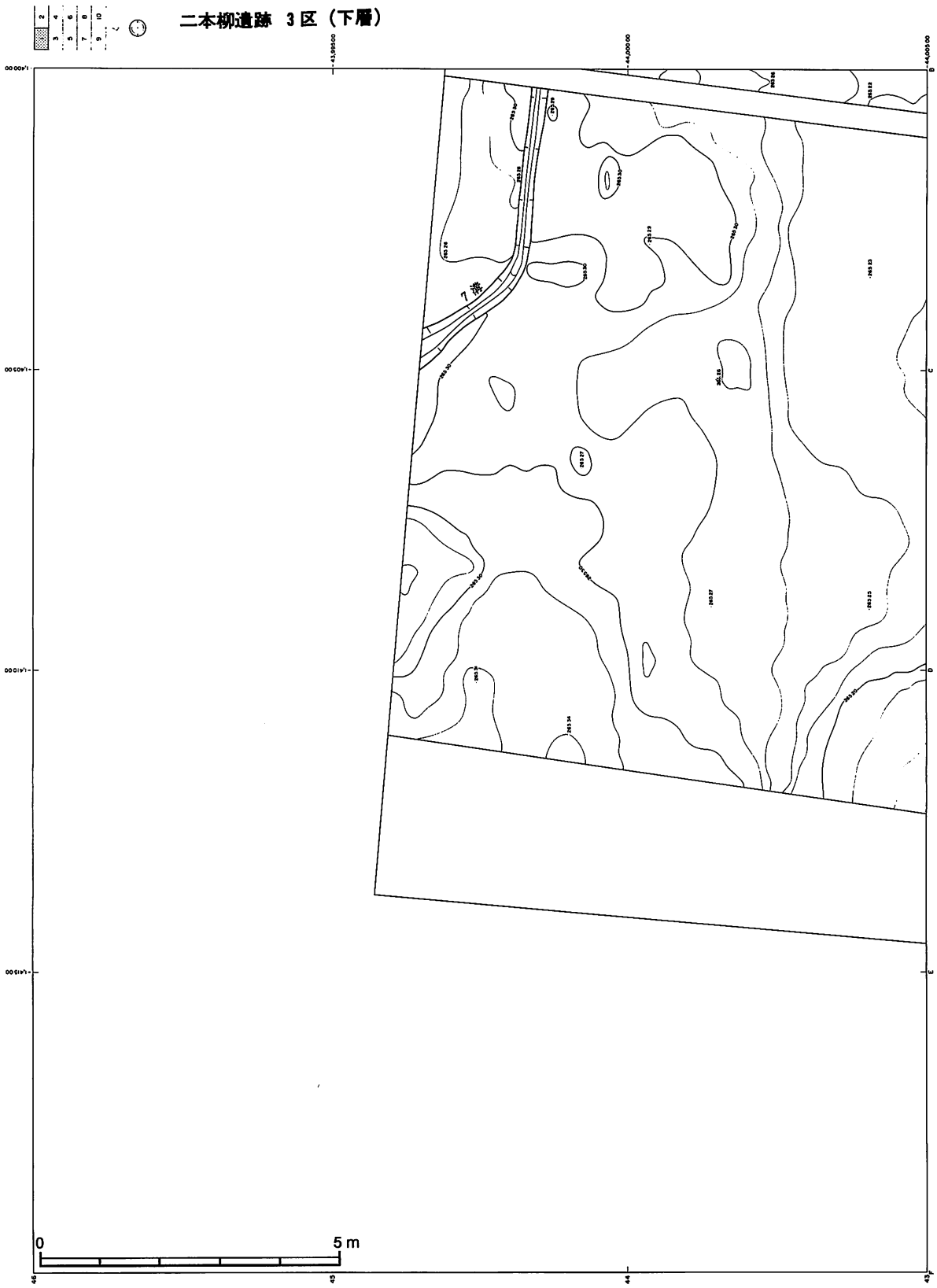




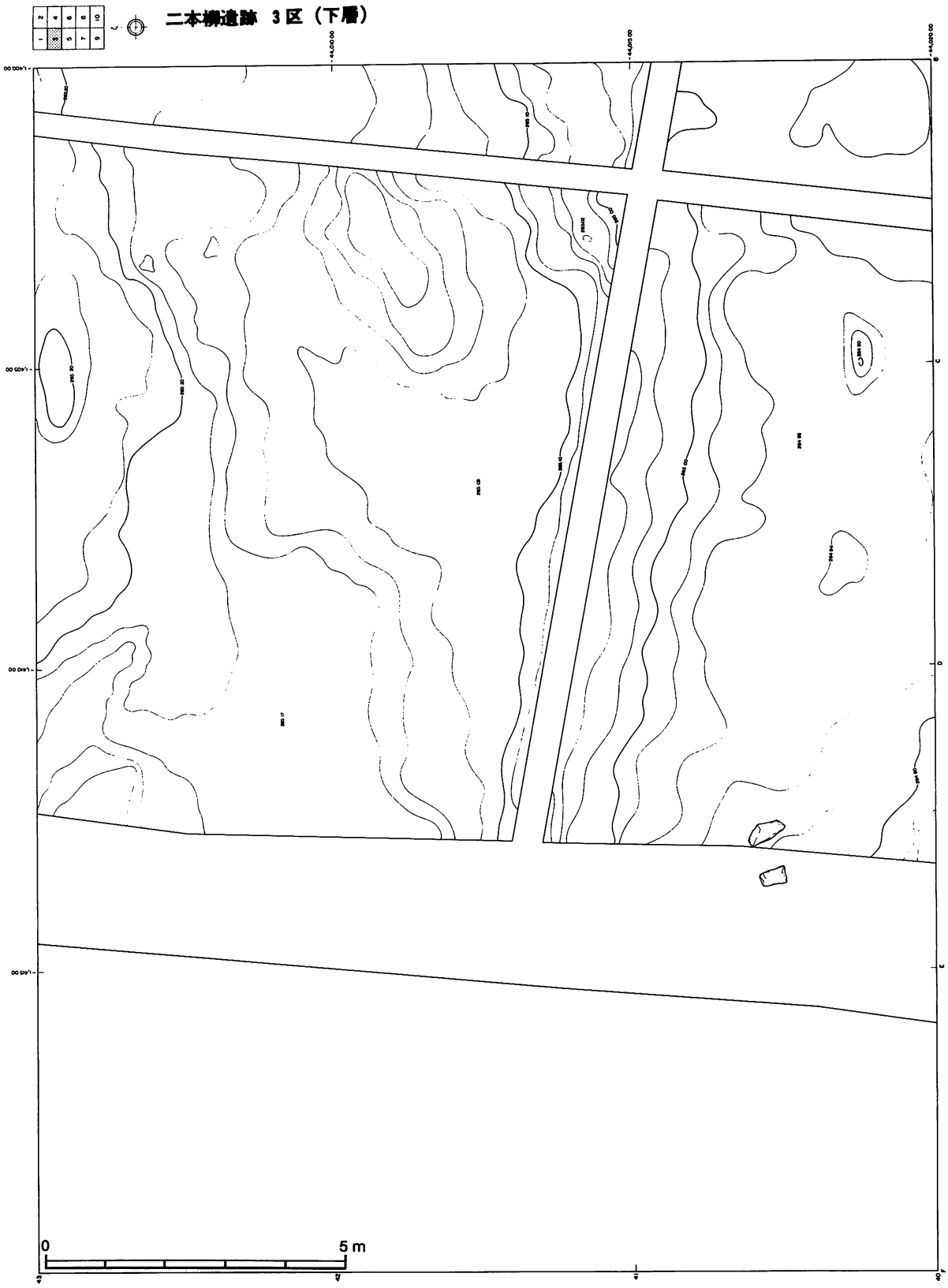
第104図　3区下層水田面エレベーション図（1）



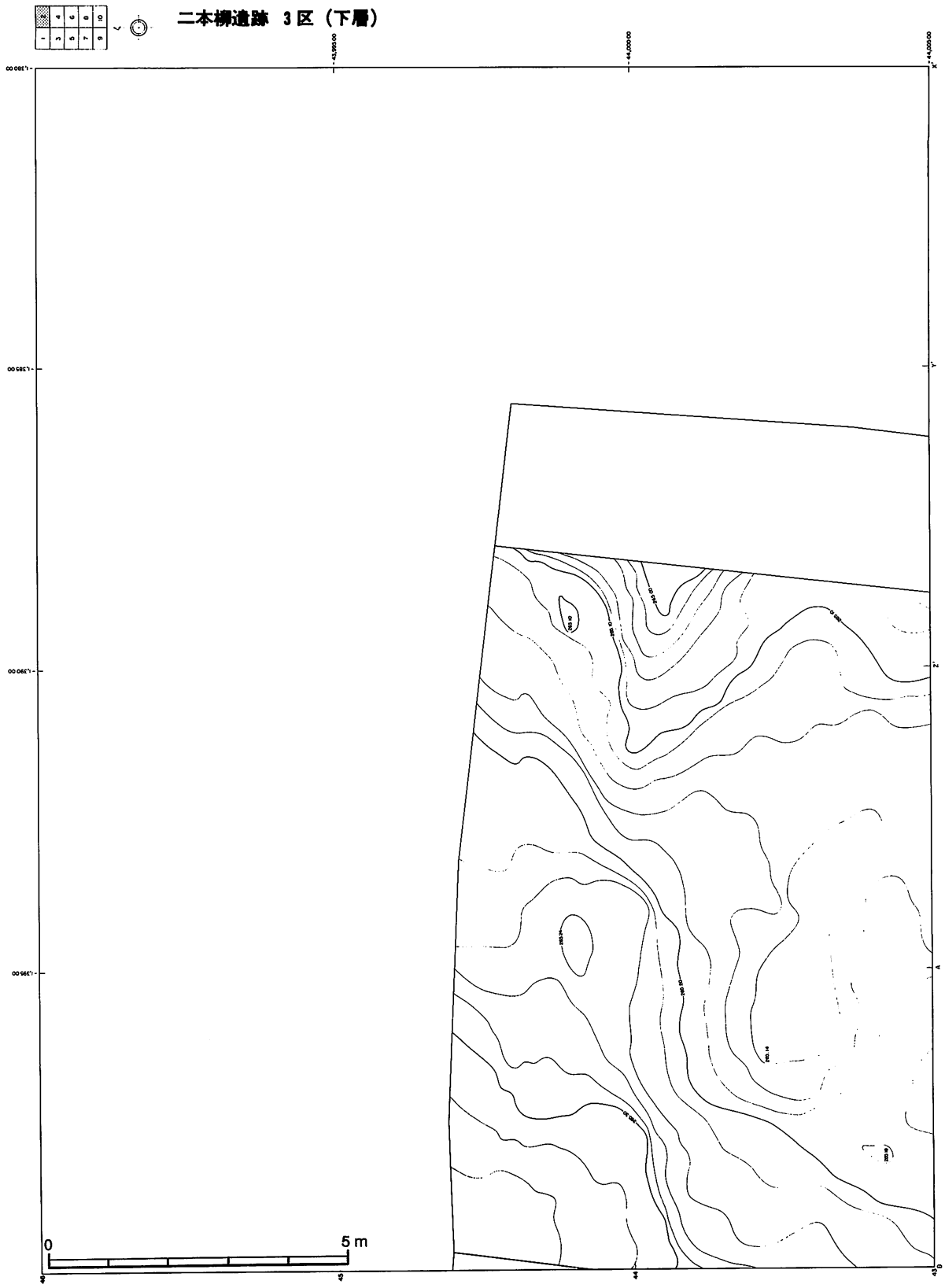
第105図　3区下層水田面エレベーション図（2）



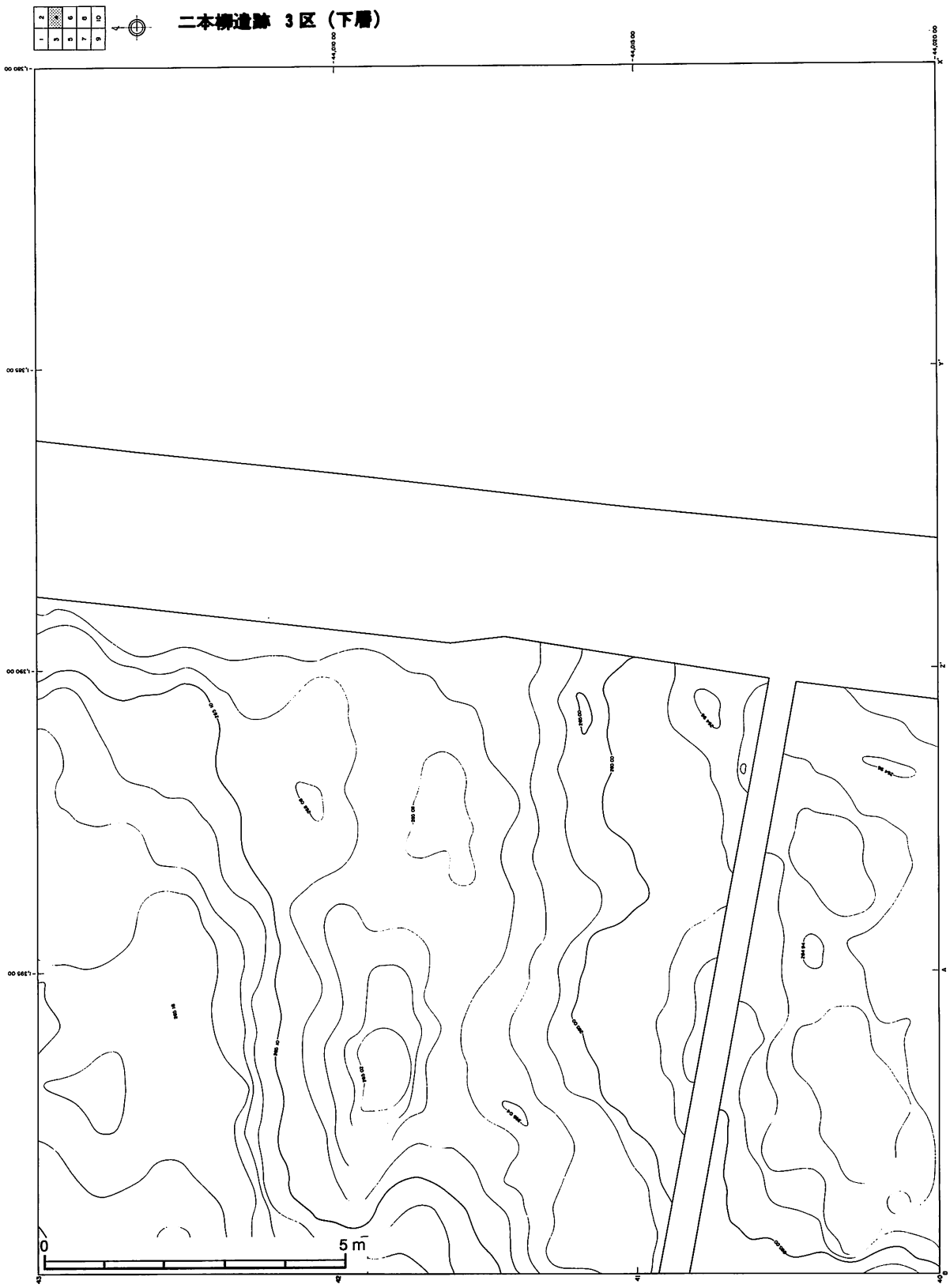
第106図　3区下層水田面詳細図（1）



第107図　3区下層水田面詳細図（2）

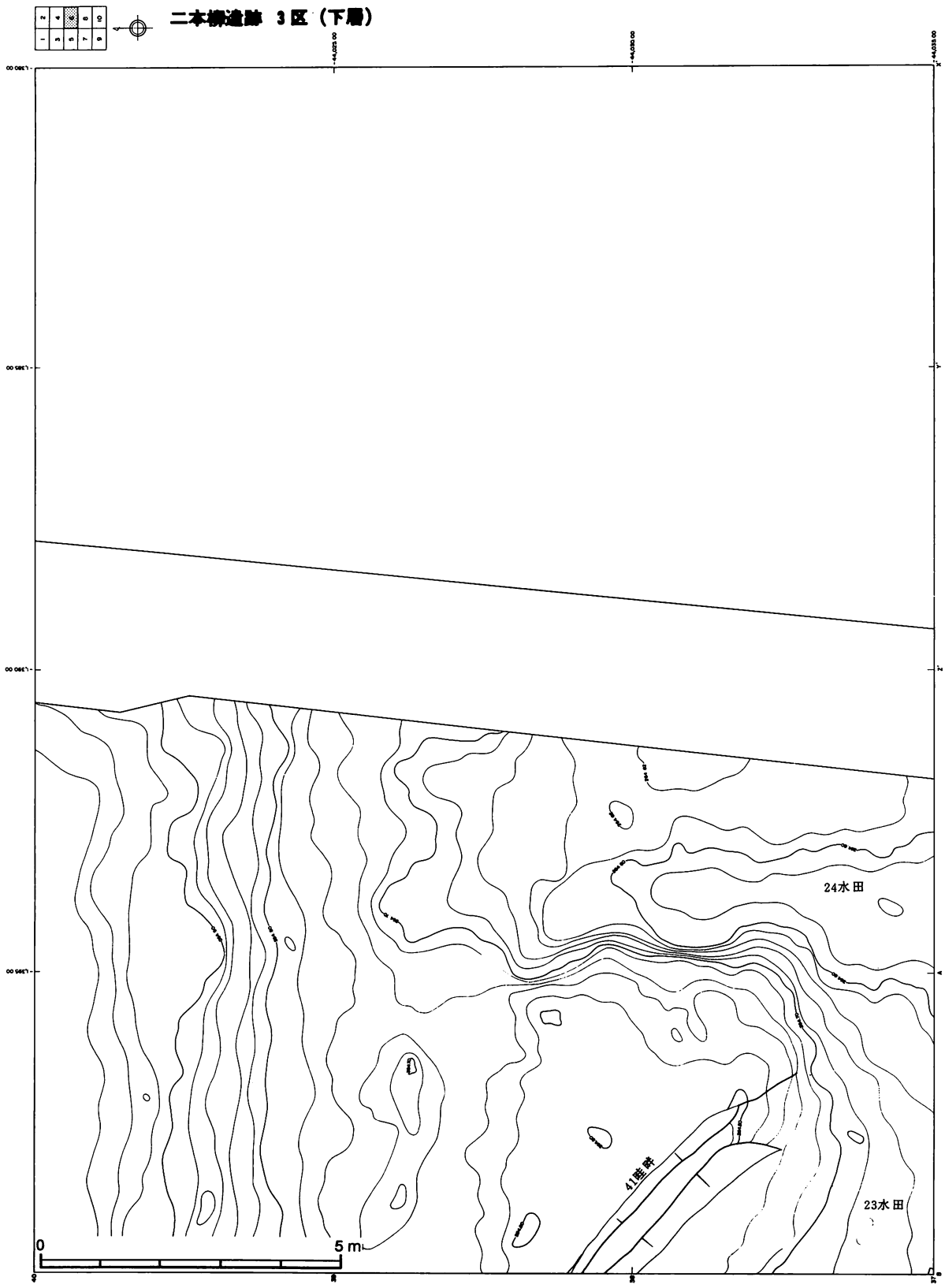


第108図　3区下層水田面詳細図（3）

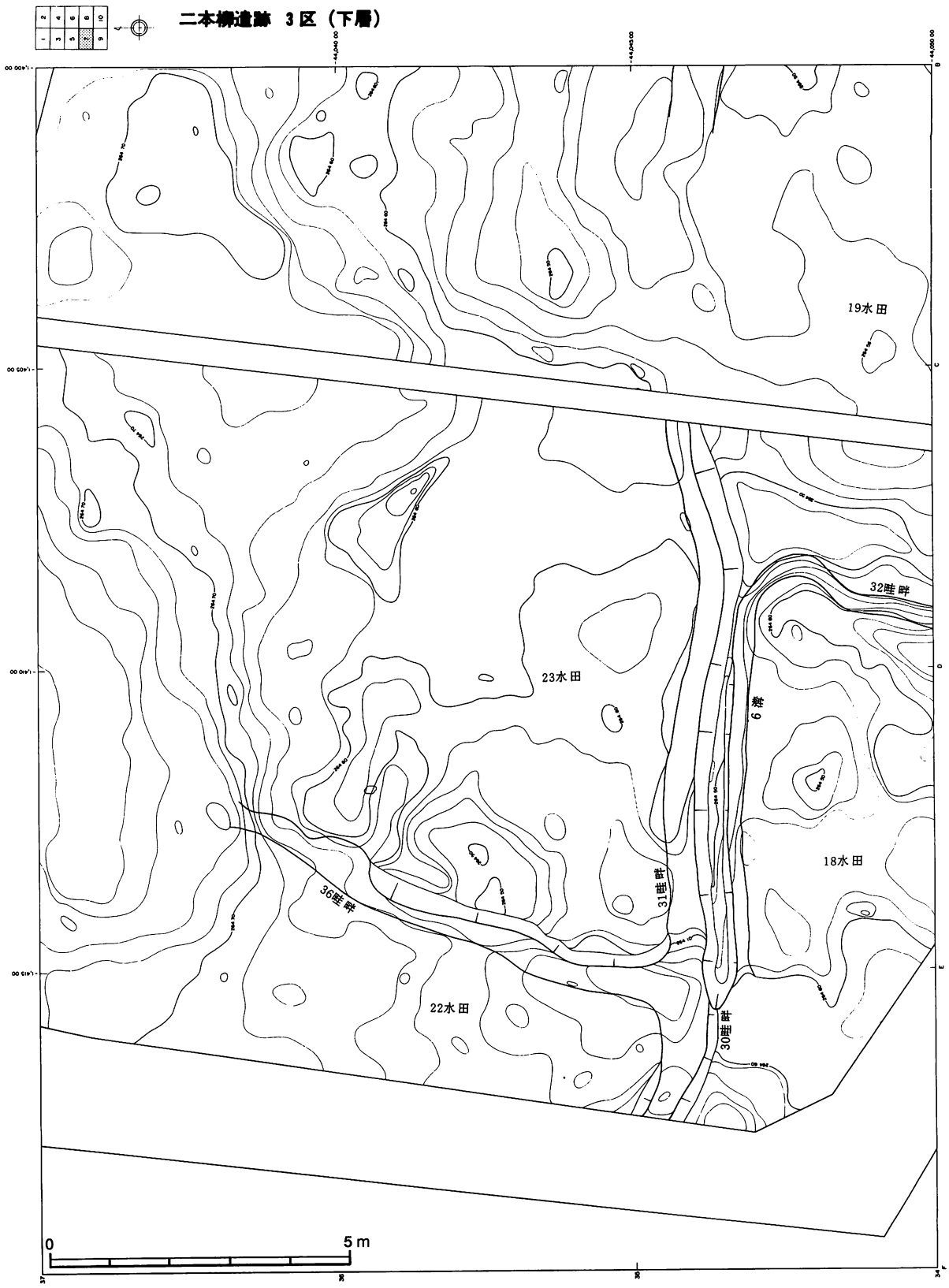


第109図　3区下層水田面詳細図（4）

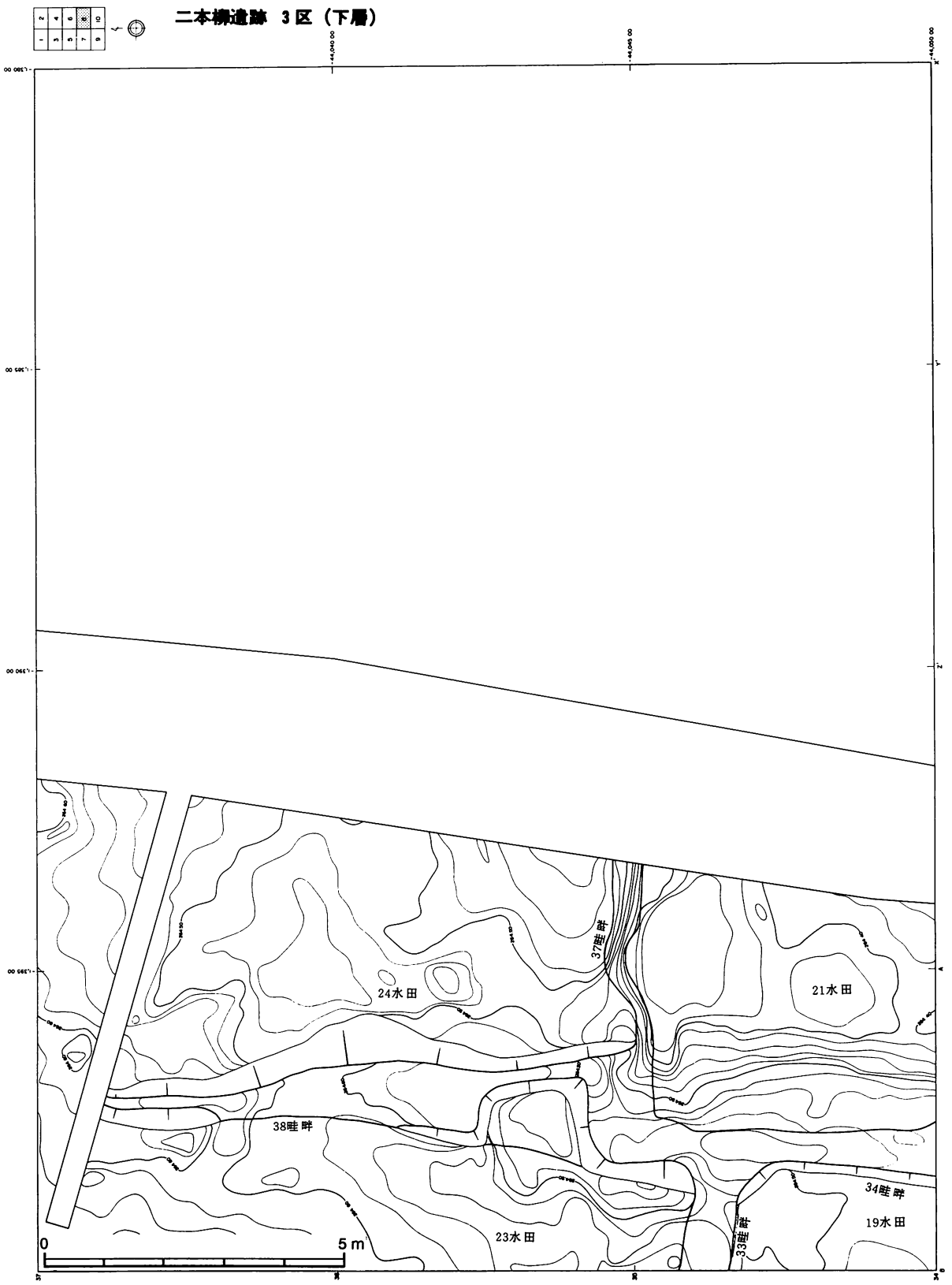
第110図　3区下層水田面詳細図（5）



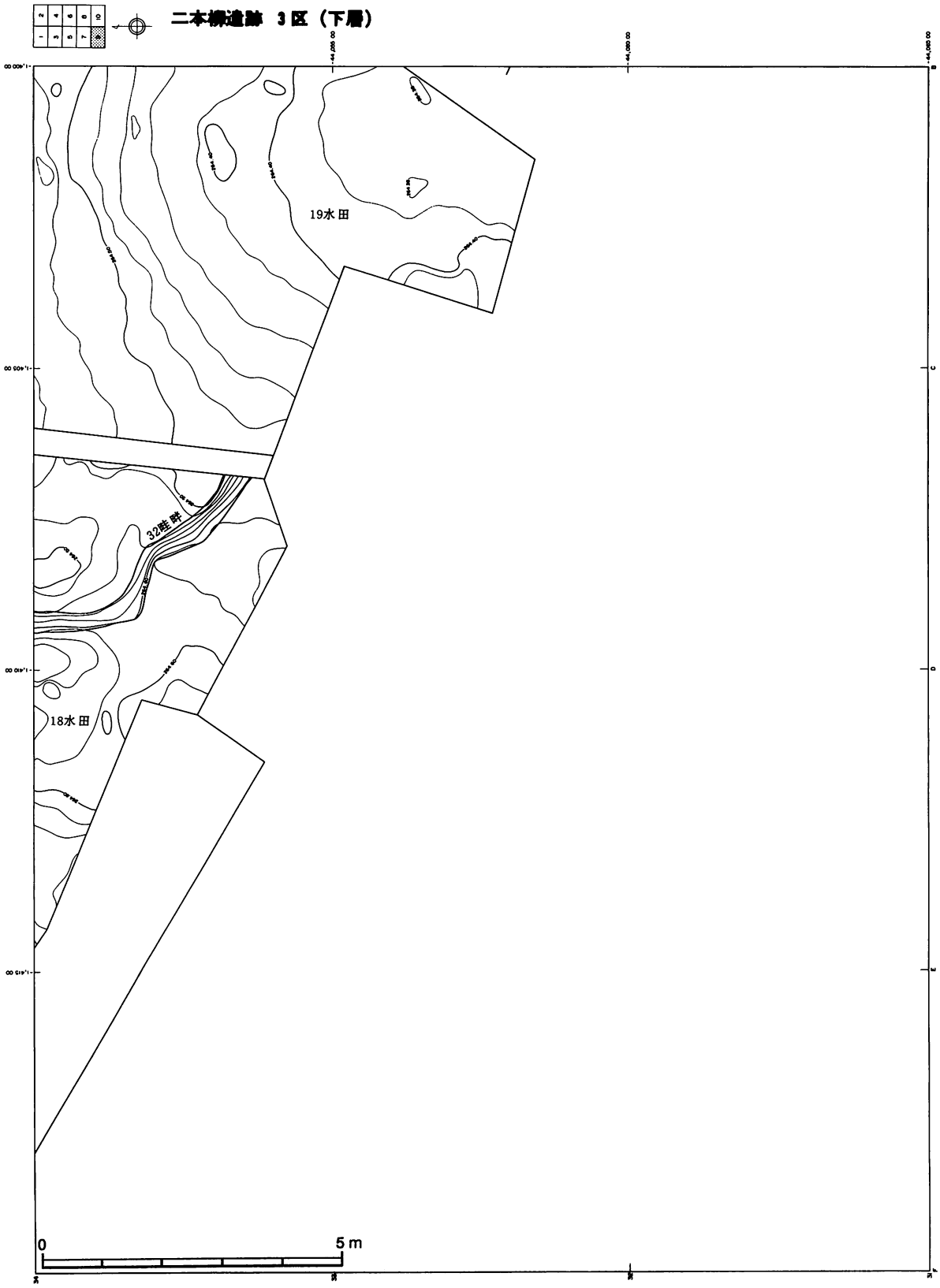
第111図　3区下層水田面詳細図（6）



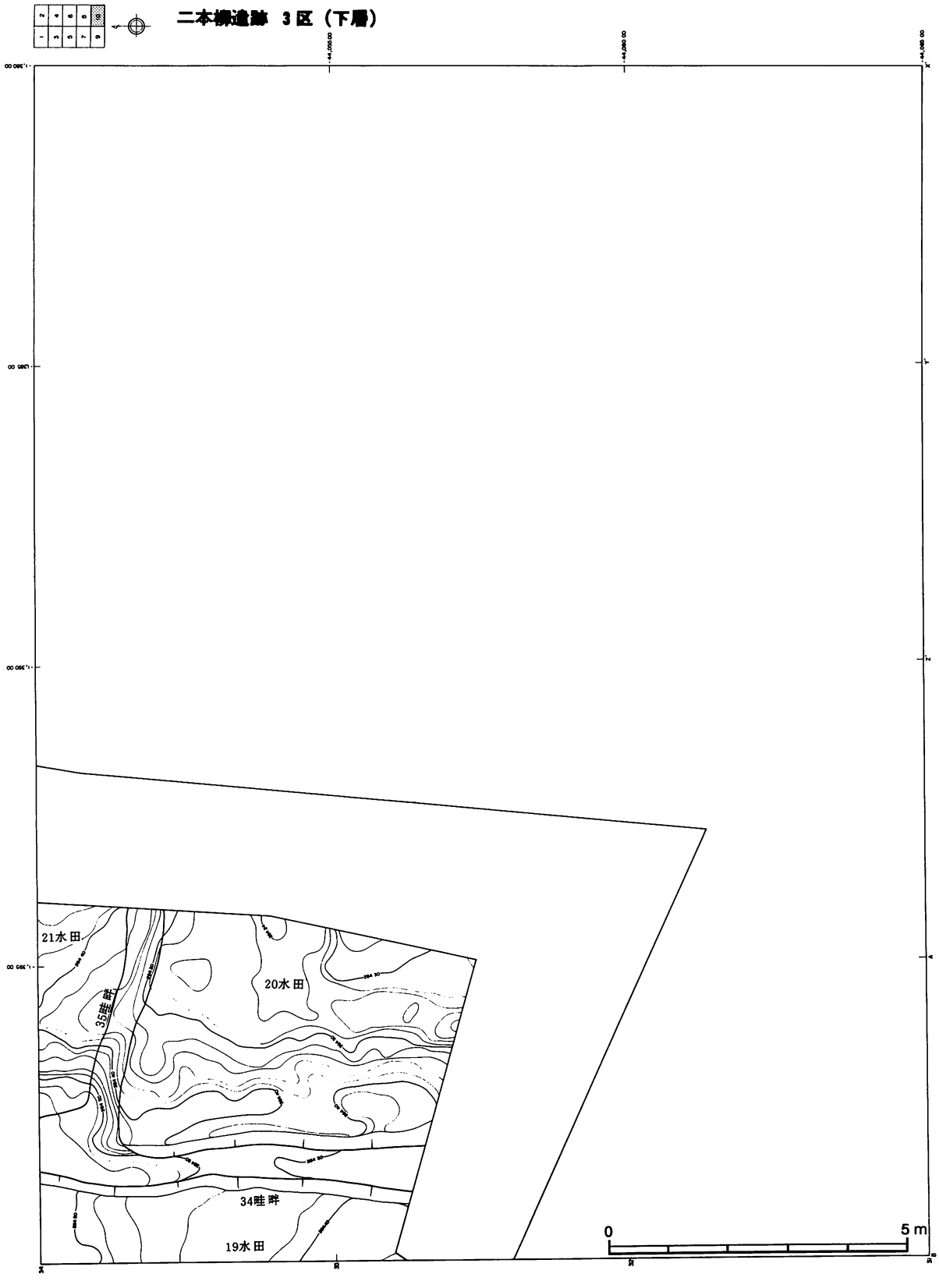
第112図　3区下層水田面詳細図（7）



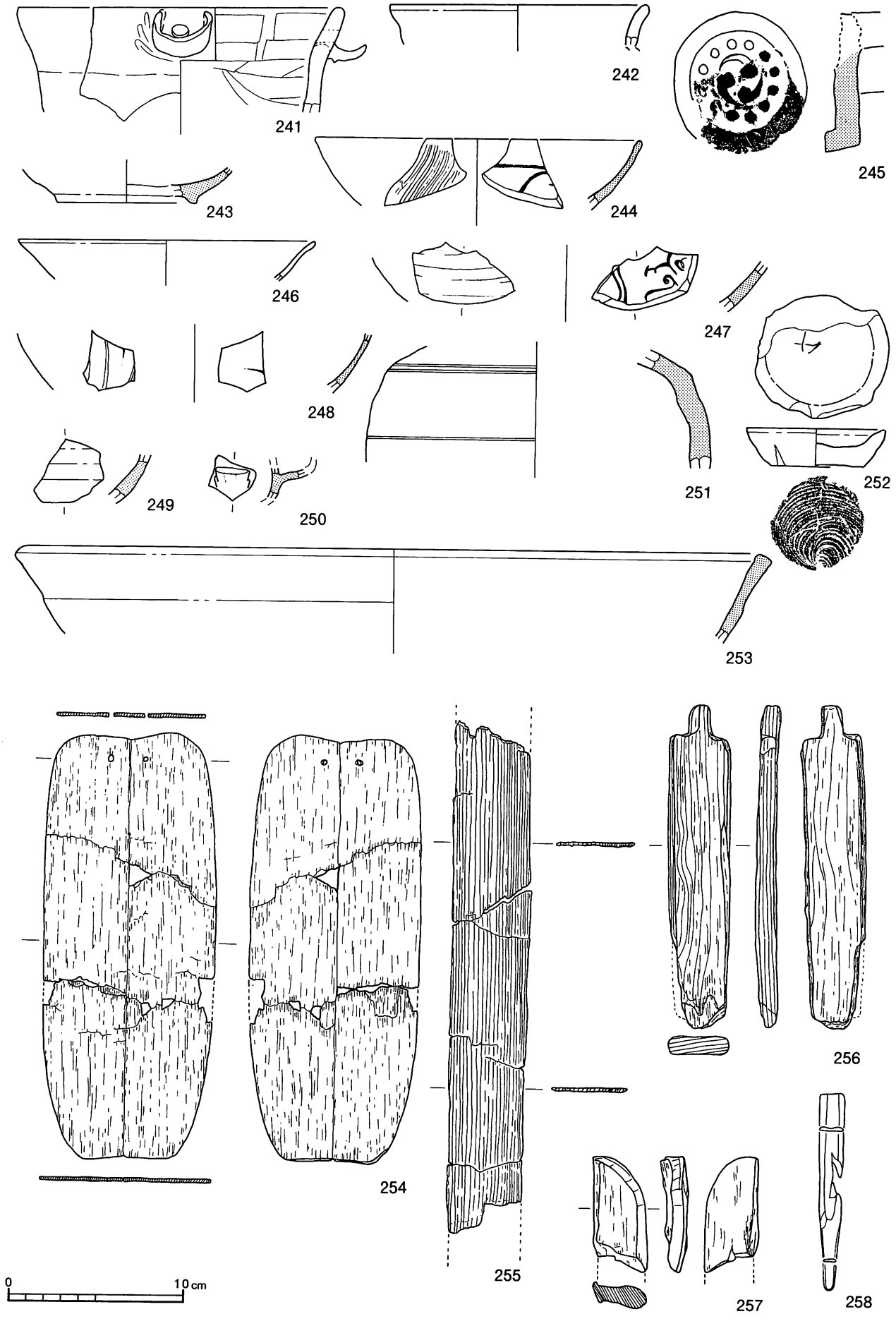
第113図　3区下層水田面詳細図（8）



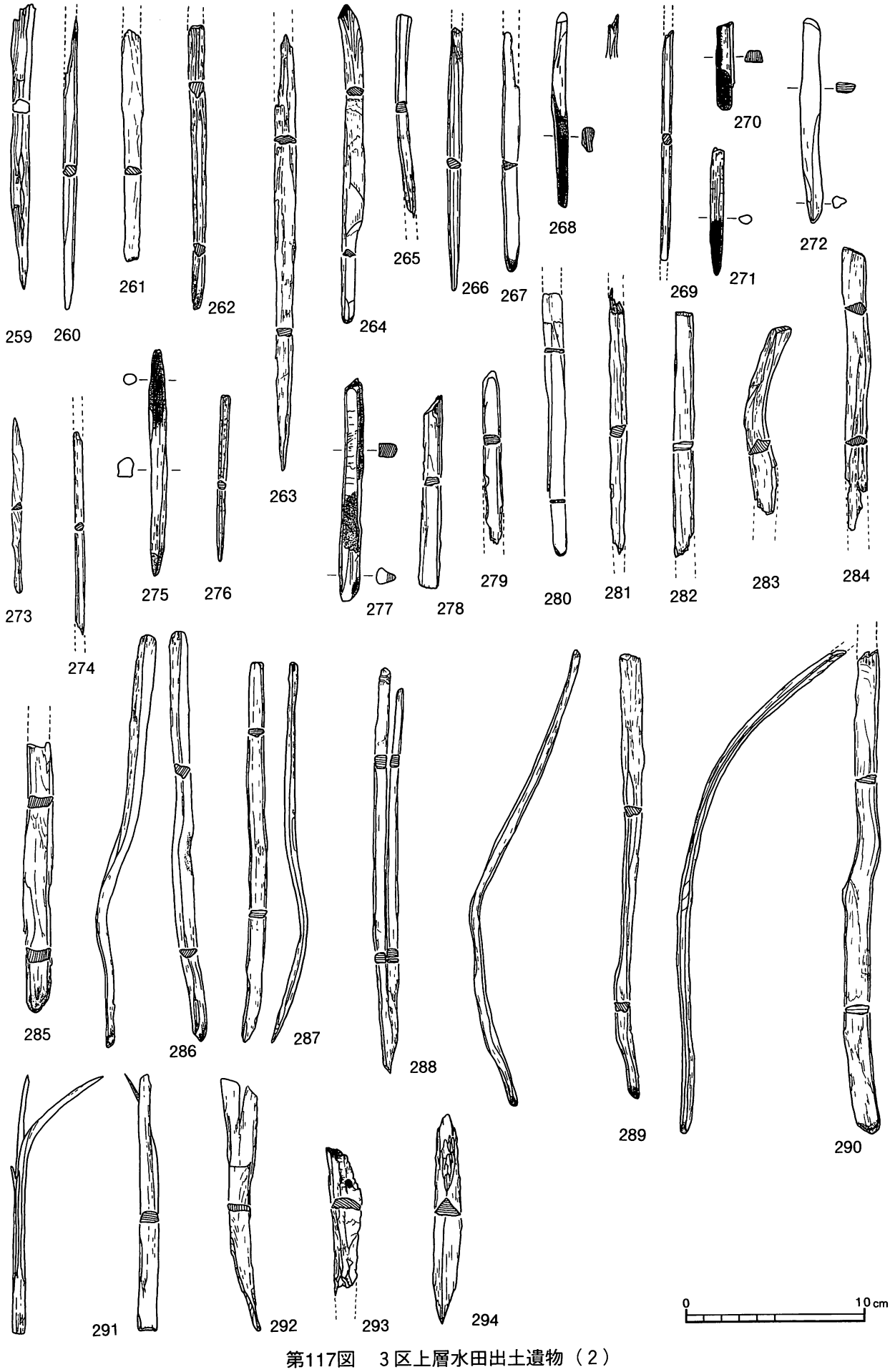
第114図　3区下層水田面詳細図（9）



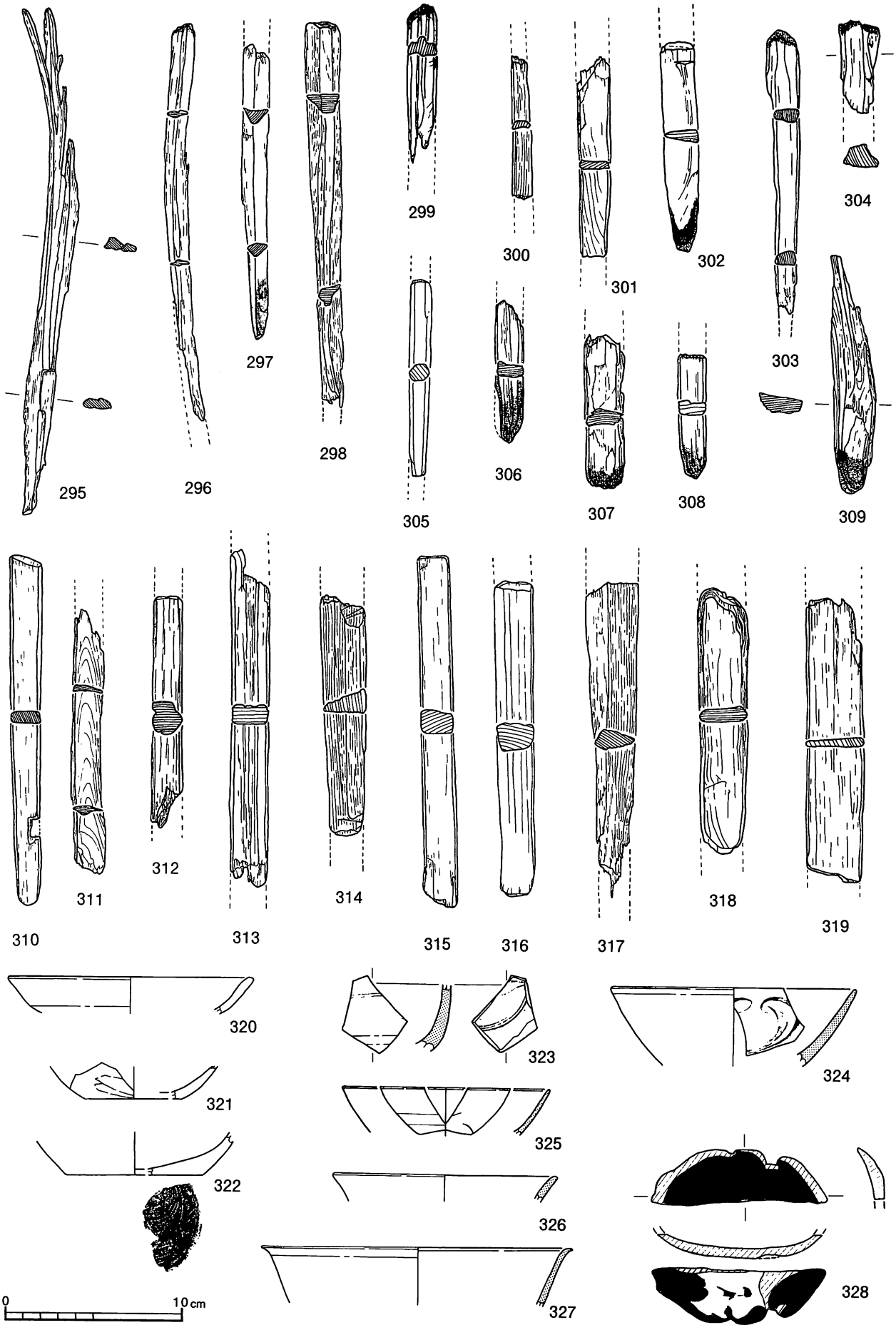
第115図　3区下層水田面詳細図（10）



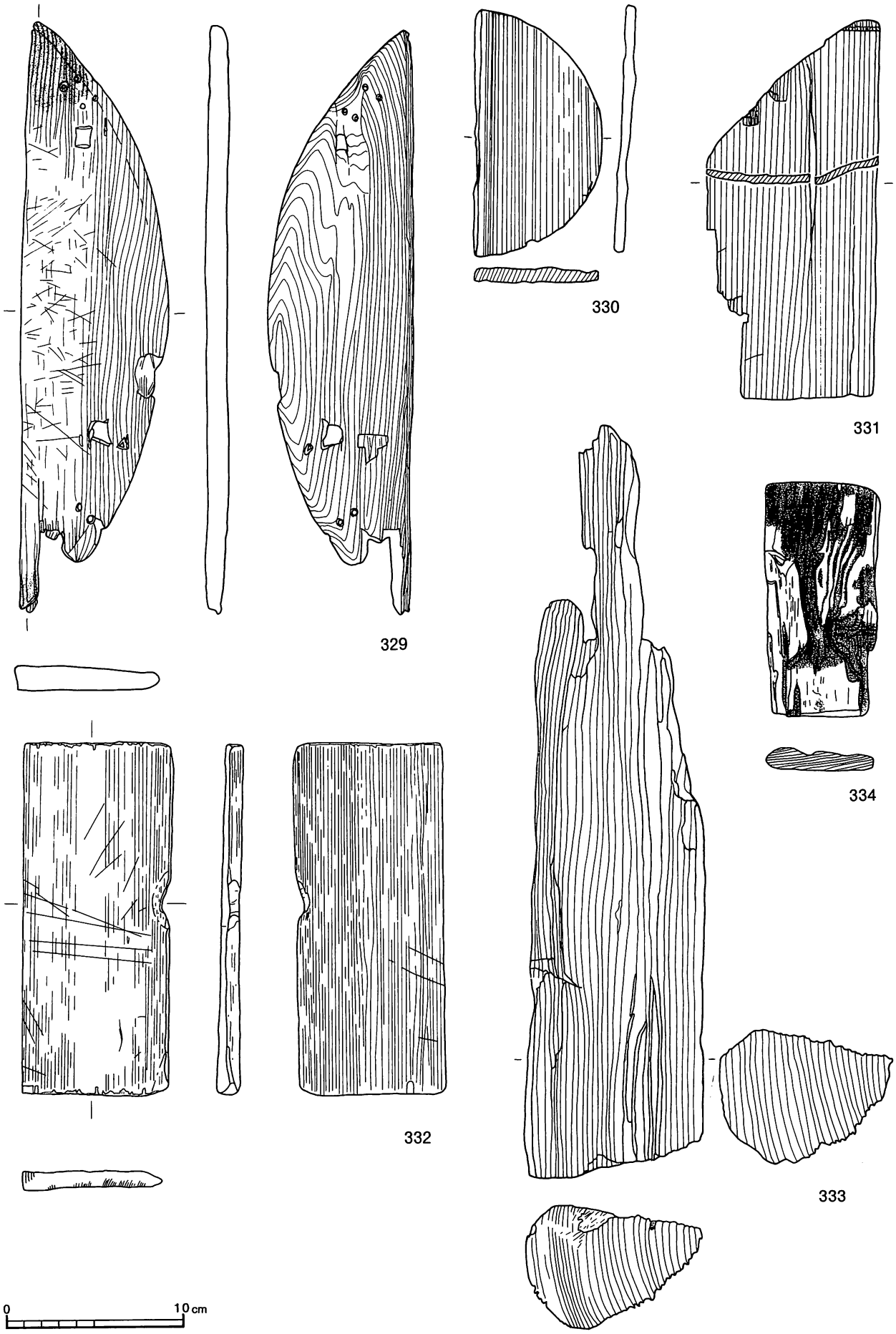
第116図　3区上層水田出土遺物（1）



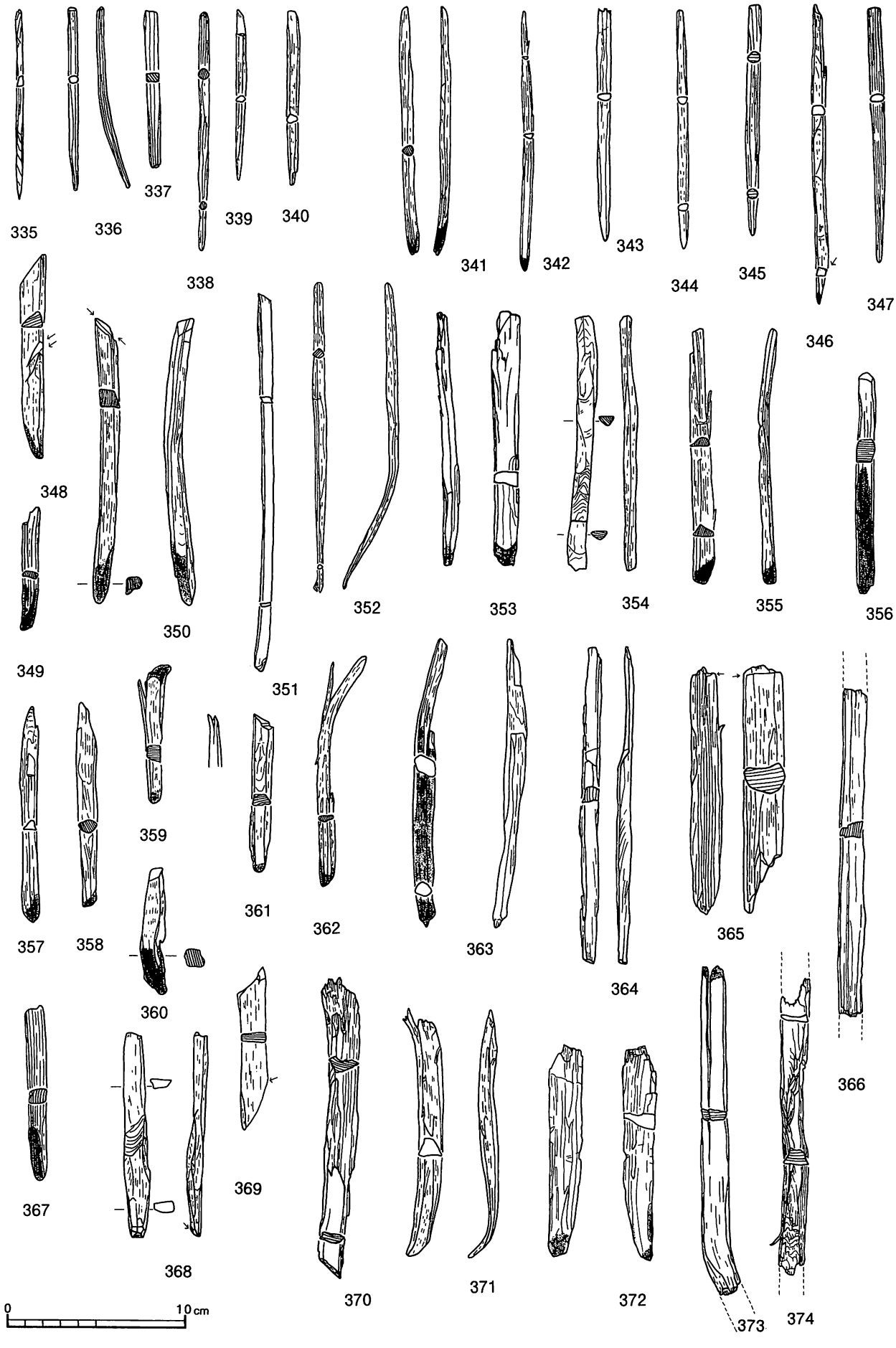
第117図　3区上層水田出土遺物（2）



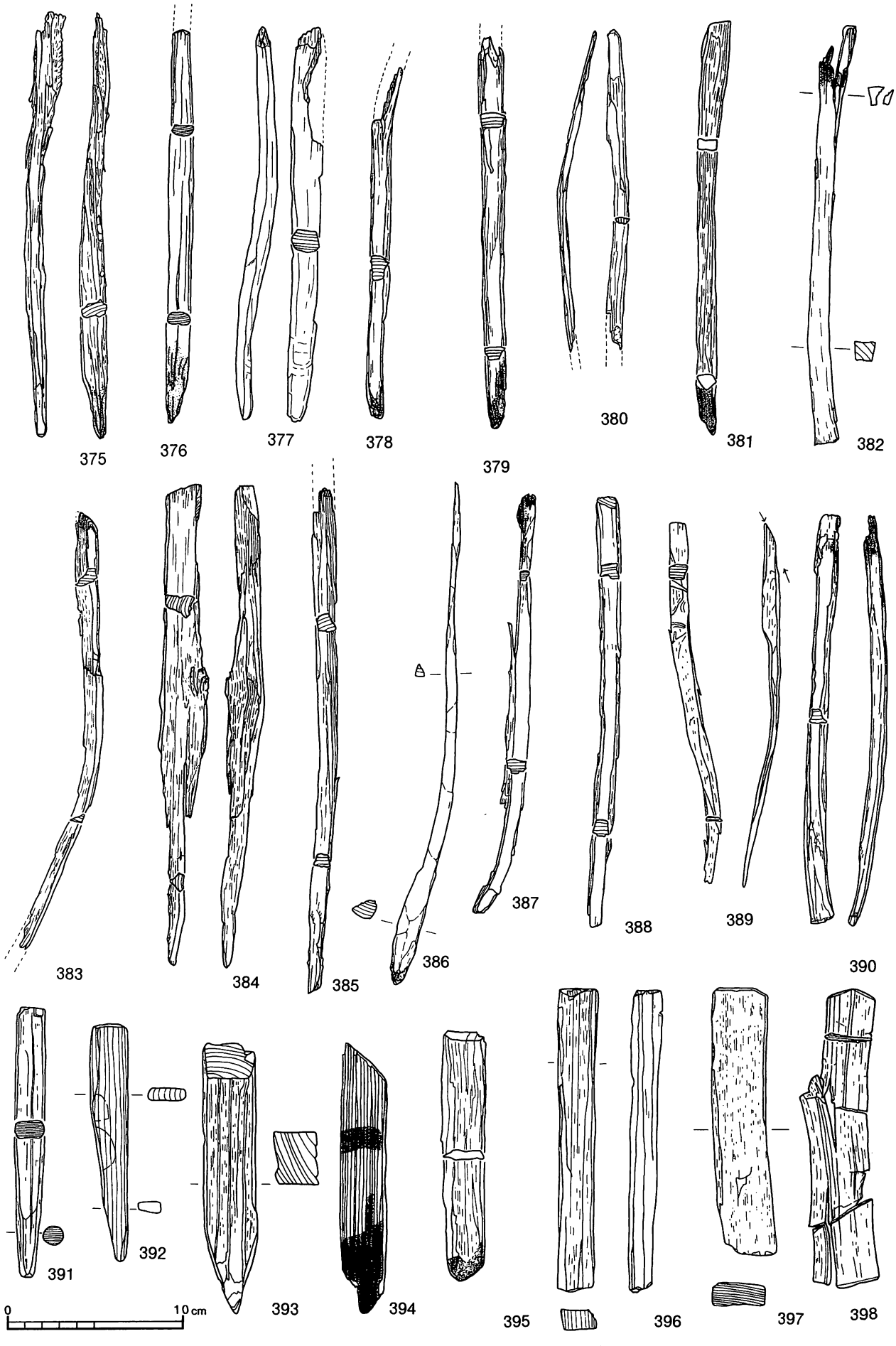
第118図　3区上層および下層水田出土遺物



第119図　3区下層水田出土遺物（1）



第120図　3区下層水田出土遺物（2）



第121図　3区下層水田出土遺物（3）

第8表　3区上層水田

水田番号	面　積 (m²)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
1	17.84＋α	265.12	264.94	1. 2	1水口	
2	126.98＋α	265.04	264.72	1. 2. 3. 4. 9. 10	1水口	
3	78.84	265.04	264.88	3. 4. 6. 8. 11		
4	75.12＋α	264.78	264.58	4. 5	1溝	
5	28.18＋α	264.92	264.72	5. 6. 7		
6	66.62＋α	264.92	264.84	7. 8. 14. 18		
7	82.97＋α	265.2	265.04	9. 12. 13. 15	2水口	
8	94.65	265.12	265	10. 11. 12. 13. 14. 16. 17	2水口	
9	64.22＋α	265.3	265.18	15. 16. 19. 20. 21		
10	115.61＋α	265.18	264.96	17. 18. 19. 22		
11	66.67＋α	265.5	265.32	20. 23. 24		
12	109.19＋α	265.3	265.08	21. 22. 23. 26	2・3溝	
13	107.64＋α	265.7	263.51	24. 25. 28	3・4水口	
14	67.52＋α	265.58	265.42	25. 26. 27	2・3・4　溝	
15	92.87＋α	265.6	265.46	27. 29	2・5溝	
16	8.82＋α	265.84	265.2	28	9・12水口	
17	10.25＋α	265.74	265.6	29	9・11・12水口	

第9表　3区下層水田

水田番号	面　積 (m²)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
18	36.63＋α	264.66	264.5	30. 31. 32		
19	91.58＋α	264.56	264.38	32. 33. 34		
20	18.60＋α	264.42	264.24	34. 35		
21	24.04＋α	264.56	264.36	34. 35. 37		
22				30. 36		
23			264.44	31. 36. 38		
24			264.44	37. 38		
25			264.82	39. 42		
26			264.72	40. 41. 42		

第10表　3区上層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
1	12.42	N−12°−E	直	47	16	68	45	
2	1.94＋α	N−15°−E	直	56	20			
3	8.19＋α	N−5°−E	直					
4	12.67＋α	N−74°−E	直	67	12	71	32	
5	5.43＋α	N−85°−W	直	60	33	81	56	
6	6.59	N−12°−E	直	51	35	51	35	
7	5.69＋α	N−80°−W	直	31	18	59	47	
8	6.94	N−12°−W	直	29	11	54	46	
9	5.36	N−80°−E	直	47	13	82	44	
10	5.12	N−55°−W	直	24	18	53	48	
11	6.43	N−61°−E	直	39	24	60	42	
12	5.38	N−10°−E	直	40	17	52	48	
13	5.29	N−1°−E	直	22	11	50	38	
14	5.03	N−14°−E	直	32	18	52	39	
15	7.39＋α	N−70°−W	直	38	26	48	36	
16	3.38	N−70°−E	直	35	27	62	40	
17	9.65	N−44°−W	直	34	15	55	52	
18	7.71＋α	N−81°−W	直	42	13	62	47	
19	4.76	N−25°−E	直	50	26	53	39	
20	8.40＋α	N−81°−E	直	72	16	97	43	
21	3.37	N−33°−W	直	35	14	67	53	
22	12.15＋α	N−83°−W	直	45	24	61	50	
23	8.29	N−17°−E	直	42	10	72	32	
24	9.73＋α	N−71°−W	直	49	18	65	22	
25	11.93	N−16°−E N−14°−W	曲	58	31	71	45	
26	13.61＋α	N−87°−W	直	56	20	75	48	
27	12.32＋α	N−76°−W	直	34	20	63	31	
28	8.80＋α	N−81°−W	直	84	34	92	58	
29	?	N−81°−W	直					

第11表　3区下層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
30	2.05＋α	N−73°−W	直	71	37	83	70	
31	9.66＋α	N−90°−E	直	62	31	92	53	
32	7.58＋α	N−48°−W N−10°−E	曲					
33	3.13＋α	N−85°−W	直	82	79			
34	10.08＋α	N−4°−E	直	69	43	136	80	
35	4.39＋α	N−70°−W	直	64	43			
36	8.29＋α	N−21°−E	直	79	27	85	72	
37	4.76＋α	N−82°−E	直	54	29			
38	10.48＋α	N−5°−E	直	179	16	237	54	
39	7.31＋α	N−81°−W	直	66	59	163	144	
40	3.65＋α	N−84°−W	直	75	29	130	86	
41	7.10＋α	N−49°−W	直	112	84	86	20	
42	4.02＋α	N−17°−E	直	76	40			

第４節　第４区の遺構と遺物

第４区では、25層で江戸期の水田、6層上面において室町期の上層水田、8a層で平安～鎌倉期の下層水田が検出された。近世の水田はすでに削平され、一部に杭列が残されていた。

１．近世の遺構と遺物

４区堆積層の25層とした層上面に水田と考えられる層が断面で確認されたが、平面調査ではほとんどがすでに削平され、杭列のみが検出された。

１）杭列（第123図）

上層水田の調査時に４区の南東側に１～５号杭列が確認された。これらの杭列は中世後半期の上層水田とは、位置や方向が異なり、断面観察等から、近世水田に打ち込まれた杭列と判断した。

２．室町～戦国時代の遺構と遺物

４区堆積層の６層とした層上面に水田面及び水田遺構が検出された。確認された遺構は、水田11面、畦畔18本があり、室町時代前半～戦国時代（14世紀～16世紀）のものと判断された。

１）水田（第122～135図）

水田面は52～64グリッドまでの４区北側に展開し、地形に沿って北西から南東に向かって傾斜している。水田の最高地点は９号水田で標高266.66m、最低地点は２号水田で標高265.72mあり、東西方向で30mの間に最大40cm、南北方向60mで約80cm下降傾斜している。

水田の形状は、地形の傾斜に沿って不整形のものが多い。

水田施設としては、畦畔や田の境界となる段差が確認された。

２）畦畔（第122～135図）

畦畔は18本確認されている。この中で、明確に盛土をもつ畦畔は、１号～５号・８号・９号・17号畦畔の８本のみで、他は段差のみが検出された。

畦畔の規模は、下端幅が65～102cm前後の中型から大型のもので、畦畔の高さは、10～20cm前後を測る。これらの畦畔は、南北軸で真北から0～7度ほど東偏し、南北軸で真北から70～90度東偏する角度に集中傾向をもつが、地形傾斜によって規則性が損なわれているものも多い。

３）出土遺物とその出土状況（第155図399～420、第16～20表）

４区上層水田に伴う遺物は、土器、陶磁器、木製品、鉄製品などがある。この中には、近世面からの混入品もあるが、調査段階では層位的な分離が困難であったため、ここで記述する。

土器（412） 412は口径8.0cm、底径4.5cm、高さ1.6cmの土師質の皿で、底面に回転糸きり痕が認められる。

陶磁器（399～411） 399・401・402・404～407、409・410は染付、400・403は青磁である。染付のほとんどが近世のもので、上層からの混入と考えられる。

鉄製品（408） 鉄製鎌が１点出土している。刃部の90％が欠損しており、柄に固定する茎部分と刃部の一部のみが残されている。

木製品（413・415～420） 413は漆の椀底部破片で、黒漆が塗られている。414は近世水田面から出土した漆椀である。416～420は棒状木製品で、いずれも先端部が削り込まれ、両端部または部分的に焼けて炭化している。

3．平安～鎌倉時代の遺構と遺物

1）水田（第136～153図、第13表）

下層水田面は、本地区土層断面の8a層とした土壌層で、平面的には45～58グリッドまでの4区南側に偏って17枚確認されている。北側においてもかつては水田面が連続して展開していたと考えられるが、上層水田面との分離が不可能であることから、下層水田として認識できなかった。このことは、南側が一時期洪水に見舞われ、洪水砂に覆われて水田面が分断したのに対し、比較的標高が高い北側では、洪水被害から免れ、継続して水田経営が営まれたことに起因する。

水田の最高地点は25号水田で標高266.00m、最低地点は15号水田で標高265.2mあり、東西方向で30mの間に最大30cm、南北方向90mで約110cm下降傾斜している。

水田の形状は、正方形または長方形を基本とし整然と並んでいるが、一部は地形の傾斜に沿って不整形のものも存在する。しかし、南北方向にのびる畦畔の方向は、真北から4～10度前後東偏するものが多く、遺跡が存在する地域の表層条里の方向とほぼ一致する点は、注目される。

水田施設としては、水路、畦畔や水口、杭列が確認されている。

2）畦畔（第136～153図、第15表）

畦畔は32本確認されている。

畦畔の規模は、最大の24号畦畔で下端幅225cm、最小の30号畦畔で下端幅55cmを測り、高さ10～20cmの中型から大型の畦畔が多い。また、大畦畔とされる24～25号畦畔は、1号溝とした水路の南側に沿って設置されており、杭補強がされていることから水路の護岸的な役割を兼ね備えている。同じ水路の北側にある26～28号畦畔が比較的小規模であることは、水田面の傾斜が北から南側に下がり、1号水路の影響が少ないことに起因するものと考えられる。

これらの畦畔の南北軸は真北から4～10度前後ほど東偏し、東西軸はそれとほぼ直交する。

3）水口（第136～153図）

水口は4ヶ所確認された。

1水口

（位　　置）Z－48グリッドに位置し、14号水田の北東隅に存在する。

（規模・配水方向）22号畦畔と24b号畦畔の接する地点を20cm程切断する水口で、14号水田の水が15号水田へと流れ込むように設置されている。

2水口

（位　　置）Z－48グリッドに位置し、15号水田の北西コーナーに存在する。

（規模・配水方向）24b号畦畔と25号畦畔を50cm程切断する水口で、1号溝から取水した水を15号水田へ流すための水口である。

3水口

（位　　置）B－53グリッドに位置し、20号水田と21号水田の北側境界に存在する。

（規模・配水方向）36号畦畔と39号畦畔の接する地点を30cm程切断する水口で、20号水田の水が21号水田へと流れ込むように設置されている。

4水口

（位　　置）X－55グリッドに位置し、23号水田と24号水田の境界に存在する。

（規模・配水方向）42号畦畔と43号畦畔の接する地点を20cm程切断する水口で、23号水田の水が24号水田へと流れ込むように設置されている。

4）溝（第136～153図）

1号溝

（位　　置）X～D－47～49グリッドに位置する

（形状・規模）長さ30m、幅150cm、深さ60～70cm程の水路で、調査区の西側から東側へ横断している。水田傾斜からみて、1号溝はその北側に位置する16～19号などの水田の排水路であると同時に、南側の水田域への取水路を兼ねた幹線水路と考えられる。溝内から動物骨などが検出されている。

5）杭列（第137図）

1号溝に沿った24号畦畔上に6号杭列が確認された。この杭列は1号溝の流水から南側の水田を保護するために、畦畔を補強したもので、護岸的な役割を兼ね備えている。

6）出土遺物とその出土状況（第138・155～157図421～472、第16～17表）

4区下層水田に伴う遺物は、土器、陶磁器、木製品などがある。

土器（421・422） 421・422は口径10.0～11.0cmほどの土師器の坏で、口縁端部がやや玉縁状に丸くなる。

陶磁器（423・424） 423は、口径15cm程の舶載の青磁蓮弁文碗である。釉はオリーブ色を呈する。424は、鉄釉系の陶器であるが、器種は不明である。

木製品（425～472） 425は漆の椀底部破片で、内外面に黒漆が塗られている。426・428は火切り臼で、426では片側4ヵ所、428では両側6ヵ所に円形の窪みが認められる。427は、下層水田面直上から出土した鏃形木製品で、長さ13.0cm、最大幅3.0cm、厚さ0.7cmを測る。鏃本体部は先端が尖り、茎の端部には矢柄との装着のためのえぐりが認められる。429は、B－59グリッド内から出土した烏帽子状の人形木製品で、長さ18.7cm、幅1.1cm、厚さ1.2cmを測る。頭部が焼けてやや炭化している。430は、曲げ物または桶の底部片で表面に刃物痕が無数につき、真板などに転用された物とも考えられる。431～461、463～471は棒状木製品で、多くは先端部が削り込まれ、両端部または部分的に焼けて炭化している。これらの棒状木製品の内、434、437は箸、その他は斎串状木製品と考えられる。462、472は板状の木製品であるが、用途は不明である。

4．古墳時代の遺物

土層断面の50層とした礫層上部に薄く堆積する20層中にわずかながら、古墳時代前期の土器が検出されている。

491は、唯一計測が可能な個体資料で、口径12.0cm、現存高19.5cmを測るS字状口縁台付甕である。S字状口縁の屈曲は緩やかで、胴部外面全体には刷毛目が施されている。肩部に横ハケが見られない点や、口縁部特徴から、S字甕の中でも新相に含まれる特徴をもっている。

５．弥生時代の遺物

土層断面の50層とした礫層中（下部礫層と呼ぶ）から弥生時代後期の土器片（490）と木製品（500～505）、52層とした黒色粘土層上面から弥生時代前・中期の遺物（474～489）がわずかに出土している。

（１）50層（下部礫層）中の遺物（第158図）

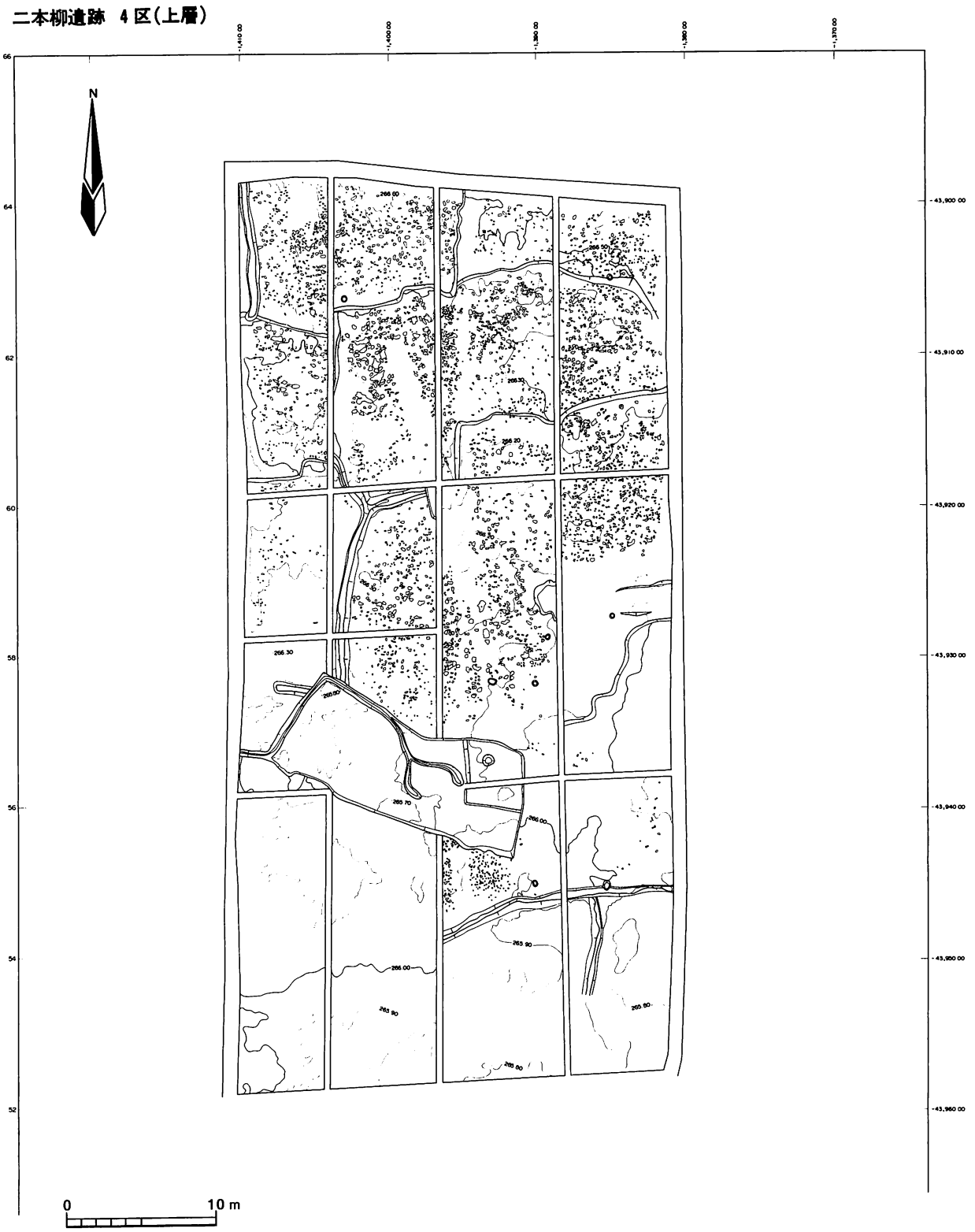
下部礫層とした50層は、４区全面に1.5m前後の厚さで堆積しており、中礫クラスの礫で構成されている。

490は、口縁部に折返し口縁がめぐる甕で、外面にハケ目調整が施されている。類例は甲西町住吉遺跡出土土器の中に見られ、弥生５－２期とする弥生時代後期中葉前後に比定される個体である。

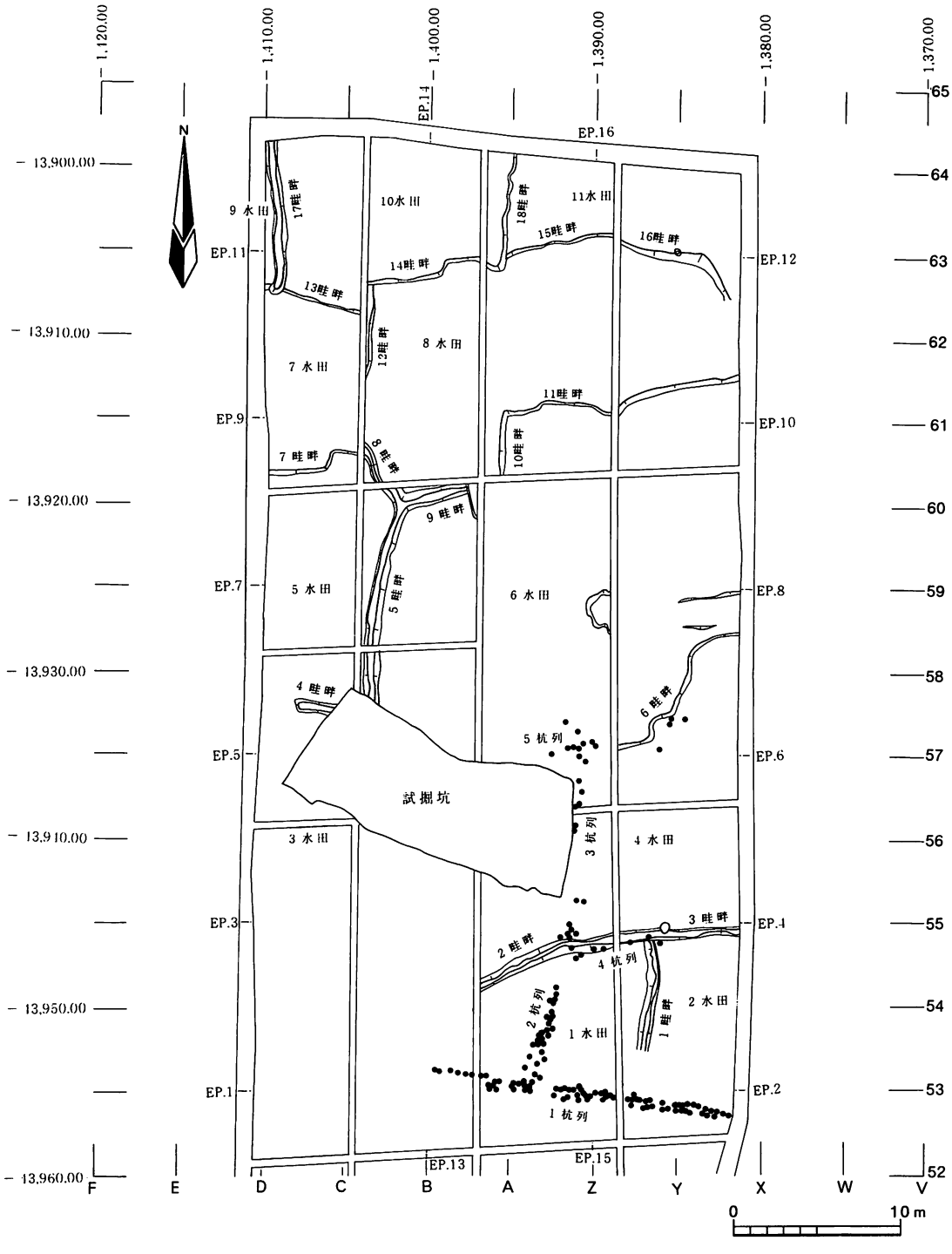
同一層位から得られた木製品のうち、500は現存長41.9㎝、幅10.1㎝ほどの梯子の一部で、梯子のステップ部分や加工痕が残されている。501・502・505は板状木製品で、当時の加工技術を捉える上で貴重な資料といえる。504は先端部を尖らせた杭と考えられ、下部のみが残存する。503は素材となる幹材から枝にかけての部分を利用した木製品であるが、未製品と考えられる。上部に幅３～４㎝程の手斧による加工痕が認められる。

（２）52層上面の遺物（第154・157・158図）

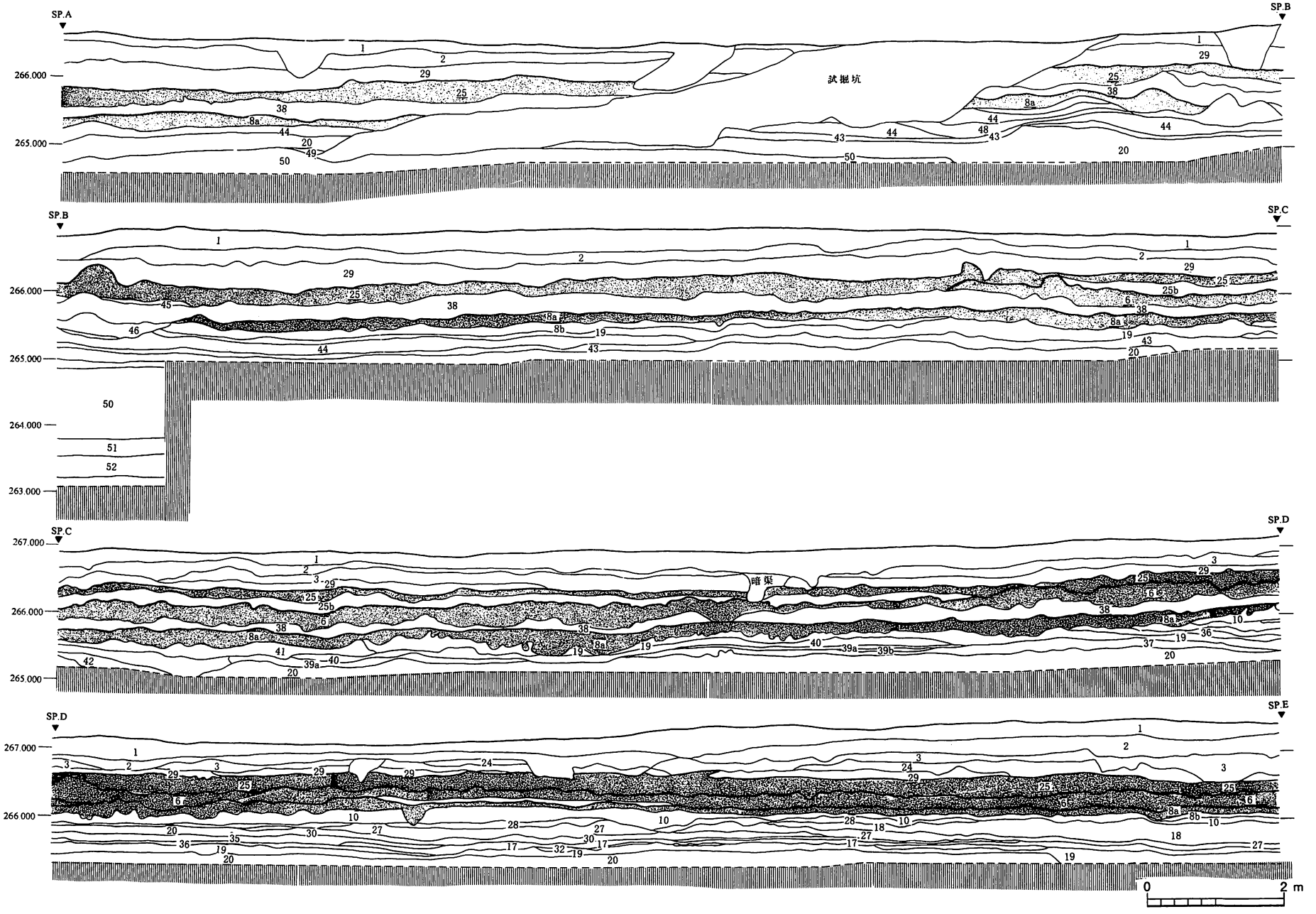
474～487は、外面に粗い条痕を施した甕形土器である。条痕はいずれもクシ状工具を利用して、縦方向ないし斜方向に施されている。甕口縁部破片の474・479は口唇部がやや丸味をおびる特徴を示す。488は沈線文様を施した壷形土器の肩部破片である。489は、現存長8.0㎝、幅5.2㎝、厚さ1.5㎝の打製石斧である。小破片の資料のため帰属時期を確定することはできないが、条痕文の手法や装飾の特徴などから弥生前期～中期前葉（弥生１～２期）の条痕文系土器と考えておきたい。



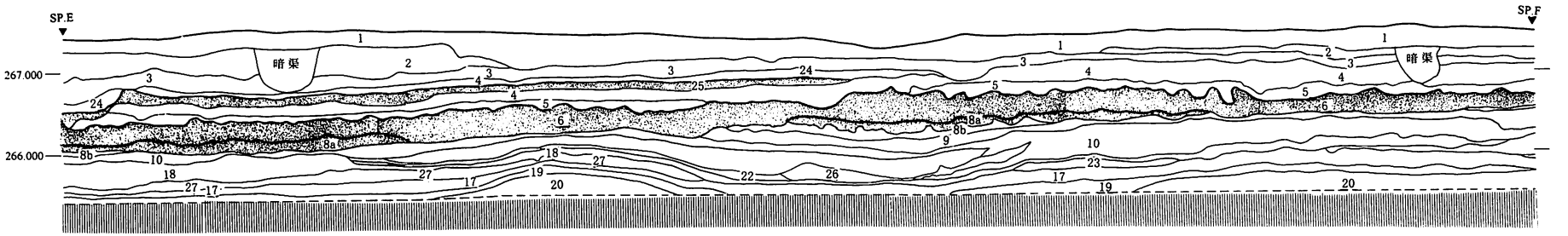
第122図　4区上層水田等高線図（全体）

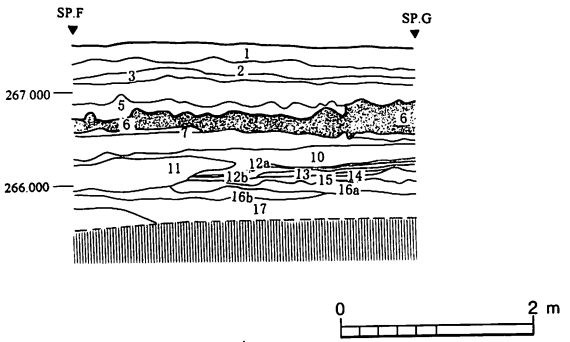


第123図　4区上層水田



第124図　4区セクション図（1）

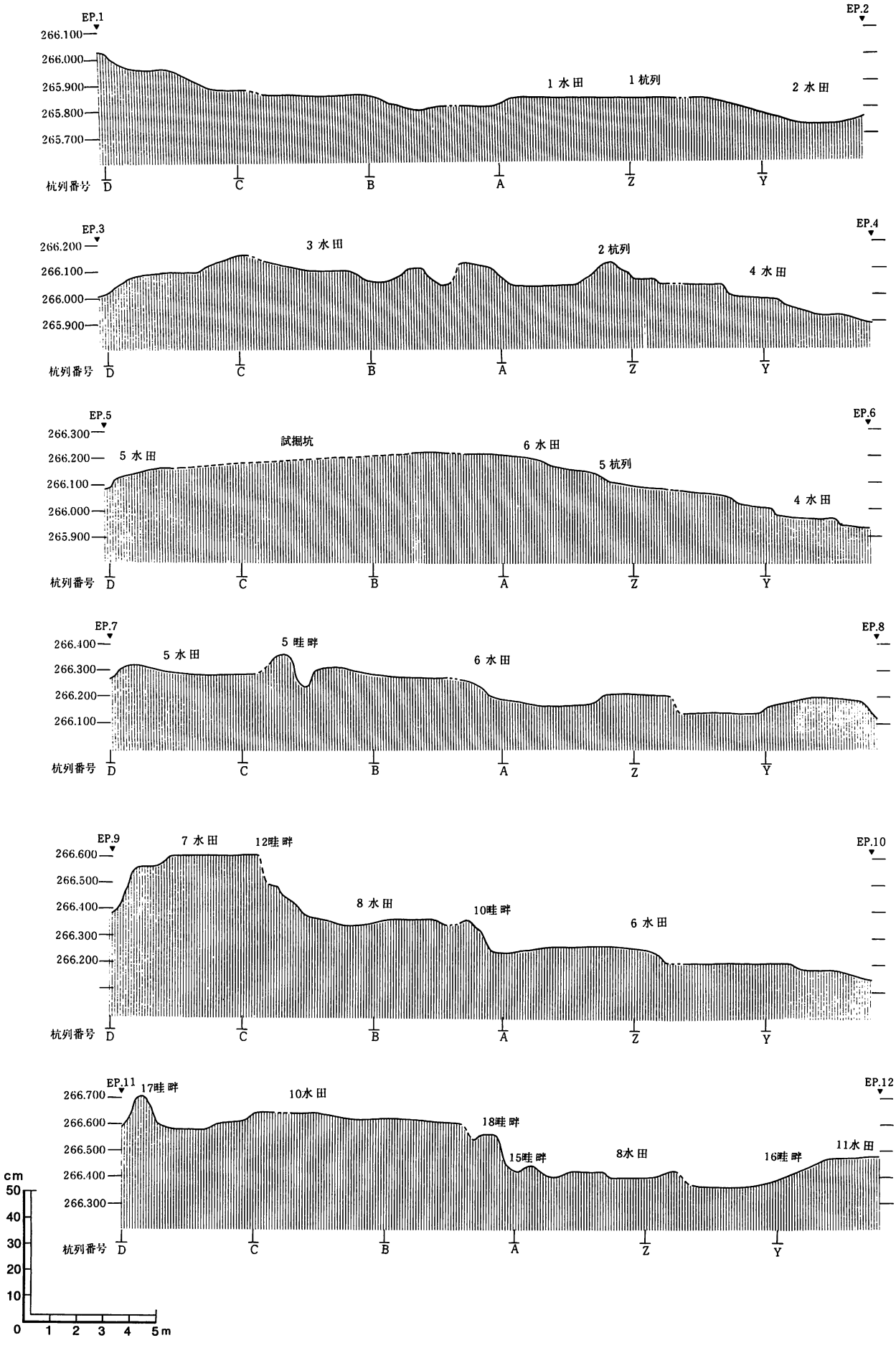




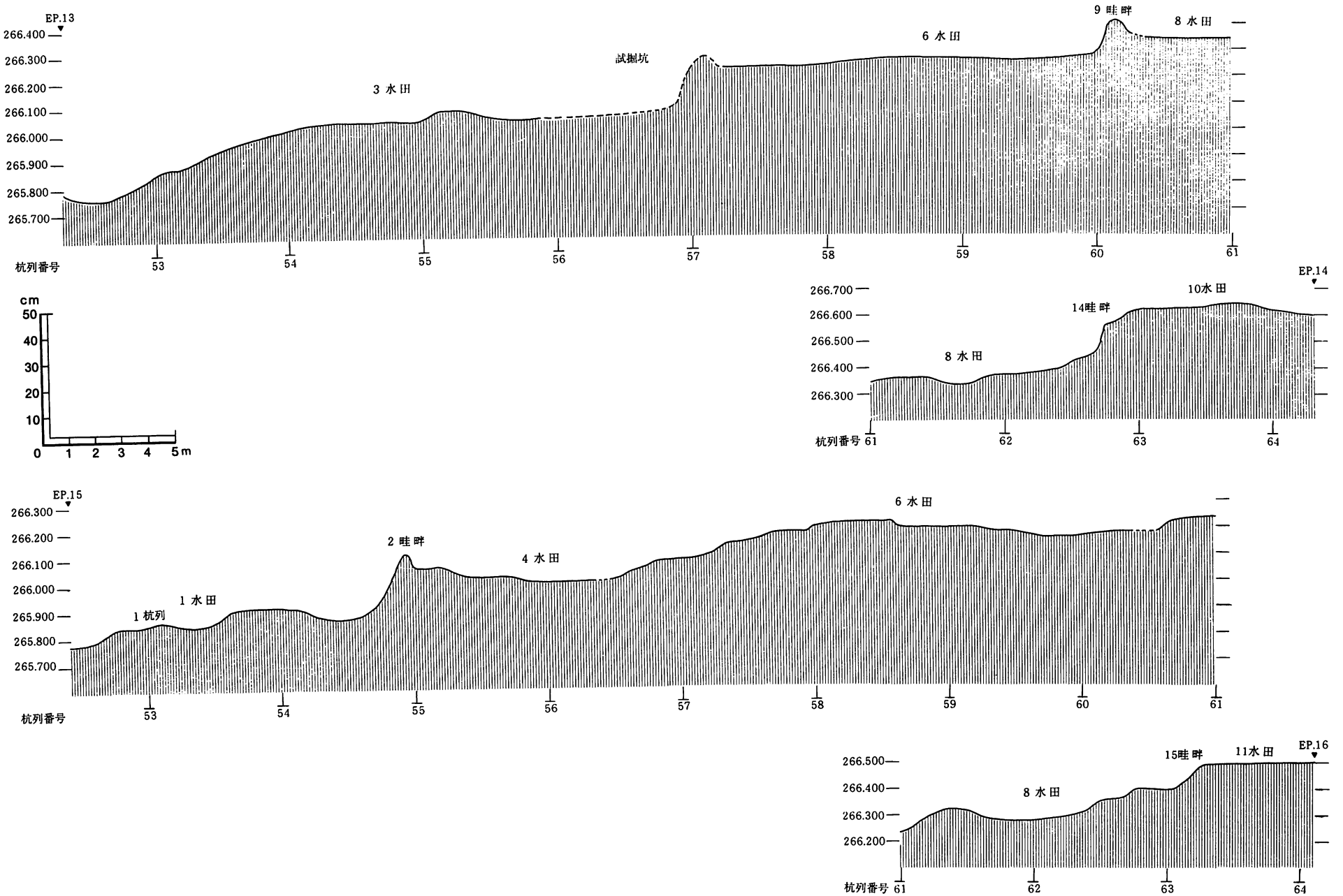
層名	粒径区分	色調	特色
1			耕作土
2	砂礫	明褐灰7.5YR7/2	
3	粗砂	黄2.5Y6/1	
4	細砂	灰N6/1	
5	細砂＋シルト	灰黄褐10YR6/2＋褐灰10YR4/1	6層水田の耕起層
6	粘土	黒褐10YR3/1	上層水田面
7	砂質シルト	褐灰10YR5/1	
8a	粘土	黒7.5YR2/1	下層水田面、灰細砂を混入
8b	シルト＋粘土	褐灰10YR6/1＋黒7.5YR2/1	植物遺体
9	粗砂	暗褐2.5Y5/2	
10	中砂と細砂の互層	灰N6/1	
11	礫	黄褐2.5Y5/4	
12a	シルト	灰黄褐10YR5/2	
12b	細砂	灰N6/1	
13	中砂	灰N6/1	
14	細砂	褐灰10YR6/1	
15	中砂	褐灰10YR6/1	
16a	シルト質細砂	褐灰10YR5/1	
16b	細砂	黄灰2.5YR6/1	
17	シルト質細砂	褐灰10YR5/1	
18	細砂	灰N6/1	
19	中砂	褐灰7.5YR5/1	
20	粘土	黒褐7.5YR3/1	古墳時代 S字甕出土
21	礫	黄褐2.5YR5/4	
22	シルト	灰褐7.5YR4/2	植物遺体
23	中砂	灰	
24	細砂	灰N6/1	
25	砂質シルト	褐灰10YR6/1	近世水田面
25b	シルト質細砂		
26	粗砂	灰N6/1	

層名	粒径区分	色調	特色
27	シルト	褐灰7.5YR5/1	
28	粗砂	灰黄2.5Y6/2	
29	細砂	灰N6/1	
30	シルト質細砂	褐灰7.5YR6/1	
31	中砂	灰N/1 6/1	
32	粗砂	灰N6/1	
33	シルト	褐灰7.5YR4.5/1	
34	砂礫	灰	
35	細砂	灰N6/1	
36	シルト質細砂	褐灰7.5YR5/1	
37	細砂	灰N6/1	
38	シルト	黒褐7.5YR3/1	
39a	シルト	褐灰7.5YR4/1	
39b	細砂	褐灰7.5YR6/1	
40	細砂	褐灰10YR6/1	
41	シルト質細砂	褐灰7.5YR4/1	
42	砂礫	灰黄2.5Y6/2	
43	シルト質細砂	褐灰7.5YR5/1	植物遺体
44	シルト	褐灰7.5YR6/1	
45	粗砂	灰N6/1	
46	シルト質細砂	褐灰7.5YR4/1	4区1溝覆土
47	シルト質細砂	褐灰7.5YR5/1	
48	砂礫		
49	シルト＋小礫	黒褐	梯子出土
50	礫	灰	
51	粗砂	灰	
52	粘土	黒7.5YR2/1	弥生時代 植物遺体

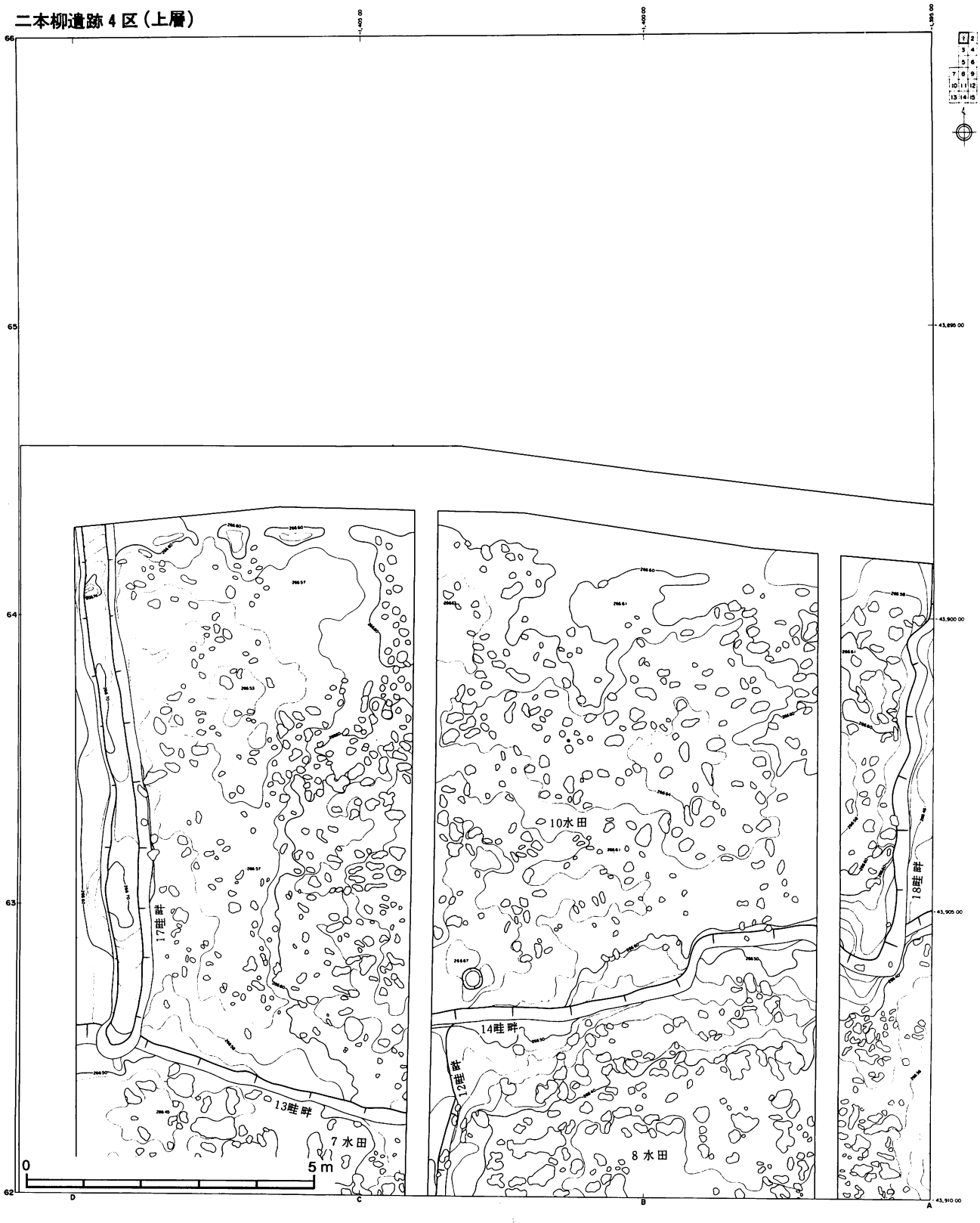
第125図　4区セクション図（2）



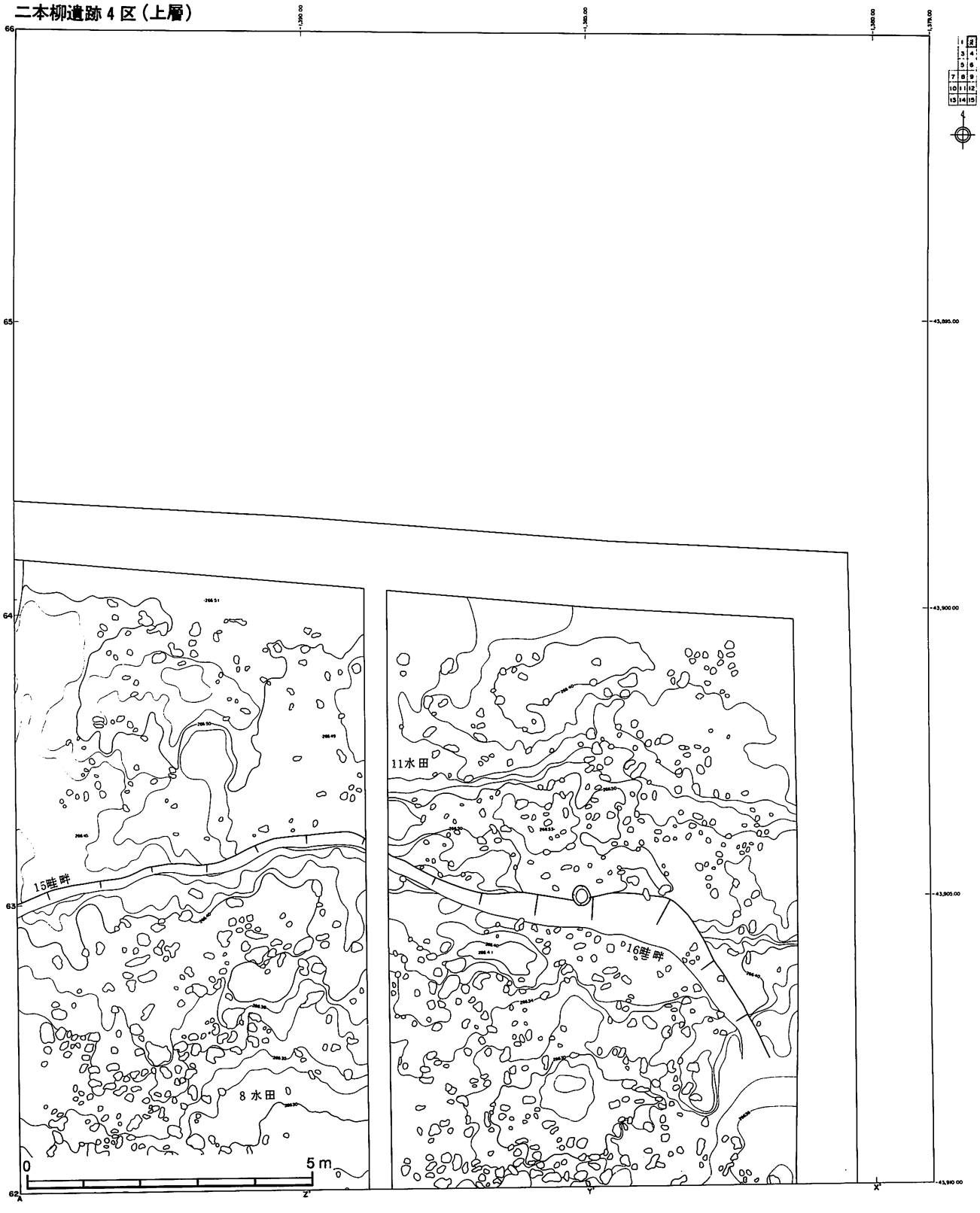
第126図　4区上層水田面エレベーション図（1）



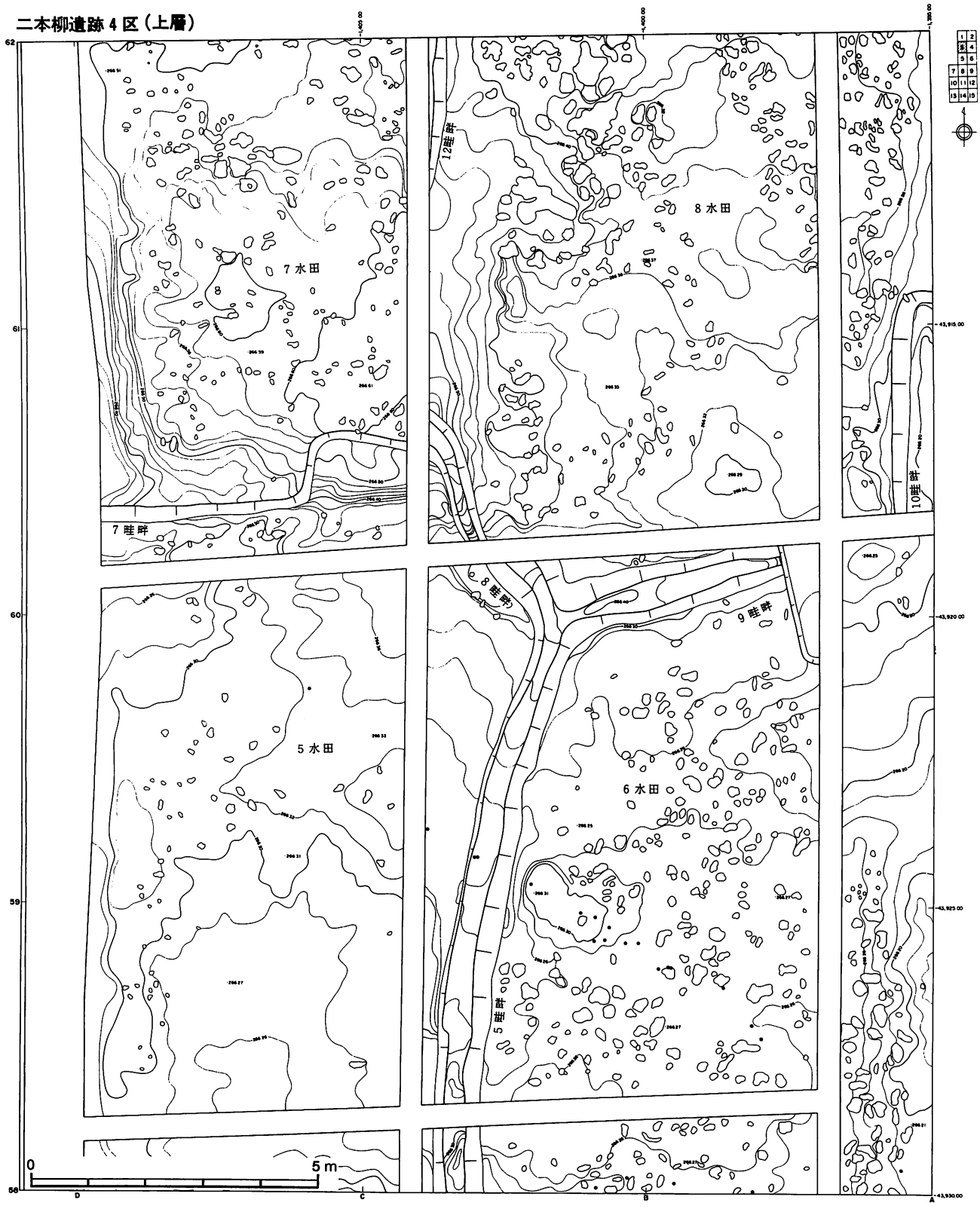
第127図　4区上層水田面エレベーション図（2）



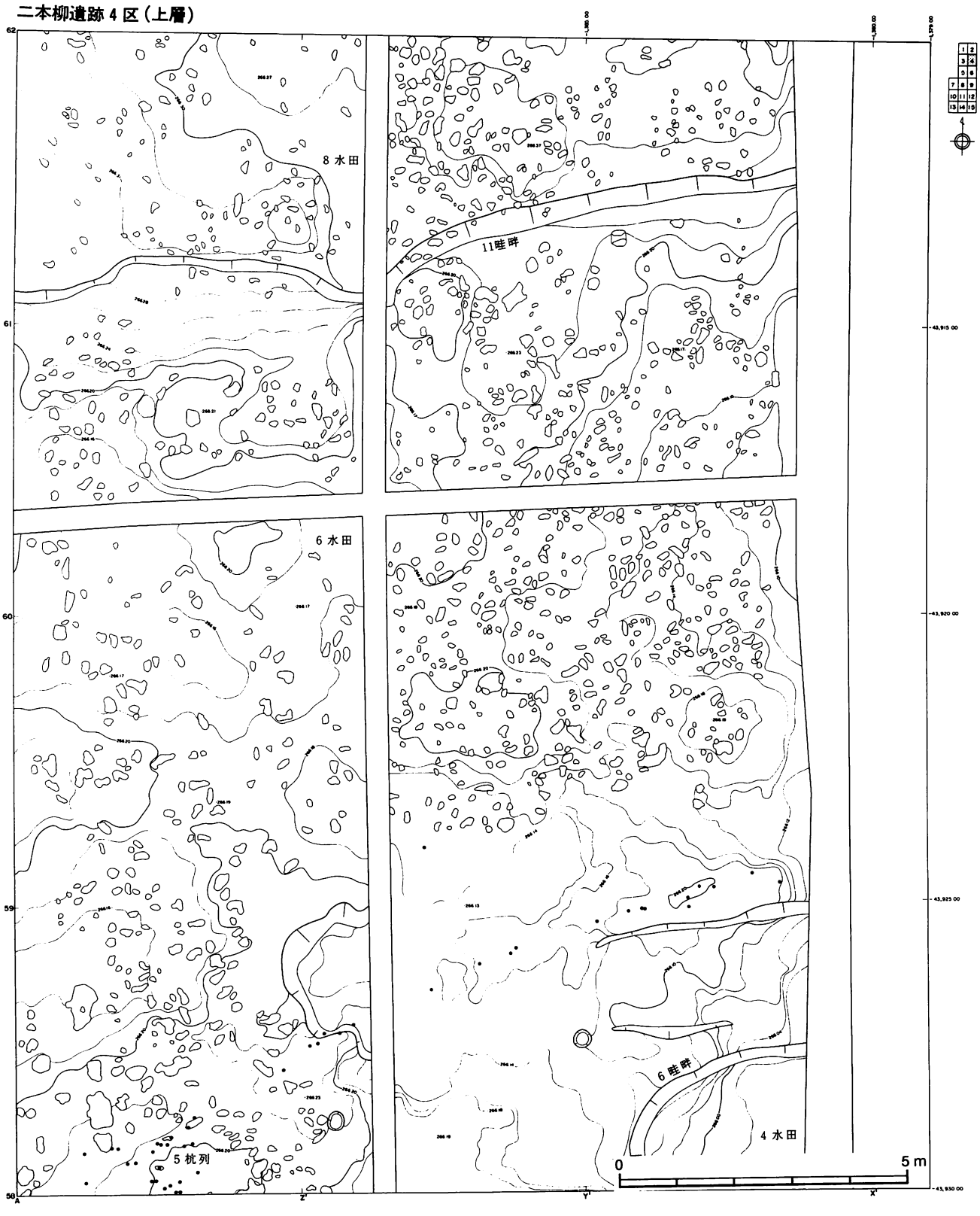
第128図　４区上層水田面詳細図（１）



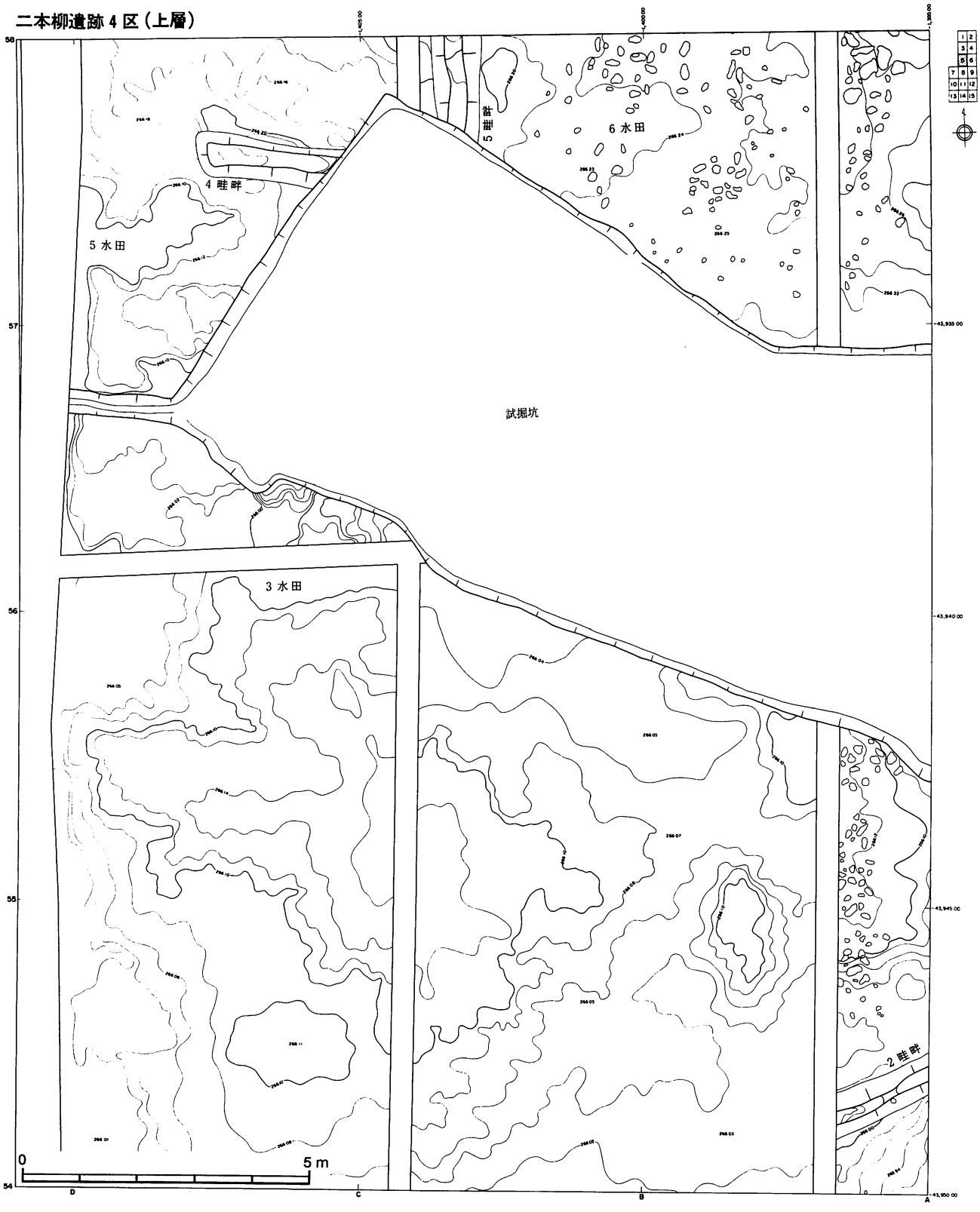
第129図　４区上層水田面詳細図（２）



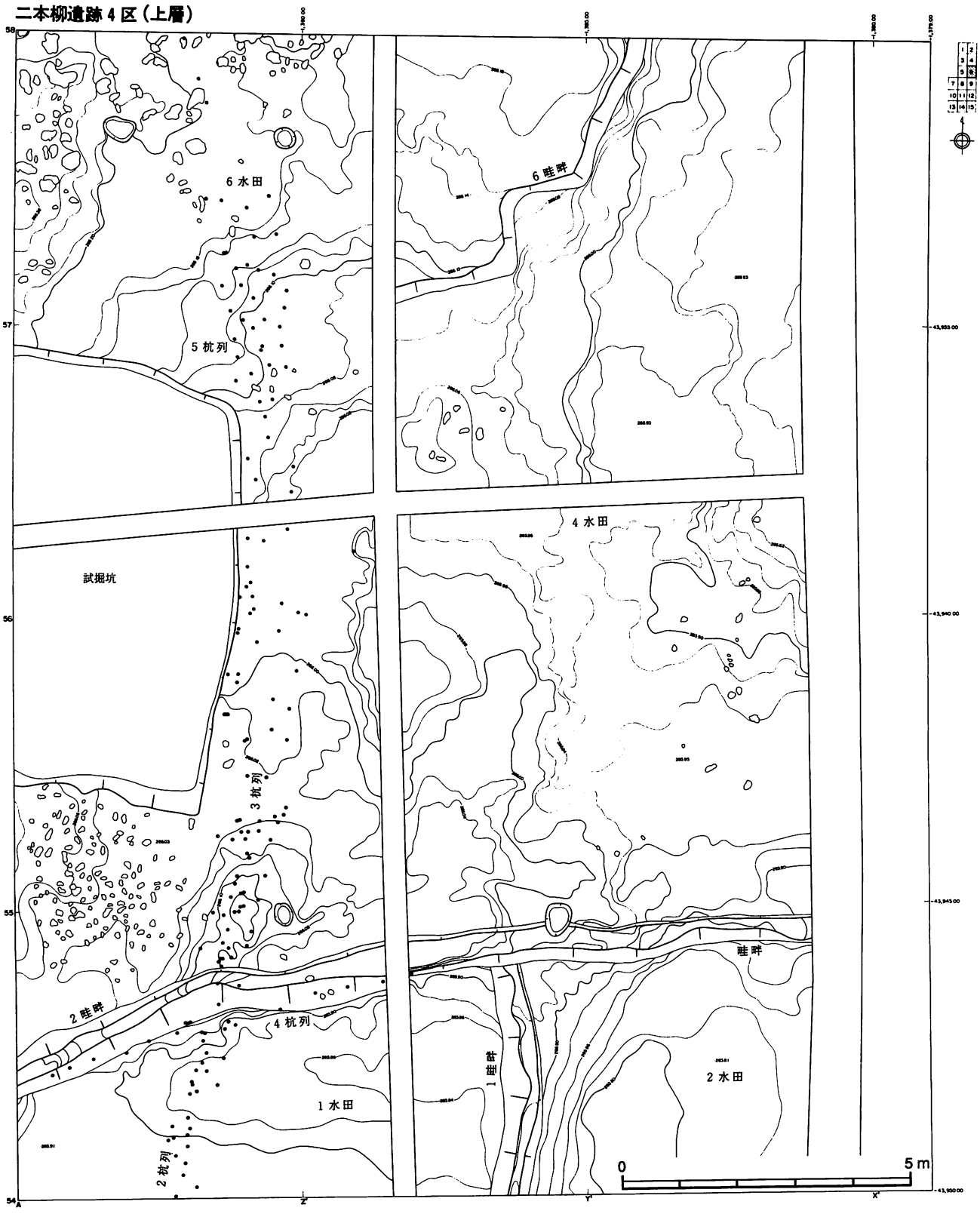
第130図　４区上層水田面詳細図（３）



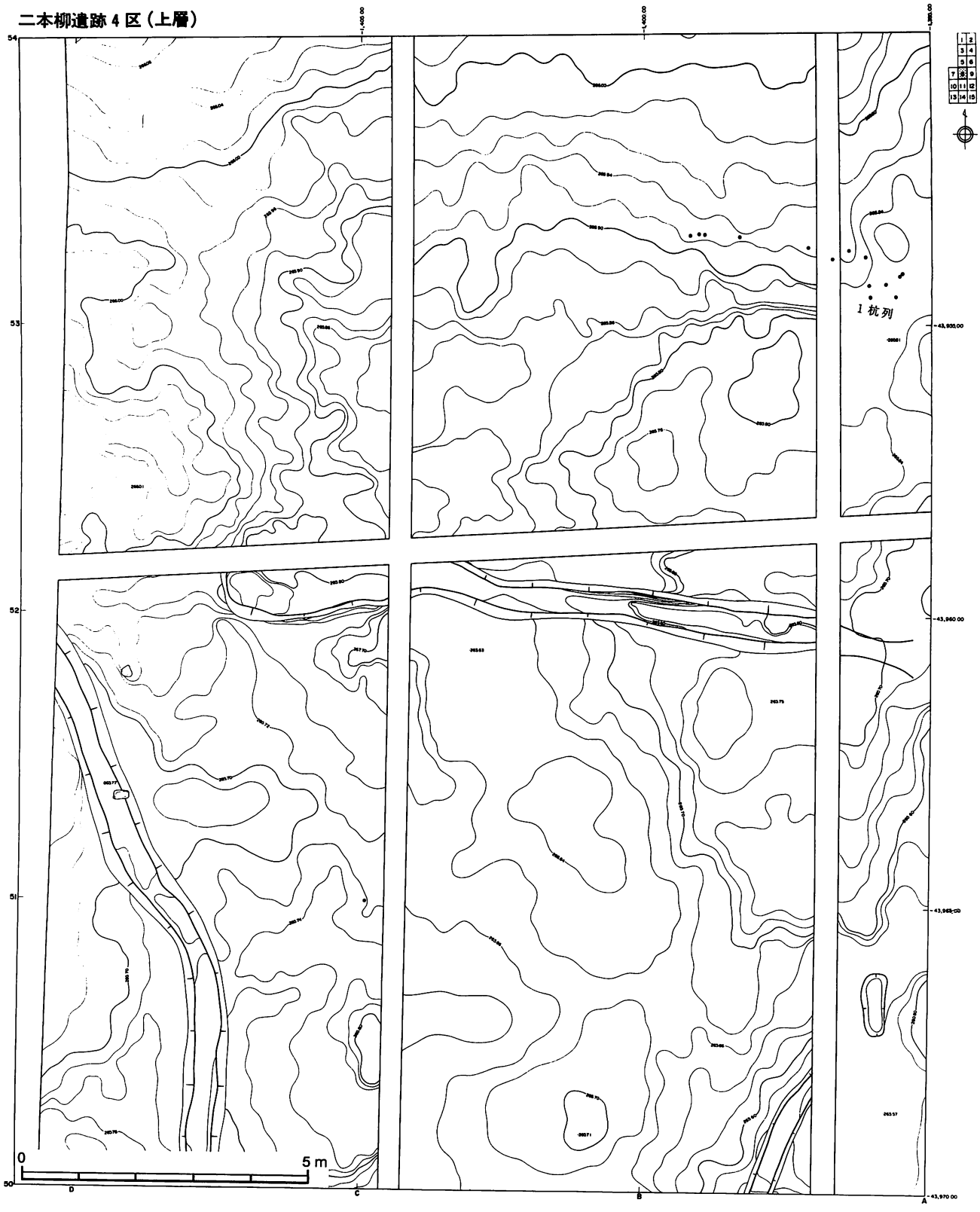
第131図　４区上層水田面詳細図（４）



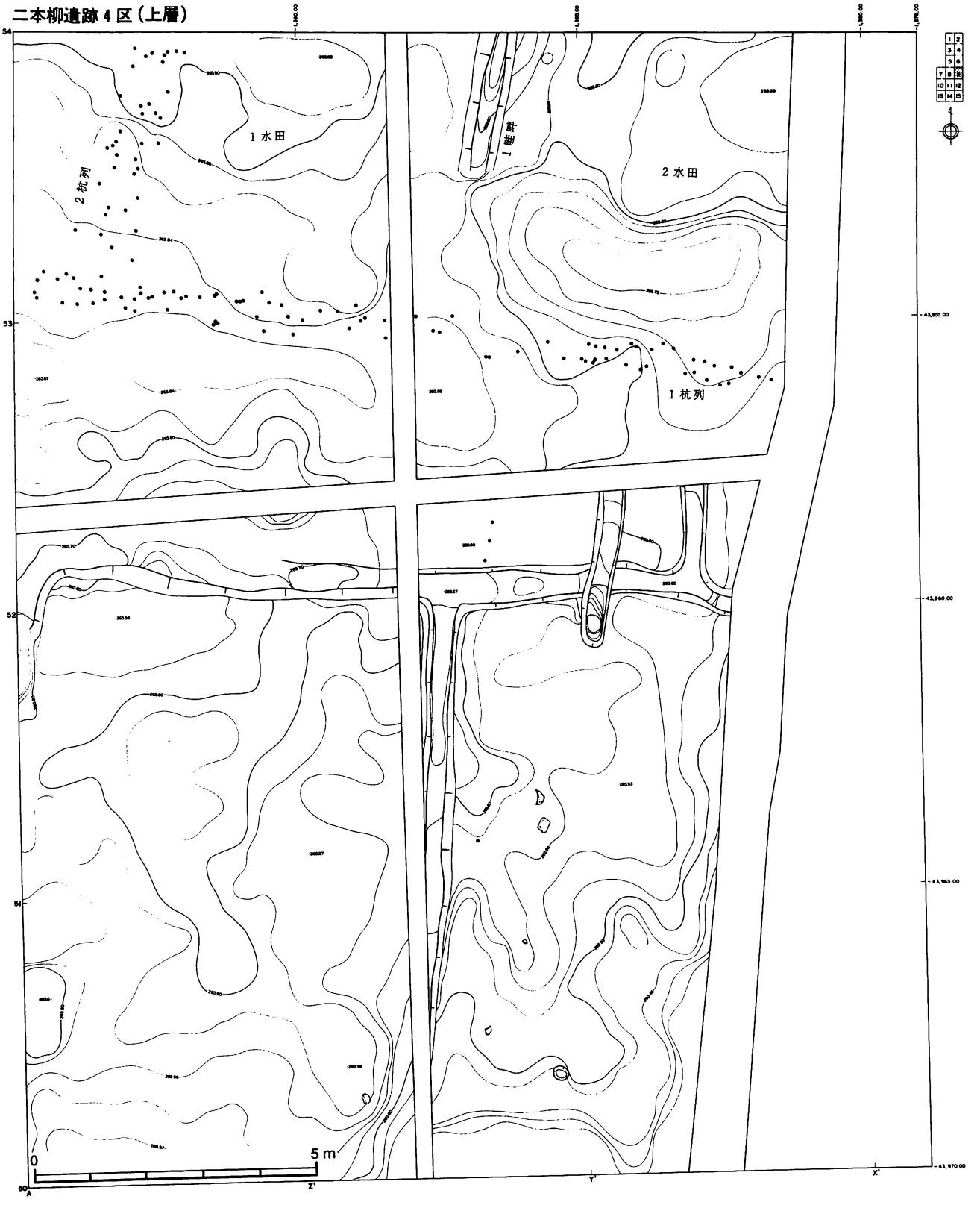
第132図　４区上層水田面詳細図（５）



第133図　４区上層水田面詳細図（６）

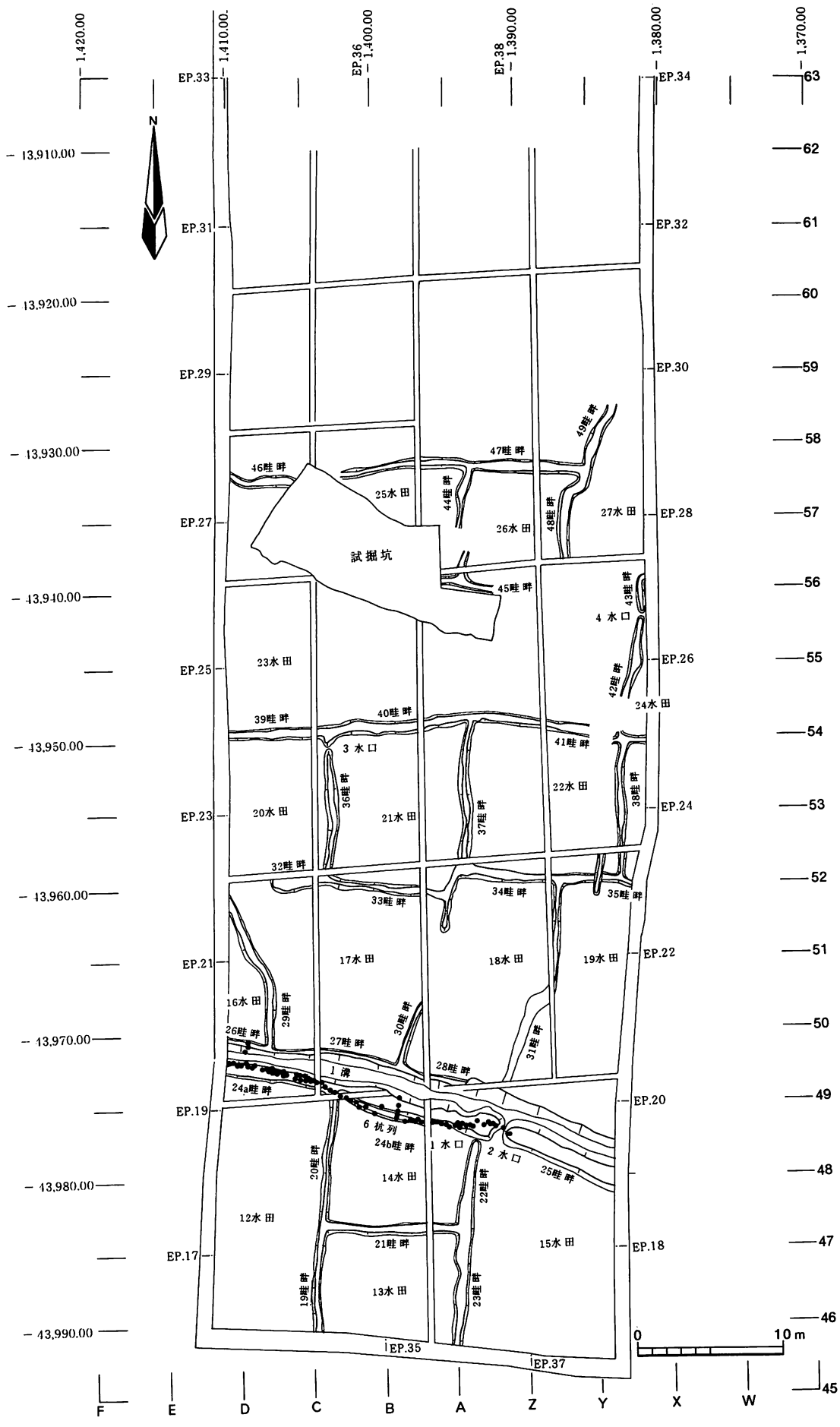


第134図　４区上層水田面詳細図（７）

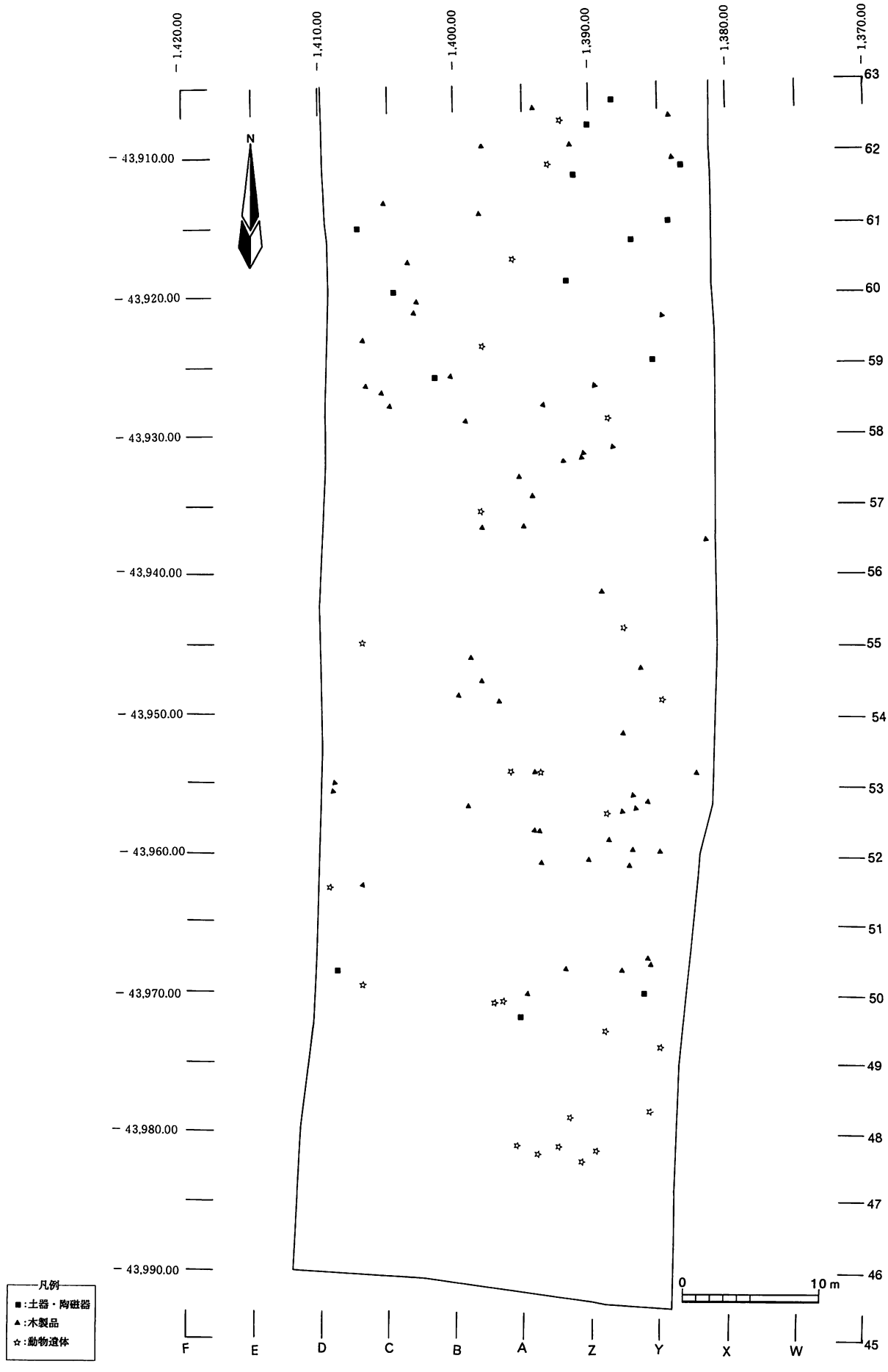


第135図　４区上層水田面詳細図（８）

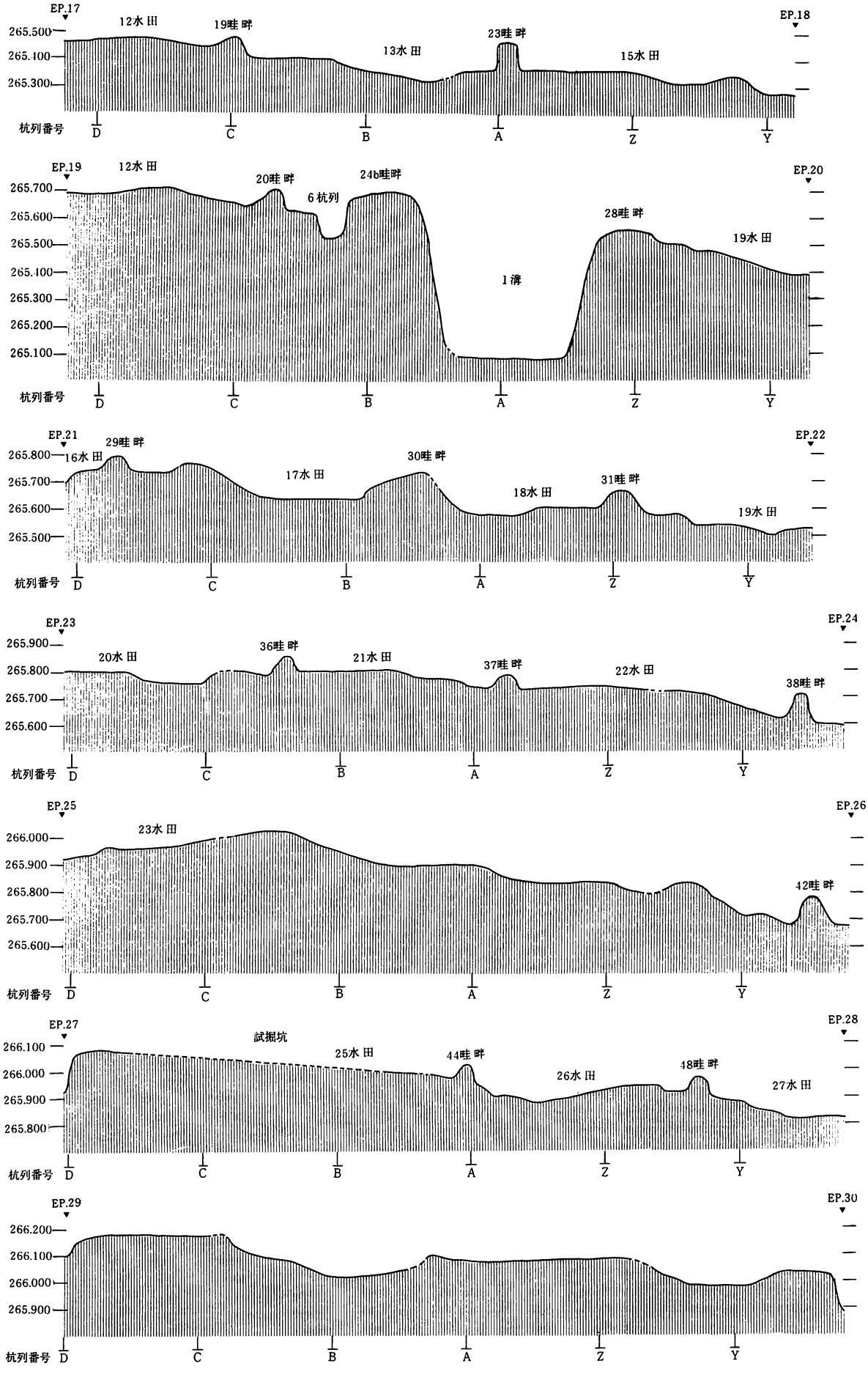
第136図　4区下層水田面等高線図（全体）



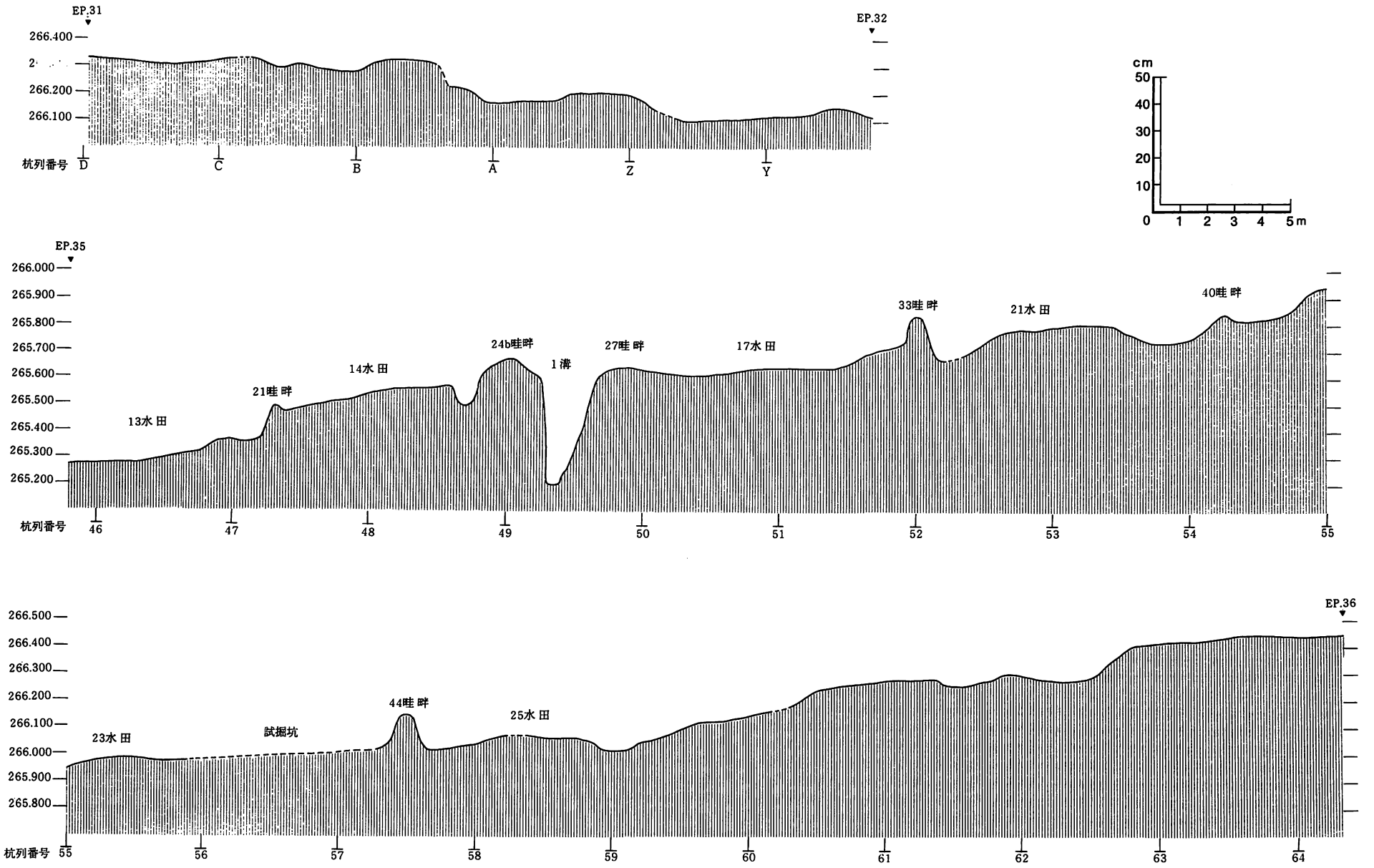
第137図　4区下層水田面



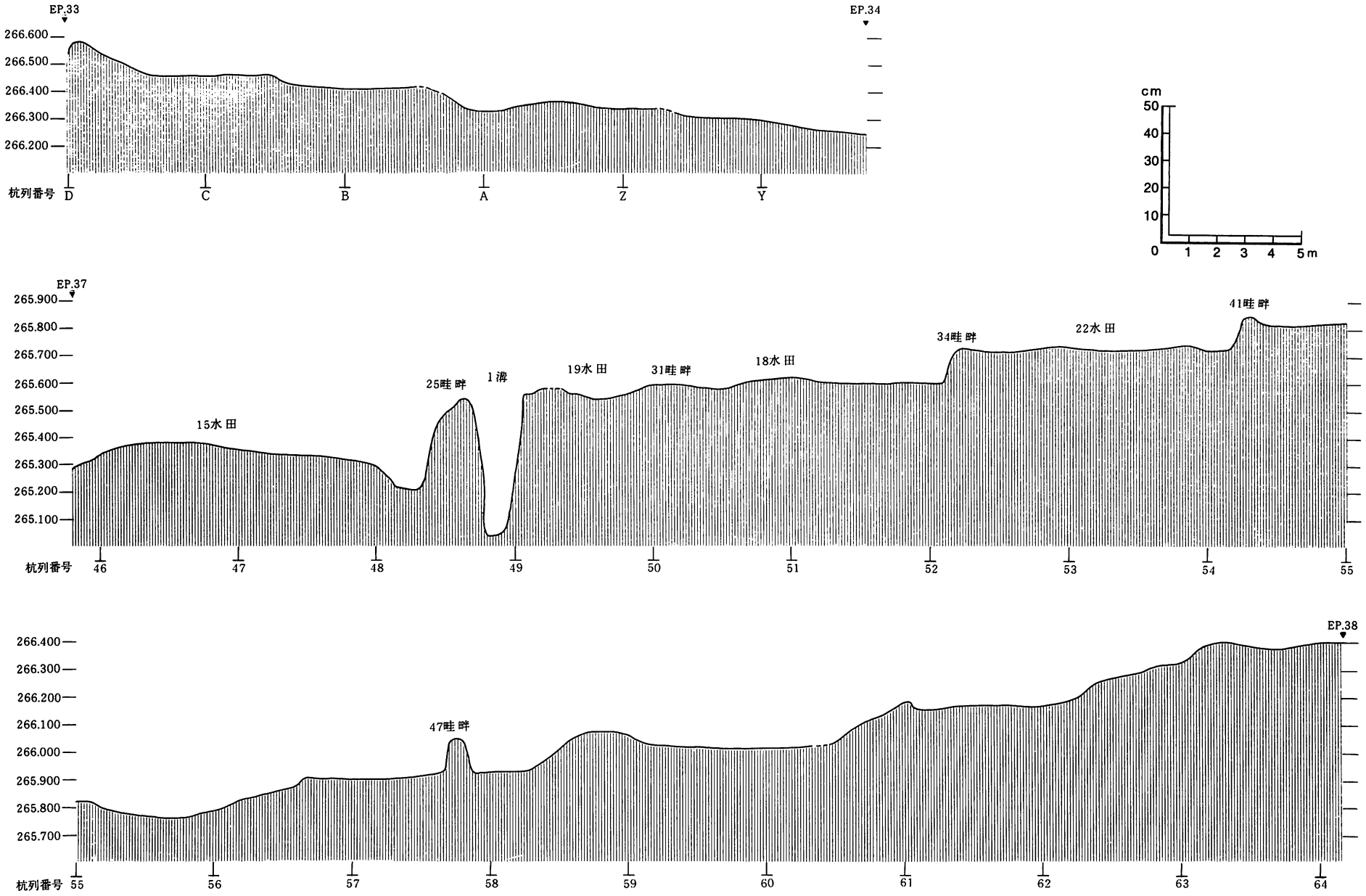
第138図　4区下層水田面遺物分布図



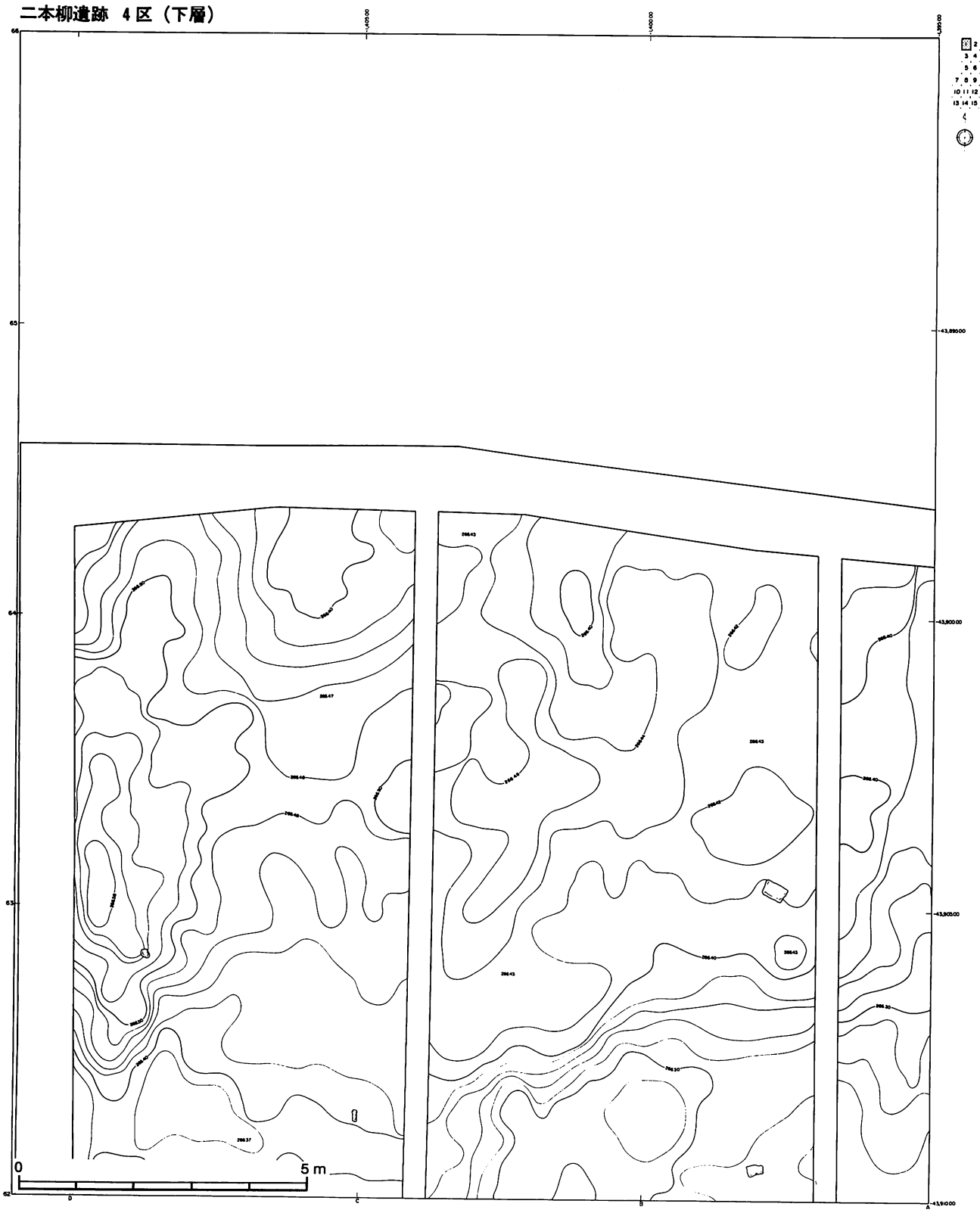
第139図　4区下層水田面エレベーション図（1）



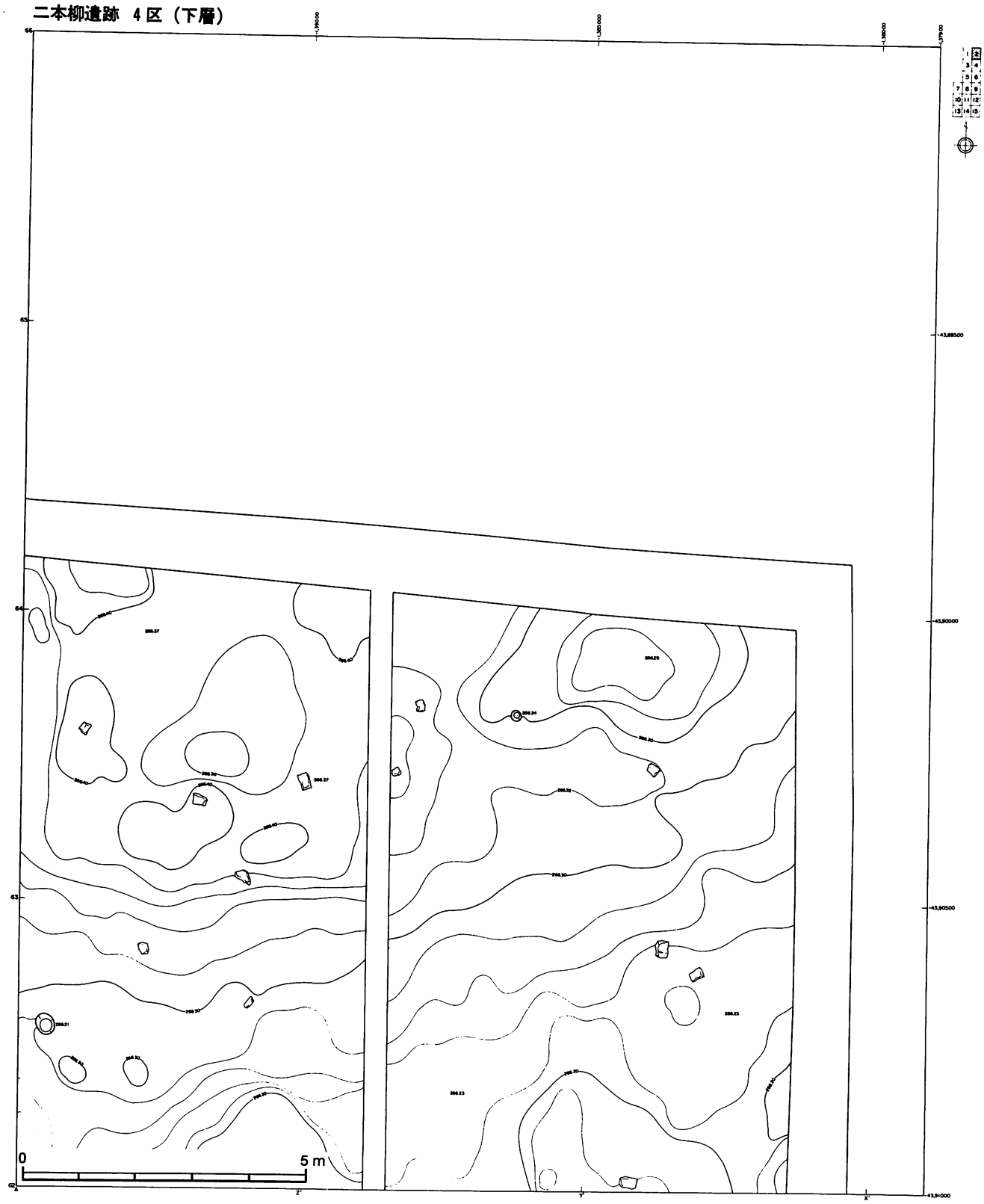
第140図　4区下層水田面エレベーション図（2）



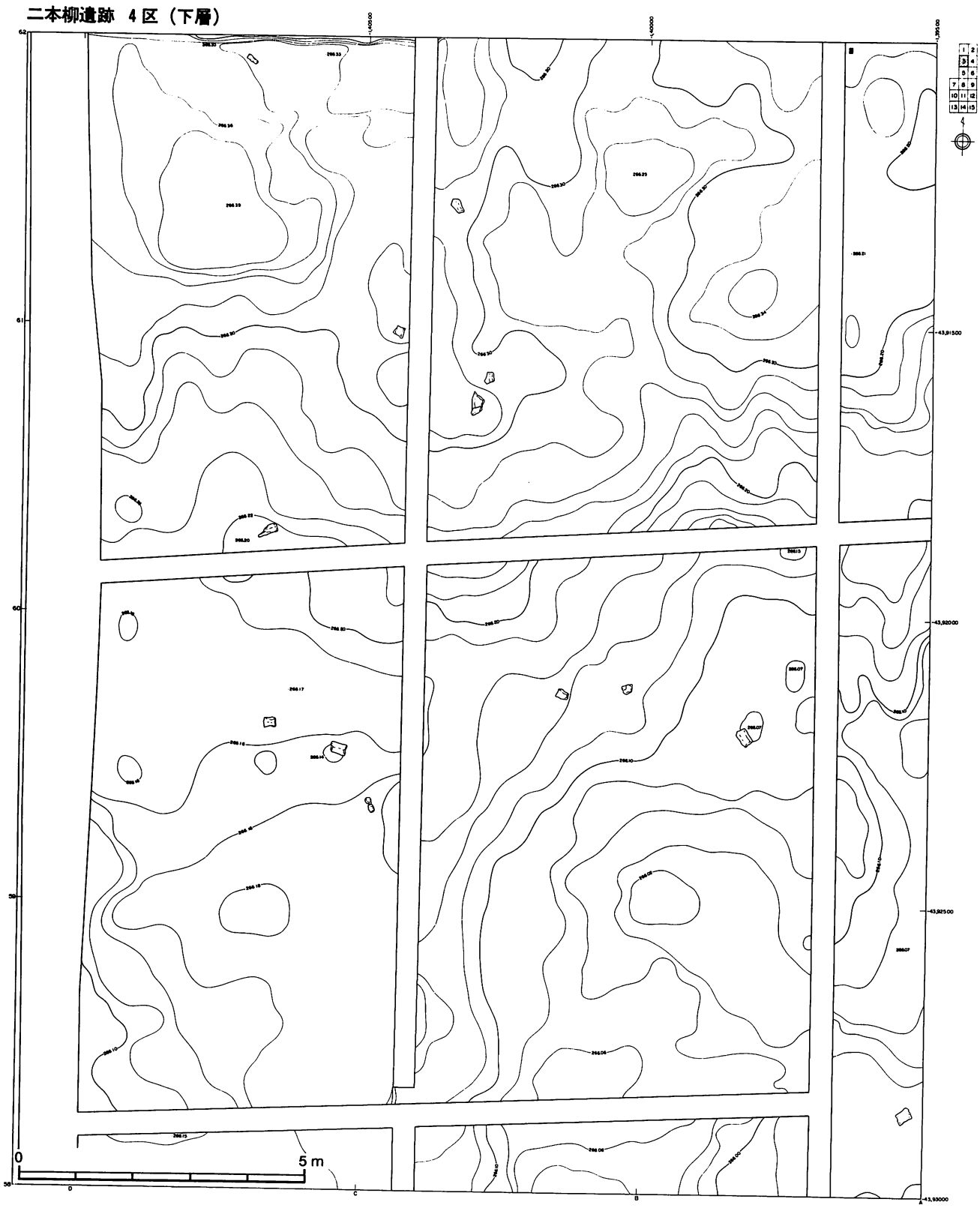
第141図　4区下層水田面エレベーション図（3）



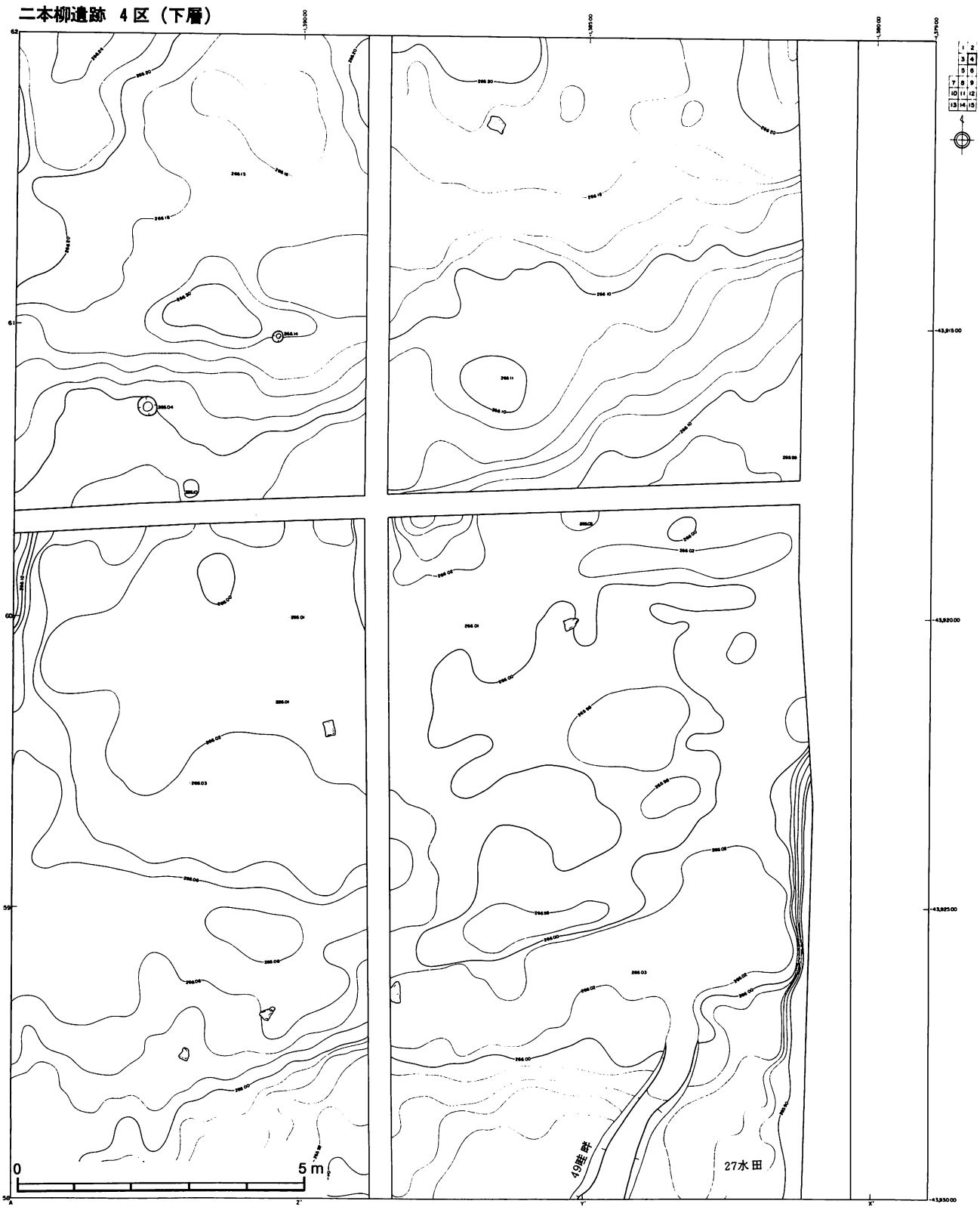
第142図　4区下層水田面詳細図（1）



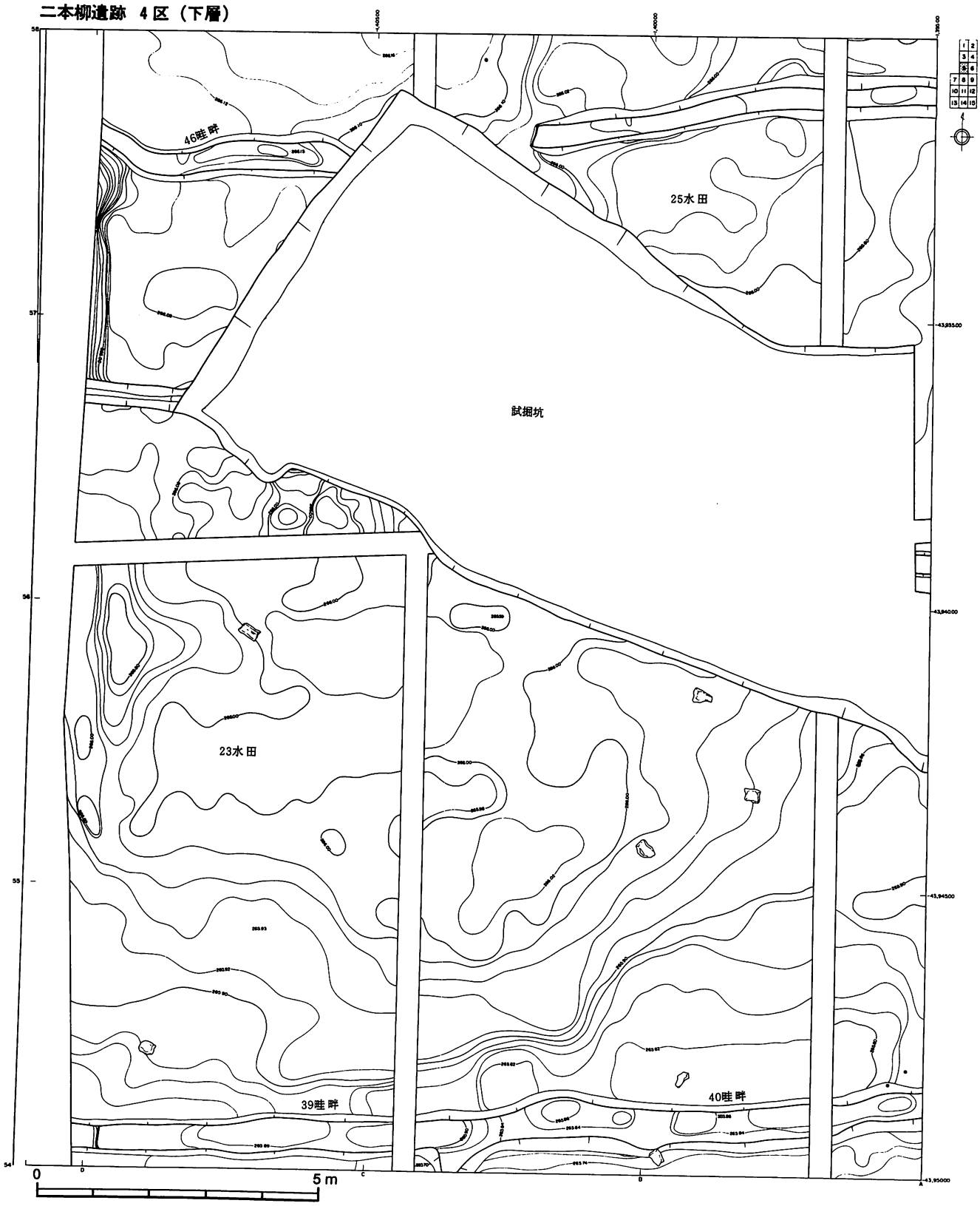
第143図　4区下層水田面詳細図（2）



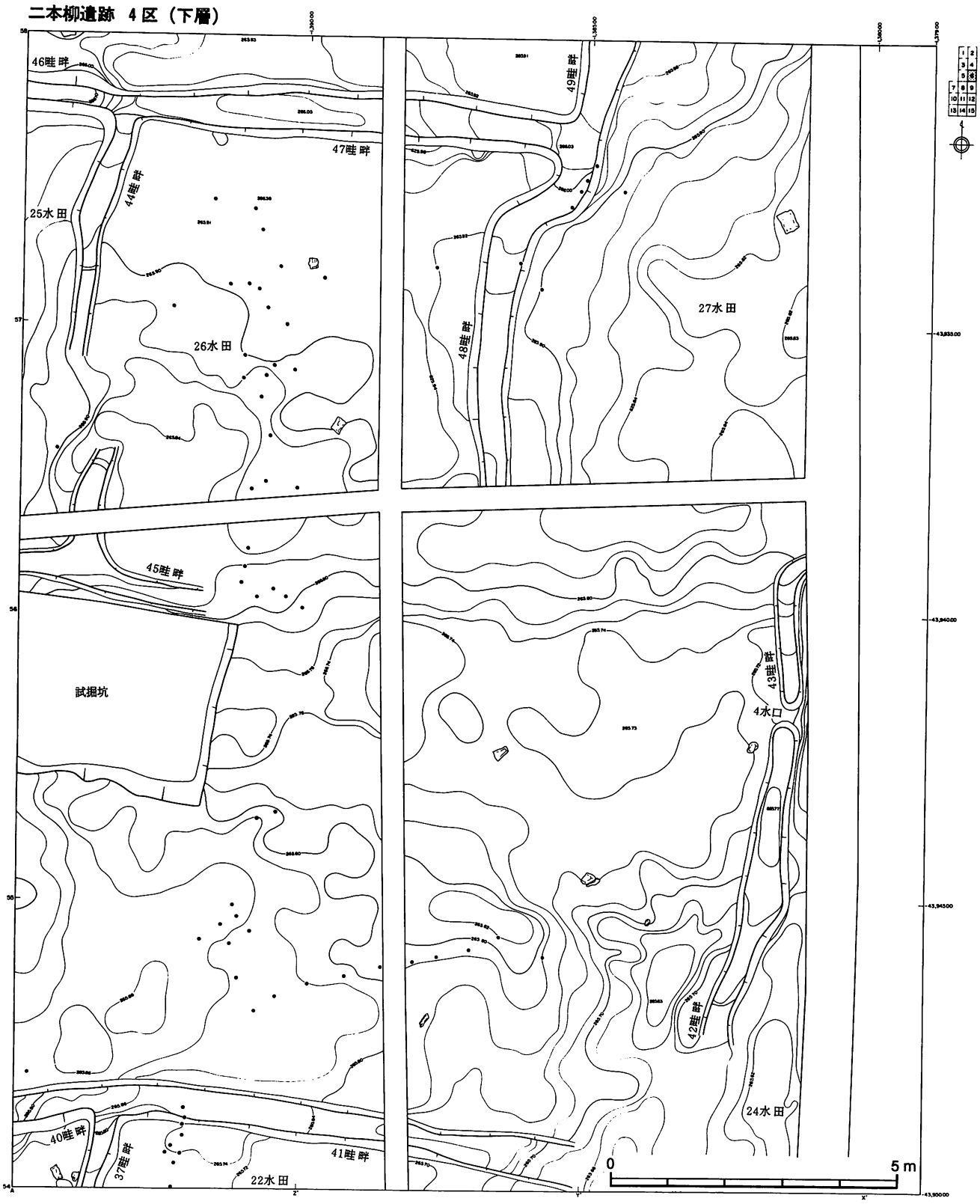
第144図　4区下層水田面詳細図（3）



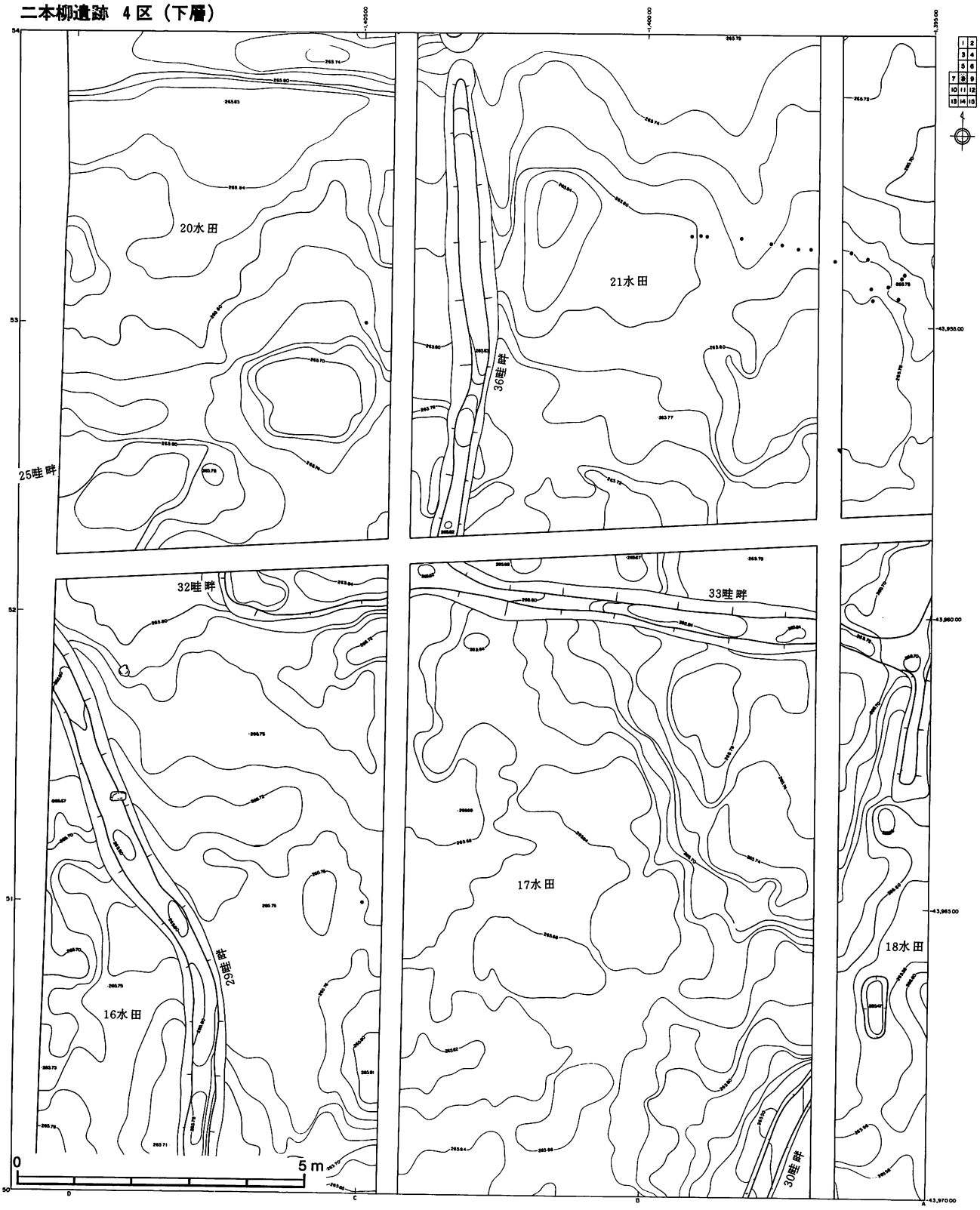
第145図　4区下層水田面詳細図（4）



第146図　4区下層水田面詳細図（5）

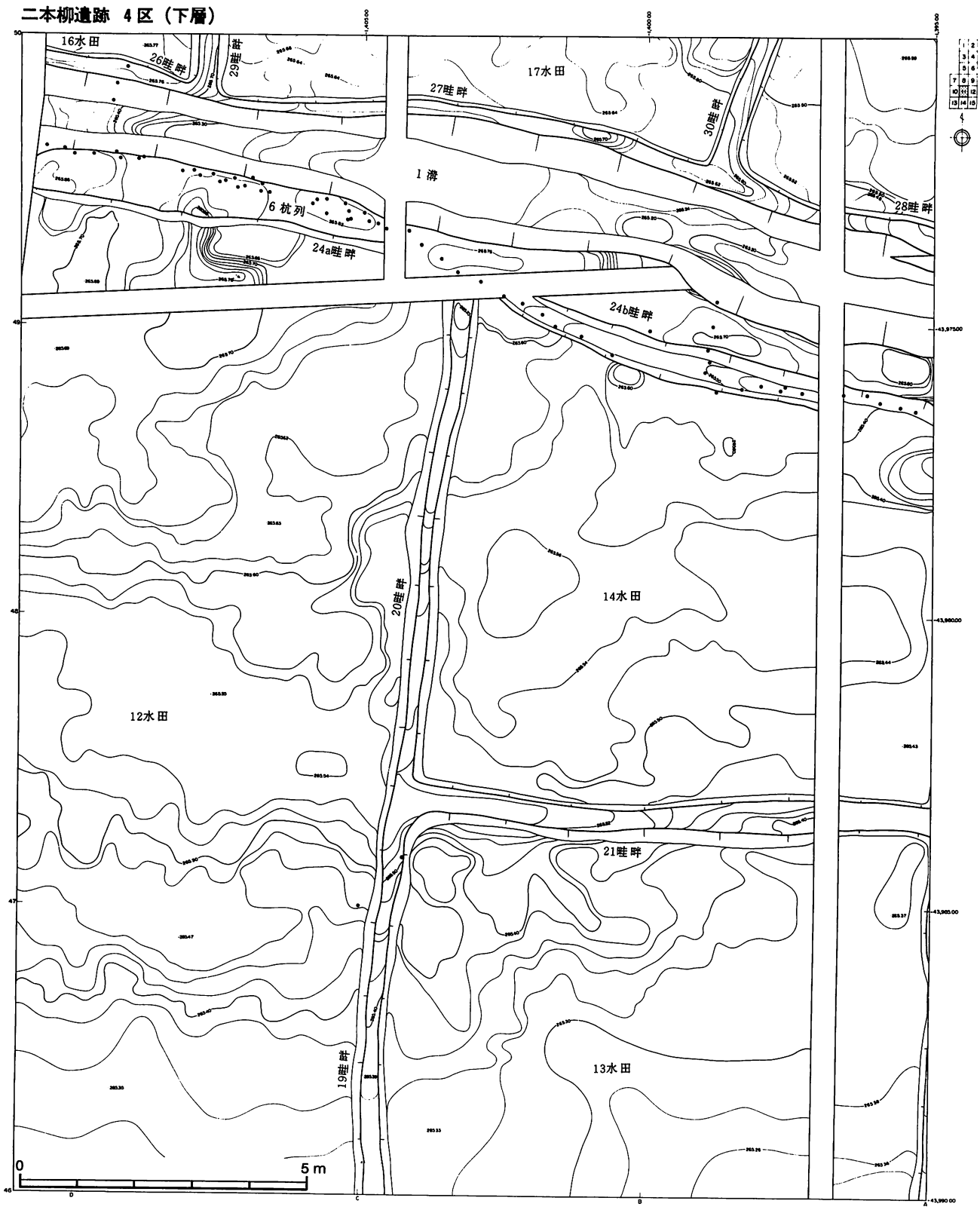


第147図　4区下層水田面詳細図（6）

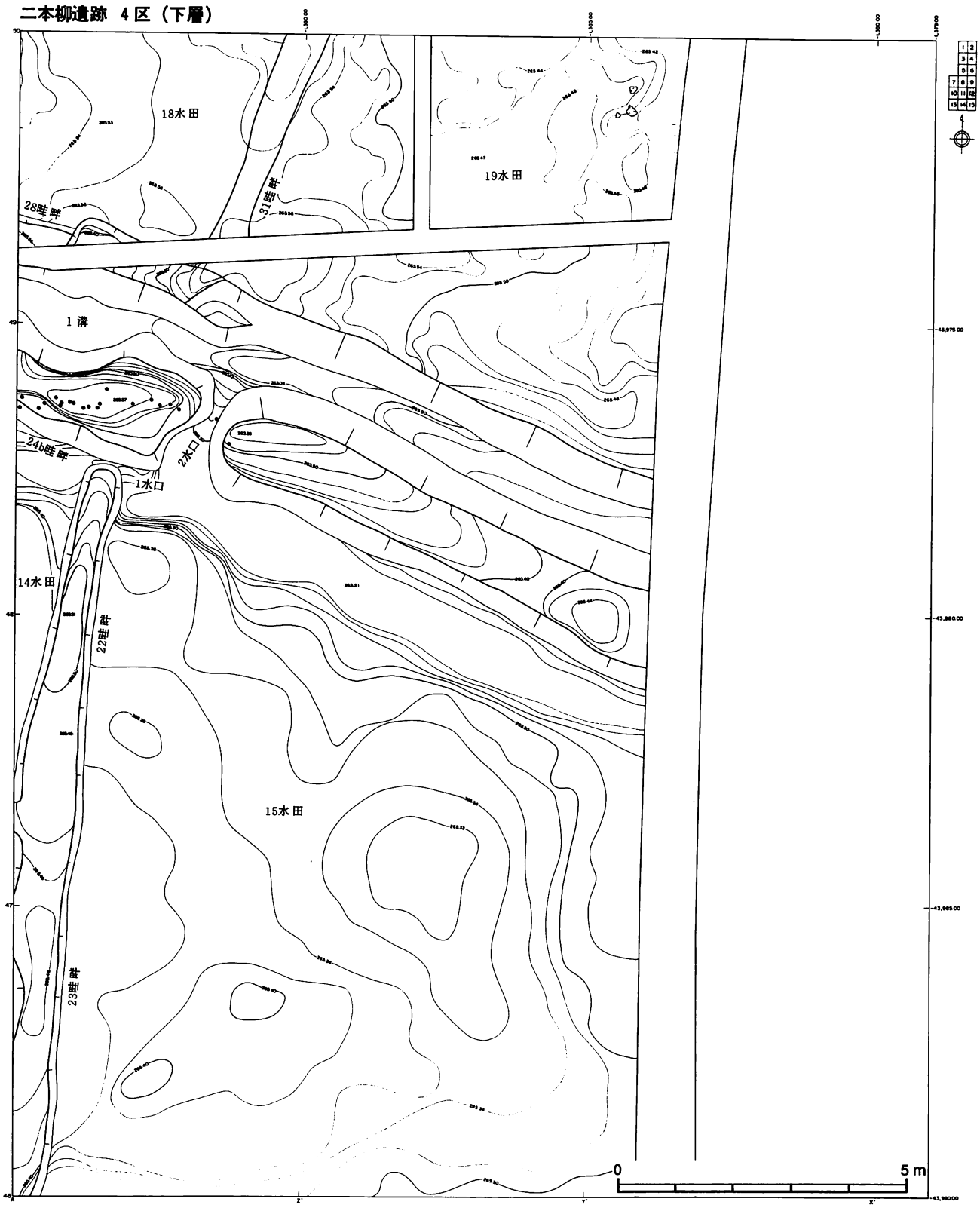


第148図　4区下層水田面詳細図（7）

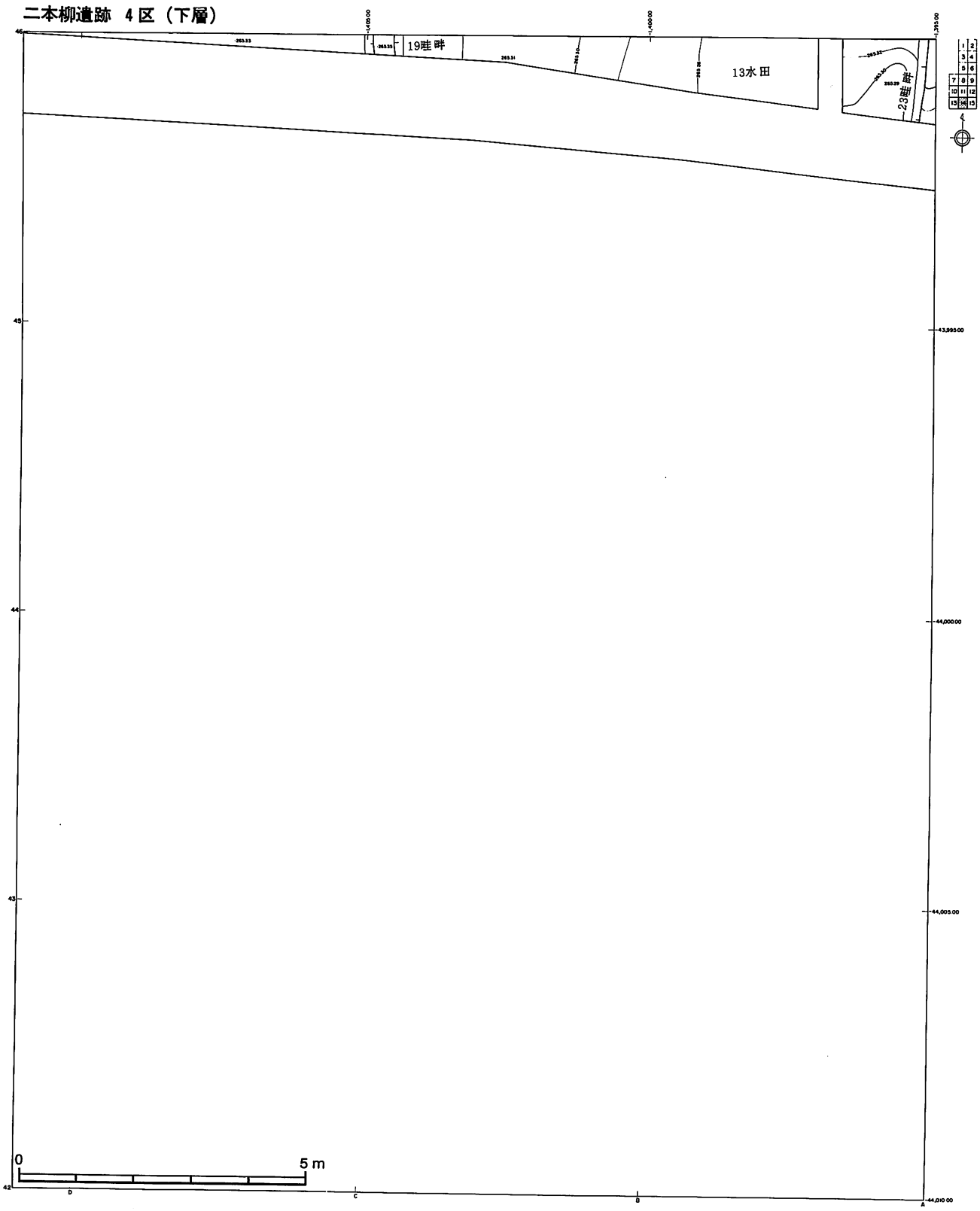
第149図　4区下層水田面詳細図（8）



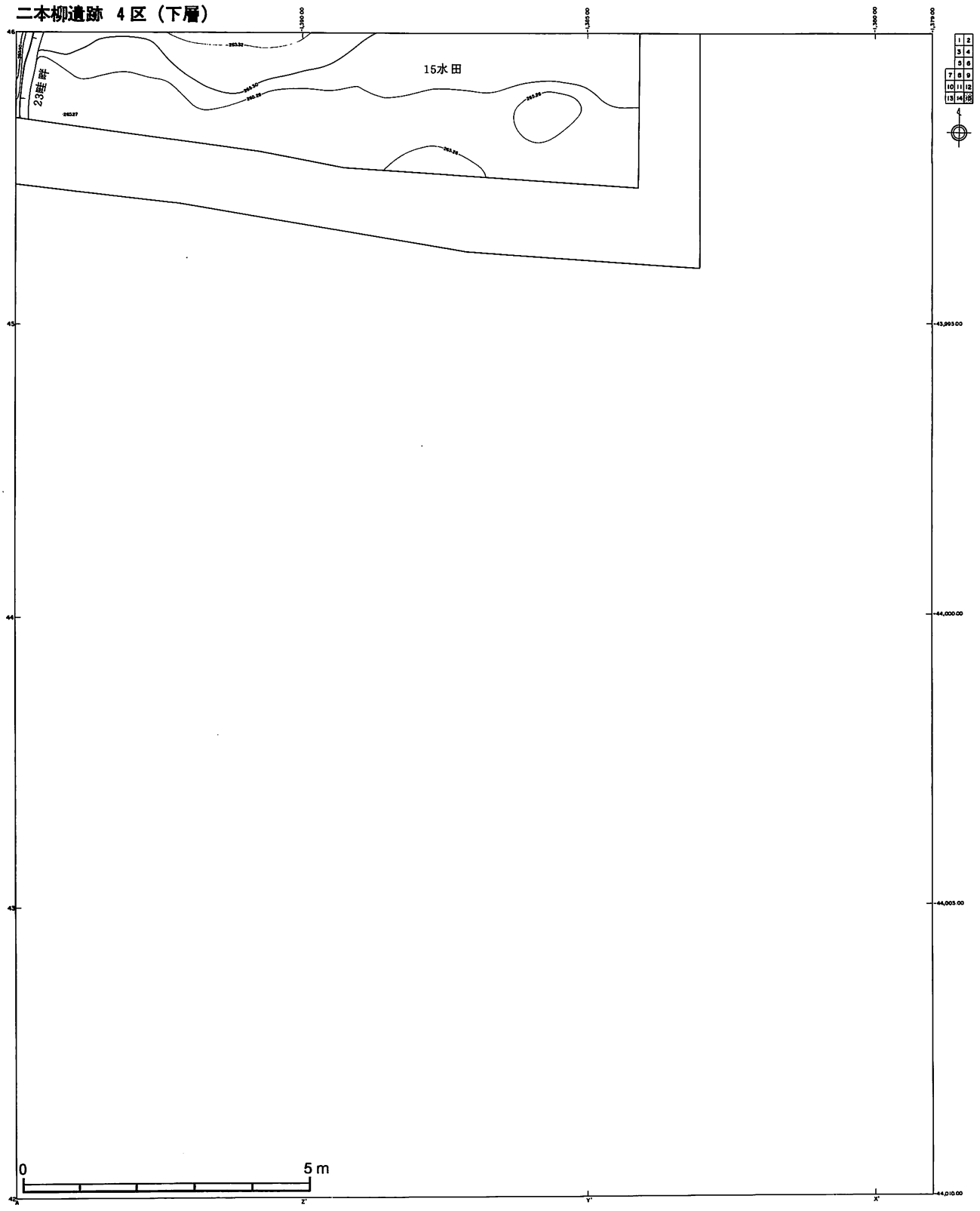
第150図　4区下層水田面詳細図（9）



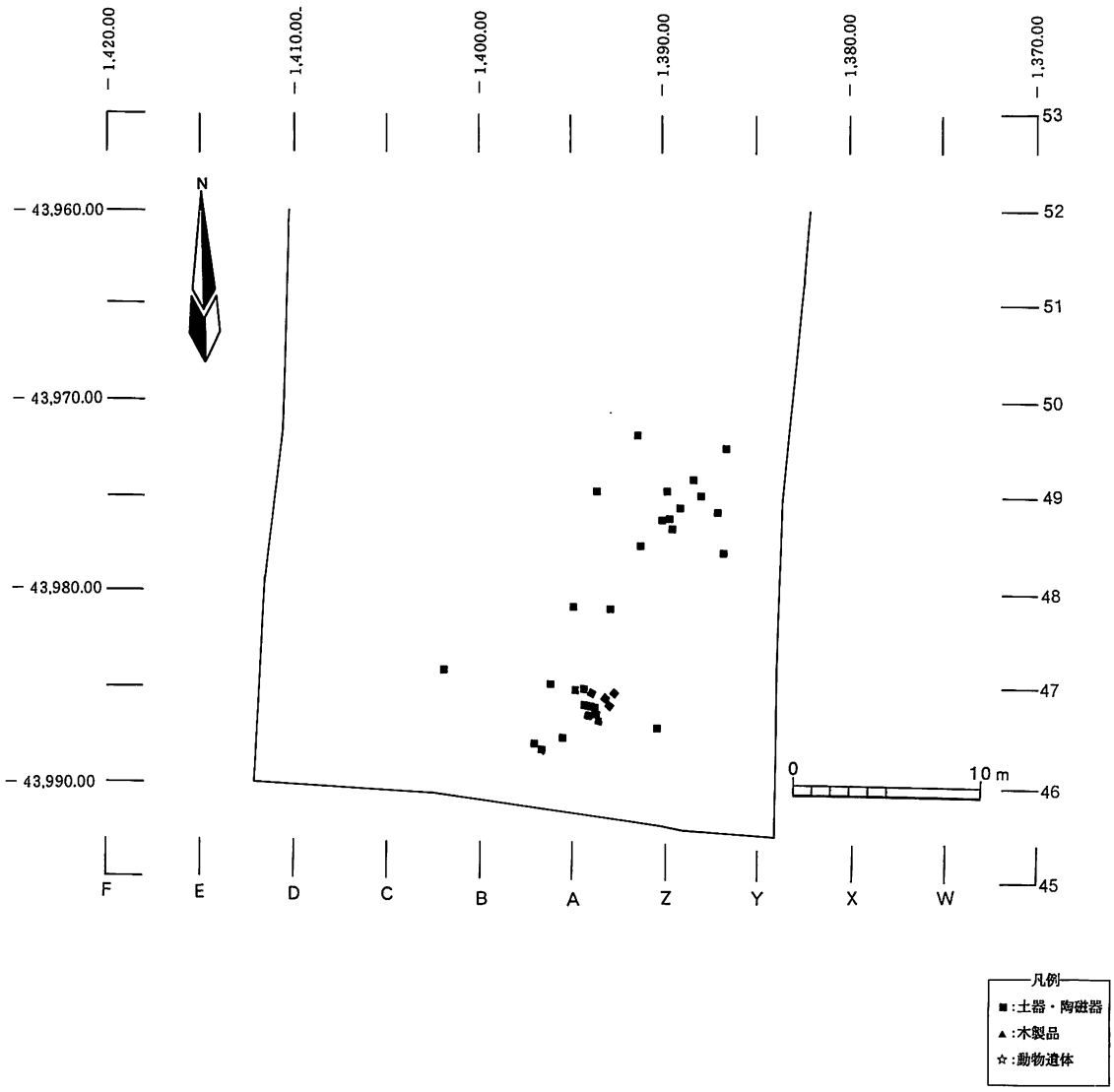
第151図　4区下層水田面詳細図（10）



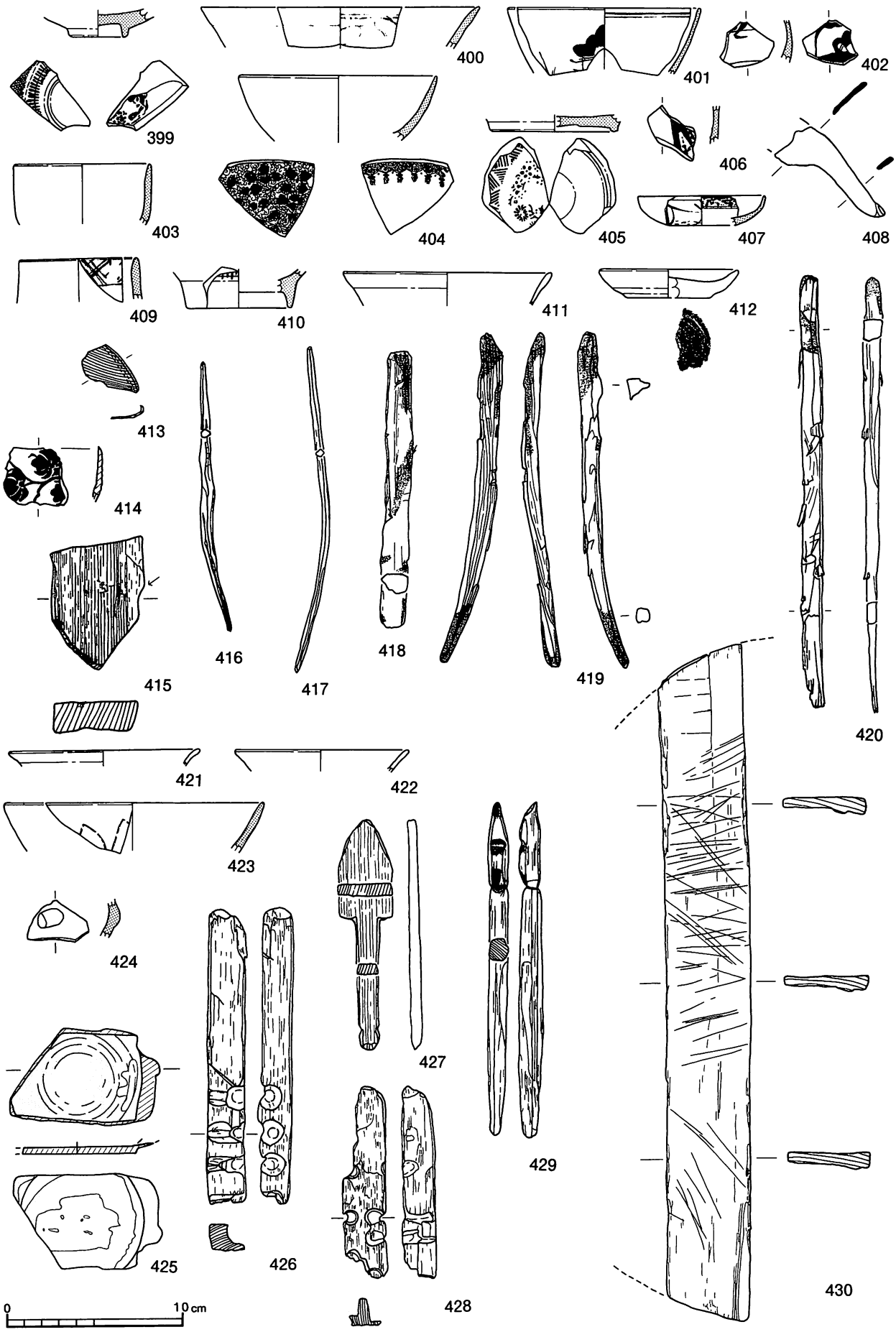
第152図　4区下層水田面詳細図（11）



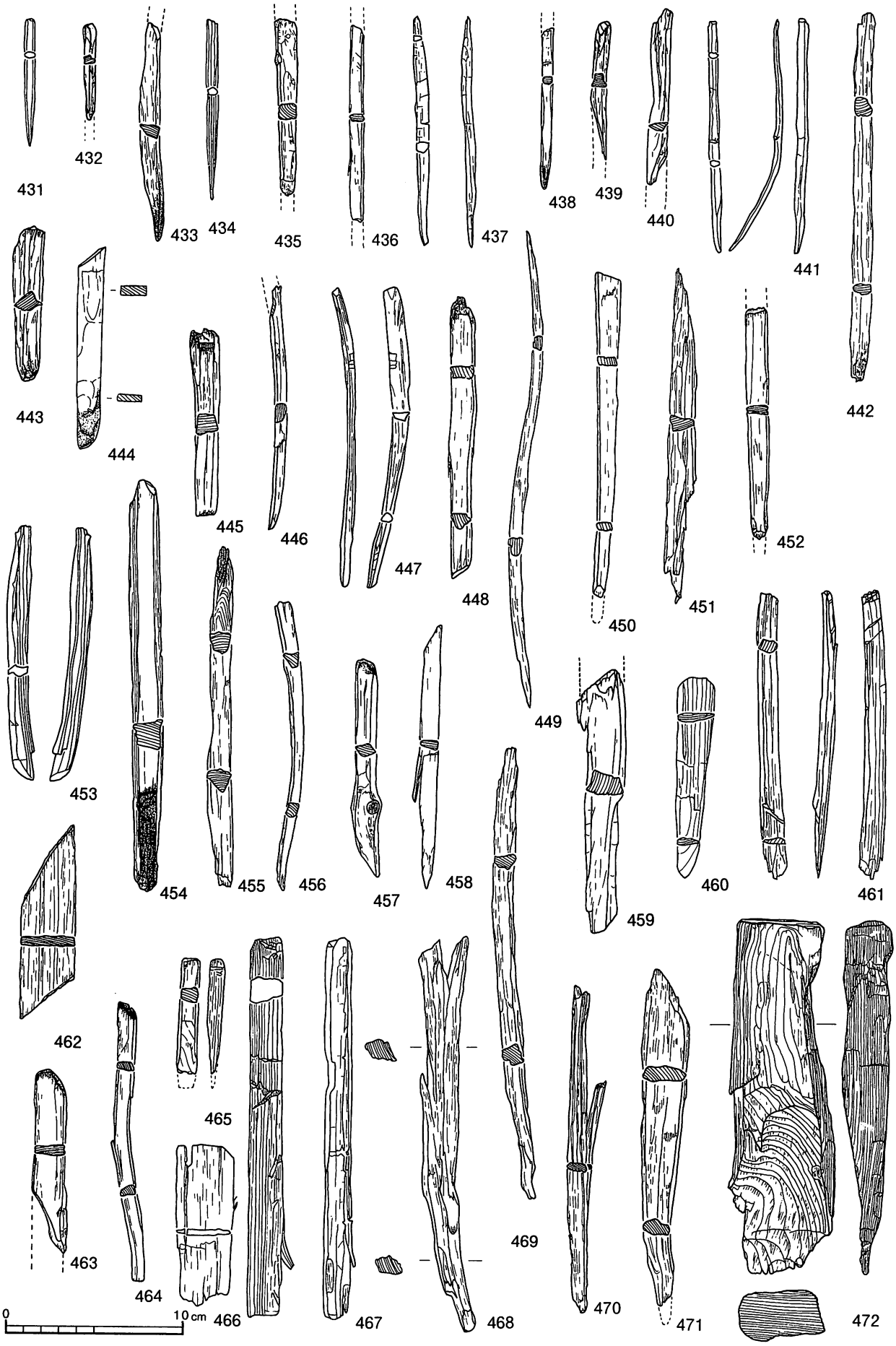
第153図　4区下層水田面詳細図（12）



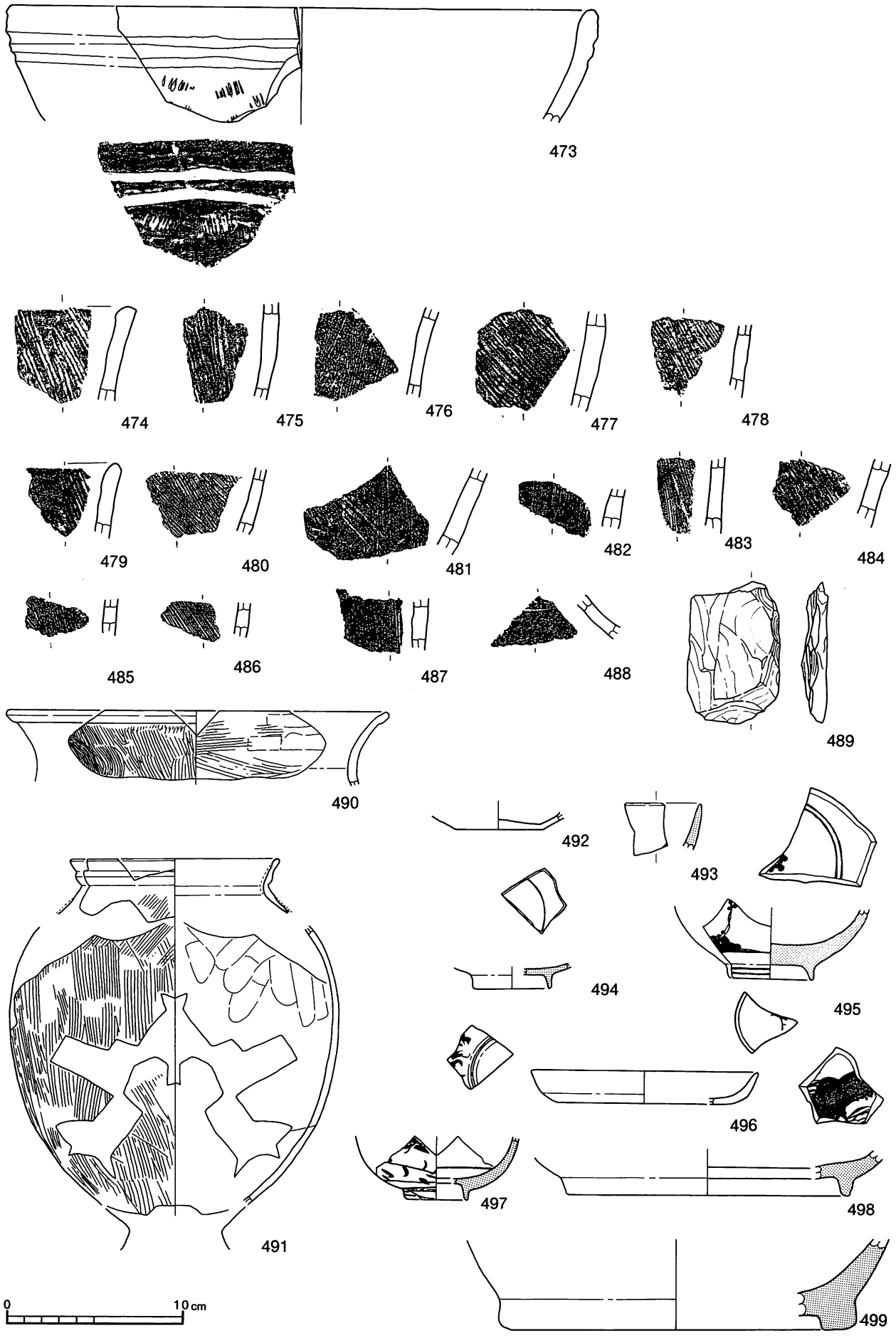
第154図　4区52層遺物分布図



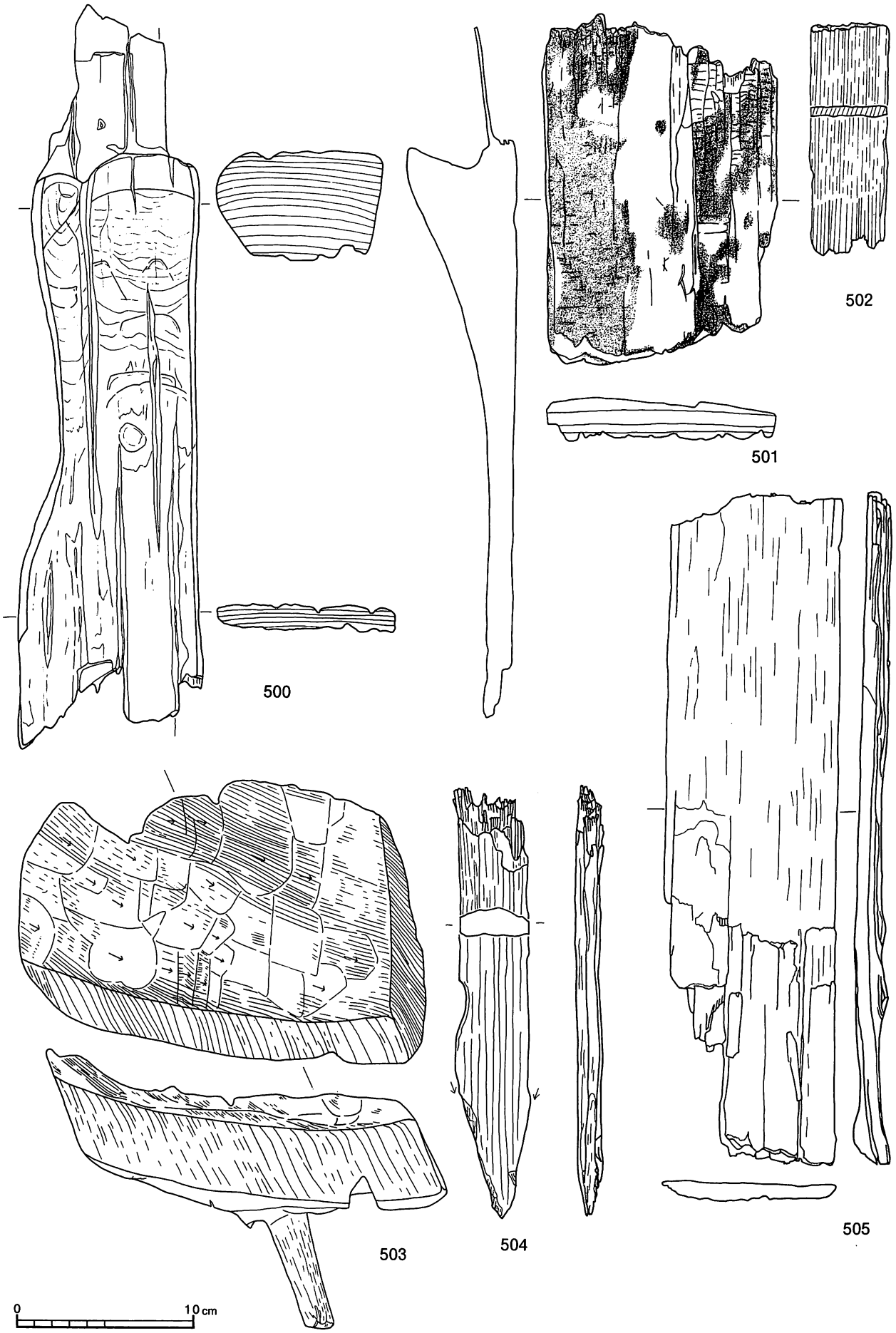
第155図　4区上層および下層水田出土遺物



第156図　4区下層水田出土遺物



第157図　4区出土遺物



第158図　4区下部礫層内出土遺物

第12表　4区上層水田

水田番号	面　積 (㎡)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
1	45.08＋α	265.92	265.84	1．2		
2	51.67＋α	265.92	265.72	1．3		
3						
4		266.12	265.82	3．6		
5	91.34＋α	266.52	266.1	5．7．8		
6					5号杭列	
7	53.98＋α	266.61	266.34	7．12．13		
8						
9	2.85＋α	266.66	266.58	17		
10	113.22＋α	266.62	266.56	13．14．17．18		
11	71.60＋α	266.54	266.34	15．16．18		

第13表　4区下層水田

水田番号	面　積 (㎡)	最高標高 (m)	最低標高 (m)	周囲の畦畔番号	施　　設	備　考
12	122.45＋α	265.7	265.34	19．20．24a	6杭列．1溝	
13	66.02＋α	265.46	265.26	19．21．23		
14	66.88	265.62	265.3	20．21．22．24b	1水口．1溝．6杭列	
15	133.44＋α	265.4	265.2	22．23．25	2水口．1溝	
16	14.90＋α	265.78	265.66	26．29	1溝	
17	131.20＋α	265.81	265.5	27．29．30．33	1溝	
18	99.87	265.64	265.48	28．30．31．34	1溝	
19	72.80＋α	265.6	265.42	31．35	1溝	
20	65.39＋α	265.85	265.7	32．36．39	3水口	
21	89.83	265.84	265.7	33．36．37．40	3水口	
22	97.54	265.74	265.58	34．35．37．38．41		
23				39．4		
24	6.23＋α	265.7	265.62	42．43	4水口	
25	28.49＋α	266.04		46		
26	50.45＋α	265.98	265.8	45．47．48		
27				48．49		

第14表　4区上層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
1	6.96＋α	N－4°－E	直	28	13	83	68	
2	11.0＋α	N－63°－E N－82°－E	曲	52	14	88	60	
3	6.44＋α	N－87°－E	直	30	14	65	43	
4	2.60＋α	N－79°－W	直	40	30	84	60	
5	11.66＋α	N－90°－E	直	48	25	100	62	
6	11.50＋α	N－37°－E N－75°－E	曲			38	12	
		N－85°－E						
7	6.01＋α	N－70°－E	曲			33	13	
8	3.91＋α	N－36°－W	直	41	13	65	40	
9	4.18＋α	N－78°－E	直	45	17	102	82	
10	3.68＋α	N－4°－E	直			36	19	
11	14.41＋α	N－89°－E N－73°－E	曲			44	7	
12	5.55＋α	N－2°－E	直					
13	6.49＋α	N－74°－W	直			23	10	
14	6.92＋α	N－77°－E	直			30	10	
15	6.87＋α	N－77°－E	直			26	7	
16	7.88＋α	N－74°－W N－38°－W	曲			78	25	
17	9.23＋α	N－2°－W	直	50	31	94	62	
18	7.09＋α	N－7°－E	直			29	12	

第15表　4区上層水田畦畔一覧

番号	長さ（m）	方　位	方向性	上端幅（cm）		下端幅（cm）		備　考
				最　大	最　小	最　大	最　小	
19	8.1＋α	N－4°－E	直	38	25	73	54	
20	9.6	N－6°－E	直	21	14	56	46	
21	10.07	N－88°－W	直	54	34	85	63	
22	6.2	N－10°－E	直	82	34	124	77	
23	7.94＋α	N－4°－E	直	84	32	118	75	
24a	7.58＋α	N－77°－W	直	85	49	131	100	
24b	12.22	N－77°－W	直	123	23	225	131	
25	8.54＋α	N－65°－W	直	116	92	201	180	
26	3.58＋α	N－77°－W	直	73	58	138	116	
27	9.29	N－80°－W	直	30	14	95	62	
28	7.53	N－75°－W	直		23	142	75	
		N－2°－W						
29	10.84＋α	N－26°－W	曲	47	34	87	63	
30	4.61＋α	N－21°－E	直	28	12	55	42	

31	15.51	N−17° −E	直	30	11	105	41	
32	3.85＋α	N−89° −W	直					
33	8.65	N−82° −W	直	46	10	76	50	
34	6.86	N−82° −W	直	66	32	82	45	
35	5.02＋α	N−84° −W	直	60	24	77	55	
36	8.91	N−2° −E	直	41	17	93	54	
37	10.41	N−4° −E	直	45	11	82	51	
38	9.5	N−4° −E	直	44	12	78	48	
39	6.80＋α	N−87° −W	直	55	35	84	62	
40	10.04	N−85° −E	直	72	36	110	85	
41	8.28＋α	N−83° −W	直	58	25	81	62	
42	5.75＋α	N−13° −E	直	63	24	99	54	
43	2.62＋α	N−1° −E	直	45	23	60	54	
44	4.40	N−11° −E	直	55	15	85	65	
45	2.52＋α	N−76° −W	直	43	26	64	46	
46	16.71＋α	N−87° −E	直	57	21	84	41	
47	8.1	N−84° −E	直	70	30	92	66	
48	6.38＋α	N−40° −E N−1° −E	曲	65	33	99	66	
49	5.10＋α	N−23° −E	直	68	36	90	72	

第16表　土器類観察表

番号	挿図番号	出土地点	種別	器形	法量 cm 口径	底径	高さ	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	17	1区	土師器	S字甕	(15.0)		(2.3)		赤色粒子(0.3～1㎜)黒色雲母、長石、石英を多く含む。(0.2～1.5㎜)	良	にぶい橙	64
2	17	1区	土師器	S字甕	(16.0)		(3.4)	外面にはけ目	黒色雲母、長石、石英を多く含む。赤色粒子若干含む。	良	にぶい橙	85
3	17	1区11層サブトレンチ4	土師器	S字甕	(17.0)		(2.7)	外面にはけ目	黒色雲母、長石、石英、赤色粒子	良	にぶい橙	
4	17	1区21a層	土師器	S字甕	(17.0)		(4.7)	外面にはけ目	黒色雲母、長石、石英を多く含む。	良	にぶい黄橙	
5	17	1区サブトレンチ2 21a層	土師器	長頸壺	(16.0)		(5.4)			良	にぶい黄橙～にぶい橙	
6	17	1区21a層	土師器	高坏	(21.0)		(3.8)		長石(0.3～2.5㎜)を含む。	良	にぶい黄褐	
7	17	1区21a層	土師器	高坏(脚部)			(4.5)		赤色粒子を含む。(0.3～2.5㎜)	良	にぶい橙	
8	17	1区21a層	土師器	器台		(14.0)	(2.6)		茶色針状物質を含む。	良	灰黄褐	77
9	17	1区21a層	土師器	甕(口縁部)	(18.0)		(3.3)		雲母、長石を含む。	良	にぶい褐	84
10	17	1区21a層	土師器	高坏	(21.0)		(3.8)		長石(0.3～2.5㎜)を含む。	良	にぶい黄褐	
11	17	1区21a層	土師器	碗坏	(14.0)		(4.7)			良	にぶい橙	93
12	17	1区21a層	土師器	皿	(14.0)		(1.9)		赤色粒子を多く含む。(0.2～1.5㎜)	良	にぶい橙	
13	17	1区21a層	土師器	坏	(11.0)		(3.2)	横ナデ　ケズリ	赤色粒子を少量含む。(～1㎜)	良	にぶい橙	
14	17	1区2号杭列(上)	染付	碗			(1.5)			良		
15	17	1区1号杭列	陶磁器	碗		(3.6)	(1.6)			良		
16	17	1区2号杭列上	染付	碗			(1.5)			良		
17	17	1区上層水田	染付	碗			(2.3)			良		
18	17	1区上層水田	染付	皿		(8.6)	(1.0)			良		
27	70	2B区1号木棺下	土師質	皿	11.2	6.4	2.1	横ナデ　スリップ	雲母を含む。	良	明褐灰	底部回転糸切
28	70	2B区1号木棺下	土師質	皿	10.4	4.4	2.5	横ナデ　スリップ	長石、雲母を含む。	良	灰黄褐	底部回転糸切
44	71	試掘墓	土師質	皿	8.8	(5.4)	1.7	横ナデ	長石を含む。	良	浅黄橙	底部回転糸切、変形あり。
45	71	試掘墓	土師質	甕(口縁部)	(30.0)		(4.8)		白色砂粒を含む。(0.5～3㎜)	良	にぶい橙	
46	71	試掘墓	土師質	甕(口縁部)	(35.6)		(10.7)	横ナデ	茶褐色粒子を含む。(0.5～3㎜)	良	外面、にぶい黄橙～褐灰、内面灰白～褐灰	
65	73	2区2号溝	土師質	皿	(8.4)		(1.6)	外・内面横ナデ	長石を少量含む。(0.5㎜)	良	灰白色	
66	73	2区2号溝	土師質	皿	(12.2)		(2.1)	外・内面横ナデ	赤色粒子を含む。	良	にぶい褐色	
67	73	2区2号溝	土師質	皿	(14.0)		(2.0)	横ナデ		良	明褐灰	
68	73	2区2号溝	土師質	皿	(14.2)		(2.2)	外・内面横ナデ		良	灰白色	
69	73	2区2号溝	土師質	皿	11.6	5.8	2.4	外・内面横ナデ、スリップ	雲母・長石を僅かに含む。	良	にぶい褐色	
70	73	2区2号溝	土師質	皿	(9.0)	(5.2)	2.1			良	灰黄色	
71	73	2区2号溝	土師質	坏	(11.2)	(6.3)	(2.7)		長石・石英(0.5～1㎜)雲母少しずつ含む	良	にぶい橙	胴部に有孔、底部回転糸切
72	73	2区2号溝	土師質	皿	(12.0)	(6.0)	(2.5)	外・内面横ナデスリップ		良	にぶい橙	底部回転糸切
73	73	2区2号溝	土師器	蓋のつまみ			(2.2)		赤色粒子を含む。	良	橙	
74	73	2区2号溝	土師器	皿	(10.0)	7.0	(1.5)	外・内面横ナデ	白色粒子を含む。(0.5～3㎜)	良	にぶい橙	底部回転糸切
75	73	2B区2号溝	土師質	坏高台部		9.0	(3.5)		雲母砂粒を含む。(0.1～0.5㎜)	やや良	褐	底部回転糸切
76	73	2B区2号溝	天目	碗		(4.4)	(1.2)			良		
77	73	2区2号溝北	染付	碗		(3.6)	(3.0)			良	明緑灰	
78	73	2区2号溝		すり鉢		(12.6)	(6.6)		長石・石英・雲母を含む。(0.5～1.5㎜)	良	にぶい黄橙	

番号	挿図番号	出土地点	種別	器形	法量 cm 口径	底径	高さ	調整	胎土	焼成	色調	備考
79	73	2区2号溝				(15.4)	(3.4)		細かい石英・長石を多く含む。(0.5～2㎜)	良	内側ー褐灰 外側ー灰褐	
80	73	2B区2号溝	土師質	すり鉢			(6.8)		雲母含む。	良	にぶい黄褐	P－13
81	73	2区2号溝		甕	(22.0)		(8.6)		長石・石英若干を含む。(0.5～1㎜)	良	内側ーにぶい赤褐色、外側ー黒褐色	肩部に沈線あり。
82	73	2区2号溝	常滑	甕	(40.0)		(8.9)	横ナデ	石英・長石・小石柱を含む。(0.2～0.5㎜)	良	褐灰	P－14
83	73	2B区2号溝	常滑	甕	(40.8)		(10.0)		長石・石英を含む。(0.5～3㎜)	良	灰褐色	P－2P－4
84	74	2B区2号溝	常滑	甕	(25.2)		(6.3)	横ナデ	長石を含む。(0.5～1.5㎜)	良	灰褐色～灰赤色	P－23口縁部に自然釉
85	74	2B区2号溝	常滑	甕	(41.2)		(13.6)	横ナデ	長石・石英を含む。	良	内側ー灰赤～にぶい橙 外側ー灰赤・灰白	指頭圧痕
110	77	2区5号溝	土師質	皿	(12.0)	(5.6)	(2.7)	横ナデ	長石を含む。	良	にぶい橙～赤灰	底部回転糸切、焼成温度が高いため、変形し、半須恵になっている。
111	77	2区5号溝		皿	(10.6)	(5.6)	(2.0)	横ナデ スリップ	赤色粒子を含む。(0.5～4㎜)	良	にぶい褐	底部回転糸切
112	77	2区5号溝		甕(口縁部)	(31.2)		(3.6)	横ナデ	長石・雲母を僅かに含む。	良	にぶい橙 灰褐	
113	77	2区5号溝		すり鉢			(6.0)			良	にぶい黄橙～褐灰	表と裏の2枚を張り合わせたような鉢。
114	77	2区1号井戸		皿	(10.0)	5.0	2.2	横ナデ	長石・雲母を含む。	良	にぶい橙	№6 底部回転糸切
115	77	2区1号井戸		皿	(9.4)	5.4	2.5	横ナデ スリップ	長石・雲母を含む。	良	にぶい黄橙	№16 底部回転糸切
116	77	2区1号井戸		皿	(8.0)	5.0	2.0	横ナデ スリップ	長石・雲母を含む。	良	明褐灰	底部回転糸切
117	77	2区1号井戸		皿	(12.0)	(7.0)	1.9	スリップ	長石・雲母を含む。	良	灰白	№21 底部回転糸切
118	77	2区1号墓壙		皿		(7.6)	(1.4)	横ナデ	長石・雲母を含む。	良	にぶい橙 淡赤橙	№5
119	77	2区1号井戸	陶器	壷(肩部)			(3.5)	内側に横ナデあり		良	明オリーブ灰	
125	77	2区3号井戸		鍋？	(24.0)		(4.4)	横ナデ		良	にぶい橙～褐灰	
127	79	集石	土師質	皿	(12.2)		(1.8)	横ナデ	赤色粒子を含む。(0.1～1㎜)	良	灰白	
128	79	集石	土師質	皿	(8.4)	4.4	1.9	横ナデ	茶色粒子・雲母含む。	良	黒	底部回転糸切
129	79	集石	土師質	皿	(7.6)	5.0	1.8	横ナデ	赤色粒子を含む。(0.2～1㎜)	良	灰白	P9部分的にすすが付着。底部回転糸切
130	79	2区1号集石		皿	8.4	5.0	1.9	横ナデ スリップ	長石を含む。	良	灰黄褐	底部回転糸切
131	79	2区集石	土師質	皿	(7.3)	(3.2)	2.0	横ナデ	長石(1㎜)・雲母を含む。	良	にぶい橙	底部回転糸切
132	79	2区集石	土師質	皿	(12.2)		(1.8)	横ナデ	赤・白粒子を含む(0.1～1㎜)	良	にぶい黄橙	
133	79	2区集石	土師質	皿	(12.2)		(1.5)	横ナデ	赤色粒子を含む。(0.1～1㎜)	良	灰白	
134	79	2区集石	土師質	皿		(10.1)	(1.5)	横ナデ	赤色粒子(0.2～1㎜)・長石の細かい粒子(0.2㎜)	良	灰白	P11 外・内面ともにすす付着。底部回転糸切
135	79	2区集石		土製円盤			(3.0)	横ナデ	微細な長石、赤色粒子(0.3～1㎜)を若干含む。	良	にぶい橙	P16
136	79	2区集石	土師質	鉢	(20.0)		(4.4)	横ナデ	長石を含む。(0.3～1.2㎜)	良	灰白	外・内面にも部分的にすす付着。
137	79	2区集石	土師質	鉢	(15.8)		(3.8)	横ナデ	赤色粒子(0.5～2㎜)・微細な長石を含む。	良	にぶい橙	№4

番号	挿図番号	出土地点	種別	器形	法量 cm 口径	底径	高さ	調整	胎土	焼成	色調	備考
138	79	2区集石	土師質	鉢			(4.4)	横ナデ	赤色粒子(1～2㎜)・微細な長石を含む。(0.1㎜)	良	にぶい橙	
139	79	2区集石	瓦質	すり鉢		(19.0)	(4.3)		微細な長石を含む。	良	灰色	内側にすす付着。
140	79	2区集石	瓦質	内耳土器			(11.3)	内側にケズリ		良	外側ー黒 内側ー灰	№5 外側にすす付着。
141	79	2区集石		土鍋		(27.0)	(3.4)	内側にケズリ	長石(0.5～1㎜)・石英を多量に含む。	良	赤黒	№1 外・内面にすすが付着
142	79	2区集石	土師質	鉢?	(36.4)		(3.0)	横ナデ	長石(0.3～1㎜)赤色粒子(0.5～1.5㎜)を含む。	良	にぶい橙	№6
143	79	2区集石	瓦質	鉢	(39.4)		(4.4)	横ナデ	長石を若干含む。(0.5～1㎜)	良	灰白	
158	81	2区上層水田	土師質	皿	(7.6)	(4.2)	(2.0)		赤色粒子・長石(0.2～1㎜)を多く含む。	良	にぶい橙	
159	81	2区下層水田	土師質	鍋			(3.5)		金雲母を多量に含む。(0.5～2㎜)	良	にぶい褐色	外・内面にすす付着
160	81	2B区下層水田	土師質	皿	(12.0)		(1.6)		雲母・長石を含む。	良	にぶい橙	A28G
161	81	下層水田	土師器	坏			(1.8)			良	明褐灰	GridO17玉 縁口縁
175	82	2B区	青磁	碗	(17.0)		(2.3)			良	緑灰	
176	82	2B区	土師質	皿	(10.7)	(7.4)	(1.4)		雲母・赤色粒子(0.5～1㎜)を含む。	良	にぶい橙	B－24
177	82	2B区	土師質	碗	(12.0)		(3.5)		雲母・赤色粒子(0.5～3㎜)を含む。	良	にぶい橙	B－26G
178	82	2B区2層	染付	碗			(3.1)			良	明緑灰	
179	82	2B区	土師質	皿	(14.0)	(6.0)	(1.7)		長石・茶色粒子(0.5～3㎜)を多く含む。	良	にぶい黄橙	E－28№1
180	82	2B区	陶器	碗	(13.0)		(3.0)			良	浅黄	C－25G全 面釉
181	82	2B区表土	土師質	皿		(5.7)	(1.7)	横ナデ		良	浅黄橙	底部回転糸切
182	82	2B区上礫層	土師質	皿?坏?		(8.0)	(1.0)			良	浅黄橙	底部回転糸切
183	82	2B区	土師質	すり鉢		(14.0)	(5.4)			良	外側ーにぶい橙内側ー浅黄橙～にぶい黄橙	D－25
184	82	2B区	須恵質	碗		(6.0)	(1.6)	横ナデ		良	明赤灰	C－27G
185	82	2B区試掘トレンチ	土師質	すり鉢		(16.0)	(7.8)	内面横ナデ		良	にぶい橙	
220	84	2区表採	土師器	坏	(12.0)		(1.8)		密、茶色粒子(0.5～2㎜)	良	にぶい橙	
221	84	2区	土師質	皿	(10.0)			横ナデ	細かい赤色粒子、雲母を多く含む。	良	灰白	G－22竹輪ずみ痕
222	84	2区	土師器	坏	(12.2)	(6.0)	2.7	横ナデ	赤色粒子(1㎜ 大)を若干含む。	良	にぶい黄橙	H－17底部回転糸切
223	84	2区	土師質	坏		(5.6)	(1.3)	横ナデ	長石・石英(0.5～1㎜)を若干含む。	良	内ーにぶい褐色 外ー灰褐色	G－22底部回転糸切
224	84	2区表採	土師質	皿	(7.8)	(4.8)	(1.7)	横ナデ	雲母・赤色粒子(0.3～1.5㎜)を含む。	良	浅黄橙	
225	84	2区表採	土師質	皿	(13.0)		(1.5)		雲母を含む。胎土密。	良	浅黄橙	
226	84	2区表採	土師質	皿		(6.4)	(1.3)		赤色粒子を多量に含む。(0.2～1㎜)長石を若干含む。	良	橙	
227	84	2区表採	土師質	皿	(11.0)	5.6	2.5	横ナデ	黒雲母を含む。	良	淡橙	底部回転糸切
228	84	2区表採	土師質	香炉		6.6	(2.5)	内面横ナデ	長石・石英・赤色粒子を含む。	良	明褐灰	底部回転糸切有脚(回転糸切後脚をはりつけている。)
229	84	2区表採	染付	碗			(2.9)			良	明緑灰	
230	84	2区表採	瓦質	皿・坏?		6.0	(1.2)		微細な長石を含む。(0.2～0.5㎜)	良	灰色	底部回転糸切
231	84	2区表採	土師質	皿	(13.6)	(7.8)	2.6		赤色粒子を含む。(0.2～2㎜)	良	浅黄橙	底部回転糸切
232	84	2区表採	染付	碗		(4.4)	(2.2)			良	明緑灰	
233	84	2区表採	染付	碗			(2.7)			良	明緑灰	

番号	挿図番号	出土地点	種別	器形	法量 cm			調整	胎土	焼成	色調	備考
					口径	底径	高さ					
234	84	2区	常滑	甕	(20.0)		(5.2)	内側にケズリ		良	内ーにぶい赤褐、外ー灰白	H−17
235	84	2区	土師質	すり鉢	(31.6)		(5.3)		長石・雲母を若干含む。(0.5〜3㎜)	良	にぶい黄橙	G−22
236	84	2区	土師質	すり鉢	(31.2)		(5.5)		石英・長石・赤色粒子を若干含む。	良	にぶい橙〜灰褐	G−22
237	84	2区	土師質	鉢	(30.4)		(5.5)	横ナデ	赤色粒子(1〜3㎜)を含む。	良	にぶい橙	G−22
238	84	2区表採	土師質	鉢	(35.2)		(5.3)		胎土密	良	浅黄橙	
239	84	2区表採	土師質	内耳鍋	(32.0)		(10.9)		雲母・長石を含む。	良	内ーにぶい黄橙、外ー灰褐	
241	116	3区	土師質	土鍋	(19.0)		(6.0)	横ナデ、ケズリ	長石を多く含む。	良	にぶい橙〜灰褐	A−41下部にすす付着。
242	116	3区	土師質	口縁部	(15.0)		(2.3)		長石・石英を含む。	良	内ーにぶい黄橙、外ー橙	A−13
243	116	3区	須恵質	碗		(8.0)	(2.1)	横ナデ		良	灰	C−34 №104
244	116	3区	磁器	碗	(19.0)		(3.9)			良		D−34 №109 表面に櫛目
245	116	3区	瓦	軒丸瓦			(6.0)			良		B−43
246	116	3区上層水田	土師質	口縁部	(17.0)		(2.3)		胎土密	良	にぶい橙	A−34
247	116	3区上層水田	青磁	皿			(2.8)			良		Z−40 №71
248	116	3区上層水田	青磁	皿or碗			(3.3)			良		Z−43菊花紋
249	116	3区上層水田	天目	碗?			(2.8)			良	にぶい赤褐	C−42
250	116	3区上層水田	陶器	碗? (とって部分)			(1.8)			良		D−37 №38
251	116	3区上層水田	陶器	壷・肩部			(6.6)			良		D−37
252	116	3区上層水田	土師質	カワラケ	8.0	5.3	2.2	横ナデ		良	にぶい黄橙	D−35 №34 みこみ中心部にヘラによる沈刻あり。
253	116	3区上層水田	灰釉	鉢	(43.6)		(5.0)	横ナデ	白色粒を含む。(0.5〜2㎜)	良	褐灰	Z−39 №69 口縁部に自然釉。
320	118	3区下層水田	土師器	皿	(14.0)		(2.1)			良	にぶい橙	E−36
321	118	3区下層水田	土師器	皿		(5.5)	(1.8)	横ナデ、ヘラケズリ	赤色粒子を若干含む。(0.3〜1.5㎜)	良	にぶい橙	C−37 №75
322	118	3区下層水田	土師質	皿		(8.0)	(2.5)		金雲母を多量に含む。	良	灰黄褐	A−34 №126 内側にすす付着。
323	118	3区下層水田	青磁	碗			(3.7)			良		C−33
324	118	3区下層水田	青磁	碗	(14.0)		(4.4)			良		C−33
325	118	3区下層水田	青磁	碗	(12.0)		(2.6)			良	明緑灰	B−37 №49
326	118	3区下層水田	灰釉		(13.0)		(1.5)			良	明青灰	C−39 №73 口縁と内側に灰釉。
327	118	3区下層水田直上	施釉	鉢?	(18.0)		(3.3)			良	明緑灰	B−36
399	155	4区	染付	碗		(3.6)	(1.6)			良		X−55
400	155	4区	青磁	碗	(16.0)		(2.4)			良	緑灰色	Y−50 №6
401	155	4区	染付	碗	(11.0)		(3.8)			良		Z−53
402	155	4区	染付	碗			(2.6)			良		Z−53
403	155	4区	青磁	碗	(7.8)		(3.4)			良		Z−53
404	155	4区	染付	碗	(11.4)		(3.7)			良		Y−53G
405	155	4区	染付	皿		(7.3)	(0.9)			良		Y−53G
406	155	4区	染付	?			(2.1)			良		Y−53ロクロ形成時の回転痕あり。
407	155	4区	染付	皿	(7.2)		(1.8)			良		Z−54
409	155	4区	染付	茶碗	(7.0)		(2.4)			良		Y−53G
410	155	4区	染付			(6.0)	(2.2)			良		Z−54
411	155	4区			(12.0)		(1.8)			良		Z−63 №97

番号	挿図番号	出土地点	種別	器形	法量 cm 口径	底径	高さ	調整	胎土	焼成	色調	備考
412	155	4区上層水田	土師質	皿	(8.0)		(1.6)	横ナデ	雲母を多く含む。(0.5～1.5㎜)	良	にぶい赤褐	底部回転糸切
421	155	4区下層水田	土師器	坏	(11.0)		(0.9)		赤色粒子・長石(1㎜)を含む。	良	にぶい黄橙	Y－61
422	155	4区下層水田	土師器	坏	(10.0)		(1.2)		赤色粒子を含む。(0.3～1㎜)	良	にぶい黄橙	Y－60
423	155	4区下層水田	青磁	碗	(15.0)		(2.8)			良	オリーブ黄	B－60 外側－菊花紋
424	155	4区下層水田	天目	?			(2.2)			良	外側－にぶい黄褐～黒褐、内側－浅黄橙	A－50 №10
473	157	4区表採		深鉢(曽利・)	(34.0)		(6.4)	内側－ヘラ状工具による横方向のケズリ	長石(0.5～1㎜)・雲母を含む。	良	灰白	外側－口縁下に幅広の沈線二条めぐらす。胴部にくし状工具による施釉あり。
474	157	4区52層上	土師質	甕(口縁部)			(5.3)			良	灰褐	№26
475	157	4区52層上	土師質	甕			(5.4)		雲母・長石を含む。	良	褐灰	№30
476	157	4区52層上	土師質	甕			(5.0)		白色粒子を多く含む。(0.5～2㎜)	良	外－にぶい黄橙、内－灰赤	№17 外側にすす付着。
477	157	4区52層上	土師質	甕			(5.6)		長石・雲母を含む。	良	にぶい黄橙～にぶい橙	
478	157	4区52層上	土師質	甕			(4.2)		白色粒子を含む。(0.5～2㎜)	良	褐灰	№27
479	157	4区下礫	土師質	甕(口縁部)			(4.2)		白色粒子を含む。(0.5～2㎜)	良	にぶい褐	№ 8
480	157	4区下礫	土師質	甕			(3.6)		長石・雲母を含む。	良	灰黄褐	
481	157	4区下礫	土師質	甕			(4.8)		白色粒子を含む。(0.5～2㎜)	良	灰黄褐	
482	157	4区下礫	土師質	甕			(2.1)		雲母・白色粒子(0.5～1㎜)	良	灰黄褐	№ 9
483	157	4区下礫	土師質	甕			(4.2)		長石・雲母を含む。	良	灰褐	№11
484	157	4区下礫	土師質	甕			(3.8)			良	褐灰	№33
485	157	4区下礫	土師質	甕			(2.0)		白色粒子を多く含む。(0.5～2㎜)	良	褐灰	№12
486	157	4区下礫	土師質	甕			(1.9)		長石を多く含む。	良	灰黄褐	№13
487	157	4区下礫	土師質	甕			(3.0)		雲母・白色粒子(0.5～2㎜)を含む。	良	褐灰	№16 すす付着。
488	157	4区下礫	土師質	壺・肩部			(2.5)		胎土密	良	黒褐	№21
490	157	4区50層礫	土師器	甕	(22.0)		(4.2)	外側－ハケ、内側－ハケ・ヘラ	長石・石英(0.2～1㎜)を含む。	良	にぶい黄橙	外・内ともにすす付着。
491	157	4区20層トレンチ	土師器	台付甕	(12.0)		(19.5)	外側－ハケ	雲母・長石の細かい粒子を含む。	良	橙色～にぶい黄橙～黒	内側に指頭痕
492	157	4区19層	土師器	皿		5.0	(1.0)		胎土密	良	にぶい黄橙	13－55 内黒、底部回転糸切
493	157	4区表土	染付	碗			(3.0)			良		
494	157	4区表土	染付	碗		(4.4)	(1.5)			良		
495	157	4区表土	染付	碗		5.0	(4.1)			良		
496	157	4区試掘トレンチ	土師質	皿	(13.0)		(1.8)		長石(0.3～1㎜)を若干含む。	良	橙	
497	157	4区表土	染付	碗		(3.6)	(3.6)			良		
498	157	4区表土	染付	皿		(16.0)	(2.6)			良		
499	157	4区試掘トレンチ	金色釉陶器	甕		(18.4)	(5.1)			良	暗赤褐色	

第17表　木製品観察表

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　徴	備　考
				長さ	幅	厚さ		
19	17	1区	板状木製品	15.4	5.8	0.5		№87
20	17	1区	斎串状木製品	18.5	0.7	0.7		№87
21	17	1区北東スミ	斎串状木製品	24.6	1.1	0.6		
22	17	1区24a層		(21.4)	5.5	0.5		№98　樹種同定　№2
23	17	1区21a層	棒状木製品？	34.9	3.6	2.2.		№91　樹種同定　№1
24	17	1区21a層下層	？	16.7	6.0	1.2		№89　(№3)
25	17	1区水田4	ツチノコ	12.3	4.3	底径		
	17					4.8		
26－①	68	2B区1号木棺	木棺	47.8	4.2	0.6	蓋横板(北)	№1
26－②	68	2B区1号木棺	木棺		4.2	0.3	蓋横板(南)	№2
26－③	68	2B区1号木棺	木棺	81.2	22.0	0.9	梵字　穴	№4　蓋板(左)
26－④	68	2B区1号木棺	木棺	73.2	22.0	0.8	梵字　穴	№3　蓋板(右)
26－⑤	69	2B区1号木棺	木棺	56.6	(7.0)	0.6	偈文　穴　切り込み	№7　側板(北)
26－⑥	69	2B区1号木棺	木棺	55.8	20.6	1.0	偈文　穴　目くぎ　切り込み	№8　側板(南)
26－⑦	69	2B区1号木棺	木棺	82.0	16.4	6.0	梵字　穴　切り込み	№5　側板(東)
26－⑧	69	2B区1号木棺	木棺	79.0	13.5	0.9	穴　切り込み	№6　側板(西)
26－⑨	70	2B区1号木棺	木棺	58.3	6.2	1.5	穴	№9　底板
26－⑩	70	2B区1号木棺	木棺	58.1	6.4	1.4	穴	№10　底板
26－⑪	70	2B区1号木棺	木棺	58.2	7.2	1.4	梵字　穴	№11　底板
26－⑫	70	2B区1号木棺	木棺	57.6	5.6	1.4	目くぎ	№12　底板
29	70	2B区1号木棺	数珠玉	直径	高さ	穴の直径		
	70			0.8	0.7	0.2		
30	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.8	0.8	0.2		
31	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.8	0.7	0.2		
32	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.8	0.7	0.2		
33	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.7	0.7	0.2		
34	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.7	0.7	0.2		
35	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.8	0.8	0.2		
36	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.7	0.7	0.2		
37	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.8	0.8	0.2		
38	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.7	0.7	0.2		
39	70	2B区1号木棺	数珠玉	0.7	0.7	0.2		
40	71	2号木棺	呪符	長さ	幅	厚さ	梵字　偈文	
				38.6	3.6	0.3		
41	71	2号木棺	呪符	(32.8)	3.2	0.2	偈文	
42	71	2号木棺	呪符	37.9	3.2	0.3	梵字　偈文	
43	71	2号木棺	呪符	37.9	3.5	0.2	梵字　偈文	
106	76	2B区2号溝	板状木製品	(11.3)	(8.2)	0.8		
107	76	2B区2号溝	板状木製品	9.5	8.1	0.3		C－28G
108	76	2B区2号溝	漆碗			19.5	黒漆　高台部	P－3
109	76	2B区2号溝	漆碗	口径	高さ	底径	ベースに黒漆、赤漆部分が残っている。	№1　P－1
	76			(15.4)	8.7	(6.6)		
120	77	2区1号井戸	碗？	長さ	幅	厚さ	ベースに黒漆がかけられている。外・内側にわずかに赤漆が残っている。	№14
121	77	2区1号井戸	斎串状木製品	11.1	1.2	0.8		№9
123	77	2区2号井戸	箸	17.7	0.6	0.4	先端部削痕。	
124	77	2区3号井戸	漆碗	(2.5)			黒漆、赤漆、高台部	P－1
126－①	77	2区5号井戸	井戸枠	63.6	上　8.1	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	№13
					下　6.9			
126－②	77	2区5号井戸	井戸枠	64.6	9.0	1.6	ケズリ　樽締痕アリ　？	№12
					7.7			
126－③	77	2区5号井戸	井戸枠	65.0	10.8	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	№14
126－④	78	2区5号井戸	井戸枠		9.2	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	№5　№6
					7.2			

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
126－⑤	78	2区5号井戸	井戸枠	(29.2)	8.9	2.0	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No21
126－⑥	78	2区5号井戸	井戸枠	(26.9)	9.8	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No22
126－⑦	78	2区5号井戸	井戸枠	(29.4)	9.6	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No23
126－⑧	78	2区5号井戸	井戸枠	(32.6)	8.8	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No24
126－⑨	78	2区5号井戸	井戸枠	(35.2)	8.6	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　？	No 1
126－⑩	78	2区5号井戸	井戸枠	(35.3)	9.4	1.9	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No 2
126－⑪	78	2区5号井戸	井戸枠	(34.9)	6.8	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No 3
126－⑫	78	2区5号井戸	井戸枠	67.0	10.0 7.8	1.4	ケズリ　樽締痕アリ　？	No 4
126－⑬	78	2区5号井戸	井戸枠	65.9	8.6 6.6	1.6	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No 7
126－⑭	78	2区5号井戸	井戸枠	66.4	9.6 8.0	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No 8
126－⑮	78	2区5号井戸	井戸枠	65.8	9.6 7.3	1.3	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No15
126－⑯	78	2区5号井戸	井戸枠	65.2	9.5 7.4	1.6	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No16
126－⑰	78	2区5号井戸	井戸枠	62.4	9.2 7.2	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No 9
126－⑱	78	2区5号井戸	井戸枠	63.6	9.0 7.4	2.0	ケズリ　樽締痕アリ　？	No17
126－⑲	78	2区5号井戸	井戸枠	65.6	10.0 7.6	1.6	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No18
126－⑳	78	2区5号井戸	井戸枠	65.0	7.4 6.6	2.0	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No10
126－㉑	78	2区5号井戸	井戸枠	65.4	9.3 7.4	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　柾目とり	No11
126－㉒	78	2区5号井戸	井戸枠	64.9	9.8 8.3	1.8	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No20
126－㉓	78	2区5号井戸	井戸枠	65.2	10.7 8.4	1.9	ケズリ　樽締痕アリ　板目とり	No19
144	79	2区集石6号井戸	箸	(10.4)	0.4	0.4	先端部削加工。	No25
145	79	2区集石6号井戸	箸	(11.7)	0.4	0.4	先端部削加工。	No25
146	79	2区井戸	棒状木製品	17.5	1.0	0.6	木を裂いて、間に桜の皮が通してある。	
147	79	2区6号井戸	板状木製品	10.5	5.5	0.4	穴あり。	
148	79	2区6号井戸	板状木製品	(8.3)	11.7	2.7		
149	79	2区集石	板状木製品	49.6	16.6	2.0	部分的に傷あり。	
150	79	2区集石	板状木製品	56.0	21.2	2.4		
151	80	2区6号井戸	曲物、底	(15.7)	(5.2)	0.5	穴、傷。	
152	80	2区集石6号井戸	曲物	(16.0)	(10.2)	1.1	薄い板が3枚重ねられている。桜皮を通している。	
153	80	2区6号井戸	板状木製品	(22.3)	(10.7)	1.6		
154	80	2区6号井戸	板状木製品	(23.0)	(12.5)	1.4		
155	80	2区6号井戸	板状木製品	22.8	7.0	1.2		
156	80	2区6号井戸	板状木製品	24.5	8.8	3.3		
157	80	2B区8号井戸	漆碗	現高 (5.8)	口径 (22.0)		内面黒漆　外面に赤漆が残っている。	
162	81	2B区下層水田直上	漆碗	(2.9)	(15.0)		黒漆	

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
163	81	2B区下層水田	笛	長さ 5.1	幅 1.4	穴の直径 0.6		D－24
164	81	2B区下層水田		(7.5)	0.6	厚さ 0.3		№7
165	81	2B区下層水田		(14.2)	1.0	0.5		G－26
166	81	2B区下層水田	斎串状木製品	(17.8)	0.5	0.8		№8
167	81	2B区下層水田		(17.6)	0.6	0.7		№6
168	81	2B区下層水田		19.2	1.4	1.4		№5
169	81	2B区下層水田	斎串状木製品	23.6	0.8	0.5		
170	81	2B区下層水田直上	箸状木製品	24.4	0.9	0.8		
171	81	2B区下層水田	斎串状木製品	32.6	1.3	1.2		
172	81	2B区下層水田	斎串状木製品	31.1	1.0	0.6	先端部・頭頂部炭化。	E－28G
173	81	2B区下層水田	曲物	(27.7)	(9.0)	0.7	桜皮を通してある。	P－7
174	81	2B区水口1	曲物、底板	(32.3)	(9.3)	1.2	側面に(クギ)穴。	
186	82	2B区下層水田		(10.7)	0.7	0.6		G－26
187	82	2B区上層	箸	17.6	0.5	0.5	先端部にケズリ。	E－25　№7
188	82	2B区表採	斎串状木製品	(14.2)	0.8	0.6	先端部炭化。	
189	82	2B区	杭	71.9	5.6	4.2	先端部削痕。	№1
190	82	2B区	杭	77.0	4.7	4.2	先端部削痕。	№2
191	82	2B区	杭	67.5	6.6	3.7	先端部削痕。	№3
192	82	2B区	杭	(38.4)	3.6	2.9	先端部削痕。	№4
193	82	2B区	杭	101.0	5.4	5.0	先端部削痕。	№5
194	82	2B区	杭	58.2	5.3	3.5	先端部削痕。	№6
195	82	2B区	杭	64.5	6.6	3.7	先端部削痕。	№7
196	82	2B区	杭	71.4	4.7	4.6	両端削痕、全体炭化。	№8
197	82	2B区	杭	(27.4)	4.5	4.6	先端部削痕。	№9
198	82	2B区	杭	59.2	4.9	4.2	先端部削痕。	№10
199	82	2B区	杭	50.8	6.8	3.6	先端部削痕。	№11
200	82	2B区	杭	(39.2)	4.0	4.0	先端部削痕。	№12
201	82	2B区	杭	(22.3)	3.4	3.4	先端部削痕。	№13
202	82	2B区	杭	(33.2)	5.7	4.4	先端部削痕。	№14
203	82	2B区	杭	(37.8)	7.0	3.7	先端部削痕。	№15
204	83	2B区	杭	84.5	7.1	4.5	先端部削痕。	№17
205	83	2B区	杭	73.6	5.4	4.1	先端部削痕。	№18
206	83	2B区	杭	77.2	4.9	3.0	先端部・中央部に削痕。先端～中央炭化。	№19
207	83	2B区	杭	87.2	5.7	6.3	先端部削痕。	№20
208	83	2B区	杭	85.8	7.7	5.7	先端部削痕。	№21
209	83	2B区	杭	66.0	6.0	7.2	先端部削痕。210と同一。	№22
210	83	2B区	杭	66.0	6.0	7.2	先端部削痕。209と同一。	
211	83	2B区	杭	56.8	5.6	2.5	先端部削痕。	№25
212	83	2B区	杭	72.6	6.3	6.0	先端部削痕。	№26
213	83	2B区	杭	79.0	6.0	3.9	先端部削痕。	№27
214	83	2B区	杭	62.3	4.8	5.6	先端部削痕。	№29
215	83	2B区	杭	(37.8)	5.7	3.3	先端部削痕。	№30
216	83	2B区	杭	60.4	5.0	4.6	先端部削痕。	№31
217	83	2B区	杭	67.8	5.3	4.8	先端部削痕。	№33
218	83	2B区	杭	48.0	4.9	3.6	先端部削痕。	№36
219	83	2B区	杭	(42.4)	5.8	4.0	先端部削痕。	№37
240	84	2区	漆碗	現高 (4.5)			黒漆上に赤漆で絵付け。	
254	116	3区上層水田	草履の芯材	長さ 24.2	9.8	0.2	頭頂部に穴2ヶ。	№20、C－39
255	116	3区上層水田		(29.4)	4.3	0.2		№25、B－41
256	116	3区上層水田	?	18.4	3.5	1.1	頭頂にほぞ。先端部斜めにカット。	№49、Z－38

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
257	116	3区上層水田		(6.7)	3.0	1.2	丸くカット。	№7、A－34
258	116	3区上層水田	笄(骨製品)	11.3	1.4	0.3		№74、A－39
259	117	3区下層水田	斎串状木製品	16.1	0.9	0.8		№287
260	117	3区上層水田		(16.3)	0.7	0.6		№97、D－40
261	117	3区上層水田		(12.9)	1.1	0.4	先端部わずかに炭化。	№17、A－38
262	117	3区上層水田	斎串状木製品	(15.8)	0.9	1.0	先端部炭化。	№83、Z－40
263	117	3区上層水田	斎串状木製品	(24.5)	1.2	0.4		№91、B－40
264	117	3区上層水田	斎串状木製品	17.8	1.2	0.5	両端炭化。	
265	117	3区上層水田	斎串状木製品	(11.5)	0.6	0.6		№67、A－38
266	117	3区上層水田		(14.7)	0.8	0.6		№46、Z－38
267	117	3区上層水田	斎串状木製品	(13.5)	0.8	0.5	先端部炭化。	№52、Z－38
268	117	3区上層水田	斎串状木製品	11.0	0.8	1.3	先端部ケズリ、炭化あり。頭頂部に裂け目あり。	P－41
269	117	3区上層水田		(12.8)	0.5	0.6		№46、Z－38
270	117	3区上層水田	斎串状木製品	(5.0)	1.0	0.7	先端部にケズリ、炭化あり。	D－39
271	117	3区上層水田	斎串状木製品	(7.3)	0.8	0.5	先端部にケズリ、炭化あり。	B－40
272	117	3区上層水田	斎串状木製品	11.6	1.1	0.6	先端部にケズリあり。	C－38
273	117	3区上層水田		9.8	0.6	0.4	先端部にケズリあり、わずかに炭化。	№89、A－40
274	117	3区上層水田		(11.2)	0.5	0.4		№66、A－38
275	117	3区上層水田	斎串状木製品	12.7	1.0	1.1	両端部ケズリ。炭化あり。	B－41
276	117	3区上層水田	箸	9.4	0.4	0.5		№59A－38
277	117	3区上層水田	斎串状木製品	12.4	1.2	0.9	先端部に炭化が著しい。	A－35
278	117	3区上層水田	斎串状木製品	10.8	1.0	0.4	頭頂部斜めにカット。	№70　Z－39
279	117	3区上層水田	斎串状木製品	(9.8)	0.9	0.5	頭頂部炭化。	№27　A－43
280	117	3区上層水田	斎串状木製品	(14.6)	1.0	0.2	先端部炭化。	№11　A－37
281	117	3区上層水田	斎串状木製品	(14.8)	0.9	0.6		№69　Z－39
282	117	3区上層水田	斎串状木製品	(13.7)	1.1	0.5		№23　Z－40
283	117	3区上層水田		(10.4)	1.3	0.7		№62　A－38
284	117	3区上層水田	斎串状木製品	(15.9)	1.2	0.7		№55　A－38
285	117	3区上層水田	斎串状木製品	(15.2)	1.4	0.7	先端部炭化。	№22　A－40
286	117	3区上層水田	斎串状木製品	22.9	1.1	0.7	先端部炭化。	№85　Z－40
287	117	3区上層水田	斎串状木製品	21.3	1.0	0.4	先端部炭化。	№109　C－44
288	117	3区上層水田	斎串状木製品	22.8	1.1	0.7	頭頂部割れ。	№44　A－38
289	117	3区上層水田	斎串状木製品	25.0	1.2	0.6	先端部炭化。	№56　A－38
290	117	3区上層水田	斎串状木製品	(27.3)	1.3	0.4	先端部炭化。	№16　Z－38
291	117	3区上層水田	斎串状木製品	14.5	1.0	0.6		№102　Z－43
292	117	3区上層水田	斎串状木製品	14.5	1.2	0.4	頭頂部に割れ目。	№71　Z－39
293	117	3区上層水田	斎串状木製品	(8.5)	1.7	0.5	頭頂部炭化。	№32　B－44
294	117	3区上層水田	斎串状木製品	11.9	1.5	0.9		№30　A－44
295	118	3区上層水田	斎串状木製品	28.7	1.6	0.6	頭頂部炭化。	№48　Z－38
296	118	3区上層水田	斎串状木製品	(22.5)	1.2	0.3	頭頂部炭化。	№64　A－38
297	118	3区上層水田	斎串状木製品	(16.7)	1.4	0.7	先端部炭化。	№68　B－38
298	118	3区上層水田		(21.6)	1.9	1.0		№65　A－38
299	118	3区上層水田	斎串状木製品	(8.9)	1.7	1.1	頭頂部炭化。	№27　A－43
300	118	3区上層水田	斎串状木製品	(8.0)	1.0	0.4		№60　A－38
301	118	3区上層水田		(11.1)	1.3	0.4		№19　A－38
302	118	3区上層水田	斎串状木製品	(11.8)	1.9	0.7	先端部炭化。	№18　A－38
303	118	3区上層水田	斎串状木製品	(15.8)	1.4	0.7	頭頂部炭化。	№29　A－43
304	118	3区上層水田		(5.2)	2.2	1.3	頭頂部炭化。	№6　A－34
305	118	3区上層水田		(11.0)	1.2	0.9		№63　A－38
306	118	3区上層水田		(8.0)	1.5	0.7		№53　Z－38
307	118	3区上層水田		(8.6)	2.0	0.8	先端部炭化。	№58　A－38
308	118	3区上層水田		(6.9)	1.5	0.7	先端部炭化。	№75　B－39
309	118	3区上層水田		13.3	2.3	0.9	先端部炭化。	№01　A－38
310	118	3区上層水田	棒状木製品	20.0	1.7	0.7		№24　Z－40
311	118	3区上層水田	棒状木製品	(15.0)	1.7	0.5		№84　Z－40

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
312	118	3区上層水田	棒状木製品	(13.0)	1.6	1.7		№14　D−36
313	118	3区上層水田	棒状木製品	(19.0)	2.1	1.1		№72　A−39
314	118	3区上層水田	棒状木製品	(13.5)	2.5	1.2	頭頂部斜めにカット痕。	№104　Z−43
315	118	3区上層水田	棒状木製品	20.0	1.9	1.4		№101　B−39
316	118	3区上層水田	棒状木製品	(18.0)	2.1	1.4		№21　B−40
317	118	3区上層水田	棒状木製品	(17.8)	2.3	1.1		№90　B−40
318	118	3区上層水田	棒状木製品	(14.9)	2.7	0.8		№8　A−36
319	118	3区上層水田	棒状木製品	(15.9)	2.7	0.5		№10　A−37
328	118	3区下層水田	漆椀	(1.2)			内・外側とも黒漆ベースに赤漆で絵付け。	№182　A−39
329	119	3区下層水田	曲物、底板	(32.3)	(8.2)	1.3	側板の跡あり。クギ穴、桜の皮が残っている。刃物痕(他に転用か。)	
330	119	3区下層水田	曲物、底板	(13.8)	(7.1)	0.8		№274　D−41
331	119	3区下層水田	板状木製品	(21.1)	9.5	0.4		№298　D−43
332	119	3区下層水田下トレンチ10層	板片	19.7	8.3	1.0	側面の削痕。　刃物痕。	№3
333	119	3区下層水田トレンチ8層	木片	(42.2)	(9.9)	(6.8)		
334	119	3区3水田	板状木製品	13.2	6.1	1.2	全体に炭化。	№116　D−36
335	120	3区下層水田	斎串状木製品？	10.7	0.3	0.5	先端部を削って細くなっている。	C−40
336	120	3区下層水田	箸	10.3	0.5	0.4	先端部にケズリ。	№159　A−38
337	120	3区下層水田	箸？	(9.8)	1.1	0.8	四角形にケズリ。	A−42
338	120	3区下層水田		13.5	0.6	0.6		№280　B−41
339	120	3区下層水田	箸	(9.8)	0.6	0.5	先端部を細く削っている。	340と同一個体。
340	120	3区下層水田	箸	(9.8)	0.6	0.5		№220　B−39
341	120	3区下層水田		13.9	0.8	0.6	先端部炭化。	C−35
342	120	3区下層水田		14.5	0.6	0.3	先端部炭化。	№212　B−38
343	120	3区下層水田	斎串状木製品	13.0	0.7	0.4	先端部削加工。	№227　A−41
344	120	3区下層水田	箸	(13.3)	0.6	0.4	先端部ケズリ。	№238　Z−41
345	120	3区下層水田		12.7	0.7	0.5		№289　Z−41
346	120	3区下層水田	斎串状木製品	16.7	0.7	0.5	先端部ケズリ、炭化。	№204　Z−40
347	120	3区下層水田		14.2	0.7	0.4	先端加工。	№217　C−39
348	120	3区下層水田	斎串状木製品	11.6	1.2	1.0	先端部ケズリ。切り込み。	№148　A−38
349	120	3区下層水田		6.9	0.9	0.4	先端部ケズリ。炭化。	№146　B−72
350	120	3区下層水田	斎串状木製品	16.2	1.0	0.9	先端部炭化。頭頂部カット。	
351	120	3区下層水田	斎串状木製品	21.2	0.7	0.3	先端部炭化。	№209　A−41
352	120	3区下層水田	箸	17.4	0.6	0.6	ケズリ。	№284　C−42
353	120	3区下層水田	斎串状木製品	14.2	1.4	0.8	先端部炭化。	№178　A−39
354	120	3区下層水田	斎串状木製品	(14.2)	0.8	0.5	全体的にケズリ。頭頂部カット。	№311　B−37
355	120	3区下層水田	斎串状木製品	14.2	1.1	0.6	先端部炭化。	№303　Z−41
356	120	3区下層水田		(12.3)	1.0	1.2	中央部・先端部にケズリ。炭化あり。	№143　B−36
357	120	3区下層水田	斎串状木製品	12.1	0.8	0.5	先端部炭化。	№158　A−38
358	120	3区下層水田	斎串状木製品状木製品	11.5	1.2	0.7	先端部炭化。	A−35
359	120	3区下層水田	斎串状木製品	7.8	0.8	0.9	先端部・頭頂部炭化。	№174　A−38
360	120	3区下層水田		7.1	1.3	1.0	先端部ケズリ、炭化あり。頭頂部カット。	№277　D−42
361	120	3区下層水田	斎串状木製品	8.8	1.1	0.6	先端部ケズリ、炭化。頭頂部に裂け目あり。	№156　A−38
362	120	3区下層水田	斎串状木製品	12.8	0.9	0.4	先端部炭化。頭頂部に裂け目あり。	№256　D−38
363	120	3区下層水田		16.1	1.2	1.0	先端部～中央部まで炭化。頭頂部に裂け目あり。	№290　A−41
364	120	3区下層水田		17.6	0.9	0.8	カット面あり。	№195　A−37
365	120	3区下層水田	棒状木製品	14.0	2.3	1.7	頭頂部に切り込み。	№288A−43

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
366	120	3区下層水田	棒状木製品	(18.1)	1.2	0.9		№304　A−41
367	120	3区下層水田	斎串状木製品	(9.9)	1.0	0.8	先端部にケズリ、炭化。	C−35
368	120	3区下層水田	棒状木製品	(11.5)	1.2	0.6	先端部に加工痕。	Y−41
369	120	3区下層水田	斎串状木製品？	(9.1)	1.5	0.6	先端部を斜めにカット。棒状ではなく厚さは一定。	C−42
370	120	3区下層水田	斎串状木製品	16.8	1.7	0.7	先端部をカット。	№170　A−38
371	120	3区下層水田		14.0	1.4	1.1	先端部ケズリ。	B−38
372	120	3区下層水田	斎串状木製品	(12.0)	1.8	0.9	先端部ケズリ・炭化。	
373	120	3区下層水田	斎串状木製品	(18.5)	1.5	0.6	頭頂部炭化。割れ目あり。	№211　B−38
374	120	3区下層水田		(16.5)	1.6	0.8		№152　B−38
375	121	3区下層水田	斎串状木製品	23.8	1.4	0.8	先端部炭化。	№306　A−40
376	121	3区下層水田		(22.0)	1.3	0.5	先端部炭化。	№215　C−38
377	121	3区下層水田	斎串状木製品	22.2	1.5	1.2	先端部削痕。	№118　B−32
378	121	3区下層水田	斎串状木製品	(19.8)	1.1	1.3	先端部炭化。	№219　B−39
379	121	3区下層水田	斎串状木製品	(22.1)	1.5	0.8	先端部炭化。	№279　B−41
380	121	3区下層水田		(18.0)	0.8	0.4	全体に削痕。	№151　B−38
381	121	3区下層水田	斎串状木製品	23.5	1.1	0.8	先端部炭化。頭頂部カット。	Z−42
382	121	3区下層水田	斎串状木製品	23.8	1.2	1.0	頭頂部炭化。	№292　B−42
383	121	3区下層水田	斎串状木製品	(24.6)	1.3	0.8	頭頂部炭化。	№297　D−43
384	121	3区下層水田	斎串状木製品	27.0	2.6	1.2		№210　Z−37
385	121	3区下層水田	斎串状木製品	(28.5)	1.1	1.0	先端部カット。	№305　A−42
386	121	3区下層水田	斎串状木製品	28.6	1.3	0.9	先端部炭化。全体に削痕。	№176　C−37
387	121	3区下層水田	斎串状木製品	23.8	1.1	0.7	頭頂部炭化。	№267　D−38
388	121	3区下層水田	斎串状木製品	24.3	1.2	0.7	頭頂部カット。	№286　A−43
389	121	3区下層水田		20.6	1.0	0.8	頭頂部加工。	Z−38
390	121	3区下層水田	斎串状木製品	23.1	1.2	0.7	頭頂部炭化。	№230　A−41
391	121	3区下層水田		15.3	1.7	1.0		№291　Z−42
392	121	3区下層水田		13.5	2.1	0.7	先端部削痕。	№177　C−37
393	121	3区下層水田	杭状木製品	15.3	2.4	2.9	先端部ケズリ、炭化。	394と同一固体
394	121	3区下層水田	杭状木製品	15.3	2.4	2.9	先端部ケズリ、炭化。	№134　Z−36
395	121	3区下層水田	板状木製品	14.2	2.4	0.6	先端部炭化。	№181　A−39
396	121	3区下層水田		(17.2)	2.2	1.2		№160　A−37
397	121	3区下層水田	板状木製品	(15.2)	3.0	1.4		№218　C−39
398	121	3区下層水田	板状木製品	(16.9)	2.6	0.3	切り込み。	№255　D−32
413	155	4区上層水田	漆皿				底部。	C−51
414	155	4区近世水田面	漆椀				口縁部・外:黒漆に朱の模様。内:朱漆。	
415	155	4区上層水田		(7.5)	4.7	1.6	先端加工。	
416	155	4区上層水田	箸	15.1	0.7	0.4	先端部削痕。	B−53G
417	155	4区上層水田	斎串状木製品	(18.2)	0.4	0.4		C−60
418	155	4区上層水田	斎串状木製品	15.4	1.5	1.1	部分的に炭化。	
419	155	4区上層水田	斎串状木製品				両端部炭化。先端部削痕。	C−54
420	155	4区上層水田	斎串状木製品	(24.4)	1.1	1.2	頭頂部炭化。	
425	155	4区下層水田	漆椀				内・外側に黒漆。内底に円形の削痕。	№22　Y−52
426	155	4区下層水田	火きり臼	(16.1)	2.1	1.4	丸いくぼみ3ヶ。	
427	155	4区下層水田	鏃形木製品	13.0	3.0	0.7		A−55
428	155	4区下層水田	火きり臼	(10.9)	2.5	1.5	丸いくぼみ。	
429	155	4区下層水田	人形	18.7	1.1	1.2	上部炭化。	№75　B−59
430	155	4区下層水田	桶	(38.2)	(4.8)	0.9	底板、刃物痕。(まな板に転用か。)	№69　Z−59
431	156	4区下層水田	箸？	(7.1)	0.6	0.3	先端部削り。	A−55
432	156	4区下層水田	斎串状木製品	(5.4)	0.7	0.5	頭頂部炭化。	№71　A−59
433	156	4区下層水田	斎串状木製品	(12.2)	1.1	0.7	先端部炭化。	№50A−55
434	156	4区下層水田	箸	(10.1)	0.6	0.5		Y−53
435	156	4区下層水田	斎串状木製品	(9.9)	0.9	0.9		№99　Y−63
436	156	4区下層水田	斎串状木製品	(11.0)	0.8	0.4		№8　Z−50

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
437	156	4区下層水田	箸	12.9	0.6	0.6	両端部削り。	
438	156	4区下層水田	斎串状木製品	(9.0)	0.6	0.4	先端部炭化。	№29　C−53
439	156	4区下層水田	斎串状木製品	(7.7)	0.9	0.7	頭頂部炭化。	№90　C−62
440	156	4区下層水田	斎串状木製品	(9.9)	1.0	0.5		№37　Y−52
441	156	4区下層水田	斎串状木製品	13.0	0.6	0.4	先端部削り。	
442	156	4区下層水田	斎串状木製品	20.4	1.1	0.6	先端部炭化。	№25　Z−52
443	156	4区下層水田	斎串状木製品	8.6	1.6	1.1	両端部炭化。	№88　A−61
444	156	4区下層水田	斎串状木製品	11.5	1.4	0.5	先端部炭化。全体に削痕。頭頂部カット。	A−57
445	156	4区下層水田	斎串状木製品	10.3	1.3	1.1	頭頂部炭化。	№73　B−59
446	156	4区下層水田	斎串状木製品	(13.5)	0.6	1.0		№39　X−53
447	156	4区上層水田	斎串状木製品？	16.6	1.0	0.5	切り込み痕。	C−51
448	156	4区下層水田	斎串状木製品	15.9	1.4	0.8	頭頂部炭化。	№26　C−52
449	156	4区下層水田	斎串状木製品	26.6	0.7	1.0		№78　C−60
450	156	4区下層水田	斎串状木製品	(18.1)	1.4	0.4		№28　C−53
451	156	4区下層水田	斎串状木製品	18.5	1.4	0.8		№33　Y−52
452	156	4区下層水田	斎串状木製品	(12.7)	1.2	0.5		№9　A−50
453	156	4区下層水田	斎串状木製品	(14.2)	1.2	0.5		Z−53
454	156	4区下層水田	斎串状木製品	23.0	1.7	1.6	先端部炭化。	№46　Y−55
455	156	4区下層水田	斎串状木製品	19.0	1.3	1.2	頭頂部炭化。	№7　Y−51
456	156	4区下層水田	斎串状木製品	16.1	0.9	0.8		№62　Z−58
457	156	4区下層水田	斎串状木製品	12.1	1.8	0.8	頭頂部炭化。	№60　Z−57
458	156	4区下層水田	斎串状木製品	14.7	1.1	0.4		№4　Y−51
459	156	4区下層水田	斎串状木製品	(14.6)	2.7	1.2	先端部明瞭な削り。	№52　A−55
460	156	4区下層水田	斎串状木製品	11.2	2.1	0.4		Y−60
461	156	4区下層水田	斎串状木製品	16.0	1.2	0.7	削痕。	Z−58
462	156	4区下層水田		8.6	3.1	0.5		№77　C−59
463	156	4区下層水田	斎串状木製品	(10.7)	1.7	0.6	頭頂部炭化。	№101　X−63
464	156	4区下層水田	斎串状木製品	15.7	1.0	0.5	頭頂部炭化。	№23　Y−52
465	156	4区下層水田	斎串状木製品	(6.4)	0.8	1.0	焼判の跡か？	№92　Z−63
466	156	4区下層水田	板状木製品	(9.1)	3.1	0.4		C−62
467	156	4区下層水田	棒状木製品	21.3	1.8	1.4		№40　Y−53
468	156	4区下層水田	斎串状木製品	22.2	1.7	1.0	わずかに炭化部分がある。	№32　Z−53
469	156	4区下層水田	斎串状木製品	25.2	1.2	0.8		№42　Z−53
470	156	4区下層水田	斎串状木製品	18.5	1.4	0.4	上部が裂けている。	№30　A−53
471	156	4区下層水田	斎串状木製品	(19.1)	2.4	0.9		№76　C−59
472	156	4区下層水田		(20.0)	(6.1)	2.7	側面を斜めにカット。	№82　B−61
500	158	4区下部礫	梯子	41.9	10.1	6.1	削痕。	
501	158	4区下部礫	板状木製品	(18.8)	13.1	2.2	全体に炭化。	
502	158	4区下部礫	板状木製品	(12.9)	4.4	0.5		
503	158	4区下部礫	未製品？	(14.6)	(23.5)	6.1	手斧痕。	
504	158	4区下部礫	杭	(24.2)	3.9	1.5		
505	158	4区下部礫	板材	(37.0)	9.7	1.0		

第18表　金属製品観察表

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
05	76	2区2号溝	鉄鏃	(8.8)	0.7	0.5		
122	77	2区1号井戸	兜の前立て	5.4	5.0	0.1弱	細かい模様が彫り込んである。中央の上下にそれぞれ1つずつの穴。	№2
408	155	4区上層水田	鎌	(7.0)	2.5	0.2	把手の装着部の先端が曲がっている。	A−54

第19表　石製品観察表

番号	挿図番号	出土地点	種　別	法　量(cm)			特　　徴	備　　考
				長さ	幅	厚さ		
86	74	2B区2号溝	砥石	11.5	5.8	3.3	といだ跡の線状痕が残存。	S−1
87	74	2区5号溝		径 6.0	5.7	4.5	球形	
88	74	2区2号溝	ひで鉢	11.4	11.4	高さ 6.5	安山岩	
89	74	2B区2号溝		(4.0)		(6.5)	安山岩	ほぼ1/6残存。
90	74	2区2号溝	ひで鉢	(18.0)	(12.1)	13.1	安山岩	ほぼ半壊。
91	74	2区2号溝	ひで鉢	(19.0)	(8.7)	11.0	安山岩	ほぼ1/5残存。
92	74	2区	ひで鉢	(13.0)	(7.7)	9.2	安山岩	№2、ほぼ1/4残存。
93	74	2B区2号溝	ひで鉢	(20.0)	(12.2)	16.1	安山岩	ほぼ1/4残存。
94	74	2区2号溝	ひで鉢	19.0	19.4	12.2	安山岩	ほぼ半壊。
95	75		ひで鉢	(20.0)	(9.3)	(12.5)	安山岩	ほぼ半壊。
96	75	2区2号溝	ひで鉢	(19.0)	(11.0)	12.8	安山岩	ほぼ1/4残存。
97	75	2区2号溝	ひで鉢	(20.0)	(7.1)	(13.0)	安山岩	ほぼ1/3残存。
98	75	2区2号溝	ひで鉢	24.0	23.7	13.5	安山岩	ほぼ半壊。
99	75	2区2号溝	石臼	(210.0)	(12.8)	(7.6)	安山岩	ほぼ半壊。
100	75	2区2号溝	石臼	(31.0)	(14.6)	8.8	安山岩、石臼の下皿。下部に加工痕、中央に一孔。	ほぼ1/5残存。
101	75	2区2号溝	石臼	30.0	14.5	9.4	安山岩、石臼の下皿。下部に加工痕、中央に一孔。	ほぼ1/6残存。
102	75	2区2号溝	石臼	(37.0)	(18.2)	14.1	安山岩、石臼の上皿。下側に放射線状の細い彫り込み。中央より外に一孔。把手の装着部。	
103	75	2区2号溝	五輪塔	19.5 20.0	19.9	13.4		
104	75	2区2号溝	五輪塔	19.9 (10.8)	19.9	10.2	中央に一孔。	風輪部
489	157	4区下部礫(1)下面	石器	8.0	5.2	1.5	削痕	

第20表　出土銭観察表

番号	挿図番号	出土地点	名　称	法量 (直径cm)	鋳造年代	備　　考
47	72	2B区1号木棺	永楽通寶	2.5	1408	
48	72	2B区1号木棺	祥符元寶	2.5	1009	
49	72	2B区1号木棺	元豊通寶	2.4	1078	
50	72	2B区1号木棺	景徳元寶	2.5	1004	
51	72	2B区1号木棺	熙寧元寶	2.4	1068	
52	72	2区2号木棺	永楽通寶	2.5	1408	
53	72	2区2号木棺	天聖元寶	2.5	1023	
54	72	2区2号木棺	皇宋元寶	2.4	1253	
55	72	2区2号木棺	不明	2.3		
56	72	3区上層水田	皇宋通寶	2.4	1038	
57	72	4区上層水田	不明	2.3		
58	72	4区下層水田	不明	2.4		
59	72	4区下層水田	元符通寶	2.4	1098	
60	72	4区下層水田	紹聖元寶	2.4	1094	
61	72	4区下層水田	治平元寶	2.4	1064	
62	72	4区下層水田	嘉祐元寶	2.4	1056	
63	72	4区下層水田	政和通寶	2.5	1111	
64	72	4区下層水田	皇宋通寶	2.5	1038	

第4章　分析・考察

第１節　二本柳遺跡のテフラ

帝京大学山梨文化財研究所
河　西　　学

１．はじめに

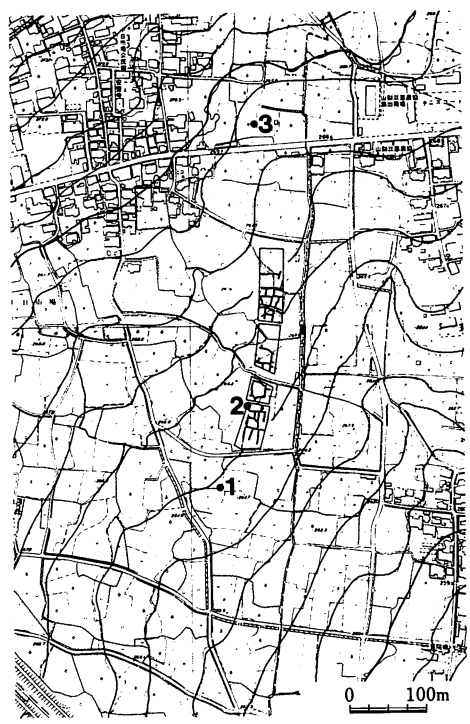
甲府盆地を流れる釜無川の右岸には、急峻な赤石山地前縁の巨摩山地からの大量の砕屑物が御勅使川・滝沢川などの諸河川によって運搬されて盆地への出口に扇状地が形成されている。

本遺跡は、御勅使川扇状地の扇端部と滝沢川扇状地との境界部に位置している。本遺跡での堆積物は、河道を示すような粗粒堆積物、砂層・粘土質シルト、あるいは泥炭質粘土などとさまざまな河成堆積物が堆積している。

本地域は、富士火山の北西に位置し、御岳テフラ・富士テフラの分布範囲に属している。巨摩山地前縁の市之瀬台地上の褐色ローム層中には、御岳第１軽石Ｏｎ－Ｐｍ１や姶良Ｔｎテフラ ＡＴなどの広域テフラとともに、肉眼で層として確認できないものの、富士テフラの降灰の影響が認められている。従来沖積低地上の遺跡でのテフラの検出は、肉眼的に検出されたテフラの記載（たとえば、田代ほか，1988）であった。しかし1990年度の甲西バイパス試掘調査に関連して各層ごとの採取試料で行ったテフラ分析において、地表下3.35～3.5mに挟在される黒色泥炭層中に縄文時代後期に伊豆天城火山を給源として噴出したカワゴ平軽石Kg（約2800～2900年前）の軽石型（多孔質型）火山ガラスが検出され、この方法の有効性が確認された。今回も遺跡の地層断面に年代観を示すことを目的として同様の方法で沖積層中のテフラ分析を行った。上述の甲西バイパス試掘調査結果とともに、二本柳遺跡テフラ分析結果について以下に報告する。

２．試料

第159図に試料採取地点を示す。現状では二本柳遺跡１区Ｇ地点、２区Ｂ地点とも扇状地面の微高地に位置し、甲西バイパス試掘第54トレンチ地点は微凹地に位置している。試料は、本遺跡１区Ｇ地点で18点、同２区Ｂ地点で９点、および甲西バイパス試掘第54トレンチ地点で30点がそれぞれ採取され以下の分析に供された。試料は各層ごとに、粗粒で砂質の部分を避けて適当な位置で採取された。



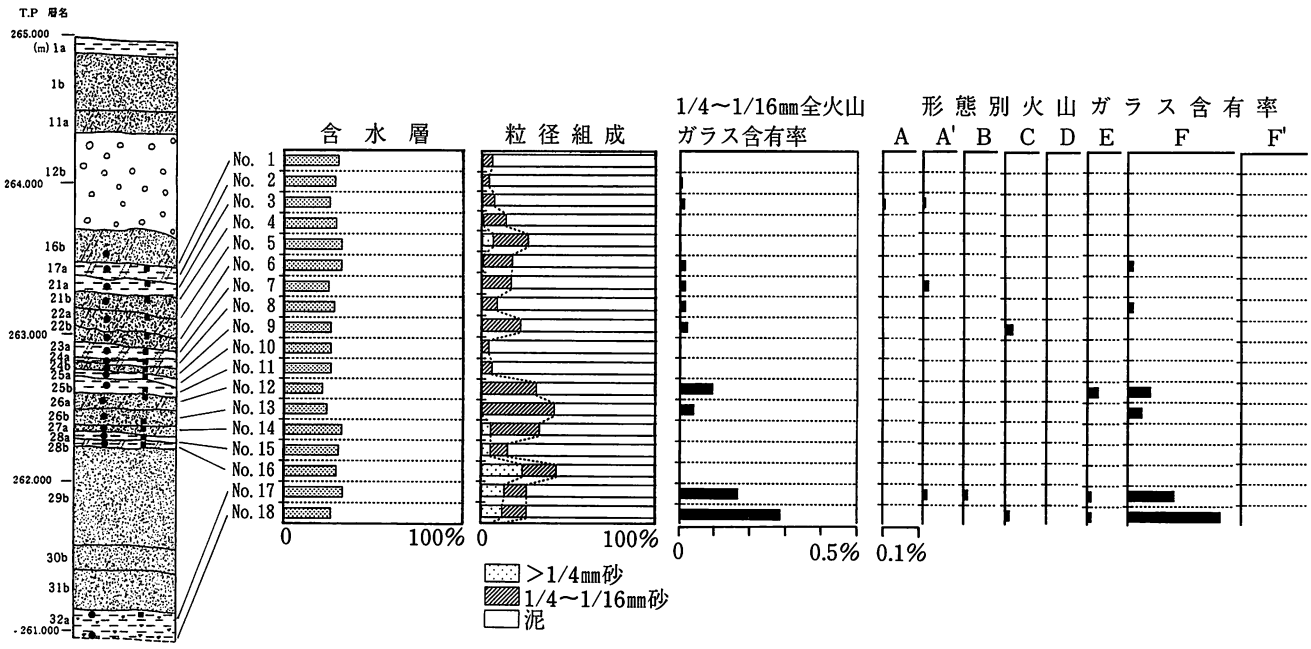
第159図　試料採取地点
１：二本柳遺跡１区Ｇ地点
２：二本柳遺跡２区Ｂ地点
３：甲西バイパス試掘第54トレンチ地点

３．分析法

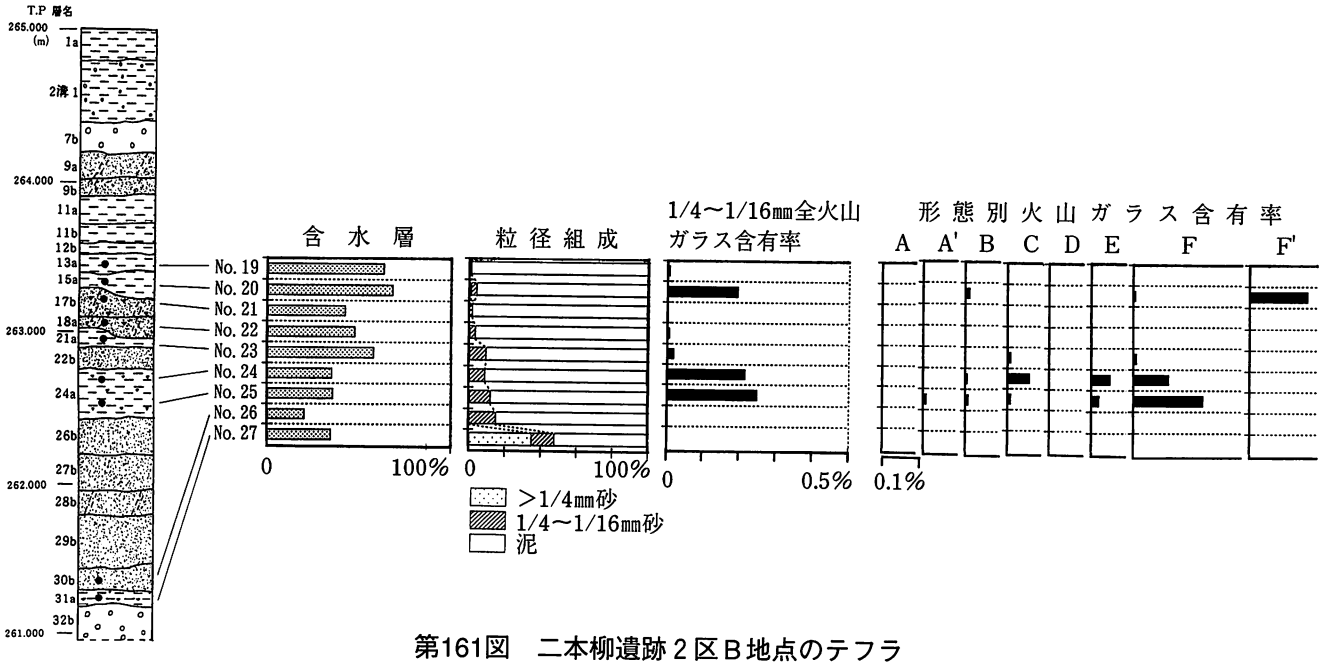
試料は、湿ったまま約20ｇを秤量後、水を加え超音波装置を用いて分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#60・#250）を用いて＞1/4㎜および1/4～1/16㎜の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約5～10ｇを秤量ビンにとり秤量後、乾燥器で105℃、５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4～1/16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行なった。試料ごとに火山ガラス・風化物その他の粒子を含めた合計が1000粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木

第21表　二本柳遺跡試料計数火山ガラス粒数（十は計数以外の検出を示す）

地点		1区G地点																		2区B地点								
試料番号		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26	No.27
火山ガラス	A 無色			1																1	1							
	A 褐色																											
	A' 無色			1					+	+								1			2	+	1					
	A' 褐色							1												1						1		
	B 無色																	1			5				1	1		
	B 褐色																											
	C 無色	+	1			+				1									1	2	2		1	1	7			
	C 褐色																			2	+	+				1		
	C 赤色																				+							
	D 無色																											
	E 無色			+									1					1	1						6	2		
	F 無色		1	+			1		2				2	1				10	19	1	3	1		1	11	16		
	F 褐色																											
	F 緑褐色																											
	F' 無色																											
	F' 褐色																			2	56							
	F' 緑褐色																											
その他		1000	998	998	1000	1000	999	999	998	999	1000	1000	997	999	1000	1000	1000	987	979	991	931	999	998	998	975	979	1000	1000
合計		1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000



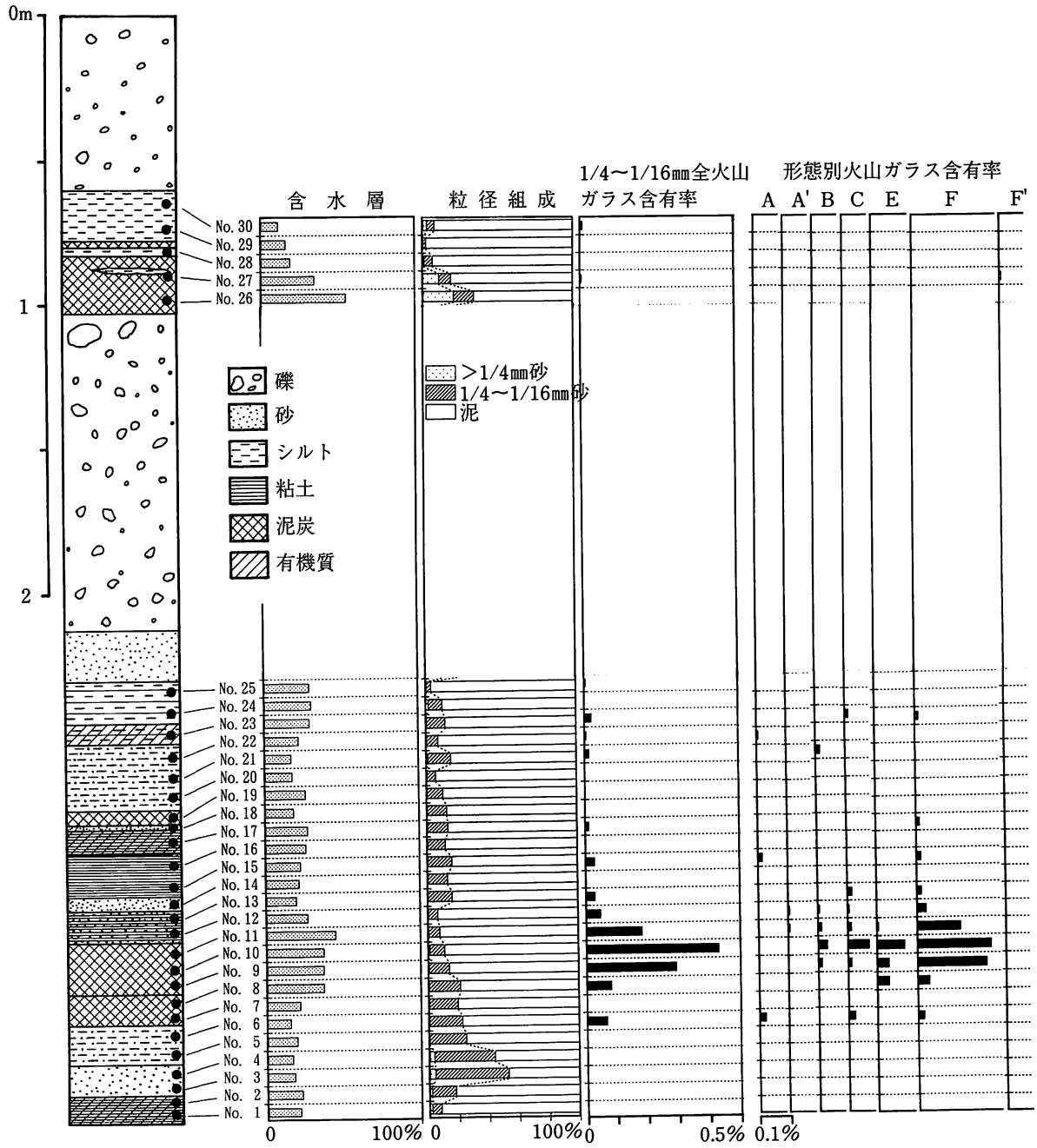
第160図　二本柳遺跡１区Ｇ地点のテフラ



第161図　二本柳遺跡２区Ｂ地点のテフラ

第22表　甲西バイパス試掘第54トレンチ地点計数火山ガラス粒数（十は計数以外の検出を示す）

	試料番号	No. 30	No. 29	No. 28	No. 27	No. 26	No. 25	No. 24	No. 23	No. 22	No. 21	No. 20	No. 19	No. 18	No. 17	No. 16	No. 15	No. 14	No. 13	No. 12	No. 11	No. 10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3	No. 2	No. 1
	A　無色									1							1									1				+	
	A　褐色																														
火	A'　無色																			1	1		+		+						+
	A'　褐色		+						+																						
	B　無色			1			1				1									1	2	3	1								
山	B　褐色																														
	C　無色	1					1		1			1		+					1	1	2	7	1			1					
	C　褐色																														
ガ	C　赤色							+	+																						
	D　無色																														
	E　無色												+								1	9	3	2	+						
ラ	F　無色	1	1						1						1	+	1		1	5	20	24	17	2	+	1	+		+		
	F　褐色																														
	F　緑褐色																														
ス	F'　無色																														
	F'　褐色																														
	F'　緑褐色				1																										
	カンラン石							+	+																						
	その他	998	999	999	999	1000	998	1000	998	999	999	999	1000	1000	999	1000	998	1000	998	992	974	957	978	996	1000	997	1000	1000	1000	1000	1000
	合計	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000



第162図　甲西バイパス試掘　第54トレンチ地点のテフラ

第23表　火山ガラス屈折率測定値

地点	試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率（モード）	対比されるテフラ
二本柳遺跡１区Ｇ地点	No.12	軽石型（Ｆ・Ｅ型）	無色	1.501-1.503	天城カワゴ平軽石　Ｋｇ
二本柳遺跡１区Ｇ地点	No.18	軽石型（Ｆ・Ｅ型）	無色	1.498-1.502	天城カワゴ平軽石　Ｋｇ
二本柳遺跡２区Ｂ地点	No.25	軽石型（Ｆ・Ｅ型）	無色	1.500-1.502	天城カワゴ平軽石　Ｋｇ
甲西バイパス試掘第54トレンチ地点	No.9	軽石型（Ｆ・Ｅ型）	無色	1.501-1.503(1.502)	天城カワゴ平軽石　Ｋｇ

（1980）の方法に従い、細粒結晶を包有するＦ型火山ガラスはＦ’型とした。屈折率測定は新井（1972）の方法に従った。

４．分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第21・22表に示す。これをもとに湿重基準の含水率、粒径組成、1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第160～162図に示す。なお1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4～1/16㎜粒径の火山ガラスの割合で表示した（注１）。火山ガラスの屈折率測定値を第23表に示す。以下に各地点の特徴について述べる。

［１区Ｇ地点］

含水率は大きな変化はない。粒径組成では層ごとに含砂率が異なる。>1/4㎜粒径の砂は下部のNos.16～18に多い。

1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率では、Nos.17,18に顕著な極大（最大値0.29％）が存在し、Nos.12,13に微小な極大（極大値0.09％）が認められる。これらのピークの内容を形態別にみると、多孔質軽石型のＦ型無色火山ガラスが卓越し、繊維状のＥ型無色火山ガラスを伴うことが共通する。火山ガラスの屈折率は、№18において1.498～1.502、№12において1.501～1.503を示す。以上の特徴からこれらの火山ガラスは、カワゴ平軽石Kgに同定される。下位の№18の極大は、黒色泥炭質粘土中にあり、ピークが顕著であることから、カワゴ平軽石の降灰層準を示していると考えられる。これに対し上位の№12の極大は、砂層・砂質シルト層中にありピークが小さいことなどから、おそらく砂粒子とともにKg火山ガラスが再堆積したものと考えられる。Kg火山ガラスは、細粒であり、降灰層準でさえ含有率が低率である。したがって№12を含む26ａ層の堆積期は、29ｂ～31ｂ層の厚い砂層を挟在するものの、Kg降灰期との時間間隙は大きくないものと推定される。

［２区Ｂ地点］

含砂率は層ごとに変化する。粒径組成では、Nos.19～26の細粒堆積物中には＞1/4㎜粒径の砂がほとんど含有されないのに対し、Nos.27～30では>1/4㎜が多く含有される。

1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率では、２つの顕著な極大が認められる。下位Nos.24,25の極大（最大値0.25％）は、黒色泥炭質粘土層中にあり、Ｆ型火山ガラスを主体としＥ型・Ｃ型（中間型）無色火山ガラスを伴い、№24では火山ガラスを付着させた斜長石が検出されている。№25における火山ガラスの屈折率は、1.500～1.502である。これらのことからNos.24,25の極大は、１区Ｇ地点と同様にカワゴ平軽石Kgに同定される。

№20での極大（0.20％）は、発砲不良な褐色Ｆ’型火山ガラスと、新鮮な自形斜長石粒子とが極めて多い特徴を示す。これらはそれぞれスコリア質テフラ中のスコリア（あるいは石質岩片か？）と斑晶鉱物と考えられる。また極めてまれに赤色Ｃ型火山ガラスおよび自形の斜方輝石が含まれる。カンラン石は認められない。岩質および層位からみてこのスコリア質テフラは、新期富士テフラに属すると推定される。富士山麓地域では富士黒土層以上の多数のテフラの記載がなされている（町田,1964；上杉ほか,1980；宮地,1988）。本遺跡のスコリア質

テフラは、カワゴ平軽石より上位で平安期の坏を出土する水田面より下位にあることから、富士山弥生・古墳時代スコリア群（町田ほか,1984）に属する可能性が考えられる。甲府盆地内の沖積層中では八代町身洗沢遺跡で弥生後期包含層よりも下位の赤色スコリアが肉眼で確認されているが、風化が進んでいるために顕微鏡下での特徴についてはよくわかっていない（河西，1990b)。その後甲西町大師東丹保遺跡の発掘調査において弥生時代中期末の富士火山起源のスコリア（大師スコリア）が検出されている（河西、1997)。№20は、スコリアの発泡が不良であること、および斜長石斑晶が黒褐色ガラスからなる含有物を多く含むことなどの点で大師スコリアと類似する。しかし、大師スコリアの粒径組成が約0.5㎜程度にモードをもって粗粒であるのに対し、№20での粒径組成は、＞1/4㎜砂粒が極めて少なく、かつ＞1/4㎜スコリア粒子はほとんど認められない。№20中に含まれる1/4～1/6㎜粒径のF'型火山ガラスで構成されるスコリア粒子は、もし一次堆積したものであったとすると大師スコリアとは異なるテフラに起源する可能性が高いと考えられる。

Nos.20,22,23では、微細な球状体鉱物の集合した組織（フランボイダル組織）でキイチゴの果実に似た形態をもつ黄鉄鉱粒子が顕著に検出される。この組織をもつ黄鉄鉱の存在から、この層位の堆積物は還元的堆積環境下にあったと考えられる。

[甲西バイパス試掘第54トレンチ地点]

含水率は、Nos.８～11および№26付近で極大を示すが、これらの地点は泥炭質の部分に相当している。粒径組成において、1/4～1/16㎜砂粒子は№３を最大に上方に向かって漸減する。Nos.26～29付近では№26の＞1/4㎜砂粒子・1/4～1/16㎜砂粒子が漸減して上方細粒化が顕著に認められる。

1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率は、№10の0.43％を最大とするNos.9～11の顕著なピークで特徴づけられる。この火山ガラスの極大部を形態別にみると、無色Ｆ型がもっとも多く、Ｅ・Ｄ・Ｂ型の無色火山ガラスがこれに続く。さらに斜長石・角閃石・斜方輝石などの自形結晶が、これらの火山ガラスを付着させたり、あるいは火山ガラス中に包有されたりしてこの層準から検出される。火山ガラスの屈折率は、№9において1.501～1.503（モード1.502）の測定値を示す。以上の特徴からこれらの火山ガラスはカワゴ平軽石Kgに同定される。№9において急激な火山ガラスの増加が認められることからテフラの降灰層準は№9あるいはNos.9～10付近に推定される。Kgの火山ガラスは、、包含層が泥炭層であることから、テフラ降灰後の二次堆積作用の影響を大きく受けることなく、良好な堆積環境で保存されていたと考えられる。

Nos.23,24において、テフラ起源と判断される斜長石片はほとんどみられないが、極めてわずかではあるが赤色Ｃ型火山ガラスとカンラン石が検出される。おそらく富士テフラ起源の粒子と考えられるが、二本柳遺跡２区Ｂ地点№20中に含有される褐色Ｆ’型火山ガラスで特徴づけられるスコリア質テフラとは明らかに異なる。ただし２区Ｂ地点№20中にわずかに含まれる赤色Ｃ型火山ガラスとのは類似性が高いと思われる。異種のテフラが２区Ｂ地点№20中に混在している可能性がある。

５．おわりに

二本柳遺跡とその近接地における計３地点の柱状断面において、全てでカワゴ平軽石Kgが同定され、さらに複数の富士テフラの分布が確認されたたことで、今後周辺地域においてもこれらのテフラが有効な鍵層となりうることが明らかになった。Kg降灰期の縄文後期において、二本柳遺跡周辺は、泥炭層やシルト層などの細粒堆積物が堆積する環境であった。扇状地上の堆積環境は、局所的に変化が著しいことが予想される。堆積物中のKg火山ガラス含有率は、降灰層準でさえも低率であることから、降灰層準が砂礫などからなる粗粒堆積物中であれば検出が困難である場合も予想される。Kgは、富士山麓では肉眼で検出することができる（例えば富士吉田市池之元遺跡）が、同様のテフラ分析によってすでに上野原町関山遺跡、長坂町中込遺跡、高根町丘の公

園遺跡などの台地上の風成黒色土（クロボク土）からも検出されている（河西,1988,1989,1990a)。今回甲府盆地底の水成堆積物中から検出されたことでKgが県内全域で活用できる広域テフラであることが再認識された。

注１　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Ａｘは、

Ａｘ（％）＝（Ｃ／Ｂ）×（Ｅｘ／Ｄ）×１００

で算出される。ただし、

Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）

Ｃ：1/4～1/16㎜粒径砂分の重量（ｇ）

Ｄ：計数した1/4～1/16㎜粒径粒子の総数

Ｅｘ：計数したｘ型火山ガラスの粒数

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，254－269.

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層．考古学と自然科学，13，19－30.

河西学（1988）山梨県上野原町関山遺跡における地層とテフラ．『関山遺跡Ⅱ』，山梨県埋蔵文化財センター調査報告，第40集，20－24.

河西学（1989）丘の公園地域のテフラと地形．『丘の公園第２遺跡』，山梨県埋蔵文化財センター調査報告，第46集，165－184.

河西学（1990a）長坂町中込遺跡試料のテフラ分析．山梨県埋蔵文化財センター調査報告，第52集，36－40.

河西学（1990b）身洗沢遺跡のテフラ．『身洗沢遺跡・一町五反遺跡』，山梨県埋蔵文化財センター調査報告第55集，78.

河西学（1997）大師東丹保遺跡出土のスコリア質テフラ．『大師東丹保遺跡Ⅰ区』，山梨県埋蔵文化財センタ調査報告，第131集，67－69.

町田洋（1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史．地学雑誌，73，293－308，337－350.

町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学―考古学研究と関連するテフラのカタログ―．渡辺直経編　『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』，865－928.

宮地直道（1988）新富士火山の活動．地質学雑誌，94，433－452.

田代孝・櫛原功一・宮沢公雄（1988）上土器遺跡発掘調査報告書．甲府市史研究，6，69－92.

上杉陽・米沢宏・開原志寿恵・中村仁子・重藤伸子・岩井郁乃（1980）富士山東縁地域の古富士テフラ塁層．『自然と文化』，3，33－46，平塚市博物館.

第２節　山梨県二本柳遺跡の大型植物化石

古代の森研究舎
吉　川　純　子

１．はじめに

二本柳遺跡は甲西バイパス建設に伴い発掘され、御勅使川と滝沢川がつくる扇状地の扇端部に位置している。４区からは弥生時代中期の遺物包含層52層が確認され、ここからは現地取り上げ試料が採取された。分析結果は第24表に示されている。3区では平安時代末とみられる下層水田が検出され、馬の歯、骨、磁器片とともに大型植物化石が取り上げられた。また、２区では平安時代末の下層水田面に炭化物が集中した層が確認され、この炭化物集積層を水洗し大型植物化石を得た。戦国時代の上層水田は3区で現地取り上げ試料が採取され、２区では戦国時代の井戸、溝、杭あとなどから土壌ブロック試料を採取し、水洗篩い分けして大型植物化石を得た。2B区では戦国時代の上層水田面と木棺、溝が確認されており、そこから大型植物化石が採取されている。

２．各時代ごとに産出された大型植物化石

弥生時代中期

４区52層から採取された大型植物化石を第24表に示した。ここからはヒメコマツの風化した球果、人間による割跡があったり、げっ歯類に食害を受けたオニグルミ、トチノキを産出した。ヒメコマツは比較的高い山の中腹より上部に生育するゴヨウマツであるが、ここで産出した球果はかなり風化されているため、河川などで運ばれてきたと考えられる。

平安時代後期から中世前半

平安時代とみられる下層水田面からは第25表に示したように様々な状態のオニグルミ、モモを比較的多く産出している。第26表は炭化物の集中した層を水洗して得られた大型植物化石を示しているが、イネ、オオムギ、コムギなどの穀類の他、水田や湿地に生育するウキヤガラ、ホタルイ属、イボクサ、タガラシや畦などに生育するシロザ近似種、イヌコウジュ属などとともに、やはりオニグルミ、モモ、ウメを産出している。また、この地点からは動物の骨、竹やマメ類も確認されており、穀類も炭化していることから豊作祈願などに関連した祭祈跡ではないかと考えられている。本遺跡ではモモとオニグルミが水田面全体に散在しており、当初は人為的に運ばれたり祭礼に使用したかと考えられたが、モモ核の炭化しているものがないところから、水田耕作を行う前にオニグルミやモモが栽培されており、その後の水田耕作で下位の層ごと耕されたために当時の水田層に多く含まれていた、あるいは周囲から洪水によって比較的長期間残りやすいモモやオニグルミを含んだ土砂が供給されてきたとも考えられる。

戦国時代

2B区及び３・４区の上層水田からは、第27表に示されたような木本のトチノキ、モモ、ブドウ属、サクラ属サクラ節を産出し、とくにモモが多い。草本では、穂状のイネとイバラモ、オモダカ科、イボクサ、コナギ、スゲ属、ホタルイ属、タガラシ、タウコギ、ノミノフスマ近似種、キンポウゲ属、ヤナギタデ、ヘビイチゴ属／オランダイチゴ属／キジムシロ属を産出した。

第28表にはかつての福寿院の境内と考えられる敷地の井戸から産出した大型植物化石を示した。１号井戸は、

№1からはカキノキの種子、№3からはウメとモモの核を産出した。草本は№2から多量に産出している。シャジクモ属、イバラモは水深のある、循環している水域に生育する水草である。オモダカ科、コナギ、ミゾソバは浅い水域か、地下水位が極めて高い場所に生育する。ヤナギタデ、ツメクサ、ノミノツヅリ、タガラシは特に水田に多く生育する。これに対し、オヒシバ、エノコログサ属、ヘビイチゴ属／オランダイチゴ属またはキジムシロ属、シロザ近似種、ヒユ属、ザクロソウ、スベリヒユ、カタバミ属、メナモミは、どちらかというと荒れ地のようなやや乾燥した場所に生育する。また、この井戸からは栽培植物としては、ウメ、モモのほかにメロン仲間、ヒョウタンの種子、ヒョウタン仲間の果皮も産出している。2号井戸は、木本はオニグルミ、トチノキ、クマヤナギ属を産出した。草本では浅い水域に生育する、オモダカ科、ホタルイ属、コナギを産出した。水田や田畦に多い、ヤナギタデ、ツメクサ近似種、ノミノツヅリ近似種、タウコギも産出している。やや乾燥した場所に生育する草本は、エノコログサ属、ギシギシ属、シロザ近似種、ヒユ属、ザクロソウ、スベリヒユ、カタバミ属を産出している。2号井戸の栽培植物はソバ、メロン仲間、ヒョウタン、ヒョウタン仲間の果皮を産出している。そのほかには、カヤツリグサ属、スゲ属、ツユクサ、ナデシコ科、アブラナ科、ナス属を産出した。3号井戸からは、木本のオニグルミ、クマヤナギ属、ブドウ属を産出した。水草では、水溜りにも生育できる、シャジクモ属を出土した。栽培植物は1粒ではあるが炭化ムギ類、メロン仲間を産出している。水湿地の植物ではコナギ、ミゾソバを、水田植物ではツメクサ近似種、ノミノツヅリ近似種、タガラシを産出している。ほかには、比較的乾燥した場所に生育するオヒシバ、エノコログサ属、カヤツリグサ属、ツユクサ、ヘビイチゴ属／オランダイチゴ属またはキジムシロ属、シロザ近似種、ヒユ属、スベリヒユ、カタバミ属、ナス属を産出した。6号井戸からは、木本のオニグルミ、ヒメグルミ、モモ、それにヒョウタン仲間の果皮といった植物化石が出土した。戦国時代の井戸では水湿地やその周辺に生育しているような草本と周囲の園地、畑などに生育しているような木本を多く産出している。これらの中で水域に生育するシャジクモ属やイバラモなどは使用中または廃絶後に井戸の内部に生育していたと思われる。それ以外は大雨や洪水時あるいは強風などによって運ばれたり、廃絶後に土砂とともに供給されたと推測される。また、4つある井戸のうち、3つからヒョウタンを産出しており、これは井戸や水関連の儀式に使われたものではないかと考えられる。

第29表には寺の周囲を囲む2号溝と木棺そのほかの産出大型植物化石をまとめてある。2号溝からは木本のマツ属複維管束亜属、オニグルミ、クリ、アンズ、ウメ、モモといった食用とされる大きい種実を産出した。特にウメは大変多く、モモも多く産出している。

2B区では木棺が出土し、内部のかわらけ状の土器の上にイネが穂のままの状態で残存し、散乱した数珠を出土した。数珠は、ボダイジュの果実を加工しない状態で使用していたらしい。

3．出土分類群の形態等の記載

ヒメコマツ：球果がかなり風化した状態であった。上面観では鱗片がやや渦を巻いたように見える。本州では山地に多く生育している。

マツ属複維管束亜属：風化しており、アカマツかクロマツか区別がつかない。2者の雑種も存在する。

オニグルミ：完形や、半分、破片の核を出土した。縫合線があり、表面には彫紋とおうとつがある。大きさや形に変異が多い。川や沢沿いに自生しており、植栽もされ、内部の脂肪分の多い種子を食用とする。食痕のあるものも見つかっていて、ネズミなどのかみあとと思われる。

ヒメグルミ：出土したのは核で、オニグルミの核に比べるとやや小さく壁が薄く、偏平で心形をしている。表面はオニグルミの様な彫紋はほとんどなく、ほぼ平滑である。現在では人里付近にしか確認されず、栽培された変種ではないかとされているが、縄文時代の出土例も稀ではなく、今後の研究課題となるであろう。

クリ：果実の破片を出土した。破片のため大きさは不明であるが、おおよその復元をしても、現在食されている栽培種のクリよりはやや小さく、野生のシバグリよりは大きい。シバグリは剪定、萌芽を繰り返すと果実が大きくなるため、その例ではないかとも考えられる。

エノキ：内果皮の破片を出土した。白い突起がついたへそがあるが、この試料では欠けてしまっている。林に自生するが、墓地、田畦によく植栽される。

ウメ：出土したのは小さい核で、現在のコウメの大きさである。表面は大きいおうとつはなく、細かい断続的な溝と孔が分布する。

モモ：核の完形と半分を出土した。表面にはやや連続した縦に流れる深い溝が分布する。現在栽培されているモモの核よりはやや短く、丸みを帯びるが、長さはほぼ25㎜-30㎜とそれほど小さくはない。オニグルミ同様、食痕のある核が見つかっている。

サクラ属サクラ節：核の上下に浅く短いすじがある。ヤマザクラやミザクラもこの中にはいるが、種の同定には至らなかった。

トチノキ：未熟な幼果、完形種子、種子破片を出土した。川や沢沿いに多く自生する。

クマヤナギ属：核を出土した。平地の林などに自生している。

ボダイジュ：果実は球形でやや不明瞭な5本の肋条があり、念珠をつくるのに用いられる。原産地は中国で禅宗の僧侶が日本にもたらしたとされている。

ブドウ属：種子は心形で腹面に2つの穴があり、背面には1本の溝がある。

カキノキ：種子を出土した。植栽されたものと思われる。

シャジクモ属：表面に螺旋模様のある卵胞子を出土した。水中に生育する緑藻類で水溜り程度の浅い水域から数メートルまで生育範囲は広い。

イバラモ：表面に細かい網目のある種子を出土した。緩い流れのある、比較的水が清浄な水域に生育する水草である。

オモダカ科：生育期間の夏期の間は水がある水田や、湿地に生育する。果皮が取れてしまっているため、種の同定は出来なかった。

オオムギ：外穎がついたものと、とれているものを出土した。すべて炭化している。裸麦か、皮麦かの詳細な検討は行っていない。

コムギ：すべて穎が取れている。長さのみ計測してあるが、これを見るかぎりでは大変小型のコムギであるらしい。

ムギ類：上記のオオムギにしては小さいものや上部が欠けたりしているものをムギ類とした。

イネ：未炭化の穎の破片と炭化した穎、胚乳を出土した。水田の堆積物で穂の状態で産出されるのは比較的珍しい。

オヒシバ：黒い種子を出土した。３稜形で、斜めに細かなしわがある。荒れ地や道端に普通に生える。

エノコログサ属：穎果を出土した。やや風化されてもろくなっている。道端などに普通に生育するイネ科の雑草である。

コゴメガヤツリ近似種：３稜形で細長く、細かい網目模様で表面にはろう状の膜がある。

カヤツリグサ属Ｂ：３稜形でやや堅く、表面は光沢がある。細かい網目模様がある。

ウキヤガラ：３稜形でやや堅く、やや光沢がある。刺針は取れてしまっている。湿地に普通に生える。

ホタルイ属：偏３稜形で、光沢があり、細かいしわ状の模様がある。ホタルイ属は湿地によく生育する仲間である。

スゲ属Ｂ：果実の上半部に広いところがあるたわら形で、表面に細かい網目模様がある。

スゲ属Ｃ：果実に肩がある２面形で、やや軟らかい。表面は細かい網目模様がある。

スゲ属Ｄ：ゆるい３稜形で、やや軟らかい。表面はざらついて模様ははっきりしない。

スゲ属Ｅ：薄い２面形で、透けて見える。表面はほぼ平滑である。

スゲ属Ｆ：小さいたわら型で、表面には細かい網目模様があり、最外層はろう状の膜で覆われている。

スゲ属Ｇ：なで肩の３稜形でやや堅く、表面にはっきりしない網目模様がある。離層部の突起がやや太い。

ツユクサ：楕円形を半分に切ったような形をしているが、これが完形である。灰色で中央に細いすじが入り、厚く全体にスポンジの様な強い弾力がある。やや湿った日陰に多い。

イボクサ：外形はツユクサのような形でツユクサのように厚くない。食パンのような形のものもある。中央にすじが入る。湿地や水田に多い。

コナギ：楕円形で最下部は破り取られたような形をしている。頂点から下に向かって縦にすじが１０本程度入り、さらに細かく横にすじが入る。湿地や水田に多い。

ギシギシ属：果実は粗い網脈のはいった翼を３枚有する。翼の形態で種が分かるが、この試料では破れてしまっている。荒れ地や畑に多い。

ミゾソバ：果実は３稜形、褐色で軟らかくつぶれていることが多い。湿地や溝に多く水中にも生育できる。

ヤナギタデ：果実は２面形または偏３稜形で堅く、表面に粗い網目模様がある。湿地に多い。

タデ属Ａ：前述のヤナギタデとにているが、表面が平滑である。

タデ属Ｂ：３稜形で黒色、堅く光沢がある。

ソバ：３稜形で褐色果皮は軟らかく、表面は光沢がなく、模様はないが一面の中心に向かって斜めにすじがはいる。ここで出土したものは通常のソバと長さは全く同じで、やや細目である。

ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属またはキジムシロ属：核は腎形で黄褐色、表面は不明瞭な凹凸がある。これらの３属は区別がつかないため、３属を一緒にしてある。ヘビイチゴ属、キジムシロ属は田畦や草地に多い。

シロザ近似種：種子は円形で黒色、表面はほぼ平滑であまり光沢がない。一ヶ所にへそがあり、へそから不明瞭な溝が一本、中心付近まで入る。荒れ地や畑などに多く生育する。

ヒユ属：種子は円形で、光沢のある黒色、表面は平滑である。一ヶ所にへそがある。荒れ地や畑、道端などに普通に生育する。

ザクロソウ：種子は円形、黒色、光沢があり、表面には半球形の突起が規則正しく並ぶ。一ヶ所にへそがある。道端や荒れ地に普通に生育している。

スベリヒユ：種子は円形をやや三角に押しつぶした形で、黒色、光沢がある。表面には楕円形の突起が中心に向かって規則的に並ぶ。一ヶ所にへそがあり、へそから中心までくぼんでいる。へそには白いへそしとねがついたままのものが多い。荒れ地や道端に普通に生育している。

ツメクサ近似種：種子は楕円形で基部がやや狭くなっている。規則的に小さい突起がややまばらに並ぶ。田畦、道端などに多い。

ノミノツヅリ近似種：種子は太い腎形で濃褐色やや光沢がある。表面はへそに向かって縦長の星型の網目が規則的に並ぶ。水田のような冬期に日当りがよく乾燥する場所に生育する。

ナデシコ科Ａ：ほぼ円形で褐色、光沢はなく、星型の網目が並び、網目はへそから離れるほど大きくなっている。

タガラシ：果実は円形または四角に偏した円形で、黄褐色、基部と反対側に微少な突起があり、果実の中央が円形に濃褐色になっている。水田、溝に多く生育する。

キンポウゲ属：果実はレンズ形で、基部と反対側に小さい突起がある。黄褐色で表面には微少な網目模様がある。

アブラナ科：種子は楕円形で基部は破り取ったようになっている。壁は大変薄く、褐色、微少な網目模様がある。小さいため、タネツケバナ等の雑草と思われる。

カタバミ属：種子は幅広レンズ形、大きい波型のしわが全体にはいる。田畦、道端に普通に生育する。

イヌコウジュ属：果実は基部が狭くなった円形で、全体に粗い網目模様がはいる。基部のへそ付近には模様がない。田畦等に普通に生育する。

ナス属：種子は平たい楕円形で軟らかく黄褐色、表面には細かい網目模様がはいる。

キュウリ属メロン仲間：種子は水滴型から長楕円形で、長さは5.1㎜－8.3㎜とやや大きい。平均値としてはマクワウリやシロウリなどの仲間のようである。藤下氏は８㎜以下はマクワウリ、シロウリ型、8㎜以上はモモルディカメロン型としている。

ヒョウタン：種子はとっくりの様な形で大きさには変異が多い。果実の破片はヒョウタンの様であるが、同定の根拠となる部位が出土されなかったため、ヒョウタン仲間としてある。

ウリ科：種子であるが、風化が激しく、表面が摩滅されているため、ウリ科としか確認できなかった。

メナモミ：果実はやや風化されているが、形態の特徴からおそらくメナモミであろう。やや湿った道端や田畦などに多い。

タウコギ：果実は全体に逆刺がある。長い刺状突起は２本あるが、この試料では片方が脱落している。代表的な水田雑草である。

不明Ｂ：おそらく種子であるらしく、水滴形で全体に不規則に小さい突起があり、突起のない部分は細かいしわがある。

参考文献

直良信夫(1956)：日本古代農業発達史．さえら書房．316p.

藤下典之(1980)：本邦各地の遺跡から出土したウリ科栽培植物の遺体について．考古美術史の自然科学的研究．日本学術振興会．p.223-p.233.

第24表　二本柳遺跡弥生時代中期の大型植物化石、4区52層

分類群名		試料番号	1	2	4
ヒメコマツ	*Pinus parviflora* Sieb. et Zucc.	風化球果半分			1
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮完形食痕	1	2	
		半分割痕	4	2	
		半分食痕	2	2	
		破片	3		
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子完形		1	1
		半分	4	4	
		破片	4	15	

第25表　二本柳遺跡3区下層水田層（平安時代から鎌倉時代）の大型植物化石

分類群名		試料番号	A33	A34	A35	A36	A38	B33	B34	B36	B38	C34	C35	D33	D34	D35	D36	D37	D38	D39	D40	E35	Z37	Z40
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮完形食痕						1					1											
		内果皮半分										1												
		半分割痕						1		3		1	4		1					2		1		
		半分食痕																						1
モモ	*Prunus persica* (Linn.) Batsch	核完形	7	2	13	17	4	3	2	2	3	8	9		7		1	1	3	2	5			1
		完形食痕	5			2						2	1		3	1	1		2		1		1	
		核半分	4		2					5	2	1	17		1						2	13		1
		半分割痕	9	6	1	9	1			4		8		1	1									
		半分食痕										2												
		核破片											2											
サクラ属サクラ節	*Prunus* sect. Pseudocerasus	核半分													1									

第26表　2区下層水田面炭化物集中層（平安時代末）の大型植物化石

分類群名			No1	No2	No3
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮半分	2		
エノキ	*Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai	内果皮		1	
ウメ	*Prunus mume* Sieb. et Zucc.	核破片	4		
モモ	*P.persica* (Linn.) Batsch	核完形	5		
		半分	11		
サクラ属サクラ節	*P.sect.P*seudocerasus	核	1		
イネ	*Oryza sativa* L.	穎破片	1		
		炭化穎		2	
		炭化穎破片			10
		炭化胚乳		4	11
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	炭化穎果		13	
		炭化胚乳		21	
コムギ	*Triticum aestivum* L.	炭化胚乳		276	41
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	炭化胚乳		38	
ウキヤガラ	*Scirpus yagara* Ohwi	果実			19
ホタルイ属	*Scirpus*	果実			19
ツユクサ	*Commelina communis* Linn.	種子	1		
イボクサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子	1		
ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属またはキジムシロ属					
	Duchesnea/Fragaria or *Potentilla*	核	1		
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* Linn.	種子			7
ノミノツヅリ近似種	*Arenaria* cf. *serpyllifolia* Linn.	種子			1
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* Linn.	果実	120		1
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実	11		1
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実			2
ナス属	*Solanum*	種子			1

第27表　二本柳遺跡上層水田（室町～戦国時代）の大型植物化石

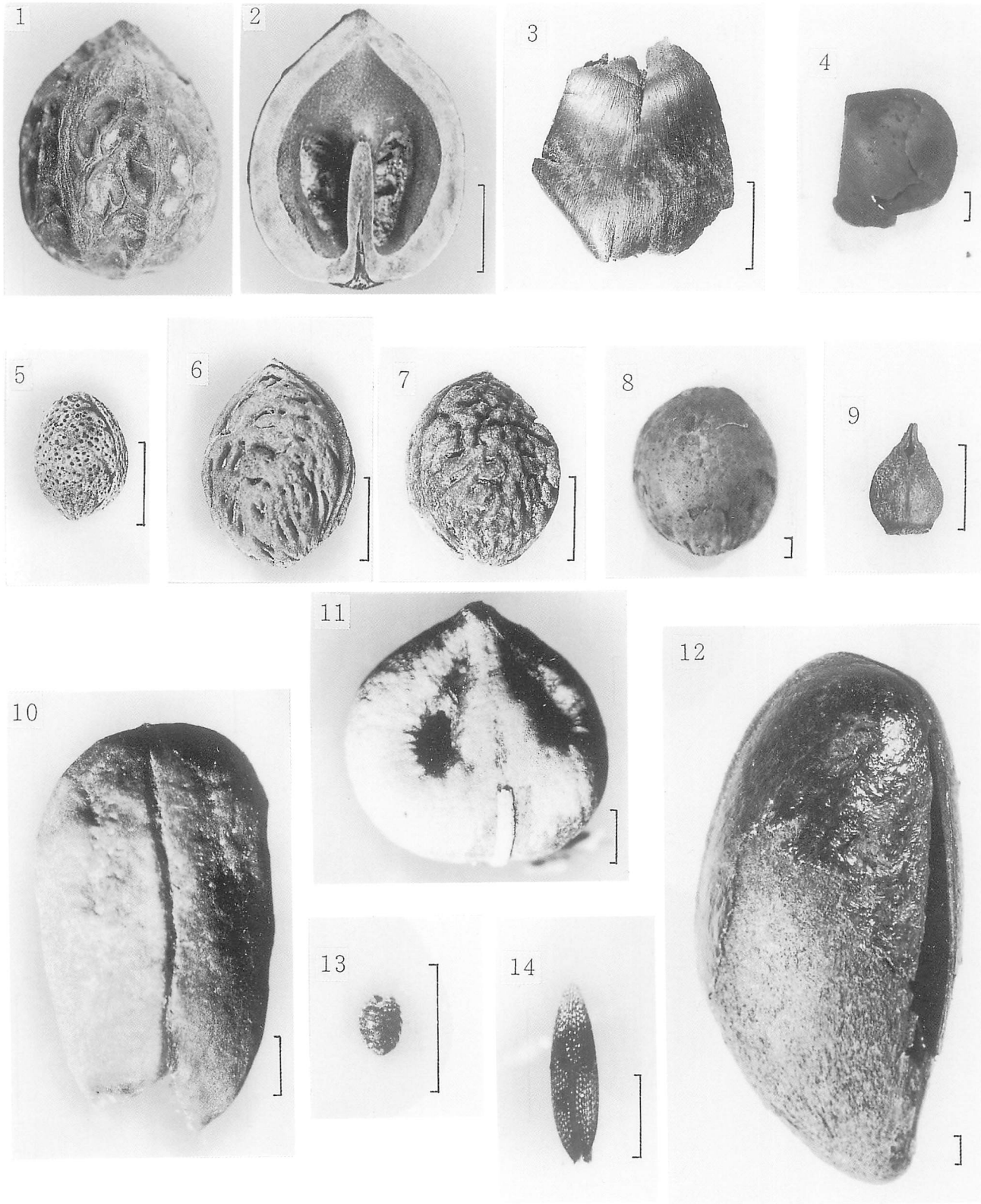
分類群名		試料番号	2B区上層水田			3区上層水田												4区上層水田		
			B24	E28	E29	A35	A44	C35	C36	D36	D37	D38	E37	E40	Z35	Z36	Z39	ナシ	A57	Y51
モモ	*Prunus persica* (Linn.) Batsch	核完形			1	2	1	1	1		2	2	1			1	2	2	2	14
		完形食痕								2	1	1		1						
		核半分			1					2						1				
		半分割痕								1		3								
サクラ属サクラ節	*Prunus sect.* Pseudocerasus	核			1															
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子半分	1																	
		種子破片													3					
ブドウ属	*Vitis*	種子破片			1															
草本																				
イバラモ	*Najas marina* Linn.	種子		63	14															
オモダカ科	Alismataceae	種子		4	4															
イネ	*Oryza sativa* L.	穎		2																
		穎破片		15	2															
		穂																		
ホタイル属	*Scirpus*	果実		1	1															
スゲ属D	*Carex* D	果実		11	4															
イボグサ	*Aneilema keisak* Hassk.	種子		3	1															
コナギ	*Monochoria vaginalis* (Burm.fil.) Presl																			
	var. *plantaginea* (Roxb.) Solms-Laub.	種子		63	39															
ヤナギタデ	*Polygonum hydropiper* Linn.	果実		1																
ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属またはキジムシロ属																				
	Duchesnea/Fragaria or *Potentilla*	核			1															
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* Linn.	果実		77	46															
キンポウゲ属	*Ranunculus*	果実		2																
タウコギ	*Bidens tripartita* Linn.	果実		1																

第28表　二本柳遺跡戦国時代井戸内大型植物化石

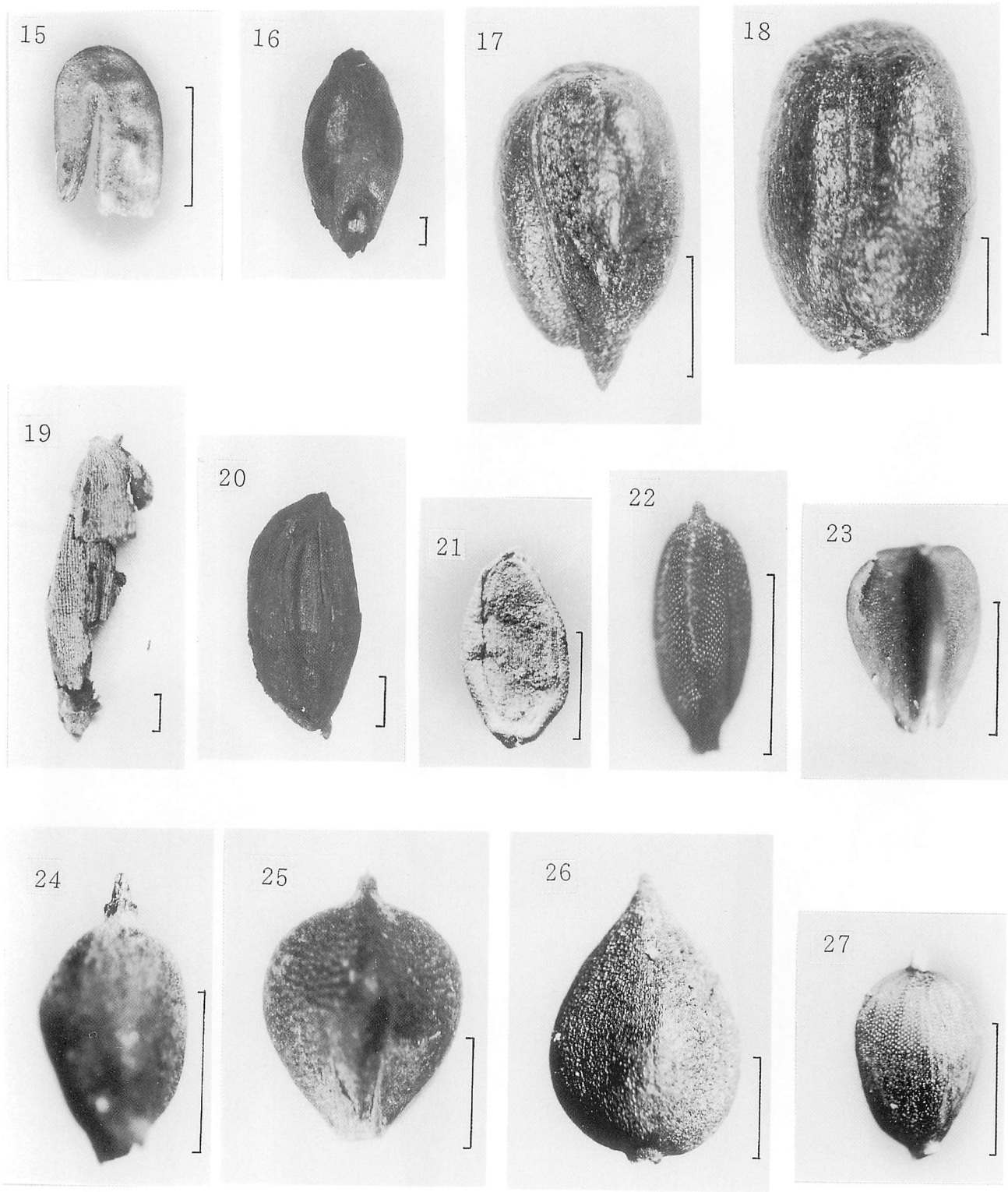
分類群名		試料名	1号井戸 No 1	1号井戸 No 2	1号井戸 No 3	2号井戸 No 4	3号井戸 No 1	3号井戸 No 2	6号井戸	
木　本										
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮完形						1		
		半分						2		1
		破片							2	
ヒメグルミ	*J. ailanthifolia* Carr. var. *cordiformis* (Maxim.) Rehder	内果皮半分							1	
ウメ	*Prunus mume* Sieb.et Zucc.	核完形		1						
モモ	*P.persica* (Linn.) Batsch	核完形							2	
		半分			1					1
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	幼果					1			
クマヤナギ属	*Berchemia*	内果皮					1		1	
ブドウ属	*Vitis*	種子							3	
カキノキ	*Diospyros kaki* Thunb.	種子	4							
草　本										
シャジクモ属	*Chara*	卵胞子		6					8	
イバラモ	*Najas marina* Linn.	種子	4							
オモダカ科	*Alismataceae*	果実	3			1				
ムギ類	*Hordeum* or *Triticum*	炭化胚乳							1	
オヒシバ	*Eleusine indica* (Linn.) Gaertn.	種子	22					4		
エノコログサ属	*Setaria*	果実		4			2		2	
カヤツリグサ属A	*Cyperus* A	果実		230			50		1	
カヤツリグサ属B	*Cyperus* B	果実		20			7			
ホタルイ属	*Scirpus*	果実					1			
スゲ属B	*Carex* B	果実		15			2			
スゲ属C	*Carex* C	果実		3			2			
スゲ属D	*Carex* D	果実		10						
スゲ属E	*Carex* E	果実		3						
スゲ属F	*Carex* F	果実		21			2			
スゲ属G	*Carex* G	果実		1						
ツユクサ	*Commelina communis* Linn.	種子					7		13	
コナギ	*Monochoria vaginalis* (Burm.fil.) Presl var. *plantaginea* (*Roxb.*) *Solms-Laub.*	種子		6					10	
ギシギシ属	*Rumex*	果実					1			
ミゾソバ	*Polygonum thunbergii* Sieb.et Zucc.	果実		1					5	
ヤナギタデ	*P. hydropiper* Linn.	果実		1			1			
タデ属A	*Polygonum* A	果実	1	75						
タデ属B	*Polygonum* B	果実		2						
ソバ	*Fagopylum esculentum* Moench	果実					2			
ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属またはキジムシロ属	*Duchesnea/ Fragaria* or *Potentilla*	核		10					2	
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* Linn.	種子		82		3	250		310	
ヒユ属	*Amaranthus*	種子		322			27		25	
ザクロソウ	*Mollugo pentaphylla* Linn.	種子		3			1			
スベリヒユ	*Portulaca oleracea* Linn.	種子		499			150		104	
ツメクサ近似種	*Sagina* cf. *japonica* (Sw.) Ohwi	種子		218			25		64	
ノミノツヅリ近似種	*Arenaria* cf. *serpyllifolia* Linn.	種子		378			83		80	
ナデシコ科A	*Caryophyllaceae* A	種子		274			192		320	
タガラシ	*Ranunculus sceleratus* Linn.	果実		58						
アブラナ科	*Cruciferae*	種子		105			16			
カタバミ属	*Oxalis*	種子		147			19		26	
イヌコウジュ属	*Mosla*	果実		1						
ナス属	*Solanum*	種子	1			1	2		1	
キュウリ属メロン仲間	*Cucumis melo* L.	種子	32		2	1	1		1	
ヒョウタン	*Lagenaria siceraria* Stand.	種子				134			12	
		種子破片				5		3		
ヒョウタン仲間	*Lagenaria*	果実破片				23		19		1
ウリ科	Cucurbitaceae	種子				1				
メナモミ	*Siegesbeckia pubescens* (Makino) Makino	果実	2							
タウコギ	*Bidens tripartita* Linn.	果実					1			
不明B	*unknown* B			1			1			

第29表　二本柳遺跡戦国時代２号溝、木棺ほかの大型植物化石

分類群名			２区２号溝				２B区１号木棺			２区	２区	２B区	２区
			№１	№２	№３	№４	２号溝	数珠	土器上	№76	２号杭	７層	番号なし
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. Diploxylon	球果					1						
オニグルミ	*Juglans ailanthifolia* Carr.	内果皮半分			6		7			5			
ヒメグルミ	*J. ailanthifolia* Carr. var. *cordiformis* (Maxim.) Rehder	内果皮					1						
クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	果実					1						
		破片	5				5			1			
アンズ	Prunus *anzu* (Maxim.) Komar.	核					3						
ウメ	*P. mume* Sieb.et Zucc.	核		201	37	337	7			4			
		破片					5			21			
モモ	*P. persica* (Linn.) Batsch	核完形			25	4	9			1	1		1
		半分			4		5			1			2
		破片										4	
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種子破片					2						
ボダイジュ	*Tilia miqueliana* Hatus.	果実						3					
イネ	*Oryza sativa* L.	穎										4	
		穂							1				

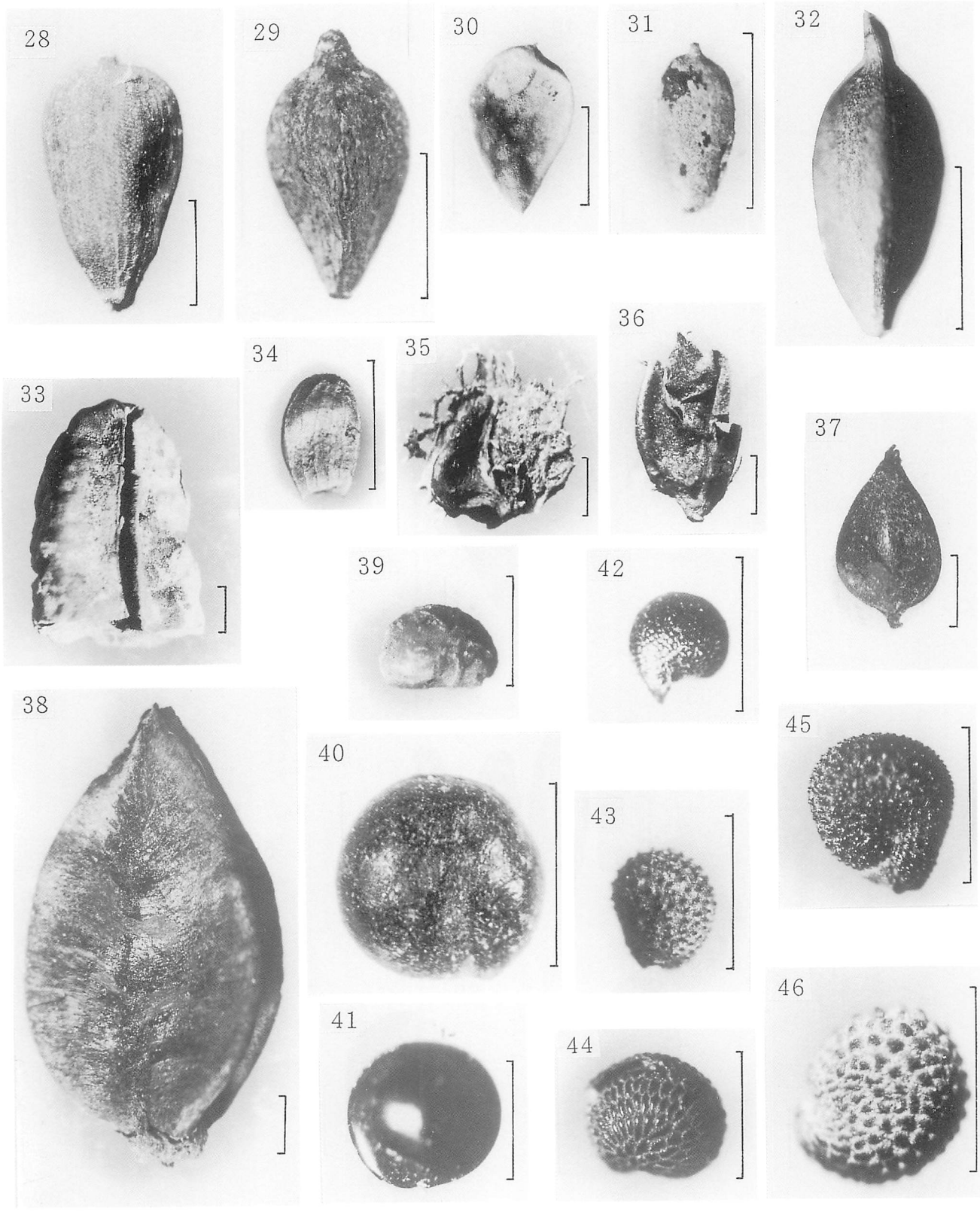


図版19　二本柳遺跡の大型植物化石１　スケールは１．２．３．４．５．６．７．９が１㎝、他は１㎜
１．２オニグルミ、内果皮（外観、内観）（№11）　３．クリ、果実破片（№9）　４．エノキ、内果皮（やや破損）（№14）　５．ウメ、核（№11）　６．７．モモ、核（№11）　８．サクラ属サクラ節、核（№14）　９．トチノキ、幼果（№６）　10．クマヤナギ属、内果皮（№５）　11．ブドウ属、種子（№７）　12．カキノキ、種子（№１）　13．シャジクモ属、卵胞子（№２）　14．イバラモ、種子（№２）



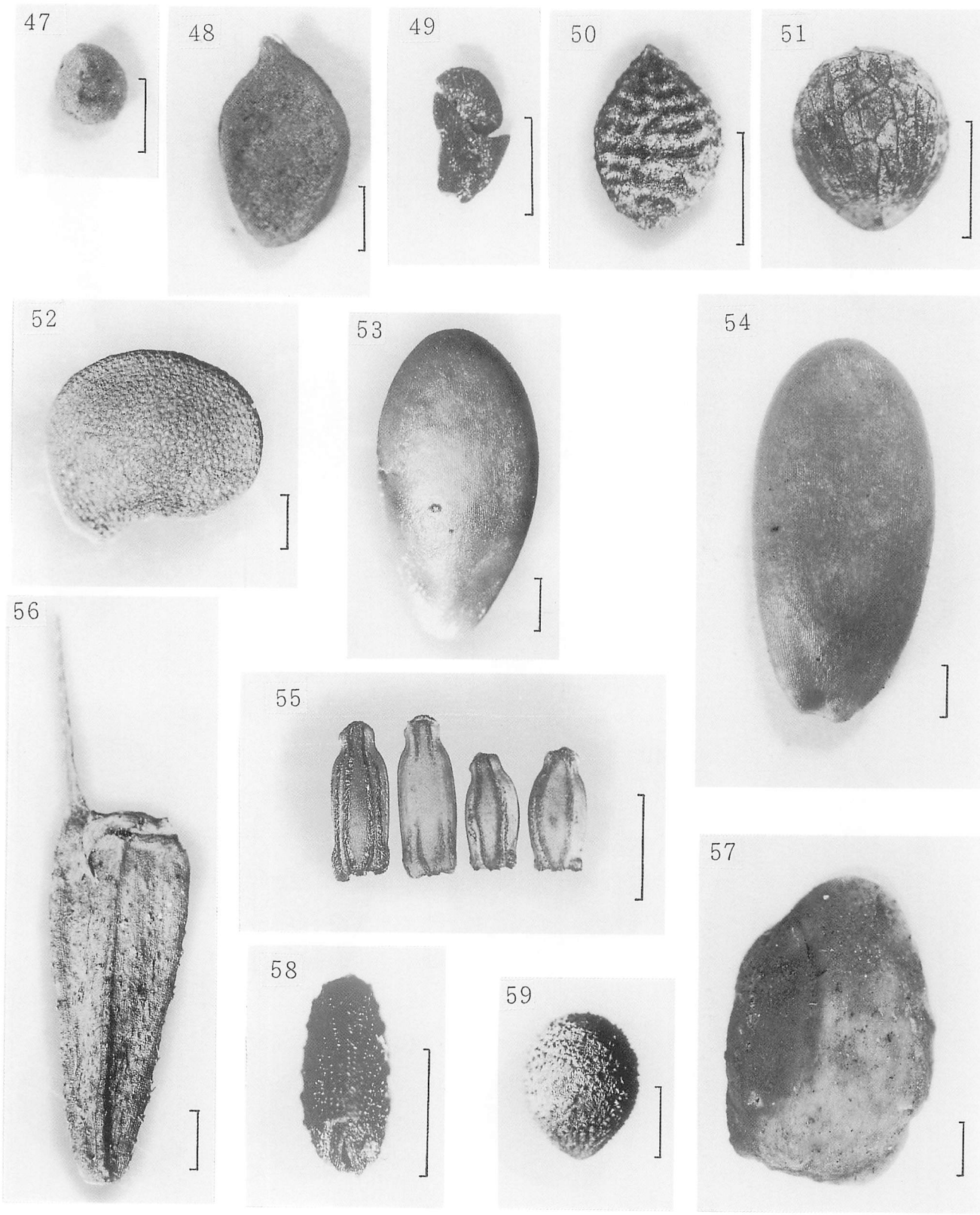
図版20　二本柳遺跡の大型植物化石２　スケールは１㎜

15. オモダカ科、種子（№２）　16. オオムギ、炭化胚乳（№14）　17. 18. コムギ、炭化胚乳（№14）　19. イネ、未炭化穎破片（№15）　20. イネ、炭化穎（№14）　21. エノコログサ属、穎（№２）　22. コゴメガヤツリ近似種、果実（№２）　23. カヤツリグサ属Ｂ、果実（№２）　24. ウキヤガラ、果実（№15）　25. ホタルイ属、果実（№15）　26. ヤナギタデ、果実（№２）　27. スゲ属Ｂ、果実（№２）



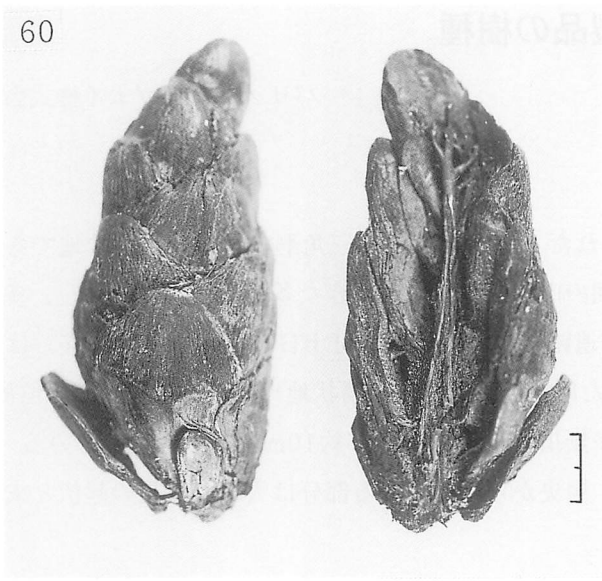
図版21　二本柳遺跡の大型植物化石３　スケールは43.44が0.5㎜、他は１㎜

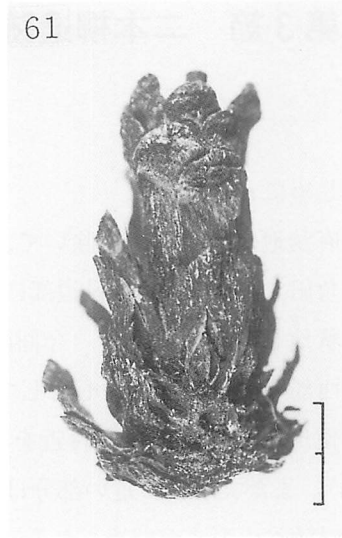
28．スゲ属Ｃ、果実（№２）　29．スゲ属Ｄ、果実（№２）　30．スゲ属Ｅ、果実（№２）　31．スゲ属Ｆ、果実（№２）　32．スゲ属Ｇ、果実（№２）　33．ツユクサ、種子（№５）　37．タデ属Ａ、果実（№２）　38．ソバ、果実（№５）　39．ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、（№２）　40．シロザ近似種、種子（№２）　41．ヒユ属、種子（№２）　42．ザクロソウ、種子（№２）　43．ツメクサ近似種、種子（№２）　44．ノミノツヅリ近似種、種子（№２）　45．スベリヒユ、種子（№２）　46．ナデシコ科Ａ、種子（№２）

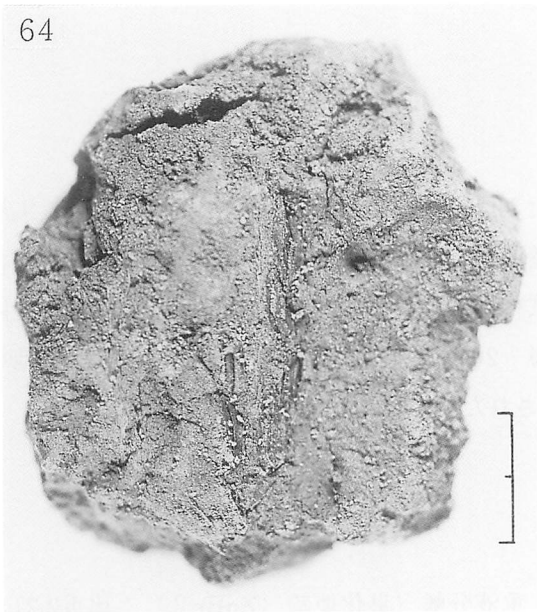


図版22　二本柳遺跡の大型植物化石４　スケールは49が0.5㎜、55が１㎝、他は１㎜

47．タガラシ、果実（№15）　48．キンポウゲ属、果実（№15）　49．アブラナ科、種子（№15）　50．カタバミ属、種子（№２）　51．イヌコウジュ属、種子（№15）　52．ナス属、種子（№１）　53．54．キュウリ属メロン仲間、種子（№１）　55．ヒョウタン、種子（№６）　56．タウコギ、果実（№５）　57．メナモミ、果実（№１）　58．オヒシバ、種子（№２）　59．不明Ｂ（№２）







図版23　二本柳遺跡の大型植物化石５　スケールは１㎝

60．ヒメコマツ、球果（４区52層）　61．マツ属複維管束亜属、球果（２Ｂ区２号溝）　62．ボダイジュ、果実（１号木棺）　63．イネ、穂（２Ｂ区Ｅ-28Ｇ上層水田）　65．ヒョウタン仲間、果皮（２区２号井戸）

第３節　二本柳遺跡の古環境と木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

甲府盆地は、北縁部を除いて、周囲を断層崖で境された１辺20kmほどの三角形状構造性内陸盆地である（小坂・角田，1969)。盆地縁辺部には、河川によって周囲の山地から運ばれてきた多量の土砂が堆積し、多くの複合扇状地を形成している。今回調査が行われた二本柳遺跡（中巨摩郡若草町十日市場字二本柳所在）は、甲府盆地西部の御勅使川を中心として複数の河川が形成した扇状地（御勅使川扇状地）の扇央から扇端に位置する。御勅使川扇状地は、塩前付近を扇頂とし、末端部は釜無川の浸触によって約10mの崖を形成している（高木，1985)。また、扇頂に近い部分は小さな波長の起伏が、扇央から扇端に至る部分は大きな波長の起伏と末端における浸触谷の形成が認められる。

二本柳遺跡では、10世紀～14世紀、戦国時代、江戸時代末の水田面や、井戸、溝等の遺構が検出されている。中には、水を温める施設（ヌルメ）を伴う水田や、農作業時の足跡や鋤痕が残されている水田も検出されている。また、水田の畦畔からは立木が検出され、戦国時代の水田では杭が打ち込まれているものもある。遺物では、青磁器の破片、木製品（木棺、斎串、曲げ物、火きり臼、笛、箸等）等が出土し、馬などの獣骨も出土している。また、４区では弥生時代中期と古墳時代初頭の遺物包含層が検出され、その間の礫層から弥生時代末～古墳時代初頭の梯子が出土している。

今回の分析調査では、稲作を含めた遺跡周辺の古環境および木製品の用材選択に関する検討を行う。これらの検討を行うために、土壌試料については花粉分析および植物珪酸体分析、木材試料については樹種同定を行う。

Ⅰ．植物微化石からみた古環境と稲作について

１．試料

植物微化石分析は甲西バイパス建設路線に沿って設定された１区～４区の調査区のうち、３・４区で実施した。調査地点として、扇状地の横断面に相当する両調査区西壁断面において、南側より３区でＢ・Ａ地点、４区でＣ地点の３箇所の調査地点が設定され、各地点より分析試料合計17点採取された。層序区分は各調査区ごとに行われており、３区の６層・８層が、それぞれ４区の38層・20層に連続する。花粉分析は、３区Ａ地点１層を除く16点、植物珪酸体分析は３区Ａ地点とＢ地点から採取された14点について行う。

２．分析方法

（１）花粉分析

湿重約10ｇの試料について、水酸化カリウム（KOH）処理、重液分離（臭化亜鉛（ZnBr２）：比重2.2)、フッ化水素（HF）処理、アセトリシス処理の順に物理化学処理を施し花粉化石を分離・濃集する。処理後の残渣はグリセリンで封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類（Taxa）の同定・計数を行う。

結果は同定計数結果の一覧表と、花粉化石群集の層位分布図として示す。層位分布図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出してある。なお、複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは種類間の区別が困難なもの

第30表　A・B・C地点の花粉分析結果

種類	調査区	3区													4区		
	地点名	A地点										B地点			C地点		
	層名	4	5b	13	6a	14	15	7	8	9	12	5a	6b	10	38	20	52
木本花粉																	
モミ属		5	6	10	23	15	2	19	29	19	1	9	5	46	14	2	—
ツガ属		89	89	118	110	68	3	97	37	65	—	91	66	79	50	—	—
トウヒ属		7	2	2	6	—	—	2	—	4	—	6	—	5	3	—	—
マツ属複維管束亜属		18	15	15	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
マツ属(不明)		7	2	5	5	2	—	18	5	10	—	26	5	16	6	1	—
コウヤマキ属		—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—
スギ属		16	12	20	34	6	1	26	12	3	2	14	23	15	2	2	—
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		12	6	8	8	—	—	4	1	1	—	8	—	1	2	—	—
ヤナギ属		—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ヤマモモ属		—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クルミ属		10	9	6	—	—	—	2	1	—	—	11	1	—	—	—	—
クマシデ属－アサダ属		15	29	31	4	—	—	4	6	1	—	16	5	5	4	—	—
カバノキ属		13	7	20	2	—	—	1	1	—	—	10	—	2	1	—	—
ハンノキ属		10	10	5	5	—	—	5	1	1	—	6	3	1	2	—	—
ブナ属		13	27	29	11	2	—	9	4	—	—	20	11	7	5	—	—
コナラ属コナラ亜属		17	27	28	18	—	—	12	29	12	2	10	15	27	5	1	—
コナラ属アカガシ亜属		21	45	47	19	1	—	15	19	3	3	36	22	13	8	—	—
クリ属－シイノキ属		7	1	11	1	—	—	—	1	—	2	6	—	1	3	—	—
ニレ属－ケヤキ属		17	38	35	5	2	—	14	14	1	1	18	7	17	2	—	—
エノキ属－ムクノキ属		2	1	1	—	—	—	—	2	—	—	2	1	6	—	—	—
フサザクラ属		—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モクレン属近樹種		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サクラ属近樹種		1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カラスザンショウ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アカメガシワ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
シラキ属		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウルシ属		—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カエデ属		—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—
トチノキ属		1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ノブドウ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—
シナノキ属		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—
キブシ属		2	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ科		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズキ属		—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ツツジ科		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
イボタノキ属		—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12	1	—
トネリコ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
ガマズミ属		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
スイカズラ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—
草本花粉																	
ガマ属		1	1	2	1	—	—	1	3	—	—	2	6	4	1	—	—
オモダカ属		—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
イネ科		411	356	440	91	4	—	81	82	11	3	291	124	58	53	4	—
カヤツリグサ科		47	42	55	80	3	—	15	26	1	—	25	25	25	4	—	—
ミズアオイ属		11	11	7	1	—	—	5	—	—	—	9	2	10	—	1	—
クワ科		1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ギシギシ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
サナエタデ節－ウナギツカミ節		3	3	2	8	5	—	5	11	5	1	1	6	8	2	—	—
イタドリ節		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミチヤナギ節		2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ソバ属		—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
アカザ科		2	—	2	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—	—	—	—
ナデシコ科		4	6	6	—	—	—	1	2	—	—	2	1	—	6	—	—
カラマツソウ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—
キンポウゲ科		2	1	3	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—
タケニグサ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アブラナ科		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—
バラ科		—	3	9	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—
マメ科		—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—
フウロソウ属		—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
キカシグサ属		4	—	4	1	—	—	1	1	—	—	1	—	—	1	1	—
アリノトウグサ属		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
セリ科		1	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ゴマ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オミナエシ属		—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—
ヨモギ属		18	27	32	16	1	—	13	5	4	—	29	5	2	15	3	6
オナモミ属		—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キク亜科		—	—	—	2	—	—	3	2	—	1	1	1	—	—	—	—
タンポポ亜科		—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明花粉		5	14	11	5	2	—	4	7	2	1	8	5	5	7	3	—
シダ類胞子																	
サンショウモ		—	—	—	1	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—
他のシダ類胞子		31	40	46	80	11	—	36	99	22	19	91	61	356	26	31	3
合計																	
木本花粉		284	339	398	273	96	6	230	163	120	11	294	164	243	127	7	0
草本花粉		508	458	574	200	13	0	126	135	22	5	370	170	100	91	9	6
不明花粉		5	14	11	5	2	0	4	7	2	1	8	5	5	7	3	0
シダ類胞子		31	40	46	81	11	0	36	99	27	19	91	61	356	26	31	3
総計(不明を除く)		823	837	1018	554	120	6	392	397	169	35	755	395	699	244	47	9

である。

また、稲作の様態に関する情報を得るために検出されたイネ科花粉について、大きさ・発芽装置の形態・表面模様の観察を行い、栽培種のイネ属と他のイネ科に同定区分した。表面模様の観察に際してはノマルスキー

微分干渉装置を利用した。イネ属同定の結果は、鈴木・中村（1977）のイネ属比率（イネ科総数に対するイネ属の占める比率）として示す。

（2）植物珪酸体分析

湿重約５ｇの試料について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラートを全面走査し、出現するイネ科起源の植物珪酸体を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料については、組成が歪曲する恐れがあるため植物珪酸体組成を求めず出現した種類を＋で示す。

３．各化石の産状

（1）花粉化石

各地点の花粉分析結果を第30・31表、第163図に示す。分析を行った試料のうち、３区Ａ地点14層・15層・12層、４区Ｃ地点20層・52層は花粉化石が少なく、検出される化石の保存状態は悪い。このほかの層位からは花粉化石が比較的良好に検出される。各地点別に花粉化石の産状について述べる。

ａ）Ａ地点（３区）

花粉化石群集は6a層と13層の間の層準で多少変化する。９層～７層は、木本花粉ではツガ属が多産し、モミ属、マツ属（複維管束亜属を含む）、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ属を伴う。草本花粉ではイネ科が比較的多産し、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。多産するイネ科花粉には栽培種のイネ属が認められ、７層・6a層ではイネ属比率は40％前後を示す。

第31表　各地点のイネ属比率

地点	層名	イネ属比率
Ａ地点	4層	55%
	5b層	62%
	13層	62%
	6a層	39%
	14層	—
	15層	—
	7層	41%
	8層	5%
	9層	—
	12層	—
Ｂ地点	5a層	56%
	6b層	60%
	10層	10%
Ｃ地点	38層	42%
	20層	—
	52層	—

1) イネ属比率は、イネ科花粉総数に占める割合。

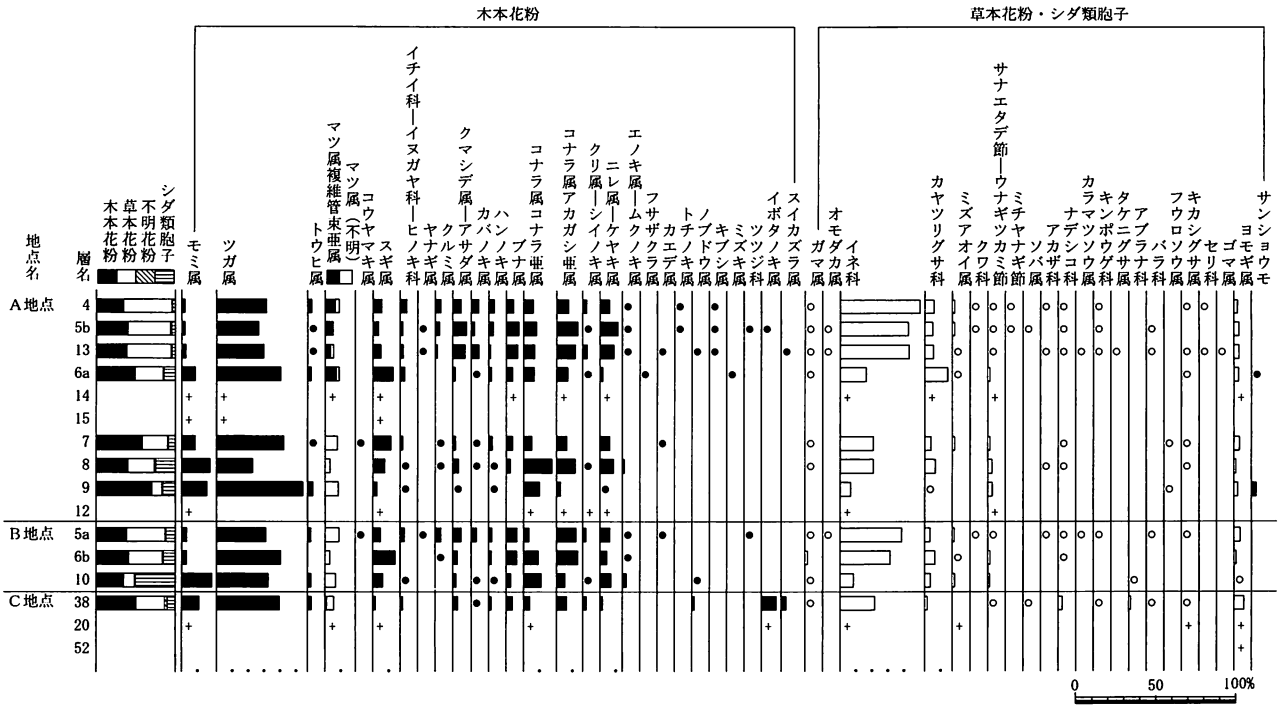
13層～４層になると、総花粉・胞子の中で草本花粉の占める割合が増加する。この中ではイネ科の増加が顕著であり、イネ属比率も55％以上を示すようになる。また、栽培種のソバ属が5b層、ゴマ属が13層から出現する。木本花粉化石群集はモミ属が漸減する以外大きな変化は認められない。

ｂ）Ｂ地点（３区）

花粉化石群集は10層と6b層の間の層準で多少変化する。10層は、木本花粉ではツガ属が多産し、モミ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科・カヤツリグサ科や水生植物のガマ属・ミズアオイ属などが低率に出現する。

6b層・5a層になると、総花粉・胞子の中で草本花粉が占める割合が増加する。この中で顕著に増加するのはイネ科であり、そのイネ属比率は56％以上を占めるようになる。一方、木本花粉化石群集ではモミ属が漸減する以外は大きな変化は認められない。

ｃ）Ｃ地点（４区）



第163図　A・B・C地点の主要花粉群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

38層の花粉化石群集は木本花粉ではツガ属が高率に出現し、モミ属、アカガシ亜属、コナラ亜属、イボタノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が比較的多産する。イネ属比率は42％を示す。このほか、栽培種のソバ属が僅かながらも出現する。

（２）植物珪酸体

植物珪酸体分析結果を第32表・第164図に示す。以下に各地点別に産状について述べる。

ａ）Ａ地点

植物珪酸体は、12層・４層で短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも少なく、それ以外の層位では短細胞珪酸体が多産するが、機動細胞珪酸体は少ない。検出される機動細胞珪酸体の多くの表面に小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体組成は5b層と１層の間の層準で多少変化する。９層～５ｂ層ではヨシ属が多産し、ウシクサ族コブナグサ属、ススキ属、チゴザサ属、タケ亜科、イチゴツナギ亜科などを伴う。このうちコブナグサ属は９層で高く、5b層にかけて漸減する。また栽培種のイネ属がほぼ連続して出現する。８・７・13・5b層からはイネ属の機動細胞珪酸体も認められる。

１層になると、多産していたヨシ属が減少し、イチゴツナギ亜科、タケ亜科、栽培種のイネ属が増加する。

ｂ）Ｂ地点

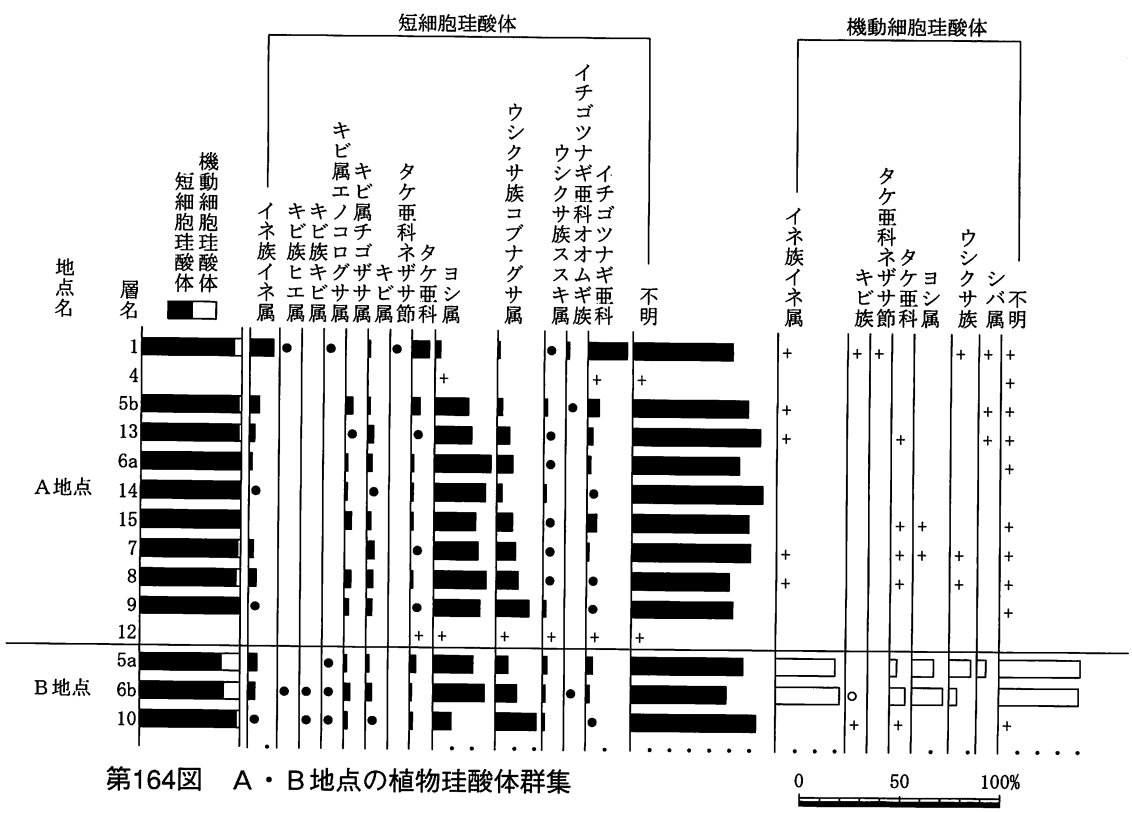
植物珪酸体は、10層で機動細胞珪酸体が少ない以外は比較的良好に検出された。ここで検出される機動細胞珪酸体の多くは、Ａ地点と同様に表面に溶食痕が認められる。

植物珪酸体組成は層位的に多少変化する。10層ではコブナグサ属が多産し、次いでヨシ属が多産する。このほかチゴザサ属、ススキ属、タケ亜科などを伴う。栽培種のイネ属が低率ながらも検出される。

６ｂ・５ａ層になるとヨシ属が増加し、多産していたコブナグサ属が減少傾向を示す。また、栽培種のイネ属が増加し、籾に形成される穎珪酸体・短細胞列も検出される。

第32表　A・B地点の植物珪酸体分析結果

種類	調査区	3区													
	地点名	A地点											B地点		
	層名	1	4	5b	13	6a	14	15	7	8	9	12	5a	6b	10
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属		30	—	15	11	6	1	—	8	12	1	—	22	19	1
キビ族ヒエ属		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
キビ族キビ属		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
キビ属エノコログサ属		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	1
キビ属チゴザサ属		—	—	11	3	6	3	10	—	10	7	—	7	17	5
キビ属		3	—	4	13	11	1	6	13	10	9	—	8	16	2
タケ亜科ネザサ節		2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科		22	—	13	3	6	3	4	1	4	3	2	15	6	4
ヨシ属		7	2	52	80	125	58	64	76	83	73	18	97	138	25
ウシクサ族コブナグサ属		3	—	8	27	35	6	25	33	35	52	4	30	57	55
ウシクサ族ススキ属		2	—	5	2	4	3	1	1	3	5	1	11	8	3
イチゴツナギ亜科オオムギ族		4	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
イチゴツナギ亜科		50	1	18	12	8	1	15	4	2	1	1	17	10	1
不明キビ型		64	2	86	126	76	44	92	62	64	45	11	141	102	70
不明ヒゲシバ型		30	1	59	99	116	59	47	88	66	76	39	75	102	56
不明ダンチク型		33	1	32	49	44	44	41	53	24	38	18	55	51	41
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属		3	—	1	1	—	—	—	1	3	—	—	33	33	—
キビ族		3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
タケ亜科ネザサ節		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タケ亜科		—	—	—	1	—	—	1	2	1	—	—	4	8	3
ヨシ属		—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	12	16	—
ウシクサ族		1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	12	4	—
シバ属		2	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—
不明		11	1	4	6	2	—	1	5	9	1	—	45	41	5
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体		252	7	304	425	437	223	305	339	313	310	94	480	530	265
イネ科葉身機動細胞珪酸体		21	1	6	9	2	0	3	10	14	1	0	111	103	9
総計		273	8	310	434	439	223	308	349	327	311	94	591	633	274
組織片															
イネ属穎珪酸体		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—
イネ属短細胞列		—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—
キビ型短細胞列		—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—



第164図　A・B地点の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満、の試料で検出された種類を示す。

4．考察

本遺跡は、河川の氾濫や泥流などによって形成された扇状地の扇端付近に位置する。そのため、各地点で得られた花粉化石・植物珪酸体群集は、上流域より運搬・堆積したものや誘導化石などを含んでいることになり、比較的広い範囲の情報を反映していることが想定される。このことを考慮しながら、弥生時代以降の古環境と稲作について述べる。なお、層序編年に関しては出土遺物より推定される編年に基づくことにする。

（1）堆積域の古環境と稲作について

弥生時代中期の遺物を包含する黒色粘土層（4区52層）からは、花粉化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、土壌微生物の活動など何らかの風化作用の影響により花粉が分解消失した可能性が考えられる。本層の層相が、泥炭土が酸化分解することによって生成される黒泥土状ないし風成堆積物の黒ボク土状を呈していたことから、当時の調査地域が好気的条件下におかれていたことが推定される。今後、本層の成因に関して、分布状況や土壌特性・珪藻分析など多角的に評価した上で当時の古環境を検討する必要がある。

この黒色粘土層の上位を洪水ないし泥流に伴う砂礫（4区51～49層・3区11・12層）が堆積する。時期的には、出土遺物の時代性より、古墳時代初頭以降と推定される。本堆積によって、堆積域の環境は一時的にせよ一変したことがうかがえるが、詳細については不明である。砂礫の堆積後、調査区内は植物遺体を含む腐植質堆積物の堆積が進行することから、比較的静穏な環境へと変化したと考えられる。この時期の花粉化石群集には、ガマ属・ミズアオイ属・キカシグサ属・サンショウモといった水生植物の種類が認めらる。また、植物珪酸体組成では、水湿地や河川沿いに多いヨシ属が多産する。これらのことから、堆積域にはヨシ属などが繁茂する水湿地が拡ったと考えられる。また、この時期の堆積物からは、栽培種のイネ属に由来する化石が検出された。本堆積物は洪水等による砂層に覆われていることから、下層水田耕作時の撹乱の影響が及んでいるとは考え難く、当時生育していたイネ属に由来するものと考えられる。したがって、本時期にも堆積域ないしその付近において、稲作が行われていたことが示唆される。ただし、本地域では下層水田より古い時期の水田跡が検出されていないため現段階では特定はできない。

その後、砂礫の堆積を経て、再び黒色粘土層（3区6層・4区38層）が堆積する。本層からも上記した水湿地生の植物化石が検出されたことから、堆積域には再びヨシ属などが繁茂する水湿地が拡ったことが推定される。一方、本層が10～14世紀の下層水田層であることから、下層水田が湿地を開墾して構築されたことが示唆される。

本水田層におけるイネ属の化石の産状は、花粉化石では出現率は低率であったが、イネ属花粉比率は40～60％を示した。鈴木・中村（1977）によれば、現在のような集約度の水田耕土では、イネ属花粉比率は30％以上を示すとされ、この値が過去の稲作を推定する上で目安となることを指摘している。本層でのイネ属花粉比率は、この目安となる値を上回っている。一方、植物珪酸体はA地点とB地点で産状が異なるが、B地点では高率に出現した。このような花粉化石と植物珪酸体の産状は、本水田で稲作が行われていたことを支持する。しかし、花粉化石の出現率が後述する上層水田層と比較して、明らかに低いことから、下層水田と上層水田では耕作期間や収量など水田の様態が異なっていた可能性がある。また、植物珪酸体組成で認められた調査地点間での産状の違いは、堆積物中での偏在に起因する可能性が強いが、同様な傾向が花粉化石でも認められたことから、当時の稲作と何らかの関係があるのかもしれない。今後、面的に地点数を増やして検討する必要がある。

下層水田層の上位を4区では砂、3区では褐色～灰色シルトが覆っている。その一部にラミナが発達していることから、河成の堆積物であることが示唆される。これらの堆積層からも水生植物の化石が検出されたが、これらは後背地域より水流によって運搬・堆積した可能性が強く、後背地域の環境を反映しているものと思わ

れる。

本堆積層の下部にあたる３区13層からは、ゴマ属の花粉化石が検出された。ゴマはアフリカ原産の植物で、インド・中国を経て日本へ伝播し、９世紀にはゴマ油が灯明の油として利用されるようになったとされる（大泉，1976)。本層の堆積時期は、下層水田以降であることから年代的には矛盾せず、当時の本地域においてゴマの栽培が行われていた可能性がある。

本堆積層の上部にあたる３区５層は戦国時代の上層水田層に相当する。本水田層におけるイネ属の化石の産状は、花粉化石では高率に出現した。イネ属花粉比率も60％以上と高率であった。一方、植物珪酸体ではＡ・Ｂ両地点で産状が異なっていたものの、Ｂ地点では高率に出現した。このような花粉化石・植物珪酸体の産状は、本水田層で稲作が行われていたことを支持する。また、本層からはイネ属以外の栽培種として、ソバ属の花粉化石が検出された。ただし、その出現率は低率であり、周辺でソバなどの畑作が行われていたかは断定できない。

（２）森林植生

古墳時代から戦国時代までの遺跡周辺の森林植生は、木本花粉化石群集が層位的に急激に変化しなかったことから、基本的には同様な植生が継続していたことが推定される。

当時の森林構成要素としては、花粉化石群集を特徴づけているツガ属・モミ属・マツ属・スギ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹、クルミ属・カバノキ属・ブナ属・クマシデ属－アサダ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹、アカガシ亜属などの常緑広葉樹が考えられる。これらの種類は、現在ではアカガシ亜属が暖温帯、落葉広葉樹の多くが冷温帯を中心に分布している。このような現在の分布からみた場合、多産したツガ属は暖温帯～冷温帯の推移帯に成立する中間温帯林の構成要素であるツガと考えられる。ツガは土地的条件の悪い場所にも生育可能であり、当時も扇状地周辺に分布していた可能性がある。

一方、上層水田層とその上位の砂礫層の花粉分析プレパラート中には、木材の組織片がしばしば認められた。組織片はいずれも針葉樹の放射断面の組織片であり、大きく２タイプに分かれた。一つは放射組織が柔細胞のみで構成され、分野壁孔がヒノキ型で１分野に普通２個であることからヒノキ属近似種（cf. Chamaecyparis sp.)、もう一つは放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は粗く、じゅず状末端壁が認められることからモミ属近似種（cf. Abiess sp.）に同定された（図版25)。これら材の組織片は、堆積物と共に運搬堆積したものであると判断されることから、後背地域の森林要素であったと考えられる。また、発掘調査時に出土した木製品の樹種には、後述するようにヒノキ属が多用されており、このほかスギ属・マツ属複維管束亜属といった針葉樹の種類が多く認められた。このような材組織片の産状および用材の樹種は、花粉化石群集の特徴とも調和的である。

以上のことから、古墳時代から戦国時代にかけては、モミ属・ツガ属・スギ属などの針葉樹や落葉広葉樹から構成される、暖温帯から冷温帯にかけての気候帯に属する植生が成立していたことが推定される。

II. 二本柳遺跡における木材選択とその背景について

１．試料

試料は、弥生時代末から近世の木製品191点である。試料は２回に分けて採取され、それぞれ１から通し番号が付されている。そのため、試料番号に採取回をハイフォンで付し、1-1、2-1のように表記する。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に第33表に記した。

試料は１区11・12層より出土したしゃもじ状の木製品等の３点と、１区上層水田面と２区下層水田面より出土した斎串５点、２区５号の井戸より出土した樽板１点と１区上層水田面より出土した杭11点，計20点である。

2．方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

3．結果

同定結果を第33表に示す。171点の試料のうち、２点の材（№20,39）が保存状態が良好ではなく同定に至らなかった。他の試料は、針葉樹６種類（カラマツ・マツ属複維管束亜属・トウヒ属・ツガ属・スギ・ヒノキ属)、広葉樹６種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ・ウツギ属・モモ・キブシ）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴などを以下に記す。

・カラマツ（Larix kaempferi（Lamb.）Carriere）　　マツ科カラマツ属

早材部から晩材部への移行はきわめて急で、年輪界は明瞭。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁をもち、分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で１分野に３～５個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　　マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は、単列、１～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・トウヒ属（Picea）　　マツ科

早材部から晩材部への移行は緩やか。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁をもち、分野壁孔はトウヒ型で１分野に３～６個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・ツガ属（Tsuga）　　マツ科

早材部から晩材部への移行は急。樹脂細胞が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica（L.f.）D.Don）　　スギ科スギ属

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヒノキ属（Chamaecyparis）　　ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・ヤナギ属（Salix）　　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して、年輪全体にほぼ一様に散在し、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがあ

第33表　樹種同定結果(1)

番　号	地区	遺構名	グリッド	遺物番号	形　　態	時　　代	樹　　種
1－ 1	1	11･12層		91	棒状遺物(くぼみあり)	古墳時代	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
1－ 2	1	11･12層		98	しゃもじ状遺物	古墳時代	ヒノキ属
1－ 3	1	11･12層		89	穴のある木製品	古墳時代	ヒノキ属
1－ 4	1	上層水田面		北東隅より	斎串(折れている)	近世	ヒノキ属
1－ 5	2	下層水田面			斎串	平安時代	ヒノキ属
1－ 6	2	下層水田面			斎串(折れている)	平安時代	ツガ属
1－ 7	2	下層水田面			斎串(部分出土)	平安時代	ヒノキ属
1－ 8	2	下層水田面			斎串(折れている)	平安時代	ツガ属
1－ 9	2	5号井戸			樽の板の破片	中世	ヒノキ属
1－10	1	上層水田面		2	杭	近世	マツ属複維管束亜属
1－11	1	上層水田面		10	杭	近世	マツ属複維管束亜属
1－12	1	上層水田面		20	杭	近世	クリ
1－13	1	上層水田面		30	杭	近世	クリ
1－14	1	上層水田面		40	杭	近世	クリ
1－15	1	上層水田面		53	杭	近世	マツ属複維管束亜属
1－16	1	上層水田面		56	杭	近世	ヒノキ属
1－17	1	上層水田面		57	杭	近世	ヒノキ属
1－18	1	上層水田面		58	杭	近世	ヒノキ属
1－19	1	上層水田面		62	杭	近世	ヒノキ属
1－20	1	上層水田面		63	杭	近世	ヒノキ属
2－ 1	2	5号井戸		8	枠板	戦国時代	ヒノキ属
2－ 2	2	5号井戸		22	枠板	戦国時代	ヒノキ属
2－ 3	2B	1号木棺		1	蓋横板	戦国時代	スギ
2－ 4	2B	1号木棺		2	蓋横板	戦国時代	スギ
2－ 5	2B	1号木棺		3	蓋板(右)	戦国時代	ヒノキ属
2－ 6	2B	1号木棺		4	蓋板(左)	戦国時代	ヒノキ属
2－ 7	2B	1号木棺		5	側板(東)	戦国時代	ヒノキ属
2－ 8	2B	1号木棺		6	側板(西)	戦国時代	ヒノキ属
2－ 8'	2B	1号木棺		6	側板(西)	戦国時代	ヒノキ属
2－ 9	2B	1号木棺		7	側板(北)	戦国時代	ヒノキ属
2－10	2B	1号木棺		8	側板(南)	戦国時代	ヒノキ属
2－11	2B	1号木棺		9	底板	戦国時代	ヒノキ属
2－12	2B	1号木棺		10	底板	戦国時代	ヒノキ属
2－13	2B	1号木棺		11	底板	戦国時代	ヒノキ属
2－14	2B	1号木棺		12	底板	戦国時代	ヒノキ属
2－15	2B	上層水田	E－25	7	箸	戦国時代	イネ科タケ亜科
2－16	2B	上層水田		1	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－17	2B	上層水田		2	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－18	2B	上層水田		3	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－19	2B	上層水田		4	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－20	2B	上層水田		5	畦畔立木	戦国時代	針葉樹
2－21	2B	上層水田		6	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－22	2B	上層水田		7	畦畔立木	戦国時代	キブシ
2－23	2B	上層水田		8	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－24	2B	上層水田		9	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－25	2B	上層水田		10	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－26	2B	上層水田		11	畦畔立木	戦国時代	キブシ
2－27	2B	上層水田		12	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－28	2B	上層水田		13	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－29	2B	上層水田		14	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－30	2B	上層水田		15	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－31	2B	上層水田		16	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－32	2B	上層水田		17	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－33	2B	上層水田		18	畦畔立木	戦国時代	ウツギ属
2－34	2B	上層水田		19	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－35	2B	上層水田		20	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－36	2B	上層水田		21	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－37	2B	上層水田		22	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－38	2B	上層水田		23	畦畔立木	戦国時代	ヤナギ属
2－39	2B	下層水田	D－24		笛	10～14世紀	広葉樹(散孔材)
2－40	2B	下層水田水口			曲げ物底板	10～14世紀	ヒノキ属
2－41	2B	下層水田		1	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－42	2B	下層水田		2	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－43	2B	下層水田		3	畦畔杭	10～14世紀	スギ

番　号	地区	遺　構　名	グリッド	遺物番号	形　　態	時　　代	樹　　種
2－ 44	2B	下層水田		4	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 45	2B	下層水田		5	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 46	2B	下層水田		6	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 47	2B	下層水田		7	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 48	2B	下層水田		8	畦畔杭	10～14世紀	クリ
2－ 49	2B	下層水田		9	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 50	2B	下層水田		10	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 51	2B	下層水田		11	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 52	2B	下層水田		12	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 53	2B	下層水田		13	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 54	2B	下層水田		14	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 55	2B	下層水田		15	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 56	2B	下層水田		16	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 57	2B	下層水田		17	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 58	2B	下層水田		18	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 59	2B	下層水田		19	畦畔杭	10～14世紀	クリ
2－ 60	2B	下層水田		20	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 61	2B	下層水田		21	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 62	2B	下層水田		22	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 63	2B	下層水田		23	畦畔杭	10～14世紀	クリ
2－ 64	2B	下層水田		24	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 65	2B	下層水田		25	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 66	2B	下層水田		26	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 67	2B	下層水田		27	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 68	2B	下層水田		28	畦畔杭	10～14世紀	クリ
2－ 69	2B	下層水田		29	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 70	2B	下層水田		30	畦畔杭	10～14世紀	トウヒ属
2－ 71	2B	下層水田		31	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 72	2B	下層水田		32	畦畔杭	10～14世紀	カラマツ
2－ 73	2B	下層水田		33	畦畔杭	10～14世紀	トウヒ属
2－ 74	2B	下層水田		34	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 75	2B	下層水田		35	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 76	2B	下層水田		36	畦畔杭	10～14世紀	スギ
2－ 77	2B	下層水田		37	畦畔杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 78	3	上層水田	C－39	20	板状木製品	戦国時代	ヒノキ属
2－ 79	3	上層水田	Z－38	49	板状木製品	戦国時代	スギ
2－ 80	3	上層水田	Z－38	16	斎串	戦国時代	スギ
2－ 81	3	上層水田	A－38	44	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2－ 82	3	上層水田	Z－38	48	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2－ 83	3	上層水田	A－38	56	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2－ 84	3	上層水田	A－38	64	斎串	戦国時代	スギ
2－ 85	3	下層水田	D－36	116	板状木製品	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 86	3	下層水田	Z－36	134	杭	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 87	3	下層水田	D－41	274	曲げ物底板	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 88	3	下層水田	Z－42	291	棒状木製品	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 89	3	下層水田	D－43	298	板状木製品	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 90	3	下層水田	C－37	176	斎串	10～14世紀	スギ
2－ 91	3	下層水田	Z－37	210	斎串	10～14世紀	スギ
2－ 92	3	下層水田	A－41	230	斎串	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 93	3	下層水田	A－42	292	斎串	10～14世紀	スギ
2－ 94	3	下層水田	A－42	305	斎串	10～14世紀	スギ
2－ 95	3	下層水田	A－40	306	斎串	10～14世紀	ヒノキ属
2－ 96	3	下層水田		1	畦畔立木	10～14世紀	ヤナギ属
2－ 97	3	下層水田		2	畦畔立木	10～14世紀	ヤナギ属
2－ 98	3	下層水田		3	畦畔立木	10～14世紀	ヤナギ属
2－ 99	3	下層水田		4	畦畔立木	10～14世紀	モモ
2－100	3	下層水田		5	畦畔立木	10～14世紀	ヤナギ属
2－101	3	下層水田下10層		2	曲げ物蓋板	10～14世紀	ヒノキ属
2－102	3	下層水田下10層		3	板状木製品	10～14世紀	スギ
2－103	4	上層水田	Z－53		棒状木製品	戦国時代	クリ
2－104	4	下層水田	Z－53	32	斎串	10～14世紀	スギ
2－105	4	下層水田	A－55	48	鏃形木製品	10～14世紀	スギ
2－106	4	下層水田	A－57	56	火きり臼	10～14世紀	スギ
2－107	4	下層水田	A－57	57	火きり臼	10～14世紀	スギ
2－108	4	下層水田	Z－59	69	曲げ物底板	10～14世紀	ヒノキ属

番　号	地区	遺　構　名	グリッド	遺物番号	形　　態	時　　代	樹　　種
2−109	4	下層水田	B−59	75	棒状木製品	10〜14世紀	ヒノキ属
2−110	4	下層水田	B−61	82	板状木製品	10〜14世紀	ヒノキ属
2−111	4	下部礫層			梯子	弥生時代末〜古墳時代	スギ
2−112	2B	下層水田	E−28		斎串	10〜14世紀	スギ
2−113	3	上層水田	A−38	18	斎串	戦国時代	スギ
2−114	3	上層水田	A−40	22	斎串	戦国時代	スギ
2−115	3	上層水田	A−43	29	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−116	3	上層水田	B−38	50	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−117	3	上層水田	Z−38	52	斎串	戦国時代	スギ
2−118	3	上層水田	A−38	55	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−119	3	上層水田	A−38	61	斎串	戦国時代	スギ
2−120	3	上層水田	A−38	65	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−121	3	上層水田	B−38	68	斎串	戦国時代	スギ
2−122	3	上層水田	Z−39	71	斎串	戦国時代	スギ
2−123	3	上層水田	Z−40	83	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−124	3	上層水田	Z−40	85	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−125	3	上層水田	B−40	91	斎串	戦国時代	スギ
2−126	3	上層水田	D−40	97	斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−127	3	上層水田	C−44	109	斎串	戦国時代	スギ
2−128	3	下層水田	B−32	118	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−129	3	下層水田	B−38	151	斎串	10〜14世紀	スギ
2−130	3	下層水田	B−38	152	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−131	3	下層水田	A−38	158	斎串	10〜14世紀	スギ
2−132	3	下層水田	A−38	170	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−133	3	下層水田	A−38	171	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−134	3	下層水田	C−37	177	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−135	3	下層水田	A−39	178	斎串	10〜14世紀	スギ
2−136	3	下層水田	A−39	181	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−137	3	下層水田	A−37	195	斎串	10〜14世紀	スギ
2−138	3	下層水田	B−38	211	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−139	3	下層水田	B−38	212	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−140	3	下層水田	C−39	217	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−141	3	下層水田	B−39	219	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−142	3	下層水田	A−41	229	斎串	10〜14世紀	スギ
2−143	3	下層水田	D−38	267	斎串	10〜14世紀	スギ
2−144	3	下層水田	B−41	279	斎串	10〜14世紀	スギ
2−145	3	下層水田	B−38	281	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−146	3	下層水田	A−43	286	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−147	3	下層水田	Z−43	287	斎串	10〜14世紀	スギ
2−148	3	下層水田	Z−41	289	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−149	3	下層水田	A−41	290	斎串	10〜14世紀	スギ
2−150	3	下層水田	D−43	297	斎串	10〜14世紀	スギ
2−151	3	下層水田	Z−41	303	斎串	10〜14世紀	スギ
2−152	3	下層水田	A−41	304	斎串	10〜14世紀	スギ
2−153	4	上層水田	B−53		斎串	戦国時代	ヒノキ属
2−154	4	上層水田	C−51		斎串	戦国時代	スギ
2−155	4	上層水田	C−54		斎串	戦国時代	スギ
2−156	4	下層水田	Y−51	7	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−157	4	下層水田	Z−52	25	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−158	4	下層水田	C−52	26	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−159	4	下層水田	C−53	28	斎串	10〜14世紀	スギ
2−160	4	下層水田	Y−52	33	斎串	10〜14世紀	スギ
2−161	4	下層水田	Z−53	42	斎串	10〜14世紀	ヒノキ属
2−162	4	下層水田	A−55	50	斎串	10〜14世紀	スギ
2−163	4	下層水田	A−55	52	斎串	10〜14世紀	マツ属複維管束亜属
2−164	4	下層水田	Z−57	60	斎串	10〜14世紀	スギ
2−165	4	下層水田	Z−58	62	斎串	10〜14世紀	スギ
2−166	4	下層水田	B−59	73	斎串	10〜14世紀	スギ
2−167	4	下層水田	C−59	76	斎串	10〜14世紀	スギ
2−168	4	下層水田	C−60	78	斎串	10〜14世紀	スギ
2−169	4	下層水田	X−60	85	斎串	10〜14世紀	スギ
2−170	4	下層水田	X−63	101	斎串	10〜14世紀	スギ

る。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ウツギ属（Deutzia）　　ユキノシタ科

散孔材で道管は小径で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は大型で、異性、１～４細胞幅、100細胞高を越える。鞘細胞が認められる。

・モモ（Prunus salicina Lindley）　　バラ科サクラ属

環孔性を帯びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が４～５列配列し、やや急激に管径を減じた後、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、１～６細胞幅、１～70細胞高。

・キブシ（Stachyurus praecox Sieb. et Zucc.）　　キブシ科キブシ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または２～３個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～網目状に配列する。放射組織は異性II型、１～４細胞幅、１～60細胞高。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められる。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

４．考察

同定を行った木製品は、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代、平安時代末、戦国時代・近世に分かれる。各時代別・用途別の種類構成を第34表に示す。以下、各時代別に木製品の樹種と用材選択の傾向について検討する。

・弥生時代末～古墳時代初頭

梯子１点について同定を行い、樹種はスギであった。島地・伊東（1988）を見ると、梯子の用材には針葉樹材のマツ属、スギ、広葉樹材のコナラ属コナラ亜属コナラ節、ヤマグワが比較的多く使用され、他にも多くの樹種が使用されている。本遺跡周辺地域では類例が知られていないが、静岡県内で行われた調査では多くがスギである。この結果は、今回の結果とも一致しており、本地域でもスギが梯子の用材として選択されていた可能性がある。今後さらに資料を蓄積して、詳細を明らかにしたい。

・10世紀～14世紀

曲げ物底板および蓋板、火きり臼、笛、斎串、畦畔杭、杭、鏃状木製品、板状木製品、棒状木製品と畦畔立木について同定を行った。これらの樹種同定結果を見ると、木製品の多くはスギとヒノキ属である（表33）。スギとヒノキ属以外の樹種が使用されている木製品を見ると、笛に広葉樹（散孔材）、斎串にマツ属複維管束亜属、畦畔杭にカラマツ、トウヒ属、クリがそれぞれ同定されている。

これらの木製品の内、曲げ物、火きり臼、斎串については、これまで各地で行われた調査でもスギやヒノキ属が多く確認されている（島地・伊東，1988；伊東，1991）。周辺地域では、長坂町柳坪遺跡から出土した平安時代の木製品にもヒノキ属が多数確認されており、今回の結果とも調和的である（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986）。ヒノキ属は、花粉分析の結果から周辺で入手可能であったと考えられる。また、加工が容易で、耐水性・防虫性などにも優れた材質を有している、これらの点が多用された背景に考えられる。

火きり臼については、各地で同定された試料の多くがスギである（島地・伊東，1988）。スギが用いられた背

第34表　時代別・用途別樹種構成

時代	弥生	古墳時代			10世紀～14世紀											中世・戦国時代・近世												合計
用途					曲げ物												木棺											
樹種名	梯子	棒状遺物	しゃもじ状遺物	穴のある木製品	底板	蓋板	火きり臼	笛	斎串	畦畔杭	杭	鏃形木製品	板状木製品	棒状木製品	畦畔立木	井戸枠板	蓋横板	蓋板	側板	底板	箸	斎串	樽板の破片	板状木製品	棒状木製品	杭	畦畔立木	
カラマツ										1																		1
複維管束亜属									1																	3		4
トウヒ属										2																		2
ツガ属									2																			2
スギ	1						2		28	7		1	1				2					12			1			55
ヒノキ属			1	1	3	1			21	23	1		3	2		2		2	5	4		12	1	1		5		88
ヤナギ属															4												19	23
クヌギ節		1																										1
クリ										4															1	3		8
ウツギ属																											1	1
モモ															1													1
キブシ																											2	2
タケ亜科																					1							1
針葉樹																											1	1
広葉樹								1																				1
合計	1	1	1	1	3	1	2	1	52	37	1	1	4	2	5	2	2	2	5	4	1	24	1	1	2	11	23	191

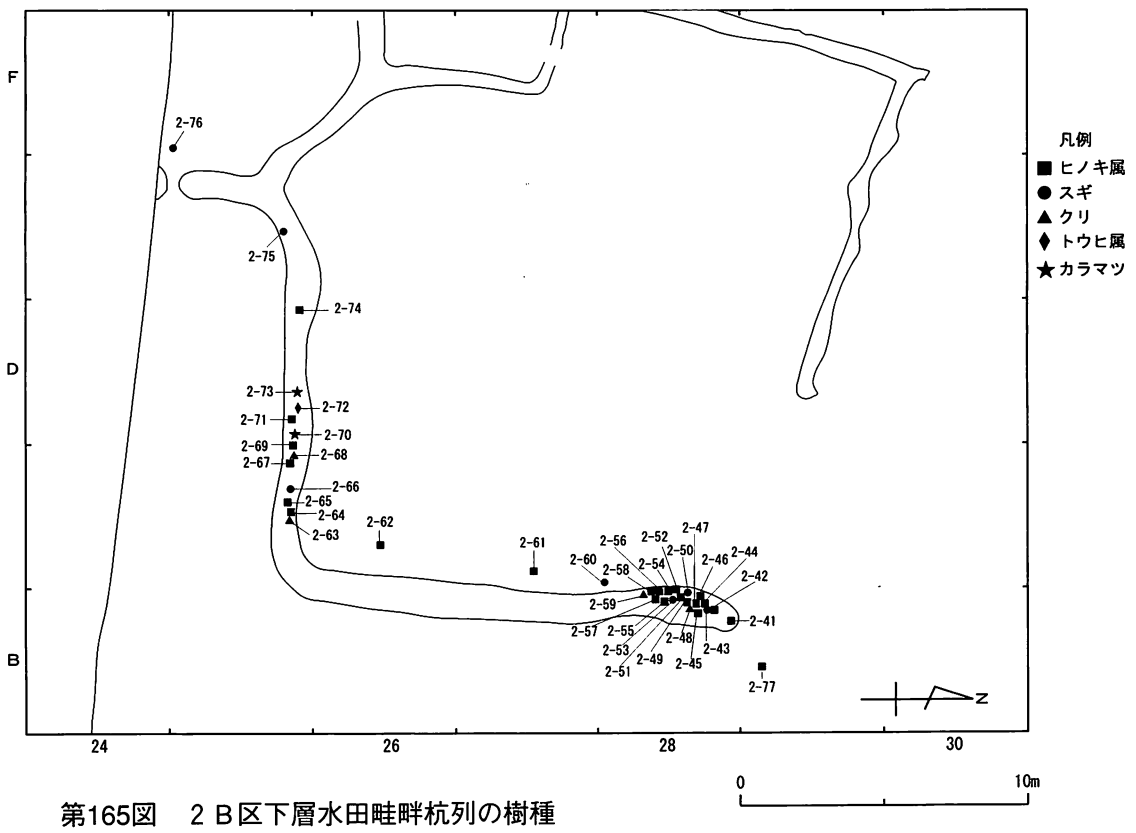
1) 類似種は、各種類に含めて集計した。

景には、スギ材の加工性や発火性等を意識した用材選択が行われていたことが示唆される。

今回の結果は、これまでに知られている樹種選択の傾向と調和的である。前回の調査と比較すると、スギが多く同定されたのが特徴である。前回の調査では、斎串にスギが1点も同定されていない。水田によって木製品の樹種構成が異なる結果は、土地所有者や耕作者の身分や階級の差を表すものなのかもしれない。しかし、調査試料数に差があり、現時点の結果で判断することはできない。

畦畔の杭列も他の木製品と同様にヒノキ属が多く、カラマツ、トウヒ属、スギ、クリも用いられている。これらの平面分布を見ると（第165図）、北側の杭材集中部と南側の杭列のいずれも構成樹種が多く、南側でカラマツやトウヒ属が見られる以外に特に差異は認められない。全国で行われた杭材の樹種同定結果を見ると、数多くの樹種が同定され、中には木製品にはみられないような樹種もある（島地・伊東，1988）。このような傾向から、杭材に使用した木材は、特定の樹種を選択したのではなく、周辺に生育していた樹木、加工時の余材、廃材の転用など、様々な木材が利用されていたことが推定される。ヒノキ属が多い結果は、木製品の種類構成とも調和的である。ヒノキ属が有用材であることを考慮すれば、加工時の枝などの余材が杭として利用されている可能性がある。一方、ヒノキ属と同様に斎串に多く見られたスギは、木製品には認められるものの、杭には全く認められなかった。同様の傾向は、近接する大師東丹保遺跡の調査結果でも認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1997）。この結果から、スギ材については他地域から製品として搬入されたことや、スギがヒノキ属ほど入手が容易ではなかったこと等が考えられる。カラマツとトウヒ属については、現在の遺跡周辺で自生はみられない。今回出土した両種は、周辺山地等から得てきたことや、釜無川や御勅使川等によって運ばれてきた流木を利用したことが考えられる。

畦畔立木は、大きく2種類に分かれ、単独で水口部分などに存在するものと（畦畔木）、畦畔上に数メートルおきに何本かが連続して並ぶもの（畦畔木列）がある（中山，1993）。下層水田面では、3区から5本（№96-100）の畦畔立木が出土している。出土状況をみると、№96-98,100の4本は比較的直線上に位置し、№99の1本のみがややはずれて位置している（第166図）。このことから、直線上に位置する4本が畦畔木列、はずれている1本が畦畔木と考えられている。樹種を見ると、畦畔木列の4本はいずれもヤナギ属、畦畔木はモモであり、木列と畦畔木で樹種が異なる。いずれも植栽されたものと推定されているが、樹種が異なる結果は、畦畔木列と畦畔木で植栽の目的が異なっていた可能性を示唆する。このうち、木列については刈り取ったイネを干すための立樹稲架の可能性が指摘されている（中山，1993）。このような目的に利用する木材は、宮脇（1977）



第165図　２Ｂ区下層水田畦畔杭列の樹種

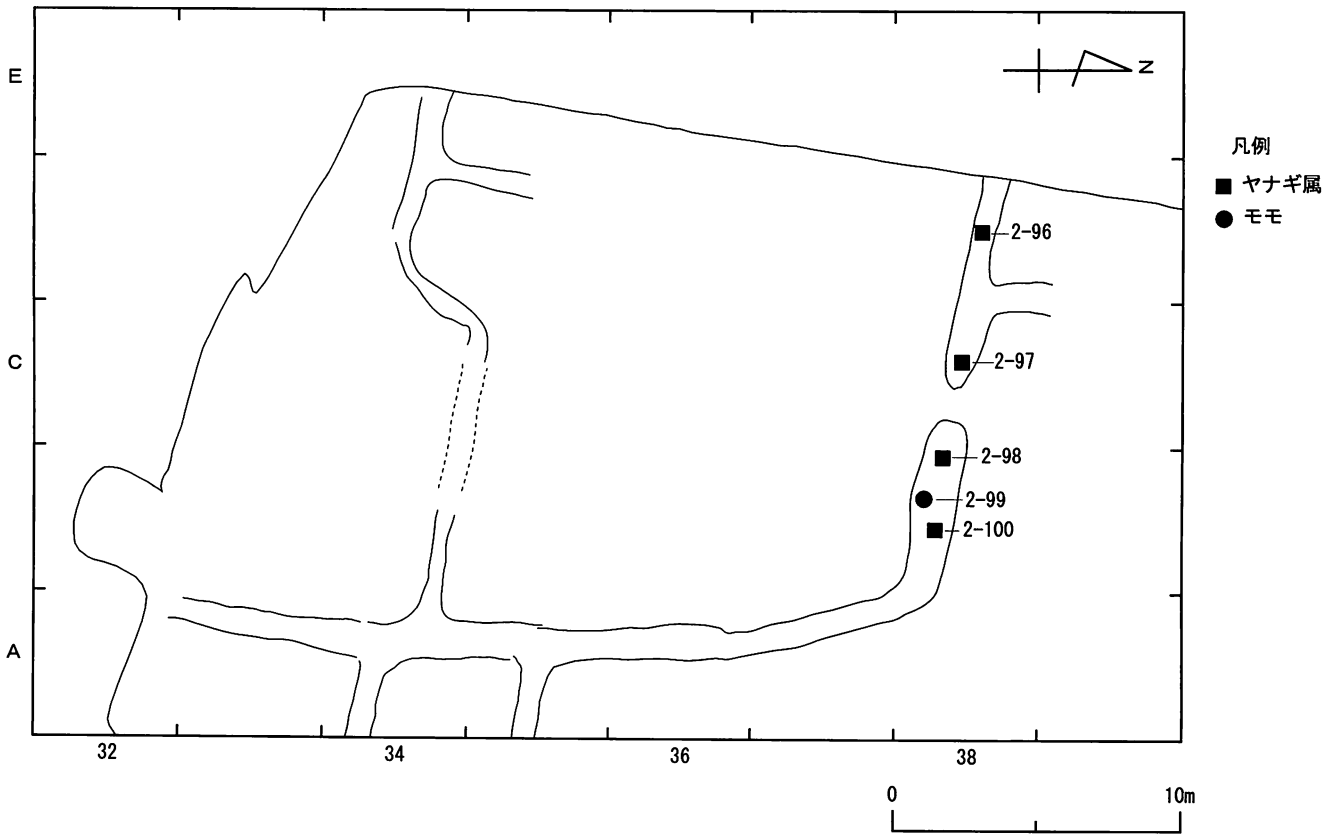
の指摘するように、防風林等と同様にその地域の潜在自然植生の代表的な構成種を植栽した可能性がある。本遺跡の立地が扇状地ということを考えれば、木列で認められたヤナギ属は遺跡周辺で普通にみられた樹木の可能性がある。

また、ヤナギは、中国では邪気を祓うめでたい木とされ、日本でも柳の枝を、田の神の依代として水口に挿し、祀る風習が古くからあった（筒井，1989）。ヤナギ属が選択された背景には、このような信仰も関係している可能性がある。一方、モモは、中国原産であり、日本には古くに渡来したと考えられている（粉川，1988）。また、遺跡から出土するモモの核にはいくつかの形態があり、複数の品種が継続的に持ち込まれた可能性が指摘されている（金原，1996）。モモは生食可能であることから、主に食用として利用されていたことが推定される。また、中国では、モモは仙界を象徴する花であり、実は穢れをうち払うという思想がある。日本では、古事記のイザナギとイザナミの説話にモモの実が登場しており、中国の思想を受けて、祭祀や信仰の対象となっていたことがうかがえる（井口，1990）。実際に、長野県屋代遺跡群では、出土したモモ核に熱を受けた跡が認められ、祭祀的な可能性も指摘されている（辻ほか，1999）。これらのことから、モモの植栽についても、信仰が関係している可能性がある。

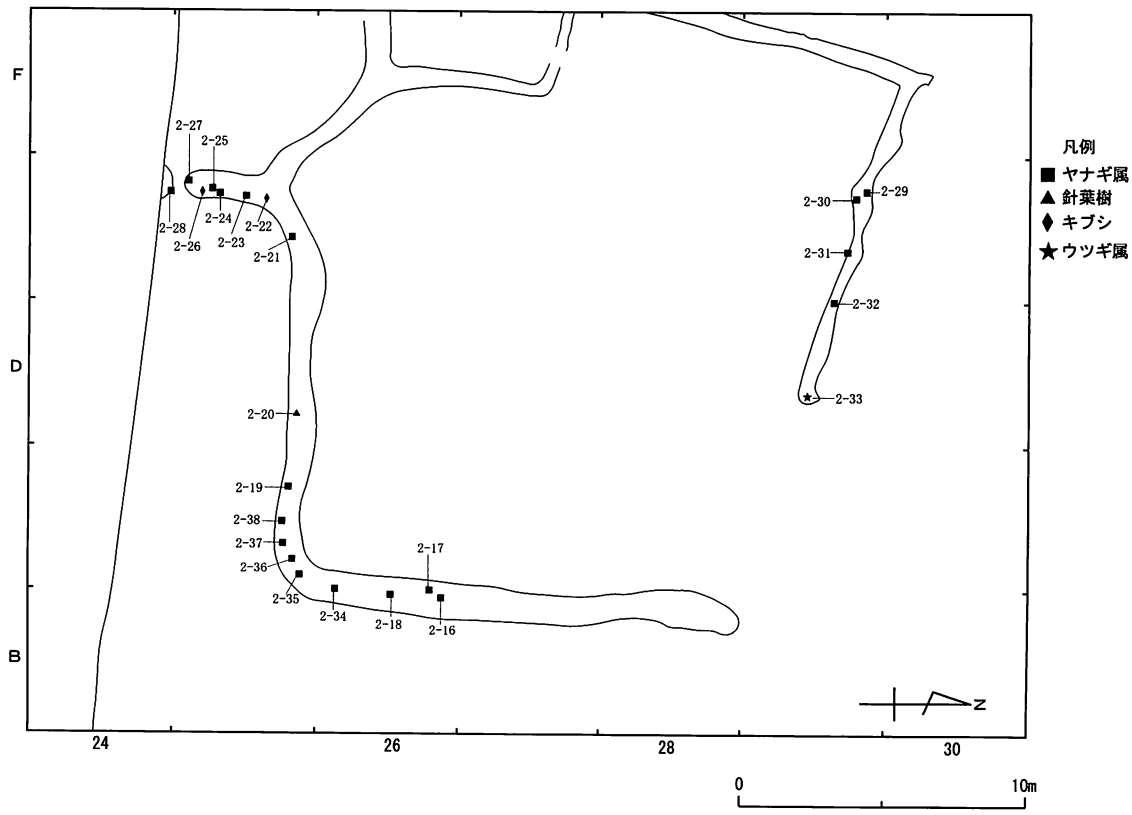
・戦国時代・近世

井戸枠板、木棺（蓋横板、蓋板、側板、底板）、箸、斎串、板状木製品、棒状木製品、畦畔立木等について同定を行った。種類構成を見ると、10～14世紀と同様にスギとヒノキ属が多い。この結果から、基本的にはヒノキ属やスギを中心とした用材選択が継続して行われていたと考えられる。

ヒノキ属が利用されている製品のうち、井戸枠はこれまで各地で行われた調査でもヒノキ属が比較的多い。この背景には、ヒノキ属が耐水性の高い材質であることを考慮した用材選択が行われていたことを示唆する。また、木棺は、蓋をおさえる横板２点がスギであったが、木棺本体（蓋板、側板、底板）は全てヒノキ属であった。当該期の木棺の樹種同定は少なく、用材の傾向については明確ではない。木棺の材は、日本書紀の記述の中でコウヤマキが適しているとされ、関西地方を中心にコウヤマキの木棺が数多く出土している（島地・伊



第166図　３区下層水田の畦畔立木の樹種



第167図　２Ｂ区上層水田畦畔立木の樹種

東，1988)。一方、関東地方周辺では、コウヤマキの木棺は出土例がなく、ヒノキ属やスギが同定されている。これは、関東地方周辺にはコウヤマキの自生がなく、代用として加工性や耐水性が高いヒノキ属やスギが用いられたものと考えられる。今回の結果も、周辺地域で入手可能な木材の中から、耐水性が高く加工が容易なヒノキ属を選択したものと考えられる。蓋横板の２点のみがスギであったが、この２点がスギである理由については不明である。今後同様の木棺が出土した場合には、部材別に同定を行い、今回と同様の結果が出るのか否かを確認する必要がある。

畦畔立木は、2B区上層水田において23本（№16～38）が確認されている（第167図)。下層水田と同様に２種類にわかれ、№16～28,34～38の18本が畦畔木列、№14～18の５本が畦畔木と考えられている。同定結果を見ると、下層水田と同様にヤナギ属が多く、他にキブシ、ウツギ属、針葉樹が認められた。しかし、その配列は上層水田とは異なり、特に畦畔木列にヤナギ属が選択されていたような傾向はみられない。これらの畦畔立木にヤナギ属が多い背景には、平安時代と同様に土地に適した植物であったことや信仰に関係していることが考えられる。

また、畦畔木にはウツギ属も同定されているが、ウツギ属のうちウツギは稲作と密接な樹木であり、その花期は古くから田植え時の目印とされていた（稲垣，1985；井口，1990)。これらのことから、ウツギ属についても、稲作と関係の深いウツギを畦畔に植栽した可能性がある。

引用文献

井口樹生（1990）三省堂選書155「古典の中の植物誌」．261p.，三省堂．

稲垣富夫（1985）草木万葉百首．281p.，右文書院．

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料，№26，p.91-189，京都大学木材研究所．

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．考古学ジャーナル，409，p.15-19，ニュー・サイエンス社．

粉川昭平（1988）穀物以外の植物食．金関　恕・佐原　眞編「弥生文化の研究２　生業」，p.112-115，雄山閣．

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64．

小坂共栄・角田史雄（1969）山梨県西部，巨摩山地第三系の地質．地質学雑誌，№75，p.127-140．

宮脇　昭編（1977）日本の植生．535p.，学研．

中山誠二（1993）山梨県における稲作関連遺跡調査の現状．山梨縣考古學協會誌，№6，p.18-31．

大泉久一（1976）ゴマ．週間朝日百科世界の植物９，p.244-245．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986）柳坪遺跡出土材試料同定報告．山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集「柳坪遺跡　中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」，p.168-167，山梨県教育委員会・日本道路公団．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）東丹保遺跡Ⅰ区から出土した木製品の樹種．山梨県埋蔵文化財センター　調査報告書第131集「山梨県中巨摩郡甲西町　大師東丹保遺跡Ⅰ区　一般国道52号線（甲西道路）改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.54-64，山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局．

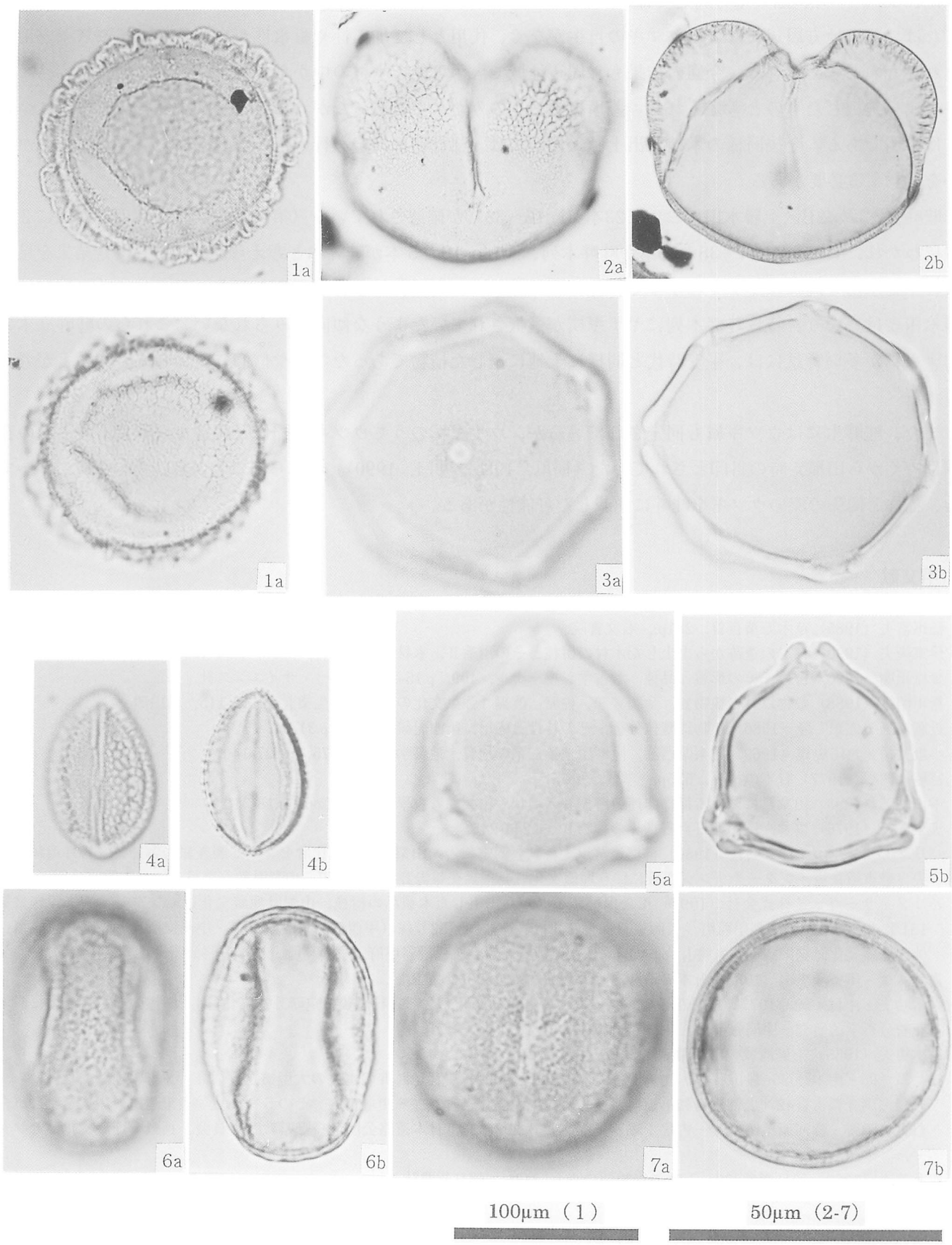
島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.，雄山閣．

鈴木功夫・中村　純（1977）稲科花粉の堆積に関する基礎的研究．文部省科研費特定研「古文化財」「稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究－中間報告－」（中村　純編)，p.1-10．

高木勇夫（1985）条里地域の自然環境．238p.，古今書院．

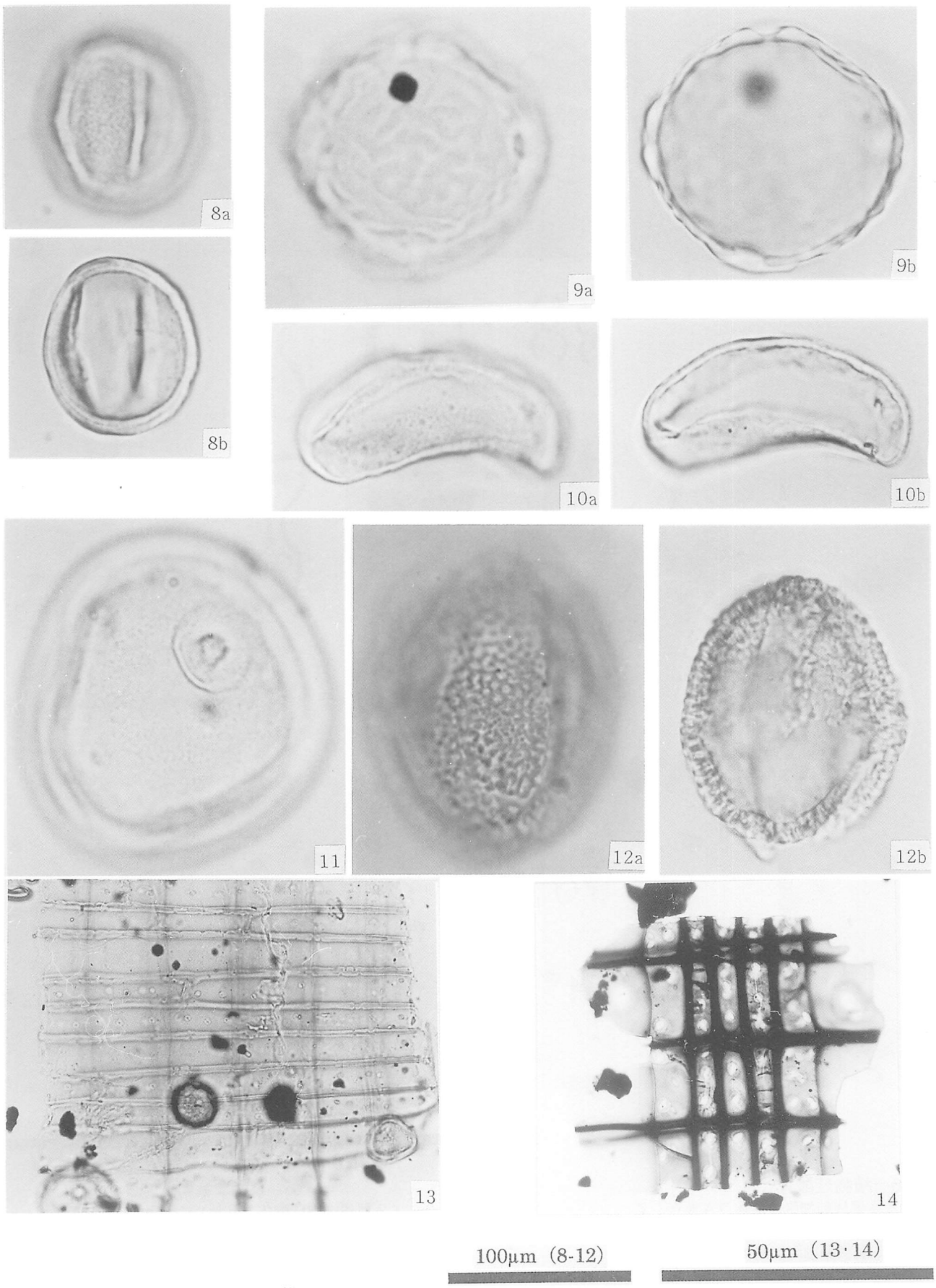
辻　誠一郎・南木睦彦・住田雅和・辻　圭子・福田美和（1999）屋代遺跡群の古代の大型植物遺体群．長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26　－更埴市内　その５－　更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）　－古代１編－　本文」，p.303-323，日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター．

筒井迪夫（1989）朝日選書372「万葉の森物語の森」．243p.，朝日新聞社．



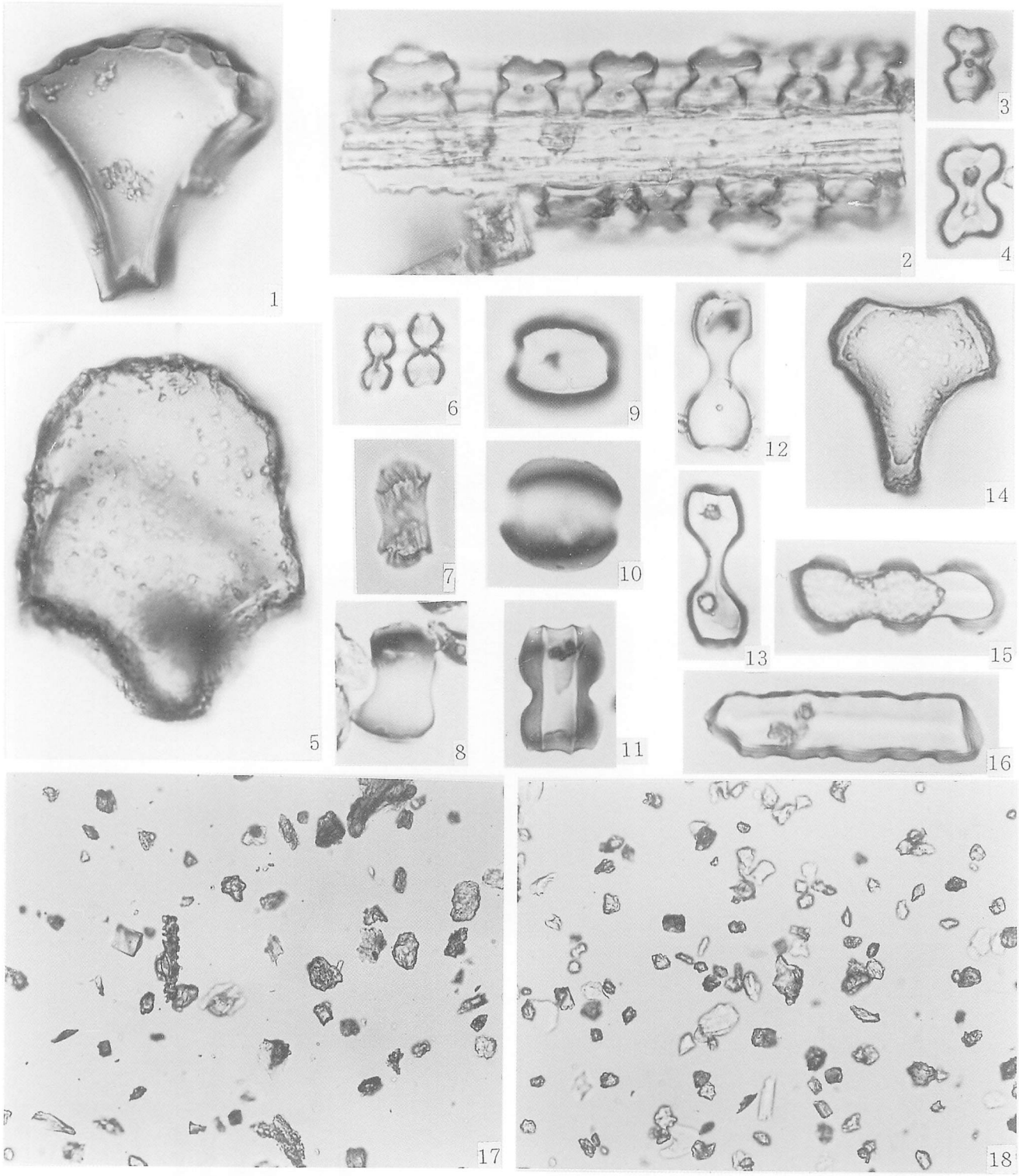
図版24　花粉化石（1）

1．ツガ属（A地点：16）、2．トウヒ属（A地点：16）、3．クルミ属（A地点：16）、4．ヤナギ属（A地点：16）、5．カバノキ属（A地点：16）、6．コナラ属コナラ亜属（A地点：19）、7．ブナ属（A地点：16）



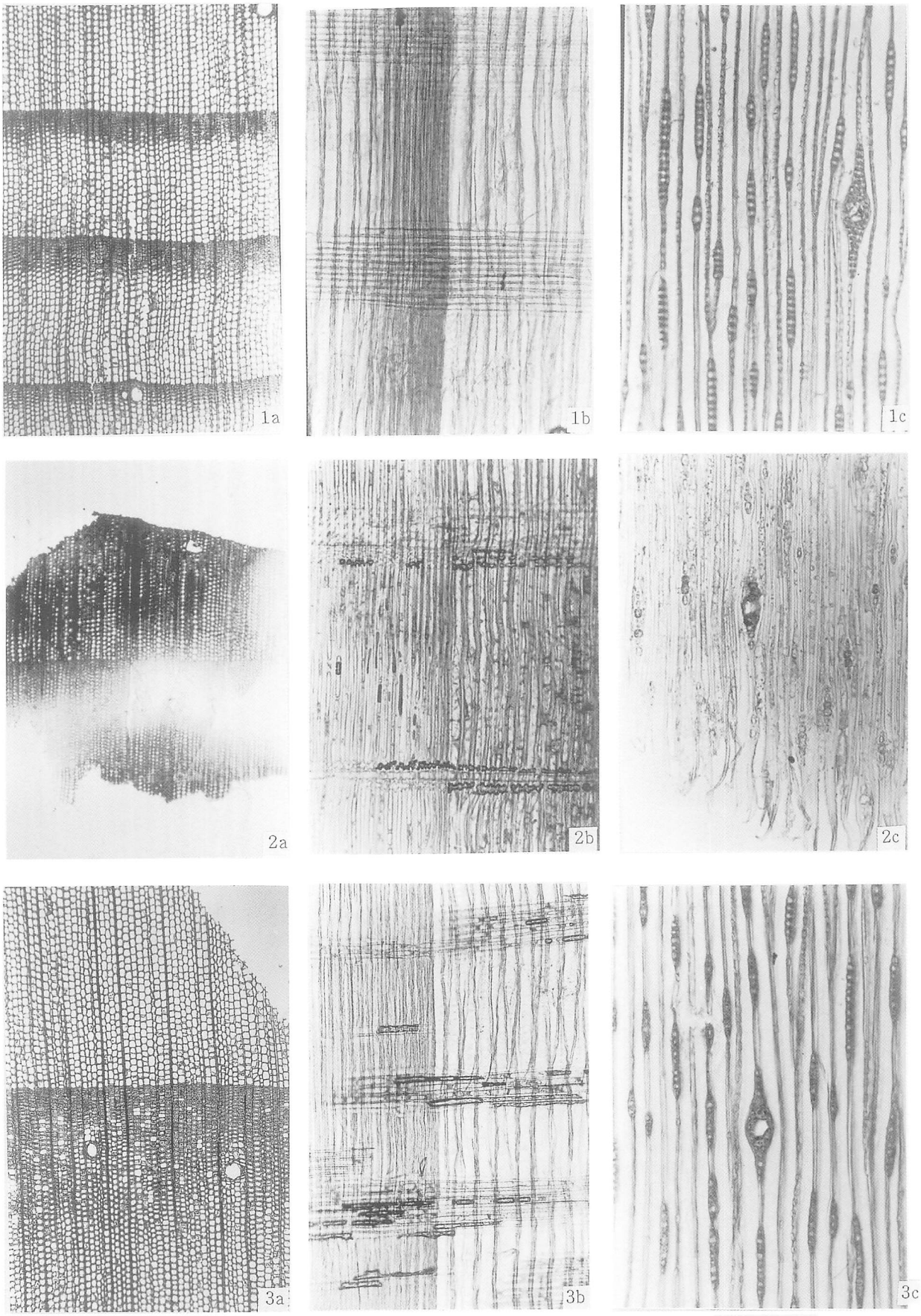
図版25　花粉化石（２）・材の組織片

８．コナラ属アカガシ亜属（Ａ地点：17）、９．ニレ属－ケヤキ属（Ａ地点：16）、10．ミズアオイ属（Ａ地点：16）、11．イネ科（Ａ地点：17）、12．ソバ属（Ａ地点：17）、13．モミ属近似種の材組織片（Ａ地点：５ｂ）、14．ヒノキ属近似の材組織片（Ａ地点：４）



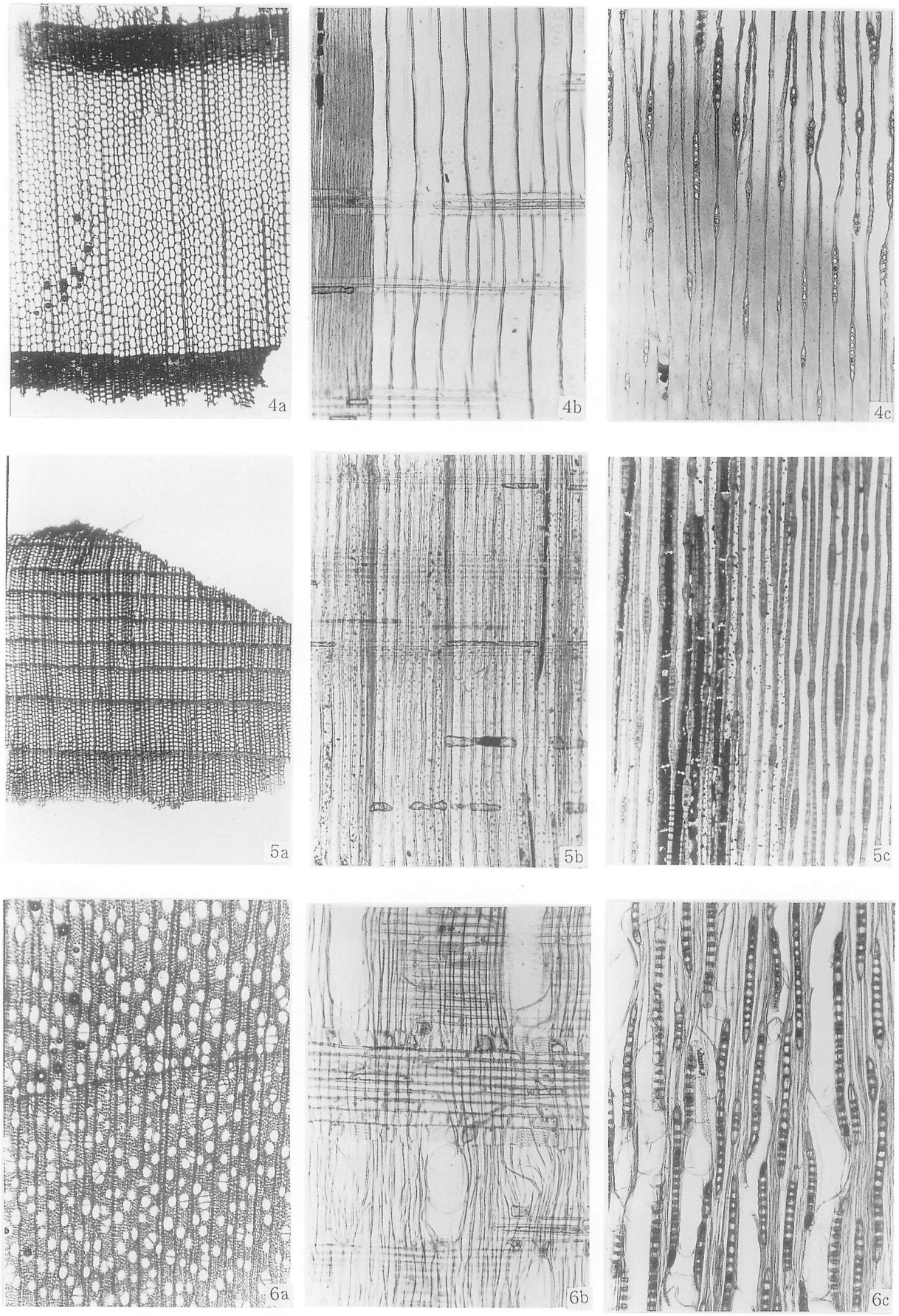
図版26　植物珪酸体

1．イネ属機動細胞珪酸体（A地点：7）
2．イネ属短細胞珪酸体（B地点：6 b）
3．イネ属短細胞珪酸体（B地点：5 a）
4．キビ族短細胞珪酸体（A地点：1）
5．ヨシ属機動細胞珪酸体（B地点：6 b）
6．イネ属短細胞珪酸体（B地点：6 b）
7．チゴザサ属短細胞珪酸体（A地点：8）
10．ヨシ属短細胞珪酸体（A地点：6 a）
11．イネ属短細胞珪酸体（B地点：6 a）
12．ススキ属短細胞珪酸体（A地点：6 a）
13．ススキ属短細胞珪酸体（A地点：9）
14．シバ属機動細胞珪酸体（A地点：1）
15．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（A地点：1）
16．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（A地点：7）
17．状況写真（A地点：12）
18．状況写真（A地点：4）



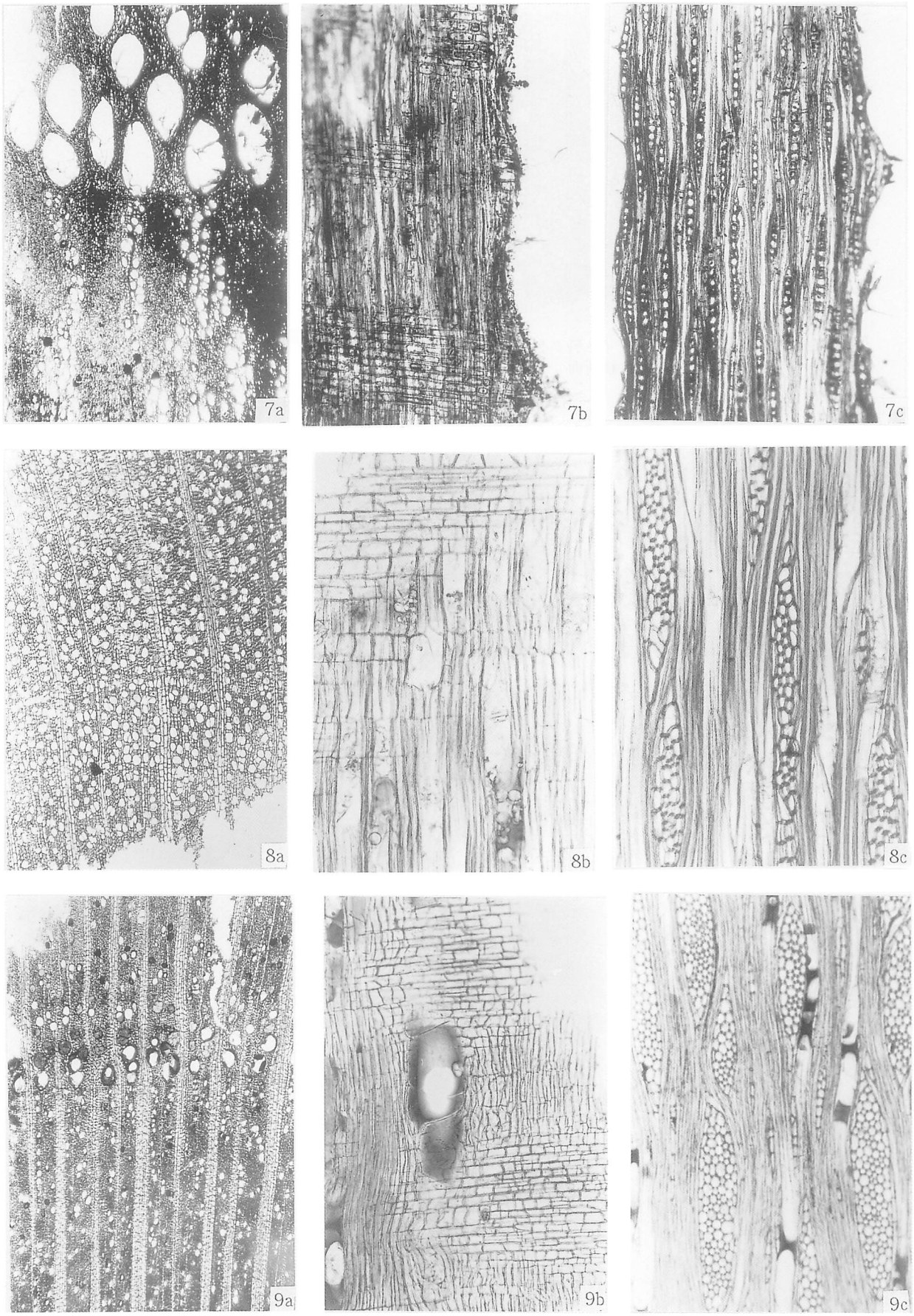
図版27　木材（1）

1．カラマツ（No72）
2．マツ属複維管束亜属の一種（No163）
3．トウヒ属の一種（No70）
　a：木口、b：柾目、c：板目



図版28　木材（2）

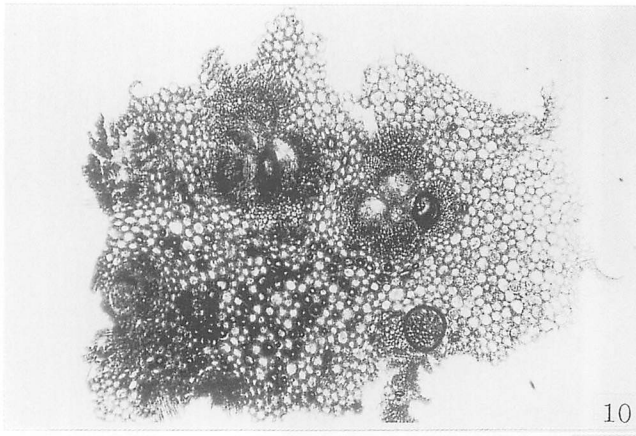
4．スギ（No111）
5．ヒノキ属の一種（No145）
6．ヤナギ属の一種（No97）
　a：木口、b：柾目、c：板目



図版29　木材（３）

7．クリ（No68）
8．ウツギ属の一種（No32）
9．モモ（No99）
　a：木口、b：柾目、c：板目

200μm：a
200μm：b.c



200μm

図版30　木材（４）　　10. イネ科タケアカの一種（No22）
横断面

第４節　木棺・呪符木簡について

小　林　健　二

２ｂ区では最上層の遺構面から２基の木棺が発見された。特に１号木棺からは多くの情報が得られたが、ここで若干の検討を行ってみたい。

まず構造について。当初は現地で地山層を掘削し、坑底に板を四枚敷いた後側板をはめ込んで組み立て、葬送儀礼を行った後蓋板をのせたものと想定していた。しかし側板と底板には釘孔が存在し、その後個々の板を実測する段階になって、目釘の存在も観察できた。したがって土坑内でのはめ込みではなく、釘を使用し棺を組み立てた後に、埋設したことになる。ただし組み立てられたものを運んできたのか、現地で埋納する直前に組み立てられたものかどうかはわからない。東西・南北の側板にはそれぞれ切り込みがあり、かみ合うようになっており組み立てやすいこと、また棺底部が簀の子状で歪みやすいことも考え合わせると、現地で組み立てられたものとした方が良いかもしれない。

次に副葬品について。２枚のかわらけは本遺跡の東側に隣接する二本柳遺跡（農道部分）で出土したものと同時期で、古銭６枚（北宋銭４枚・明銭２枚）と合わせ、16世紀後半とみられる。かわらけには稲穂が供えられ、底の北側には数珠玉が散乱しており、灰のような固まりが付着していた。

さらに注目されるのは、蓋板・底板に梵字が、側板に梵字・偈文が書かれていることである。蓋板の表側には「南無大日如来」の意を表す梵字が確認でき、北側板の外面には「八葉白蓮一肘間、炳現阿字索光色、禅智俱入金剛縛、召入如来寂静智」が、南側板の外面には「迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」が読みとれる。また東側板の外面と底板の一枚にも梵字が見られる。これら梵字・偈文は真語密教で用いられ、元興寺極楽坊所蔵の『入棺作法』にも記されている。

以上を考慮すると、被葬者は寺院に関わる人物であり、火葬によって葬られたということになろう。

ところで二本柳遺跡（農道部分）では、近在する法善寺の子院で、戦国時代武田信玄の祈願寺であった福寿院の一部が調査されている。これらの寺院との関係が注目されるが、２ｂ区で確認された溝は福寿院の寺域境を示す区画溝であった可能性が大きく、信玄の影響のもとに子院の中でも広大な寺域を誇っていたことが窺える。そして２ｂ区のあたりは墓地であったことが考えられる。

一方２号木棺からは４点の呪符木簡が出土している。その内３点には１号木棺の側板に書かれていたものと同じ偈文が書かれているのが読み取れる。したがって残りの１点には「迷故三界城」が書かれていたものと思われる。２号木棺自体にも梵字・偈文が書かれていると思われるが、判読は不可能である。

今回のように中世の木棺がほぼ完全な状態で発見された例は県内では初めてであり、また全国的にも珍しく、中世の信仰や葬送儀礼の一端を垣間見ることができる貴重な資料である。

参考文献

藤澤典彦 1992「元興寺所蔵葬送関係次第『入棺作法』」（財）元興寺文化財研究通信41
五味信吾 1992「福寿院について」『二本柳遺跡』山梨県教育委員会他
中山誠二・小林健二　1992「山梨県若草町二本柳遺跡」『月刊文化財発掘出土情報』117号　ジャパン通信社
水野正好　1993「葬とまじなひ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集
小林健二　1993「山梨・二本柳遺跡」『木簡研究』第15号　木簡学会

第５節　二本柳遺跡の水田跡と甲府盆地の埋没条里

― 条里の施工時期をめぐって ―

中　山　誠　二

１　はじめに

日本列島のほぼ中央部の糸魚川－静岡構造線の東側にある甲府盆地は、四周を高い山々に囲まれ、それらの山塊から流れ出た川が、盆地の扇状地地形を複雑に発達させている。

洪水や河川堆積が激しいこの地域にも、比較的安定した地域に条里制の名残を現表面で捉えることができる。これら表層条里に関する論及は、広瀬広一氏を嚆矢とし(1)、以後須藤賢・谷岡武雄両氏による「甲斐条里の諸問題」(2)（第168図）、高木勇夫氏による『条里地域の自然環境』(3)（第169図）などが知られている。これらは現在の甲府盆地に認められる条里型地割の分析をとおして、甲斐国の律令期前後における条里制の導入と具体的諸相について言及したものである。広瀬論文、さらに須藤・谷岡論文では、盆地の表層条里の方向に地域性があることが指摘され、高木論文ではその地域性と地形発達の関係が問題とされている（第169図）。

また、文献史の立場から、近年、ラインハルト・ツェルナー氏が、巨摩郡市河荘の位置と10世紀における甲府盆地の条里復元を試みている(4)。この論文では、法勝院領目録を手がかりに、15条18里の条里が一条小山を基点に盆地の西半分に広がっていたとする（第170図）。

これらの研究と並行して、1970年代に入って考古学の分野からも埋没条里に関する具体的事例が明らかにされてきた。その初見は、1972～3年に山本寿々雄氏らが調査した勝沼バイパス関連の遺跡で２例(5)、1980年代には森和敏氏が石橋条里制遺構(6)、下長崎遺跡(7)の事例を報告している。それまでの考古学的な資料を集成し分析を行った森氏によれば、甲府盆地床とその東部にある扇状地上の条里型地割は、施行が平安時代後期であるとし、一町方格内の当初の条里型水田が長地型や半折型とならずに不規則な形態であったとしている(8)。このことは推論に止まっていた条里の施工時期の問題を具体的な発掘事例から示した点で評価される。とはいえ、それまでの盆地内における沖積地での考古学的なデータは非常に少なく、断片的な資料からの推定にとどまってきた感は否めない。

本遺跡を含め、1990年代に入り、盆地内の沖積地の発掘調査の件数が飛躍的に増大し、地下に埋没した水田や条里型土地割の資料が急速に増えつつある。ここでは、最近のそれらの考古学的知見をふまえて、甲府盆地における埋没条里の施工時期について現状の調査事例から若干検討を加えてみたい。

２　甲府盆地の埋没条里の調査

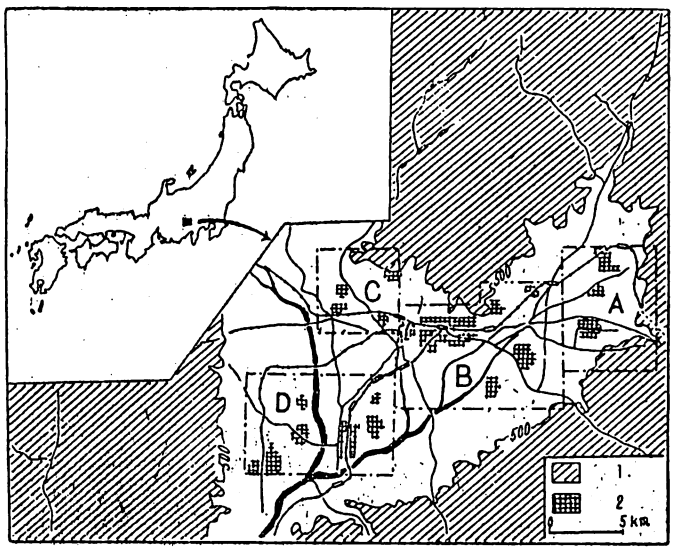
（１）条里型土地割と水田の調査事例

ア．甲府盆地西部地域の埋没水田

本遺跡が位置する甲府盆地西部地域の表層条里は広瀬氏により、南北軸が６度東へ傾くことが指摘されている。

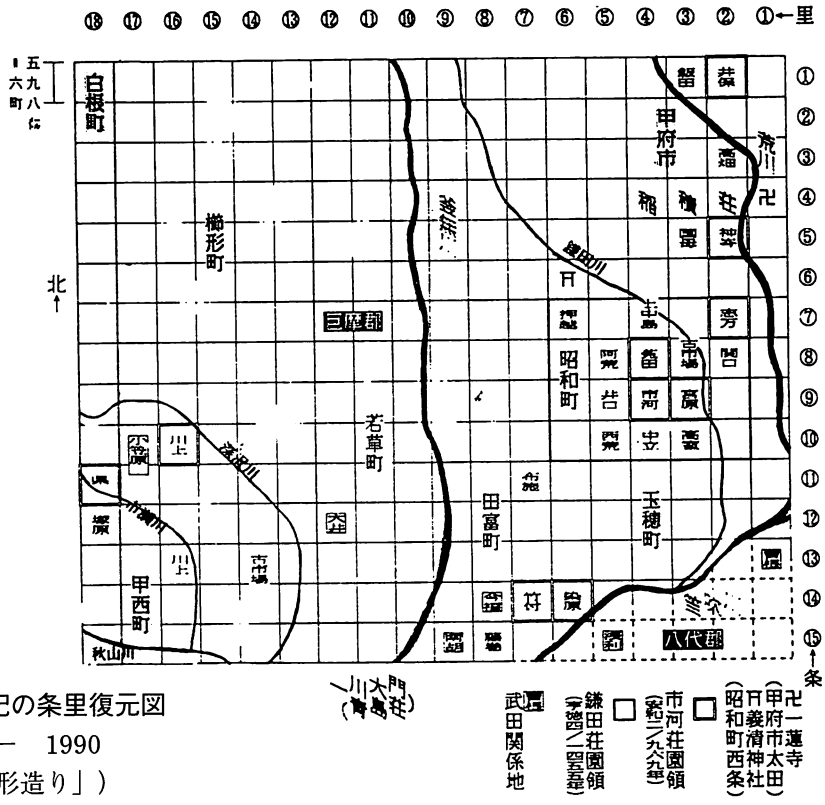
第２章の歴史的環境で述べたように、本地域は中部横断道（甲西バイパス）建設に先立ち、これまで10ヵ所以上の遺跡の調査が行われている。この結果、盆地西部を流れる御勅使川や滝沢川の扇状地、釜無川の氾濫原にかけて存在する二本柳遺跡、油田遺跡、大師東丹保遺跡などにおいて条里型の水田や方形土地割りが確認されてきている（第172図）。

本報告書で報告した二本柳遺跡は、弥生時代から江戸時代までの複合遺跡であり、２区から４区では、上層

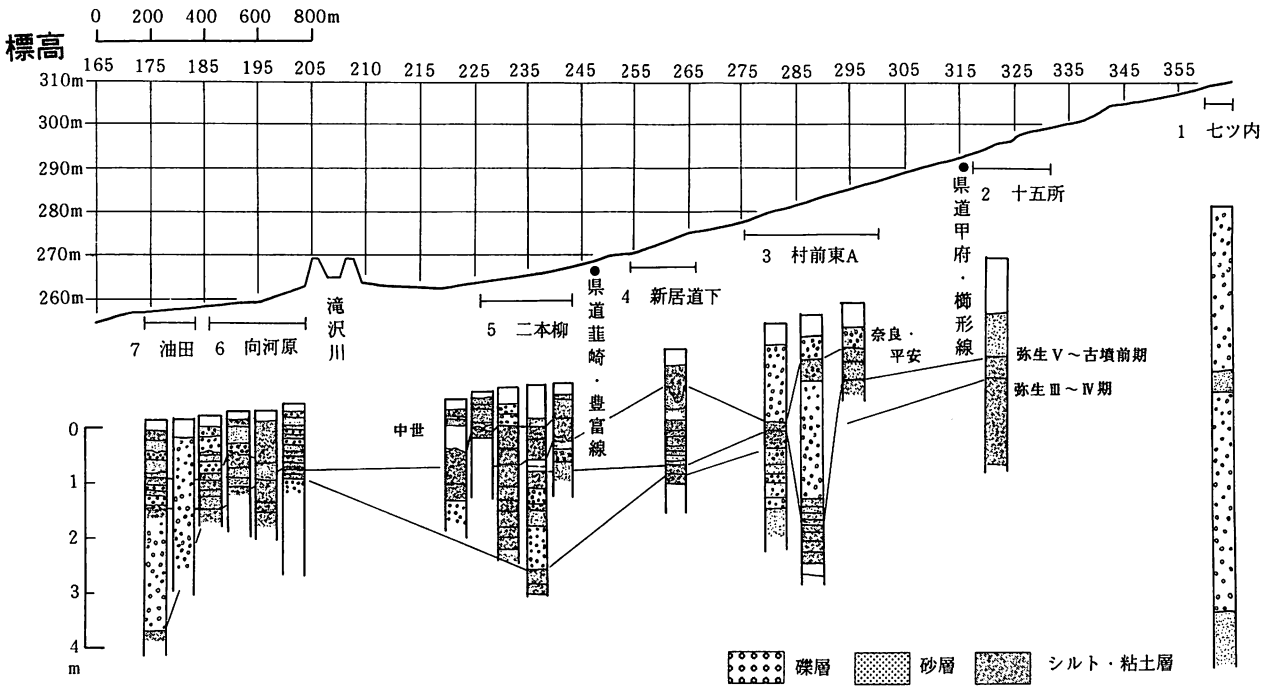


第168図　甲府盆地の条里の分布（１）
（須藤・谷岡　1951「甲斐条里の諸問題」）

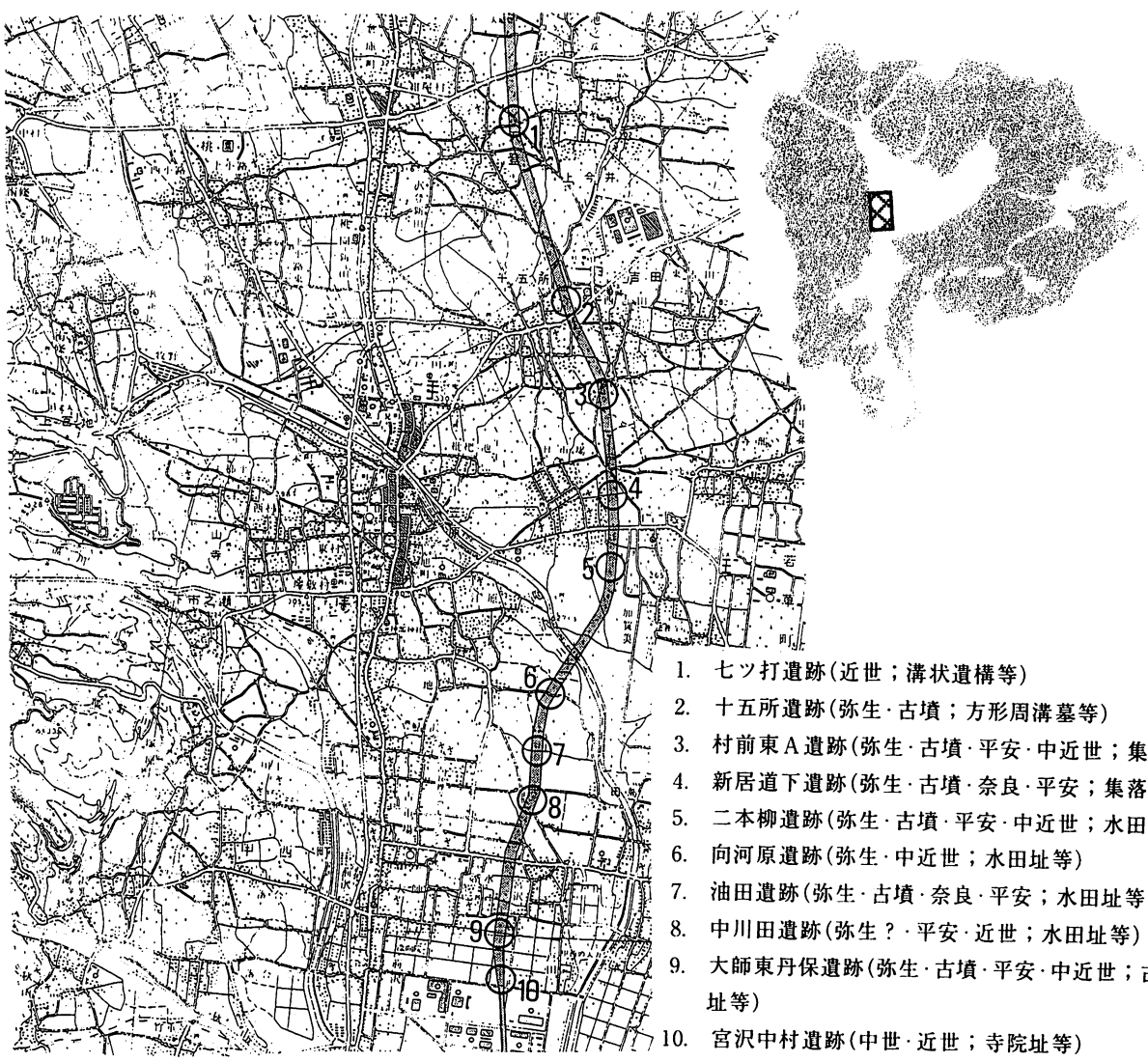
第169図　甲府盆地の条里の分布（２）
（高木　1985『条里地域の自然環境』）



第170図　甲府盆地の１０世紀の条里復元図
（ラインハルト・ツェルナー　1990
「土着－初期甲斐源氏の屋形造り」）



第171図　甲西バイパス沿線遺跡群の時代別深度分布



1. 七ツ打遺跡(近世；溝状遺構等)
2. 十五所遺跡(弥生・古墳；方形周溝墓等)
3. 村前東A遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；集落址等)
4. 新居道下遺跡(弥生・古墳・奈良・平安；集落址等)
5. 二本柳遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；水田址等)
6. 向河原遺跡(弥生・中近世；水田址等)
7. 油田遺跡(弥生・古墳・奈良・平安；水田址等)
8. 中川田遺跡(弥生？・平安・近世；水田址等)
9. 大師東丹保遺跡(弥生・古墳・平安・中近世；古墳、水田址等)
10. 宮沢中村遺跡(中世・近世；寺院址等)

第172図　甲西バイパス沿線遺跡群

水田とした中世後半（14～15世紀）の水田層と、下層水田とした古代末から中世前半（10～13世紀）の水田層が２層にわたり88面発見された。また、１区ではさらに新しい近世における水田が９面検出されている。

２区から４区の上下水田では、内部の小さな部分の区画は異なるものの、比較的大きな土地区画に係わる大畦畔がいくつかの地点で下層から上層へトレースされ、洪水による砂礫の堆積後、比較的短期間に水田復旧がなされ、大畦畔の恒常的な機能を窺わせる。

本地域は、滝沢川による扇状地形が北西から南東に向かって発達しているため、等高線はその地形発達方向にそって北西から南東への緩やかな傾斜傾向を示す。しかし、実際に検出された水田跡は明らかにこの自然地形とは異なった原理によって造られており、南北軸が真北から５～10度前後東に偏っていることが検証された（第173～177図）。

本地域の表層条里は、第174図から解るように、遺跡の東50mの地点までは、その方形区画が比較的良好に残存している。しかし、遺跡地点では表層における南北ラインや区画がくずれを見せ、条里型土地割りは極めて不明瞭になっている。今回の調査において、下層水田の時期には、やや偏りをもちながらも東西南北軸のラインを意識的に作出する畦畔が確認され、本来は表層条里と同様な土地区画が存在したことが判明した。これらの土地区画は、本地域の条里型土地割りの出現時期、すなわち条里の施工時期を考える上で極めて重要な意味をもつものである。

さらに、本遺跡の水田は、何回かの洪水堆積の中で次第に方形土地区画の原理が失われていったことが調査によって明らかにされた。というのは、上層水田では大畦畔で意識された土地区画も、その内部区画においては、扇状地地形の傾斜に沿った大小の水田が作られ、近世期には地形原理を優先する水田の区画がなされている。こうしたことから、平安時代後半から鎌倉時代に形成された条里型土地区画は、この地域を覆った洪水堆積などによって時代とともにくずれ、近世から近代を経て現代の状態にいたったという過程が復元できる。

二本柳遺跡から約１km南にある油田遺跡では、７～８世紀代の祭祀跡を伴う旧地表面が確認され、その直上の洪水砂の上層で平安時代以降の水田が発見されている[9]。この遺跡では、奈良時代の旧地表に、方形区画等の明確な土地割りは認められず、平安時代以降の水田にその痕跡を認めることができる。このことは、本地域の条里型水田の出現を考える上でも重要なデータといえる。

また、油田遺跡よりさらに約１km南の大師東丹保遺跡においても、13世紀代の条里型水田や方形土地割りが明瞭に残されていることが発掘調査によって明らかにされている（第178図）[10]。これらの南北軸も真北から６～10度前後東に偏りを見せている。

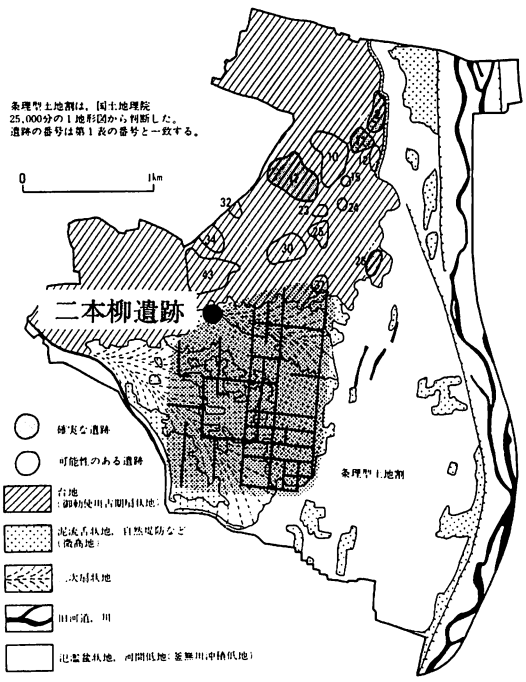
これらの遺跡群のデータから、釜無川右岸の峡西地域の条里水田が中世前半の鎌倉期に安定して見られ、その上限が平安時代（10世紀）まで遡る可能性が強くなってきた。

ところで、この釜無川をはさむ両岸には、同一方向の表層条里が発達していることがすでに確認されている。広瀬氏は、釜無川が条里の施工時期に現河道より大きく東側の甲府盆地中央部を流れ、旧河道の西側地域の施工が同時期に行われたと分析する。峡西地域の埋没条里の考古学的データは、この意味で本地域一帯に広がる条里施工の現時点での上限を示す資料として重要である。

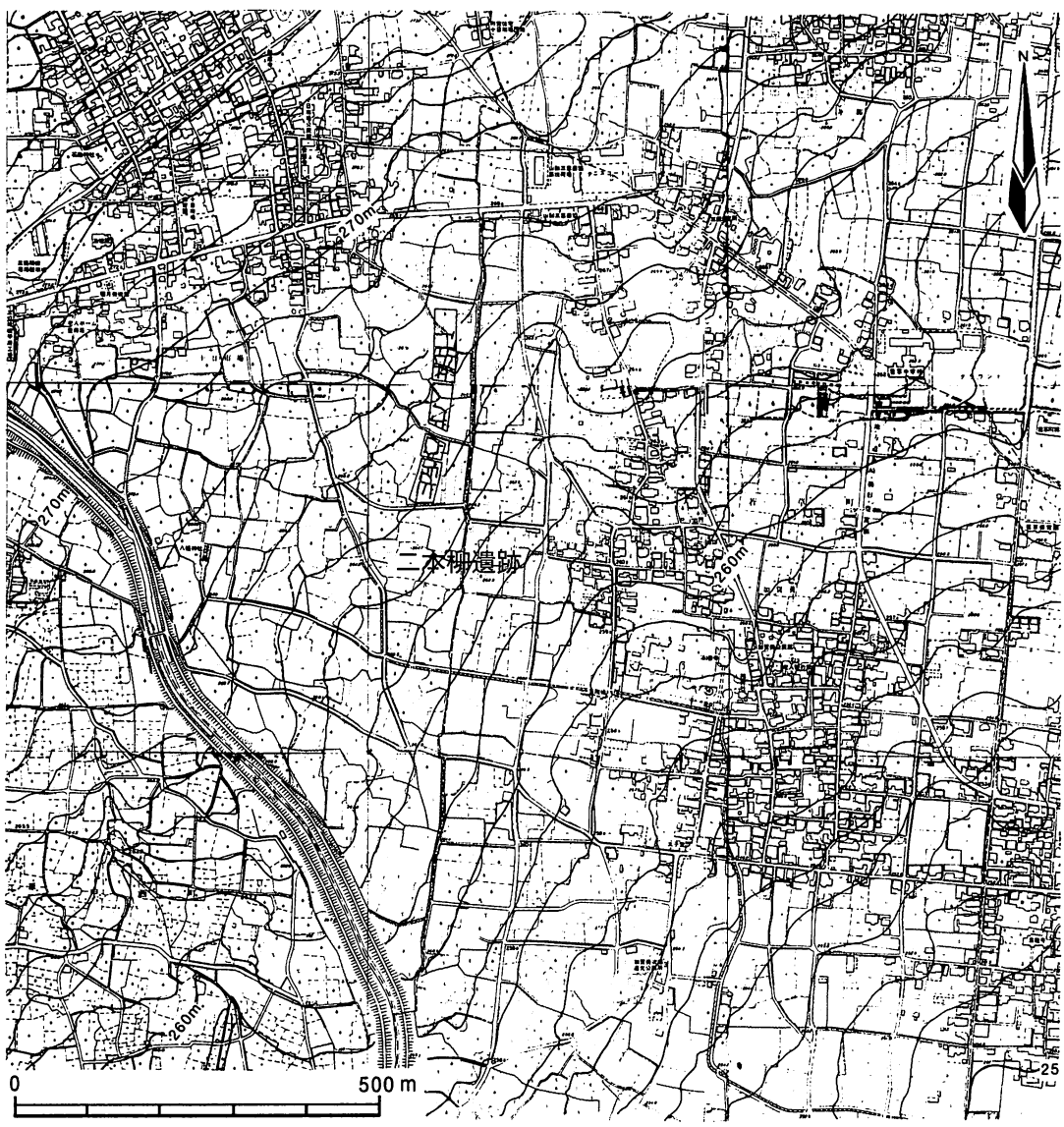
イ．塩川流域（藤井平）の埋没条里

本地域の現地表面には、南北軸がN－14°－Wに偏った表層条里が確認され、この施工期にかかわる考古学的な情報が韮崎市宮ノ前遺跡から得られている。

宮ノ前遺跡は1989～1990年の発掘調査によって奈良・平安時代を中心とする竪穴住居跡423軒、掘立柱建物跡54棟、条里型土地割にかかわる溝24条、自然流路的な性格の強い溝状遺構４条などが検出され、微凹地部分に



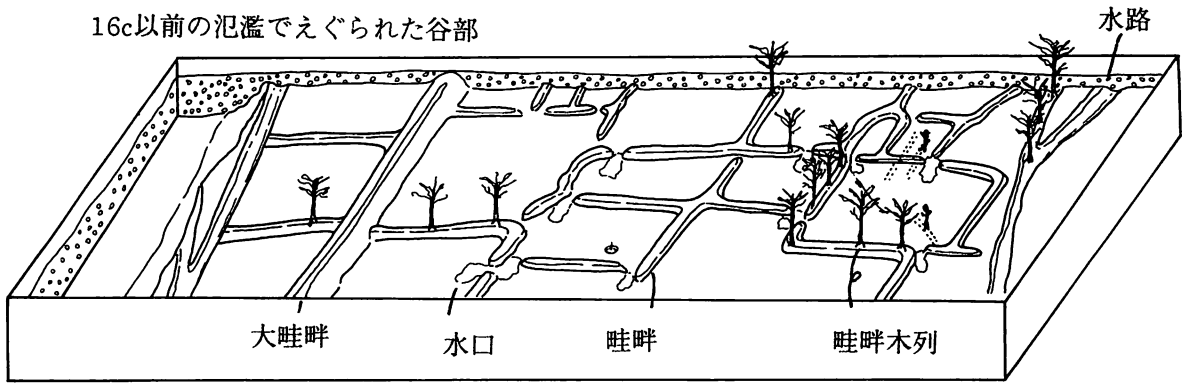
第173図　盆地西部地域の地形と条里型土地割
（保坂　1990『若草町誌』に加筆、地形分類図は
高木・中山　1983「甲府盆地西部地域の地形」による）



第174図　二本柳遺跡下層水田と周辺の微起伏

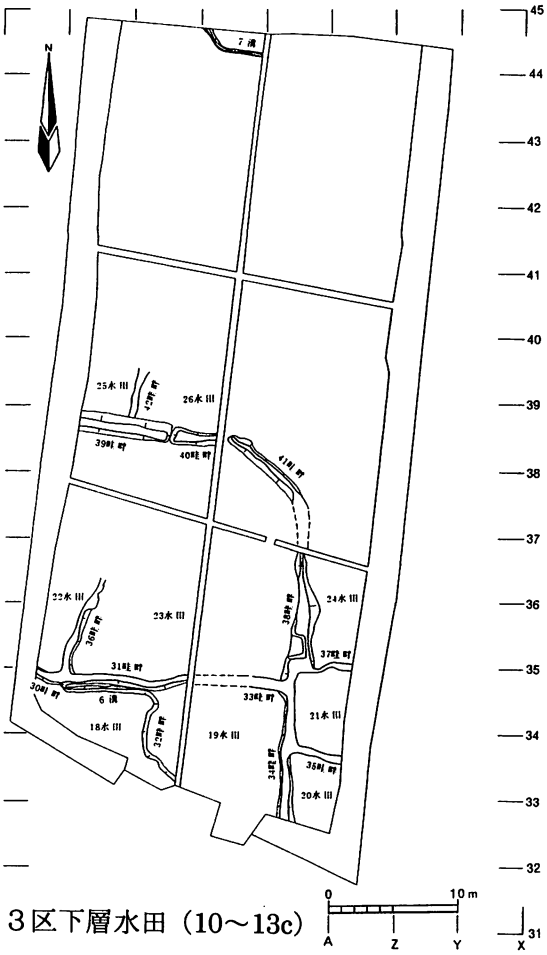
2区下層水田（10～13c）

2区上層水田（14～15c）

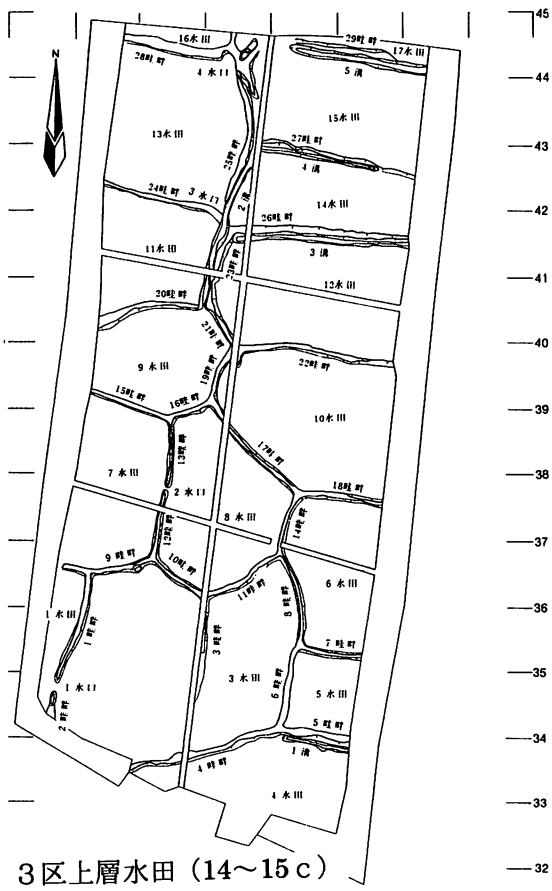


2区上層水田の俯瞰想定図

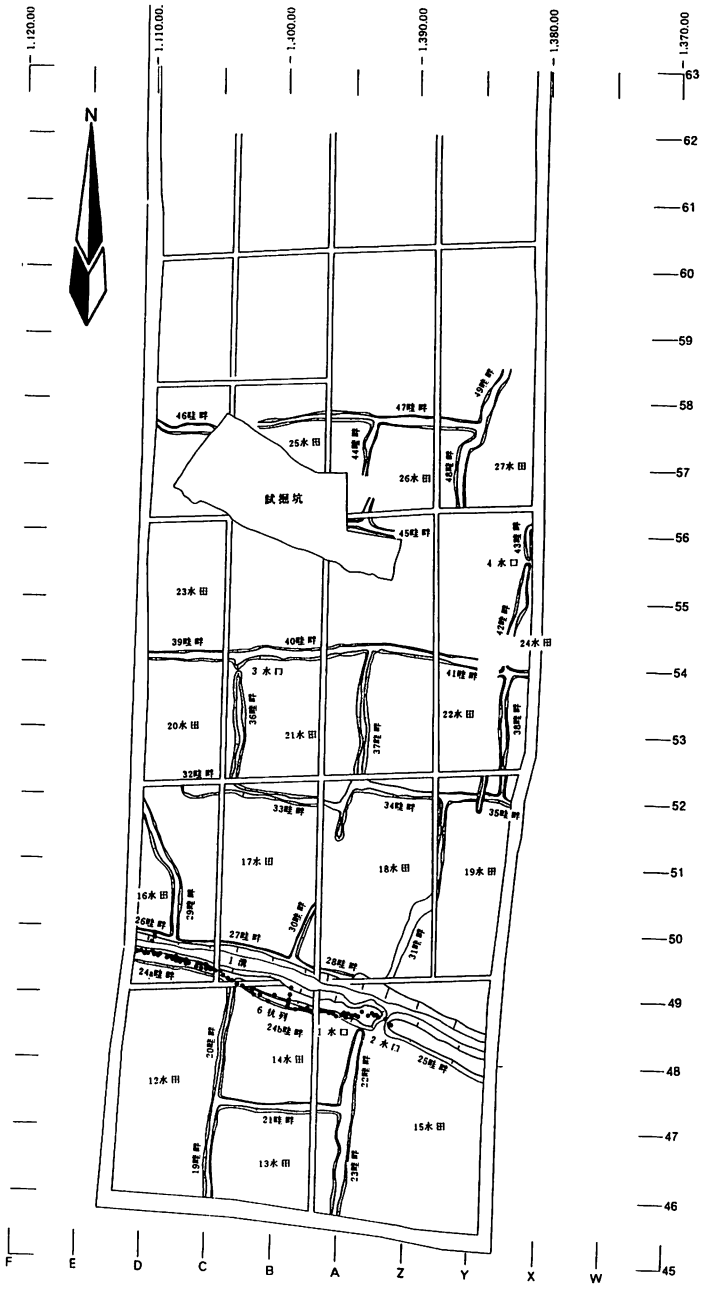
第175図　二本柳遺跡水田（1）



3区下層水田（10～13c）

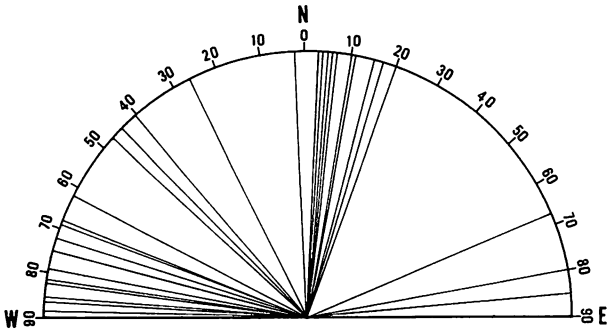


3区上層水田（14～15c）

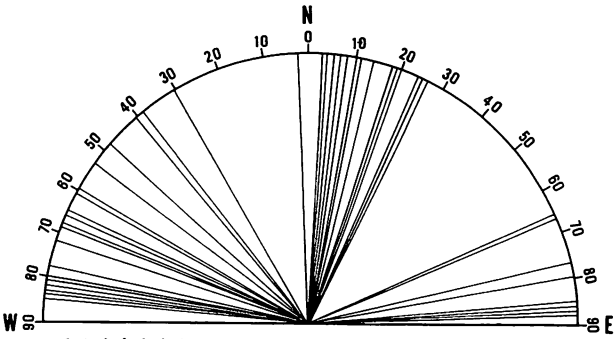


4区下層水田（10～13c）

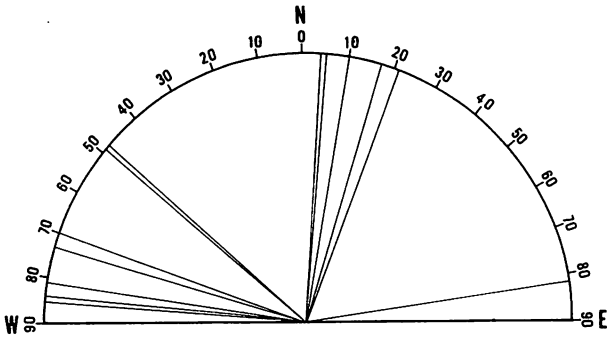
第176図　二本柳遺跡水田（2）



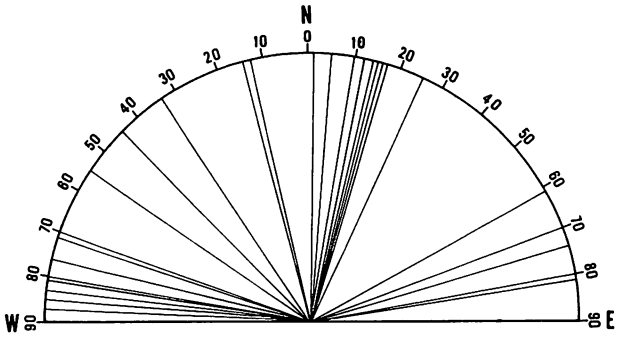
２区下層水田の方位



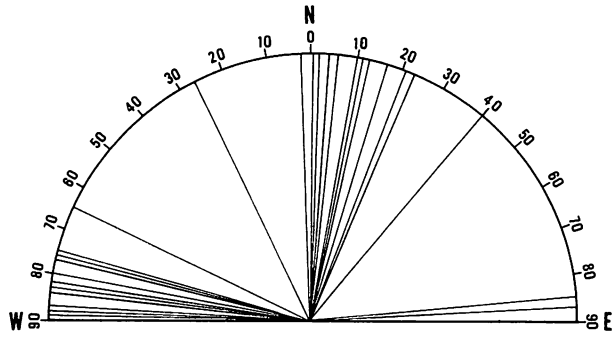
２区上層水田の方位



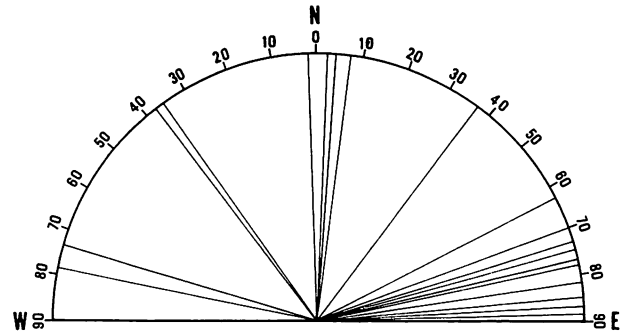
３区下層水田の方位



３区上層水田の方位

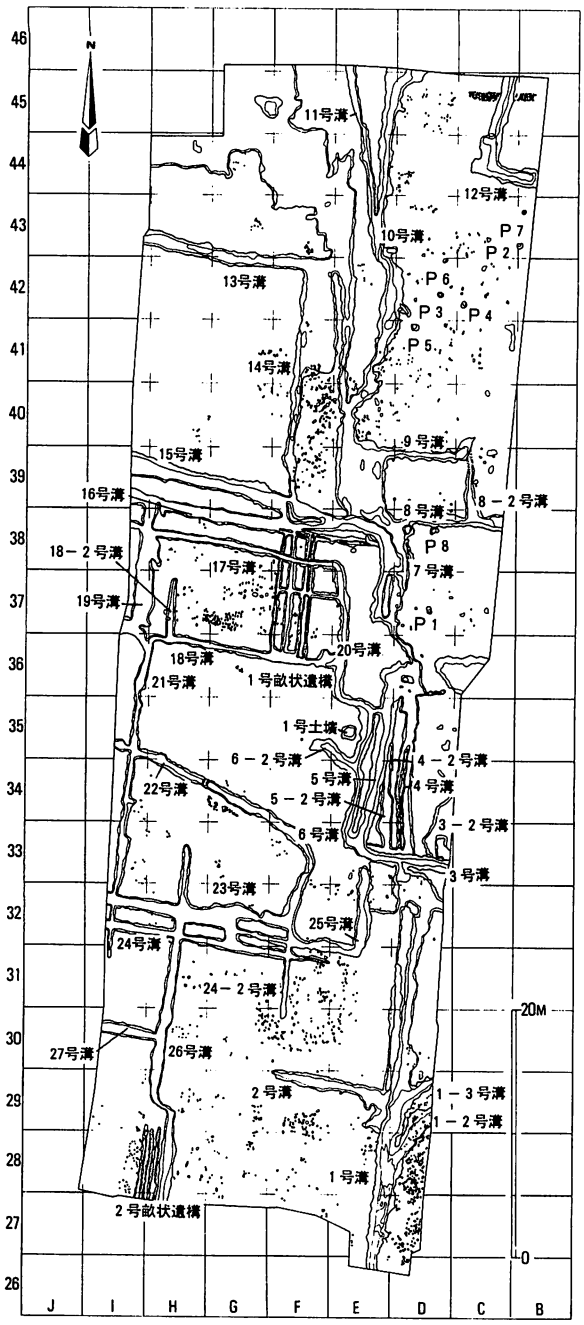


４区下層水田の方位

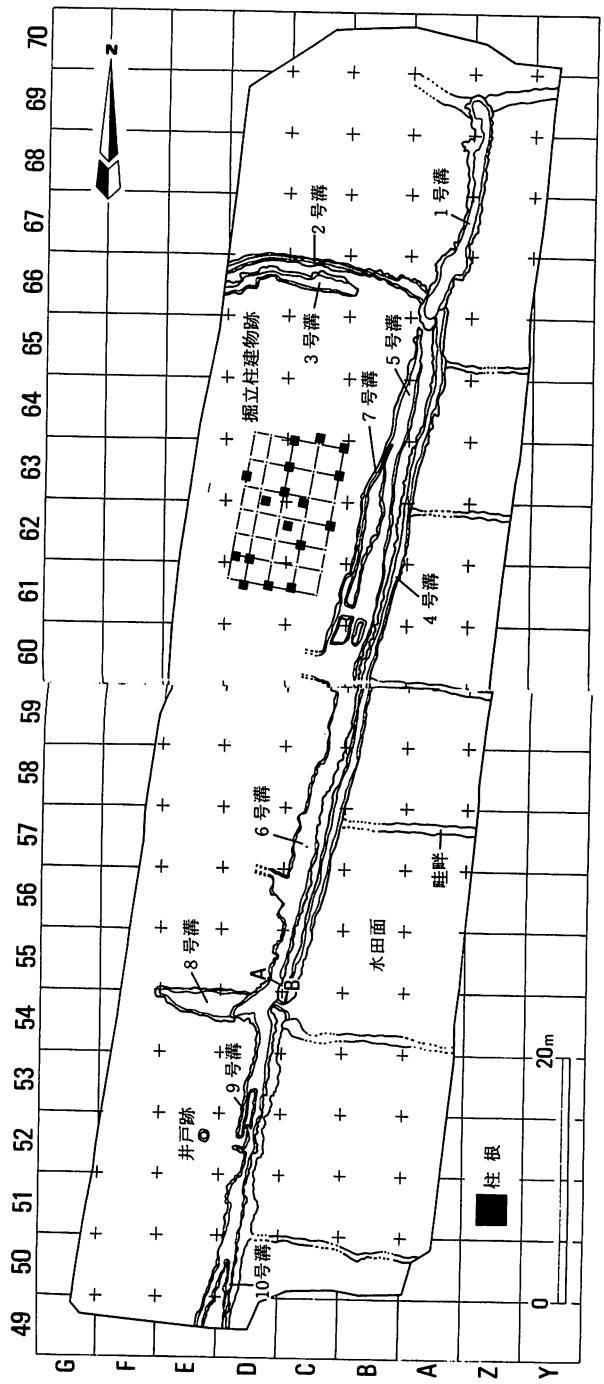


４区上層水田の方位

第177図　二本柳遺跡水田畦畔方位



Ⅱ区方形溝区画（鎌倉時代）



Ⅲ区水田と建物跡（鎌倉時代）

第178図　大師東丹保遺跡の水田と方形土地割

弥生時代前期の水田と平安時代中期以降の水田も発見されている[11]。

この遺跡は釜無川支流である塩川と八ヶ岳の火山泥流によって形成された「七里岩」と呼ばれる台地によって挟まれた東西約1㎞ほどの比較的狭い平野に位置する。高橋学氏によれば、遺跡は塩川が形成した完新世段丘Ⅱ面の上にあり、その形成以前には塩川の流れた埋没旧河道とそれに囲まれた旧中州が網目状に発達した地形をなしていたという。

本遺跡の集落の変遷と溝の分析を行った高橋学、平野修両氏によれば[12]、条里型土地割の施工と集落変遷が以下のように整理されている（第179図）。

まず、8～9世紀前半に条里型土地割に基づく東西方向の溝が掘削され、両氏はこれを条里施工の第1期とみる。しかし、この溝は比較的短期間に機能を失う。塩川はこの時期まだその河床面を低下させておらず、10世紀前半までは盛んに旧中州上の微高地に住居が建てられ、集落が発達していく。そして、10世紀後半以降、南北軸が14度西へ偏る溝や、道路が設置され、集落周辺に条里型水田が登場する。両氏はこれを条里施工の第2の画期とみる。集落はこの頃から急速に衰退し、11世紀代にはほぼ消滅している。それ以降付近全体は条里型の水田景観に変貌し、塩川の段丘化が進んで行った。

したがって、本遺跡での条里型土地割施工は8～9世紀初頭に第1段階、10世紀後半以降に第2段階となる画期が認められ、条里の段階的な施工が認められる。

ウ．甲府北部地域の埋没条里

この地域では、現在南北軸が12度東偏する表層条里が存在している。

1988年に調査された桜井畑遺跡では、奈良・平安時代を中心とした集落が発見され、条里型土地割に関係した水路や溝、道路の区画内に村落内寺院が検出されている[13]（第180図）。

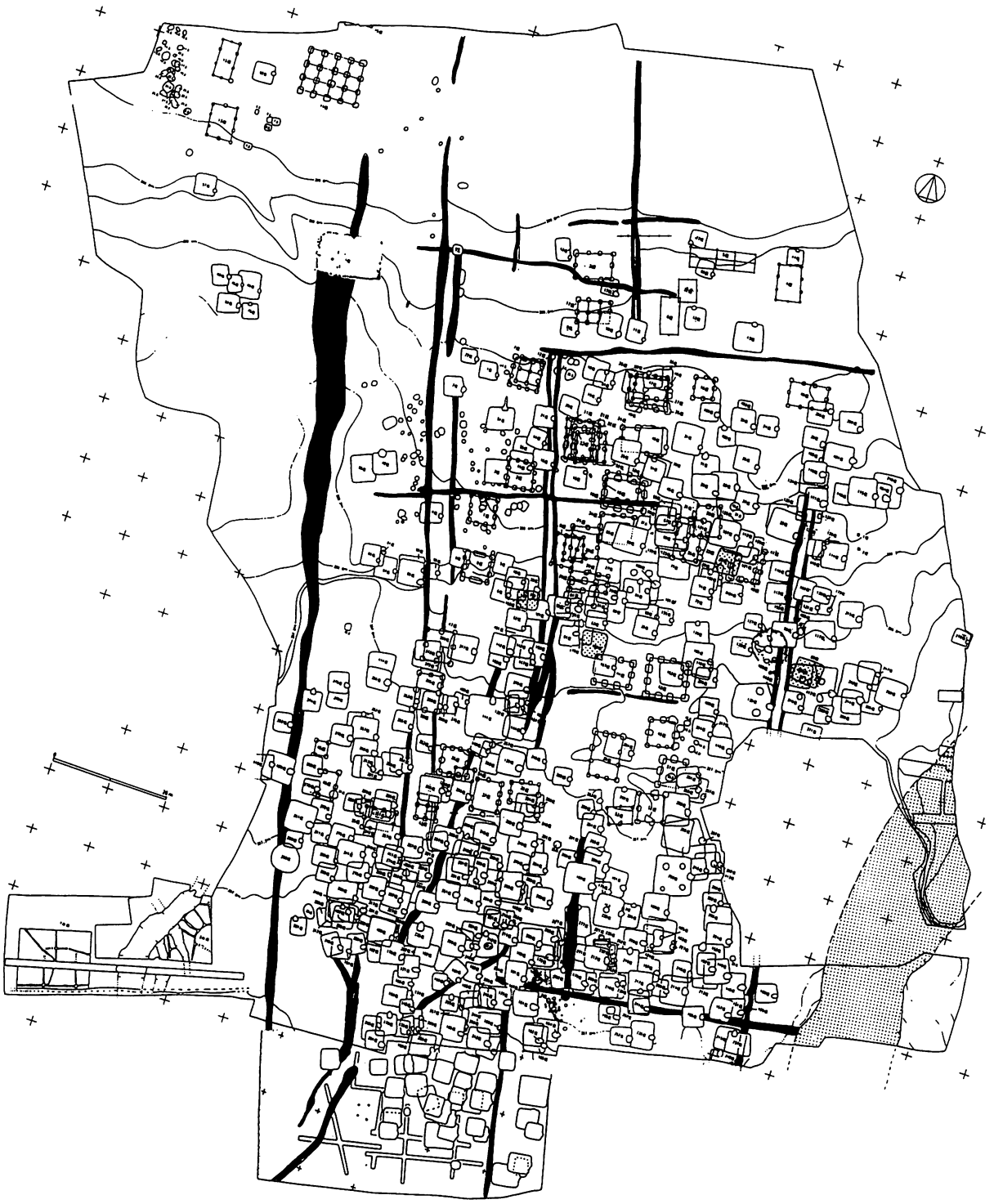
本遺跡では8世紀第3四半期以前に埋没した1号溝が南北方向に走っている。この溝は基本的にはそれ以降の南北溝の方向と一致するものの、調査区中央付近で大きく蛇行する部分を持つがことから、条里型土地割に基づく溝であるかどうかの判断は難しい[14]。続く9世紀前半には2号溝、3号溝、10号溝など東西と南北方向に直交する溝が見られる。2号、3号溝は東西方向に走る道の側溝の一部で、南北方向の溝は幹線的な水路と判断される。南北水路は、10世紀後半代には新たに9号溝の開削をみるが、10号溝に沿って重複部分を多く持つことから、同一水路の改修的意味合いが強い。この水路はさらに中世末まで継続使用されていることが調査により明らかにされている。

桜井畑遺跡の資料から、この地域に表層条里として認められる条里型土地割の起源が、9世紀前半まで遡ることはほぼ確実と思われるが、1号溝が条里に関連したものとすればその上限は8世紀第3四半期以前まで引き上げることも可能であろう。この問題に関しては、さらに周辺地域の調査と検討を待ちたい。

エ．金川・京戸川扇状地の埋没条里

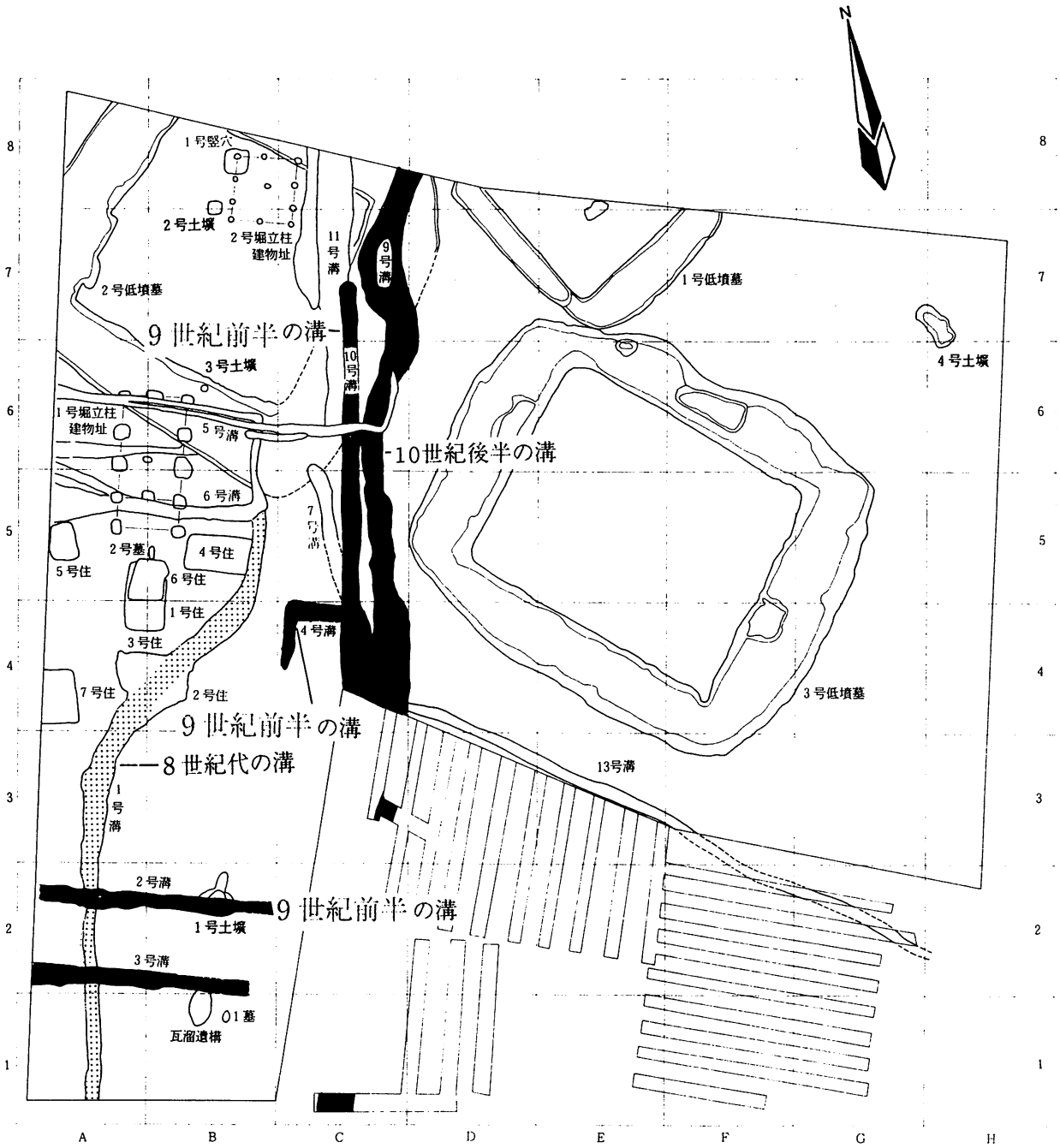
この地域には、第一に国分寺周辺地域、第二に京戸川両岸の扇状地扇端地域、第三に筑前原墨跡周辺地域において、それぞれ方向の異なった方形土地割が確認されている。

まず、国分寺、国分尼寺を含んだ地域には、南北軸が5度東偏する方形土地割が存在し、「国分条里」と呼ばれている。第二地域では、南北軸が10度東偏する条里が看取され、「中尾・野呂条里」「都塚条里」「一ノ宮条里」「小城・矢作条里」「金田条里」「坪井条里」「竹原田条里」などの名称があり、これらを総称して「一宮条里」と呼んでいる。第三地域の筑前原墨跡は、国分条里と一宮条里が接する地域にあたり、南北軸が5度西偏する条里型土地割が、南北500m、東西350mの範囲に広がっている。



宮ノ前遺跡（平野・櫛原 1992 『宮ノ前遺跡』）

第179図　宮ノ前遺跡の埋没条里

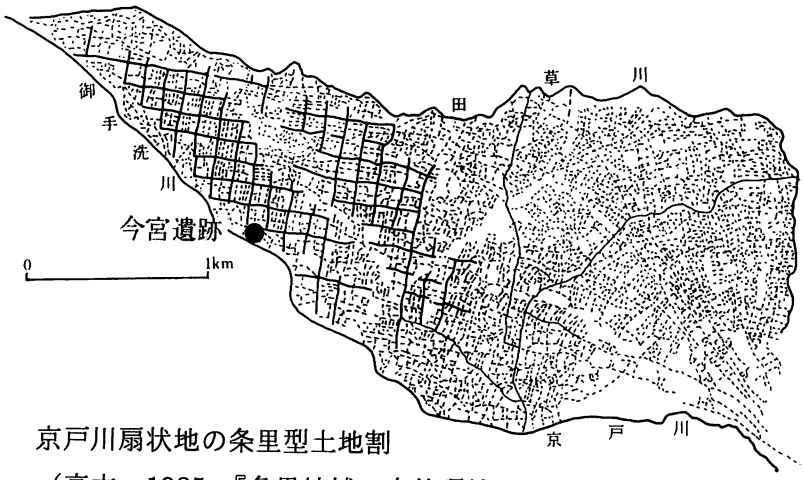


A地区遺構配置図　　10mグリッド

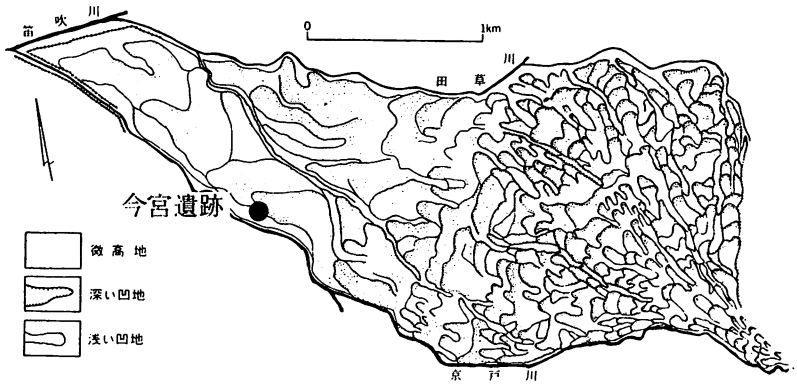
桜井畑遺跡A地区

（中山 1990『桜井畑遺跡A・C地区』）

第180図　桜井畑遺跡の埋没条里



京戸川扇状地の条里型土地割
（高木　1985 『条里地域の自然環境』に加筆）



京戸川扇状地の微地形
（高木　1985 『条里地域の自然環境』に加筆）

今宮遺跡（瀬田　1996 「今宮遺跡」山梨考古 58）

第181図　京戸川扇状地の埋没条里

第一の国分条里は、金川右岸の扇状地扇央部に位置している。近年、猪股喜彦はこの10年余かけて行ってきた当該地域の考古学資料の分析から、国分寺関連遺跡群の消長について言及している(15)。猪股によれば、「国分寺の置かれた（金川）扇央部では、古墳時代中期から奈良時代前半にかけて居住した痕跡がなく、集落の空白地域が存在し、その空白地帯に奈良時代後半になり、国分寺が占地された。そしてほぼ時期を同じくして、集落の国分寺周辺への進出が開始されていることが確認できた。それらは国分寺造営を機に意図的に設置された集落であり、国分寺の造営・維持のためそれと有機的に関わったと考えられるこれらの集落のありかたが、いわゆる国分寺関連遺跡群として認識される」としている。これらの遺跡群が、国分寺造営のため計画村落であるならば、周囲の方形地割も当初から計画的に施工された条里の可能性が高く、したがって８世紀後半の施工が最も妥当と考える。

国分条里に接して北に展開する一宮条里については、近年埋没条里の情報が次第に蓄積されつつある（第181図)。

この地域に存在する今宮遺跡では、奈良～平安時代の集落と水田が調査されている(16)。微高地上に展開する集落内の住居の方向は、８世紀代ではばらつきが見られるが、９世紀初頭になるとその主軸方向が現在の表層条里と一致するようになる。さらに、微高地北側の埋没旧河道とみられる微凹地には、８世紀～９世紀初頭の水田が認められ、その直上の洪水砂を挟んで上層に９世紀中頃の溝が検出されている。下層水田では微凹地という自然の微地形の制約によって畦畔が作られていたのに対し、上層では明らかに条里の東西方向に一致した方向で溝の掘削が実施されている。今宮遺跡の他、中尾条里遺跡の調査などから、当該地域の条里施工時期は９世紀前半代にほぼ限定されると判断される。

（２）盆地内条里の施工時期について

甲府盆地内の条里について、発掘事例をいくつか報告してきたが、この様な方形土地割が導入された地域は、盆地北東部の春日居町周辺が最も古いと推定される。それは、本地域に７世紀代後半に遡る寺本廃寺が建立され、甲斐国で最初の国府とされる地域が存在することからも妥当性が高く、国府関連遺跡群の調査からもそれが裏付けされてきている。続く８世紀代には、先述した一宮町の国分条里と呼ばれる甲斐国分寺・国分尼寺周辺地域における方形土地割の施工が明らかにされてきた。

この様に見てくると甲府盆地内における方形土地割は、７～８世紀の盆地内の政治的中心地域において最も早く導入され、この段階では条坊的な性格を強く示すものであった。問題は、それ以外の地域における条里施工が同時に行われたのか、地域別に多少の時間差を持ちながら実践されたのかということである。

これまで報告してきた埋没水田や方形土地割の考古学的な資料を見る限り、いくつかの地域で時間的な差異が認められた。このことは、同一地域に展開する国分条里と一宮条里の例からも明らかであろう。

その他、具体的に９世紀前半までに施工が認められる地域は、甲府盆地から北に延びる塩川流域、盆地北部の中央部に位置する表門郷（うわとのごう）とされる地域、盆地東部の一宮条里地域であり、前２地域においては８世紀代まで遡る可能性が残されている。

これに対し、二本柳遺跡のある盆地西部の釜無川流域では、10世紀代を遡るデータは検出されておらず、いずれの遺跡でも鎌倉時代の安定した条里型水田面や方形土地割が顕著である。本地域では、律令制の崩壊とともに荘園となった土地において安定した条里景観の形成がなされた可能性が高く、付近の加賀美荘、大井荘などの名称もそれらの傍証となろう。

3　小結

小稿では二本柳遺跡の水田調査を踏まえつつ、県内における同様の遺跡調査例から甲府盆地の条里型地割りの出現、施工時期について推論を試みて見た。その結果、甲府盆地に残された条里型地割の出現は、地域によって時期差が存在することが明らかになった。

また、そうした条里型土地割の地域性を考える場合、施工時期ばかりではなく、その扇状地形の形成過程に深く関与している点や(17)、洪水堆積が土地区画の仕方に強い影響を与えている点を軽視することはできない。このことは、条里型土地割のくずれていく過程を考える上でも重要なポイントである。

今後も考古学的な調査によって、これらの推移を時間的にたどることで、盆地全体の土地利用の歴史が実証的に解明できていくであろう。

注

（1）広瀬広一　1935「条里遺跡」『史跡名勝天然記念物調査報告第八輯』　山梨県
（2）須藤賢・谷岡武雄　1951　「甲斐条里の諸問題ー甲府盆地の歴史地理的研究（第1報）」『地理学評論』24ー2　日本地理学会
（3）高木勇夫　1985　『条里地域の自然環境』古今書院
（4）ラインハルト・ツェルナー　1990「土着ー初期甲斐源氏の屋形造りー」『甲府市史研究』8号
（5）山本寿々雄ほか　1973　『甲斐国埋没条里遺構等の調査』　山梨県教育委員会、同　1974　『古代甲斐国の考古学的調査』山梨県教育委員会
（6）森和敏　1984　『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡』山梨県教育委員会、
（7）森和敏他　1989　『下長崎遺跡・両の木神社遺跡』　山梨県教育委員会
（8）森和敏　1990　「甲府盆地における条里型地割の事例」『研究紀要』5　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
（9）保坂和博・松土一志　1994　『油田遺跡』　山梨県教育委員会
(10) 新津健・田口明子・小林健二・小泉敬　1994　『大師東丹保遺跡』山梨県教育委員会、小林健二・小泉敬・保坂和博・松土一志　1995　『大師東丹保遺跡2』山梨県教育委員会
(11) 韮崎市遺跡調査会　1992　『宮ノ前遺跡』
(12) 高橋　学　1992　「宮ノ前遺跡の地形環境分析」『宮ノ前遺跡』韮崎市遺跡調査会、平野修　1994　「条里型土地割に関わる溝ー山梨県韮崎市宮ノ前遺跡を例としてー」『山梨考古学論集』Ⅱ　山梨県考古学協会
(13) 坂本美夫・中山誠二　1990　『桜井畑遺跡A・C地区』山梨県教育委員会
(14) 第12回条里制研究会の折、矢田勝氏より1号溝についても、条里型土地割を示す可能性が指摘された。
(15) 猪股喜彦　1996　「金川扇状地の土地開発ー甲斐国分寺周辺の集落ー」『帝京大学山梨文化財研究所　研究報告』第7集
(16) 瀬田正明　1996　「5.今宮遺跡」『1995年度下半期遺跡調査発表会要旨』山梨県埋蔵文化財センター
(17) 前掲　（3）

第6節　二本柳遺跡にみる中世水田の景観

中　山　誠　二

1　はじめに

景観（landscape）とは、「自然と人間界のこととが入りまじっている現実のさま」（広辞苑）と解釈されるように、沖積地においては河川堆積物によって形成されたさまざまな自然地形を舞台にしながらも、土地利用などの人為的行為が累積した結果として作り出された、いわば自然景観と文化的景観の結合した状態としてわれわれの視界に展開される。

発掘調査において明らかにされた二本柳遺跡の中世の水田景観は、まさに両者の要素を兼ね備えているものであるが、遺構と遺物を単に並べるだけでは、こうした景観を3次元的に復元イメージすることはなかなか難しい。

そこで、小稿ではその中世水田空間において行われた人為的行為の復元や、当時の絵巻物の水田景観との対比をしながら、二本柳周辺の中世水田景観の復元を試みてみたい。

2　微地形の形成と条里型土地割

二本柳遺跡の立地する地域は、御勅使川扇状地の扇端部から滝沢川が二次扇状地を形成する地点にあたっており、その地形は西北から南東方向に向かって形成されていることが前節第173・174図から読み取ることができる。しかし、前節でも示した様に古代末から中世末にかけての上下2面の水田は、そうした自然地形とはまったく異なる原理によって区画され、それが本地域の条里型水田を形作っている。

自然傾斜の緩やかな平坦面の条里型水田であれば、通常、水田を区画する畦畔や溝は、およそ109mを1町（60歩）としたN倍または1/N倍した間隔で展開するが、二本柳遺跡の水田では、条里型土地割の方位原理以外は、その区画の仕方はきわめて不規則となる。

では、こうした現象がなぜ起こるのであろうか？　このことは、二本柳遺跡の微地形の形成と深くかかわっているものと考える。

遺跡周辺の等高線図を観察すると、調査を実施した南北約300m程の間で、標高差は3m前後となり、勾配率は約1％となる。また、条里型土地割に対し、地形の発達方向は、ほぼ45度ずれて北西から南東方向に急激に降下している。こうした地域を整然とした方形区画で正確に作り出すには、現代の圃場整備のような大規模な造成工事が必要になってくる。しかし実際、遺跡内の水田区画では、大畦畔を東西南北の条里型土地割原理に沿って作り出し、その内部の小区画においては、地形原理を優先させた区画がなされている。遺跡から検出された東西方向に間隔が狭い水田や小区画水田、また、方形や長方形以外の多角形水田は、このことを非常によく示す資料である。したがって、傾斜地における条里型土地割の開発では、実際の施工段階において条里原理と自然地形原理の両者が取り入れられ、実施されていることになる。

このような水田は、盆地の扇状地など標高差が大きく、微地形が複雑に発達している地域の開発では、おそらく古代の条里においてもかなり普遍的にみられた水田造営行為ではなかったろうか。こうした水田においては、1枚1枚の水田面積を正確に測りだし、徴税の対称とすることは困難で、そのためにいくつかの水田を統合したある一定の区域を大畦畔で区画する必要があったものと推定される。

条里地域における不定形の水田の展開は、古代から中世での条里や荘園経営の原理と、地域における自然地形との狭間に立った農民達の苦心の表れでもあったとみることができる。

3　水田施設と中世絵巻との対比

二本柳遺跡の中世水田の構成は、畦畔、水口、水田面、幹線水路、ヌルメ状の溝、杭列、畦畔木などから成り立っている。このような水田景観は中世当時の人々の目にどのように写っていたのであろうか。中世に描かれた絵巻物は、そのことを探る最も優れた史料の一つである。

中世の絵巻を体系的に集成した『日本常民生活絵引』(1) によれば、「一遍聖絵」、「石山寺縁起」、「粉河寺縁起」、「伊勢新名所歌合絵巻」、「扇面古写経」などに中世の水田景観が描かれている（第182～184図）。

これらの絵巻に共通した表現として、水田は方形区画で、その間を屈曲した道や河川、水路が存在している。水田の規模は、「一遍聖絵」などでは人物や馬などの表記と比較すると２～３m程度の小区画水田として描かれるものも多く、畦畔間の距離は決して大きなものではない。こうした水田描写は、人物と周囲の景観を俯瞰的に描く絵画表現の一つの手法である可能性が高いが、遺跡での調査水田を見る限り、自然地形によっては同様の小区画水田も実際にあったことも否定しきれない。

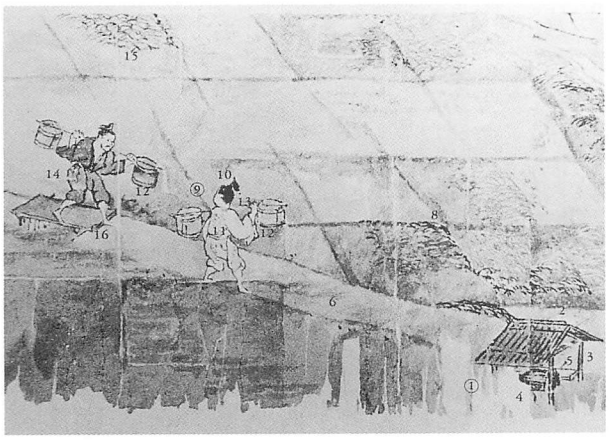
ところで、「一遍聖絵」では、実りの時期の稲や収穫後の地干しの状態が描かれた水田景観が描かれており、収穫の時間差がみごとに表現されているが、こうした水田はすべてが常時利用されたのであろうか。

「石山寺縁起」では、第183図11の様に、稲が植えられた水田のとなりに、葦が繁茂する荒れ地の水田が表現されている。このことは、水田がすべて同時に使用されていたのではなく、休耕田が存在した可能性を示している。二本柳遺跡においては、ほぼ全ての水田で足跡や耕作痕が認められ、休耕田の存在を示す資料はなかったが、遺跡の水田景観の復元では、このような水田の存在に留意する必要があろう。佐藤洋一郎氏は、静岡県曲金遺跡の古墳時代の水田から出土した植物遺存体の検討から、稲が植えられた水田と葦などが繁茂する未使用水田が同時に存在することを明らかにし、これを当時の輪作体系と結び付けているが (2)、同様の検討は中世水田においても検証していく必要があろう。

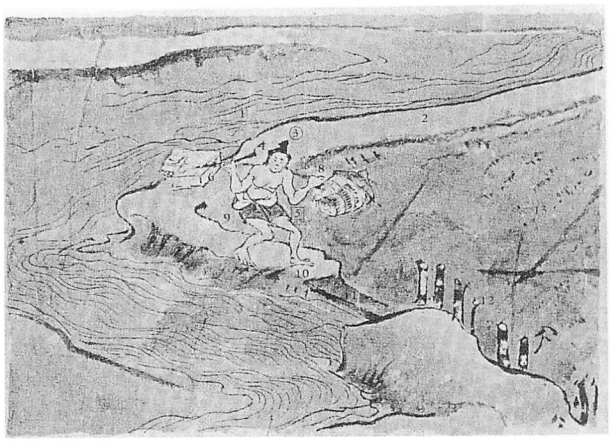
「一遍聖絵」（４～６、８）、「伊勢新名所歌合絵巻」（14）の絵巻には、大畦畔または道、水路の脇に護岸用の杭が列をなして打ち込まれている様子が描かれている。こうした杭列は、恒常的な機能を持つ大畦畔などに見られる施設で、本遺跡では洪水による土砂堆積後間もなく復旧された幹線的な大畦畔と一致する。水路脇の畦畔にそった杭列は、本遺跡では１区の12号畦畔に沿った１号、２号杭列、４区下層水田の１号溝に沿った24号畦畔上に打ち込まれた６号杭列などがある。杭列は、流水の影響を受けやすい攻撃面を護るために打ち込まれており、１区１号・２号杭列では洪水時において大礫クラスの水田への侵入を見事に防ぎ、中礫以下の比較的細かい土砂の堆積物が水田面を覆っていた。杭列はこのように水田や畦畔を保護するために、有効に機能した施設と考えられ、杭頭部が大きく傾いたり、折れた痕跡のあるものはこうした事情をよく反映している。

次に、「畦畔木」、「畦畔木列」と呼ぶ畦畔上に並んで植栽された立樹の存在がある（第165～167図、図版13）。特に集中する地点は、２区下層水田の67号・69号畦畔、３区下層水田の39号・40号畦畔で１～４m程の間隔で植栽されている。樹種同定の結果、ヤナギ属の木が最も多く見られ、モモやウツギ属の樹も存在することが判明した。このような樹種は、本章第３節の分析・考察に、この地域の潜在自然植生の代表的な構成種を植栽した可能性が指摘されるが、いずれの樹種についても田の依代や穢れを払う信仰的な樹種が選ばれている点は注目しておく必要があろう。また、ウツギはその花期が田植えの目印とされているという。

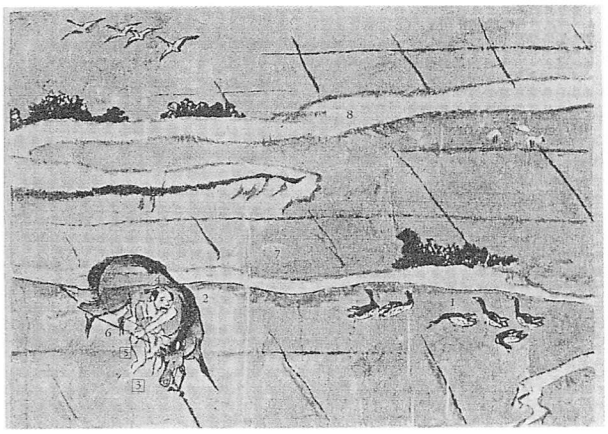
本遺跡の中世水田の畦畔木は、本来、畦畔の保護や水田境界を表わす目印として植栽されたのであろうが、絵巻物などでは水田内の立樹の表現はあまり見られない。ただしかし、「粉河寺縁起」（12・13）や「一遍聖絵」（10）、「信貴山縁起」（17）などでは、立樹に収穫した稲や豆などの穀物が干されている様子が登場する。こうした景観は、近世の農書などにも見られ、地域的には現代まで立樹稲架（タチキハサ）として継承されるものである。また、古代においても、承久８（841）年の太政官符によって、刈り取った稲を立樹に干す方法が奨励



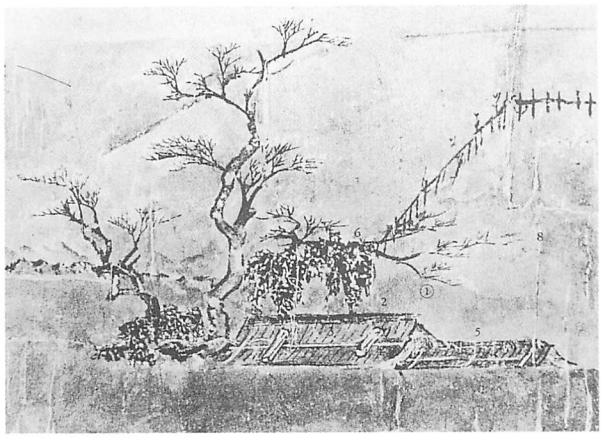
1



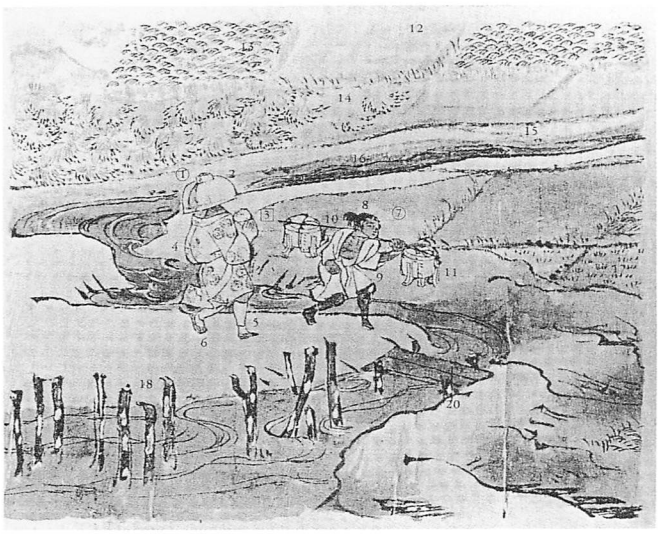
2



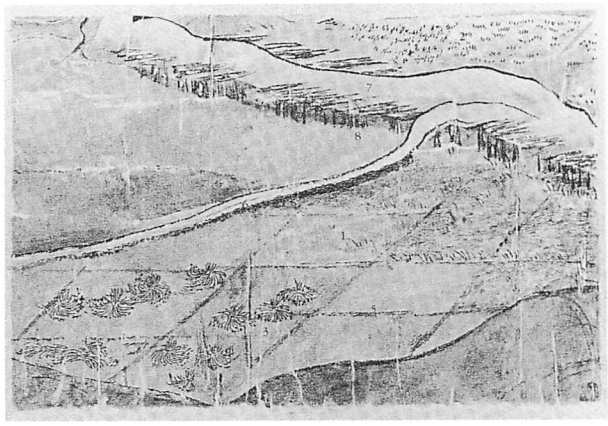
3



4

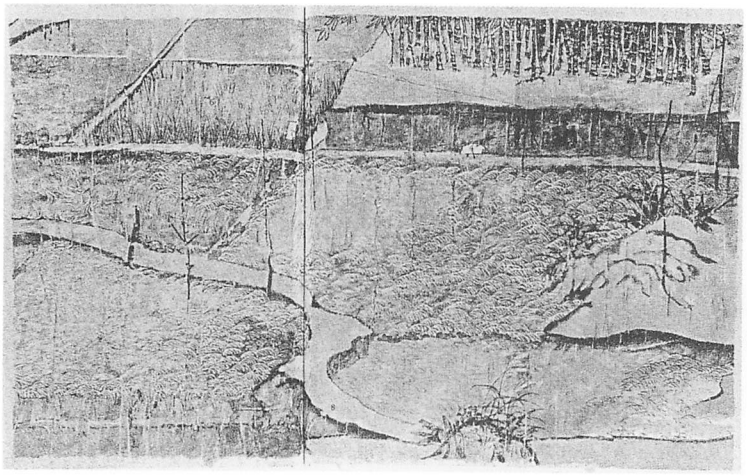


5

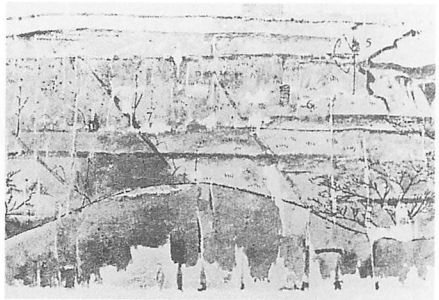


6

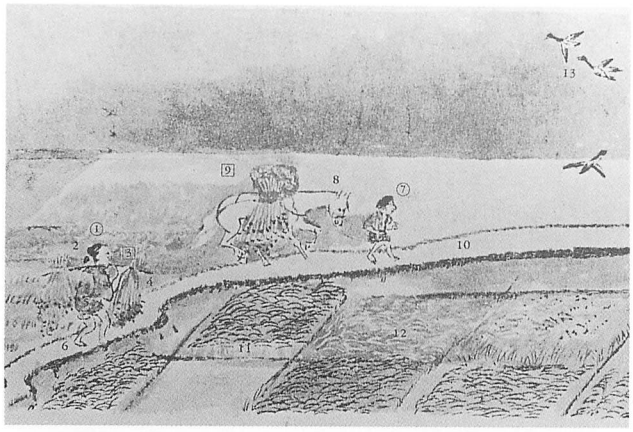
第182図　中世絵巻に見る水田景観（1）（渋沢1984『日本常民生活絵引』より）
1～6　一遍聖絵



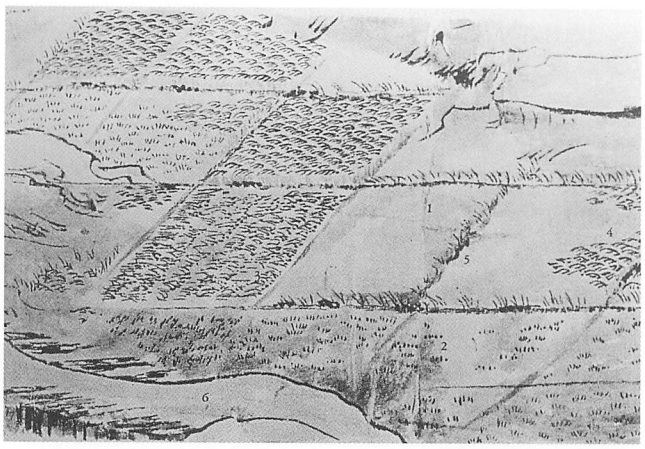
7



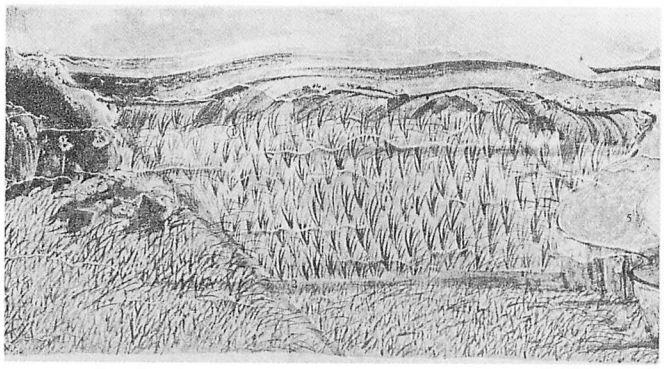
8



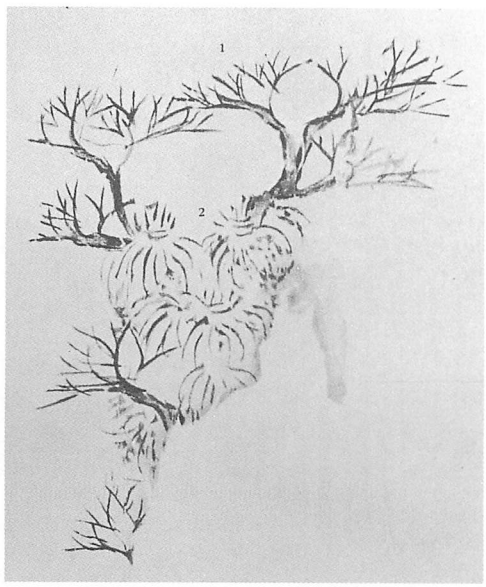
9



10



11



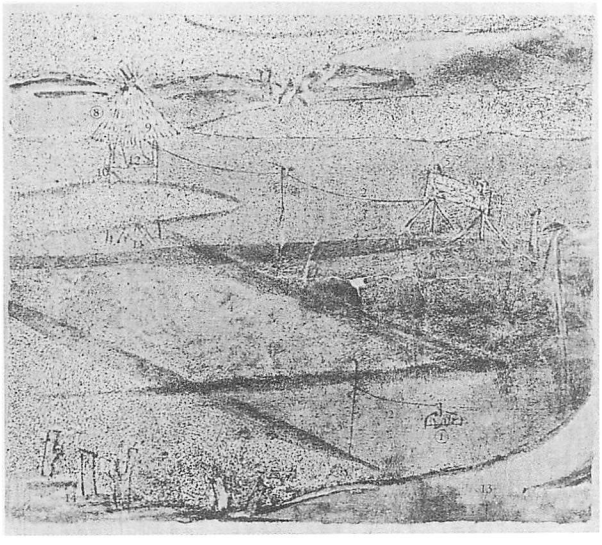
13

12

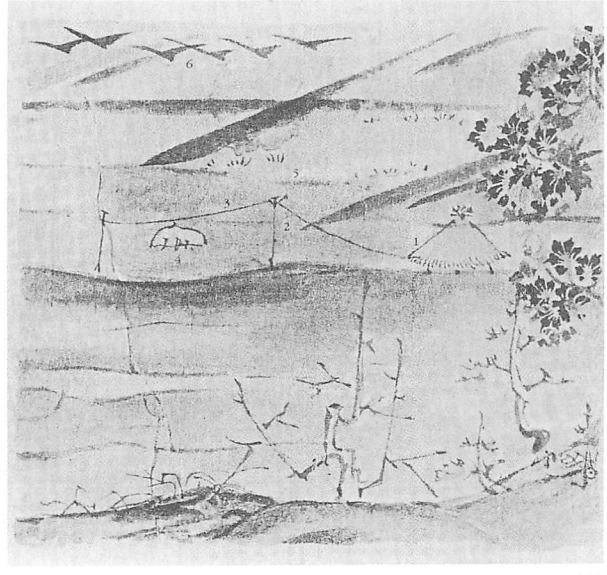
第183図　中世絵巻に見る水田景観（２）（渋沢1984『日本常民生活絵引』より）

７～10　一遍聖絵　11　石山寺縁起

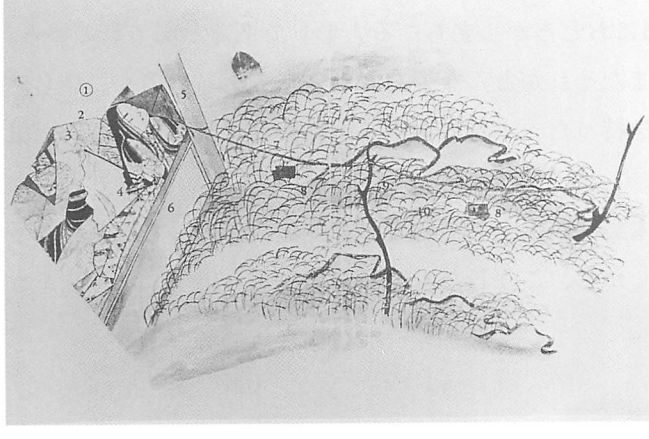
12・13　粉河寺縁起



14



15



16

17

18

第184図　中世絵巻に見る水田景観（３）（渋沢1984『日本常民生活絵引』より）

14～15　伊勢新名所歌合絵巻　16　扇面古写経

17　信貴山縁起　18　福富草紙

されていることからも、それ以前から穀物を樹上に干す技術はあったと推定される(3)。このように見てくると、二本柳遺跡の畦畔木列も二次的な目的ではあるが、立樹稲架として利用された可能性もありうると考えるが、牽強付会であろうか。

中世の絵巻物や近世農書、四季耕作図などには、水田景観や年間を通じた作業風景が描かれ、連続した農作業の流れを知ることができる。これに対し、発掘調査によって明らかにされた水田遺構は、洪水による埋没時点の瞬間をとどめていることから、必然的に残存しにくい遺構や遺物があり、限定された季節的な景観は、復元しにくい限界性を持っている。例えば、収穫期の風物誌としてかかせない「かかし」などはその典型的な事例といえる。

一般に「かかし」というと人物を連想する人が多いが、収穫期前の作物を鳥獣から守る施設や道具には様々な形態がある。その一つに「臭い」がある。現在でも山間の水田を通りかかると、獣の肉や毛を棒の先端に挟み、これを焼いて悪臭を放って鳥獣を防ぐ方法を目にすることがある。現代の「かかし」の最も普及版とされる田畑に人形を置く方法は、古くは『古事記』にも登場し、久延毘古（くえびこ）が山田の曾富騰（やまだのそうど）であるという記述が見られる。「山田のそほづ」は『古今和歌集』など平安時代以降の歌集にもたびたび読まれ、藤原清輔の『奥義抄』には、「そほづ」は「田におどろかし立ちたる人形」であると記されている。これらの人形の案山子がいつから日本に登場するのか、またそれがどんな姿をした人形であったのか、詳しいことは不明である。「一遍聖絵」（8）には、水田に弓矢を持った一本足の案山子が描かれており、こうした景観は江戸時代の四季耕作図等にも盛んに登場する。

二本柳遺跡では4区下層水田から矢の先端を示す鏃形木製品が出土しているが、全体的に欠落した部分が多く、これを案山子と結びつけるには飛躍がありすぎる。しかし、こうした木製品が水田から出土する意味をもう少し深く考えていく必要性を感じさせる遺物といえよう。

4　水田内の農作業

本遺跡では、水田面に人間の足跡が明瞭に残されていた。この中でも、3区上層水田の7号水田に残された足跡の動線は農作業の一端を知る上で非常に興味深い。

ここで発見された足跡は、図版12や第85・95・97図にもあるように、水田の西から東、東から西へ一定間隔で蛇行しながら歩行を繰り返し、これに連続して南北方向にも同じような歩行を行っている。したがって、水田面には東西方向と南北方向の歩行痕跡が格子目状に展開している。

このような作業動線は、広島県芸北地方に伝わる『代掻図集』(4)に掲載される代掻き作業行程図と非常に類似した動きを示している。この史料には代掻きに関する23種類の動線が示されているが、名田富太郎著『山県郡誌』には、これよりさらに多い80種の代掻きの方法が描かれているという。この様に代掻きという一つの作業工程をとっても多様な動きがあったことが理解できる。

本遺跡の場合、水田面に残された作業痕跡を代掻き作業と断定することはできないが、水田内の作業を理解する上でも非常に重要な痕跡であると考える。

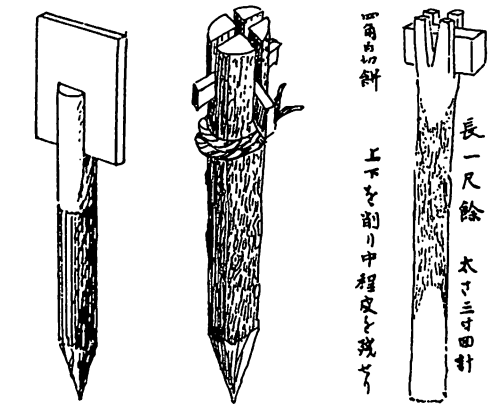
このような作業痕跡の特定が可能となれば、水田が埋没した季節の推定も明らかにすることができるであろう。

5　斎串状木製品と水田祭祀

本遺跡では、水田面から形代としての人形、鏃形木製品の他、斎串状木製品、箸状木製品、棒状木製品が相当数出土している。

こららの多くは、水田土壌層や上部の覆土中に散在して発見されるものが圧倒的であるが、中には、水田面や畦畔につき刺さった状態で出土するものが存在する例があることがわかってきた（図版13）。このような視点で観察すると、一見不定型の棒状木製品も先端部を削り尖らせている点や先端部を焼いている点、頭部を裂いて故意に割った痕跡がある点など、いくつかの共通した要素が認められる。樹種の多くはヒノキ属、スギなどが同定されている。

形態的には、近世前期の『農業全書』などに描かれた「扱き箸」にも類似するが、遺物観察から同様の作業痕跡を示す証拠は見あたらない。では、こうした木製品はいったい中世水田の中でどのように使用されたのであろうか。



ⓐ柳に餅をはさんで御幣にした粥掻き棒・長野県北安曇郡池田町中島　ⓑ若狭美浜町の牛玉杖　ⓒ『駿国雑志』の粥掻き棒（吉見書店版より）

第185図　粥かき棒と牛王杖
（野本寛一1995『稲作民俗文化論』より）

斎串は本来、地面に突き刺し祭の場の結界を作り出し、神の依代としてまた、祓の場を作り出す道具として利用されたものとされている。『万葉集』には「斎串立て神酒坐ゑ奉る神主部の髻華の玉蔭みればともしも」ともうたわれ、古代では短冊状の薄い板の先端を剣先状に尖らせ、頭部を三角形状に切り落としているものが多い。その上限は6世紀後半から7世紀とされるが、律令期には全国的な広がりを見せている[5]。同様の機能を持つ道具として、現在の民俗例としては、ケズリバナ、御弊などがあり、アイヌのイナウなども形状が類似する。

こうした忌串と水田との関係で想起される行為として、全国各地に見られる水口祭りの民俗事例が多く知られている。これは、苗代の籾蒔きの日に水口や水口畦に榊や牛王札を挟みこんだ御弊を刺し込み、焼米や洗米などとともに供える儀礼である。加持を経た牛王札は、信徒に配られ配られ一般には厄除けの護符として門口に貼られるというが、全国各地の社寺が発する牛王札は稲作守護として、水口脇の畦に立てられる場合が圧倒的に多いという。

野本寛一氏は、この「牛王札以前」の水口呪物の形態として、本県の粥掻き棒に注目している[6]。山梨県下では、1月の15日の小正月を中心に、カツノキと呼ばれるヌルデの木で長さ25～30cm前後、直径6cmほどの粥掻き棒を2本作り、粥を炊いて棒で掻きまわし、これを田の神と呼んで田の水口に突き刺す風習が見られる[7]。また、粥掻き棒を籾殻につけ、その付着具合でその年の豊凶を占った事例も知られている。これらの粥掻き棒は、木口を十字に刻み、そこに切餅を挟みこんで御弊とした事例も長野県や静岡県において知られており、牛王杖との共通点が多い（第185図）。野本氏は、この粥掻き棒が本来は箸であったことを吉野の粥箸などとの比較において明らかにし、箸→粥掻き棒→牛王杖と変遷したものと推定している。

再度、出土遺物に目を転じると、本遺跡出土の斎串状木製品は、長さ30cmほどの棒の先端を尖らせ、頭部を裂いて割るという特徴が見られ、形態的に御弊などとの共通する点が多く認められる。このように考えてくると、出土した箸状木製品や斎串状木製品は、中世水田での水口儀礼に用いられた道具であった可能性が高い。樹種は、民俗例ではヤナギの枝が使用されることが多いが、出土木製品ではヒノキ属やスギが利用されている点で違いが認められる。しかしながら、これらの出土木製品と、古代の斎串、現代の牛王杖、粥かき棒、箸などに貫かれたアナロジーは、水田祭祀の継承と変化を知る上でも重要な手がかりとなるのではなかろうか。

さらに、本遺跡2区38号水田内（下層水田）の炭化物集中地区では、63号畦畔から1mほどの場所で、炭化し

たイネ、オオムギ、コムギとともに、動物骨が出土した個所（第53図）や、２区上層水田の８号水口には、水口脇の26号畦畔のヤナギの木の下に、馬の下顎骨がおかれた状態で出土している（第34図）。こうした事例は、現在の水口祭りと完全に一致するものではないが、中世段階の水田祭祀の実態に迫るものと考えられ、事例の蓄積が待たれる。

5　小　結

本節では、二本柳遺跡で検出された中世水田に関わる遺構や遺物について、当時描かれた絵巻物や現代の民俗例などと比較し、人為的行為の集積された結果としての「水田景観」として復元を試みてみた。こうした視点で遺構・遺物を捉えたとき、当時の絵画史料の中では表現されていない部分もある一方で、絵画史料にあっても、実際の考古資料となりにくい部分があることが理解される。

したがって、中世段階の水田景観の復元や、その時代的変化を明らかにするには、考古、民俗、文献、自然科学など様々な史資料のつきあわせを多角的に行っていくことが必要である。

註

（１）渋沢敬三編　1984 『日本常民生活絵引』平凡社
（２）佐藤洋一郎　1999 「DNA分析からみたイネ・稲作の渡来と展開」　『水田跡・畑跡をめぐる自然科学ーその検証と栽培植物ー』第９回東日本の水田を考える会
（３）金子裕之　1988 『律令期祭祀遺物集成』　、静岡県埋蔵文化財研究所　1990 『いのりとまつりー大谷川の発掘調査から』
（４）文化庁文化財保護部　1969 『田植えに関する民俗４　島根県・広島県』平凡社、原図は田中梅治『粒々辛苦流汗一滴』に収録
（５）『類従三代格』巻八
（６）野本寛一 1993 『稲作民俗文化論』　雄山閣
（７）土橋里木・大森義憲　1974　『日本の民俗19　山梨』　第一法規

第７節　二本柳遺跡出土の動物遺体

西　本　豊　弘・姉　崎　智　子

二本柳遺跡の中世の水田面から、破片総数にして295点の動物遺体が出土した。このうち種を同定できたのは164点であり、それらにはニワトリ、カメ類、ウマ、ウシ、イヌ、キツネの6種が含まれていた。以下、種別に簡単な説明を行なう。

カメ

陸亀と思われるカメの腹甲が２号溝およびＧ22から14点出土した。

ニワトリ

若い小型のシャモの左右上腕骨各１点、および成鳥のシャモの雌の右中足骨が１点出土した。

ウマ

本資料の最優占種であり、破片数にして139点を同定した。出土したすべての地点を合計して推定される最小個体数は７体である。歯牙は保存状態が悪く、すべて遊離歯である。その咬耗状態から年齢を推定すると、少なくとも若獣２体と成獣５体が含まれる。成獣には、咬耗の進んだ老齢個体も含まれる。完存する四肢骨はごくわずかであった。残存する部位は、中足骨、距骨、踵骨、基節骨など四肢の末端部が多い。完存した右中足骨２点について計測を行なった。これらの骨幹部は比較的華奢であり、その最大長は251.3㎜と239.1㎜であった。この値から体高を推定すると、それぞれ約127㎝および120㎝となり、小型馬の範疇である。これらの四肢骨には解体痕およびイヌによる噛痕がみとめられるものも少量含まれていた。

イヌ

破片総数１４点を同定し、推定される最小個体数は２体である。いずれも成獣である。四肢骨で完存しているものはなかったが。４区下層水田から出土した完存の左下顎骨の最大長を計測すると、127.2㎜であった。これをもとに体高を復元すると約46㎝であり、中型に相当する。この下顎骨には第1後臼歯から第２後臼歯の歯槽部に退縮がみとめられる。また、第1前臼歯は欠損していた。下顎体の高さは前臼歯歯槽部から後臼歯歯槽部にかけて、下顎底は少しまるみを持っている。また、歯列もゆるやかに弧をえがいている。下顎体厚も前臼歯部と後臼歯部であまりかわらない。また、このほかに出土した成獣の下顎左第1後臼歯の長さは、18.9㎜であった。

第35表　イヌ下顎骨計測値　(㎜)

下顎最大長	127.20
下顎体高	
Ｐ２，Ｐ３中間部内側	19.94
Ｐ２，Ｐ３中間部外側	19.99
Ｍ１内側	25.42
Ｍ１外側	22.58
下顎体厚	
Ｐ２，Ｐ３中間部	10.54
Ｍ１中央	11.83
Ｍ１長さ	20.46
Ｍ１幅	8.13

*４区４－１溝出土　Ｐ：前臼歯　Ｍ：後臼歯

ウシ

ウシは、破片数にして５点を確認した。推定される最小個体数は1体である。４区４－１溝から下顎右第１後臼歯および第３後臼歯が1点ずつ出土しており、歯の咬耗状態からみておそらく同一個体の成獣であると思われる。このほかには、下層水田から右脛骨骨幹部破片、頚椎および末節骨が出土している。

カモシカ

カモシカは、成獣の右下顎骨が1点出土したのみである。第3前臼歯から第1後臼歯にかけて、著しい乱ぐいが認められる。

キツネ

キツネは右肩甲骨が1点出土したのみである。

まとめ

本資料の大半はウマであった。中・近世において、ウマは使役あるいは軍馬としてもちいられ、また、死亡後は骨加工品の原材料としても利用されたことが知られている。本資料におけるウマの年齢構成をみると成獣・老獣が多く、ウマの四肢骨の出土が中足骨以遠の距骨や踵骨、基節骨に限られ、解体痕が多少認められることから、ウマが労働力としてもちいられてから、死後解体され、特定の部位がもちだされた可能性がある。もっとも、全体的に骨の保存が悪いことから、残りやすい部位が残ったという可能性も否定できない。

イヌは、中型犬が２体分検出された。これらには解体痕がみとめられなかったことから、死亡したのち、一括廃棄されたものと考えられる。また、１点のみ出土したカモシカにみられた乱食いの傾向は、一般に家畜動物にみられる現象である。この資料は、ヤギ・ヒツジなどの可能性を含めて検討したが、カモシカと同定したものである。これがどのような意味をもつのかについては、類例を待って改めて考えてみたい。

第35表　二本柳遺跡出土動物遺体

区	場　所	グリッド	番号	種	部　位	左右	残存状態	数量	歯　種	萠出段階	推定年齢	備　考
1	サブトレ1　11層		6	ウマ	下顎骨	R	枝	1				
1	サブトレ1　11層		6	不明			破片	1				
1	南西コーナ　11層		5	イヌ	上腕骨	L	遠位部	1				
1	南西コーナ　11層		5	イヌ	尺骨	L		1				
1	南西コーナ　11層		5	陸獣	肋骨		破片	1				
1	南西コーナ　11層		5	陸獣			破片	3				
2	2号溝　北		10	カメ	腹甲		破片	1				陸
2	2号溝		11	カメ	腹甲		破片	9				陸
2	4号水口		13	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	P4		成獣	
2	4号水口		13	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	P34		成獣	
2	5号溝		8	ウマ	中手骨	R	近位部－骨幹部	1				
2	G22竹の根の中		18	カメ	腹甲		破片	2				陸
2	下層水田　2	P4	16	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2		成獣	
2	下層水田		14	ウマ	距骨	L		1				
2	下層水田	C2	9	ウマ	基節骨		完存	1				
2	下層水田	C3	9	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	I3		成獣	
2	下層水田	C3	9	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P23		老獣	
2	下層水田		21	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P3		老獣	
2	下層水田	D6	241	カモシカ	下顎骨	R		1	(xP34M1)		成獣	乱食い
2	水口4		12	ウマ	顎		破片	1				
2			15	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	M2		成獣	
2			15	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	乳臼歯			
2			15	ウマ	遊離歯			3	破片			
3	下層水田　136	A36	67	イヌ	上腕骨	R	骨幹部	1				中型
3	下層水田　137	A36	73	イヌ	脛骨	L	骨幹部	1				
3	下層水田　242	Z41	124	イヌ	脛骨	L	近位部－骨幹部	1				小型
3	下層水田　270	D38	112	イヌ	上腕骨	L	骨幹部－遠位部	1				噛痕
3	下層水田	C40	92	イヌ	尺骨	L		1				中型
3	下層水田	A33	121	イヌ	遊離歯	L	下顎	1	C	かなり磨耗	成獣	
3	下層水田	A36	132	イヌ	橈骨	L	骨幹部　破片	1				中型
3	下層水田　127	A34	65	ウシ	脛骨	R	骨幹部　破片	1				噛痕
3	下層水田　261	D39	111	ウシ	頸椎		完存	1				
3	下層水田	D39	108	ウシ	末節骨			1				
3	下層水田　68	C38	150	ウシ／ウマ	大腿骨		遠位部　破片	1				
3	下層水田　125	A33	99	ウシ／ウマ	中手・中足骨？		骨幹部　破片	3				
3	下層水田　244	D39	70	ウシ／ウマ	脛骨	L	骨幹部	1				噛痕
3	下層水田　272	D41	138	ウシ／ウマ	大腿骨		遠位部　破片	1				
3	下層水田	B39	98	ウシ／ウマ	椎骨		破片	1				
3	下層水田	A42	145	ウシ／ウマ	種子骨			1				
3	下層水田　19	B37	126	ウマ	中足骨		骨幹部	1				華奢，噛痕
3	下層水田　95	D40	48	ウマ	橈骨	R	骨幹部－遠位部	1				
3	下層水田　107	E34	118	ウマ	中足骨		骨幹部　破片	1				
3	下層水田　112	D36	135	ウマ	脛骨	R	遠位部	1				噛痕
3	下層水田　113	D36	131	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P2		成獣	大きい
3	下層水田　124	A33	136	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	臼歯　破片			
3	下層水田　133	A35	101	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	i3			
3	下層水田　135	Z36	142	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	m 3	かなり磨耗		30.04㎜
3	下層水田　139	A36	97	ウマ	中手骨	R	骨幹部	1			若獣	
3	下層水田　141	B36	114	ウマ	頭蓋骨		鼻骨　破片	1				
3	下層水田　154	B38	72	ウマ	中足骨	R	骨幹部　破片	1				
3	下層水田　161	a37	89	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	m 3	かなり磨耗		34.74㎜
3	下層水田　163	B37	86	ウマ	中節骨			1				噛痕
3	下層水田　167	D37	233	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	I1		成獣	
3	下層水田　169	D38	66	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M2		成獣	
3	下層水田　172	A38	109	ウマ	足根骨　3	L		1				
3	下層水田　183	D38	137	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P3		成獣	
3	下層水田　184	D38	149	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P4		成獣	
3	下層水田　186	C37	75	ウマ	大腿骨		近位部　骨頭　破片	1				
3	下層水田　190	D38	74	ウマ	足根骨　3	R		1				
3	下層水田　192	D38	129	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2		成獣	

区	場　所	グリッド	番号	種	部　位	左右	残存状態	数量	歯　種	萠出段階	推定年齢	備　考
3	下層水田　198	B37	139	ウマ	中足骨	L		1				
3	下層水田　198	B37	139	ウマ	足根骨　3		破片	1				
3	下層水田　198	B37	139	ウマ	足根骨　3	L		1				
3	下層水田　199	B39	144	ウマ	距骨	R	完存	1				
3	下層水田　207	D39	128	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	M2		老獣	
3	下層水田　208	C38	105	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	I3		成獣	
3	下層水田　209	C38	104	ウマ	上腕骨		骨幹部　破片	1				
3	下層水田　213	B38	80	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ/ＩＶ	1				
3	下層水田　214	B38	152	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ/ＩＶ	1				
3	下層水田　243	D39	79	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	M1?		老獣	
3	下層水田　245	C38	83	ウマ	基節骨			1				
3	下層水田　246	D39	91	ウマ	踵骨	L		1				噛痕
3	下層水田　248	D38	117	ウマ	中足骨	R	近位部－遠位部	1				噛痕
3	下層水田　250	D38	122	ウマ	中節骨		完存	1				
3	下層水田　252	D38	130	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ/ＩＶ	1				
3	下層水田　254	D38	87	ウマ	基節骨		完存	1				
3	下層水田　258	D39	151	ウマ	中節骨			1				
3	下層水田　259	D39	236	ウマ	胸椎		椎体・椎弓	1				
3	下層水田　262	C39	94	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ/ＩＶ	1				
3	下層水田　264	D38	147	ウマ	距骨	R	完存	1				
3	下層水田　271	D41	146	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ/ＩＶ	1				
3	下層水田　275	D41	115	ウマ	中手・中足骨		骨幹部　破片	1				
3	下層水田　293	C42	63	ウマ	尺骨	R		1				
3	下層水田　300	A41	82	ウマ	距骨	R		1				噛痕
3	下層水田　309	C38	134	ウマ	頭蓋骨	R	頬骨弓	1				
3	下層水田　310	C38	110	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P4		成獣	
3	下層水田	C37	120	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P4		成獣	
3	下層水田	D33	90	ウマ	寛骨	L	坐骨部，寛骨臼	1				
3	下層水田	D33	96	ウマ	距骨		破片	1				
3	下層水田　201	A40	76	ニワトリ	中足骨	R	近位部－遠位部				成鳥	♀　シャモ
3	下層水田　1溝		178	不明			破片	3				
3	下層水田4－1溝	C8	176	不明			破片	1				
3	下層水田	C37	106	不明			破片	1				
3	下層水田　111	D36	107	陸獣			破片	2				
3	下層水田　119	B33	140	陸獣			破片	1				
3	下層水田　121	A33	148	陸獣			破片	3				
3	下層水田　122	A33	113	陸獣			破片	2				
3	下層水田　129	A34	23	陸獣			破片	1				カットマーク
3	下層水田　130	A34	77	陸獣			破片	7				
3	下層水田　132	B24	141	陸獣			破片	1				
3	下層水田　138	A46	68	陸獣			破片	3				
3	下層水田　149	B38	123	陸獣			破片	1				
3	下層水田　189	D38	102	陸獣			破片	2				
3	下層水田　191	D38	81	陸獣			破片	3				
3	下層水田　206	D39	95	陸獣	椎骨		破片	1				
3	下層水田　221	C39	119	陸獣			破片	1				
3	下層水田　224	D39	85	陸獣			破片	2				
3	下層水田　226	B40	143	陸獣			破片	3				カットマーク、噛痕
3	下層水田　247	D38	116	陸獣	椎骨		椎体　破片	1				
3	下層水田　265	D39	88	陸獣	肋骨		破片	1				
3	下層水田4－1溝	C19	165	陸獣			破片	3				
3	下層水田	Z40	100	陸獣			破片	1				
3	下層水田	D37	78	陸獣			破片	1				
3	下層水田	D40	71	陸獣	椎骨		椎体　破片	1				
3	下層水田	C38	127	陸獣			破片	2				
3	下層水田	C40	92	陸獣			破片	1				
3	下層水田	A33	121	陸獣			破片	3				
3	下層水田	A36	132	陸獣			破片	1				
3	下層水田	D36	125	陸獣			破片	2				
3	下層水田サブトレ		34	陸獣			破片	2				
3	上層水田　108	D41	25	イヌ	大腿骨	R	骨幹部	1				噛痕，中型

区	場　所	グリッド	番号	種	部　位	左右	残存状態	数量	歯　種	萠出段階	推定年齢	備　考
3	上層水田	A35	37	イヌ	下顎骨	L	枝	1				
3	上層水田	Z36	46	イヌ	遊離歯	L	下顎	1	M1		成獣	
3	上層水田　88	A40	50	ウシ／ウマ	尺骨		破片	1				
3	上層水田　92	C40	44	ウシ／ウマ	大腿骨		遠位部　破片	1				
3	上層水田	D38	47	ウシ／ウマ	椎骨		椎体　破片	1				
3	上層水田　40	C37	51	ウマ	中手・中足骨		II/IV	1				
3	上層水田　42	D38	39	ウマ	遊離歯	R	下顎	1	M3		老獣	
3	上層水田　42	D38	59	ウマ	大腿骨	R	遠位部　破片	1				
3	上層水田　51	238	53	ウマ	基節骨			1				
3	上層水田　87	A40	45	ウマ	基節骨			1				
3	上層水田　93	C40	32	ウマ	中手・中足骨		骨幹部　破片	1				
3	上層水田　99	D39	57	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	P3/P4		老獣	
3	上層水田　103	Z43	40	ウマ	寛骨	R	坐骨部. 寛骨臼	1				カットマーク、噛痕
3	上層水田　105	Z43	62	ウマ	踵骨	R		1				噛痕
3	上層水田	A44	56	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M1/M2		成獣	
3	上層水田	E37	60	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	P4		老獣	
3	上層水田	D37	41	ウマ	足根骨　3	R		1				
3	上層水田	D37	41	ウマ	寛骨		寛骨臼　破片	1				
3	上層水田		54	ウマ	中節骨		破片	1				
3	上層水田	Z36	43	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	i3			
3	上層水田　37	D37	35	ウマ？	寛骨	R	腸骨部　破片	1				カットマーク. 小型
3	上層水田　76	Z38	36	種不明	肋骨			1				カットマーク
3	上層水田	A31	33	ニワトリ	上腕骨	L	近位部－遠位部				若鳥	シャモ
3	上層水田　2	F34	26	不明			破片	1				
3	上層水田	D36	55	不明			破片	1				
3	上層水田　13	D36	31	陸獣			破片	1				
3	上層水田　43	Z37	28	陸獣			破片	1				
3	上層水田　77	D38	42	陸獣			破片	1				噛痕
3	上層水田　78	D38	29	陸獣			破片	1				
3	上層水田　79	Z39	38	陸獣			破片	1				
3	上層水田　98	C40	27	陸獣			破片	1				
3	上層水田　100	D39	52	陸獣			破片	1				
3	上層水田　216	C39	69	陸獣	椎骨		椎体　破片	1				
3	上層水田	D36	61	陸獣			破片	1				
3	上層水田	C38	45	陸獣			破片	1				
3	上層水田サブトレ		58	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M3		成獣	
3	上層水田サブトレ		30	ウマ	基節骨							
3	上層水田サブトレ		24	陸獣			破片	1				
4	下層水田　53	C55	191	イヌ	上腕骨	L	骨幹部	1				噛痕
4	下層水田４－１溝	H18	166	イヌ	下顎骨	L	完存	1	(xxxx□P234M12x)		成獣	M1-2外側膨漏
4	下層水田４－１溝	H9	162	ウシ	遊離歯	R	下顎	1	M1	k	成獣	
4	下層水田　18	Z48	179	ウシ／ウマ	上腕骨		遠位部　破片	1				
4	下層水田４－１溝	C5	204	ウシ／ウマ	脛骨	L	骨幹部	1				華奢
4	下層水田	Y50	211	ウシ／ウマ	肋骨		破片	1				
4	下層水田　7	Z48	199	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M2		成獣	
4	下層水田　11	A50	218	ウマ	遊離歯			1	臼歯　破片			
4	下層水田　12	A50	207	ウマ	尺骨	L		1				
4	下層水田　38	Y52	212	ウマ	踵骨	R		1				cut、噛痕
4	下層水田　45	X54	223	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ／ＩＶ	1				
4	下層水田　72	A59	196	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	I1		老獣	
4	下層水田　93	Z63	185	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P2		老獣	
4	下層水田　94	Z62	188	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P3		成獣	
4	下層水田　103	Z48	174	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	Ｉ3		成獣	
4	下層水田４－１溝	C10	194	ウマ	中手・中足骨		遠位部　破片	1				
4	下層水田４－１溝	H17	192	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	I2		成獣	
4	下層水田４－１溝	C1	167	ウマ	中節骨		完存	1				噛痕
4	下層水田４－１溝	C5	204	ウマ	基節骨		近位部－遠位部	1				
4	下層水田４－１溝	C15	215	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	Ｉ23		成獣	
4	下層水田４－１溝	H10	195	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	M2		成獣	
4	下層水田４－１溝	H2	208	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M1		成獣	
4	下層水田４－１溝	H2	208	ウマ	中手・中足骨		ＩＩ／ＩＶ	1				

区	場　所	グリッド	番号	種	部　位	左右	残存状態	数量	歯　種	萠出段階	推定年齢	備　考
4	下層水田４－１溝	H14	210	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2 ?			
4	下層水田４－１溝	C11	205	ウマ	基節骨			1				
4	下層水田４－１溝	C2	209	ウマ	肩甲骨	R		1				カットマーク
4	下層水田４－１溝	C7	177	ウマ	基節骨		近位部	1				
4	下層水田４－１溝	C3	220	ウマ	寛骨	R	坐骨部，寛骨臼	1			噛痕	
4	下層水田４－１溝	C3	220	ウマ	距骨	R	完存	1				
4	下層水田４－１溝	C20	200	ウマ	中手骨	R	近位部－遠位部	1				II癒着，噛痕
4	下層水田４－１溝	C4	213	ウマ	中足骨	R	近位部－遠位部	1				細，噛痕
4	下層水田４－１溝	H15	202	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M1		老獣	
4	下層水田	A61	157	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	I2		成獣	
4	下層水田	x55	168	キツネ	肩甲骨	R		1				
4	下層水田　24	Z52	182	陸獣			破片	3				
4	下層水田　47	Y56	171	陸獣			破片	2				
4	下層水田　59	A57	172	陸獣			破片	4				
4	下層水田４－１溝	C17	190	陸獣	椎骨		椎弓　破片	1				
4	下層水田４－１溝	C12	221	陸獣			破片	1				
4	下層水田４－１溝	C18	170	陸獣			破片	6				
4	下層水田４－１溝	C13	161	陸獣			破片	3				
4	下層水田４－１溝	C9	164	陸獣	肋骨		破片	1				
4	下層水田４－１溝	C9	164	陸獣			破片	3				
4	下層水田	A49	219	陸獣			破片	2				
4	サブトレ黒色土	Y59	159	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	I3		老獣	
4	上層水田	A54	154	ウマ	踵骨	L		1				
4	上層水田サブトレ	A49	153	ウマ	中手骨		骨幹部	1				噛痕
4	西壁黒色粘土層		158		陸獣　肋骨		破片	1				
4	表採		160	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M3		成獣	
4	表土		155	ウマ	中足骨		骨幹部　破片	1				
4	下層水田４－１溝	H1	186	ウシ	遊離歯	R	下顎	1	M3	g	成獣	
4	下層水田　16	Z48	173	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P2		成獣	
4	下層水田　19	A48	217	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	M3	萠出開始		
4	下層水田　41	Z53	189	ウマ	距骨	R	完存	1				
4	下層水田　70	A59	193	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	M1/2	萠出開始 少し磨耗		
4	下層水田34－49		201	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P2		成獣	
4	下層水田４－１溝	H6	184	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M1/2	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H5	206	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2		成獣	
4	下層水田４－１溝	H5	206	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	臼歯	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H7	197	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	臼歯	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H4	183	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	P2	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H4	183	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P2	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H8	187	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2		成獣	
4	下層水田４－１溝	H16	175	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P3/4			
4	下層水田４－１溝	H16	175	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M3		成獣	
4	下層水田４－１溝	H1	163	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M3	萠出開始		
4	下層水田４－１溝	H3	180	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M2		成獣	
4	下層水田４－１溝	H3	180	ウマ	中手・中足骨		遠位部　破片	1				
4	下層水田４－１溝	H13	169	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M2		成獣	
4	下層水田４－１溝	C16	181	ウマ	肋骨		破片	1				
4	下層水田４－１溝	H12	203	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P2		成獣	
4	下層水田	C52	198	ウマ	距骨	R	完存	1				
4		B55	156	ニワトリ	上腕骨	R	近位部－遠位部				若鳥	シャモ
?	1層水田上レキ		2	カメ	腹甲		破片	2				陸
?	サブトレ		1	ウマ	遊離歯	L	上顎	1	M1/2		成獣	
2B	下層水田	F26	17	ウマ	基節骨		完存	1				
2B	下層水田	D24	22	ウマ	頸椎		椎体・椎弓	1				

＊歯種　i1：第１乳切歯、i3：第３乳切歯、m3：第３乳臼歯、I1：第１切歯、I2：第２切歯、I3：第３切歯
P2：第２前臼歯、P3：第３前臼歯、P4：第４膳臼歯、M1：第１後臼歯、M2：第２後臼歯、M3：第３後臼歯
x：脱落、口：欠歯、(　)内は、歯が顎に植立しているもの

図版31　動物遺体

1．ニワトリ左上腕骨（若）、2．ニワトリ右上腕骨（若）、3．ニワトリ右中足骨、4．カモシカ右下顎骨、5．イヌ左下顎骨、6．馬右踵骨、7．ウマ右距骨、8．イルカ類肋骨、9．キツネ右肩甲骨、10．イヌ左上腕骨、11．ウマ左中足骨（若）、12．ウマ右中足骨

第８節　二本柳遺跡のプラント・オパール分析

外　山　秀　一

１　はじめに

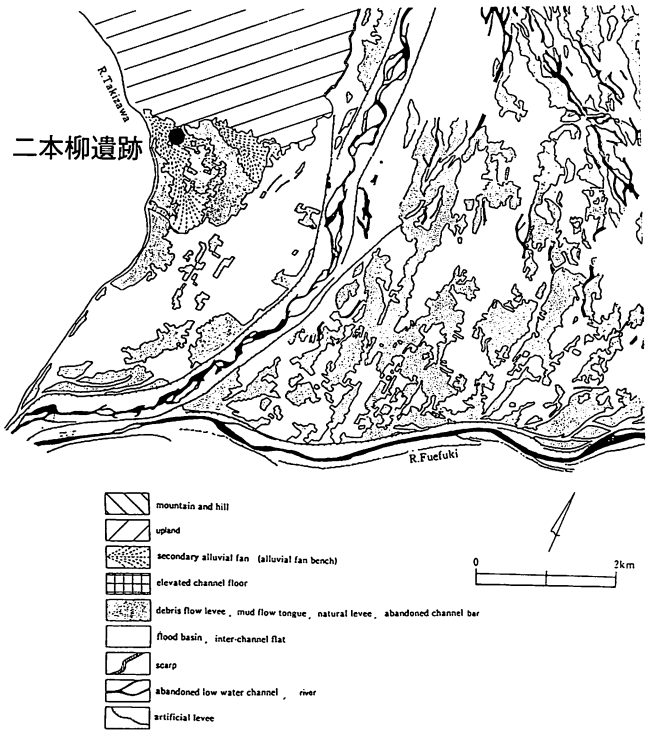
二本柳遺跡は、甲府盆地西部の御勅使川のつくる古期扇状地の扇端部を侵食して、支流の滝沢川のつくる二次扇状地[1]（開析扇状地）の扇頂部に位置する（第186図）。中部横断自動車道（甲西バイパス）の建設に伴う事前調査が、こうした扇状地を縦断するかたちで実施された。当遺跡では、南部より１区～４区の調査区が設定され、１区で江戸時代の水田址、２～４区で平安時代後半～鎌倉時代と室町時代の水田址とともに、水路、畦畔木列などの水田施設が検出されている[2]。

１区と２区における地形環境と土地条件、土地利用の変化を明らかにするために、地形分析とプラント・オパール分析を実施した。なお、１区のＡ地点～Ｇ地点と２区のＡ地点においてプラント・オパール分析用の試料を採取したが、ここでは地層の堆積状況が著しくまた環境の変化をより詳細に検討できると考えられる１区Ｇ地点と２区Ａ地点の分析の結果を報告する。

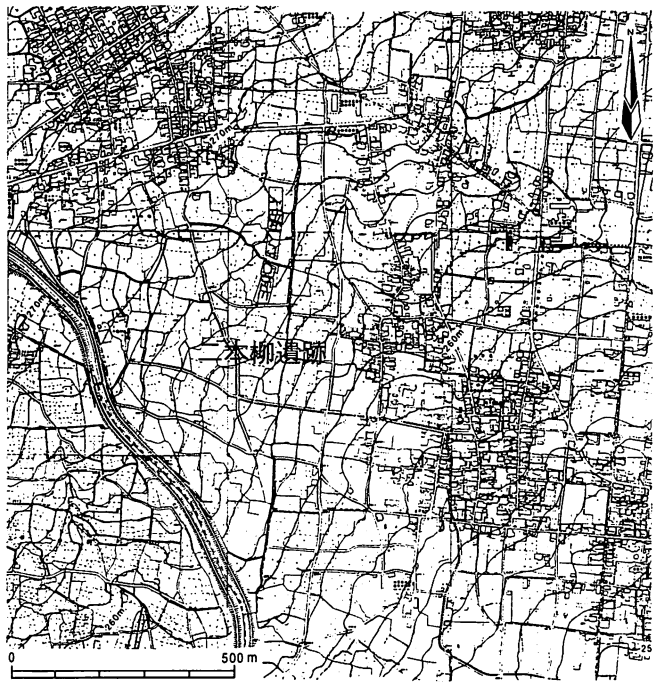
２　地形環境

１）微地形の分布

当遺跡は標高265～268ｍに分布し、地表面は御勅使川と滝沢川の氾濫の影響を受けて南東方向に緩く傾斜している[3]（第187図）。扇状地の湧水を利用して遺跡周辺の低地はかつては水田地帯となっていたが、最近では稲作転換により果樹園や桑畑に変わり、住宅地化も進んでいる。また、扇状地を南北に縦断する調査区の地層の堆積状況をみると層相変化が著しく、埋没した微凹地と微高地とが連続して分布している状況を確認することができる。



第186図　地形分類図
（高木・中山1983に加筆）



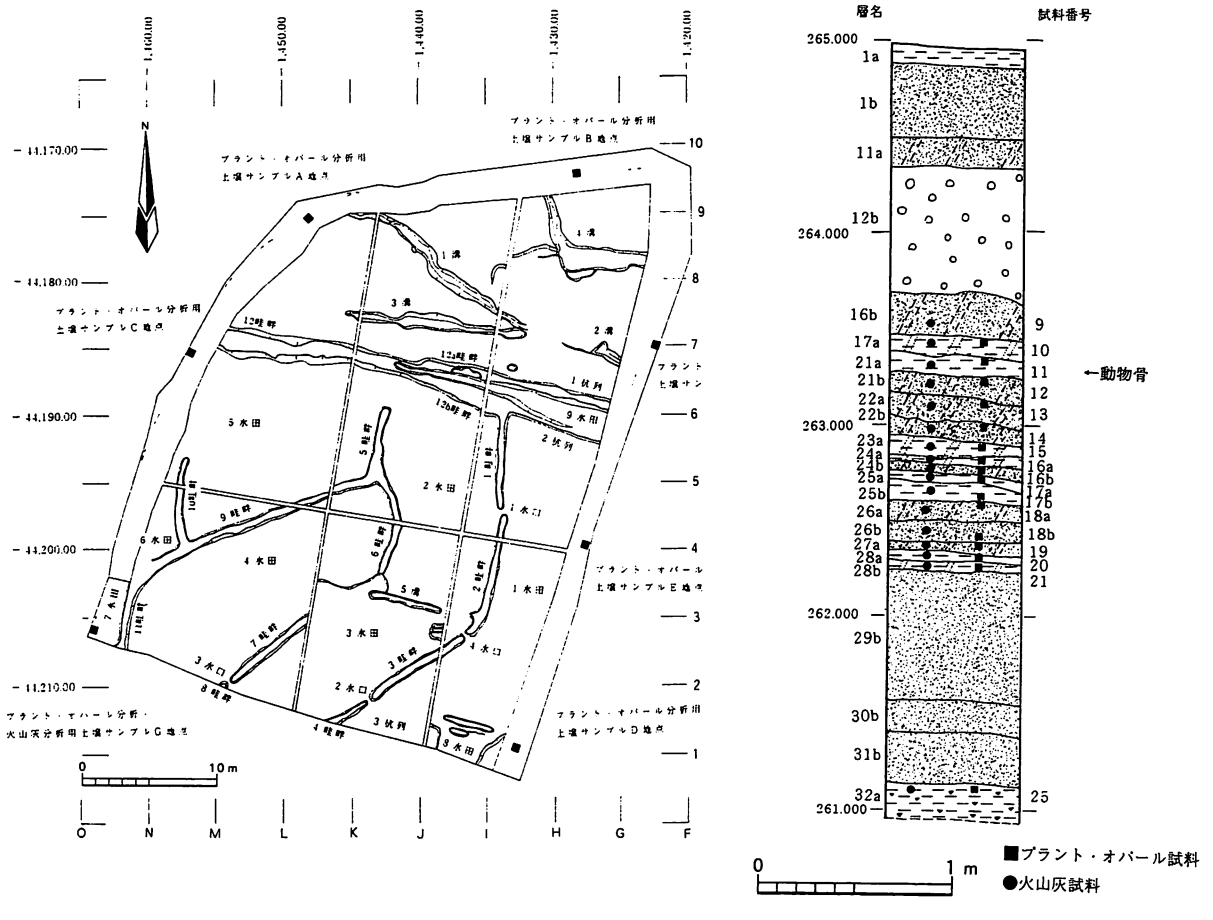
第187図　遺跡周辺の微起伏
（中山1996に加筆）

2）地層の堆積状況と試料の採取

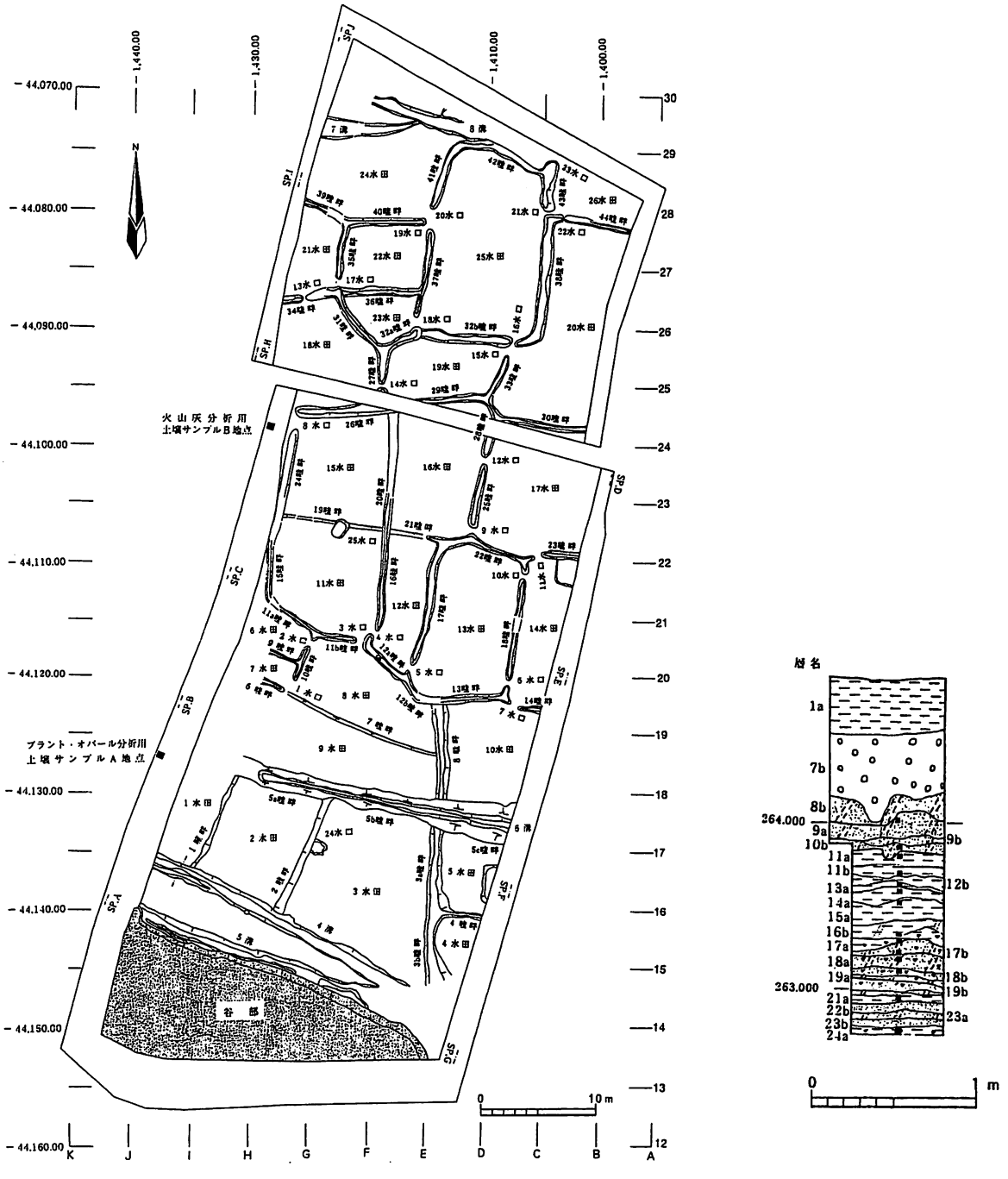
1区G地点（第188図）では、地表面下約250cmの地層の観察をおこない、試料を採取した約150cmより下位の地層は19層に細分される。全般的にはシルトと細砂の細粒物質で構成されているが、層相の違いにより上位と下位とに2分される。すなわち、上位の17a層～28b層では層相の変化が著しく、層厚数cmから十数cmの単位で地層の堆積状況が変わる。このうち、17a層～23a層では黒色や黒褐色の有機質層となっている。これに対して、下位では29b層～31b層が細砂層、32a層が有機質のシルト層で構成され、また各層は厚い。前者は河川の氾濫の影響を受けた堆積物、他方後者は微凹地に生成された湿地性の地層とみられる。

2区A地点（第189図）の地表面下約210cmの地層は25層に細分されるが、これらは上部のシルト層と砂礫層、下部のシルト層と細砂層を主体とする地層とに大別される。なかでも、後者は1区G地点と同様に著しい層相変化を示す。また、11a層～15a層は黒色や黒褐色の有機質層となっており、17a層～19b層ならびに24a層では炭化物を混じえる。

なお、プラント・オパール分析用の試料は、1区G地点では土壌化を示す地層であるa層についてはその上部より、堆積時の状況を示す地層であるb層[4]については一部を除きその下部より、あわせて16試料を採取した[5]。また、2区A地点では、9a層より下位の層準から計14試料を採取した。



第188図　サンプリング地点と断面－1区G地点
（中山誠二氏作成）



第189図　サンプリング地点と断面－２区Ａ地点
（中山誠二氏作成）

３）分析の方法

定量分析法による試料の処理は、絶対乾燥－重量測定・仮比重測定－ガラス・ビーズの混入－ホモジナイザーによる分散－ストークス法による細粒物質の除去－乾燥の順序でおこない、オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は、400倍の偏光顕微鏡下で、主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

そして、検出されたガラス・ビーズ（300個）とプラント・オパールとの比率から、試料１ｇあたりの各プラント・オパールの個数ならびに総数を求めた。さらに、イネ、ヨシ属、ウシクサ族ならびにタケ亜科の機動細胞プラント・オパールについては、地上部全ての重さ(乾物重)を層厚１cm・面積10ａあたりの検出量で示した。

なお、火山の噴火によって降灰した火山ガラスを、そこで生成されたプラント・オパールと直接比較するこ

とはできないが、地層中の火山ガラスの含有状況ならびに出現傾向を検討するために、ここではプラント・オパールと同一基準で示した。また、動物珪酸体についても同様である。

3　分析の結果

1）1区G地点

プラント・オパールの層位的産状に基づいて区分された群集帯（ＰＯ帯）はａ帯～ｃ帯で、ｃ帯は検出総数の違いによりさらにｃ$_1$帯とｃ$_2$帯とに細分される（第190図）。全般的にはヨシ属の高出現とｃ帯でのイネの検出に代表され、高燥な土地条件に生育するウシクサ族やタケ亜科の少ないのが特徴である。

まず、ａ帯では検出総数が多くなかでもヨシ属の検出量がめだつ。また、僅少ではあるがキビ族型が検出される。次に、ｂ帯になるとヨシ属が僅かに検出される以外は、全般的に検出数・量ともに少ない。なお、試料７でカヤツリグサ科に起源すると考えられる板状細胞Ｃ型が一時的に増加する。さらに、ｃ$_1$帯では検出総数は少ないが、ヨシ属の検出量が増加する。また、僅かではあるがイネの機動細胞プラント・オパール（以下イネ）が試料６より検出され、試料５で増える。なお、ｂ帯で増減を繰り返していた火山ガラスの検出数が試料６でピークとなり、以後安定した出現傾向を示す。そして、ｃ$_2$帯になると全般的に検出数が増加し、試料３で総数は最大となる。また、イネの検出量が漸増傾向を示し、ヨシ属は試料４で高出現してその後減少する。

2）2区A地点

プラント・オパール群集帯はａ帯～ｃ帯に区分され（第191図）、全般的には１区Ｇ地点と同様の出現傾向を示している。

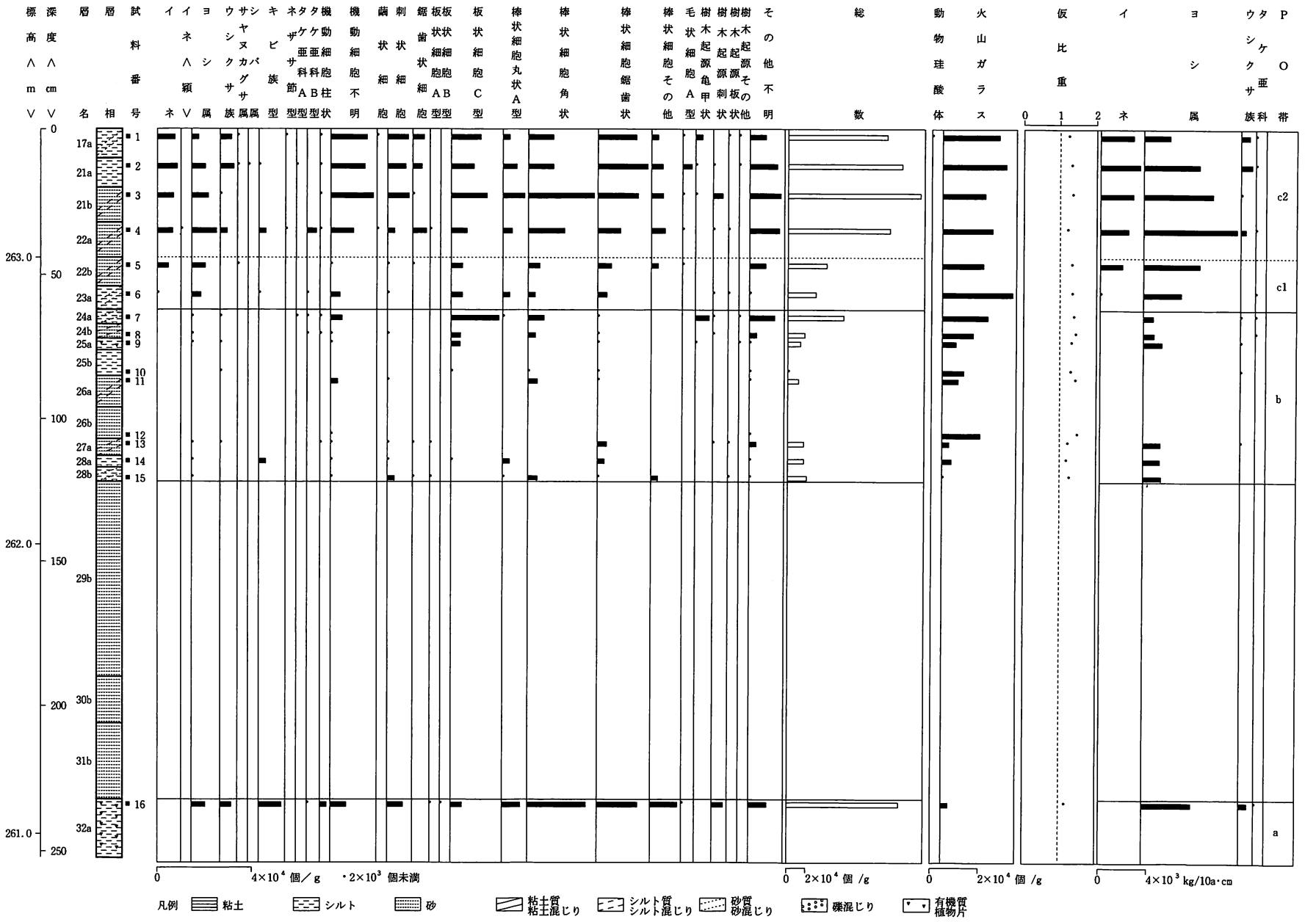
まず、ａ帯では層準の違いによって検出数の増減がみられるが、検出総数は全般的には少ない。ヨシ属の検出量は上部でやや増加するとともに、カヤツリグサ科に由来するとみられる板状細胞Ｃ型の高出現に特徴づけられる。また、イネが僅かながら検出される。次に、ｂ帯ではイネとヨシ属をはじめとして検出数と量が増加する。さらに、ｃ帯になると検出数は急減しイネやウシクサ族、タケ亜科が僅かに検出されるのみである。こうした一方では火山ガラスの増加がめだつ。

5　環境の変遷

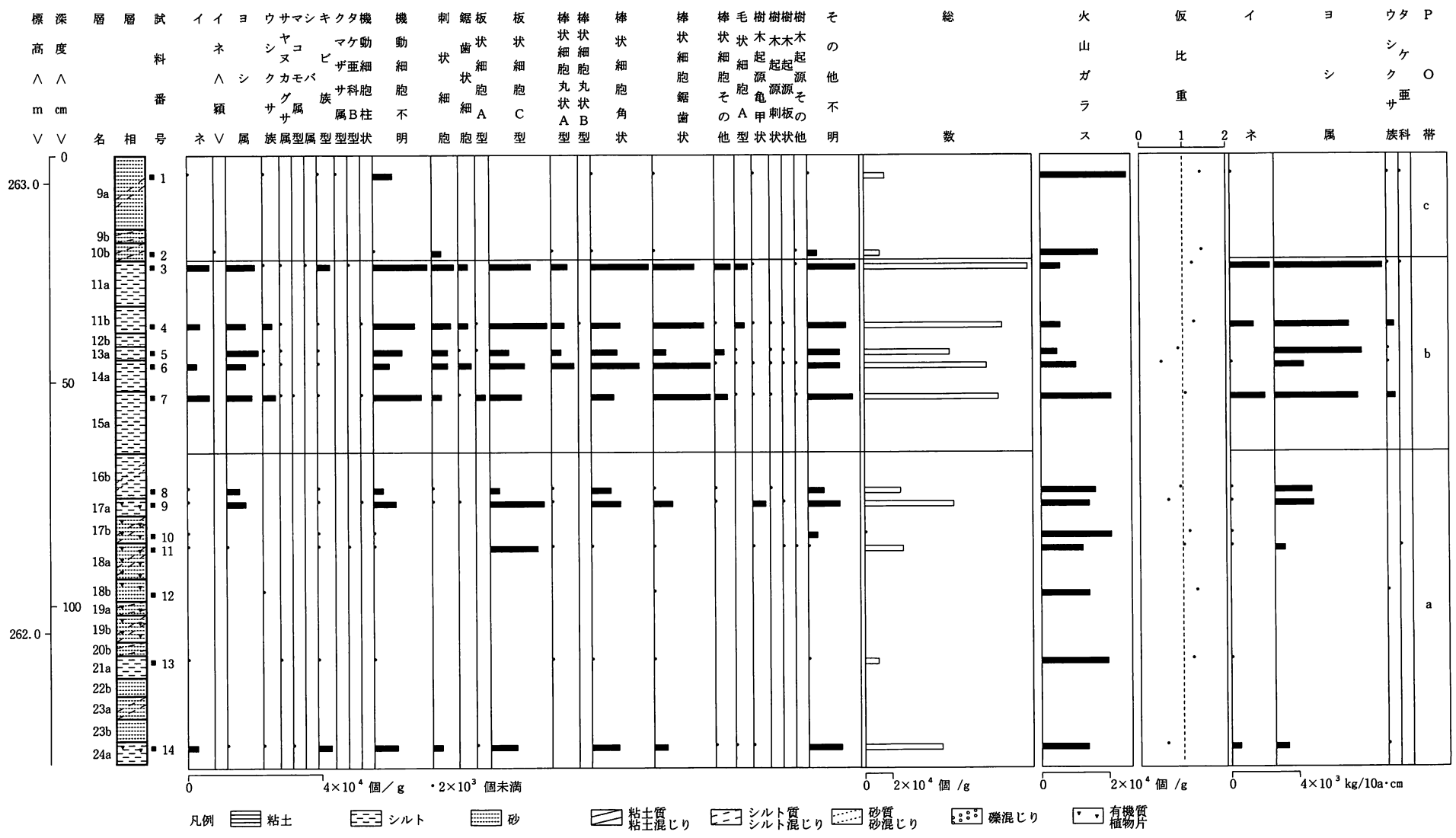
ここでは、両調査区の地層の堆積状況やプラント・オパール分析の結果に基づいて、当遺跡の地形環境や土地条件の変化、土地利用の状況などを下位の層準よりみることにしたい。

1）1区G地点

有機質のシルト層で構成される32ａ層は、ヨシ属の検出にみられるように安定してやや低湿な環境のもとで生成されたものである。こうした微凹地の地形環境であったところは、その後29ｂ層～31ｂ層にかけて河川の氾濫による一時的な堆積を受けたとみられ、細砂や粗砂が厚く堆積する。さらに、24ａ層～28ｂ層のｂ帯層準になると地層は細かな堆積を繰り返しており、当遺跡周辺の地形環境の著しい変化が伺われる。そして、プラント・オパールの僅かな検出状況にみられるように、土地条件はやや不安定であった。また、24ａ層ではカヤツリグサ科と考えられるプラント・オパールが一時的に増加をすることから、より低湿な環境に変わっていったとみられる。その後、22ｂ層と23ａ層のｃ$_1$帯層準ではヨシ属の増加とともにイネの検出をみており、稲作はこうした低湿な環境のもとで始められたようである。なお、イネの出現し始める23ａ層中には弥生時代中期の土器が包含されており[6]、甲府盆地西部の扇状地における稲作開始期の下限がつきとめられた。さらに、17ａ層～22ａ層のｃ$_2$帯層準になると低湿でやや安定した環境が続き、稲作も継続されている。



第190図　プラント・オパール分析結果－１区Ｇ地点



第191図　プラント・オパール分析結果－２区Ａ地点

2）2区A地点

16b層～24a層のa帯層準では、地層の堆積環境が著しく数cmごとに層相が変わる。プラント・オパールの検出状況もこうした地層の変化に対応して増減を繰り返す。なお、24a層からイネが検出されているが、同層は細砂層で被覆されていることから、水田址の埋積されている可能性が示唆される。発掘調査区の1区と2区との層序関係が対応するならば、同層は弥生時代中期あるいはそれをさらに遡ることが考えられる。このように、御勅使川扇状地においては、早い段階から稲作を生業の一つとする集団の存在が確認された。甲府盆地では、八代町の身洗沢遺跡[7]で弥生時代後期、韮崎市の宮ノ前遺跡[8]で同前期の水田址が発掘されて以来、各地で弥生時代以降の稲作の痕跡が明らかになっている[9]。

古期扇状地を開析した谷状地形に当遺跡は位置し、またそこは湧水帯となっている。こうした自然条件を生かして初期の水田は拓かれていたとみられる。当遺跡は、水田が営まれるための好条件を有しており、天川扇状地の扇端部に位置する八代町の身洗沢遺跡と同様の立地環境である。御勅使川扇状地では、こうした地形環境のもとに十五所遺跡、向河原遺跡、油田遺跡、住吉遺跡、大師東丹保遺跡などの弥生時代の集落が形成されている[10]。

次に、11a層～15a層のb帯層準になると、地層はシルト層に変わり、プラント・オパールの検出数や量も増加して低湿でやや安定した土地条件となる。またイネの検出量も増えることから、1区G地点と同様の環境において稲作が営まれたと考えられる。なお、11a層の上面からは平安時代後半～鎌倉時代の水田址が検出されている。

その後、9a層～10b層のc帯層準になるとシルト質細砂層に変わり、プラント・オパールの検出数は急減する。こうしたことから、同層準では上流域からの土砂の供給を受けて土地条件は不安定になったとみられる。なお、9a層の上面からは室町時代の水田面が検出されているが、畦畔状遺構の部分で試料を採取しているためかイネは少ない（第189図）。

ところで、各試料の仮比重をみると、層相により大きな違いがみられる。とりわけ、2区A地点の試料6の14a層、試料9の17a層、試料14の24a層の仮比重が低い（第191図）。これらはいずれも植物遺体を多量に含有する有機質層からなっており、プラント・オパールの検出数は比較的多い。他方、鉱物を多く含む層準では仮比重は高い。そこでは、プラント・オパールは少なく火山ガラスが多数みられる傾向を示している（第190図・第191図）。

なお、こうした火山ガラスの出現傾向とプラント・オパールの検出総数とは必ずしも対応していない。二次扇状地（開析扇状地）という当遺跡周辺の地形環境を踏まえると、それまでに降灰した火山灰が再堆積したものと考えられる。なお、これらの火山ガラスは、当遺跡の位置から八ヶ岳や富士、箱根、御岳等周辺の火山の噴出の影響を受けているとみられる。

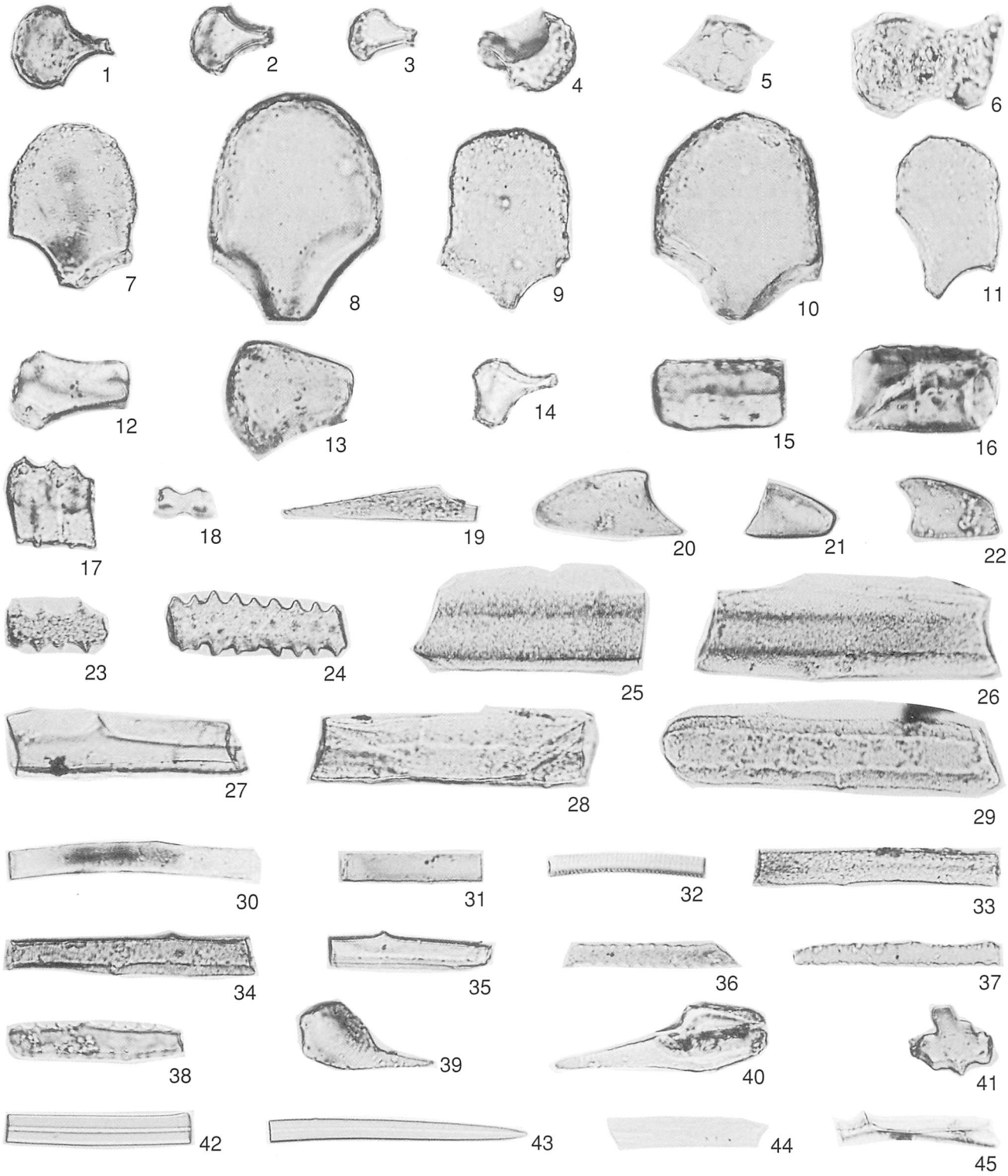
6　おわりに

地形分析とプラント・オパール分析の成果に基づいて、当遺跡の立地環境を検討した結果、以下の諸点が明らかになった。まず、当遺跡は甲府盆地の御勅使川の古期扇状地を開析した谷状地形に、滝沢川が二次扇状地（開析扇状地）を形成している。また、こうした地形環境を反映して層相変化は著しく、微凹地は河川の氾濫を受けて一時的に埋積されている。さらに、地層の堆積環境に対応して、土地条件は比較的低湿でしかも不安定とやや安定を繰り返している。そして、湧水帯に位置する当遺跡では、こうした地形環境を利用して稲作が営まれており、その時期は弥生時代中期あるいはそれをさらに遡る可能性がある。各地の農耕遺跡では、旧河道や浅谷といった微凹地の低湿地が稲作開始当初の水田造営の場として選ばれているが、当遺跡の分析の結果は

扇状地における初期水田の典型的なあり方を示していると言えよう。

註

1）高木勇夫・中山正民（1983）「甲府盆地西部地域の地形」日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要　第18号
2）a中山誠二・丸山哲也（1996）「二本柳遺跡」山梨県埋蔵文化財センター『年報８』
　b中山誠二・小林健二（1997）「二本柳遺跡」山梨県埋蔵文化財センター『年報９』
　c中山誠二（1998）「二本柳遺跡」山梨県『山梨県史　資料編１　原始・古代１』
3）中山誠二（1996）「甲府盆地の埋没条里」条里制研究　第12号
4）外山秀一（1995）「池島・福万寺遺跡の立地と環境Ⅰ」（財）大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸⅠ』
5）なお、洪水層と考えられるｂ層については、その下部において試料を採取すべきであるが、１区Ｇ地点では当初21ｂ層は12層、22ｂ層は14層とされていたために、ここでは両層の上部において採取している。
6）山梨県教育委員会中山誠二氏のご教示による。
7）山梨県教育委員会（1990）『身洗沢遺跡・一町五反遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第55集
8）a平野修・外山秀一「弥生前期の水田址」帝京大学山梨文化財研究所報　第10号
　b韮崎市遺跡調査会他（1992）『宮ノ前遺跡』
9）a中山誠二（1993）「山梨県における稲作関連遺跡調査の現状」山梨県考古学協会誌　第６号
　b中山誠二（1994）「弥生・古墳時代」山梨県考古学協会『食べものの考古学』山梨考古　第49号
10）山梨県（1998）「山梨県主要遺跡分布図」前掲２）c

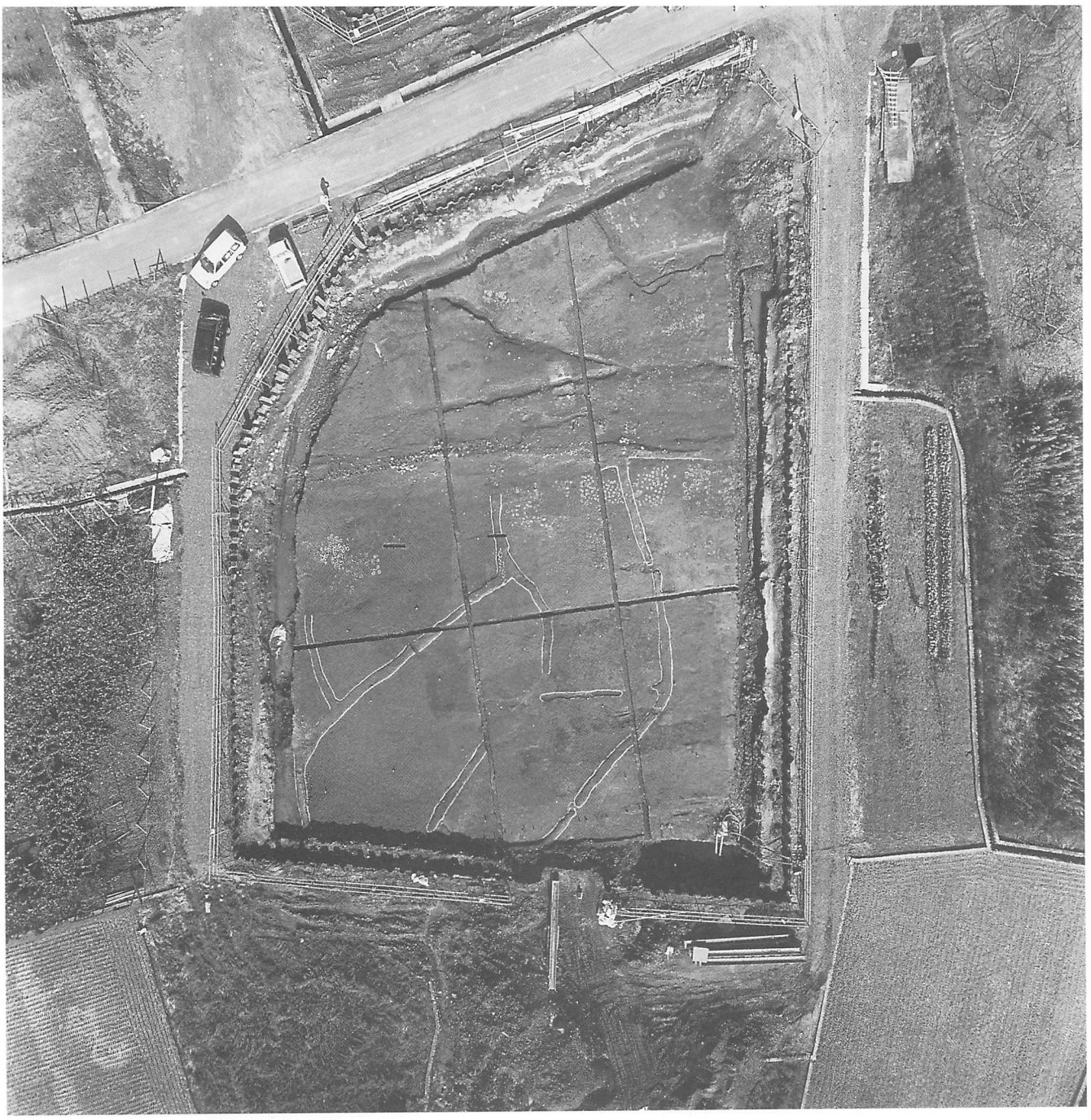


1～4	イネ	5・6	イネモミ	7～11	ヨシ属
12・13	ウシクサ族	14	シバ属	15・16	キビ族型
17	ネザサ節型	18	繭状細胞	19～22	刺状細胞
23・24	鋸歯状細胞	25～29	板状細胞C型	30・31	棒状細胞丸状A型
32	棒状細胞丸状B型	33～35	棒状細胞角状	36～38	棒状細胞鋸歯状
39・40	毛状細胞A型	41	樹木起源その他	43・43	動物珪酸体
44・45	火山ガラス				

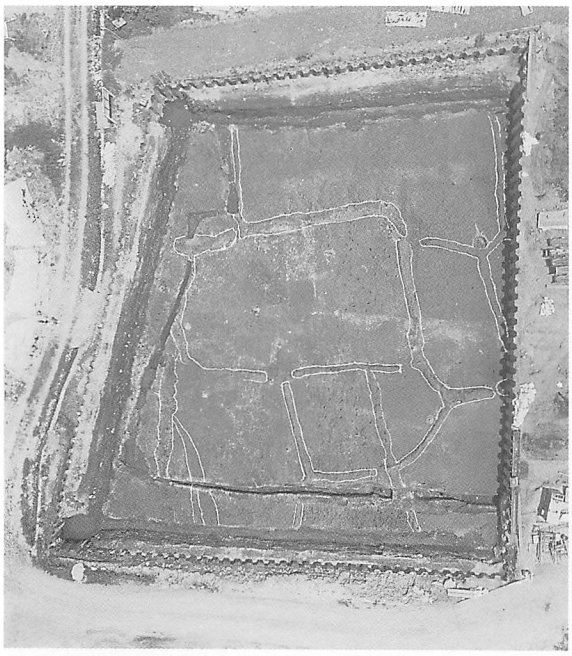
（×100）

図版32　プラント・オパール　その他

図　　版



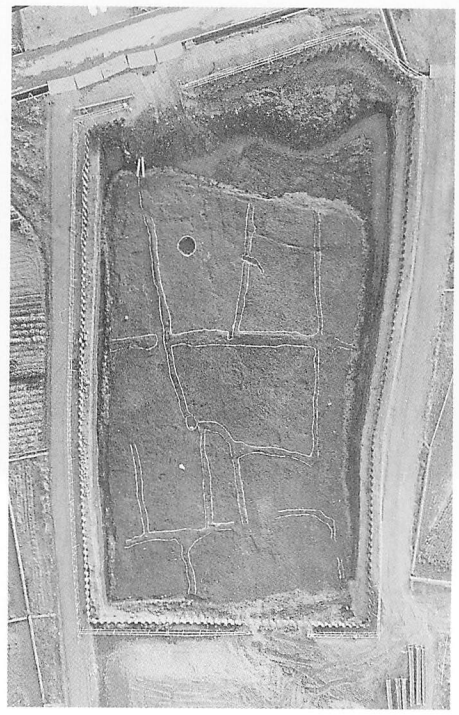
1区全景



２Ｂ区上層水田全景

２Ｂ区下層水田全景

２区上層水田全景



２区下層水田全景

4区上層水田全景

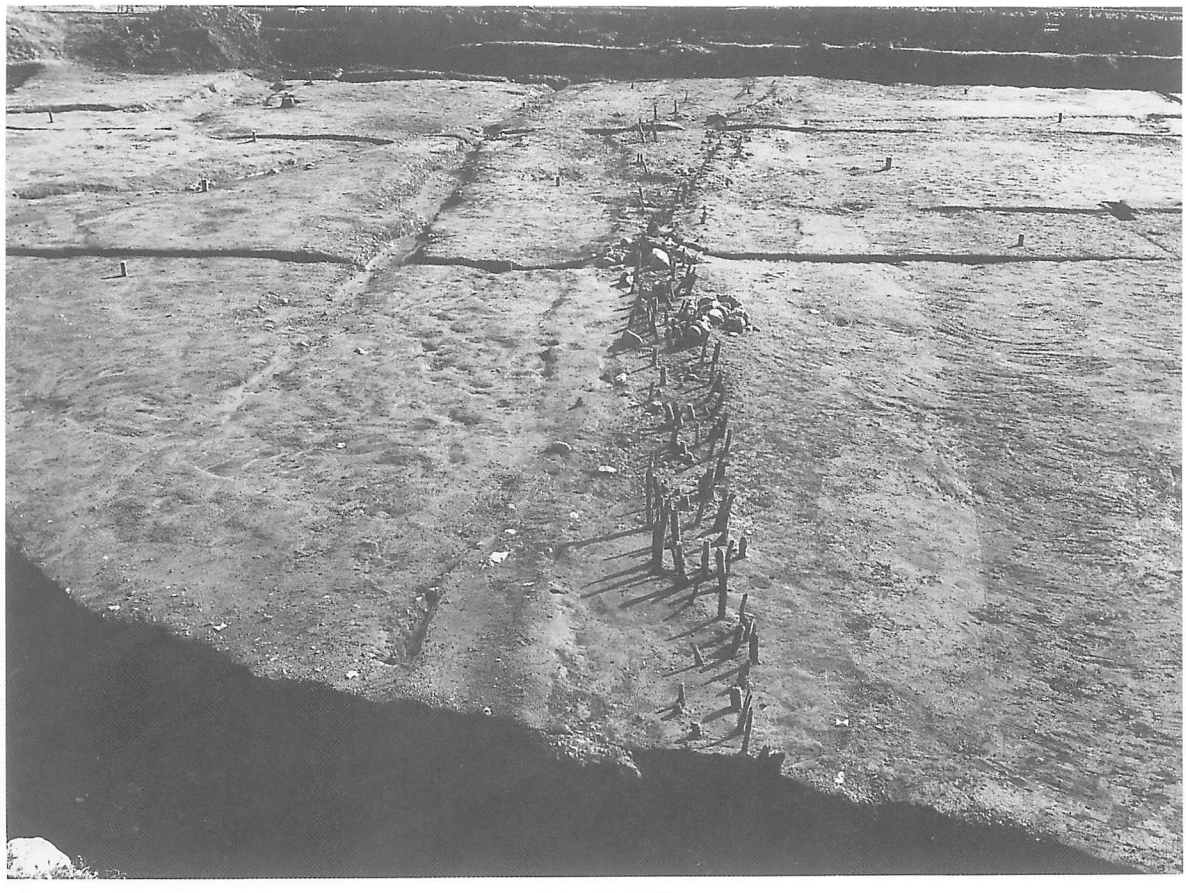
3区下層水田全景

3区上層水田全景

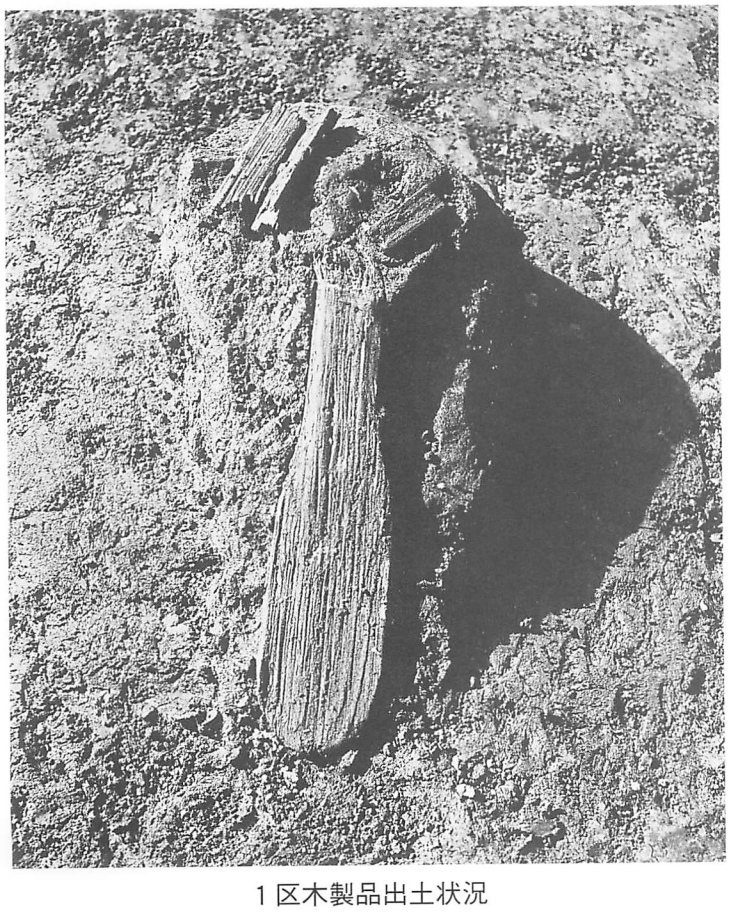
4区下層水田全景

1区水田址（西から）

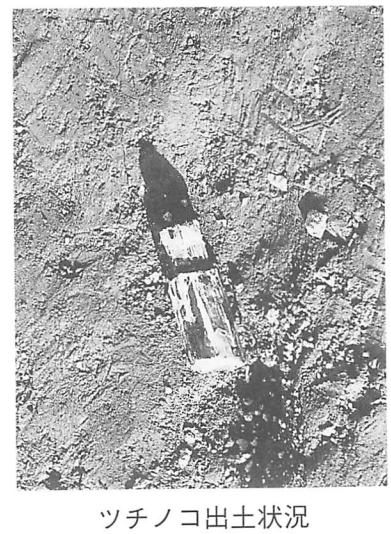
1区水田址（南から）・3号杭列



1区2号杭列

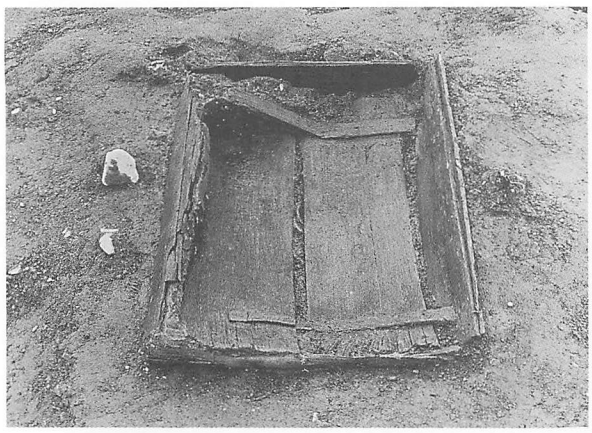


1区木製品出土状況

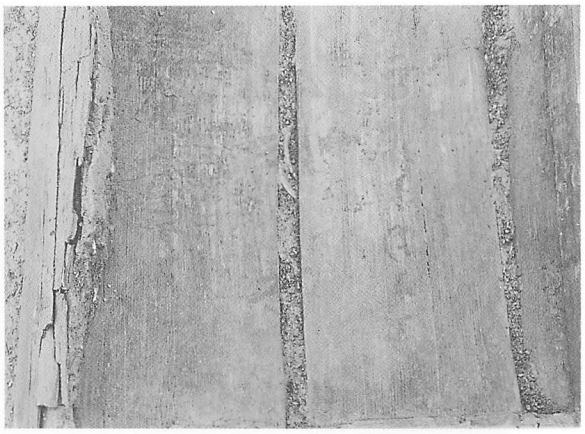


ツチノコ出土状況

図版38



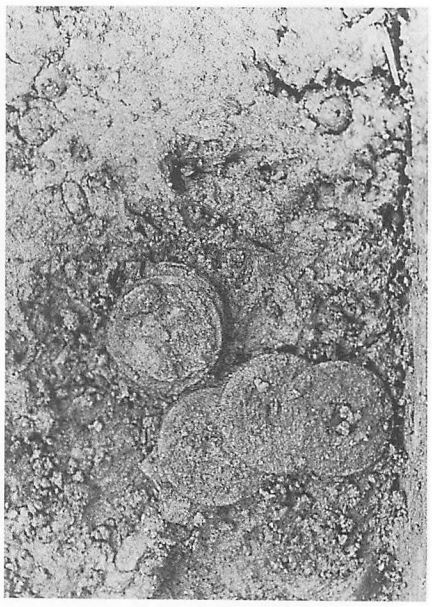
２Ｂ区１号木棺検出状況



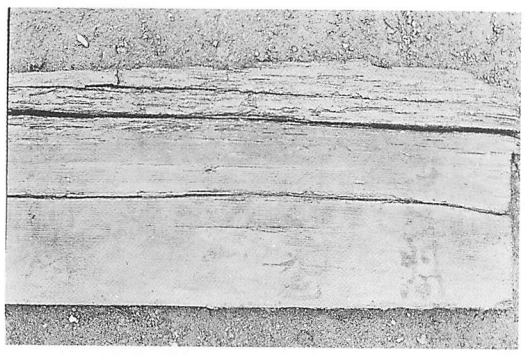
２Ｂ区１号木棺蓋

２Ｂ区１号木棺拡大

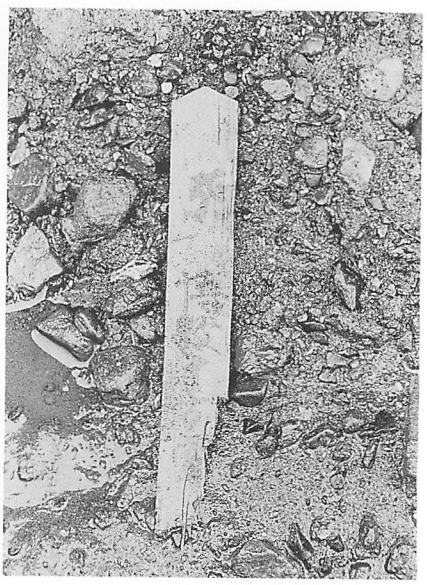
２Ｂ区１号木棺遺物出土状況



２Ｂ区１号木棺内古銭出土状況



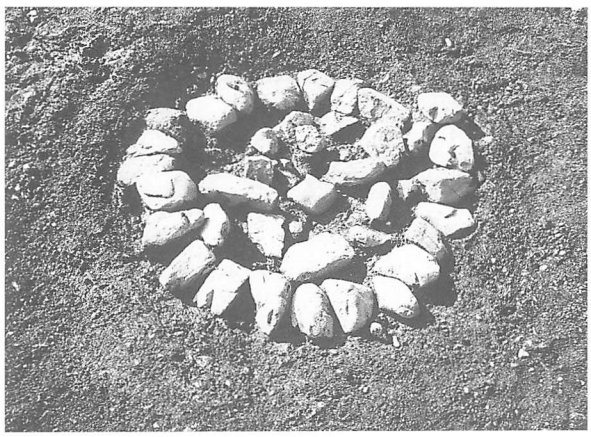
２Ｂ区１号木棺側板墨書



２号木棺出土呪符木簡

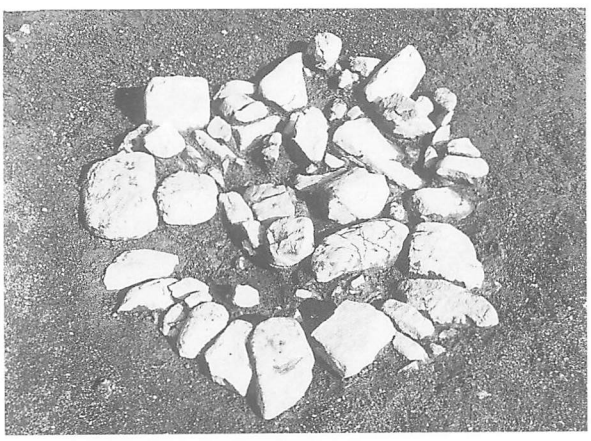
1 号井戸検出状況

1 号井戸遺物出土状況



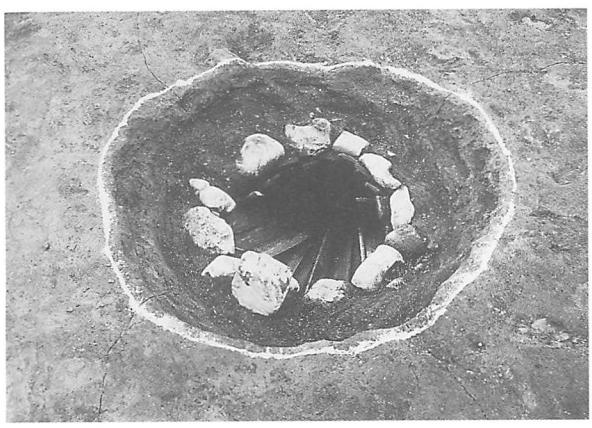
2 号井戸検出状況

6 号井戸検出状況

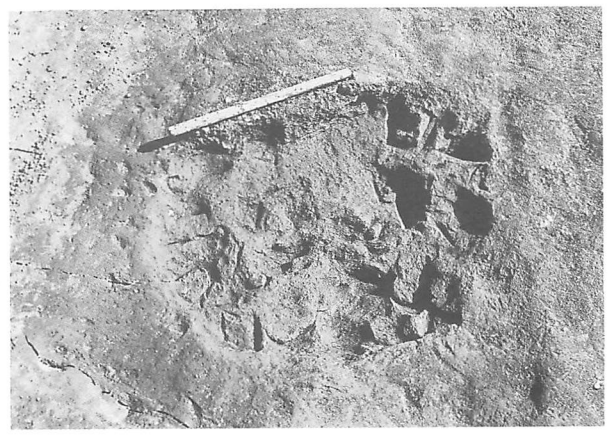


3 号井戸検出状況

7 号井戸検出状況



5 号井戸検出状況



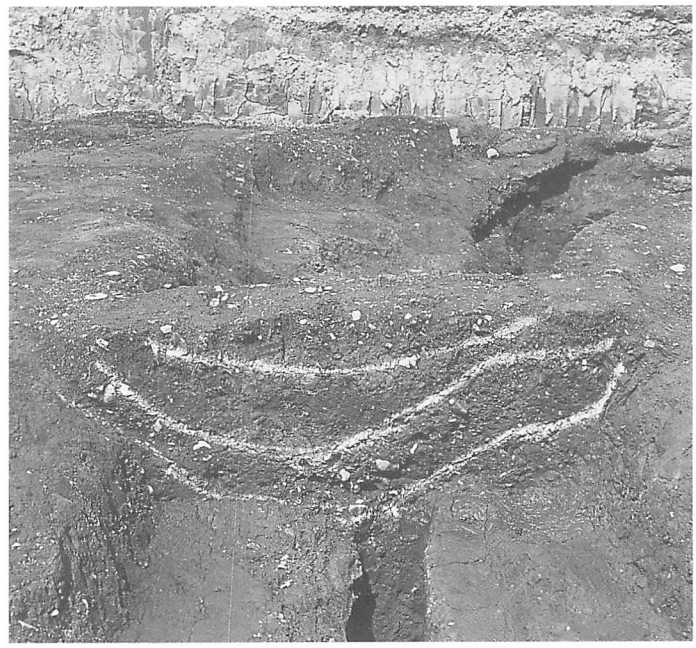
5 号井戸遺物出土状況

図版40

2区2号溝検出状況（東側より）

2区2号溝検出状況（南側より）

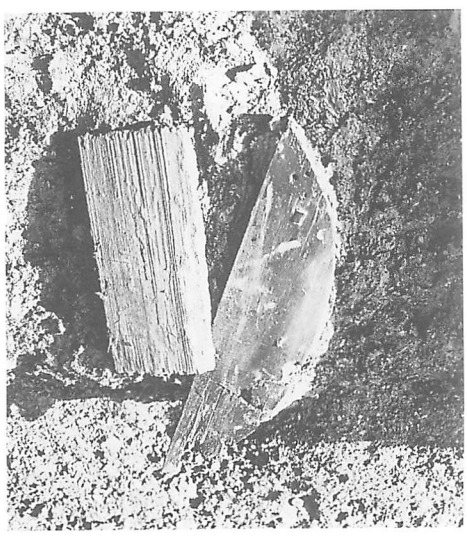
2区2号溝C—C'セクション



2区2号溝D—D'セクション

2区2号溝五輪塔出土状況

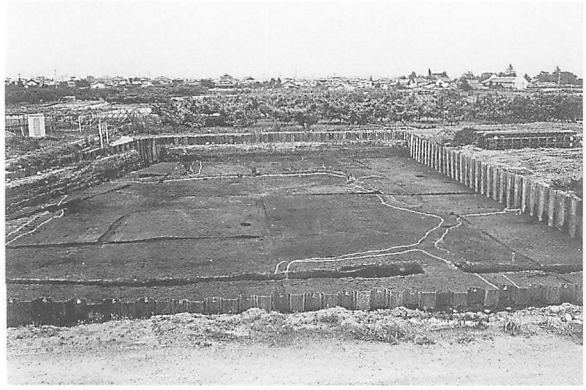
2区2号溝遺物出土状況



2区上層木製品出土状況

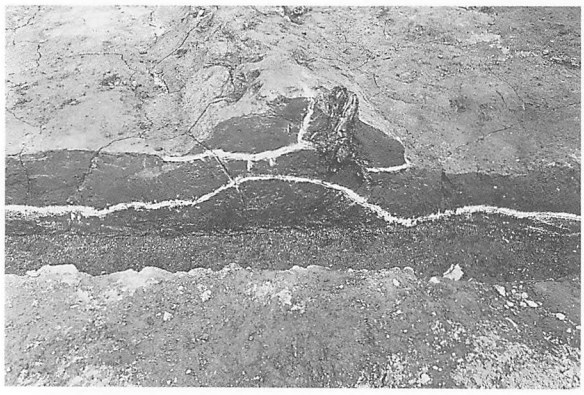
2区上層漆椀出土状況

図版42

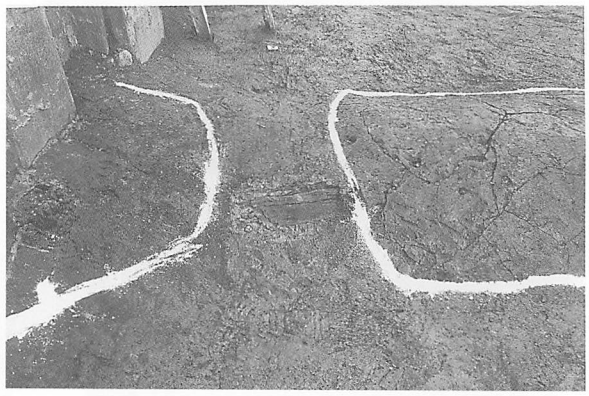


２Ｂ区水田

２Ｂ区調査風景

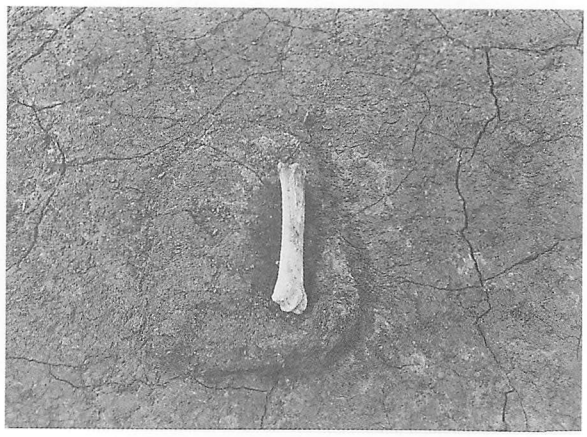


２Ｂ区畦畔セクション



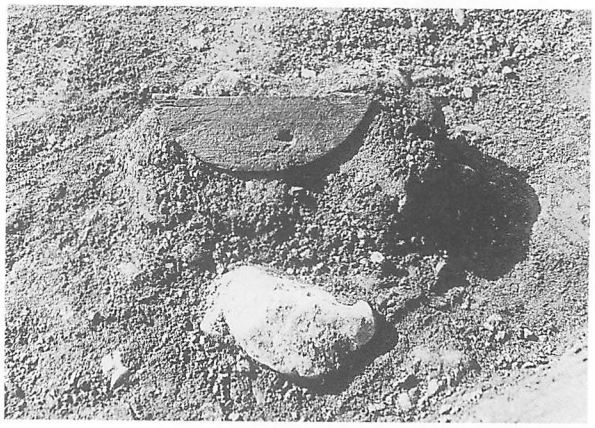
２Ｂ区14号水口

２区８号水口・馬の下顎骨検出状況



２区下層水田遺物出土状況

２区北側炭化物集中区検出状況

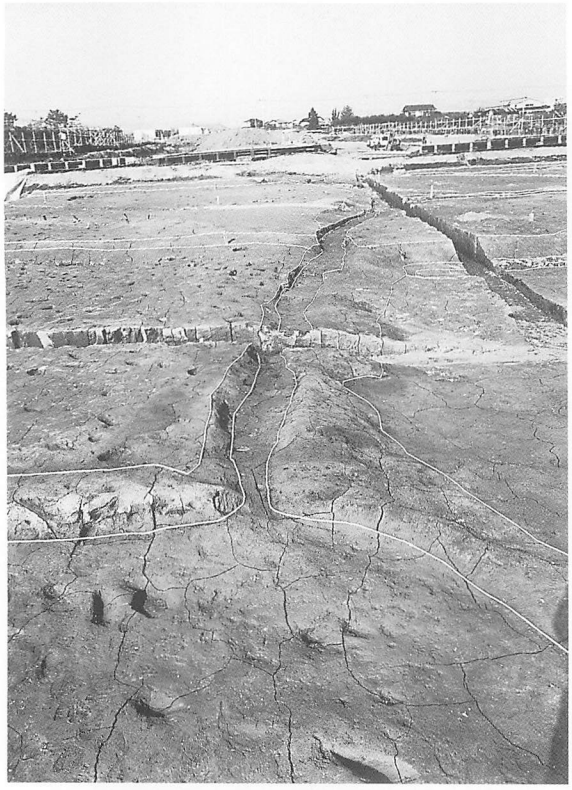


２区下層木製品出土状況

3区上層水田

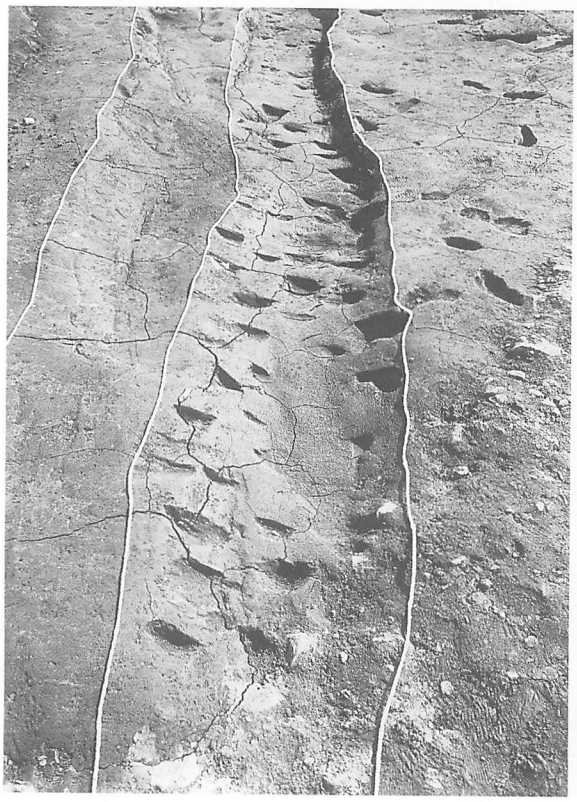
3区下層水田畦畔木列

図版44

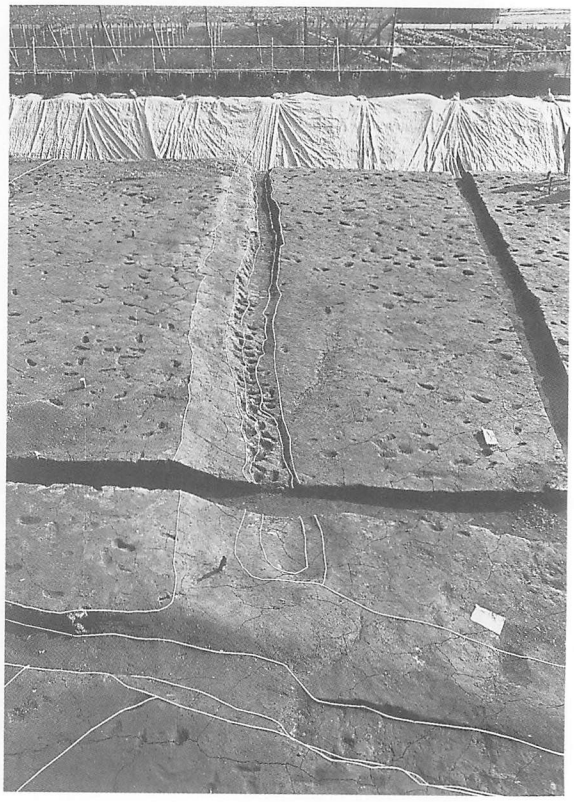


3区2号溝

3区6号溝



3区5号溝



3区3号溝

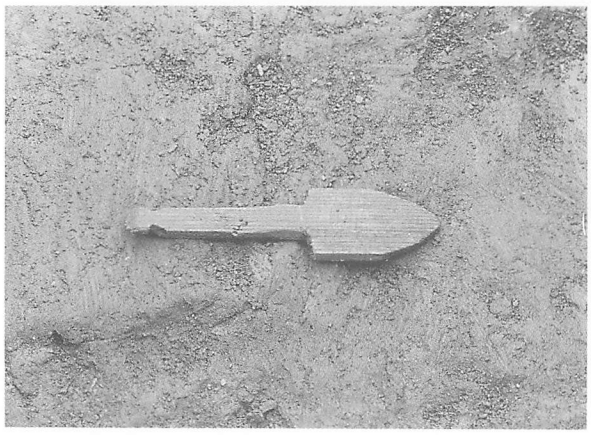
4 区上層水田

4 区下層水田

図版46

4区下層26号水田

4区下層水田水口1・2



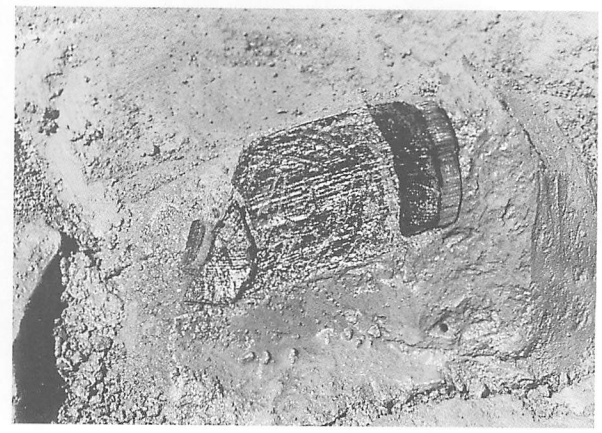
4区下層水田鏃形木製品

4区下層水田動物骨

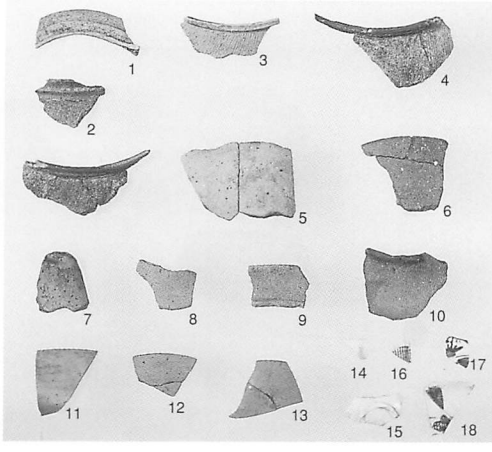
4区作業風景

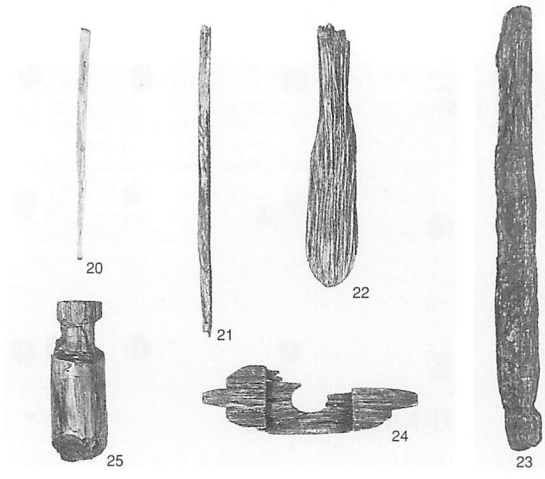
4区　下層1号溝検出状況

4区下層水田火きり臼出土状況



4区下層水田漆椀



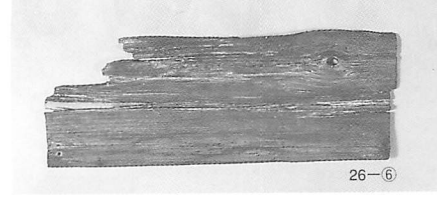


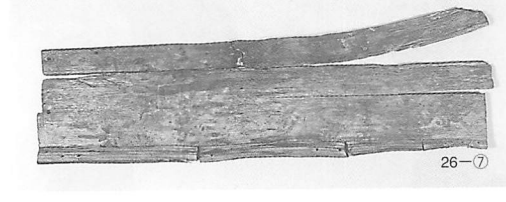
26—③

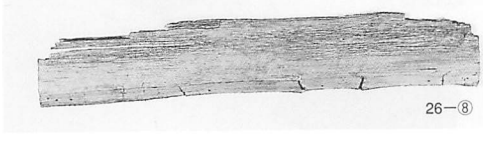
26—④

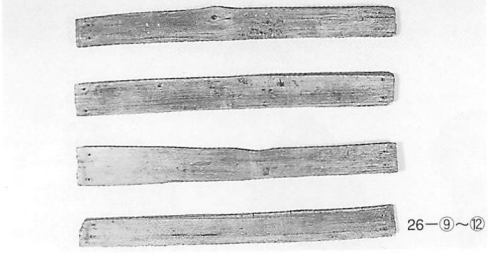
26—①
26—②

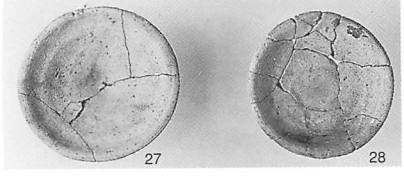
26—⑤

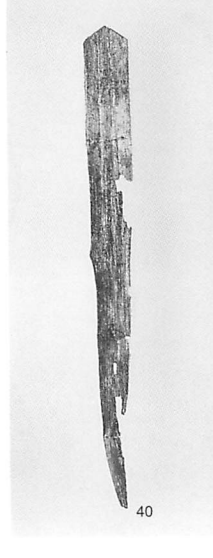

26—⑥

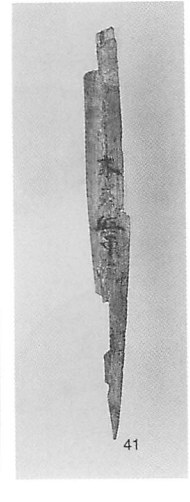

26—⑦


26—⑧

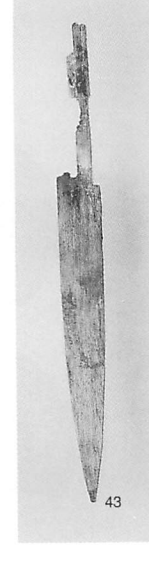

26—⑨～⑫


27
28

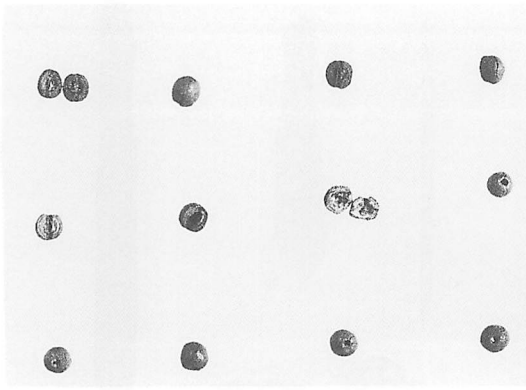

40

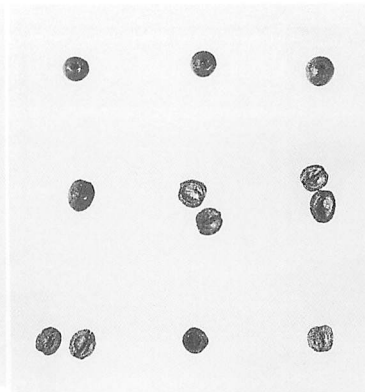

41

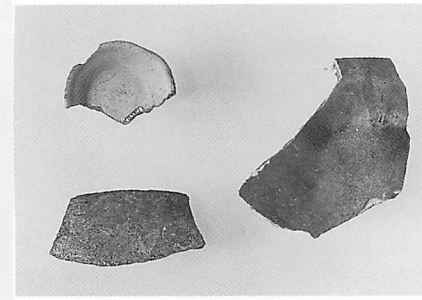
42


43

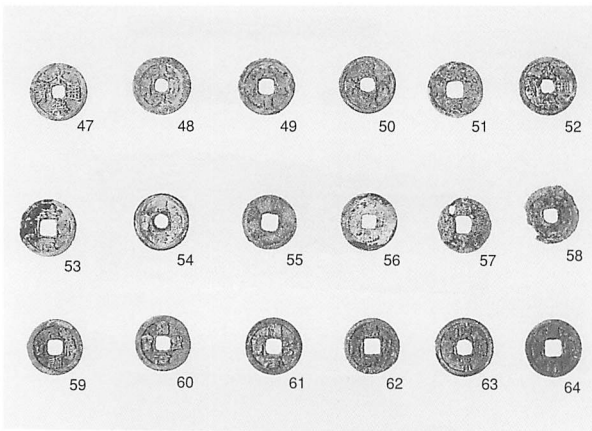
出土遺物（1）

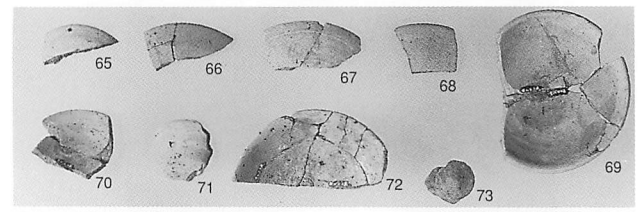


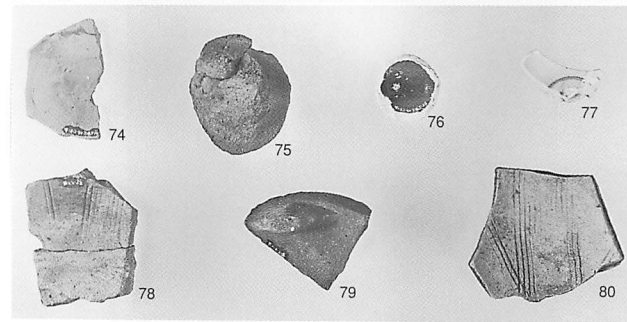


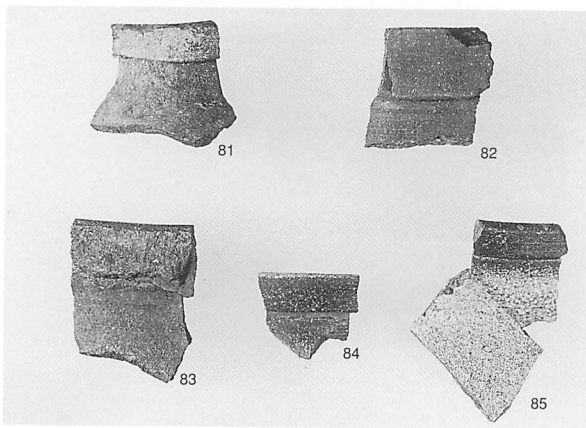


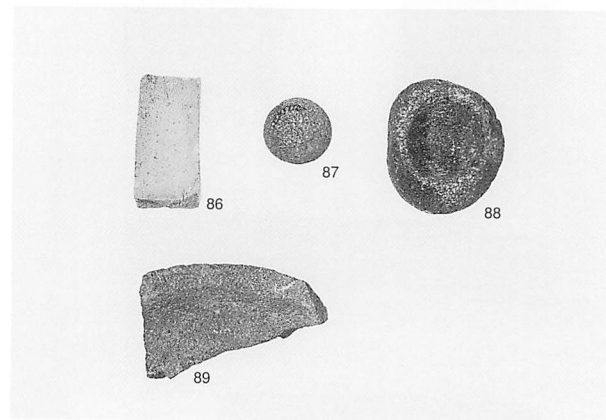
1号木棺出土数珠玉　29～39

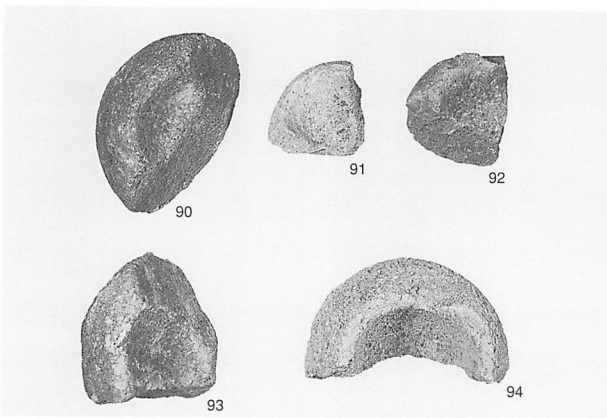


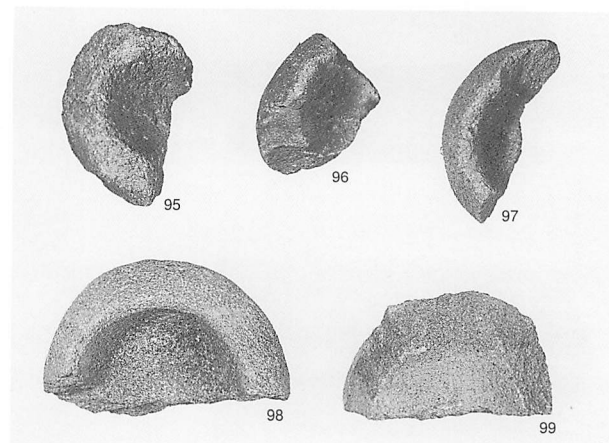




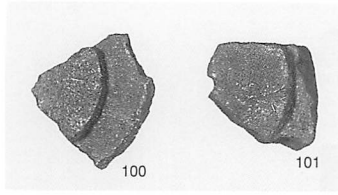


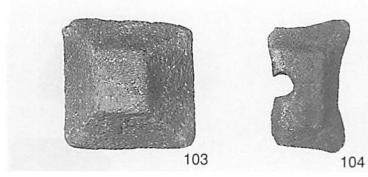


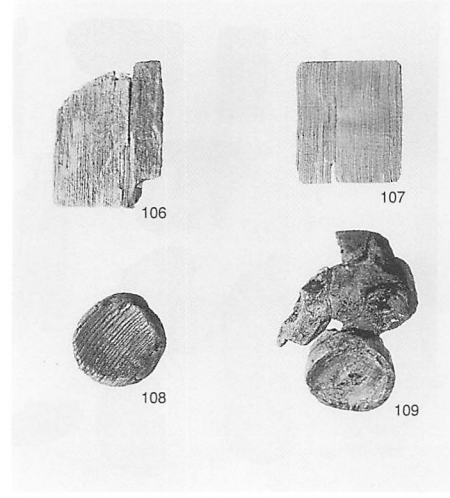




出土遺物（2）

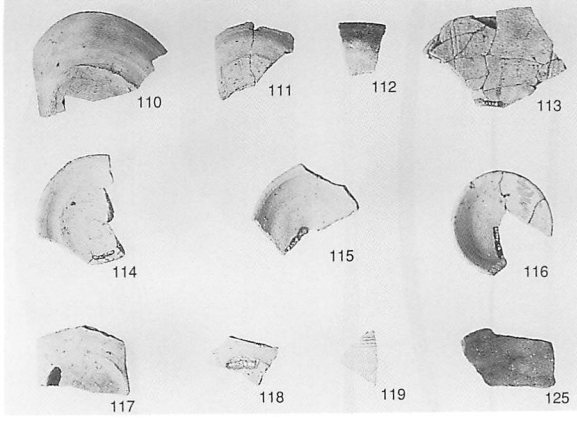

100
101

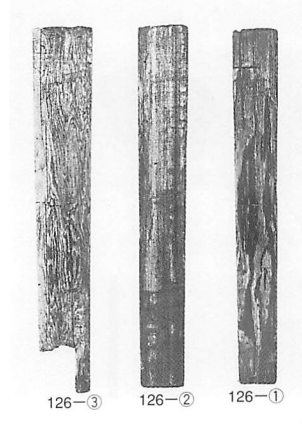

103
104

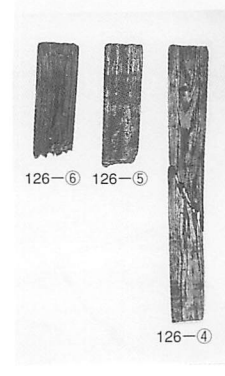

106
107
108
109

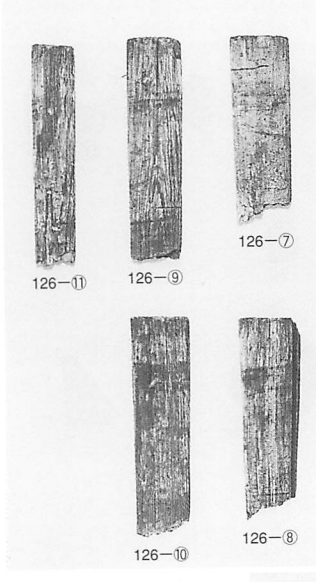
102

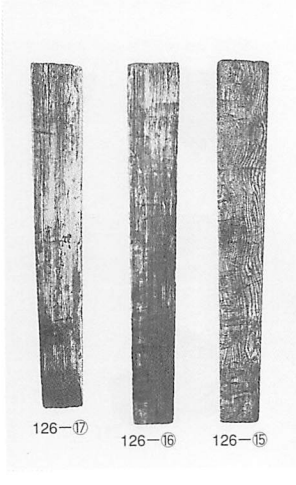
105
122

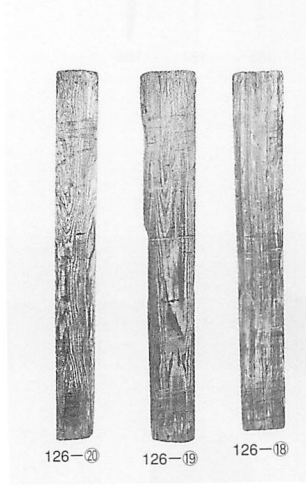

110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
125

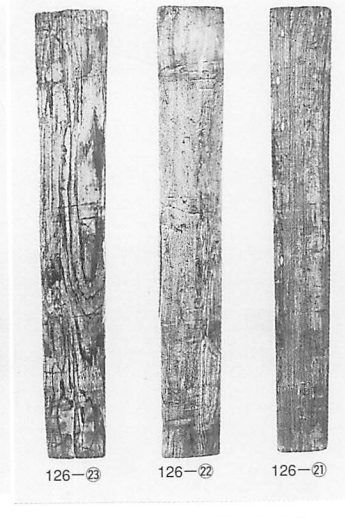

126—③
126—②
126—①

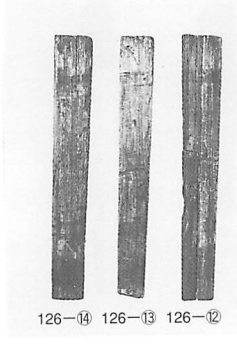

126—⑥
126—⑤
126—④

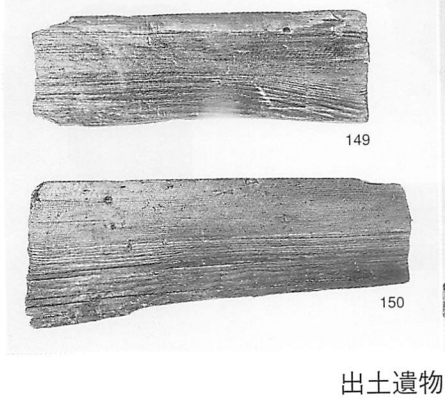

126—⑪
126—⑨
126—⑦
126—⑩
126—⑧

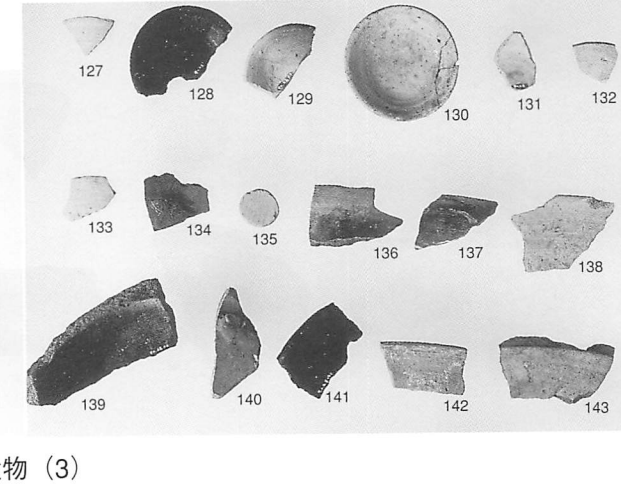

126—⑰
126—⑯
126—⑮


126—⑳
126—⑲
126—⑱


126—㉓
126—㉒
126—㉑

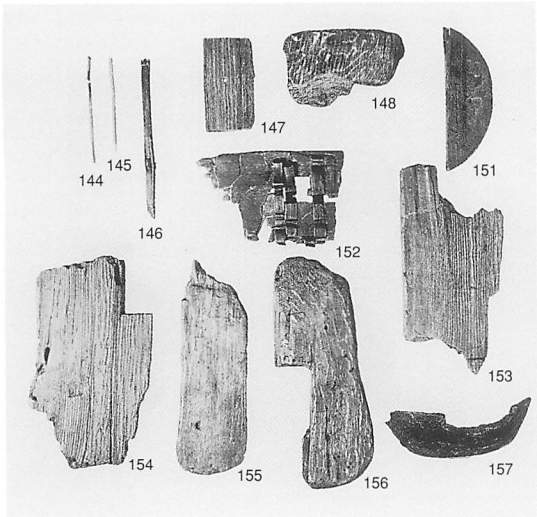

126—⑭
126—⑬
126—⑫

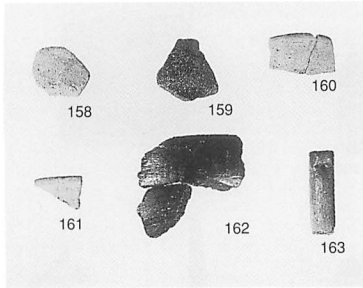

149
150

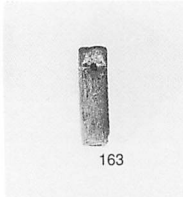

127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143

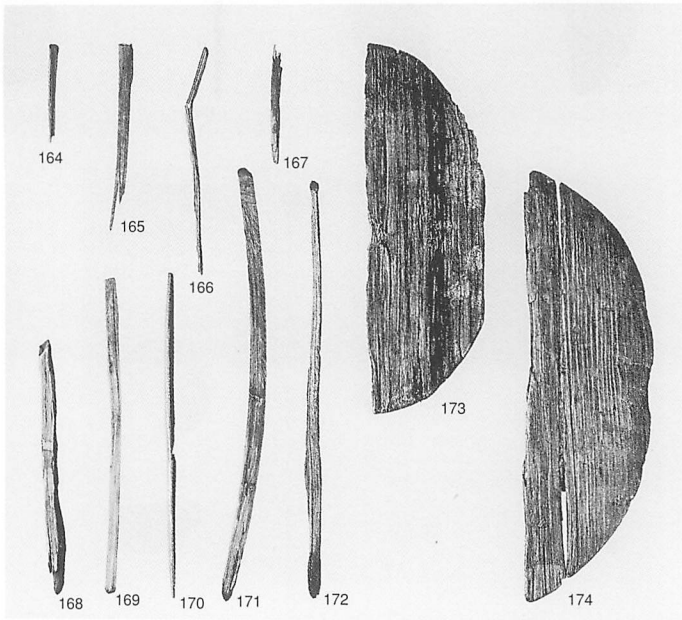
出土遺物（3）

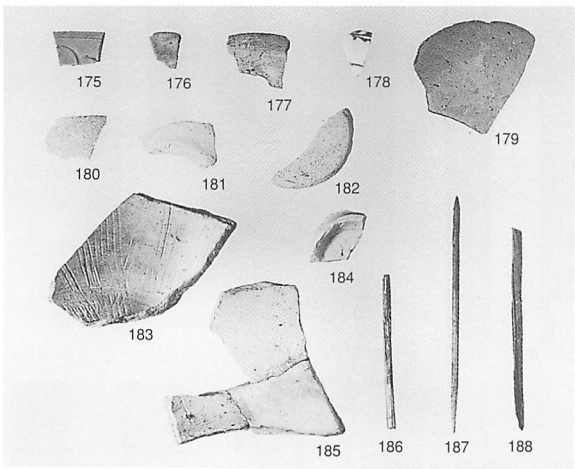
図版50

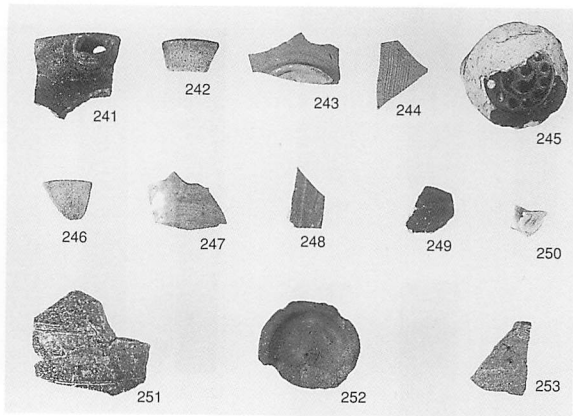

144
145
146
147
148
151
152
153
154
155
156
157

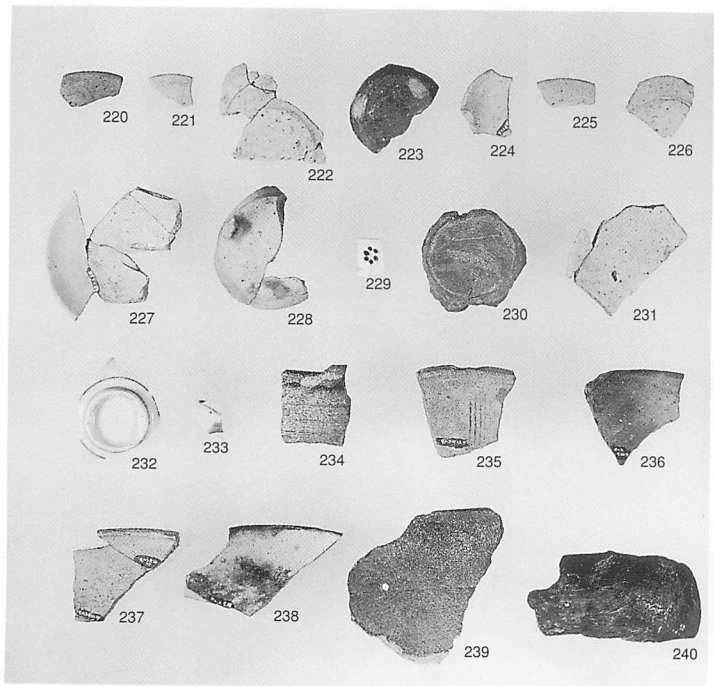

158
159
160
161
162
163

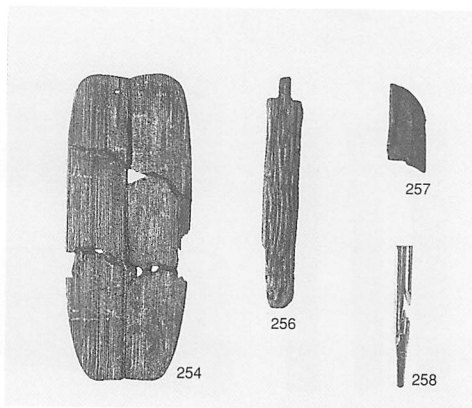

163


164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174

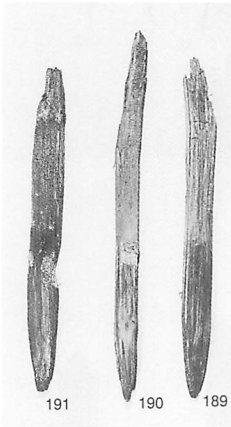

175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188

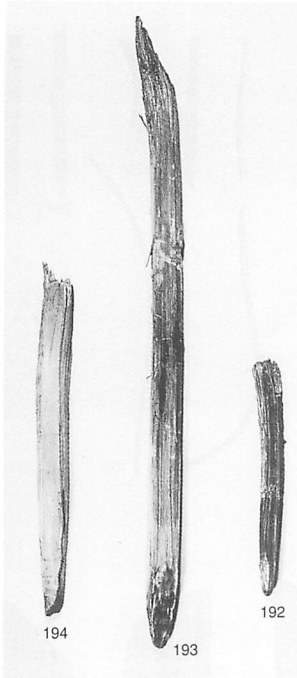

241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253

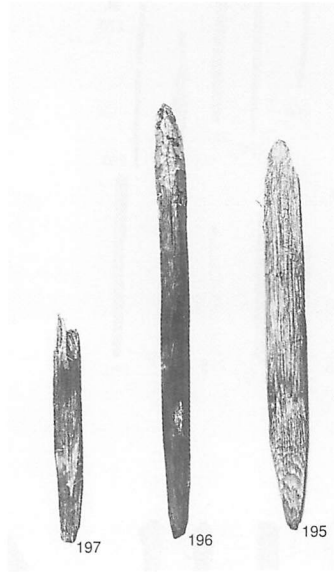

220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240

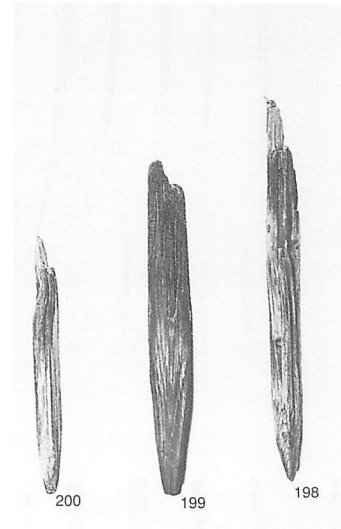

254
256
257
258

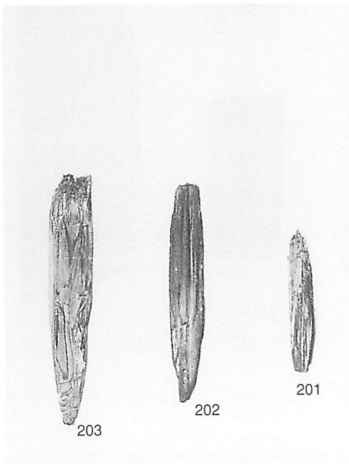
出土遺物（4）

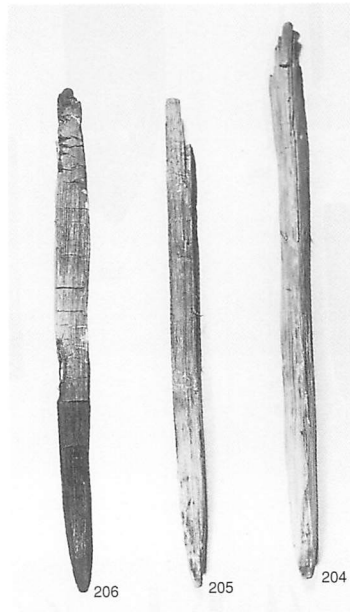

191
190
189

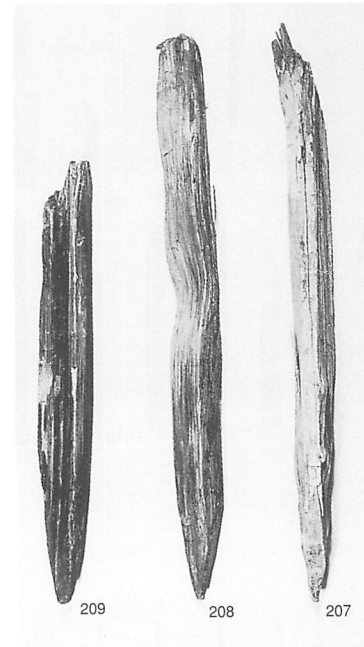

194
193
192

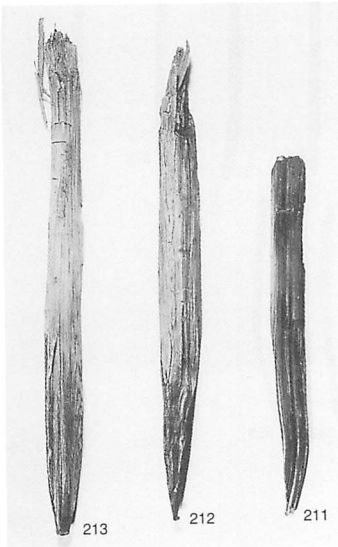

197
196
195

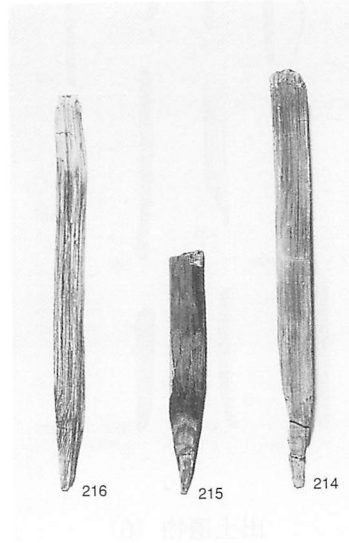

200
199
198

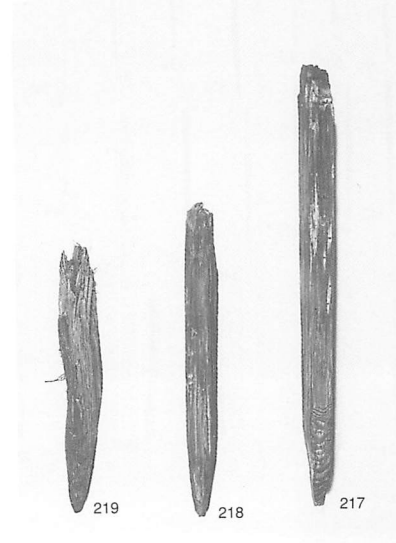

203
202
201


206
205
204

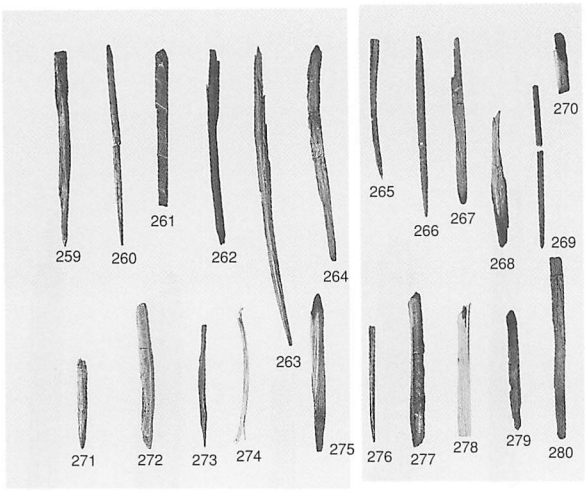

209
208
207

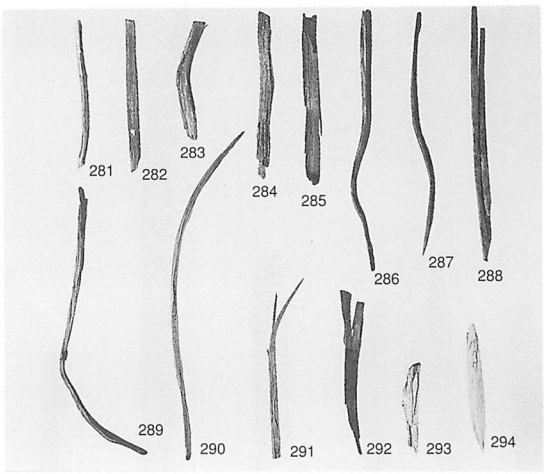

213
212
211

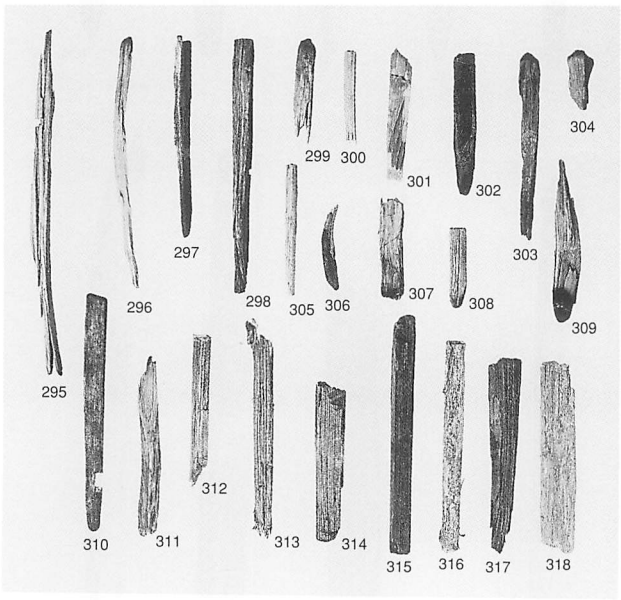

216
215
214

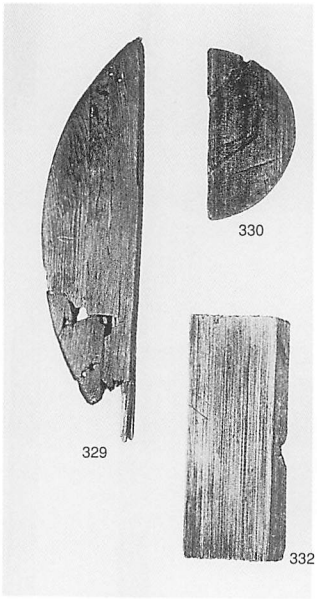

219
218
217

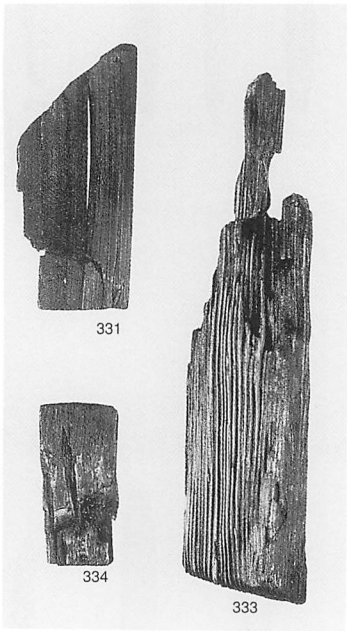
出土遺物（5）

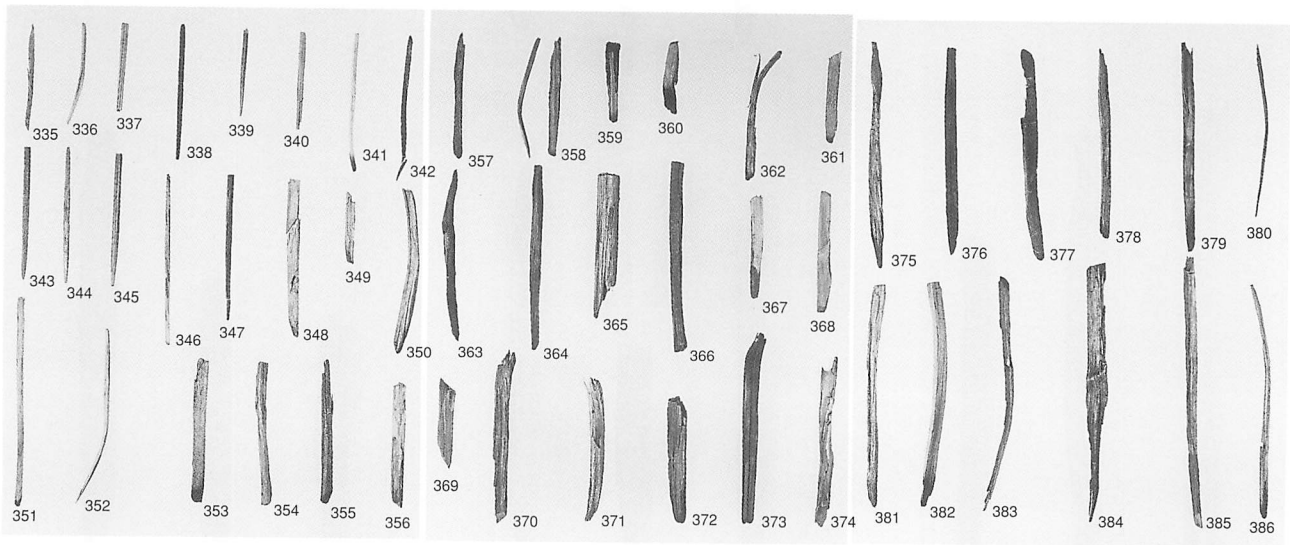

259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280


281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294

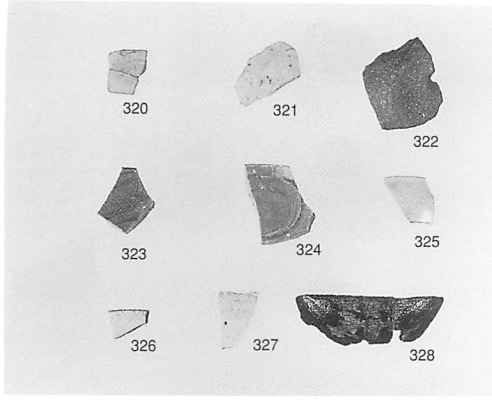

295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318

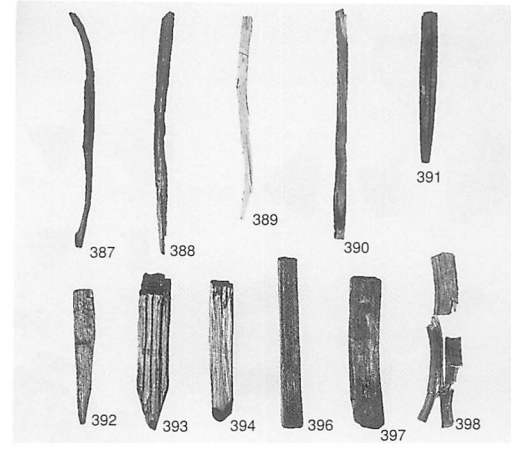

329
330
332

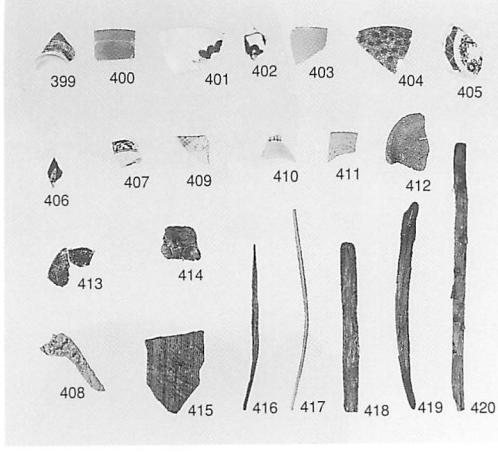

331
333
334

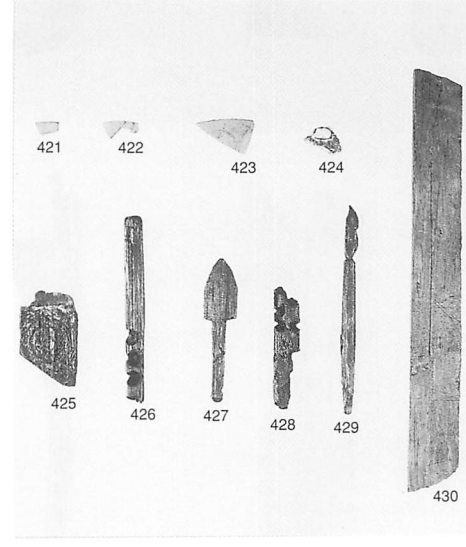

335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386

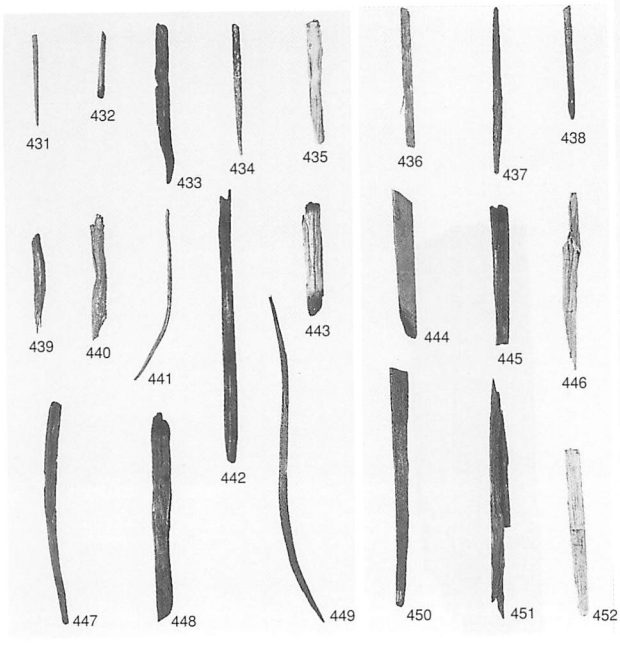
出土遺物（6）

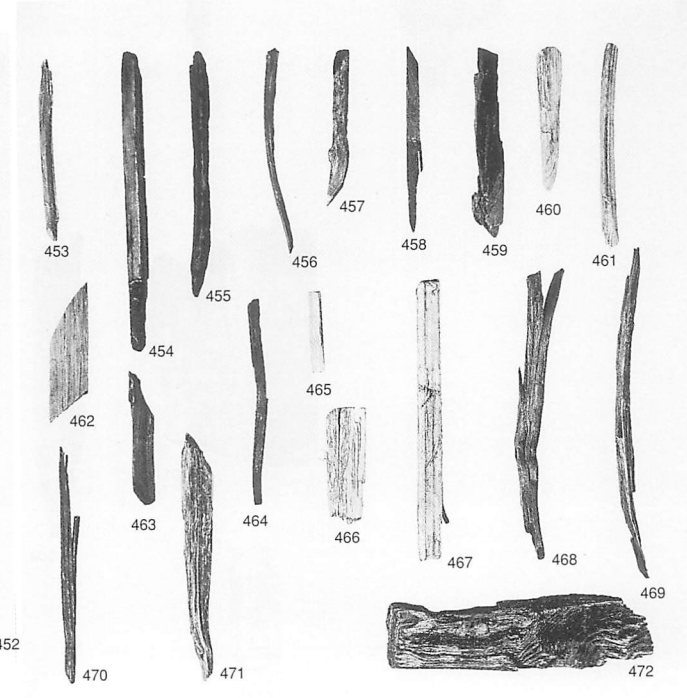

320
321
322
323
324
325
326
327
328


387
388
389
390
391
392
393
394
396
397
398

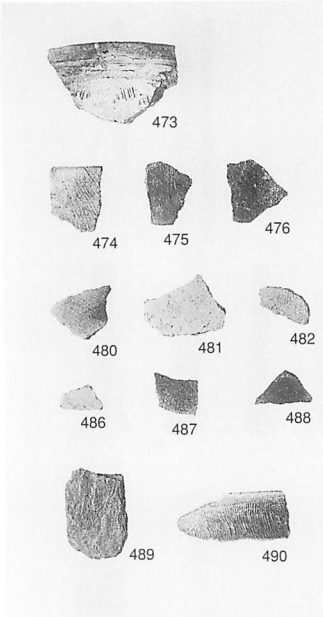

399
400
401
402
403
404
405
406
407
409
410
411
412
413
414
408
415
416
417
418
419
420

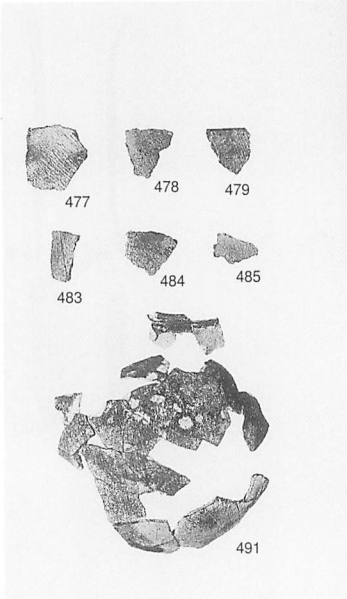

421
422
423
424
425
426
427
428
429
430

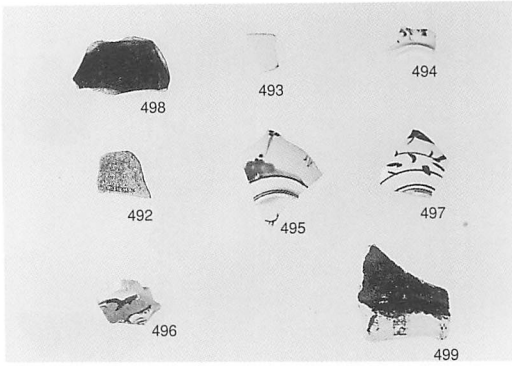

431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452

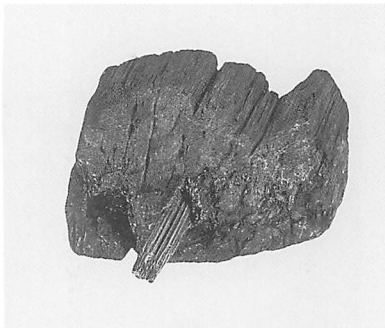

453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472

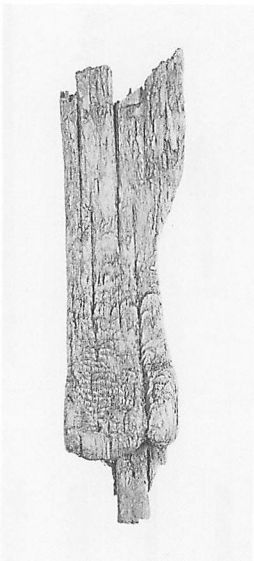
出土遺物（7）

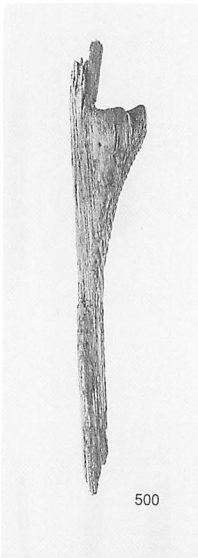

473
474
475
476
480
481
482
486
487
488
489
490

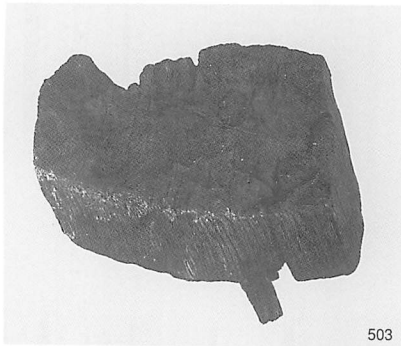

477
478
479
483
484
485
491

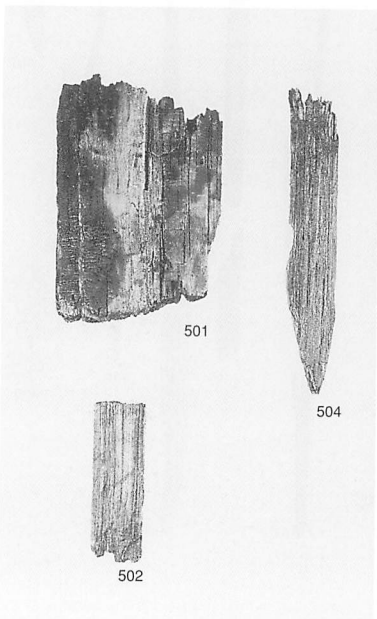

498
493
494
492
495
497
496
499





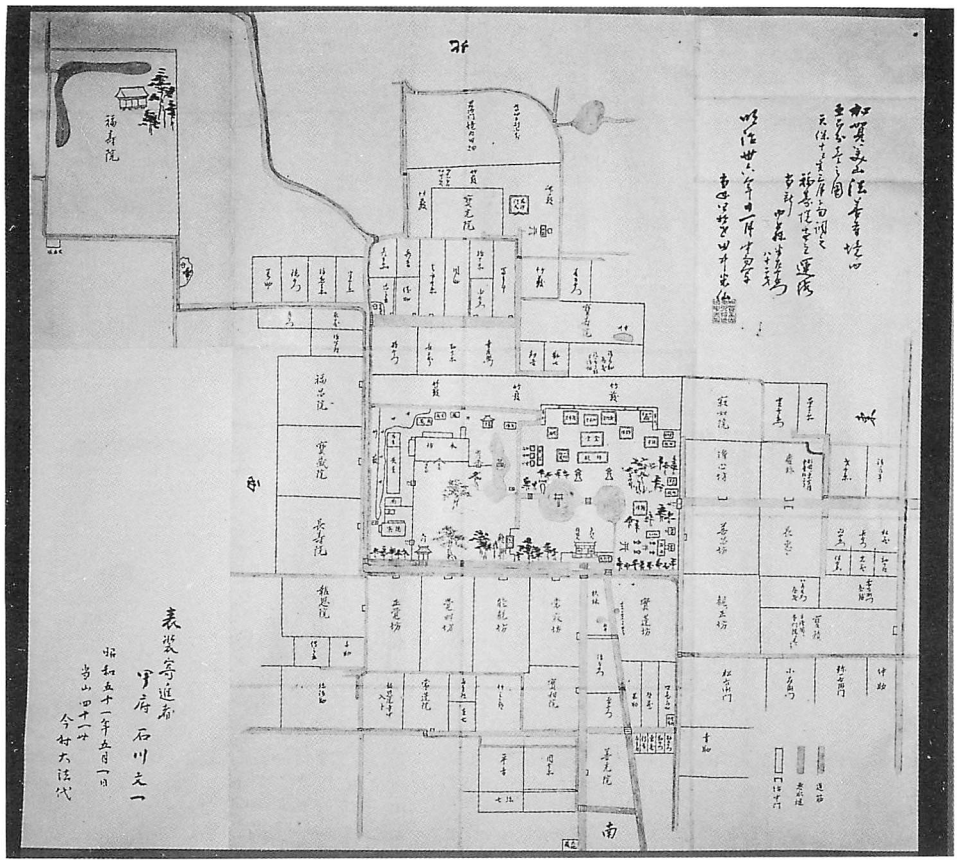

500


503


501
504
502

505

出土遺物（8）



法善寺境内図

発掘調査スタッフ

報告書抄録

ふりがな	にほんやなぎいせき
書名	二本柳遺跡
副題	一般国道52号(甲西バイパス)改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183号
著者	中山誠二・小林健二　他
発行機関	山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地／電話	〒400－1508山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL. 055－266－3016
印刷所	株式会社　少国民社
発行日	平成12(2000)年3月31日
遺跡概要	
ふりがな	やまなしけんなかこまぐんわかくさちょうとうかいちばあざにほんやなぎ
所在地	山梨県中巨摩郡若草町十日市場字二本柳
位置	北緯　138°29′　　東経　35°36′
調査原因	一般国道52号線(甲西バイパス)改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財調査
調査期間	第一次調査　平成3(1991)年8月10日～12月27日、第二次調査　平成4年4月14日～12月24日
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査面積	8,500㎡
時期	弥生時代中期、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代
主な遺構	井戸8基、木棺2基、近世水田9面、中世後期水田54面、古代末～中世前期水田44面、水路、杭列、畦畔木列、旧河道など
主な遺物	土器(弥生土器、古式土師器、平安時代土師器、中近世陶磁器)、木製品(木棺、呪符木簡、斎串状木製品、人形、鏃形木製品、曲げ物、草履芯材など)、石製品(五輪塔、石臼など)、金属製品(兜前立飾り金具、鎌など)
特記事項	寺院跡(福寿院)関係資料、入棺作法に基づく木棺、中世水田

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第183集

二本柳遺跡

― 一般国道52号（甲西道路）改築工事・
中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

印刷日　2000年3月20日
発行日　2000年3月31日
編集　山梨県埋蔵文化財センター

発行　山梨県教育委員会・建設省甲府工事事業所・
日本道路公団東京建設局
印刷　株式会社　少國民社